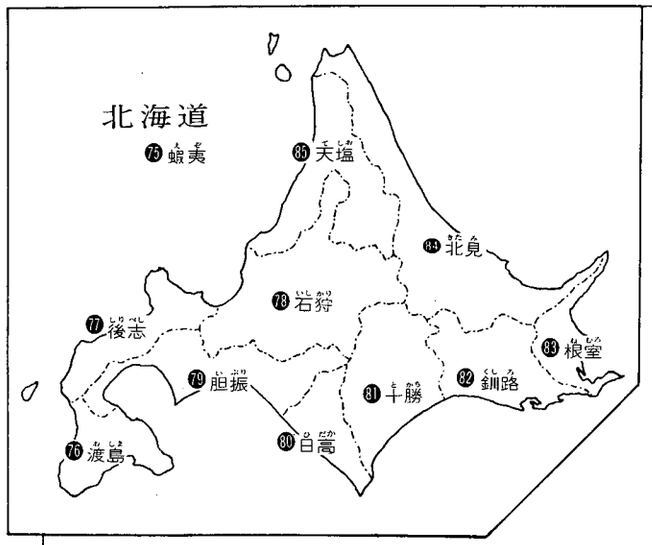
国名・県名対照図



国名索引

（数字は地図中の位置をあらわす。表記は現代かなづかいによった。）

ア行

あき	安芸	35
あわ	安房	23
あわ	阿波	36
あわじ	淡路	34
いが	伊賀	33
いき	壱岐	72
いしかり	石狩	28
いず	伊豆	20
いずみ	和泉	30
いずも	出雲	46
いせ	伊勢	34
いなば	因幡	44
いぶり	胆振	29
いよ	伊予	61
いわき	磐城	6
いわしろ	岩代	7
いわみ	石見	47
うご	羽後	2
うぜん	羽前	3
えぞ	蝦夷	25
えちご	越後	15
えちぜん	越前	10
えっちゅう	越中	16
おうみ	近江	13
おおすみ	大隅	68
おき	隠岐	48
おしま	渡島	26
おわり	尾張	32

カ行

かい	甲斐	19
かが	加賀	18
かずさ	上総	23
かわち	河内	30
き	紀伊	57
きたみ	北見	34
くしろ	釧路	32
こうずけ	上野	9
さがみ	相模	26
さつま	薩摩	69
さど	佐渡	14
さぬき	讃岐	37
しなの	信濃	10
しま	志摩	33
しもうさ	下総	22
しもつけ	下野	8
しりべし	後志	26
すおう	周防	55
するが	駿河	25
せっつ	摂津	38

タ行

たじま	但馬	43
たんご	丹後	42
たんば	丹波	41
ちくご	筑後	63
ちくぜん	筑前	65
つしま	対馬	73
てしお	天塩	35
とおとうみ	遠江	28
とかち	十勝	31
とさ	土佐	62

ナ行

ながと	長門	54
ねむろ	根室	33
のと	能登	17

ハ行

はりま	播磨	49
ひご	肥後	70
ひぜん	肥前	64
びぜん	備前	51
びっちゅう	備中	50
びんご	備後	53
ぶぜん	豊前	65
ぶんご	豊後	66
ほうき	伯耆	45
まさか	美作	50
みかわ	三河	31
みの	美濃	12
みまさか	美作	50
むさし	武蔵	24
むつ	陸奥	1
やましろ	山城	39
やまと	大和	37
りくぜん	陸前	5
りくちゅう	陸中	4
りゅうきゅう	琉球	74
わかさ	若狭	20

マ〜ワ行

みかわ	三河	31
みの	美濃	12
みまさか	美作	50
むさし	武蔵	24
むつ	陸奥	1
やましろ	山城	39
やまと	大和	37
りくぜん	陸前	5
りくちゅう	陸中	4
りゅうきゅう	琉球	74
わかさ	若狭	20

〈北海道㉕〜㉟〉

蝦夷	（え ぞ）	総称
渡島	（おしま）	
後志	（しりべし）	
石狩	（いしかり）	
胆振	（いぶり）	
日高	（ひだか）	
十勝	（とかち）	
釧路	（くしろ）	
根室	（ねむろ）	
北見	（きたみ）	
天塩	（てしお）	

山陰道 41〜48

丹波	（たんば）	京都・兵庫
丹後	（たんご）	京都
但馬	（たじま）	兵庫
因幡	（いなば）	鳥取
伯耆	（ほうき）	鳥取
出雲	（いずも）	島根
石見	（いわみ）	島根
隠岐	（おき）	島根

東山道 1〜13

陸奥	（むつ）	青森・岩手
羽前	（うぜん）	山形
羽後	（うご）	秋田・山形
陸中	（りくちゅう）	岩手・秋田
陸前	（りくぜん）	宮城・岩手
磐城	（いわき）	福島・宮城
岩代	（いわしろ）	福島
下野	（しもつけ）	栃木
上野	（こうずけ）	群馬
信濃	（しなの）	長野
飛騨	（ひだ）	岐阜
美濃	（みの）	岐阜
近江	（おうみ）	滋賀

東海道 21〜35

常陸	（ひたち）	茨城
下総	（しもうさ）	千葉・茨城
上総	（かずさ）	千葉
安房	（あわ）	千葉
武蔵	（むさし）	東京・埼玉・神奈川
相模	（さがみ）	神奈川
甲斐	（かい）	山梨
駿河	（するが）	静岡
伊豆	（いず）	静岡
遠江	（とおとうみ）	静岡
三河	（みかわ）	愛知
尾張	（おわり）	愛知
志摩	（しま）	三重
伊勢	（いせ）	三重
伊賀	（いが）	三重

畿内 36〜40

山城	（やましろ）	京都
大和	（やまと）	奈良
河内	（かわち）	大阪
和泉	（いずみ）	大阪
摂津	（せっつ）	大阪・兵庫

北陸道 14〜20

佐渡	（さ ど）	新潟
越後	（えちご）	新潟
越中	（えっちゅう）	富山
能登	（のと）	石川
加賀	（かが）	石川
越前	（えちぜん）	福井
若狭	（わかさ）	福井

南海道 57〜62

紀伊	（き い）	和歌山・三重
淡路	（あわじ）	兵庫
阿波	（あ わ）	徳島
讃岐	（さぬき）	香川
伊予	（い よ）	愛媛
土佐	（と さ）	高知

山陽道 49〜56

播磨	（はりま）	兵庫
美作	（みまさか）	岡山
備前	（びぜん）	岡山
備中	（びっちゅう）	岡山
備後	（びんご）	広島
安芸	（あ き）	広島
周防	（すおう）	山口
長門	（ながと）	山口

西海道 63〜74

筑前	（ちくぜん）	福岡
筑後	（ちくご）	福岡
豊前	（ぶぜん）	福岡・大分
豊後	（ぶんご）	大分
日向	（ひゅうが）	宮崎
大隅	（おおすみ）	鹿児島
薩摩	（さつま）	鹿児島
肥後	（ひ ご）	熊本
肥前	（ひぜん）	佐賀・長崎
壱岐	（い き）	長崎
対馬	（つしま）	長崎
琉球	（りゅうきゅう）	沖縄

岡山県神社誌

敬神生活の綱領

神道は天地悠久の大道であって、崇高なる精神を培ひ、太平を開くの基である。神慮を畏み、祖訓をつぎ、いよいよ道の精華を発揮し、人類の福祉を増進するは、使命を達成する所以である。ここにこの綱領をかかげて、向ふところを明らかにし、実践につとめて、以って大道を宣揚することを期する。

一、神の恵みと祖先の恩とに感謝し、明き清きまことを以って祭祀にいそしむこと。

一、世のため人のために奉仕し、神のみこともちとして世をつくり固め成すこと。

一、大御心をいただきてむつび和らぎ、国の隆昌と世界の共存共栄とを祈ること。

神社本庁憲章

神祇を崇め、祭祀を重んずるわが民族の伝統は、高天原に事始まり、国史を貫いて不易である。夙く大宝の令、延喜の式に皇朝の風儀は明らかであるが、明治の制もまた神社を国家の宗祀と定めて、大道はいよいよ恢弘された。

しかるに、昭和二十年、未曽有の変革に遭ひ、皇典講究所、大日本神祇会、神宮奉斎会は、その対応を相議り、神祇院総裁もまた爾後の措置をこの三団体に委ねた。ここに神社関係者の総意によって、全国神社を結集する神社本庁が設立され、神宮を本宗と仰ぎ、道統の護持に努めることとなった。

爾来、神社本庁は、全国神社の包括法人として、庁規を中心に運営されてきたが、今日まで重要な懸案とされてきたのは、精神的統合の紐帯として、基本的規範を確立整備することであった。

よって、ここにその大綱を成文化して本憲章を制定し、以て神祇の祭祀を継承するに遺憾なきを期するものである。

第一条 神社本庁は、伝統を重んじ、祭祀の振興と道義の昂揚を図り、以て大御代の弥栄を祈念し、併せて四海万邦の平安に寄与する。

第二条 神社本庁は、神宮を本宗と仰ぎ、奉賛の誠を捧げる。

2 神社本庁は、神宮及び神社を包括して、その興隆と神徳の宣揚に努める。

第三条 神社本庁は、敬神尊皇の教学を興し、その実践綱領を掲げて、神職の養成、研修、及び氏子・崇敬者の教化育成に当る。

第四条 神社本庁は、総裁を推戴する。

2 総裁は、神社本庁の名誉を象徴し、表彰を行ふ。

第五条 神社本庁に統理以下の役員、その他の機関を置く。

2 統理は、神社本庁を総理し、これを代表する。

3 第一項の役員、その他の機関については、規程で定める。

第六条 祭祀は、報本反始の誠を捧げ、古来の伝統と、別に定める制規に従って厳修する。

第七条 神社本庁は、幣帛供進の伝統を重んじ、神社に本庁幣を献ずる。

第八条 神社は、神祇を奉斎し、祭祀を行ひ、祭神の神徳を広め、以て皇運の隆昌と氏子・崇敬者の繁栄を祈念することを本義とする。

2 霊代の神聖は、厳に護持しなければならない。

3 神符、守札等の取扱ひについては、信仰上の尊厳を汚してはならない。

4 一社伝来の故実、慣習、由緒は、尊重するものとする。

第九条 神社は、祭神、社名、例祭日、鎮座地、その他神社存立の基本に関はる事項については、統理の承認を受けなければならない。

第十条 神社の境内地等の管理は、その尊厳を保持するため次の各号に定めるところによる。

一 境内地は、常に清浄にして、その森厳なる風致を保持すること。

二 境内地、社有地、施設、宝物、由緒に関はる物等は、確実に管理し、みだりに処分しないこと。

三 境内地及び建物その他の施設は、古来の制式を重んずること。

四 前号の施設は、神社の目的に反する活動に利用させないこと。

第十一条 神職は、ひたすら神明に奉仕し、祭祀を厳修し、常に神威の発揚に努め、氏子・崇敬者の教化育成に当ることを使命とする。

2 神職は、古典を修め、礼式に習熟し、教養を深め、品性を陶冶して、社会の師表たるべきことを心がけなければならない。

3 神職は、使命遂行に当って、神典及び伝統的な信仰に則り、いやしくも恣意による独断を以てしてはならない。

第十二条 宮司は、一社の長として、祭祀を管掌し、社務をつかさどり、神社の信仰と伝統の護持に努める。

2 宮司の進退については、その使命に鑑み、特に慎重を期さなければならない。

第十三条 神社総代は、神社の祭祀、信仰、伝統の保持振興について宮司に協力する。

第十四条 神社の氏子区域は、神社ごとに慣習的に定められた区域をいふものとする。

2 氏子区域は、神社相互に尊重しなければならない。

第十五条 氏子区域に居住する者を伝統的に氏子とし、その他の信奉者を崇敬者とする。

2 氏子・崇敬者は、神社護持の基盤であり、斯道発展の母体である。

第十六条 神社本庁の宗教法人法による規則を「庁規」といふ。

第十七条 庁規及び規程等は、この憲章に準拠しなければならない。

第十八条 この憲章の改廃については、統理の発議により、評議員会において、出席評議員の三分の二以上の賛成を必要とする。

第十九条 この憲章の施行に関し必要な事項は、庁規及び規程を以て定める。

附 則

1 この憲章は、昭和五十五年七月一日から施行する。

2 宗教機能に関する規程(昭和二十七年一月二十七日規程第一号)は、廃止する。

3 この憲章施行の際、庁規及び従前の規程は、憲章に基いて定めたものとみなす。

発刊の辞

岡山県神社庁長　河本貞郁

昭和二十年は我が国肇国以来、初めて敗戦の憂目を経験し、前途に光明を失ったかの感があり、日本占領連合軍より神道指令が発せられ、神社界にとっても誠に困惑した年でありました。

神社界はこの苦境を乗り越えるため、早速神社関係の三団体を中心に一致団結して、その対策を研究、協議のうえ、宗教法人神社本庁を設立して、全国の神社の包括団体と致しました。各都道府県も神社本庁所属の神社庁を設立しました。

爾来神社本庁を中心に、神社界の不断の努力と団結とにより、年と共に隆昌に向いつつある事は同慶の至りであります。

我が岡山県神社庁は昭和四十九年四月県下全神社関係者の協力により、多年待望の新庁舎を建設し、神職の研修の場と今後の発展を期する本拠とを得て、益々研鑽と教化とに努めています。

神社界のこの様な趨勢に際し、岡山県の神社誌を編集し、県下の神社の態様を把握することは、今後の発展隆昌に最も適切であるとの議により、更に神社庁設立三十周年の記念事業として編集を決議致しました。資料の収集等は各支部長をはじめ神職各位の御協力と御援助とをいただき、漸く刊行の運びとなりました。諸種の事情により、刊行が大変延引になりました事をお詫び申し上げます。

この神社誌を神社関係者に御活用いただき、我々の村、町が鎮守の社と共に生きて来た歴史と神社の実態とを知り、今後の神社の発展、神道昂揚の一助となるならば幸甚に存じます。

尚付録として簡単な神道用語の解説、東西略年表、神道略年表、歴代天皇御尊名、将軍名、年号表、同索引、岡山県神社分布図、国県対照図等を付加しました。日常の座右の書として御利用いただければと存じます。

最後に編集に当られました編集主任の大守麟児宮司を始め、編集委員中島達夫、礒山裕守両宮司竝びに御協力下さった神社庁役員、支部長に厚く謝意を表し、刊行の辞と致します。

【凡　例】

現代かなづかい、当用漢字を使用。
神社名の表記は旧字体により、紀年法は西洋暦による。
神社の記載は支部別とし、その表記は五十音による。
神社関係用語は余白部に掲載し、付録として参考事項を付加する。

岡山県神社誌目次

敬神生活の綱領
神社本庁憲章
発刊の辞　岡山県神社庁長　河本　貞郁
岡山県神社庁略年表……二
岡山県神社庁機構……三
岡山県郡市町村別地図……四
岡山県神社庁支部別
神社名鑑……五

岡山支部……七
倉敷支部……二九
津山支部……四七
玉野支部……七七
玉島支部……八五
児島支部……九五
御津南支部……一〇七
御津北支部……一一九
御津東支部……一三一

赤磐支部……一四一
和気・備前支部……一六九
邑久・西大寺支部……一八五
上道・西大寺支部……二〇五
都窪支部……二一三
浅口支部……二二五
笠岡支部……二四九
小田支部……二六七
井原・後月支部……二八五
吉備支部……三〇七
高梁・上房支部……三二七
川上支部……三五七
阿新支部……三七三
真庭支部……四〇三
勝田支部……四三九
英田支部……四六一
英北支部……四七五
久米支部……四八三

【付録】

国県対照表……（付一九）五一〇
院政・摂政・関白・将軍・執権……五一三（付一六）
歴代天皇……五一五（付一四）
五十音順年号一覧……五一七（付一二）
時代順年号一覧……五一九（付一〇）
年号索引……五二一（付八）
岡山県神社庁
支部別神社数及び神職数……五二二（付七）
都道府県の神社数……五二三（付六）
日本史神社関係略年表……五二五（付四）
神社関係用語索引……五二七（付二）
付録目次……五二八（付一）

編集後記……五二九

【見開き】

国名・県名対照図……巻頭
世界史略年表……巻末
日本史略年表……巻末

題字

岡山県神社庁
庁長　河本　貞郁

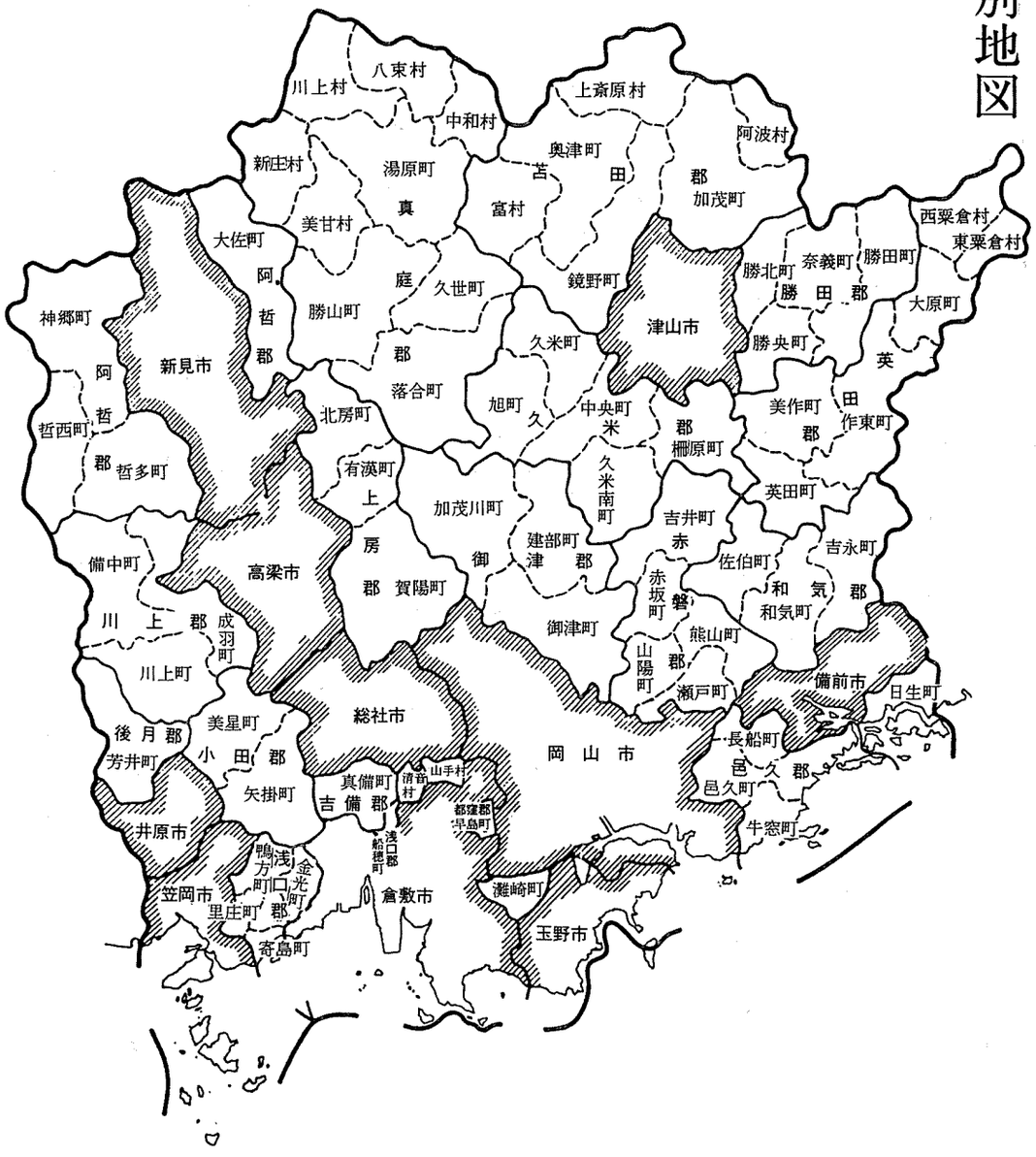
岡山県神社庁略年表

昭和二十年十一月二十七日
吉備津神社社務所で中国地区各県の設立準備委員会を開いて設立に対する態度を研究調査打合せをした。中央から設立委員石清水八幡宮宮司福島知一が差遣せられ、地方祭務官三宅光信、金谷博通、橋本甚一、太田宗高、湯浅武夫、佐野誠一が出席協議、中央準備委員会に協力して強力な民間団体を結成することを誓った。
昭和二十一年三月十二日
岡山県神社庁を設立。吉備津神社旧社務所に事務所を置いた。正副庁長は左の如し
庁　長　橋本甚一
副庁長　三宅光信
昭和二十二年十月
庁長橋本甚一退任し、後任に金谷博通が就任した。
昭和二十三年五月五日
事務所を岡山市門田岡山県護国神社(当時の操山神社)社務所に移転した。
昭和二十四年
改選　庁　長　金谷博通
副庁長　三宅光信
昭和二十六年
婦人神職会及び青年神職会を設けた。
昭和二十九年十月二十日
岡山市南方三五二番地に敷地七十坪、平家建二十一坪の建物を購入して事務所を移転し、更に建坪二十六坪七合の平家建新庁舎を建築した。
昭和三十三年
改選　庁　長　藤井　孝
副庁長　市川貞一
昭和三十九年九月十日
宗教法人登記。
昭和四十一年四月十日
神社庁報創刊
昭和四十一年十月二十九日
神宮大麻領布始祭並びに神殿祭斎行開始。
昭和四十三年一月二十四日
第六十回伊勢神宮式年遷宮奉賛会岡山県本部結成。
昭和四十四年七月二十一日
改選　庁　長　市川貞一
副庁長　木山邦忠
昭和四十五年十一月十一日
神道政治連盟岡山県本部結成。
昭和四十六年十二月十六日
不慮の火災に遭い、事務所を焼失した。
昭和四十七年七月二十九日
協議会に於て副庁長二名制を採用、昭和四十八年十月二十六日より施行する事にし、庁長に市川貞一、副庁長に河本貞郁を選任した。
昭和四十八年七月二十一日
改選　庁　長　市川貞一
副庁長　河本貞郁
〃　白石直樹
昭和四十九年四月十日
鉄骨三階建、延一三〇坪の新庁舎竣工する。
昭和五十一年七月二十二日
改選　庁　長　河本貞郁
副庁長　磯山裕守
〃　柚木　馨
昭和五十二年七月二十二日
副庁長柚木馨死亡のため、後任副庁長に小野通孝を選任。
昭和五十四年七月二十三日
改選　庁　長　河本貞郁
副庁長　磯山裕守
〃　福田睦雄

岡山県神社庁機構

庁長、副庁長、理事、監事、
顧問、参与、本庁評議員、
協議員会
階位検定委員会
神職身分銓衡委員会
表彰委員会
各支部正副支部長
教化委員会
青少年対策委員会
神道政治連盟岡山県本部
神道青年協議会
全国教育関係神職協議会
氏子青年会
敬神婦人会
岡山県地方研修所
所長、講師、事務長
岡山県神社庁講師
岡山県神社庁駐在教誨師
伊勢神宮崇敬会岡山県本部
岡山県神社総代会
会長、副会長、理事、監事、評議員

岡山県郡市町村別地図



岡山県神社庁支部別

神社名鑑

岡山支部（八九社）

青陵神社　岡山市谷万成四三九……九
天鴨神社　〃　長岡四二二……九
天津神社　〃　土田七六三……九
天津神社　〃　福居二丁目二一……九
天野八幡宮　〃　青江一七〇……九
天計神社　〃　北方七〇七……九
石高神社　〃　円山八五三……一〇
伊勢神社　〃　番町二―一一―二〇……一〇
今村宮　〃　今村一七八……一〇
石門別神社　〃　大供三〇〇……一〇
石門別神社　〃　奥田三六三……一一
岩間神社　〃　米田五一五……一一
浮田神社　〃　下一一……一一
恵美須宮　〃　郡一八六四……一一
大神神社　〃　四御神一三八一……一一
尾佐無神社　〃　湊四五二……一二
尾治針名真若比咩神社　〃　津島西坂二丁目……一二
尾針神社　〃　京山二丁目二―二……一二
生庶神社　〃　乙多美二八四……一三
小島神社　〃　原尾島五五……一三
岡山縣護國神社　〃　奥市三―二一……一三
岡山神社　〃　石関町六七……一四
沖田神社　岡山市沖元四一一……一四
御崎宮　〃　北方六〇〇……一四
御崎宮　〃　原一五九〇―一六……一五
春日神社　〃　兼基一七四……一五
春日神社　〃　七日市西町四―一三……一五
吉備津岡辛木神社　〃　海吉一一〇九……一五
國神社　〃　三門中町五―一……一五
國津神社　〃　郡六一六……一六
國長宮　〃　国府市場五〇……一六
荒神社　〃　宮浦六三九……一七
金刀比羅神社　〃　野田屋町二丁目一〇―九……一七
金刀比羅神社　〃　郡二五一四……一七
塩釜神社　〃　小串一九五四……一七
白鬚宮　〃　中仙道一八二……一七
白鬚宮　〃　北長瀬本町二七五……一七
正八幡宮　〃　高屋一八八……一八
素盞嗚神社　〃　飽浦一三八九……一八
素盞嗚神社　〃　祇園一六八……一八
須々木神社　〃　原四九四―二……一八
住吉宮　〃　福島一丁目八……一八
諏訪宮　〃　玉柏一二四三……一九
総社　〃　祇園五九八……一九
総社　〃　郡一四〇六……一九
宗谷神社　〃　玉柏宗谷二五七六……一九

當麻神社　岡山市米田六三〇……二〇
高藏神社　〃　牟佐二八〇三……二〇
高島神社　〃　宮浦三二六八……二〇
高島神社　〃　賞田二九五……二〇
龍之口八幡宮　〃　祇園九九六……二〇
玉井宮東照宮　〃　東山一丁目三―八一……二一
天神一社揚田神社　〃　神下四六一……二一
天神宮　〃　牟佐二四三〇……二一
天神社　〃　三野四〇八……二一
天満宮　〃　新保六九三……二一
天満宮　〃　西市四六二……二一
天満宮　〃　十日市三八六……二一
天満宮　〃　今在家二八八……二一
天満宮　〃　野殿五三……二三
内宮　〃　浜野一丁目三―八……二三
八幡宮　〃　野田二九九……二三
八幡宮　〃　金山寺四九三……二三
八幡宮　〃　畑鮎一二七六……二三
八幡宮　〃　高野尻一六四二……二四
八幡宮　〃　玉柏二六九一……二四
八幡宮　〃　北浦九〇七……二四
八幡宮　〃　今保五二四……二四
八幡宮　〃　白石三七六……二四
八幡宮　〃　花尻五七……二四
八幡宮　岡山市久米九〇……二五
八幡宮　〃　新保八三〇……二五
八幡宮　〃　津島二六八二……二五
八幡宮　〃　矢坂東町一―一……二五
八幡宮　〃　富田二四七……二五
八幡宮　〃　西古松一一〇……二五
八幡若宮　〃　郡二九七八の一……二五
日吉神社　〃　賞田三四三……二六
日吉神社　〃　湯迫六九五……二六
日吉神社　〃　北長瀬本町一四―三一……二六
廣幡八幡宮　〃　阿津二一〇四……二六
深田神社　〃　今谷五三三……二六
兵主神社　〃　阿津二七八三……二七
松尾神社　〃　下牧二六七二の一……二七
宗形神社　〃　郡一九七八……二七
疫神社　〃　東古松一一九……二七
八幡宮　〃　八幡東一―一……二七
淀子神社　〃　中牧三八三……二七
若宮八幡宮　〃　原九五六……二八

青陵神社　旧村社

岡山市谷万成四三九

主祭神　青陵神　天照大神　天児屋根命　応神天皇
例祭　十月二十日　**境内地**　八八二・八二坪
主要建物　本殿　渡殿　拝殿
氏子数　四一〇人
宮司　富山道常
責任役員　近藤民一　江田鶴子　松尾健太郎
由緒沿革　創建年代不詳。本国神名帳に青陵神社、山本氏本に従四位下青陵神社と記載してある旧社である。天正年中に天照大神・天児屋根命・応神天皇を配祀して、明治初年頃まで春日宮と奉称し、往古から谷万成部落の氏神である。

天鴨神社　旧郷社

岡山市長岡四二二

主祭神　加茂建角身命
例祭　十月八日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　釣殿　随身門
摂末社　神田神社　保食神社　木野山神社　粟島神社　稲荷神社
氏子数　八〇戸　**崇敬者数**　二五〇人
宮司　代務者　松島章雄
責任役員　丸山志郎　石村省吾　丸山富
由緒沿革　本神社は本国神社帳総社本に天鴨神社、山本氏本に正五位下天鴨明神、金剛寺本に従四位下天鴨明神と記載されている。備前国古社一二八社の一で、勧請年月等は不詳であるが、もとは財田村大字土田の現天津神社の御鎮座地である向上に鎮座せられていたとの伝えがある。明治初年に郷社に列せられた。

天津神社　旧無格社

岡山市土田七六三

主祭神　高皇産霊神　神皇産霊神
例祭　十月十六日　**境内地**　八五五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　木野山神社　愛宕社　道通社　稲荷社
氏子数　九五戸　**崇敬者数**　二五〇人
宮司　代務者　松島章雄
責任役員　光藤安男　光藤満吉　井上亀二
由緒沿革　御鎮座地の向山は、一名鴨山といい、その麓に「カモノコ」「カモ石」などという処がある。今の長岡宇宮前に御鎮座の、元郷社天鴨神社の旧御鎮座地であるとの伝承がある。その社地に勧請年月不詳の小祀があったのを、明治十年に現在の社殿を造営し、天津神社と奉称し、現在に至っている。

天野八幡宮　旧村社

岡山市青江一七〇

主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后　高皇産霊神　稚日女尊　神皇産霊神
例祭　十月十八日　**境内地**　八〇二・二九坪
主要建物　本殿　拝殿　随身門　社務所
摂末社　若宮、稲荷神社
氏子数　一、八〇〇人　**崇敬者数**　二四〇人
宮司　杉村昭信
責任役員　平松久蔵　片山一太　湯浅鉄三
由緒沿革　創建は平治元年八月二十六日である。山城国男山八幡宮を勧請した。大正十年に御津郡鹿田村内の天野神社を八幡宮に合祀し社号を改称した。昭和二十年六月二十九日に空襲により幣殿、拝殿、神饌所を焼失した。昭和二十五年六月一日に拝殿を新築した。

天津神社　旧村社

岡山市北方七〇七

主祭神　少彦名命
例祭　十月二十七日　**境内地**　二三一・一一坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　一三〇戸
宮司　村岡吉郎
責任役員　太田寿雄　木村美一　神崎勝野

天計神社　旧村社

岡山市北方七〇七

主祭社　手置帆負命　彦狭知命
例祭　十月二十一日　**境内地**　一、三五六坪
主要建物　本殿　拝殿　社務所
氏子数　二、〇〇〇人　**崇敬者数**　二〇〇人
宮司　欠
責任役員　岡本恵三郎　大森明二　矢吹綾夫

由緒沿革　延喜式に天計神社、本国総社神名帳に天計神社、山本氏本に従二位下天計明神と記載してある式内社である。備陽国誌本郡廃寺の部に、妙法山神宮寺北方村とある。即ち天計神社の別当である。彼の小庵に天計神社の本地仏として、左手に巻物一巻、右手に弓を挟んだ仏像が一軀ある。銘に天計八幡大菩薩、備前国御野郡北方村と記してある。右像の弓を持っているのは上代の丈量器を誤ったのであろう。それは此の神が手置帆負命、彦狭知命の二神であるから、必ず丈量器を携え給うのは右像を模したものであろう。

石高神社　旧村社

岡山市円山八五三

主祭神　大己貴命　他四柱
例祭　十月五日　**境内地**　三、六九八坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　随身門　社務所
摂末社　稲荷神社　天満宮　荒神社他
氏子数　六七〇戸
宮司　高原寿雄
責任役員　原牧夫　吉田松夫　山口虎夫　和田清志
由緒沿革　備前国式内外古社一二八社、預国幣一〇五社の内で、現在地の北高倉山の嶺上に大己貴命を祀り、石高明神と称した。西岩坪に御鎮座の須勢理姫命を合祀し、天和年間に現在地に奉遷した。岩坪八幡宮と称し、幡多郷の総鎮守として、古来より尊崇している。明治四年旧号の石高神社に復し、大正三年村社となった。

伊勢神社　旧県社

岡山市番町二丁目一一―二〇

主祭神　天照大神　豊受大神　栲幡千々姫命
摂末社　稲荷神社　思兼神社　塞神社　金刀比羅宮
木野山神社
氏子数　七、七〇〇人　**崇敬者数**　三一五人
宮司　高須理
由緒沿革　延喜式に石門別神社、本国総社神名帳に天津石門別神社、山本氏本に従二位天津石門別大明神と記載してある式内社の一である。

石門別神社　旧村社

岡山市奥田三六三

主祭社　天津石門別命
例祭　十月十七日　**境内地**　一三三・一四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　受宮神社
氏子数　五四人　**崇敬者数**　二〇人
宮司　高須理
責任役員　遠藤実治　三宅茂　武田正太
由緒沿革　延喜式に石門別神社、本国総社神名帳に天津石門別神社、二宮左楽頭本に天津石門別神社と記してある式内の社である。創建年代は不詳である。

岩間神社　旧村社

岡山市米田五一五

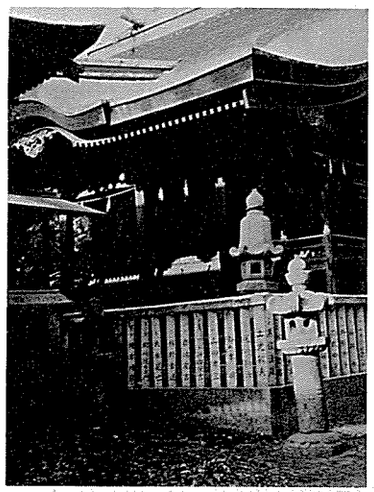
主祭神　素盞嗚尊
例祭　十月十七・十八日
境内地　一、一〇四坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　随身門
摂末社　稲荷神社
氏子数　一五戸
宮司　岡本昇

例祭　十月十七日　**境内地**　八〇〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神楽殿　社務所
摂末社　稲荷社　十五末社　幸延神社
氏子数　二、〇〇〇戸　**崇敬者数**　五、〇〇〇人
宮司　見垣安邦
責任役員　山口馬百　遠藤義雄　倉元美野累
特殊神事　御神事
由緒沿革　本神社は倭姫世記に、「御間城入彦五十瓊殖尊の御宇五十四年丁丑遷吉備国名方浜宮四年奉斎」とある。現在から二千年前に創建せられたことになる。名方の地は旧上道郡出石郷浜村及び中田村である。のち現在の地に奉斎した。式内の古社である。

今村宮　旧県社

岡山市今村一七八

主祭神　天照大神　八幡大神　春日大神（相殿）素戔嗚尊
例祭　十月十七日　**境内地**　二、一〇五坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿
社務所　表門
摂末社　若宮　天満宮　地神社　稲荷神社　宗像神社　宇賀神社　塞神社　八十末社　木野山神社
氏子数　三、〇〇〇戸
宮司　今村倫子
責任役員　横田新二　黒住忠明　万代良平　武田勝　水内忠利　小野延夫
宝物　額　大太刀　絵馬額二面
特殊神事　粥釣行事
由緒沿革　建武元年奥州白川の領主菖蒲七郎左衛門の子正寿が、岡山城の榎馬場に勧請した。往時は三社宮又は三社八幡宮と称した。永禄年間に西野田庄城主が田八反五畝を寄進した。慶長六年松田元成が社領高十石、供米五石、初穂料三百匹を寄進した。天正八年三月、宇喜多直家が築城のため、今村に遷宮し、今村宮と改称した。天正九年に社領高百五石を増している。慶長九年二月池田利隆が社領五石を寄進し、寛文元年池田光政が参拾坪を増し社殿を造営した。元和三年には池田綱政が社地外馬場八畝余を寄進した。明治四年郷社に列し、明治十六年に県社に列した。昭和三十年三月十八日本殿が岡山県重要文化財に指定せられた。



石門別神社　旧村社

岡山市大供三〇〇

主祭神　天津石門別命
例祭　十月十三日　**境内地**　六一七・一二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　釣殿　社務所

責任役員　吉田巌　富岡正一
由緒沿革　本神社の創建年月、由緒等は不詳である。本国総社神名帳に当麻神社、山本氏本に正三位当麻大明神と記載してある、備前国式内外古社一二八社の一である。昭和十三年に旭川改修工事のため、現在地に遷座した。

浮田神社　旧村社

岡山市下一一

主祭神　天手力男命
例祭　十月十八日
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　随身門
摂末社　角岩神社　稲荷神社　金刀比羅宮　木野山神社　保食神社
氏子数　八〇戸
宮司　代務者　松島章雄　**崇敬者数**　一二〇人
責任役員　橋本保夫　西田篤一　安達対賀夫
由緒沿革　本神社は宇喜多直家が浮田村沼の亀山城内に祠を設けて奉祀していたのを、直家が天正元年岡山城を築いてこれを移した。後に下村の住人細木原某が現在の地に奉斎し、下部落の産土神として今日に及んだものと口碑に伝えられている。池田家所蔵「御国中神社縁起棟札写」に、「下村浮田大明神寛永三年」の棟札がある。

恵美須宮　旧無格社

岡山市郡一八六四

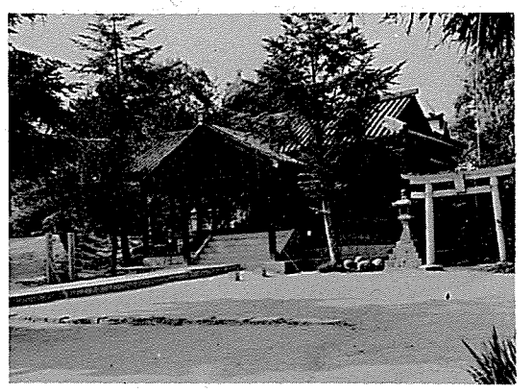
主祭神　事代主神

例祭　一月十日　**境内地**　一坪
主要建物　本殿
氏子数　三戸　**崇敬者数**　一五人
宮司　難波貞篤
責任役員　小高正義　松岡武夫　河田嘉吾丸
由緒沿革　創建年月・由緒等不詳である。

大神神社　旧郷社

岡山市四御神一三八一

主祭神　大物主神　少毘古那神　三穂津姫神　大穴牟遅神



例　祭　十月二十三日　**境内地**　九五六坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　随身門
摂末社　若宮　宗像神社　松尾御前神社　梨本神社　稲荷神社　柿本神社
氏子数　四八三戸　**崇敬者数**　一、〇〇〇人
宮　司　有森　猛
責任役員　安井元義　安井麟一　小山倍男　田中　勇　佐藤祐三　岡崎武光　金光猛男　西村　豊
由緒沿革　本神社は延喜式神名帳に備前国二十六座の内、上道郡大神神社四座と記載されている。創立年月は詳でないが、上古以来備前国の由緒ある神社である。慶長年間の社領は一町七反八畝九歩とある。現在では境内地を残すのみである。近年四御神附近の住宅地化・団地化とともに氏子の数も急速に増加している。

尾佐無神社　旧村社

岡山市湊四五二

主祭神　八衢比古神　他三柱
例　祭　十月十日　**境内地**　二〇・四八坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　**崇敬者数**　一五〇人
宮　司　高原寿雄
責任役員　中田　一　中野弘一　岡村吾三郎
由緒沿革　峠の林中に一小祠があって尾佐無明神と称し、延享五年藩主池田氏の存置許可を得て、社殿を造営した。境内に一清泉があって、常に清水が湧き出で、里人は通称井戸神と称した。古来眼病及び水の神として、遠近に崇敬者が多い、明治十年五月村社に列格した。

尾治針名真若比咩神社　旧村社

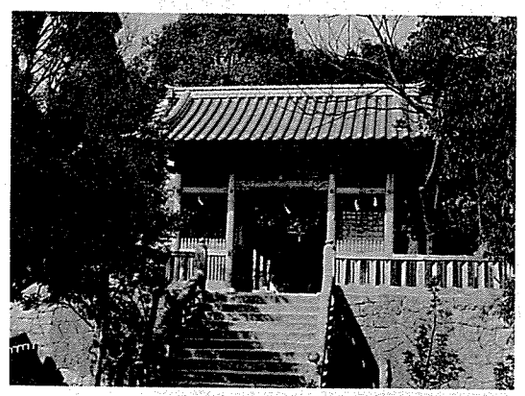
岡山市津島西坂二丁目

主祭神　尾治針名真若比咩命
例　祭　十月二十六日　**境内地**　一、六二一・二二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神門
氏子数　七〇〇戸
宮　司　村岡吉郎
責任役員　田中駒一　上林定一　久山浅治　石村　寿
由緒沿革　延喜式神名帳に、「備前国御野郡尾治針名真若比咩神社」とあり、総社神名帳に「尾張針田真若比女神社」山本氏本に「従四位下尾張針田明神」と記載している式内神社である。本神社の鎮座地の西坂以東の山を半田山と言うのは、針田山の誤で、針田の名称は此の神の御名から出たもので、津島の産土神である。

尾針神社　旧村社

岡山市京山二丁目二―二

主祭神　天火明命　配祀　大気都比売命
例　祭　十月二十一日　**境内地**　一、六八一・二七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　社務所　神庫
摂末社　祓殿社　若宮　木切宮　注連神社　荒神社　日之神社　前御前神社
氏子数　一、五〇〇戸　**崇敬者数**　二、〇〇〇人
宮　司　村岡　力
責任役員　赤木繁三郎　高崎増雄　草野邦輔　長尾丈平



由緒沿革　創建年代は詳かでないが、所在の上伊福は上古は伊福郷といい、伊福部連（尾張連の一族）の居住地で、その祖神天火明命を奉斎し創祀したという。延喜の制で小社に列せられた。神位正四位下尾針明神と称し、中古は領主の崇敬が篤かった。西隣に大亀田（大神田）と云う小字があった、この土地は本神社の神田の地と伝えられている。かつて栗岡大明神と称したが、明治の初め旧社号に復して尾針神社と改称した。備前国式内書上考録に「尾針神社今は栗岡宮と云う、御正体の台裏に尾針大明神宝徳三年九月」と記されている。社殿の裏山には、上古に神を祭る神籬磐境の遺跡がある。昭和十五年紀元二六〇〇年記念に、本殿・幣殿・拝殿・瑞垣を改築した。昭和四十六年第六十回伊勢神宮遷宮記念事業として、随身門・境内末社・社

務所の改築と境内地の整備とを行い、こゝに多年の念願である全社殿の改築が竣工し、御社頭は面目を一新した。

生庶神社　旧村社

岡山市乙多見二八四

主祭神　若布都怒志命
例　祭　十月十四日　**境内地**　一六六・五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　木野山神社　白山比咩神社　稲荷神社　金刀比羅宮　荒神社　牛神社
氏子数　三二戸　**崇敬者数**　四〇人
宮　司　代務者　松島章雄
責任役員　片山勝二　山谷繁太郎　野崎　勇
由緒沿革　勧請年月等不詳。備前国神名帳総社本に生庶神社。山本代本に従五位下生庶神社。西大寺本に従五位下生庶神社と記され、古社一二八社の一である。御祭神は出雲国美談神社と同じである。生庶は大民の義で、今の大字乙多美にその意が残っている。又鎮座地を高長と云うのは、田子等の義で、農民等の祖神として奉斎の神である

小島神社　旧村社

岡山市原尾島五五

主祭神　小島神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月二十五日　**境内地**　四三一・九四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神饌所
摂末社　稲荷神社　式諸神社　保食神社　木野山神社　吉備津神社　火産霊神
氏子数　六〇〇戸　**崇敬者数**　三、〇〇〇人
宮　司　武部聡明　**禰　宜**　武部光順
責任役員　菊山定勝　片山太久美　佐々木又次　鎌田功　高畑勝利　妹尾達道　堀田　稔
由緒沿革　本神社は備前国総社神名帳に小島神社、山本氏本に従五位上小島明神とある。中古以来鬼道八幡と称し、明治三年に旧号に復した。備前国式内外社一二八社の一である。興国四年の神名帳に大井手の神と名である。西大川の中央の小島に鎮座しておられたからの社殿を焼失し、翌二十三年に再建した。現社殿は昭和四十一年の改築である。明治二十三年六月二日に八幡雄島神社を合祀した。現在の原尾島の地名は、雄島の名を残したものである。





岡山縣護國神社

岡山市奥市　三一二

主祭神　岡山県出身並びに縁故ある殉国の英霊
例　祭　五月六日　十月第一日曜日
境内地　一一、一五七・七七坪
主要建物　本殿　祝詞殿　中殿　拝殿　左右翼舎　左右翼廊　左右参列所　権殿　神饌所　婚儀殿　舞楽殿　忠霊塔　宝物遺品館　社務所　撮影所　参拝者休憩所　参集所
崇敬者数　二三、〇〇〇人
宮　司　橋本甚一　**禰　宜**　小笠原　毅
権禰宜　高山　聖　草地秀育

責任役員　元浜貫一　岡崎平夫　三島淳男　伊藤大孝　梶谷忠二

宝　物　小野竹喬画六曲屏風壱双　大正天皇御物　銀煙管壱本　池田章政書扇面壱面　藤本鉄石画掛軸壱幅　明治天皇御物茶碗壱個　大刀因州梶川龍子寿治作　一口・横山上野大椽祐定作一口・大和大椽藤原正則作一口　棟札大正三年十一月十一日一枚・昭和十六年十一月四日一枚　錦絵日清戦役・台湾征討十二枚・観兵式外四枚

特殊神事　万灯みたま祭

由緒沿革　備前藩主池田章政公が、明治二年四月三日に、御後園裏の竹田河原で、奥羽戦争戦死者の招魂祭を斎行した。同年六月に上道郡門田村幣立山に社殿と碑石を建て、奥羽・函館戦争の戦死者を祭祀した。明治七年官祭招魂社に列し、祭祀並びに修繕費等の官費支給を受けることになった。大正四年現在地に御遷座。昭和十四年内務大臣指定となり、岡山縣護国神社と改称した。昭和十七年境内を拡張し、社殿の総改築を行った。昭和三十七年天皇皇后両陛下の御親拝があった。

岡山神社　旧県社

岡山市石関町六七

主祭神　倭迹々日百襲比売命　日本武尊　大山咋命　大吉備津彦命　倉稲魂命　武安霊命　妹姫命

例　祭　十月十四日　**境内地**　一、五五七・二坪

主要建物　本殿　拝殿　釣殿　神門　社務所

摂末社　日吉神社　稲荷神社　荒神社　天満神社

氏子数　二〇、〇〇〇人　**崇敬者数**　三、〇〇〇人

宮　司　久山信幸　**禰　宜**　中野宣子

責任役員　津下銀太郎　河本金輔　富山藤輔

由緒沿革　本神社は本国総社神名帳に下神社、山本氏本に従五位上下宮明神と記載してある旧社で、備前国式内外古社一二八社の内の一社で、古の国司が総社で祈年新嘗の月に祭祀した程の名社であると伝えている。旧藩主池田氏の時は城門の鎮守として特別に崇敬し、所領の内三〇五石を寄進した。明治三十九年勅令第九十六号第一条第二項により神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

沖田神社　旧県社

岡山市沖元四一一

主祭神　天照皇大神　素盞嗚尊　軻遇槌命　倉稲魂命　句句廼智命

例　祭　十月十一日　**境内地**　七六七・五坪

主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　社務所　通夜殿

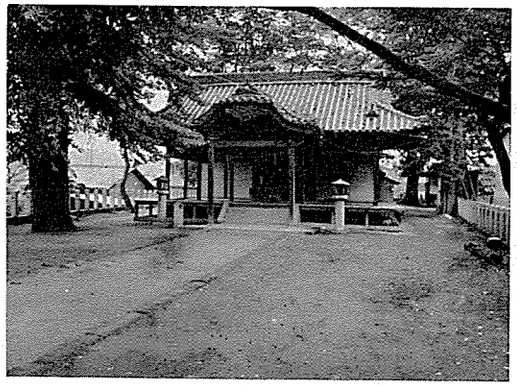
摂末社　道通宮　稲荷神社　胸形神社

氏子数　一三、一八五戸

宮　司　秦　俊治　**禰　宜**　秦　武志

権禰宜　岡本　昇

由緒沿革　本神社は備前国主池田綱政公時代に、開拓せられた沖田新田の産土神として創建せられた。貞享二年に津田永忠が、綱政公の命を奉じて元禄四年に開墾の準備に着手し、翌五年正月十一日に起工した。ここに総反別一、五三九町余、其の高二八、〇三八石余を産する墾田を造成した。元禄七年四月に沖新田全体の産土神として、五月二十三日に沖田神社を創建した。御野郡住吉宮に鎮座の上、元禄七年九月三日に沖新田の中央の沖元村に社殿を造営し、更に一丁程上の現在の社地に遷宮した。宝永七年六月朔に綱政公より五十石の社領の寄進があった。以来歴代国主から明治初年の廃藩まで年々五十石の寄進があった。



御崎宮　旧郷社

岡山市北方六〇〇

主祭神　大国主神　狭田彦神　須佐之男神

例　祭　十月十日　**境内地**　三八八・四七坪

主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　随身門

摂末社　天神社　八幡宮　志米神社　八幡宮　稲荷神社　天津神社

氏子数　一、一〇〇戸　**崇敬者数**　三、五〇〇人

宮　司　小笠原　毅　**禰　宜**　杉井　敦

責任役員　守谷熊男　西原礼之助　小山　稔　山内又一

由緒沿革　吉備温故によると出雲国日御崎神社から勧請したという。創立年代は明かでないが、三野の産土神として古くから崇敬せられ、明治六年郷社に列した。もと上道郡竹田地内にあったが、天正年間宇喜多秀家が城下に引水するため、社地が川敷になるので現在地に御遷宮した。社殿は嘉永十年に再建し権現造りとした。随身門は天保年間の再建である。

御崎宮　旧村社

岡山市原一五九〇—一六

主祭神　大己貴命

例　祭　十月十一日　十二日

境内地　六八二・七五坪

主要建物　本殿　拝殿　神庫

摂末社　稲荷神社　志女神社

氏子数　九〇〇人

宮　司　久山信幸

責任役員　須々木英太郎　須々木一男　須々木忠明

由緒沿革　創建年代は不詳である。古社の一である。

春日神社　旧村社

岡山市兼基一七四

主祭神　武甕槌命、経津主命　天児屋根命　姫大神

例　祭　十月十七日　**境内地**　五〇二坪

主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　随身門

摂末社　稲荷神社　八幡宮　木野山神社　金刀比羅宮　若宮

氏子数　六〇戸　**崇敬者数**　二〇〇人

宮　司　代務者　松島章雄

責任役員　井上久明　井上　寅　浅野　薫

由緒沿革　本神社は奈良市御鎮座の元官幣大社春日神社を奉斎し、二条元公爵の祖、良実の孫の藤原兼基が南都から勧請したものと称せられている。池田家文庫の「御国中神社縁起棟札の写」に、「上道郡勅旨村春日大明神、先年南都から勧請仕候故、毎年正月元日夜鹿参候由、古来より申来候」とある。御鎮座地の勅旨は兼基所領の荘園の地で、今その分骨塚があり、土地の人は関白様と称している。

春日神社　旧県社

岡山市七日市西町四—一三

主祭神　天児屋根命　武甕槌命　経津主命　比売命

例　祭　十月二十日　**境内地**　一、五七一坪

主要建物　本殿　拝殿　社務所　倉庫　能舞台

摂末社　荒神社　道通宮　金刀比羅宮　和霊神社　恵比須宮　塞神社　若宮　稲荷神社　戸穂神社　岐神社　辨天宮　鹿田神社

氏子数　九、五〇〇人

宮　司　高原民栄

責任役員　山本銀次郎　鳥越又八　小橋一男　岩佐誠一　樋口桂一

由緒沿革　創建は寛和年間である。古くは春日大明神と称えたが、明治二年に春日神社と改称した。同六年九月二十九日に郷社に、同十五年八月三十日に県社に列せられ、同四十一年五月二十二日神饌幣帛料供進神社に指定せられた。大和の奈良から御神霊を勧請したものと思われる。一説に「何時の頃にや南都春日の神鹿、神額をもって、備前国に奔り社前の額ヶ瀬で斃れゐたりしかばその神額を奉じて此地に勧請し奉る。額ヶ瀬の地名は慈に由来す」と。よって本神社を中心に一帯の地名を往昔「鹿田庄春日村」と名付けられたと伝えている。御本殿は春日造、燈籠は春日型、鳥居は春日造である。岡山城主の宇喜多直家は天正年間に岡山築城の際に、城の南方の鎮守とし、社頭に鶴松を植え崇敬した。備前藩主池田氏も累代社領高十石を寄進した。

吉備津岡辛木神社　旧村社

岡山市海吉一一〇九

主祭神　吉備若健彦命

例　祭　十月六日　**境内地**　二、七七八坪

主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　随身門　神供所

摂末社　大神宮　若宮　稲荷宮　荒神宮　稲荷宮　天満宮

氏子数　四〇〇戸

宮　司　岡本千尋　**禰　宜**　岡本　昇

責任役員　小野田千尋　内田末寿　高木広士

特殊神事　雨乞神事　みそぎ祭

由緒沿革　本神社の創建年月、由緒等は不詳であるが、本国総社神名帳に、吉備津岡辛木神社、山本氏本に従五位吉備津岡辛木明神と記載する備前国式内外古社一二八社の一である。

國神社　旧村社

岡山市三門中町五—一

主祭神　大国主命　事代主命　素盞嗚尊　少彦名命　他

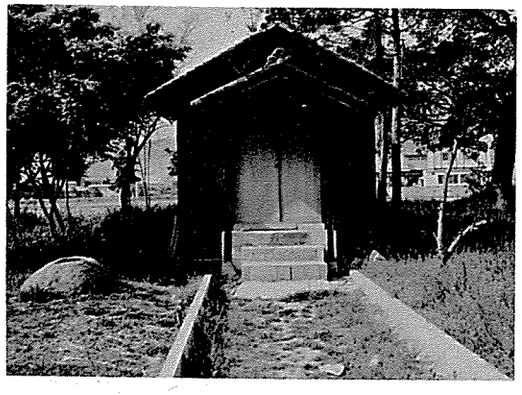


例　祭　五月十八日　十月五日・六日
境内地　四、三二〇・九八坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　随身門　渡殿　社務所　表門
摂末社　八幡宮　稲荷神社　日吉神社　箆取神社　天満宮
氏子数　約八、五〇〇戸　**崇敬者数**　約一六、〇〇〇人
宮　司　大守麟児
責任役員　板谷繁男　坪田博志　田中種一　船橋四郎　立川嘉一郎　中畑良一　日下光隆
特殊神事　古御守神札焼納祭
由緒沿革　創建は貞観二年で、神階は従四位下である。延喜式記載の式内社で、国司祈年所祭神社である。上古には名称から、「クニノカミノヤシロ」と訓読したか、国魂の斎場であったか、或は国津神の隆臨せられる斎庭であったかと推察出来る。備前藩の地誌「備陽国誌」に、国神社、三門村所祭、大国魂神とある。慶長年間に再建。社領は二石六斗二升である。寛文年間に造営。宝暦元年に再建。明和三年に国守八幡宮を合祀した。この間備前藩から用材、銀札、制札等の寄進があった。明治三十六年に社殿が炎上し、社宝、文書を焼失した。翌三十年に鉄筋コンクリート神明造りの本殿で倒壊、翌三十七年に再建。昭和二十九年の台風対の石燈籠は文政三年の築造である。石段は昭和五十二年に拡幅し、近郷に比類のない立派な堂々とした石段となった。氏子区域は岩井、島田、奉還町、富田町、西崎等三九町である。氏子数も年々増加し、縁結び神、医薬神、商工業神としての崇敬厚く、参詣者は増加している。また岡山市街の眺望は絶佳である。

國津神社　旧村社

岡山市郡六一六

主祭神　国魂建日方別命
例　祭　十月十五日　**境内地**　一、一五五坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　向拝　神輿庫　神供所
氏子数　二八戸
宮　司　難波貞篤
崇敬者数　五人
責任役員　安井三郎　堀江吟助　中田堅一
由緒沿革　創建年代は不詳である。本国総社神名帳に国津神社。山本氏本に従五位下国津明神と記してある旧社である。古事記に「然後遷座之時生吉備児島亦名謂建白方別」とある。古伝のまゝ国魂建日方別命と称して斎き祭っている。往古は神嶺の絶頂に御鎮座であったが、現在はこの山麓の陸という所に御鎮座になっている。



國長宮　旧村社

岡山市国府市場五〇

主祭神　大年神　若年神
例　祭　十月二十八日　**境内地**　四〇一坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　一二〇戸　**崇敬者数**　二五〇人
宮　司　有森　猛
責任役員　佐藤祐三　岡崎武光　水藤安衛
由緒沿革　本神社は往古国府がおかれた旧地に、鎮座せられたので、「国庁宮」といったのを、後に「国長宮」と改称したものと思われる。

荒神社　旧村社

岡山市宮浦六三九

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月九日　**境内地**　三一八・七五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　一、〇五〇人
宮　司　欠
責任役員　近藤茂登太　継国定夫　藤原安雄　浦野康雄　山本多久治
由緒沿革　創建年代は不詳。口碑によると宝亀三年に春日明神を高島神社に勧請の際、荒祭宮として宮浦に小祠を建立したのに創まると言い伝えている。その後古文書は紛失して僅かに天明四年の文書があるのみである。

金刀比羅神社　旧村社

岡山市野田屋町二丁目一〇―九

主祭神　大己貴命　迦具土命　品田和気命
例　祭　十月十日　**境内地**　一八〇坪
主要建物　本殿　拝殿　社務所
崇敬者数　二五〇人
宮　司　高原美忠
責任役員　辻清太郎　井上勇助　徳永市太郎
由緒沿革　天正年間の創建である。寛政年間に蓑林寺から出火し、神社が類焼した。昭和二十年六月二十九日に戦災により神社は炎上した。このため古文書、旧記録を焼失したので由緒は不明になった。現在再建中である。

金刀比羅神社　旧無格社

岡山市郡二五一四

主祭神　大物主神
例　祭　十月十日　**境内地**　一五八坪
主要建物　本殿　拝殿
崇敬者数　二一五人
宮　司　難波貞篤
責任役員　藤沢庄治郎　近藤忠夫　渡辺繁昭　岡野薫　筒井修一　奥山昭二　奥山清之　久保田博久　西谷万二　井上吉臣　梶原正直
由緒沿革　本神社の由緒、創立月日は不詳である。古老の口伝に嘉永以前に、讃岐金刀比羅の神を勧請し、甲之峰山頂に小祠を建立したことに創まると云い伝えている。

塩竈神社　旧村社

岡山市小串一九五四

主祭神　猿田彦命　塩土老翁
例　祭　五月第一日曜日　**境内地**　一、五三四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所
摂末社　稲荷神社　兵主神社　秋葉神社
氏子数　八〇戸
宮　司　佐々木　保
責任役員　堀川　進　山下　務　増沢昭良
由緒沿革　本神社は慶長年間の小串塩田が出来た頃、胸上村吉浦に御鎮座していたのを、寛永六年当地の社僧高明院が勧請し、創めて社殿を造営したものである。

白髭宮　旧村社

岡山市中仙道一八二

主祭神　猿田彦命　相殿　天照大神　素盞嗚尊
例　祭　十月二十三日　**境内地**　四五〇・五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　社務所
摂末社　稲荷神社　牛頭天王社　辨才天社　若宮天神社
氏子数　二七〇戸　**崇敬者数**　三〇〇人
宮　司　今村倫子
責任役員　犬飼　巌　難波松夫　渡辺福一
由緒沿革　後小松天皇の応永八年近江の白髭宮を勧請し、中仙道松之島に創建した。文亀・永正の大洪水に、社殿が辰巳村に流され、昌林寺に祀っていたが、寛永十三年中仙道地区に再建した。土地開拓・開運普請諸方除の神である。

白髭宮　旧村社

岡山市北長瀬本町二七五

主祭神　猿田彦命
例　祭　十月二十二日　**境内地**　三六八・六八坪
主要建物　本殿　幣拝殿　随身門
氏子数　五六戸
宮　司　今村倫子
責任役員　難波徳一　今田一夫　今田　実
由緒沿革　安元二年岡山県津高郡一の宮、吉備津宮から御遷宮した。旧号は御崎宮と称していた。

正八幡宮　旧村社

岡山市高屋一八八

主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后
例　祭　十月十九日　**境内地**　二〇七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　稲荷神社
崇敬者数　一八〇人
宮　司　高原寿雄
責任役員　井上喜一　長汐光義　井上源太郎
由緒沿革　創建年月・由緒不詳、幡多郷の高屋邑の鎮守神として奉斎せられ、里人の崇敬が厚く明治維新のとき村社に列格し、現在にいたっている。

素盞嗚神社　旧村社

岡山市飽浦一三八九

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月十四日・十五日
境内地　九〇六・七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　稲荷神社　金刀比羅神社　下玉稲荷神社　宮島神社　金神社
氏子数　四五六戸
宮　司　河田重信
責任役員　市川幸作　高倉久吉
由緒沿革　本神社の創建年代は不詳である。

素盞嗚神社　旧村社

岡山市祇園一六八

主祭神　素盞嗚尊　奇稲田姫命　八王子神

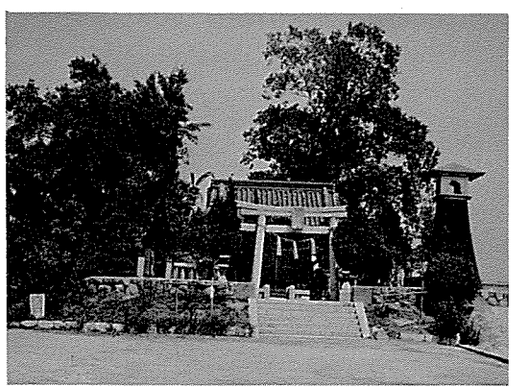


例　祭　旧七月十四日　**境内地**　一八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　記念碑
崇敬者数　九〇〇人
宮　司　久山信幸
責任役員　須々木英太郎　須々木一男　須々木忠明
由緒沿革　創建年代は不詳である。

住吉宮　旧村社

岡山市福島一丁目八

主祭神　底筒男命　中筒男命　表筒男命　神功皇后
例　祭　十月十四日　**境内地**　二二七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿



須須木神社　旧無格社

岡山市原四九四―二

主祭神　天忍男命

例　祭　十月二日　**境内地**　一八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　記念碑
崇敬者数　九〇〇人
宮　司　久山信幸
責任役員　須々木英太郎　須々木一男　須々木忠明
由緒沿革　創建年代は不詳である。

諏訪宮　旧村社

岡山市玉柏一二四三

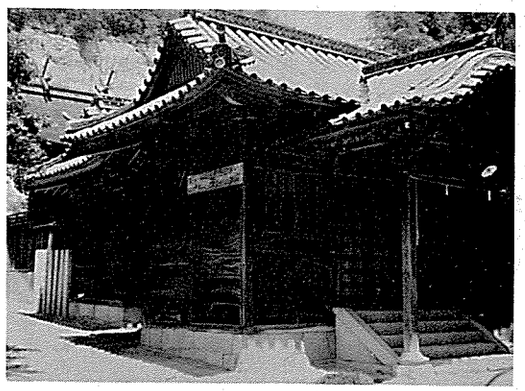
摂末社　稲荷神社　塩釜宮　水神社　荒神社
氏子数　一、三五〇戸　**崇敬者数**　一、一〇〇人
宮　司　伏見　弊　**禰　宜**　伏見　修
責任役員　塩飽浅吉　正本真澄　村上政夫　木下　茂　八田梅夫
由緒沿革　元暦の頃、源義経が八嶋へ渡海の節、邑久郡藤井村に勧請したのを、寛文十二年八月十五日国主池田光政が当地に移転勧請したと伝えている。

主祭神　建御名方命　矢坂刀売命　相殿　塞神
例　祭　十月十二日　**境内地**　三七九・五坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　随身門
摂末社　稲荷神社　野神社　荒神社　志目神社　天神社
氏子数　二〇〇戸　**崇敬者数**　二〇〇人
宮　司　村岡弘道
責任役員　久山石男　太田常男　水田克巳
由緒沿革　旧記に備前国御野郡河本村鎮座諏訪宮とある、創建年代は不詳である。

総社　旧村社

岡山市祇園五九八

主祭神　大巳貴命　神祇官八神　備前国中一二八社の御祭神
例　祭　十月二十四日　**境内地**　六四六坪



主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　随身門
摂末社　八座神　稲荷社
氏子数　三〇〇戸
宮　司　久山萬吉
責任役員　光岡麟太郎　島村寿男
由緒沿革　本神社は平安時代の初期、備前国庁の祭典場所として設けられ、備前国内古社式内外一二八社の御祭神を合祀した。中世以降からこの地方の氏神となった。現在の社殿は江戸中期の再建である。昭和四十年七月二十日に岡山市重要文化財に指定せられた。昭和五年十一月の陸軍大演習の際に、天皇陛下が玉歩を進め遊ばした神社である。

総社　旧村社

岡山市祇園五九八

主祭神　旧児島郡式内式外古社十一社の神

例　祭　十月十五日　**境内地**　五七四坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　向拝
摂末社　天満宮　恵美須宮　八坂神社
氏子数　二一五戸　**崇敬者数**　五〇人
宮　司　難波貞篤
責任役員　藤沢庄治郎　近藤忠夫　渡辺繁昭　岡野薫　筒井修一　奥山昭二　奥山清之　久保田博久　井上吉臣　梶原正直
宝　物　豊臣秀吉書簡
由緒沿革　本神社の創建年月は不詳であるが、式内鴨神社、田土浦坐神社、式外国津神社、竹島神社、飯神社、玉比咩神社、天石門別保布羅神社、早滝比咩神社、八幡神社、木華佐久耶比咩神社、都羅比咩神社、以上十一社の神を御祭神とし、由来旧児島郡の総社として、祈年・新嘗等の日には郡司が礼拝した社であると伝えている。中世に八幡宮を合祀し、爾後は専ら八幡宮と称したが、明治二年に旧号に復した。社領高は六石七斗五升二合であった。

宗谷神社　旧無格社

岡山市玉柏宗谷二五七六

主祭神　保食神
例　祭　九月二十九日　**境内地**　五四三・五坪
主要建物　本殿　拝殿　籠殿　神門
摂末社　稲荷神社　野神社
崇敬者数　二〇〇人
宮　司　村岡吉郎
責任役員　久山志馬夫　久山石男　太田常男
由緒沿革　旧記に「備前国御野郡河本村鎮座諏訪宮末社宗谷神社」とある。

當麻神社　旧村社

岡山市米田六三〇

主祭神　當麻大神
例　祭　九月七日　**境内地**　四〇六坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　随身門
摂末社　今宮　若宮　行歩神社　稲荷神社
氏子数　一六戸
宮　司　岡本　昇
責任役員　原　巍　原　正志　片岡寿男
由緒沿革　本神社の創建年月、由緒等は不詳であるが、本国総社神名帳にある備前国式内外古社一二八社の一である。もと米田三〇六番地の鎮座であったが、昭和十三年十一月旭川改修により現在地に移転した。

高藏神社　旧村社

岡山市牟佐二八〇三

主祭神　天照国照彦火命　天香山命　建御名方命
例　祭　十月二十二日　**境内地**　三、二三六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　釣殿　神饌所　社務所
遙拝所
摂末社　稲荷神社
氏子数　一一戸　**崇敬者数**　二、五〇〇人
宮　司　有森　猛
責任役員　大滝　勇　鈴木忠久　松田宗安
由緒沿革　本神社の創建は正慶元年以前で、本国総社神名帳に高藏神社、山本氏本に従二位高藏大明神と記載してある古社で、備前国式内外一二八社の一である。

上代の祭式を存し、新嘗報賽の旧式を厳重に奉務し、その饗宴の日に古風の神遊を奏している。これを高藏の杵舞と云う。

高島神社　旧村社

岡山市宮浦三二六八

主祭神　神武天皇　天児屋根命　武甕槌命　経津主命　比咩命
例　祭　十月十四日・十五日
境内地　九八二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　釣殿　神饌所　渡廊下
遙拝所
摂末社　龍神社
氏子数　一、〇五〇人　**崇敬者数**　五四、〇〇〇人
宮　司　欠　**禰　宜**　筒井貞明
由緒沿革　創建は神武天皇乙卯年三月、神階は従五位下である。神武天皇が御東征の砌、当地に行宮を創設せられたのにはじまる。光仁天皇の宝亀三年に相殿として四柱の神を奉斎した。古事記に記載してある高島宮とは本神社のことで、（即ち昭和十五年五月六日文部省から官報第三九九六号で高島宮伝説地として指定せられた）往古から朝廷、国司、藩主の尊崇厚く、神封、社領或は社殿の新改築等の寄進があった。明治維新に村社に列格した。昭和二十一年一月十四日に由緒上は県社に該当するものと神祇院考証課長から確認を受けている。

高島神社　旧村社

岡山市貨田二九五

主祭神　神武天皇
例　祭　四月三日　**境内地**　四二二坪
主要建物　本殿
崇敬者数　高島学区一円
宮　司　久山萬吉
責任役員　服部頼二　服部　実　武田典章
由緒沿革　本神社は古事記、日本書紀に見える、神武天皇の御東征の砌、三年間御駐蹕のあった高島宮跡に創建せられた神社である。備前国総社神名帳に「正三位高島大明神」と誌してある。旧幕時代は衰微がその極に達したが、紀元二千六百年に神武行宮の碑を建て、社殿を復興したが、暴風雨のため倒潰し、本殿だけが現存している。



龍之口八幡宮　旧村社

岡山市祇園九九六

主祭神　神武天皇
例　祭　十月二十五日　**境内地**　二、九八八坪
主要建物　本殿　幣殿　渡殿　拝殿　随身門　神饌所
勤番所　社務所
摂末社　天神社　荒神社
氏子数　六、〇〇〇戸
宮　司　佐々木　保　**禰　宜**　佐々木講治
責任役員　桑田真太郎　川山一二　寺迫数夫
宝　物　甲冑一対　唐太刀二振
特殊神事　輪くぐり
由緒沿革　本神社は以前、小串の米崎の山頂にあって豊玉毘売命が祭られていた。応徳二年毎夜海底から光を発するので、魚類が恐れて寄りつかず、漁夫達は困って、その由を神前に申告したところ「御幣が舞い上がり門田の山中に立つであろう。そこへこの社を遷座せよ。」とのご神託があった。その御幣の立った所が現在の御鎮座地である。後に彦火火出見命、玉依毘売命が祭られた。

主祭神　神功皇后　応神天皇　玉依姫命
例　祭　十月十五日　**境内地**　五〇四・三六坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　社務所
摂末社　天王宮　稲荷神社　天地神社　石槌神社
氏子数　一一戸　**崇敬者数**　二、五〇〇人
宮　司　有森　猛
禰　宜　北川泰澄　**権禰宜**　西山寿一
責任役員　大滝　勇　鈴木忠久　松田宗安
由緒沿革　本神社の創建年代は不詳であるが、報恩大師が孝謙天皇の御代に岡山市金山寺、西大寺観音院を開帳せられたとき、この神社が霊験あらたかである旨を説かれたと伝えられている。その後一時廃社同様になったが、岡山藩主池田新太郎少将の信仰を受け、寛文元年に社領十五石の寄進があった。同時に本殿を再建し、正八幡大神と称した。以後累代藩主が武運長久、国家鎮護の神として崇敬し、祭祀、社殿の修理、参道の改修等は、藩主によって行われたと言う。宝永二年朔日に備前の社務係吉備津彦神社の祠官大守筑前守が祈願を行っている。享保元年に大修理、嘉永元年に絵馬堂の寄進があった。明治になり八幡宮と改称した。明治三十九年に本殿、拝殿を改築修理し、昭和十四年に社殿全般の整備を竣工した。爾来学業成就、家内安全、商業繁昌、交通安全等の神様として県内一円のみならず近県の人々までに篤く信仰せられている。

玉井宮東照宮　旧県社

岡山市東山二丁目三一八一

主祭神　豊玉毘売命　彦火々出見尊　玉依毘売命　徳川家康公

天神一社揚田神社　旧村社

岡山市神下四六一

主祭神　天之御中主神　高皇産霊神　神皇産霊神
例　祭　十月十七日
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　随身門
摂末社　荒神社　稲荷神社　金刀比羅宮
氏子数　一〇〇戸　**崇敬者数**　三〇〇人
宮　司　代務者　松島章雄
責任役員　横沢光量　中山　弘　吉田　栄
由緒沿革　本神社は備前国神名帳総社本に天神社、揚田神社、一宮左楽頭本に天神一社法揚角ノ神。山本氏本に 天神一社法揚角明神。西大寺本に 天神一社法揚角ノ明神。広谷本に天神一社法揚角ノ明神と記されている。揚田が地名であるから、天神一社・揚田神社と奉称するのが古意に協うと思われる。

天神社　旧無格社

岡山市牟佐二四三〇

主祭神　菅原神
例　祭　十月二十一日　**境内地**　八五九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　荒神社
氏子数　三五戸
宮　司　佐藤忠男
責任役員　戸田博文　大前　始　山本正男
由緒沿革　創建年代は不詳であるが、天保三年五月一日に再建せられた。大正十五年十月二十日に指定神社に昇格した。

天神社　旧村社

岡山市三野四〇八

主祭神　少彦名命　天之御中主命
例　祭　十月十二日　**境内地**　四、八一〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　釣殿　随身門　神饌所
摂末社　寄貴神社　稲荷神社　生所荒神社　伊木神社　三野之神社　天満宮　半田神社
氏子数　九〇〇人　**崇敬者数**　一〇〇人
宮　司　欠

責任役員　安井粂次郎　藤田馬之　光岡豊二
由緒沿革　延喜式神名帳に天神社、本国総社神名帳に天津神社と記してある備前国式内外古社一二八社の一社である。明治四十年九月二十七日に神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

天満宮　旧村社

岡山市新保六九三

主祭神　菅原道真
例祭　十月二十五日　**境内地**　三二四・三二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　荒神社　稲荷神社
氏子数　五八五人　**崇敬者数**　九五人
宮司　杉村昭信
責任役員　保崎龍太　穐田百太郎　河合勇吾
由緒沿革　創建は寛永四年である。山城国の北野天満宮を勧請した。慶安四年に当新田村を氏子区域とする。池田綱政公の時から泉田村の内に本神社の修理料として二石一斗一升を寄進し、藩制改革まで寄進した。昭和二十一年十二月二十一日の地震により、社殿が倒壊し、昭和二十六年十月二十五日に幣殿・拝殿・随身門を新築した。

天満宮　旧村社

岡山市西市四六二

主祭神　菅原道真
例祭　十月十六日　**境内地**　三七六・九六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　倉庫
摂末社　若宮　荒神社　牛神社
氏子数　六七五人　**崇敬者数**　一五八人
宮司　杉村昭信
責任役員　黒住力太郎　八田寅平　小若常三郎
由緒沿革　創建は天文元年六月一日である。山城国北野の天満宮を勧請した。当時の下中野村・西市村・京殿村が氏子区域であった。天正八年三月三日岡山内山下榎馬場の今村宮を、現在の地に遷座し、下中野村が今村宮の氏子となる。寛永十四年岡山藩主池田光政公の墾田として、米倉村、万倍村を天満宮の氏子区域とする。

天満宮　旧村社

岡山市十日市三八六

主祭神　菅原道真
例祭　十月二十日　**境内地**　二〇四・五二坪
主要建物　本殿　拝殿　幣殿　社務所
摂末社　稲荷神社
氏子数　一、〇〇〇人　**崇敬者数**　五〇〇人
宮司　杉村昭信
責任役員　景山登喜一　青木菊蔵　内田益太
由緒沿革　創建は延喜元年頃らしい。社伝に菅原道真公が筑紫に御左遷の砌、当地に仮泊せられた時に、海女が難産で苦しんでいるのを不憫に思召されて、一首の歌を与えられたら忽ち安産したと云う。よって御腰をかけられた石を腰懸石と言い瓦祠で道真様と唱え奉った。天喜元年中に天満天神と改め御社殿を造営した。寛政三年に天満宮と改称した。昭和二十年六月二十九日に空襲で御社殿を全焼した。同年十月一日仮本殿を建立した。昭和二十五年五月五日に幣殿・拝殿を新築した。俗称子安天満宮とも奉称する



天満宮　旧村社

岡山市今在家二八八

主祭神　菅原道真公
例祭　十月六日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　稲荷社　木野山社
氏子数　八〇戸
宮司　久山萬吉

責任役員　大森耕平　湯浅三康　枝松勝造
由緒沿革　本神社の勧請は元享年中である。以来約六百五十年余になる。

天満宮　旧村社

岡山市野殿五三

主祭神　菅原神
例祭　十月十日　**境内地**　九一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社
氏子数　六八戸　**崇敬者数**　一二人
宮司　黒住虎雄
責任役員　佐藤順治　相賀　格　太田秀一
由緒沿革　当宮は延喜元年、右大臣菅原道真公が筑紫に左遷の時、この処に立寄り、沢辺に上陸された故事によって、祭祀を執行ったと云う。

内宮　旧村社

岡山市浜野一丁目三一八

主祭神　天照皇大神　倭姫命　大巳貴命
例祭　十月十七日　**境内地**　八九二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　職舎　社務所
摂末社　稲荷神社　天満宮
氏子数　一、五〇〇戸　**崇敬者数**　一、二〇〇人
宮司　伏見　龝　**禰宜**　伏見　修
権禰宜　伏見　正



責任役員　石井　潔　松井豊治　佐藤福一　渡辺綱雄
服部福次
由緒沿革　本神社は崇神天皇の五十四年丹波国左宗の宮から、吉備の国名方の浜宮に御遷座になったと云う。同五十八年大和国三輪の山の上に御遷座になり、垂仁天皇の二十六年伊勢の国渡会郡宇治の里に鎮まり給うたと云う。大正二年十月二十日浜野野々宮・村社野々宮・同所村下・村社日吉神社を合祀した。

八幡宮　旧村社

岡山市野田二九九

主祭神　応神天皇　神功皇后　玉依姫命
例祭　十月十日　**境内地**　六二五・二六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　住吉神社　鹿島神社　四御神神社　火之神社　荒神社
氏子数　四〇戸
宮司　村岡吉郎
責任役員　瀬崎豊夫　小林正市　太田勝海
由緒沿革　勧請年月・由緒等不詳。旧記に備前国御野郡金山寺村鎮座とある。

八幡宮　旧村社

岡山市金山寺四九三

主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后
例祭　十月十二日　**境内地**　八〇七・七五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　荒神社　若宮社　四御前社
氏子数　一、〇〇〇戸　**崇敬者数**　五〇人
宮司　黒住虎雄
責任役員　安田正章　後神清晴　難波　睦　寺山廉忠
西沢　香　貝原広志
由緒沿革　当宮は社僧常坊が別当となり、その後、慈清院日要を社僧として迎えている。寛文二年に神道に改め、神社となった。明治六年十月に安田景久が、祠官に進み奉仕した。安田家には慶長廿年の徳川家康の判のお定書が、現存している。

八幡宮　旧村社

岡山市畑鮎一二七六

主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后
例祭　十月十日　**境内地**　六二五・二六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　荒神社　若宮社　四御前社
氏子数　一、〇〇〇戸　**崇敬者数**　五〇人
宮司　黒住虎雄
責任役員　安田正章　後神清晴　難波　睦　寺山廉忠
西沢　香　貝原広志
由緒沿革　当宮は社僧常坊が別当となり、その後、慈清院日要を社僧として迎えている。寛文二年に神道に改め、神社となった。明治六年十月に安田景久が、祠官に進み奉仕した。安田家には慶長廿年の徳川家康の判のお定書が、現存している。

例　祭　十月十二日　境内地　四一六・九七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　荒神社　稲荷神社
氏子数　一二戸
宮　司　村岡吉郎
責任役員　後藤一　藤井光夫
由緒沿革　勧請年月・由緒等不詳。旧記に備前国御野郡鮎帰村鎮座八幡宮とある。

八幡宮　旧村社
岡山市高野尻一六四二

主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后
例　祭　十月九日　境内地　四二三坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　一二戸
宮　司　末広勅忠
責任役員　茂崎正一　茂崎七二　井上近太
由緒沿革　創建年代・由緒不詳。

八幡宮　旧村社
岡山市玉柏二六九一

主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后
例　祭　十月十日　境内地　四九一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　荒神社
宮　司　佐藤忠男
責任役員　水内唯男　秋山伊勢夫　山本正男
由緒沿革　本神社の創建年代は不詳であるが、寛文元年に再建した。明治三十三年に火災により焼失し、翌三十四年に再建し、現在に至っている。

八幡宮　旧村社
岡山市北浦九〇七

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月十四日・十五日
境内地　四、一〇五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　随身門
摂末社　若宮　猿田彦神社　金刀比羅宮　稲荷神社　天満宮　龍神社
氏子数　八一九人
宮　司　河田重信　禰　宜　秦　博
責任役員　神崎平吉　片桐金一
由緒沿革　創建年代不詳。古老の口碑に嘉応元年八月高倉天皇が筑紫に行幸の砌、偶々暴風雨のために御船を当所の波止場内に御仮泊せられ、本神社に奉幣になったと云うが、諸書には記載がない。旧社領高六斗三升である。（吉備温古及旧藩神社明細帳）

八幡宮　旧村社
岡山市今保五二四

主祭神　応神天皇　神功皇后　玉依姫命　武内宿禰
例　祭　十月二十二日　境内地　一八四・七五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　六五〇戸
宮　司　佐野光正
責任役員　大賀文太郎　小橋和平治　河内雅男　河内寛史
由緒沿革　創建は建武年中である。旧備前国藩主池田家文庫本に津高郡今保村八幡宮とある。

八幡宮　旧村社
岡山市白石三七六

主祭神　応神天皇　神功皇后　玉依姫命　武内宿禰
例　祭　十月二十二日　境内地　一二一・四坪
主要建物　本殿　拝殿　幣殿
氏子数　三〇〇人
宮　司　佐野光正
責任役員　板野五平治　板野仲治　深井儀一郎　平松多作
由緒沿革　建武年間に創建。備前国旧藩主池田家文庫本に津高郡白石村鎮座八幡宮とあり、建武年間の勧請と伝えている。明治十二年八月十二日に村社に列格した。

八幡宮　旧村社
岡山市花尻五七

主祭神　応神天皇
例　祭　十月二十二日　境内地　二二七・四八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　五五人
宮　司　佐野光正
責任役員　板野政毅　則武正夫　長櫓鷹雄
由緒沿革　備前国旧藩主池田家文庫本神名帳に花尻八幡宮とあり、建武年間の勧請と云う。

八幡宮　旧村社
岡山市久米九〇

主祭神　応神天皇　神功皇后　玉依姫命　武内宿禰　倉稲魂命
例　祭　十月二十二日　境内地　四七一・六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　手水舎
氏子数　二五〇人
宮　司　佐野光正
責任役員　野上健次郎　安井貞雄　桐野和喜二　野上寿吉　武井幹一　鈴木隆太郎
由緒沿革　備前国旧藩主池田家文庫本に久米村八幡宮とある。明治四年十月に村社に列格した。

八幡宮　旧村社
岡山市新保八三〇

主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后
例　祭　十月二十三日　境内地　三六四・〇七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　宗像神社　稲荷神社　若宮
氏子数　二一六戸　崇敬者数　五四人
宮　司　杉村昭信
責任役員　小橋市太郎　山田岸太郎　小藪二平治
由緒沿革　創建は元和元年九月十七日である。青江八幡宮の御分霊を勧請した。往古は八月二十六日に青江八幡宮に神幸式があった。

八幡宮　旧村社
岡山市津島二六八二

主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后
例　祭　十月二十日　境内地　八五四・六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　八〇〇人　崇敬者数　二〇〇人
宮　司　見垣安邦
責任役員　長江繁市　片山卯太郎　房原信雄
由緒沿革　創建年代は不詳であるが、国内神名帳にある旧御津郡古社の一である。

八幡宮　旧村社
岡山市矢坂東町一—一

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后　大巳貴命
例　祭　十月十日　境内地　七四二・二三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　社務所
摂末社　稲荷神社
氏子数　一、六二〇戸
宮　司　富山道常
責任役員　太田伝作　寺尾喜三郎　戸部末五郎
由緒沿革　寛平年間の勧請である。矢坂富山城主富山大掾が神徳を崇敬し、万成山に社殿を創建し社領を寄進した。寛文十一年二月に社殿を再興した。

八幡宮　旧村社
岡山市富田二四七

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月二十日　境内地　三一一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　荒神社　磐形神社
氏子数　三一五人　崇敬者数　九人
宮　司　高須理
責任役員　吉田久米次　黒田重吉　定政八重次
由緒沿革　創建は元弘元年である。

八幡宮　旧村社
岡山市西古松一一〇

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月十三日　境内地　二〇四・三八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社
氏子数　二、〇二五戸　崇敬者数　三〇人
宮　司　高須理
責任役員　山田敬次　西村半九郎　難波寛一
由緒沿革　創建年代は不詳であるが、子安八幡宮と奉称し、往古から安産の守神として信仰が厚い。

八幡若宮　旧村社
岡山市郡二九七八の一

主祭神　仁徳天皇　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后
例　祭　十月十六日　境内地　三二二坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　御崎神社
崇敬者数　二一五人
宮　司　難波貞篤
責任役員　藤沢庄次郎　近藤忠夫　渡辺繁昭　岡野薫　筒井修一　奥山昭二　奥山清之　久保田博久　西谷萬二　井上吉臣　梶原正直

由緒沿革　本神社の由緒・創建年月は不詳であるが、口碑に治承四年三月に高倉上皇の厳島御幸の道の記に「備前の国児島の泊に着かせ給ひ（中略）此の国の若宮御在し坐すと聞召して幣奉らせ給ふ」とあるは、本神社の事で、湯廻の大臣を見そなわした処といい、伝えている場所が境内にある。又西行法師も度々参詣して「昔見し松は老木になりにけり我とし経たる程も知られて」の詠があって、碑に刻み社前に建立してある。

日吉神社　旧村社

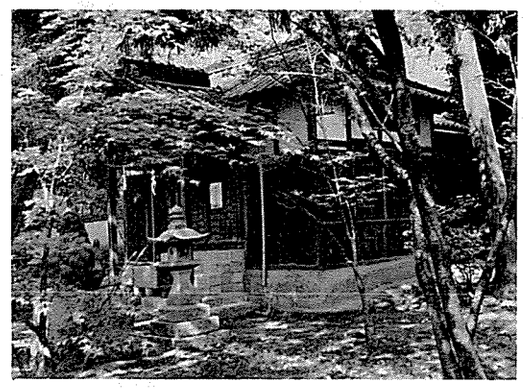
岡山市貨田三四三

主祭神　大山咋神　大巳貴神
例　祭　十月二十三日　**境内地**　五五四・九三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷社　荒神社　宮島社
氏子数　二六戸　**崇敬者数**　六〇人
宮　司　久山萬吉
責任役員　服部頼二　服部　実
由緒沿革　創建は天平勝宝年間である。天智天皇の御代に大和の三輪明神を勧請していたが、天平勝宝年間に、金山寺に脇田山安養寺を建立するに当り、現在地に遷座したと云う。元暦年間に社殿を改築。元和年間に社殿を改築した。

日吉神社　旧村社

岡山市湯迫六九五

主祭神　大山咋命
例　祭　十月二十三日　**境内地**　五八〇坪



主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社　稲荷神社　振神社
氏子数　七〇戸　**崇敬者数**　一五〇人
宮　司　有森　猛
責任役員　藤田清夫　藤田正夫　大森康夫　出原忠勝
由緒沿革　創建年代は不詳である。上古近江国の日枝の山から、大山咋神を奉遷して、産土神としたと社記にある。

日吉神社　旧村社

岡山市北長瀬本町一四―三一

主祭神　大山咋命
例　祭　十月二十二日　**境内地**　二四二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　三四戸
宮　司　今村倫子
責任役員　桑島三吉　伊丹直彦　瀬川　滋
由緒沿革　創建年月等不詳。江州日吉大神宮の御祭神を勧請したと、池田家蔵神社明細帳にある。

廣幡八幡宮　旧村社

岡山市阿津二一〇四

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月半ばの土・日曜日
境内地　八七七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神輿殿　社務所
摂末社　稲荷神社　志女神社　天神社　金刀比羅宮　恵美須宮
氏子数　五〇〇戸
宮　司　佐々木　保　**禰　宜**　小山玉章子
責任役員　小板利康　生田量一　堀川　進
由緒沿革　本神社は、喜慶元年十月に創建せられ、田土浦の安の津比良山の東を御鎮座地として田土浦神社（水母八幡宮）と奉称した。寛永九年二月現在の宮山に遷座し、六月広幡八幡宮と改称した。寛文六年五月備前藩が神仏習合の祭祀を分離した。同七年三月京都神道管領吉田家の証印を受け、石清水八幡宮の御神霊を勧請した。

深田神社　旧村社

岡山市今谷五三三

主祭神　深田部大神
例　祭　十月十八日　**境内地**　九〇四・三七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　天神社　稲荷神社　荒神社
氏子数　八二戸
宮　司　池田浩宥
責任役員　秋山　毅　時末英一　近常三津男
由緒沿革　創建年月その他不詳。旧号は松尾大明神。明治二年に松尾神社と改称した。幕政時代は社地参段四畝で、宮林とともに除地であった。

宗形神社　旧無格社

岡山市郡一九七八

主祭神　田霧姫命　市杵島姫命　湍津姫命
例　祭　四月二十九日　**境内地**　七〇五坪
主要建物　本殿
崇敬者数　二一五人
宮　司　難波貞篤
責任役員　藤沢庄治郎　近藤忠夫　渡辺繁昭　岡野薫　筒井修一　奥山昭三　奥山清之　久保田博久　西谷萬二　井上吉臣　梶原正直
由緒沿革　本神社の創建年月等不詳。古老の口伝に筑前宗像の神を勧請したと云い伝えている。本神社が総社の末社であることは神社書上帳に記載してある。

疫神社　旧村社

岡山市東古松一一九

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月二十四日　**境内地**　一三七・六四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　金刀比羅宮　秋葉神社
氏子数　一八〇戸
宮　司　佐々木　保
責任役員　小板利康　吉崎　薫　三好金市
特殊神事　船曳き（船型だんじりの巡幸）
由緒沿革　創建年代不詳。古来天皇山（現在地）に鎮座していたが、中世仏教興隆の頃、当所持福院域内に遷座したが、明治五年再び元の地に奉遷せられ、明治六年村社に列せられた。

松尾神社　旧村社

岡山市下牧二六七二の一

主祭神　大山咋命　市杵島姫命
例　祭　七月十四日に近い土曜日
境内地　八四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　金刀比羅宮　秋葉神社
氏子数　一八〇戸
宮　司　佐々木　保
責任役員　小板利康　吉崎　薫　三好金市
特殊神事　船曳き（船型だんじりの巡幸）
由緒沿革　創建年代不詳。古来天皇山（現在地）に鎮座していたが、中世仏教興隆の頃、当所持福院域内に遷座したが、明治五年再び元の地に奉遷せられ、明治六年村社に列せられた。

兵主神社　旧村社

岡山市阿津二七八三

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月六日　**境内地**　八六二・三九坪、
摂末社　稲荷神社
氏子数　四〇戸
宮　司　岡本千尋　**禰　宜**　岡本　昇
責任役員　大松恭寿　中谷　敦　田中　稔　片山忠常
特殊神事　当家神事　みそぎ祭
由緒沿革　本神社は本国総社神名帳に深田神社。山本氏本に従二位深田大明神と記載してある。備前国式内外古社一二八社の一である。創建年月は不詳である。昭和三十二年二月五日に火災のため、全社殿を焼失した。再建は未定である。

宗形神社　旧無格社

岡山市郡一九七八

主祭神　田霧姫命　市杵島姫命　湍津姫命
例　祭　四月二十九日　**境内地**　七〇五坪
主要建物　本殿
崇敬者数　二一五人
宮　司　難波貞篤
責任役員　藤沢庄治郎　近藤忠夫　渡辺繁昭　岡野薫　筒井修一　奥山昭三　奥山清之　久保田博久　西谷萬二　井上吉臣　梶原正直
由緒沿革　本神社の創建年月等不詳。古老の口伝に筑前宗像の神を勧請したと云い伝えている。本神社が総社の末社であることは神社書上帳に記載してある。

疫神社　旧村社

岡山市東古松一一九

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月二十四日　**境内地**　一三七・六四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　金刀比羅宮　秋葉神社
氏子数　一八〇戸
宮　司　佐々木　保
責任役員　小板利康　吉崎　薫　三好金市
特殊神事　船曳き（船型だんじりの巡幸）
由緒沿革　創建年代不詳。古来天皇山（現在地）に鎮座していたが、中世仏教興隆の頃、当所持福院域内に遷座したが、明治五年再び元の地に奉遷せられ、明治六年村社に列せられた。

松尾神社　旧村社

岡山市下牧二六七二の一

主祭神　大山咋命　市杵島姫命
例　祭　七月十四日に近い土曜日
境内地　八四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　金刀比羅宮　秋葉神社
氏子数　一八〇戸
宮　司　佐々木　保
責任役員　小板利康　吉崎　薫　三好金市
特殊神事　船曳き（船型だんじりの巡幸）
由緒沿革　創建年代不詳。古来天皇山（現在地）に鎮座していたが、中世仏教興隆の頃、当所持福院域内に遷座したが、明治五年再び元の地に奉遷せられ、明治六年村社に列せられた。

兵主神社　旧村社

岡山市阿津二七八三

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　七月十四日に近い土曜日
境内地　八四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　金刀比羅宮　秋葉神社
氏子数　一八〇戸
宮　司　佐々木　保
責任役員　小板利康　吉崎　薫　三好金市
特殊神事　船曳き（船型だんじりの巡幸）
由緒沿革　創建年代不詳。古来天皇山（現在地）に鎮座していたが、中世仏教興隆の頃、当所持福院域内に遷座したが、明治五年再び元の地に奉遷せられ、明治六年村社に列せられた。

松尾神社　旧村社

岡山市下牧二六七二の一

主祭神　大山咋命　市杵島姫命

例　祭　十月十八日　**境内地**　九〇四・三七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　天神社　稲荷神社　荒神社
氏子数　八二戸
宮　司　池田浩宥
責任役員　秋山　毅　時末英一　近常三津男
由緒沿革　創建年月その他不詳。旧号は松尾大明神。明治二年に松尾神社と改称した。幕政時代は社地参段四畝で、宮林とともに除地であった。

宗形神社　旧無格社

岡山市郡一九七八

主祭神　田霧姫命　市杵島姫命　湍津姫命
例　祭　四月二十九日　**境内地**　七〇五坪
主要建物　本殿
崇敬者数　二一五人
宮　司　難波貞篤
責任役員　藤沢庄治郎　近藤忠夫　渡辺繁昭　岡野薫　筒井修一　奥山昭三　奥山清之　久保田博久　西谷萬二　井上吉臣　梶原正直
由緒沿革　本神社の創建年月等不詳。古老の口伝に筑前宗像の神を勧請したと云い伝えている。本神社が総社の末社であることは神社書上帳に記載してある。

疫神社　旧村社

岡山市東古松一一九

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月二十四日　**境内地**　一三七・六四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　金刀比羅宮　秋葉神社
氏子数　一八〇戸
宮　司　佐々木　保
責任役員　小板利康　吉崎　薫　三好金市
特殊神事　船曳き（船型だんじりの巡幸）
由緒沿革　創建年代不詳。古来天皇山（現在地）に鎮座していたが、中世仏教興隆の頃、当所持福院域内に遷座したが、明治五年再び元の地に奉遷せられ、明治六年村社に列せられた。

松尾神社　旧村社

岡山市下牧二六七二の一

主祭神　大山咋命　市杵島姫命

八幡宮　旧村社

岡山市八幡東一―一

主祭神　神功皇后　応神天皇　玉依姫
例　祭　十月二十七日　**境内地**　一、一二八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　倉庫
摂末社　祇園宮　大山宮　稲荷宮
氏子数　一、二〇〇人　**崇敬者数**　五〇〇人
宮　司　宮岡秀安
由緒沿革　元和六年に池田忠雄が創建した。延宝四年に旧藩主池田綱政が再興し、同五年十一月八日に山城国の男山から遷宮し、社領地と神饌料の寄進を受けたが、明治六年の改革により廃止となった。

淀子神社　旧村社

岡山市中牧三八三

主祭神　淀姫命
例　祭　十月二十八日　**境内地**　七六四・六二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　龍神社
氏子数　一、二〇〇人

宮　司　池田浩宥
責任役員　角道保造　八代槌三　杉山正夫
由緒沿革　創建年代・由緒は不詳である。幕政時代には社地が一町一段三畝二七歩あった。

若宮八幡宮　旧村社

岡山市原九五六

主祭神　応神天皇　仁徳天皇　神功皇后
例　祭　十一月十一日　**境内地**　四九七・一四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神間
摂末社　稲荷神社　荒神社　志女神社
氏子数　二五〇人
宮　司　欠
責任役員　西崎寿治　石田虎吉　須々木半
由緒沿革　創建年代は不詳であるが、備前国式内外古社の一である。

氏神の祭祀

諸種の祈願・祭祀等の神事の御祭神には、氏神様は必ず奉斎すべきで、格別の御祭神を招ぎ奉るときでも、氏神様を併せ祭るのが本然の姿である。古来より如何なる祈願・神事でも、氏神様が出発点であり、帰着点であるとの慣習によって、氏神様を除外した神事祭祀は成り立たないと云っても過言ではない。

家庭のまつり

家庭のまつりは、家庭で家族が毎日神拝を実践し、感謝と報恩との誠を深めて行くものである。人の幸福のもとは家庭であり、家庭の信仰は神を敬い、祖先を尊び、子孫を愛することで一層篤くなって行くものである。神棚を設けて天照皇大神宮の大麻を奉斎し、更に土地の氏神様及び信仰する神々の御神札をお祭りするのが、正しい姿である。

神棚は一家の中心で、南向或は東向がよく、大きさ、お宮形等は自由でよい。お宮形は神明形・片屋根形・箱宮形等があり、一殿造が普通である。神棚の前面に注連縄をかける。注連縄は神聖を保つ標の意味があり、紙垂をつける。紙垂は奉書紙・美濃紙・半紙でつくり、普通四垂が多い。

榊は栄える木との意味があり、神事に使用する。

鏡は浄明のしるしで、神明の照鑑と、穢れのない誠の心をあらわす。

新に神棚を設ける時には宮司を招いて、鎮座のお祭を斎行うべきである。

神饌は清浄を第一とし誠心誠意をもって選ぶべきである。御初穂というのは、初刈の稲穂を先ず神前に捧げるので、この意味から神前に捧げるものを、初穂という。神饌は祭典の時には、和稲（白米）荒稲（玄米）、酒、餅、海魚、川魚、野鳥、水鳥、海藻、野菜、果物、菓子、塩、水等を供えるのが正式である。毎朝は洗米（飯）、水、塩の三品を供えるのが普通である。

神拝の作法は神社の祭典に準ずるべきであるが、大体の作法としては、神前に坐して一揖、二拝、祓詞、神拝詞奏上・二拝・二拍子・一拝・一揖して退下する。祓詞・神拝詞奏上を省略するときは、二拝・二拍子・一拝でよい。

祝祭日或は祈願等の参拝には玉串を奉奠するのが正式である。玉串は榊の小枝に垂紙をつけたもので、神に誠心を捧げ、神のおかげをいただく作法である。

倉敷支部　（五六社）

阿智神社　倉敷市本町一二一一……三一
青江神社　〃　酒津二一四九……三一
足高神社　〃　笹沖一〇三三……三一
天津神社　〃　粒江一七七四……三一
天石門別保布羅神社　〃　福田町広江七二六……三一
天御柱神社　〃　羽島八九九……三一
生坂大神社　〃　生坂一〇八一……三一
一王子神社　〃　二日市四四九……三三
保食神社　〃　粒浦八軒屋六〇一……三三
浦田神社　〃　福田町浦田一二九五……三三
大川神社　〃　徳芳二七九……三四
大蔵神社　〃　五日市三九二……三四
御前神社　〃　安江三六九……三四
御崎神社　〃　有城四五五……三四
御崎神社　〃　大内町一〇六二……三四
御崎神社　〃　生坂一四七九……三四
春日神社　〃　川入六五三……三五
春日神社　〃　浜町一丁目四―一……三五
片島神社　〃　牛島六六〇の一……三五
亀島神社　〃　連島町西之浦三八三七……三五
熊野神社　〃　西阿知町四五〇……三六
熊野神社　〃　中庄一五二一……三六
熊野神社　倉敷市福島四〇一……三六
荒神社　〃　黒石六九四……三七
荒神社　〃　帯高六七七……三七
三社神社　〃　八王寺町五二一……三七
山王春日神社　〃　日吉町三七五……三七
新熊野神社　〃　沖七〇……三八
水門神社　〃　生坂一四五一……三八
菅生神社　〃　祐安一九九三……三八
菅生天津神社　〃　西坂六二九……三八
素盞嗚神社　〃　藤戸町藤戸七六三……三八
素盞嗚神社　〃　浅原一五七四……三九
素盞嗚神社　〃　帯高……三九
住吉神社　〃　黒崎一〇四二……三九
総社神社　〃　水江八七六の一……三九
田槌神社　〃　粒江四〇〇……三九
天神社　〃　福田町福田一九七二……三九
天神社　〃　鳥羽一五〇……四〇
天満神社　〃　西阿知町西原一一四〇……四〇
寅崎神社　〃　連島町鶴新田六六四……四〇
八幡神社　〃　酒津一一一五……四一
八幡神社　〃　生坂一四五一……四一
八幡神社　〃　西岡一九六二……四一
八幡神社　〃　老松一丁目七―三……四一
八幡神社　〃　呼松町四八八……四二

八幡神社　倉敷市連島町矢柄六一二九……四二
八幡神社　〃　三田六一五……四二
八幡神社　〃　鳥羽一三六六……四三
濱田神社　〃　福田町古新田二……四三
姫太神社　〃　祐安一九九三……四三
廣田神社　倉敷市藤戸町天城一八五九……四三
福田神社　〃　北畝三丁目一四―五三……四四
箆取神社　〃　連島町西之浦三一八四……四四
厄神社　〃　連島町西之浦三八一五……四四
六神社　〃　西岡一八二三……四五

神社参拝

神社は日本民族の祖神や守護神をまつる場所で、日本人の信仰・道徳の中心である。氏子・崇敬者は勿論、全国民が尊崇するところで、心身を清め、服装容儀を整えて参拝するべきである。

神社参拝は、毎月一日、十五日が古くからの仕来りである。また、年始・年末・祝日等をはじめ、結婚・安産・初宮詣・七五三・慶福の場合には特に参拝すること。祭礼日には一家そろって参拝し、六月、十二月末には大祓式で「おはらい」を受け心身を清めること。神社に参拝するには手水舎で手を洗い、口を漱いで神前に参進し、報賽をさゝげて礼拝すること。礼拝は二拝・二拍子・一拝すること。祈願・報告等のときは社務所に参拝の主旨を告げ、「おはらい」を受けて神前に参進し、玉串を奉って礼拝すること。忌中にあるものは、参拝を遠慮すること。

夏越祓

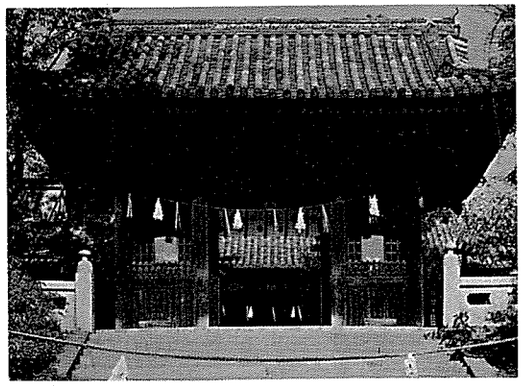
旧暦六月晦日の祓の行事のことで、六月祓・夏越節供ともいう。一年を二季に分け、六ケ月ごとに同じ行事を重ねる古代暦制下で、夏越祓は年の境目の重要な日の行事であった。中古、六月・十二月の晦日には朝廷で中臣の祝詞を奏上して祭事を執行した。

民間でも六月・十二月に祓の行事を行なった。後世になって十二月の祓は絶えて六月祓が行なわれるようになった。神社の夏越行事には茅の輪くぐりの行事があり、民間では人形・形代などを神社に納めたり、川に流したりする所があり、海水に浸り、また海水を汲んで身を拭ったり、牛馬を水辺につれて行って遊ばせたりした。また水の神祭を執り行う所が多い。

阿智神社　旧県社

倉敷市本町一二―一

主祭神　多紀理毘売命　市寸島比売命　多岐都比売命
例祭　十月第三土曜日　日曜日
境内地　五、一六九坪
主要建物　本殿　幣殿　祭文殿　釣殿　拝殿　神饌所　神門　舞殿　絵馬殿　社務所　斎館
摂末社　菅原神社　荒神社　倉敷護国神社
氏子数　三、〇八〇戸　**崇敬者数**　一四、〇〇〇人
宮司　小野一臣　**禰宜**　小野直臣
責任役員　渡辺盛二　原　玄太郎　森田孝平　鴨井正夫　野瀬要



宝物　寛政算額　古蹟、天津磐境（古代庭園）
特殊神事　十年毎の御砂持神事
由緒沿革　当地が海島であった昔、水夫漁民の祖神として、又海上安全の守護神として応神朝から祀られている。元亀・天正の頃から江戸時代の初期までに、古の阿知潟は陸地墾田と化し、本神社はその氏神としても称せられていたが、明治二年明剣宮または妙見宮とも称せられていたが、明治二年に延喜の旧称に復し、阿智神社と称せられるようになった。明治四十三年氏子区域十二の神社を本神社に合祀した。昭和十七年県社に列格した。

青江神社　旧村社

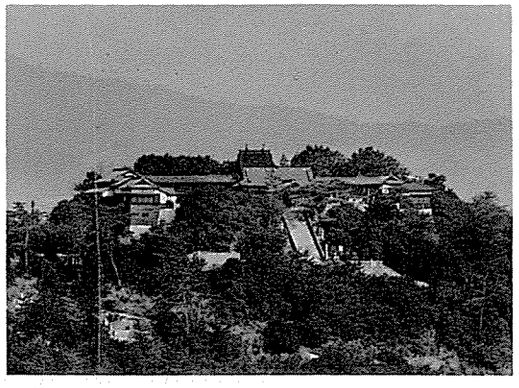
倉敷市酒津二一四九

主祭神　五十猛命　素盞嗚尊　金山彦神　金山姫神
例祭　十月十二日　**境内地**　一、六三二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　疫神社　荒神社　稲荷神社　木野山神社
白鳥神社
氏子数　二三八戸　**崇敬者数**　一、〇〇〇人
宮司　小野一臣
責任役員　梶谷堅一郎　三宅太郎
由緒沿革　黄薇史、後醍醐天皇建武年間西郡村福山城主大江田式部大輔社領五十石を寄進。正親町天皇天正元年西郡村高山城主社領二十石寄進。同三年高山落城。大正三年本村大字酒津字城ノ内本社境外摂社荒神社、疫神社を合祀。昭和二十六年五月本殿御屋根葺替。北西に御遷座し各社殿も移転完了。同年境内地三百坪拡張届出。昭和三十五年一月十九日本殿外主要建物炎上。昭和三十六年十月二十六日再建竣工し正遷宮を行った。

足高神社　旧県社

倉敷市笹沖一〇三三

主祭神　大山津見命　配神石長比売命　木之花佐久夜毘売命
例祭　十月十九日・二十日・二十一日
境内地　二三、〇〇〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫　絵馬殿　社務所　釣殿　休憩所
摂末社　顧眄神社　稲荷神社　水分神社　石上神社　金刀比羅神社　国魂神社　意富加牟豆美神社
氏子数　八七一戸　**崇敬者数**　二〇、〇〇〇人
宮司　井上亮二　**禰宜**　井上勝子
責任役員　武内　豊　中村生長　小崎猪佐夫　小野



天石門別保布羅神社　旧郷社

倉敷市福田町広江七二六

主祭神　天手力雄命
例祭　十月二十二日・二十三日
境内地　二、二九三坪
主要建物　本殿　釣殿　幣殿　拝殿　神饌所　直会殿
摂末社　石洞神社　速玉男神社　天神宮　素盞嗚神社
氏子数　二〇〇戸
宮司　三宅和敬
責任役員　岸田定美　三宅忠雄　千田高一　藤原忠男
宝物　棟札（元禄十一年）
特殊神事　神幸式　禰屋



由緒沿革　創建は天承元年であるが、大永年中火災のため古文書を失った。元広江矢の鼻と云う地に氏神として建立せられ、建長年間に現在地に奉遷した。承久の乱に頼仁親王が児島に流遷せられ、玉島で妃が御出産ののち逝去せられ、此地に御在住になった親王は氏神である当神社に祈願せられた。もと福田町内の五か村の氏神であったが、近時は大氏子と称するに至っている。

天御柱神社　旧村社

倉敷市羽島八九九

主祭神　天御柱神　天御中主神　国御柱神
例祭　五月・十月　第三土曜日
境内地　五五三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
氏子数　一〇〇戸
宮司　大森立博
責任役員　楠戸友一郎　亀山天祐
崇敬者数　二〇〇人
由緒沿革　創建は慶長三年であって、神仏御引別けにつき、明治三年天御柱神社として鎮座し今日に至っている。

生坂大神社　旧村社

倉敷市生坂一〇八一

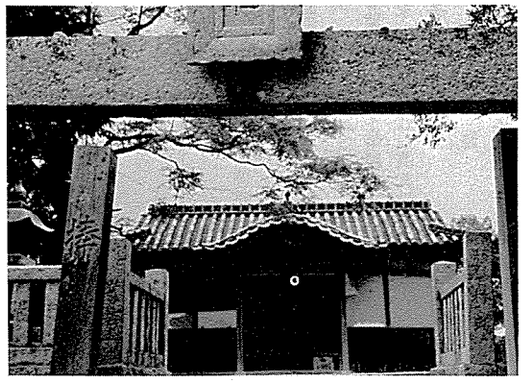
主祭神　天照大神　応神天皇
例祭　五月第二土曜日・十月第三土曜日

樹木等は当加龍寺支配仕居申候。備中誌に「若一王子権現叢祠岩崎榜示ヶ鼻に在」云云。

保食神社　旧村社

倉敷市粒浦八軒屋六〇一

主祭神　保食神
例祭　十月十二日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　釣殿
摂末社　宗像神社　弁天神社
氏子数　四〇戸
宮司　三宅和敬
責任役員　上杉千万太　山田信一
境内地　一六一坪
崇敬者数　九〇〇人



由緒沿革　創建は承応二年十二月。当神社は五穀守護神であって、水をせき止めた開墾地にこの神を奉斎した。明治十一年五月四日存置許可があって今日に至っている。

浦田神社　旧村社

倉敷市福田町浦田一二九五

主祭神　伊弉諾尊
例祭　十月二十二日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　直会殿
摂末社　山神社　荒神社　天神社
氏子数　一七〇戸
境内地　一、三八六坪
崇敬者数　五〇〇人



境内地　五四三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　三三戸
宮司　大森立博
責任役員　間野鴻諏訪槌造　山砥正夫
由緒沿革　寛政年間に勧請し、生坂部落の鎮守神として今日に至っている。

一王子神社　旧村社

倉敷市二日市四四九

主祭神　五十猛命
例祭　十月九日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神門　神庫　神饌殿
摂末社　荒神社
氏子数　三五〇戸
宮司　小野一臣
責任役員　中村一太　藤原重雄
境内地　一、七三五坪
由緒沿革　慶長三年の御鎮座。旧時当社別当富村駕龍寺に伝わる縁記によると、今の都窪郡山手村福山にあった時に、兵乱にあい延慶の頃に都宇郡五日市村字山地に移り、後に現在の窪屋郡二日市村に遷座した。慶長三年窪屋郡二日市村字松之木を鎮座地とし、現在に至っている。（現在宮山岩崎二小字に渉る境内地）文久二年戸川伊豆守「御代替に付村々御免地書上」写に依ると、「氏神若一王子権現社村内字松々木と申す所に御座候。開発の砌より御無年貢地被仰付候。尤寛文五年烏山へ奉移、蹟土地別当加龍寺支配仕居申候。右を若一王子権現社烏山へ奉移、其節より宮山と唱申候。尤も社地六畝社外地壱段八畝共無年貢地に仰付候故、

況　高谷鴻平
宝物　花園天皇奉納の獅子頭一面　今川貞世公奉納高麗犬一対　臼女命の面一　猿田彦の面一　平賀元義公撰文の由緒碑
由緒沿革　延喜式内社の一の最も古い神社で、御鎮座の年代は崇神天皇の御代で、神階は永徳元年二月御円融天皇の御代に正四位上を賜わっている。明治十二年に県社に列した。徳川時代備前池田藩の支藩鴨方池田氏の祈願所であった。寛和元年花山天皇の御代、足高神社の神宮寺神遊山、神宮寺遍照院に三重の塔が建立せられた。乾元元年後三条天皇の御代に、奎高八幡大菩薩の勅願の御下賜があった。延慶元年三月花園天皇の御代に、勅書と獅子頭一対の御奉納があった。天暦元年二月十六日村上天皇の足高神社に奉幣御祈願の儀があった。翌年天皇は神殿を御造営せられ御有紋幕・勅書等を御奉納になった。足高山は昔には海中に浮かぶ一孤島であり、潮流の動きが激しく此の瀬戸を通る船は総て帆を下して山上の神に敬意を表し危難をのがれたため、帆下の宮とも称した。

天津神社　旧村社

倉敷市粒江一七七四

主祭神　天之御中主命
例祭　十月十二日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社　熊山神社
氏子数　二〇〇戸
宮司　佐藤泰三
責任役員　小野寛治
境内地　一、一九一坪
崇敬者数　二五〇人
由緒沿革　寛永十六年の創建と伝えられる。

宮　司　三宅和敬
責任役員　内田辰男　岡野仁郎
由緒沿革　当神社は元上浦の鎮座であって、真古門三台権現と称えた。弘長元年現在の地に奉遷し、若一王子権現という。古来から稲屋と称する特定の祭事がある。その直会も特殊の食品を用い、器も相当古物である。創建は養老三年三月一日と伝える。

大川神社　旧村社

倉敷市徳芳二七九

主祭神　瀬織津姫神
例　祭　十月十九日　**境内地**　二八四・五四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　五〇戸　**崇敬者数**　九〇人
宮　司　大森立博
責任役員　小池義夫　小池茂喜造　小池　勇
由緒沿革　寛政年間に勧請し、徳芳部落の鎮守神として今日に至っている。

大蔵神社　旧無格社

倉敷市五日市三九一

主祭神　日本武尊
例　祭　十一月五日　**境内地**　九八坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　七三戸
宮　司　広山泰三

主祭神　吉備津彦神
例　祭　十月二十一日　**境内地**　四五八・七二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫
摂末社　荒神社　須賀神社
氏子数　六三戸
宮　司　岡部　健
責任役員　原　正光　原　真寿治　白神晴二　横田勇一郎
由緒沿革　創建年代は不詳であるが、元和十年八月吉備郡真金村吉備津神社から勧請したものと伝えられている。

御崎神社　旧村社

倉敷市有城四五五

主祭神　大巳貴命　応神天皇
例　祭　十月三十日　**境内地**　七三五・八五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　浜宮神社　荒神社
氏子数　一二〇戸　**崇敬者数**　一五〇人
宮　司　佐藤泰三
由緒沿革　もと高坪の嶺に宮居を造り奉っていた。元

責任役員　楠戸清夫　黒瀬安夫　大原俊鹿
由緒沿革　創建年代不詳。昔から日本武命を奉斎し、この地方の守護神である。

御前神社　旧村社

倉敷市安江三六九

主祭神　吉備津彦神
例　祭　十月二十一日　**境内地**　四五八・七二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫
摂末社　荒神社　須賀神社
氏子数　六三戸
宮　司　岡部　健
責任役員　原　正光　原　真寿治　白神晴二　横田勇一郎
由緒沿革　創建年代は不詳であるが、元和十年八月吉備郡真金村吉備津神社から勧請したものと伝えられている。

御崎神社　旧村社

倉敷市有城四五五

主祭神　大巳貴命　応神天皇
例　祭　十月三十日　**境内地**　七三五・八五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　浜宮神社　荒神社
氏子数　一二〇戸　**崇敬者数**　一五〇人
宮　司　佐藤泰三
由緒沿革　もと高坪の嶺に宮居を造り奉っていた。元

暦の頃佐々木盛綱が藤戸の戦に祈願し奉っている。元暦六年九月廿五日夜、神告を受け、翌廿六日海を渡って平家を破った。その後神威により正治三年浜大明神の宮居である御崎に遷し奉った。昭和十九年十月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

御崎神社　旧村社

倉敷市大内町一〇六二

主祭神　吉備津彦命
例　祭　十月第三土・日曜日
境内地　二五七・六二坪
主要建物　本殿　釣殿　幣殿　拝殿
摂末社　大内神社　春日神社　木野山神社　荒神社
氏子数　一〇〇戸
宮　司　藤井敬次郎
責任役員　鳥越良一　鳥越正巳　永山増雄
由緒沿革　天正十一年九月十五日、吉備津神社の艮御崎宮を勧請。

御崎神社　旧村社

倉敷市生坂一四七九

主祭神　御崎大明神　吉備津彦命
例　祭　十月第三日曜日　**境内地**　六五五・七八坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　荒神社　道祖神社　龍王神社　貴船神社
氏子数　八戸

宮　司　室山武彦　**禰　宜**　小郷綾子
責任役員　尾崎猪馬太　古屋野勝治
由緒沿革　本神社は山手村御崎宮を勧請したものだが、年代は不詳。口碑では弘治元乙卯年、尾崎肥後守が勧請したという。慶長十七年社殿を改築。元和十年九月当村の尾崎勝三郎が社殿を建立し、生坂村の内青水地内一円を産土の地として神護を祈り奉った。文化六年八月八日氏子中より社殿一宇建替えたのが現在の御社殿である。

春日神社

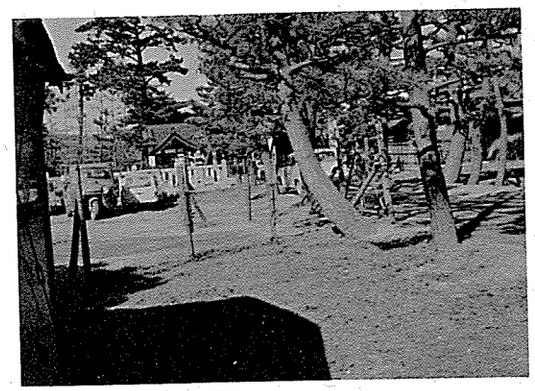
倉敷市川入六五三

主祭神　建御雷之男神　伊波比主命　天児屋根命　比売神
例　祭　十月第三土・日曜日
境内地　六二六・〇八㎡
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　地神　木野山宮　荒神　七社宮　荒木家守神
氏子数　五〇戸　**崇敬者数**　三八〇人
宮　司　藤井敬次郎
責任役員　高槻　稔　岡本竹夫　横山正策　荒木綾夫　白神輝夫　赤木春一　森末常二
由緒沿革　天正十一・十二年の間に、この地が開拓せられ、奈良から守護神として勧請した。

春日神社　旧村社

倉敷市浜町　一―四―一

主祭神　経津主神　建御雷之男神　天児屋根神　姫



大神
例　祭　十月第三土・日曜日
境内地　一、五一一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　社務所　春日会館　神庫
摂末社　牛神社　稲荷神社　天神社　桑木神社　地神社
氏子数　五〇〇戸
宮　司　藤井敬次郎
責任役員　守谷公平　藤井良助　石原惣作
宝　物　神木（けやき）
由緒沿革　第百八代御水尾天皇の元和年中、この地に奈良春日神社から勧請した。旧倉敷三大社の一である。

片島神社　旧無格社

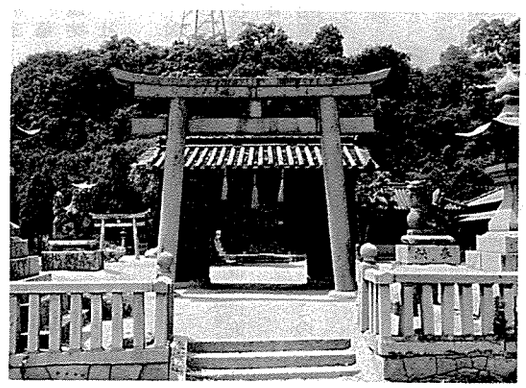
倉敷市片島六六〇―一

主祭神　素戔嗚尊
例　祭　十月最終日曜日　**境内地**　三一一・七八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　天満神社　地神社
氏子数　二一〇戸　**崇敬者数**　二、五三〇人
宮　司　阿部　章
責任役員　岡本　弘　赤沢信乃　小野　猛　渡辺篤平
由緒沿革　創建年代は不詳であるが、寛永六年以前に奉祀した神社である。古来、易産生荒神社と称し、安産の神として信仰する者が多い。神仏混同時代の余弊により、其管理は法厳寺に委托しており明治十一年存置願提出の期を逸し、其儘脱漏神社として奉祀してきたが、昭和十七年片島神社と改称の上、明細帳脱漏神社編入願を提出し昭和十八年神社明細帳に編入せられ現在に至っている。

亀島神社　旧村社

倉敷市連島町西之浦三八三七

主祭神　玉依姫命
例　祭　十月十七日・十八日
境内地　一、〇六五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神庫　社務所
摂末社　五帝神社
氏子数　四六〇戸　**崇敬者数**　一、八〇〇人
宮　司　岡部　一

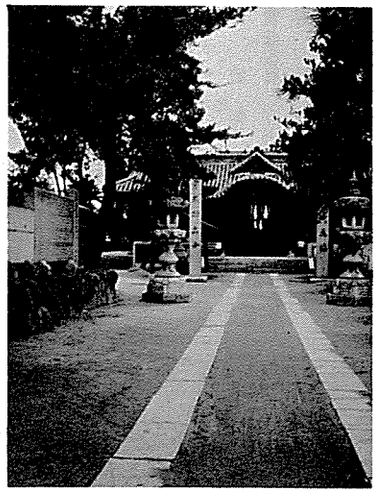


責任役員　松枝　喬　村上　央　矢部一男
由緒沿革　創建年代は不詳であるが、多分元禄年中かと思われる。往古は亀島山に鎮座し、新田開発のみぎり、俗に云う突止め祖神として奉祀した。元禄年中に現地に遷座し、亀島新田の氏神として崇敬している。

熊野神社　旧郷社

倉敷市西阿知町四五〇

主祭神　伊弉再尊　天照大神　瓊々杵尊
例　祭　十一月二日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神楽所
摂末社　恵美須神社　地神社

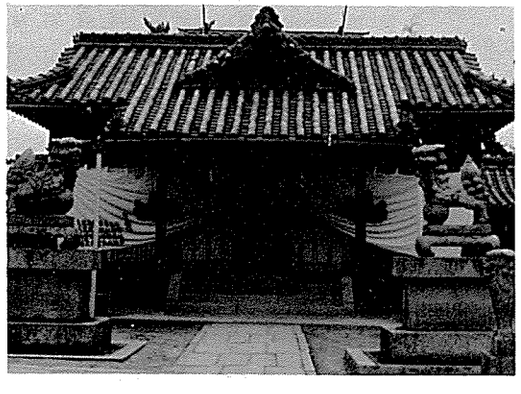


氏子数　七三〇戸　**崇敬者数**　五、三五〇人
宮　司　阿部　章
責任役員　三宅清一　大橋李二　三島柏志
由緒沿革　当神社は後三条天皇勅願の神社であって、馬場先楠の鳥居に勅額がある。文庫に其事を記す書類を収めてあったが、天正年間火災で鳥居は焼失し文庫も焼失した。その節勅額も焼失したと伝えられている。寛文九年本神社再建の節、旧藩池田家から材木一切普請中扶持方米十五石を寄付せられた。旧号は十二社権現である。明治二年改号し村社に、明治十五年郷社に列せられた。昭和三十五年一月本殿が炎上し、昭和三十七年五月再建した。

熊野神社　旧村社

倉敷市中庄一五二一

主祭神　伊邪那美大神　速玉之男神　事解之男神
例　祭　五月十四日・十月十九日
境内地　三三八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　荒神社　元神社　保食神社
氏子数　四〇〇戸　**崇敬者数**　七〇〇人
宮　司　大森立博　**禰　宜**　大森武年
責任役員　角原初吉　平岡　毅　平松峰夫



由緒沿革　寛政年間に勧請してより中庄部落の鎮守神として今日に至っている。

熊野神社　旧村社

倉敷市福島四〇一

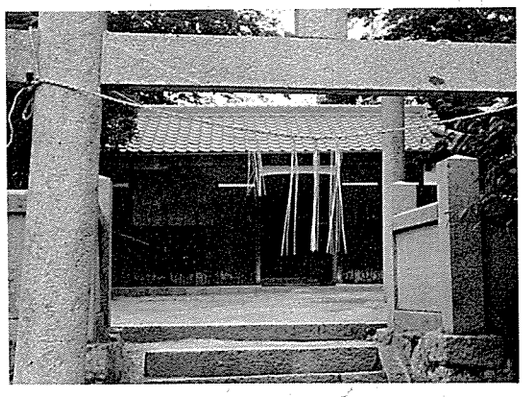
主祭神　天照大神　外十三柱

例　祭　五月第二土曜日・十月第二土曜日
境内地　一、一〇四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　廻廊　神庫　神門　社務所
摂末社　大国魂神社
氏子数　二〇〇戸　**崇敬者数**　五〇〇人
宮　司　藤井敬次郎　**禰　宜**　青木ハル子
責任役員　貝原喜代次　大熊孝七　井上儀一
由緒沿革　本神社は福島・大島・平田の氏神として、正親町天皇の天正六年九月に和歌山県新宮市熊野坐神社からの勧請鎮座と伝えられる。十二社権現ともいう。国土安全・開拓・農業・殖産・興業・厄除・結婚・安産の守護神として、崇敬者の多い神社である。

荒神社　旧村社

倉敷市黒石六九四

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月十三日　**境内地**　一六七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　釣殿
摂末社　菅原神社　清田八幡宮　浦田神社
氏子数　六〇戸
宮　司　三宅和敬
責任役員　味野峯男　味野亀夫
由緒沿革　当神社は応永五年、地方民が小祠を建て、崇敬していたのを、氏神として祭り、次第に社殿を整備した。正徳四年・文化十年に改築した。



荒神社　旧無格社

倉敷市帯高六七七

主祭神　火之迦具土神
例　祭　十月二十七日　**境内地**　二六九・五五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　素盞嗚神社　稲荷神社　和霊神社
氏子数　一五戸
宮　司　広山泰三
責任役員　古家野謙一　真鍋傅夫　畑野桂一
由緒沿革　当神社は寛文二年の創建と伝えられる。当地方　開墾の　無事祈願のため奉斎せられ、守護神として尊崇せられている。

三社神社　旧村社

倉敷市八王寺町五二

主祭神　天照皇大神　素盞嗚尊　天忍穂耳命　天津日子根命　活津日子根命　熊野久須毘命　多紀理比売命　市寸嶋比売命　多岐都比売命
例　祭　十月第三土・日曜日
境内地　四八一坪
主要建物　本殿　拝殿　神庫
摂末社　素盞嗚神社
氏子数　六〇戸　**崇敬者数**　一、〇〇〇人
宮　司　藤井敬次郎
責任役員　杉原秀治　杉原孫四郎
由緒沿革　文久年間の創建。もと五社権現三社宮と呼んでいたが、明治四年三社宮と改称し、昭和十九年三社神社と改称した。文久年間に領主長谷川長三郎の崇敬をうけ代願社となっていた。

山王春日神社　旧村社

倉敷市日吉町三七五

主祭神　建御雷之男神　経津主神　天児屋根神　姫大神　大山咋命
例　祭　十月第三土・日曜日
境内地　三一七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫
摂末社　天神社　荒神社　稲荷神社　粟島神社　木野山神社　若宮神社　厳島神社　地神社
氏子数　一一〇戸

宮　司　藤井敬次郎
責任役員　白神菊次　森屋寛一　白神襄一
由緒沿革　天正十一年、春日大社から勧請した。

新熊野神社　旧無格社

倉敷市沖七〇

主祭神　天忍穂耳命
例　祭　五月第二日曜日　境内地　一一〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　六五戸　崇敬者数　一、三〇〇人
宮　司　井上亮二
責任役員　関口　寛　山野　滉　小野太志
由緒沿革　大水災害のため、関係資料がすべて不明である。

水門神社　旧村社

倉敷市生坂一四五一

主祭神　瀬織津姫命
例　祭　十月第三土・日曜日
境内地　九二一・八七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神門　渡殿　神饌所　社務所　廻廊　雑庫
摂末社　荒神社　稲荷神社　金刀比羅神社　龍王神社　牛神社　地神社
氏子数　二一〇戸
宮　司　室山武彦　禰　宜　小郷綾子
責任役員　馬場直治　黒瀬芳郎
由緒沿革　本神社は初め大川大明神と称し、昔蒼海であった頃、阿知の里の守護神として中庄村との間、烏帽子島という小島に鎮座せられていた。後に現在地に奉遷した。永禄三年炎上し記録等が焼失した。翌四年再建。元禄十二年九月更めて再建。現在の建物である。元弘の頃五町二反歩の神領があった。延宝年中備前藩主から米一石五斗を享けている。明治初年村社に列せられ、昭和七年神饌幣帛料共進神社に指定せられた。

菅生神社　旧村社

倉敷市祐安一九九三

主祭神　高皇産霊神
例　祭　十月二十一日・二十二日
境内地　二、〇八〇・八六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　四一戸　崇敬者数　一〇人
宮　司　井上敏象
責任役員　野上作一　守屋　鴻
由緒沿革　創建年代は不詳。三和郷小屋に鎮座。三和郷の総鎮守として崇敬されていた。生坂村の内西坂の天神ともいう。備中国延喜式内社十八社の一社である。窪屋郡三社の一社である。元慶二年二月備中国従五位下、菅生神社に従五位上を授くとある。

菅生天津神社　旧村社

倉敷市西坂六二九

主祭神　天津神
例　祭　十月第三土・日曜日
境内地　四五五・四九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社　稲荷神社　地神社
氏子数　三六戸
宮　司　室山武彦
責任役員　剣持武吉郎　石原和則
由緒沿革　創建年代・由緒等は不詳である。

素盞嗚神社　旧村社

倉敷市藤戸町藤戸七六三

主祭神　素盞嗚尊　倉稲魂命　大名持命
例　祭　十月十七日　境内地　一、八八六・八二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社　龍王神社
氏子数　三五〇戸　崇敬者数　二、〇〇〇人
宮　司　佐藤恭三
責任役員　金本光夫
由緒沿革　宇多天皇の仁和四年の創建。旧号は行疫神社、領高二石一斗である。大正四年九月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

素盞嗚神社　旧村社

倉敷市浅原一五七四

主祭神　須佐之男命
例　祭　十月二十三日・二十四日
境内地　一、六四二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　社務所
摂末社　稲田姫社　若宮社　荒神社　御崎神社　祈雨神社　稲荷神社　木野山神社
氏子数　九〇戸
宮　司　室山武彦
責任役員　室山　確　宇野兼一
宝　物　聖観音菩薩（市指定文化財）
由緒沿革　本神社は第五十六代清和天皇の御宇、疫病がはやり貞観年中に現在地に鎮座せられた。その後源範頼が平氏討伐のため、当地の浅原峠に陣したとき、戦勝を祈願し勝利を得た。後鳥羽帝の御宇元暦元年に源頼朝が当神社を再建し、神護を謝したと伝えている。今なお壱間四面の御内殿（黄金塗）が残っている。牛頭天王宮とも称している。

素盞嗚神社　旧無格社

倉敷市帯高

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月六日　境内地　七四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫
摂末社　荒神社
氏子数　一五五人　崇敬者数　一二〇〇人
責任役員　三宅源次郎　高取財一　藤原忠雄　槇尾鹿次　笹辺謙治　藤原元吉
由緒沿革　当神社は弘化三年京都八坂神社の御分霊を勧請し社号を祇園宮と称した。明治十五年神社明細帳書上の際八坂神社と改称した。明治二十九年五月本殿改築遷座祭を執行の時に、社名を素盞嗚神社と改称した。昭和十六年五月幣殿・拝殿を改築した。

住吉神社　旧村社

倉敷市黒崎一〇四二

主祭神　上筒男神　中筒男神　底筒男神
例　祭　五月・十月第三土曜日
境内地　三三八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　九〇戸　崇敬者数　一五〇人
宮　司　大森立博
責任役員　槇野三郎　槇野忠次　田原賢治
由緒沿革　寛政年間に勧請し、黒崎部落の鎮守神として今日に至っている。

総神社　旧村社

倉敷市水江八七六の一

主祭神　大巳貴命　少彦名命
例　祭　十月第四土・日曜日
境内地　三九八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　釣殿　社務所
摂末社　荒神社　稲荷神社　天満神社　地神社　素盞嗚神社　木野山神社　金刀比羅神社　護国神社
氏子数　二二〇戸　崇敬者数　二、〇〇〇人
宮　司　藤井敬次郎
責任役員　土倉慎太郎　安藤敏太　河村惣一　岡本文夫
由緒沿革　創建年代・由緒等は不詳である。大正十五年四月十三日都窪郡中洲村大字水江東山四一三番地から現在地に鎮座す。

田槌神社　旧村社

倉敷市粒江四〇〇

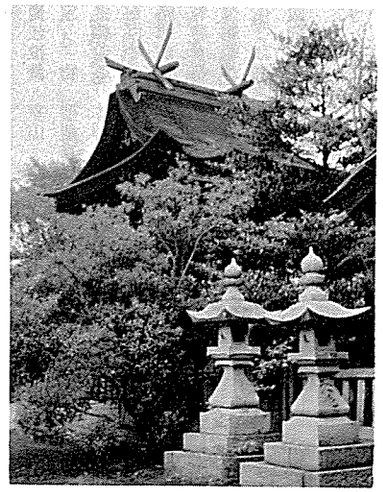
主祭神　大巳貴命　素盞嗚尊
例　祭　十月十二日　境内地　一七一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　秋葉神社
氏子数　七〇戸　崇敬者数　一〇〇人
宮　司　佐藤泰三
由綿沿革　源平合戦の際、佐々木盛綱が海を渡り平家を破り、此の地に剣を奉って礼祭を行い、衣を乾したところを地蔵という。現在の宮居の後の処である。この口碑から推して当時以前から宮居のあったことが判明する。

天神社　旧村社

倉敷市福田町福田一九七二

主祭神　菅原道真朝臣

例　祭　十月第四土・日曜日
境内地　二、二七三・三六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　参集所
摂末社　稲荷神社　等
氏子数　二〇〇戸　**崇敬者数**　一、〇〇〇人
宮　司　柚木恭彦
責任役員　田渕　清　岡部　毅

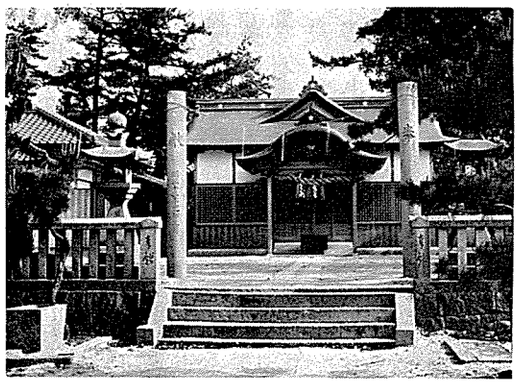


由緒沿革　当神社は創立年月不詳。唯古老の口碑に菅公筑紫に下向の砌、此処に滞在せられたので後に奉斎して、一村の氏神として尊崇したと云い伝えられている。

天神社　旧村社

倉敷市鳥羽一五〇

主祭神　菅公
例　祭　五月十五日・十月十九日



境内地　三〇〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　木野山神社　素盞嗚神社　稲荷神社
氏子数　七四戸　**崇敬者数**　一五〇人
宮　司　大森立博
責任役員　八木　進　山川四郎　林弁太郎　林　松夫
由緒沿革　寛政年間に勧請し、鳥羽部落の鎮守神として今日に至っている。

天満神社　旧村社

倉敷市西阿知町西原一一四〇

主祭神　菅原道真朝臣
例　祭　十一月一・二日　**境内地**　三六七・七一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神饌所　参集殿　絵馬殿
摂末社　秋葉神社　荒神社
氏子数　二三〇戸　**崇敬者数**　一五〇人
宮　司　鳥居正敏
責任役員　佐々木　覚　金谷威税秀　守屋忠男　佐々木槌夫
宝　物　御神体　絵馬五幅
由緒沿革　約三百年前西原の船頭が呼松の海で、木彫の神像を拾って帰ったところ、或夜霊夢に「その像は天神様であるぞ」とのお告げをうけ、わが屋に祀っていた。時折霊異が現われ、代官が「それを放棄せよ」と云ったところ、忽ちにして病気になり、霊験を畏れて祀ったという。明治五年に村社・学問の神として尊崇を集め、二十五年ごとに開帳記念祭を斎行する。

寅崎神社　旧村社

倉敷市連島町鶴新田六六四

主祭神　品陀和気命　帯中日子命　帯中津比売命
例　祭　十月二十二日・二十三日
境内地　七二〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神楽殿　社務所
摂末社　菅原神社　健雷神社　荒神社　厳島神社　稲荷神社　日御崎神社
氏子数　四〇〇戸　**崇敬者数**　二、〇〇〇人
宮　司　岡部　一
責任役員　大本確太　三宅弥十郎　阿部睦治
宝　物　神刀一振
由緒沿革　創建は文化元年十月二十三日である。鶴新



田開発の際、祖神として本町矢柄八幡神社の御分霊を奉祀した。八幡神社は寅の方角に当たるので、寅崎八幡宮と称したが、明治七年神社取調の際から寅崎神社と改称し、同三十二年村社に列格した。

八幡神社　旧村社

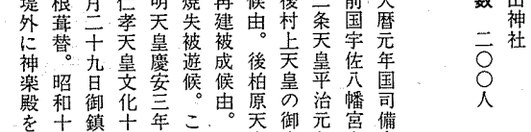
倉敷市酒津一一一五

主祭神　比売大神　品陀和気天皇　大帯比売命　三女神　足仲彦尊
例　祭　十月第四日曜日・中心の土曜日
境内地　七、一九五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神門　神楽殿
摂末社　荒神社　月読宮　新宮　東明神社　西御崎神社　石清水神社　水神社　木野山神社
氏子数　八四戸　**崇敬者数**　二〇〇人
宮　司　井上栄夫
責任役員　平山鶴市　野上壮博
由緒沿革　社伝によると村上天皇天暦元年国司備中守源綱実朝臣御宿願御座候に付、豊前国宇佐八幡宮を御勧請被成御宮殿御造営被成候由。二条天皇平治元年当国住人小野秀治神殿御造建の由。後村上天皇の御宇里人戮力同心して神社及所々修覆仕候由。後柏原天皇永正元年出雲国主尼子晴久御殿を御再建被成候由。後水尾天皇慶長十七年雷火のため社殿焼失被遊候。これにより仮殿に座す事三十八年。後光明天皇慶安三年氏子同心して御宮殿を新に再建仕候。仁孝天皇文化十四年御社殿再営仕候。昭和十二年十月二十九日御鎮座壱千年祭執行。昭和十二年御本殿屋根葺替。昭和十二年七月飛境内地倉敷市酒津字荒神社堤外に神楽殿を建立した。

八幡神社　旧無格社

倉敷市生坂一四五一

主祭神　応神天皇
例　祭　五月第二日曜日　**境内地**　九二一・八七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神門
社務所　廻廊　雑庫
摂末社　荒神社　稲荷神社　金刀比羅神社　龍王神社　牛神社　地神社　木野山神社　水門神社
氏子数　二七〇戸
宮　司　室山武彦　**禰　宜**　小郷綾子
責任役員　馬場直治　黒瀬芳郎



由緒沿革　本神社は承平元年山城国男山八幡宮を勧請し、生坂字木船に鎮座し、阿知の里の守護神として奉祭した。はじめ神領が多かったが、元弘の頃には漸減し五町二反残っていたという。正和年中に本社が焼失し、その際御神霊を現鎮座地へ移したという。永禄三年再び社殿が焼失、翌年再建。元禄十二年九月更めて再建している。明治初年無格社に列せられた。

八幡神社　旧村社

倉敷市西岡一九六二

主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后
例　祭　十月第三土・日曜日
境内地　一、五一五坪
主要建物　総社宮
氏子数　一五〇戸　**崇敬者数**　二、〇〇〇人
宮　司　藤井敬次郎
責任役員　中村　正　貝原利男　藤井修平
由緒沿革　和銅年間に祠官長山氏が石清水八幡宮からこの地に勧請したと云い伝えられている。

八幡神社　旧村社

倉敷市老松一丁目七―三

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月第三土・日曜日
境内地　三三二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　神門

摂末社　素盞嗚神社　稲荷神社
氏子数　七〇戸　**崇敬者数**　一、〇〇〇人
宮　司　藤井敬次郎
責任役員　岡本　稔　小野石太郎
由緒沿革　天正年間に宇佐八幡宮から勧請。領主池田家の崇敬をうけ、渋江八幡宮と称していたのを、明治四年八幡神社と改称した。「この里もかくこそあれとことはに立ち栄えゆく阿知の松が枝」と文政年間に従三位千種有功卿の書いた歌碑がある。往古この地を阿知の里と呼んでいた。

八幡神社　旧村社

倉敷市呼松町四八八

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月七日　**境内地**　四五三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　明神社　王子権現　木野山神社
氏子数　二〇〇戸
宮　司　三宅光信
責任役員　中田朝一　中田　豊　渡辺一市　石原一郎　石原笹一　大島重太郎
特殊神事　早奏祭
由緒沿革　嘉暦元年八月十五日の創建と伝えられ、毎年正月元旦払暁、氏子が多数参籠し、この故事を謡い古式行事を行い、その年の安全と氏子の繁栄を祈った。これを早奏と呼び当神社の特殊神事である。創建以来六百五十年となり旧福田地区に於いて最も古い神社といわれている。水島地区の発展に伴い八幡神社を尊崇する人達が漸増している。

八幡神社　旧村社

倉敷市連島町矢柄六一二九

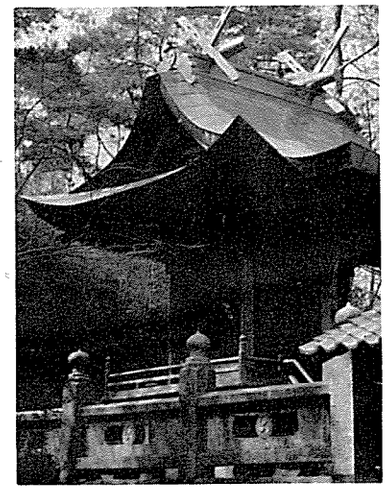


主祭神　品陀和気命　帯中日子命　帯中津日売命
例　祭　十月二十三日・二十四日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神庫
摂末社　恵美須神社　龍王神社　猿田彦神社　皇霊神社
氏子数　四五〇戸　**崇敬者数**　二、〇〇〇人
宮　司　岡部　一
責任役員　片山正伍　尾高広信　大熊陸夫
宝　物　持明院中将家胤卿奉納額、棟札二　那須与市宗高の矢の根、天箱蓋書付
由緒沿革　創建年代不詳。古社で連島一円の総鎮守である。往古から領主藩主対州侯又は成羽侯から神領・境内建物・神具等の寄進があった事は別当寺の古記録・棟札から確認せられる。本神社の称号を矢上り八幡宮という由来は、寿永二年源平屋島の戦に於いて那須与市宗高の矢が、社前の海辺に漂流して来たのを里人が拾い、八幡宮本殿に納めたからだという。当時別当寺であった宝島寺の寂厳和尚筆の棟札に記録がある。

八幡神社　旧村社

倉敷市三田六一五

主祭神　応神天皇
例　祭　十月二十一日・二十二日
境内地　三五六・七八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　荒神社　牛神社　春日神社　木野山神社
氏子数　九〇戸　**崇敬者数**　三〇〇人
宮　司　井上敏象
責任役員　山上今太郎　野上　貢　守屋惣太郎
由緒沿革　本神社の創建年代は不詳であるが、寛永年間倉敷市松島に鎮座の両児神社の御祭神中から、現在相殿として鎮座の春日神社の御両神を勧請したものであって、社号を初め八幡宮と称し、明治初年八幡神社と改称した。棟札に次のものがある。
一、正保三年吉日奉再興大明神御宝殿本願山川勘右衛門
一、元禄四年八月下旬奉建立両神宮の拝殿一宇
一、文化二年八月二十八日八幡宮、春日大明神正遷宮



八幡神社　旧無格社

倉敷市鳥羽一三六六

主祭神　応神天皇
例　祭　十月二十日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌殿　器具室　炊事棟
氏子数　五一戸　**崇敬者数**　九〇人
宮　司　太田忠二　**禰　宜**　太田全史
責任役員　小郷隼人　小郷一郎　小郷作訓男　小郷寿美男
由緒沿革　本神社は至徳元年九月十五日の創建である。金山峰に吉備の里深井郷松島五座八幡宮から御分霊を奉斎し、当郷民の氏神として祭祀した。天保四年神祇官領吉田殿から、正八幡宮の称号を賜わっている。木神像は難波から隼島を経て着御になった。安永二年御本殿を再建。寛政四年・明治十九年・昭和十二年に葺替。昭和五十二年五月銅板を葺き現在に至っている。北向の八幡社といって地方一般の崇敬が厚く参詣者が多い。



濱田神社　旧村社

倉敷市福田町古新田二

主祭神　倉稲魂命　少童命　大己貴命
例　祭　十月第四土・日曜日
境内地　五三三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所
摂末社　稲荷神社　秋葉神社　祇園神社
氏子数　三〇〇戸　**崇敬者数**　一、二〇〇人
宮　司　柚木恭彦
責任役員　三宅住夫　三宅克巳
由緒沿革　当神社は此地を開墾するに当り、氏神として奉斎せられた。寛延元戊辰年閏十月の勧請である。

姫太神社　旧無格社

倉敷市祐安一九九三

主祭神　天照大神
例　祭　十月二十一日・二十二日
境内地　二、〇八〇・八六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　六〇戸　**崇敬者数**　一〇〇人
宮　司　井上敏象
責任役員　野上作一　守屋　鴻
由緒沿革　創建年代不詳。祐安村の鎮守神としてお祭りしたものと思われる。約二百年前菅生神社造営の時に、相殿に斎祀したものらしい。

廣田神社　旧村社

倉敷市藤戸町天城一八五九

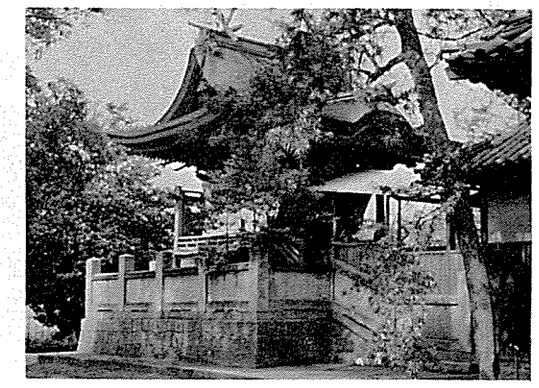
主祭神　天照皇大神　大国主命

例　祭　十月十七日　**境内地**　一、八五三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　池田神社　大斎神社　恵美須神社　日向神社　天王神社
氏子数　三八〇戸　**崇敬者数**　一、〇〇〇人
宮　司　佐藤泰三　**禰　宜**　佐藤佳信
責任役員　星島鎮太
由緒沿革　瀬戸沿岸の漁師の崇拝の的である。昔から脳病に特異な御利益があり、当時最も多く食していたエイという魚を食することを断ち祈願したという事から今でも脳病平癒の祈願が多く、エイの額や紙に画いたものが奉納され続けている。また池田公の墓地につらなり、池田公が墓参に際して祈願し、かつ休息したところである。

福田神社　旧村社

倉敷市北畝三丁目一四―五三

主祭神　天照大神　倉稲魂命　大国主命
例　祭　十月第三土・日曜日
境内地　一、〇七四・三一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　参集所
摂末社　四社
氏子数　一、〇〇〇戸　**崇敬者数**　五、〇〇〇人
宮　司　柚木恭彦　**禰　宜**　松浦謙二
責任役員　有元市二　松浦　昇
由緒沿革　当神社は福田新田旧五箇村（南畝・中畝・北畝・松江・東塚）の地が、嘉永五年から開墾せられ其区域の産土神として、文久二年社殿を造営し明治四年創祀したものである。



笹取神社　旧無格社

倉敷市連島町西之浦三一八四

主祭神　大綿津見命　豊玉姫命　玉依姫命
例　祭　旧九月十六日　**境内地**　七、六七二坪
主要建物　本殿　幣殿　祝詞殿　拝殿　絵馬殿　廻廊　社務所　神庫　集会場
摂末社　金刀比羅神社　大山祇神社　和霊神社
氏子数　五〇〇戸　**崇敬者数**　三、〇〇〇人
宮　司　岡部　健
責任役員　早瀬紀典　中山林之助　三宅啓介
特殊神事　寒入祭
由緒沿革　創建年代は不詳であるが、江戸時代の宝暦年間には笹取大権現と呼ばれ、当地七浦の総鎮守として信仰を集め、殊に成羽藩主山崎主税之助、並に地方権勢家の崇敬していた神社である。古来、七拾五社の御眷族（神使）の活躍により、奇蹟的な霊験が著しく、水火盗難除の神として尊信する人が遠近に及んでいる。明治五年神仏分離により純然たる神社になった。



厄神社　旧村社

倉敷市連島町西之浦三八一五

主祭神　神速須佐之男命

例　祭　十月十日・十七日
境内地　六〇九坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿　神庫　社務所
摂末社　御崎神社　佐田神社（住吉神社）
氏子数　七〇〇戸　**崇敬者数**　三、〇〇〇人
宮　司　岡部　一
責任役員　竹内敏夫　三宅喜太雄　大倉平三郎



由緒沿革　創建は清和天皇の貞観九年八月である。備後国鞆之津祇園宮から小林庄都羅之郷宮之壇に勧請し、薬神社と称しその後土地が開発せられ、住民が南面に移住するようになると、永和三年小船の地に移し疫神宮と称し、応永二十三年小川の地に、大永八年古宮の地に奉遷し、重ねて宝永六年九月七日当山に遷し奉り、厄神宮と称し奉った。明治七年神仏引分により厄神社と改称した。昭和四十六年春遷座二五〇年祭を執行った。

六神社　旧村社

倉敷市西岡一八二三

主祭神　伊弉諾尊　外五柱
例　祭　十月第三土・日曜日
境内地　八五六・二三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社
氏子数　七八戸　**崇敬者数**　二〇〇人
宮　司　室山武彦
責任役員　山内巳酉　平松　昇
由緒沿革　創建年代・由緒等は不詳である。

神社

神社は日本の神祇を奉斎し、祭祀を奉行し、公衆の参拝する場所で、日本民族の伝統的精神を象徴し、具現しているところである。神社の起源は古く、神奈備・御室に神霊を祀り、或は神籬に招じ、磐座・磐境・磐城等を築いて祭祀を執行っていたが、七・八世紀頃から社殿が建造せられるようになったと推察出来る。神社には氏神神社・産土神社・鎮守神社・崇敬神社などと呼称されるが区別はつけ難く、互に相関連し一体となっている。

神社本庁が認めている神社は、本殿・拝殿等の公衆礼拝のための施設を有し、神社神道に従って、祭祀を行い、神徳をひろめ、氏子・崇敬者その他の人々を教化育成することを目的とし、神職・氏子・崇敬者等で組織されている宗教団体で、本庁統理の承認を受け、本庁の神社明細帳に登録してある神社であること。

祭神

神社神道は八百万神を祭祀するので、各種各様の神を祭っている。大別すると次のようになる。

一、万物創造に関する神・二、霊能上の神・三、人の霊を祭った神・四、職業に関する神・五、天象に関する神・六、地象に関する神・七、動植物に関する神・八、食物に関する神。

神木

神社の境内にある特定の木を神木とし、一社一木としているが、樹木を総称する場合もある。神木は霊木として神社に由縁のある樹木をいい、注連縄を張り、柵を設けて畏敬尊崇し、他の樹木と区別している。太宰府の梅、香椎の綾杉、稲荷の験の杉等が有名である。春日神社は榊を神木としている。

狛犬

狛犬は高麗犬とも書き、獅子狛犬・獅子形ともいう。神社には石材が多い。神殿守護と装飾的意味とがあるという。神社仏閣の前庭に安置するようになったのは、中国の習慣が伝来したと考えらる。高麗犬とかく点から大陸から伝ったもので、狛犬は狛国の貊が狛に転じたというのが定説である。形状は獅子で唐獅子であり、一方が犬であるともいう。そのために獅子狛犬ともいう。現在神前に安置してある狛犬は、額に一角のあるもの、一方のみに一角のあるもの、角のないものがあり、口を開いているもの、一方のみ口を開いているもの、口を閉じているもの、玉や鞠を咥えているものがある。口の開閉を阿吽・陰陽の象徴ともいうが、これは仏説らしい。

鎮守の森

鎮守神の鎮座ましまします神社を鎮守の森という。森は樹木が繁茂し生気が旺盛で、森然・森厳とした観があり、神は森の最も自然で、おごそかでかめしい、人の入らないところに坐すと考えられていた。故にこのことを、ミモロ（ミムロ・御室・三諸）と呼びカンナビ（神奈備）と言った。杜は木と社との合字で、神の坐すモリの意である。現在でも神社をモリと呼んでいる地方がある。

神社の境内

神社の所在する敷地を境内というが、次の如きを要件としている。一、本殿、拝殿、社務所、その他宗教活動に必要な建物、又は工作物がある一定の土地。二、参道として用いられている土地。四、神社の尊厳または風致を保存するための土地。五、歴史、古書等により縁故のある土地。大体上記のようである。適当な樹木があり、風致林として、神苑としての観念より、神祇を奉斎するに適応している土地に神社を創建して神社の境内地としている。

直会

祭典が終って、神饌の撤下物で行う饗膳を直会（なおらい、のうらい）という。饗膳は饗礼とも饗宴ともいう。宮中の公式の祝宴を「とよのあかり」と言っている。これは神の恩頼（みたまのふゆ）を食物を通して拝戴する意味であると思われている。神社に参拝した時に、土器で神酒を頂戴し、洗米・鯣・切昆布等の撤下物を賜るのは、この意味の残りを戴く共食の精神が強くあらわれている。また直会は解斎饗膳の意味がある。神事には散斎致斎等の斎戒が行われるので、その「斎をゆるべて、平常に復する意」であると本居宣長は述べている。古い時代には酒宴をすることが祭の大切な部分で、神様の召上りものにお相伴をし、神人合一の境地に達する儀式で、罪や穢を去った人が、神の「みたま」を受けて新しく生まれかわる意味をもった最も神聖な行事であったと思われる。

津山支部（一〇二社）

青木神社　津山市大谷一三七……五〇
青柳神社　苫田郡加茂町大字青柳一五一九……五〇
朝日神社　津山市新田二六二……五〇
綾部神社　〃　綾部一〇八六……五〇
飯綱神社　〃　高野押入一〇〇九……五一
斎神社　〃　沼四三〇……五一
泉神社　苫田郡奥津町女原一四―一……五一
泉嵜神社　〃　奥津町養野一一〇七……五一
稲荷神社　津山市東横山六二三……五一
稲荷神社　鏡野町布原四三五……五二
瓜生神社　津山市瓜生原一七〇七……五二
上部神社　〃　草加部一二四二……五二
大崎神社　〃　中原一〇五六……五二
大崎神社　〃　金井三八三・三八四……五三
大佐々神社　〃　大篠二一三七……五三
大隅神社　〃　上之町七八……五三
大隅神社　〃　林田七五五……五三
大田神社　〃　大田六六三……五四
大野神社　苫田郡鏡野町土居一四八六……五四
大美禰神社　〃　鏡野町香々美北九四―二・九五―一……五四
小田草神社　〃　鏡野町馬場五九七……五四
奥津神社　〃　奥津町長藤一九七……五五
押渕神社　津山市押渕一六四……五五
香々美北神社　苫田郡鏡野町真経一〇二……五六
加茂神社　〃　加茂町公郷一三九九……五六
勝部神社　津山市勝部一一三三……五六
金古神社　〃　国分寺四八六……五七
金屋神社　〃　金屋一二八……五七
河井神社　苫田郡加茂町大字河井六五三……五七
河邊神社　津山市河辺一五二六……五七
上斎原神社　苫田郡上斎原村大字木路西六六六―四……五八
神田神社　〃　富村大字大七六六……五八
久田神社　〃　奥津町久田四三……五八
熊野神社　津山市荒神山一二四……五八
倉見神社　苫田郡加茂町大字倉見四九一……五九
荒神社　津山市小田中新屋敷一四三八……五九
荒神社　〃　大崎一三〇……五九
荒神社　〃　近長二九八……六〇
金刀比羅神社　苫田郡加茂町大字中原八九九……六〇
高良神社　津山市押入上一一一……六〇
作楽神社　〃　神戸四三三……六〇
佐良神社　〃　一方六三六―一……六一
白加美神社　〃　小田中二五四……六一
千代稲荷神社　〃　山下八二……六一
總社　〃　総社四二七……六一
宗道神社　〃　鍛冶町七……六二

田　神　社　津山市下田邑一一八九ー一……六二
多　禰　神　社　〃　種七一七……六三
高　倉　神　社　〃　高倉下高倉西七六二……六三
高　瀬　神　社　〃　日上四三五……六三
高　田　神　社　〃　上横野七九ー一……六三
高　富　神　社　〃　小桁四四二……六三
高　野　神　社　〃　二宮六〇一……六四
高　野　神　社　〃　高野本郷一〇一二……六四
高　山　神　社　苫田郡鏡野町高山七二一……六四
千　磐　神　社　〃　加茂町大字知和三四三……六四
津　川　神　社　津山市三浦一九〇……六五
津　川　神　社　苫田郡加茂町大字下津川五七三……六五
鶴山八幡宮　津山市山北一五九……六五
天　満　神　社　〃　河辺三四四……六六
戸　島　神　社　〃　戸島二三二……六六
徳　守　神　社　〃　宮脇町五……六六
栃　畑　神　社　〃　籾保七五五……六七
中　谷　神　社　苫田郡鏡野町中谷四四〇五……六七
中　山　神　社　津山市一宮六九五……六七
軒　戸　神　社　苫田郡加茂町大字塔中六五……六七
羽　出　神　社　〃　奥津町羽出六八二……六八
白　山　神　社　津山市金井一一一七……六八
八　幡　神　社　〃　院庄三八八……六八
八　幡　神　社　〃　福井二〇八八……六八
八　幡　神　社　津山市河面三二一……六八
八　幡　神　社　〃　田熊二三八四……六九
八　幡　神　社　〃　志戸部(八幡山)五九四……六九
八　幡　神　社　苫田郡鏡野町貞永寺一一五〇……六九
八　幡　神　社　津山市川崎一四三〇……六九
八　幡　神　社　〃　日上八三一……六九
八　幡　神　社　苫田郡鏡野町真加部一三〇二……七〇
八　幡　神　社　〃　阿波村(字位登山)一四七九……七〇
原　神　社　〃　鏡野町原五七三……七〇
檜　山　神　社　〃　鏡野町高山九四八……七〇
日　吉　神　社　津山市川崎一〇二八……七〇
布　勢　神　社　苫田郡富村大字富西谷二二〇……七一
古　川　神　社　〃　鏡野町古川一三一七……七一
堀　坂　神　社　津山市堀坂一〇四六……七一
三　鏡　神　社　苫田郡鏡野町越畑七七五……七一
三　橋　神　社　津山市小姓町六三……七二
三　室　神　社　苫田郡加茂町大字青柳二七一……七二
珍　敷　神　社　〃　鏡野町下原三三六……七二
物　見　神　社　〃　加茂町大字物見二一四……七二
森　神　社　津山市横山三二一……七三
森　原　神　社　苫田郡鏡野町薪森原五四七……七三
八　出　神　社　津山市八出三五七……七三
八　頭　神　社　〃　桶屋町一……七三
八　坂　神　社　〃　近長五五〇……七四
山　西　神　社　津山市高野山西一六〇九……七四
陽　地　神　社　〃　高野野村二八……七四
吉　田　神　社　〃　神戸二九二……七四
吉　田　神　社　〃　西吉田六四八……七五
芳　野　神　社　苫田郡鏡野町大字宗枝四六五……七五
吉　原　神　社　〃　鏡野町吉原三八八……七五
吉　見　神　社　津山市吉見五〇九……七五
若　王　神　社　〃　名坂二一四一……七六

氏神

氏神は氏族の神で、氏という血縁共同体が奉斎している神である。しかし時が経過するにつれて地域共同体の意味が重くなり、地域共同体の共同祭祀の神が奉斎せられ、この神が氏神となり、同一地域に住む人々を氏子とよび、地域的な意味をもつに至った。この意味から氏神は産土神と殆ど同義となり、鎮守神とも共通した性格をもつようになった。氏神社は全国至るところの町村字毎に創建せられ、全国民はいずれかの神社の氏子である。この点から神社崇敬の基礎は氏神からといってよい。歴史の古さ、伝統の長さ、普及の広さと徹底性で、神社崇敬の重要な形体である。氏神の由来を大別すると、祖先神型氏神・地縁神型氏神・職業神型氏神・崇敬神型氏神、及び混合神型氏神とがある。現代では地縁神型氏神が多いと思われる。このように血族関係が氏神と氏子となり、土地関係が産土神と産子となり、鎮守の神となった。この氏子と産子とは氏子の名で統一され、神社の一定の地域に住む人を氏子と云った。このように氏神は産土神であり鎮守神であるとの思想が伝統となり今日に至りました。上記の点から如何なる神事でも第一番に氏神様に祈願し、次に自分の信仰する神仏に祈願するのが正しい順序である。

神社建造物

神社の建築には神霊を奉斎する本殿と、祭祀のための拝殿・幣殿・神饌殿・神楽殿等を主としている。参拝者のための拝殿・参集殿・神職のための斎館・社務所等その他がある。奈良県大神神社・崎玉県金鑽神社の如く本殿のない神社、伊勢皇大神宮の如く拝殿のない神社もあるが、これらは、その神社成立の由来を物語る上で重視すべきことである。建物の様式は自然環境に調和して日本古来の伝統的相を表現している。形式は上古の建築の様相をそのまゝに、倉庫型と住居型とを源流にした直線的簡素なものと、大陸文化の典線的華麗典雅なものとがある。倉庫型からは神明造・流造・八幡造と遷り、住宅型からは大社造・大鳥造・住吉造・春日造と変り、やがて日吉造・祇園造・香椎造・吉備津造・権現造等の形式がみられるようになった。

青木神社　旧村社

津山市大谷一三七

主祭神　伊邪那岐命　伊邪那美命
例祭　十月十日　**境内地**　七九二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　五五〇戸
宮司　井口林士
責任役員　溝口恵夫　井上勇　柴田和夫
由緒沿革　創建年月等不詳。元扇宮と称し、大谷八伏の地にあり、社領八町歩を有し、地方における有力な神社である。天文年中尼子晴久の乱、永禄年中凶徒の乱により、古證文宝物等悉消失した。慶長八年森正忠公入封築城後塞神の処より大谷八伏に向けて大砲の訓練を行い支障があるので、森長継が寛永十二乙亥年現在地に移転し、青木神社と改称した。明治五年村社に列した。

青柳神社　旧村社

苫田郡加茂町大字青柳一五一九

主祭神　金山毘古命　天照大神荒魂
例祭　十月十三日　**境内地**　一〇一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　参籠殿
摂末社　稲荷神社
氏子数　七五戸　**崇敬者数**　二、〇〇〇人
宮司　湯浅勝興
責任役員　坂手静男　水島矢　水島喜好　常藤義徳

朝日神社　旧村社

津山市新田二六二

主祭神　素盞嗚尊　相殿　武仁親王
例祭　十月十日
境内地　一、〇七六・五七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　御先神社　注連社　光霊神社　稲荷社
氏子数　六七戸　**崇敬者数**　三三五人
宮司　横林武彦
責任役員　宗平芳江　内田好一　神崎四郎　杉本清一
由緒沿革　本神社は第二十六代継体天皇の御代に、当時神祇伯が素盞嗚尊は国土鎮護の神であるから、これを日本国内の川の西々、または山の尾前に勧請させられた。美作国にも旭川の西の木山宮、吉井川の西の上山宮、吉野川の西の高比野宮、広戸川の西の新田宮等がその時の鎮祀である。もと朝日大明神・新田宮・天王宮・牛頭天王社と称したが、明治四年朝日神社と改称した。昭和十六年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

綾部神社　旧郷社

津山市綾部一〇八六

主祭神　誉田別尊　倉稲魂命　大己貴命　素盞嗚尊　稚日女命　大宮能売命　大国主命　保食命　鵜茅葺不合命
例祭　十月十九日
境内地　一、六〇〇・一五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫　社務所　神楽殿
氏子数　一九〇戸
宮司　易淳臣
責任役員　内田英夫　内田綾夫　岡田明
由緒沿革　本神社はもと字皇子に鎮座の皇子社と字宮の各鎮座の国司神社とを、欽明天皇三十年に古事記山に創建し合祀して、社号を国司神社と称した。清和天皇貞観二年九月に誉田別尊を勧請し、社号を八幡宮と称し、綾部郷の総社として尊崇した。当地は応神天皇の御代に綾織の職工を置かれた所で、綾織の業が盛大であったので、人民は天皇の御徳を尊んで奉斎した。寛文十二年九月に美作国主森長継公が崇敬し、本殿を再建した。明治六年二月に村社に列し、綾部神社と改称した。明治四十一年十一月に稲荷神社・先山神社・日尾神社・杉神社を合祀した。

飯綱神社　旧村社

津山市高野押入一〇〇九

主祭神　倉稲魂命
例祭　十月二十日　**境内地**　三〇九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　尾鼻神社
氏子数　一〇〇戸
宮司　片山舎泰
責任役員　立石虎一　早瀬康二　丸王照一郎
由緒沿革　創建年代・由緒等不詳。

斎神社　旧村社

津山市沼四三〇

主祭神　稚日雲尊　天宇受売命　倭姫命
例祭　十月十五日　**境内地**　五四四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社　十二社神社（御先神社）
氏子数　一五〇戸
宮司　松岡重弘
責任役員　清水一郎　北原富夫
特殊神事　湯立御柱祭
由緒沿革　崇神天皇の御代に勧請したという。本神社をイツキと称するのは、織部、勝部、祝部に縁の深い弓月の君、即ち融通王をその部族が奉祀したものであるからともいう。国司が総社を建立して以来、総社に神幸せられて奉幣に預かったという。森、松平侯の別邸が指呼の間にあって、崇敬も厚く、祭祀日に奉納があった。地名として現在残っている。

泉神社　旧村社

苫田郡奥津町女原一四の一

主祭神　五十猛命　大国主命　須佐之男命　応神天皇外九柱
例祭　十月五日　**境内地**　四六六坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿　籠殿　社務所　神庫
摂末社　稲荷神社　貴船神社
氏子数　一五〇戸　**崇敬者数**　二〇〇人
宮司　大山行雄
責任役員　武本章司　友保次郎　岡本文友
宝物　刀鋏一振
由緒沿革　創建年月・由緒等不詳。伊太保祇神社と称したが、昭和八年現社名に改称した。明治四十二年九月十三日旧泉村地内の村社無格社を合祀した。

泉嵜神社　旧郷社

苫田郡奥津町養野一一〇七

主祭神　大山祇命　外二十柱
例祭　十月八日　**境内地**　一三、五〇四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　籠殿　社務所
摂末社　稲荷神社
氏子数　五四戸
宮司　岡本正勅
責任役員　友保里司　西村保　森安太郎　森田定幸

稲荷神社　旧無格社

津山市東横山六二三

主祭神　倉稲魂神
例祭　十月二十八日　**境内地**　九一四坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　三〇〇戸
氏子数　井口定彦
宮司　石本猛　松本喜三郎　多治比寅男
責任役員



由緒沿革　本神社はもとの上ノ宮・中ノ宮・下ノ宮の三社を明治五年十一月に合祀して現在地に鎮座した。弘仁十四年藤原雄友の草創也という棟札がある。寛永二年津山城主森美作守が米二石を寄進している。作陽誌には射水山口権現と号し、邑の氏神、久田十二ケ村の総鎮守とあり、地方の名大社で、明治六年郷社に列せられた。

由緒沿革　創建年代、由緒は不明であるが、口伝によると、戦国時代此の地の領主荒尾志摩守が京都の伏見から御分霊を勧請したと伝えられる。それ故今に此の谷を荒尾谷と呼んでいる。

稲荷神社　旧村社

鏡野町布原四三五

主祭神　倉稲魂命
例祭　十月十七日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　地主神
氏子数　八〇戸
宮司　平島勝彦
責任役員　石田三郎　赤木太郎　小原孝幸
由緒沿革　創建は天仁元年で、明治十二年二月二日に村社になった。作陽誌に「稲荷神社在布原村中上手山此村氏社祭祀九月十六日境内東西十六間南北十四間又同村六ヶ畝有狐祠古来布原多妖野狐所為也言布原狐是也居民患而立祠妖漸止或画詩ヲ官舎四阿紫千年心未灰荒墳風起野花開前亭将下藍輿飲恐有玄丘校尉来」とある。大正三年十月十日芳野神社に合祀し、昭和二十七年十月八日元地に遷座した。



瓜生神社　旧村社

津山市瓜生原一七〇七

主祭神　早良親王　文屋宮田麿朝臣　伊豫親王　橘逸勢朝臣　藤原吉子夫人
例祭　十月十五日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　籠殿
摂末社　御先神社　稲荷神社　天神社　八坂神社　金刀比羅社　荒神社
氏子数　一一五戸
宮司　横林武彦
崇敬者数　五七五人
責任役員　森林　河本作一　赤田勉　小原勝一
由緒沿革　口碑によると、五霊宮は当地の人楢本才兵衛が京都八所の五霊社から祭神五柱の御分霊を迎えて勧請したという。その年月は不詳。応仁二年再建以来数度に亘って修理、葺替の後、天保八年に再建したのが現在の本殿である。もと、五霊大明神、油宮大明神と称したのを明治四年瓜生神社と改称し、明治六年村社に列した。大正十一年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

上部神社　旧村社

津山市草加部一二四二

主祭神　誉田別尊　天照大御神　天児屋根命
例祭　十月十五日　**境内地**　二四一・七六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　神楽殿
氏子数　九五戸
宮司　易　淳臣
責仁役員　竹内重定　竹内正二　今井尚夫　水島新一　須江　明　田上正範
由緒沿革　欽明天皇三十二年に字上部山に社殿を創建し、天照大御神を祀り、産土神とし社号を上部大神宮と奉称した。清和天皇の貞観二年九月に社号を上部八幡大神宮と改称し、綾部郷の二宮と云った。明治六年二月九日に村社上部神社と改称した。明治四十年五月に神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

大崎神社　旧郷社

津山市大篠二一三七

主祭神　月読命　高竈神　大己貴命　伊邪那岐神　豊磐間戸命　櫛磐間戸命　素盞嗚尊　応神天皇　大山祇命
例祭　十月十七日　**境内地**　七七七・九二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫　神饌所　神楽殿
摂末社　車戸神社　御先神社
氏子数　一八〇戸
宮司　井口林士
責任役員　山本小市　前原　栄　大谷芳夫
由緒沿革　創建年代は不詳である。三代実録第八巻に貞観五年五月廿八日庚寅美作国従五位下大佐々神従五位上を授くとある。神祇全書第一輯・美作略史第一巻にも同様の記載がある。美作国百十二社考に年月不詳苫東郡高倉郷大篠座従五位上大佐々神社とある。明治六年郷社に列し、同三十九年幣帛料供進神社に指定せられた。

大佐々神社　旧郷社

津山市大篠二一三七

主祭神　月読命　高竈神　大己貴命　伊邪那岐神　豊磐間戸命　櫛磐間戸命　素盞嗚尊　応神天皇　大山祇命
例祭　十月十七日　**境内地**　七七七・九二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫　神饌所　神楽殿
摂末社　車戸神社　御先神社
氏子数　一八〇戸
宮司　井口林士
責任役員　山本小市　前原　栄　大谷芳夫
由緒沿革　創建年代は不詳である。三代実録第八巻に貞観五年五月廿八日庚寅美作国従五位下大佐々神従五位上を授くとある。神祇全書第一輯・美作略史第一巻にも同様の記載がある。美作国百十二社考に年月不詳苫東郡高倉郷大篠座従五位上大佐々神社とある。明治六年郷社に列し、同三十九年幣帛料供進神社に指定せられた。

大崎神社　旧村社

津山市金井三八三・三八四

宮司　水島　文
責任役員　岸本恒重　池本角夫　子森光夫　近藤正好
由緒沿革　創建年月は不詳である。森家神明帳に、三条天皇の長和四年十一月に、金井郷内に疫病が一年余も流行して死者が多いので、美作守源道方に訴えた。よって道方は、崇神天皇の五年に和州笠縫邑に大国魂神・大物主神を勧請して、三輪明神と崇めたので、流行していた疫病は治った。道方は同年に当郷内に、大国魂神を勧請して西大崎明神、大物主神を勧請して東大崎明神と崇拝したので、疫病は忽ち鎮静した。そこで住民は氏神として尊崇した。

大隅神社　旧県社

津山市上之町七八

主祭神　大己貴命　少彦名命
例祭　十月十八日　**境内地**　一、二〇七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　参籠殿　倉庫　社務所
摂末社　猿田彦神社　稲荷神社　天満宮　荒神社　八幡神社
氏子数　一、二〇〇戸
宮司　石田実夫
責任役員　飯田寛三　小林利一　稲垣稔盛
由緒沿革　創建年代は不詳であるが、往昔豊手という異人が、出雲国天日隅宮（今の出雲大社）の御神霊を勧請し、この地方を開拓した。よって豊手を国作りの大神の化神と信じて、厚く崇敬した。これが鎮座の起源であると伝えられている。美作国守森忠政が元和六年に、上之町の現在の地に遷座してから、産土神として尊崇した。森長成は元禄元年十一月に二十石を寄進した。松平宜富侯は村内八社一とし、松平長孝侯は本殿を修理、松平慶倫侯は修理・例祭等の祭祀料を寄進した。明治六年郷社に、同十六年県社に昇格した。

大隅神社　旧村社

津山市林田七五五

主祭神　大己貴命　少彦名命
例祭　十月十八日　**境内地**　四二〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　二五〇人
宮司　石田実夫
責任役員　安藤藤長　米沢建平　山形金一郎
由緒沿革　国主森忠政侯が鶴山城の鬼門の守護のため、元和六年三月二十三日に丹后山に遷座した。村民は氏神を失ったので、跡地に小祠を建て、、若宮神社

と称して大己貴命・少彦名命を奉斎して、春秋の祭祀を執行った。元禄年間松平氏の時に大隅神社の旧号を唱えるようになった。現在は字に若宮谷の名だけが残っている。明治十二年九月二十三日村社に列した。

大田神社　旧村社

津山市大田六六三

主祭神　大物主櫛甕魂命　宇迦之御魂命　猿田彦命　素盞嗚尊
例祭　十月十五日　**境内地**　三〇五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　（十二社宮）（明神宮）（妙見宮）（落宮）（御先神社）
氏子数　三〇戸
宮司　松岡重弘
責任役員　幾永　明　山県　保
由緒沿革　創建月日等不詳。もと土居之内大明神と称したが、明治六年大田神社と改称し村社に列格した。美作一宮に居住していた関勘解由が今の涼み矢倉の地に納涼殿を建て、六月十五日には本神社の御神幸を仰いで納涼祭を執り行っていたという。また津山城主森長継も崇敬厚く正月田、九月田、師走田等の祭祀田を寄進して四時の祭典を執行したと伝える。今残っているのは五月田だけである。

大野神社　旧村社

苫田郡鏡野町土居一四八六

主祭神　天津高彦火瓊々杵尊　誉田別尊　伊弉諾尊　素盞嗚尊　宇迦之御魂命　大地主命　宇気母智命　猿田彦命　相殿　少名彦命　武甕槌命
例祭　十月八日　**境内地**　四九二坪
主要建物　本殿　幣殿　廊下　拝殿　社務所　参集殿
摂末社　荒神社　御先神社
氏子数　一三七戸
宮司　植畠正利
責任役員　構口三夫　大畑孝信　湯浅卓美
由緒沿革　苫田郡大野村大字円宗寺字山崎鎮座村社乙清神社、同所大字土居鎮座無格社女山神社、並びに乙清神社の境内社の御先神社の各社を大正九年同村大字男山の無格社男山神社の旧社地に合祀して大野神社と改称した。昭和四十七年豪雨で境内が崩壊したので同四十八年現地に遷座した。

大美彌神社　旧郷社

苫田郡鏡野町香々美北九九四―二・九九五―一

主祭神　大宮能売命　猿田毘古命　大物主神　天手力男命　天忍穂耳命　武甕槌命　保食神　品陀和気命　大国主神　瀬織津姫命　道反大神　経津主命　火産霊神　磐筒男命　天穂日命
例祭　十月十五日
主要建物　本殿　釣殿　拝殿　籠殿　神具庫　社務所
摂末社　金刀比羅神社　荒神社
氏子数　三六〇戸
宮司　林　易二
責任役員　小坂攸平　田渕哲也　後藤基之
由緒沿革　創建年代は不詳である。古老の口碑によると、天和元年五月加々美川の洪水のため、藤屋村に鎮座の社殿が流失し、御神体も川下の竹田村の石隈にかかったので、奉迎して現在の社地に勧請し、大宮と称した。鏡美郷の十七か村の総産土神と云った。三代実録に貞観年間に授階があったと云う。旧社号大宮大明神と称していたのを、明治五年に大美弥神社と改称し、郷社に列した。明治四十五年村内の神社を合祀し、現在地に遷座した。



小田草神社　旧郷社

苫田郡鏡野町馬場五九七

主祭神　高皇産霊神　神皇産霊神　配祀・須佐之男命　外十三柱
例祭　十月八日　**境内地**　一、九〇三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　社務所　神楽殿　神輿庫
摂末社　稲荷神社　荒神社　鷺神社
氏子数　五五〇戸　**崇敬者数**　一、八〇六人
宮司　植畠正利
責任役員　居森　多　斎藤久志
宝物　釣鐘・貞治七年斉藤城主寄進　鎧・小田草城主寄進
特殊神事　納涼祭七月十八日・新氏子祭（甘酒祭）十二月十八日
由緒沿革　本神社の南に一の穴があって小田草池といい、龍穴という。穴口三尺深さは測ることができず、伝えて、「この地に大蛇がおり、神龍と化して一千年になる。一夕、衆に託して「廟を建て奉祀せよ」と。これが勧請の始であろうと言う。」頼朝が再建立し、暦応五年斉藤実頼が再建立したと言う。寛文十一年国主森長継が社領十石を寄進した。明治三十年火災により社殿、宝物が灰燼。明治三十七年に神殿を造営。明治四十一年四十二社を合祀した。同四十四年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。



奥津神社　旧村社

苫田郡奥津町長藤一九七

主祭神　大己貴命　外四柱
例祭　十月一日　**境内地**　一、四〇八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　籠殿　祭器庫　社務所
摂末社　高良神社　小鴨神社　荒神社　国玖神社
氏子数　一九五戸
宮司　岡本正勅
責任役員　船越正芳　井平頼義　光永久夫　難波健吉　光永清司　石原　奨
由緒沿革　本神社は大正四年三月十八日現在地である元村社八幡神社（創立永久二年）に、同村大字奥津字宮ケ瀬村社美湯神社（創立仁安二年）・同村下斎原字真井村社真井神社（創立承安二年）の両社および各大字に鎮座の無格社二十余社を合祀し、同時に奥津神社と改称した。作陽誌に、「本神社前に亀石がある。あるいは腰懸石ともいう。行客と一老翁との故事がある。」と載せている。



押渕神社　旧村社

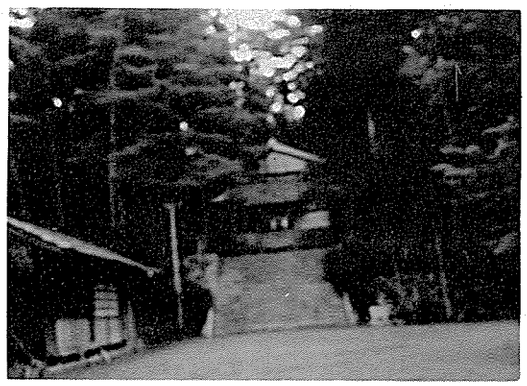
津山市押渕一六四

主祭神　大国主大神
例祭　十月十日　**境内地**　七四二坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　日吉神社
氏子数　三五戸　**崇敬者数**　五〇人
宮司　横林重美
責任役員　中村元成　橋本昭治
由緒沿革　創建年月・由緒等不詳。明治十年三月十三日字寺床より遷座した。

香々美北神社　旧村社

苫田郡鏡野町真経一〇二

主祭神　大国主神　道反神　大年神　御年神　若年神　瀬織津姫命　大山祇神　櫛御気野神　須佐之男命　誉田別尊　宇迦之御魂神　大山咋命
例祭　十月二十日　**境内地**　一、四四五坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿　籠殿　神具庫　社務所
摂末社　三穂二柱神社　賀野神社
氏子数　一七五戸
宮司　欠
責任役員　岡本清治　牧江道義　池渕武敏
由緒沿革　創建年代は不詳であるが、御祭神は誉田別尊という。天正六年三月の作陽誌に、八幡宮在真経村本殿拝殿共寛文元年池村縫殿助修造天和三年同氏再建立北村産土社と記している。



加茂神社　旧郷社

苫田郡加茂町公郷一三九九

主祭神　味耜高彦根命　伊弉諾尊　伊弉冉命　大山咋命　大巳貴命　崇道天皇
例祭　十月二十六日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　参籠殿
摂末社　八幡神社　養老神社　御先神社
氏子数　二〇〇戸　**崇敬者数**　五、〇〇〇人
宮司　湯浅勝興
責任役員　田村政治　池内　明　高橋円平　田村宗治　小玉芳雄　藤本力夫　池内　篤
宝物　神鏡
由緒沿革　本神社は公卿の菊水山に鎮座し、公卿の氏神である。詳細な由緒は不明であるが、「作陽誌」によると、本神社は旧杉大明神合社公郷(三村氏神村中に在り)祭神崇道天皇杉大明神合社公郷(三村氏神村中に在り)祭神崇道天皇…或はいふ素盞嗚命なりと」いい杉大明神は「大巳貴命にして則ち三輪大明神なり」として祭祀を盛んにさせた。正月田、三月田、九月田、霜月田、行事田、油田等の地名が今に残っている。尼子晴久が一宮について当社を造営した。もと、王太郎明神と称したのを明治元年に王昭神社と改め、同六年に改称したとしており、平賀元義も「美作国郷村考(年代不詳)」で「惣堂天皇とよばれ、加茂郷の一宮は天皇也」としている。また崇道天皇を祭神とすることについては、みこまち田、着到塚・御門・志武士・宮田戸開などが地名として残り、若宮御陵の祭礼が行われていることを裏付けしている。明治六年加茂神社と改称し、郷社に列せられた。明治四十二年公郷高場の熊野神社と日の目の日吉神社とを合祀した。大正四年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

勝部神社　旧村社

津山市勝部一一三三

主祭神　彦火火出見尊　倉稲魂命　八衢比古命　素盞嗚尊　保食神
例祭　十月十五日　**境内地**　四三三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　神楽殿　社務所
摂末社　国司神社　鷲峰神社　住吉神社　菅神社　稲荷神社(御先神社)(荒神社)(大地主神社)
氏子数　五二戸
宮司　松岡重弘
責任役員　福田元八　福田繁美
宝物　社名額　高麗狗一対　棟札(尼子晴久の銘あり)
由緒沿革　往時は源家信仰の神で、頼朝が鎌倉に幕府を開くようになると、社殿の造営を命じ、祭田を寄進して祭祀を盛んにさせた。正月田、三月田、九月田、霜月田、行事田、油田等の地名が今に残っている。尼子晴久が一宮について当社を造営した。もと、王太郎明神と称したのを明治元年に王昭神社と改め、同六年に

勝部神社と改称し村社に列した。同四十一年吉滝神社を、大正六年に荒神六社及び稲荷倉稲魂・牛神・佐田等無格社十社を合祀した。

金古神社　旧村社

津山市国分寺四八六

主祭神　誉田別尊　相殿配祀・大己貴神　大山祇神
金山彦神
例祭　十月十五日
境内地　二、三五一・一五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　籠殿
摂末社　荒神社　若宮社　注連社　金刀比羅社　明神社　美保神社　御先神社
氏子数　七五戸　**崇敬者数**　三七五人
宮司　横林武彦
責任役員　江原忠義　大平照士
宝物　石槌　石鑿(石器時代)　飯櫃　飯盛器(享保六年美作国主松平宣富公寄進のもの)
由緒沿革　嘉吉元年美作国主山名忠政が鶴山城を築いたときに、鶴山桐の段にあった八幡宮を国分寺村亀ケ岡に遷し、亀岡八幡宮と称し山名氏の祈願所とした。その後慶長九年森忠政が入封し、城を改築した際に本神社を修覆している。元禄二年家老長尾隼人勝明に命じて社殿を再建したのが現在の御本殿である。明治三年十二月、産土五霊神社を境内に祀った。明治四年に金古神社と改称、同六年村社に列した。同二十一年五霊神社を合祀相殿に祀った。同二十二年山神社を合祀。

金屋神社　旧村社

津山市金屋一二八

主祭神　猿田彦大神　相殿・誉田別尊
例祭　十月十二日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　伊勢神社　荒神社
氏子数　二〇戸　**崇敬者数**　一〇〇人
宮司　横林武彦
責任役員　久保　明　谷口　肇
由緒沿革　百済王敬福の末裔の百済源次家久が観応二年三月官命によって、長岡郷に移住し鋳工を始め、世人はこれを釜屋と呼び、業が大いに盛んになり、人家が集合して一邑をなしたという。当時の釜屋が現在の金屋である。家久は猿田彦神を守護神として祀り金屋権現と称した。明治四年金屋神社と改称し、明治六年村社に列した。昭和二十四年摂社八幡神社を合祀して相殿に祀っている。

大正十年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

河井神社　旧村社

苫田郡加茂町大字河井六五三

主祭神　高靇神　息長帯比売命　火産霊神　玉依姫命　誉田別尊
例祭　十月二十八日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　参籠殿
摂末社　矢筈神社
氏子数　八五戸　**崇敬者数**　二、〇〇〇人
宮司　湯浅勝興
責任役員　谷上佳次　小原孝作　能勢智之　小原　一
由緒沿革　創建年月・由緒等不詳であるが、「作陽誌」に明らかなごとく八幡宮であった。後河井神社と改称し村社に列し、明治四十二年河井内の荒神社二社・山神社二社・月星神社・塞神社を合祀し、大正二年に上加茂神社に合祀せられたが、昭和二十四年に河井の旧跡地に遷座奉斎し今日に至っている。

河邊神社　旧村社

津山市河辺一五二六

主祭神　天御中主尊　月読尊
例祭　十月十五日　**境内地**　一、四二〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫　籠殿
摂末社　産土荒神宮　三宝荒神宮　稲荷神社　桜子荒神社　金神神社　尾鼻権現社　しとと荒神社
氏子数　一五〇戸　**崇敬者数**　八〇〇人
宮司　大沢清見　**禰宜**　中村　登
責任役員　荒田幹治　藤田富夫　末沢秀夫　末沢斧太郎
由緒沿革　本神社の創建は和銅七年と伝え、河辺郷鎮護神として宇兼田に勧請した。明見大明神、夜中森大明

神の二社である。元禄十二年九月、字中山の地に遷し奉った。寛政十年正月に本神社を再建した。明治六年村社に列し、河辺神社と改称した。大正十年十月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。およそ一反歩計りの旧跡が現存している。

上斎原神社　旧村社

苫田郡上斎原村字木路西六六六―四



主祭神　大穴牟遅命　少名毘古那神　顕国玉神　美穂津姫命
例祭　九月二十八日　**境内地**　二、一九〇坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　籠殿　随身門　神輿庫　社務所
摂末社　大神宮山神社　岐路神社　顕勲神社　赤和瀬神社
氏子数　二〇〇戸
宮司　岡本正勅
責任役員　草苅良行　奥　秀男　片田昭義　黒谷利徳
特殊神事　獅子舞
由緒沿革　往昔は国司神社あるいは国主神社または国司大明神と称していたが、明治六年に上斎原神社と改称し、村社に列せられた。御鎮座の年月は詳かでないが、康安元年辛丑の秋神主渡辺兵庫介継が氏子の協力を得て、社殿を修築したことを殿内所蔵の小石に彫刻してある。口碑によると往古大穴牟遅命が国土経営の神である故に、村内の広漠とした原野の中に斎き祀って、この村を拓き斎原村と称したという、村は寛永年間に上斎原、下斎原の両村に分れた。明治四十四年四月二十日現社地に社殿を造営して遷座し、同時に村内の各部落に鎮座の小社を合祀して一村一社とした。

神田神社　旧村社

苫田郡富村大字大七六六

主祭神　大国主命　奥津彦命　事代主命　葦原色許男命
例祭　十一月一日　御田植祭五月四日
境内地　五三三・六〇坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿　社務所　籠殿　神輿庫
摂末社　斉神社
氏子数　四〇戸
宮司　宮尾金利
責任役員　為本　薫　難波貞章　難波照俊
由緒沿革　御本殿は寛文十二年九月二日に再建したものである。天和三年・貞享二年九月・貞享三年九月に美作の領主森公から、奉納米の寄進のあった神社である。明治四年にもとの王子権現を神田神社と改称した。創建年代、由緒等は不明である。

久田神社　旧村社

苫田郡奥津町久田四三

主祭神　高淤加美神　埴山姫神　大国主神　金山毘古神　金山毘女神　須佐之男神　外六柱
例祭　十月十六日　**境内地**　一、五九三坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿　籠殿　社務所　神庫
摂末社　斎神社　天児屋根神社　若宮社　荒神社　招魂社
氏子数　三五〇戸　**崇敬者数**　一五〇人
宮司　大山行雄
宝物　刀釼四振
由緒沿革　創建年月・由緒等不詳。明治四十三年一月十一月旧久田村地内鎮座の大小の村社・無格社を合祀し、現在にいたっている。

熊野神社　旧村社

津山市荒神山一二四

主祭神　伊邪那岐命

例祭　十月十二日　**境内地**　六四一・五坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　稲荷神社
氏子数　二〇〇戸
宮司　国米正之
責任役員　池上峯男　光後都栄　義根米一
由緒沿革　本神社の創建年月日は詳かでないが、出雲国竟宇郡の熊野神社を勧請して荒神社と号した。御鎮座の山を荒神山というので村名とした。慶長年中宇喜多氏の家臣花房助兵衛職秀が此の山に居住して深く崇敬し、供田等を寄附して城内の鎮守とした。維新の際、現在の社号に改称し、明治六年村社に列せられた。

倉見神社　旧村社

苫田郡加茂町大字倉見四九一

主祭神　大物主大神　大山祇命　闇御津羽命　菅原神　埴山姫命
例祭　十月五日　**境内地**　三一六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神庫
摂末社　啓神社
氏子数　四五戸
宮司　前橋貞晴
責任役員　原田　実　政宗剣司　広戸政義　都井辰男　都井　磯
由緒沿革　口碑によると、正和三年神託により大山祇大神・闇見津羽命を勧請したという。二柱の大神はいずれも鉄山業者の崇敬神である。由来此の地が砂鉄採掘の盛んに行れた地であることは、現存する遺跡や、倉見の地名などで明らかである。元和十年・慶安元年・天和三年に再建した。天正五年に国司神社を合祀した。明治六年二月倉見神社と改称し、明治九年村社に列せられた。

荒神社　旧無格社

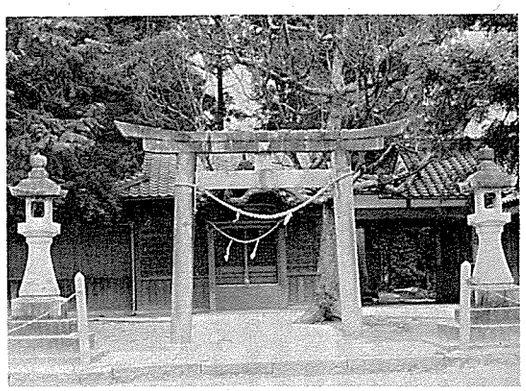
津山市小田中新屋敷一四三八

主祭神　素盞嗚大神
例祭　十月十二日
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　大国主神社　多賀神社　稲荷神社
氏子数　一二〇戸
宮司　井口林士
責任役員　池上種四郎　佐野亀男
由緒沿革　創建年代、由緒等不詳。

荒神社　旧村社

津山市大崎一三〇

主祭神　素盞嗚尊



例祭　十月二十日　**境内地**　三一一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神札授与所　社務所
氏子数　四一戸
崇敬者数　三〇〇、〇〇〇人
宮司　中川克巳
責任役員　植月俊友　植月久一　安東十一
特殊神事　蝮除及安産祈願大祭（陰暦正月一・二・三日）
由緒沿革　本神社の創建は称光天皇の応永十年と伝えている。慶長十五年津山の城主森忠政の女が難産のため当神社に祈って霊験があり、報賽のため田二反八畝歩を寄進した。天和三年森家の臣山口彦左衛門が蝮の厄難に遭い、本神社の神助を蒙ったので太刀一振を献じた。明治三十五年八月社殿改築とともに神社様式を

由緒沿革　寛文年中に大字中原住の某が、讃州金刀比羅宮を崇敬し浄財の寄進を享けて、御分霊を日詰山の山頂に奉斎した。明治四十三年に西加茂地区内鎮座の村社大三輪神社（美作国百十二社記に美和郷一宮と所載の神社）美弥計神社・楢井神社・神戸神社・滝神社・三社神社・山祇神社・天真神社・大森神社の九社を、この日詰山頂の地に遷座して、金刀比羅神社と改称した。次いで明治四十四年十一月、元村社黒木神社・八幡神社・木山神社・中倉神社・八幡神社の五社を合祀した。明治四十五年五月宇野神社・大路原神社・八幡神社・天満神社・日能目神社を合祀した。慶長十九年森忠政の美作国入封以来、宇野神社に祭祀料の寄進があった。昭和四十九年五月全社殿が炎上し、昭和五十二年四月現社殿が、氏子等によって再建せられた。

主祭神　素盞嗚尊
例祭　十月二十二日
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　四五戸
宮司　豊田元留
由緒沿革　本神社の創建は弘仁十二年と云うが不詳である。

荒神社　旧無格社

津山市近長二九八

整備した。大正十三年六月村社に列せられた。

主祭神　大穴牟遅命　月夜見命　金山彦命　少彦名命　猿田彦命　素盞嗚尊　外十三柱
例祭　十月十日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神勤所　社務参集殿　籠殿
摂末社　荒神社　木山神社　御先神社　宮国魂神社
氏子数　五三五戸
宮司　前橋貞晴
責任役員　美土路博　福寺秀一　重井久之

金刀比羅神社　旧村社

苫田郡加茂町大字中原八九九

主祭神　武内宿禰命
例祭　十月二十日　**境内地**　二四六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社　若宮
氏子数　八三戸
宮司　片山舎泰
責任役員　光井正　溝口衛　中島万衛
由緒沿革　往古神功皇后が三韓より帰朝の節、因幡より美作路を経て京に上り給う、此の処の鴨川の屏風岩と云う処の青渕に水鵐が群集しておったのを御覧になって、御感慨無量にわたらせられ、此の旧跡に祠を建立したと云い伝えられている。後押入村の産土の神として地元民の崇敬厚く、以来年月を重ね神徳益々高揚、五穀豊穣牛馬安全の神として崇敬されている。

高良神社　旧村社

津山市押入上一一一一

作楽神社　旧県社

津山市神戸四三三

主祭神　後醍醐天皇　児島高徳公
例祭　四月二十二日　**境内地**　九、四一八坪
主要建物　本殿　拝殿　社務所
崇敬者数　三〇、〇〇〇人
宮司　河原太津彦
禰宜　福田篤二　国米正之
責任役員　苅田興禄　三村郁夫　政岡勇　日原農夫也　中島淳吉　杉山隆亮
由緒沿革　創建は明治二年十一月二十七日である。元弘二年三月後醍醐天皇が隠岐に御遷幸のとき、院庄の行在所に着御せられ御駐蹕の際、備前の人児島備後三郎高徳が、天皇を擁して義兵を挙げようとしたが失敗したので、微服潜行し勤皇の赤誠を捧げ、宸襟を慰め奉ろうとしたが、行在所の警備が厳重なため如何とも為すことが出来ないので、東大門の傍の桜樹を削って、天莫空勾践　時非無范蠡　の十字の詩を書きつけて去った。翌朝此の詩が天覧になり、天皇はひそかに勤皇の志士頼むべしと思召され給うて、伯耆国に向わせ給うた。貞享五年七月国主森侯の臣長尾勝明は、行在所の遺跡の荒廃しているのを慨いて、森侯の意を享けて、東大門跡に桜を植え石標を建て新道を作って遺跡を保存した。文化九年津山藩主松平康孝侯が行在所遺跡の三方に松樹を補植した。児島公の木像を写し、記文を撰し拓本として四方に頒った。嘉永七年二月津山藩主が更らに改写して世に頒った。慶応四年津山藩主松平慶倫侯が院庄に行き、長尾氏の贈文を見て自ら副書して頒ち、勤皇の志を鼓舞した。明治二年行在所遺跡の中央に、後醍醐天皇を主神とし児島高徳を副神として、作楽神社を創建した。明治十年三月県社に列した。

佐良神社　旧村社

津山市一方六三六—一

主祭神　佐波良神　外十八社
例祭　十月十八日　**境内地**　九〇一・五五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫
摂末社　和歌神社　稲荷神社
氏子数　五〇〇戸　**崇敬者数**　二〇〇人
宮司　国米正之
責任役員　平井元　河本浜一　高畑太郎
由緒沿革　元福田村村社八幡神社・元高尾村村社高尾神社・元皿村村社佐良神社・元平福村村社八幡神社・元中島村村社福井神社・元一方村村社長岡神社・元北村村社八坂神社・元井口村村社八坂神社・以上の各部落の神社を、大正二年二月十五日佐良神社に合祀した。大正二年十月に現在の地に遷座した。もとの各神社の由緒は美作国神社誌料にある。

白加美神社　旧郷社

津山市小田中二五四

主祭神　天照皇大神　天忍穂耳尊　瓊々杵尊　彦火火出見尊　幸魂月夜見尊　鸕鷀草葺不合尊　国常立尊　天児屋根命　天太玉命　久那斗神
例祭　十月十九日
境内地　一、四三〇・七四坪
主要建物　本殿　釣殿　幣殿　中殿　拝殿　随身門　神輿庫
摂末社　多賀神社　祇園神社　稲荷神社　荒神社
氏子数　四五〇人　**崇敬者数**　二五人
宮司　秋山隆光
責任役員　難波定治郎　藤村勝衛
由緒沿革　創建は神亀二年である。神託により藤原通憲が月輪田の地に一社を建立した。養老七年である。神亀二年に白加美大明神と奉称した。由緒を掲載した書目は、本朝諸社一覧・続々群書類従・作陽誌・美作神明帖等である。明治初年郷社に列した。

千代稲荷神社　旧無格社

津山市山下八二

主祭神　倉稲魂命　大山祇命　土祖神
例祭　十月二十八日　**境内地**　六三八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　神輿庫　社務所　参籠殿　休憩所
摂末社　速御光神社　若葉稲荷神社　塩谷稲荷神社　諏訪稲荷神社　高取稲荷神社　万力稲荷神社　他五稲荷神社
崇敬者数　五〇〇〇人
宮司　山田光修　**禰宜**　山田良彦
由緒沿革　創建年代は不詳である。津山市山北八子字不知夜山鎮座八幡神社の摂社であったので、同神社社記に、朱雀天皇承平四年九月十九日を例祭日とし長く続いた。社の右傍に古杉があり、周は二囲余枝葉は繁茂して雲を凌ぐほどである。鶴が天より飛来し、香稲を噛んでいるので、その種子を神田に蒔いて大増収を穫った。古杉の下に五穀神が降臨すると感じて、社殿を建造した。五穀神は鶴の千年にちなんで、倉稲魂千代と奉称した。嘉吉年間に山名教清が美作国守護職となって、八幡神社の鎮座地の鶴山に築城して、千代稲荷神社と共に崇敬した。慶長八年森忠政が美作守となり、不知夜山に遷座した。寛永十一年に忠政は神告によって、城の鎮守として城郭の北東隅に鎮座した。天和三年に森長義が現在地に社殿を建立した。松平氏が入封し元禄十三年に社殿を修覆した。その後、正徳六年、天明三年、明治三年と修理を藩命で行った。森氏は米五石八斗を、松平氏も米を奉納した。しかし廃藩となってからは寄進もなくなった。本神社は氏子はないが一般崇敬者の信仰厚く今日に至っている。

總社　旧県社

津山市総社四二七

主祭神　大己貴命



例　祭　十月十日　**境内地**　一、八一〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神饌殿
摂末社　天満天神　稲荷神社　南神社　御崎神社
氏子数　一五〇戸
宮　司　松岡重弘
責任役員　秋元千松　尾宮才助
宝　物　毛利元就朝臣自筆・長尾隼人源勝明朝臣自筆
由緒沿革　元明天皇和銅六年四月三日備前六郡を割いて美作国を置き、国政の庁をこの邑に置いた。翌七年従五位下津守連通朝臣が美作守に任ぜられ赴任した。国司は大己貴命を主神として中山神社・高野神社を相殿として、美作国東半国西半国の諸神、六十五郷の諸神九一二社を勧請し、美作総社宮とした。今の社殿は毛利元就が戦勝を祈って建立したものである。大正三年四月十七日本殿が特別保護建造物に指定せられた。毛利元就・吉川元春・森忠政・森長継等の崇敬が篤かった。もと総社宮は二十九代欽明天皇の廿五年に、大己貴命を邑の本館に勧請したが、後に本館の地が西陲に偏していたので、文武天皇の慶雲四年に今の亀甲山に遷座した。

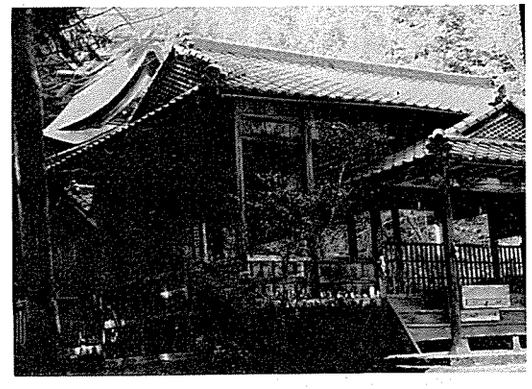
宗道神社　旧無格社

津山市鍛冶町七

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十一月三日　**境内地**　一五一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　御先神社　稲荷神社　鷲神社
氏子数　五〇戸
宮　司　井口林士
責任役員　岸本泰保　中山三郎
由緒沿革　勧請年月日は不詳。元鶴山に八幡神社の末社として鎮座せられた。慶長八年森忠政公が津山城を築くに当り、八幡神社を一旦覗渕に移した時、この地の鍛冶工が連署して移転を請願し許可を得て、鍛冶鉄工の神として祀った。宝暦九年十月参拝に不便なため町民は藩主松平氏に請い、更に一条の参詣路を開いた。一説に元暦元年九月十五日鎮座ともいう。

田神社　旧郷社

津山市下田邑一一八九―一



例　祭　十月十八日　**境内地**　九九七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　倉庫
摂末社　荒神社　稲荷神社
氏子数　四二一戸
宮　司　杉山正宣
責任役員　中島慧一　内山知正　井原　勇
由緒沿革　本神社は清和天皇の貞観年中に、村内田口山引乗寺が僧行教法師と田口信濃守統範とが創建し、田神社と奉称した。御祭神は豊前宇佐八幡宮の御神霊を勧請した。神階は貞観六年八月に従五位の上となる。六国史の三代実録に「貞観六年八月十五日美作国従五位下長田神・免上神・田神加佐美神、形売神・壱粟原神・横見神・久止神・高野神等並授従五位上云々」とある。大正七年村内天剣神、千家里神・天津彦神等を合祀し、一村一社とした。

主祭神　応神天皇　神功皇后　相殿高良命

多禰神社　旧村社

津山市種七一七

主祭神　天児屋根命
例　祭　十月十日　**境内地**　四二二坪
主要建物　本殿　拝殿　社務所
氏子数　三〇戸　**崇敬者数**　二〇人
宮　司　国米正之
責任役員　日笠　正　吉村耕一　金島賢一
由緒沿革　本神社創建年月由緒等不詳。もと春日神社、八幡神社、荒神社が各地に鎮座していたのを、元禄十二年十二月村の中央の宮山の地に合祀して多禰神社と改称した。

高倉神社　旧村社

津山市高倉下高倉西七六二

主祭神　伊弉諾尊　伊弉冉尊　月読大神　月弓神
素盞嗚尊　大己貴命　稲田姫命
例　祭　十月二十日　**境内地**　六二四・四七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　籠殿　神輿庫　社務所
摂末社　御先神社　荒神社
氏子数　五五八戸
宮　司　水島亀雄
責任役員　高田　修　香川太郎　本田　静　赤田孝男
由緒沿革　創建年代は不詳である。旧苫東郡高倉郷の大宮で、美作国百十二社の一である。嘉吉元年山名教清・山判官忠政の崇敬で、鶴山城の守護神として斎き祀り、年々祭費を奉献した。慶長八年国主森忠政が崇敬し毎年祭費・米十八石を奉納し、爾来累世奉納をつゞけた。元禄十年国主松平宣富が随身門を造営し、葵御紋付の瓦で屋根を葺いた。

高瀬神社　旧村社

津山市日上四三五

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月十日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　六〇戸
宮　司　横林武彦
責任役員　岡田　彪　岡田　秀　坂本道治
由緒沿革　天平勝宝七年村内に悪疫が流行して村民が多く死んだ。時に国分尼寺の尼僧が夢に素盞嗚神が現れて曰く、「我が社を天王山の東西畑に祀れ、疫病忽ちに止みなむ」と告げられた。尼僧はこれを村民に告げ、村民は一祠を建立して西畑大明神と称した。明治になり、高瀬神社と改称した。

主祭神　素盞嗚尊　**境内地**　三六六坪
崇敬者数　三〇〇人

高田神社　旧村社

津山市上横野七九―一

主祭神　天児屋根命　彦火々出見尊　若宇迦能売命
句々廼知命　天照大神　倉稲魂神　天穂田命　天之水分神　国之水分神
例　祭　十月十七日　**境内地**　三、五八〇坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿　神饌所　籠殿　社務所　神庫
摂末社　掛縄神社　戸倉神社　愛宕神社　御先神社
氏子数　三五〇戸
宮　司　野山拓昭
責任役員　森本武士　西本利喜夫　安東金太　光嶋敏夫　仁木美英　直原康男
特殊神事　獅子舞
由緒沿革　創建年月不詳。崇神天皇の御代に、産土神として奉斎し、この地を久保宮と称した。津山藩主森公代々尊崇し、武運長久祈願のため、社殿を再建し守護神とした。宝暦年間に旧地久保宮に遷座し、苫東郡苫田郷二ノ宮公方神社と古書にある。本神社は苫田郡高田村大字上横野及大字下横野の二部落に鎮座の五村社の久保神社・下横野神社・倉木神社・植田神社・奥谷神社を合祀して、社号を高田神社と奉称した。昭和三十三年高田神社獅子舞は全国に例がなく、岡山県無形文化財に指定された。

高富神社　旧村社

津山市小桁四四二

主祭神　大山祇神
例　祭　十月二十日
主要建物　本殿　拝殿　神庫
摂末社　稲荷神社　荒神社　若宮神社

氏子数　二三戸　　**崇敬者数**　九二人
宮　司　横林武彦
責任役員　辻　覚　矢山真一
由緒沿革　口碑によると、貞観年中小桁山極楽寺の僧円仁が、近江国日枝神社の御分霊を迎えてこの山に祀り極楽寺の鎮守としたという。作陽誌に、極楽寺の項の鎮守社山王十禅師とあるのは本神社のことである。最近まで極楽寺住職が例祭には必ず参列するのを例とした。本神社はもと山王権現社と奉称したのを、明治四年高富神社と改称し、明治六年村社に列した。

高野神社　旧県社

津山市二宮六〇一

主祭神　彦波限鵜葺不合尊　大己貴命　鏡作命
例　祭　十月二十五日
境内地　三、七三九・三二坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿　装束殿　神楽殿　籠殿　社務所
摂末社　御先神社　八幡神社　龍神社　淡島神社末社殿
氏子数　八〇〇戸　　**崇敬者数**　二〇〇人
宮　司　河原太津彦
責任役員　久山淳一　橋本義夫　三谷信夫　三谷　豊　片山満夫　皆木正史
宝　物　社号扁額一面（国指定重文）・随身立像二軀（国指定重文）・高麗犬二体（市指定重文）
由緒沿革　創建は安閑天皇二年である。神階は正四位上である。本神社は延喜式に見える高野神で、中山神社・総社と共に美作三大社と称せられている。古来武将の崇敬厚く、社殿を修築し、社領を献し、祭祀の制を定め、神田を寄進した。中でも山名・尼子・毛利・吉川・小早川・森・松平諸氏の崇敬は深かった。明治六年西々条郡第三十六区の郷社と定められ、明治十三年七月県社に列し、同三十九年十二月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

高野神社　旧郷社

津山市高野本郷一〇一二

主祭神　高野造祖神
例　祭　十月二十日　　**境内地**　八五八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神楽殿
摂末社　御崎宮　大神宮　荒神社
氏子数　二〇〇戸
宮　司　片山令泰
責任役員　芦田宗隆　牧　源吾　藤井文右衛門　仲矢正之
由緒沿革　創建年月日は不詳であるが、延喜式内の神社で、貞観六年八月十五日、同十七年三月二十九日神階を賜わり、永禄年中尼子晴久の再興で、その寄附奉納品等も現存している。往時の境内には四辺から通衢に悉く手洗池があった。なお神田・勅使屋敷等の名称、弁官・縄手大鳥居・踏石等も現存している。明治六年二月郷社に列せられた。

高山神社　旧村社

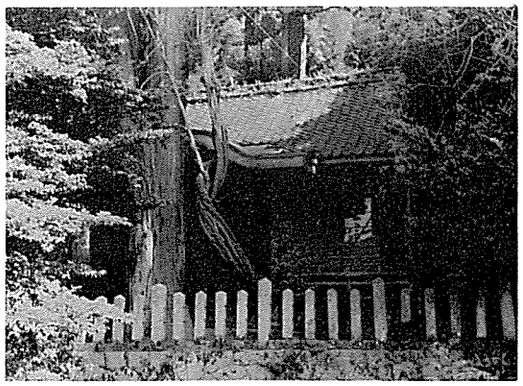
苫田郡鏡野町高山七二一

主祭神　誉田別尊　天穂日命
例　祭　十月八日　　**境内地**　一、五七九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　九五戸
宮　司　宮尾　旭
責任役員　長滝　巌　武本　浄　長滝敏行
由緒沿革　本神社の創建年代は詳かでないが、棟札によると、国主森内記長継が寛文九年十一月に社殿を再建した。天文の頃、領主河本豊前守が大井庄・南方庄薪郷等を領し、自から神主となり崇敬し、子孫が奉仕したと伝えている。慶応三年六月河本村天満宮を本神社に合祀し、明治維新のとき高山神社と改称し、村社に列した。

千磐神社　旧村社

苫田郡加茂町大字知和三四三

主祭神　素盞嗚尊　速玉男命　闇於加美命
例　祭　十月十五日　　**境内地**　三五八坪
主要建物　本殿　第一釣殿　幣殿　第二釣殿　拝殿　参籠殿　神輿庫
摂末社　矢筈神社　啓神社
氏子数　九〇戸　　**崇敬者数**　五、〇〇〇人
宮　司　湯浅勝興　　**禰　宜**　湯浅一則



津川神社　旧村社

苫田郡加茂町大字下津川五七三

主祭神　素盞嗚尊　伊邪那岐命　伊邪那美命　火産霊神　瀬織津姫命　大山祇命
例　祭　十月十四日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　国司神社　荒神社
氏子数　四一戸
宮　司　前橋貞晴
責任役員　住田春吉　木村由友　川上信男
由緒沿革　創建年月・由緒等は詳かでないが、大正四年下津川箸蔵神社・塞神社・愛宕神社・滝神社を合祀した。

津川神社　旧村社

津山市三浦一九〇

主祭神　品陀和気命
例　祭　十月十四日　　**境内地**　一三九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　荒神社（中山神社　愛宕神社　子安宮）
氏子数　一三四戸
宮　司　湯浅正敬
責任役員　安藤武夫　竹本竹蔵
由緒沿革　本神社の創建は古老の伝えによると、元禄十四年である。慶応年間火災に罹り社殿は悉く焼失した。社号は三浦八幡宮と号した。その後社殿の再建を計り、明治六年二月村社に列格した。

鶴山八幡宮　旧郷社

津山市山北一五九

主祭神　誉田別尊　神功皇后　玉依姫
例　祭　十月十五日　　**境内地**　一、六七五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　山門　倉庫（御本殿国指定重文、幣殿拝殿県指定重文）
摂末社　荒神社　天神社　薬祖神社　稲荷神社　十六山神社（薬祖神社県指定重文）
氏子数　二、〇〇〇戸
宮　司　井口林士　　**禰　宜**　池田真澄
責任役員　安東光盛　杉山良平　妹尾亀夫　関　當雄　松尾茂樹　大郷福次郎



由緒沿革　本神社は元鶴山山頂にあった。慶長七年森右近忠政公が美作一国を領して入封し、鶴山城を築くに当り、一旦横山覗山の地に御遷座したが不浄の為慶長十一年に工を起し、十五年現在地に御遷座し、社領五十石を給して崇敬し、城の北方の守護神とした。森長継公が社殿を修理し、それまで南面していたのを東面とした。現在の社殿である。県の重要文化財である。

天満神社　旧無格社

津山市河辺三四四

主祭神　菅原道真公
例祭　十月二十五日　**境内地**　一、七二一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　若宮神社　産土荒神宮　牛神荒神社　久保森神社
氏子数　八〇戸　**崇敬者数**　六〇〇人
宮司　大澤清見　**禰宜**　中村　登
責任役員　水島銀治郎　神尾健夫　水島一男　水島四郎
由緒沿革　第六十代醍醐帝の延喜元年菅原道真公が大宰府に左遷せられた時、この地の志とと原まで御旅を運ばれた時に、野辺の梅花の春風に散っている様を御覧になり、住みなれた都の名残りを惜み感涙を流されたという。延喜三年二月二十五日に薨去になり、その後、この里人に度々霊夢があったので、長徳の頃この志とと原に一宇を建立して、見帰天神宮と奉称した。

戸島神社　旧村社

津山市戸島二三二

主祭神　大己貴命　伊弉諾尊
例祭　十月九日　**境内地**　一、九七九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神門　社務所　膳舎　神輿庫
摂末社　御先社　天神社　稲荷社　荒神社　若神
氏子数　三五〇人（七〇戸）
宮司　河原太津彦
責任役員　藤原治良
由緒沿革　正徳年中に村内に疫病が発生のため、大和三輪の社に参詣して、悪疫退散を祈願し、御分霊を奉遷して、村内の大神山に勧請した。寛文六年国主森長継公が崇敬し、村内の有本山に社地を移し、社殿を改築した。貞享三年国主森長武公が、村内沢昌蒲山に社殿を建立した。元禄六年森長成公が、現在の国司に社地を替えた。明治六年村社に列格した。大正六年十一月十三日神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

徳守神社　旧県社

津山市宮脇町五

主祭神　天照大日霊尊
例祭　十月二十三日　**境内地**　一、五〇〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　倉庫三棟　会館　神門三棟
摂末社　住吉神社　鹿島香取神社　陰陽二柱神社　荒神社　八幡神社　春日神社　大国主神社　薬祖神社
氏子数　五、五〇〇戸　**崇敬者数**　五〇、〇〇〇人
宮司　白岩直樹
禰宜　井口林士　平島勝彦
責任役員　江見甚一　末沢　茂
由緒沿革　本神社は第四十五代聖武天皇天平五年の御鎮座で、平安朝時代は美作国府の総社に御神幸し、国司自ら祭祀を奉行する大社であった。天文八年火災に遭い社殿が灰燼に帰し、記録宝物は悉く焼失した。慶長七年森右近忠政公が美作一国を領して入封し、先ず当社を造営し社領八十石を給して崇敬した。寛文三年正一位の神階をうけ、勅使宮と尊称し崇敬した。



栃畑神社　旧村社

津山市栃保七五五

主祭神　高皇産霊尊　栲幡千々姫命　饒速日命
例祭　十月十五日　**境内地**　四七六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社　河辺神社　天王神社　牛神社
氏子数　六〇戸
宮司　松岡重弘
責任役員　真鍋四郎　清水　実
由緒沿革　本神社は機織部がその祖神を勧請したものであると伝える。和銅年間国府が置かれ、総社の大祭が毎年執行せられるに当り、国司の奉幣に預ったという。参集の儀は天正末年まで行われた。延宝四年国主森長継の三子長俊が産業繊蚕の神として幣帛を奉って以来、歴代の藩主の崇敬が厚かった。現在の社殿は文政十一年十一月改築したもので、明治八年一月村社に列格した。

中谷神社　旧郷社

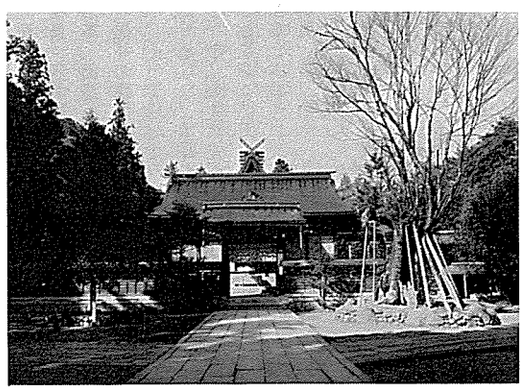
苫田郡鏡野町中谷四四〇五

主祭神　伊邪那岐命　伊邪那美命
例祭　十月十五日　**境内地**　五一六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫　籠殿
摂末社　愛宕神社
氏子数　二二六戸
宮司　宮尾金利
責任役員　戸田一正　岡本　弥　山崎庄一
宝物　藤ノ宮鍔口
由緒沿革　明治四十一年十二月二十六日許可、村社中谷神社・無格社大鳴神社・向井神社他四社を、老男山神社に明治四十二年一月合祀し村社に昇格した。村社山城神社・無格社国司神社を同年七月十五日合祀し、中谷神社と改称して一村一社とした。昭和十六年一月二十日郷社に昇格した。

中山神社　旧国幣中社

津山市一宮六九五

主祭神　鏡作神
例祭　四月二十四日　**境内地**　二〇、八五九坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿　神饌所　社務所　篭殿　神楽殿　瑞垣　瑞垣中門　表神門　手水舎　神庫　神厩舎
摂末社　総神殿　国司社　御先社　猿社　祝木社
氏子数　七八〇戸
宮司　白岩直樹
責任役員　和田義一　妹尾太郎
特殊神事　御田植祭　鍬振神事
由緒沿革　慶雲四年四月の創建。鏡作神を奉斎する。美作国一宮として朝野の尊信が厚い。貞観六年初めて官社に列格。延喜式に美作国苫東郡中山神社大名神とある。一代一度の大奉幣に預る神社である。朱雀天皇・堀河天皇・御宇多天皇の御宇国家大変に際し、勅命により御鉾祭を奉修した。永正八年社殿が悉く炎上、永禄二年尼子晴久が再建した。現在の本殿は国指定重要文化財である。明治四年国幣中社に列格。



軒戸神社　旧郷社

苫田郡加茂町大字塔中六五

主祭神　天照大神　豊受姫神　大己貴命　誉田別尊　木花開耶姫命　足仲彦命　大鶴鶏命
例祭　十月十六日　**境内地**　六四九・三九坪

主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所　龍殿
摂末社　御崎神社　天満神社　栗島神社　祖霊社
氏子数　四八五戸
宮司　湯浅正敏

由緒沿革　和銅七年田渕村背尾山麓宮谷に鎮座し、加茂総鎮守として崇敬せられ、加茂大宮と号した。元暦元年幹戸に遷座せられ、これから幹戸宮と唱えるようになった。安政三年十二月十六日幹戸神社と改称した。明治六年郷社に列した。

羽出ヶ神社　旧村社

芦田郡奥津町出ヶ八二

主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所
摂末社　荒神社　恵比寿社　金毘羅社
氏子数　一、〇五〇戸
宮司　横林武彦

由緒沿革　本神社は元和年間の創建で、伊勢から伊雑宮の御分霊を迎えて祭ったと伝えられる。明治四年、日号山権現を白山と改称した。明治四十一年神饌幣帛供進指定神社に指定された。

例祭　十月十五日
境内地　一、五九九・四六坪
主要建物　本殿　拝殿　神輿庫
摂末社　稲荷神社　愛宕神社　国司神社
氏子数　二一〇戸
宮司　横林武彦

由緒沿革　本神社の創建年月は不詳であるが、当地の守り神として遷し奉った。明治六年村社に列した。昭和十六年神饌幣帛料供進指定神社に指定せられた。

八幡神社　旧村社

津山市福井一二〇八

主祭神　誉田別尊　外四神
例祭　十月二十二日
境内地　九九六坪
主要建物　本殿　幣殿
摂末社　稲荷神社　愛宕神社　国司神社
氏子数　二一〇戸
宮司　谷口静平　竹田新蔵

由緒沿革　豊岡隈光　創建年月は不詳である。往昔武将木下道光が当村福井の西端にある神宮山に城を築き、附近を領有した。その子孫がこの地に、八幡宮を勧請し、鎮守及祈願所とした。元暦元年城主伊豫守通興の時に、落城したので、社殿が大破した。そこで村民は氏神として奉祀造営した。天和二年に火災に罹り、縁起・古文書等が焼失した。

八幡神社　旧村社

津山市河面三二二

主祭神　誉田別尊　足仲彦命　息長帯比売命

例祭　十月十五日
境内地　一、五九九・四六六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　鶴殿
摂末社　祭道社　祭日神社　愛宕神社
氏子数　三〇〇戸
崇敬者数　一、五〇〇人
宮司　横林武彦

由緒沿革　行広荘一戸山遊一　木下達夫　赤田　鷹神の御分霊を加茂川の西岸に祀ったのが創りである。貞享二年津山城主森長継が入家を現在の山瀬に移住せた時、現社地に遷し、鶴山城東方の守護神、林田郷の二宮として尊崇した。もと、小安八幡、弓矢八幡宮と称した。明治四十二年七月、金田神社を合祀した。昭和十二年一月神饌幣帛料供進指定神社に指定せられた。

八幡神社　旧村社

津山市日上六三二

主祭神　誉田別尊　大山祇命　息長帯比売命
例祭　十月十五日
境内地　一、〇五九坪
主要建物　本殿　幣殿　社務所　什器庫
摂末社　荒神社　春日神社　稲荷神社
氏子数　八三戸
宮司　横林武彦　久山喜代一

由緒沿革　本神社は弘安四年、縄土三郎左馬助が元弘の役に従軍の時、守佐八幡宮に詣で武運長久を祈り、帰郷の際、同神社の御分霊を奉遷して現在地に祀った。

主祭神　息長帯比売命　相殿　天照大神

津山市川崎一四三〇

八幡神社　旧村社

津山市日上六三一

主祭神　誉田別尊　相殿　天照大御神
例祭　春日祭　十月十五日
境内地　一、二一二坪
主要建物　本殿　拝殿　鶴殿
摂末社　稲荷神社
氏子数　一〇〇戸
宮司　瀬島秀男　正利
崇敬者数　約一、二〇〇人
由緒沿革　創建は弘仁十二年である。建武三年武将井上正清が当地の田隈河東方の岩黒倉山に築城のとき、祈願して再建した。延宝五年兼作太守森内記長継公が、本殿を造営・本殿上棟修繕を奉仕した。明治六年村社に列し、昭和十年幣帛料供進神社に指定せられた。

八幡神社　旧無格社

苫田郡鏡野町鏡宿寺一一五〇

主祭神　誉田別尊　息長帯比売命　帯中日子命
例祭　十月十五日
境内地　一、〇九〇坪
主要建物　本殿　幣殿　神輿庫
摂末社　春日神社　稲荷神社
氏子数　一〇〇戸
宮司　瀬島秀男　楼井　直
崇敬者数　約一二〇人
由緒沿革　創建は弘仁十二年（八二一）と伝えられる。正清が当地の田隈河東方の岩黒倉山に築城のとき、祈願して再建した。延宝五年兼作太守森内記長継公が、本殿を造営・本殿上棟修繕を奉仕した。明治六年村社に列し、昭和十年幣帛料供進神社に指定せられた。

八幡神社　旧無格社

津山市川崎一四三〇

主祭神　誉田別尊　息長帯比売命　相殿　天照大神

例祭　十月十五日
境内地　七二一坪
主要建物　拝殿　神楽殿　神輿庫
摂末社　荒神社　稲荷神社　河野神社
氏子数　八〇戸
宮司　豊田元留
崇敬者数　約一、一〇〇人
由緒沿革　創建は詳かでないが、口碑によると、仁徳天皇の時代に当村地頭職奈臣原八兵衛一書・天和三年に原十兵衛一族が再建、元禄十六年に原八兵衛が再建現在に至る。慶安三年に当村地頭職奈臣

宝永六年火災で炎上。天保二年再建して現在に至っている。明治六年村社に列した。大正十二年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

八幡神社　旧村社

苫田郡鏡野町真加部一三〇二

主祭神　誉田別尊　国常立命　大己貴命
例祭　十月十七日　**境内地**　九三三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　籠殿
摂末社　稲荷神社　荒神社
氏子数　一〇一戸　**崇敬者数**　五〇〇人
宮司　平島勝彦
責任役員　宇佐見陳正　植木正吾
由緒沿革　創建年月・由緒等不詳。元禄癸未年森内記長継公が崇敬し社殿再建した。元文巳未四年社殿を再建、明治四十一年総社・井上神社を合祀した。明治初年村社に列した。

八幡神社　旧村社

苫田郡阿波村(字位登山)一四七九

主祭神　誉田別尊　大己貴命　金山彦命　素盞嗚尊　武内宿禰
例祭　十一月一日　**境内地**　四五五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　随身門　神庫
摂末社　山神社　天満社　荒神社　稲荷社　皇大神宮・豊受大神二社
氏子数　一五〇戸
宮司　前橋貞晴
責任役員　岸本鎮実　奥埜一郎　西山源六　歌房　毅
特殊神事　花祭(県指定重要民俗資料)
由緒沿革　慶雲二年本村字小宮に鴨神社として創祀した。大同元年八月筑紫国宇佐八幡宮の御分霊を奉祀し、現在の位登山に遷座した。嘉祥三年に社殿を再建、弘治四年六月雲州尼子晴久の臣村上左京進の時、社殿の大造営を成就した。天正年中高山城主草苅景継は、艮の鎮護として崇敬し、社領を寄進した。森忠政も崇敬した。幕領となってからも、鉄山業者の守護神として、加茂二郷一庄の大宮として今日に至っている。

原神社　旧村社

苫田郡鏡野町原五七三

主祭神　天穂日命　大日霊尊
例祭　十月九日　**境内地**　四一九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　籠殿
摂末社　荒神社
氏子数　三〇戸
宮司　宮尾　旭
責任役員　村上喜与志　岡西富男　河原重治郎
由緒沿革　正親町天皇の天正六年に再建して、天神宮と奉称した。慶長八年三月に五社に分祀して、五社天神と称した。延宝八年十一月に再建して、天満大自在天神宮の御社殿が竣工した。明治維新のとき原神社と改称して、村社に列せられた。

日吉神社　旧村社

津山市川崎一〇二八

主祭神　大己貴命
例祭　十月十八日　**境内地**　六八〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　籠殿
摂末社　稲荷神社
氏子数　七〇戸
宮司　石田実夫
責任役員　杉山定男　下山定一　坂本虎吉
由緒沿革　本神社は往昔近江国滋賀郡坂本村の紀澄弥という人が、此郷に来住して日吉神社の御分霊を奉祀し、日吉神社と称し奉った。爾来住民が増加し、産土神として尊崇した。神社の南方に今宮と云って、紀澄弥を奉祀する社がある。

檜山神社　旧無格社

苫田郡鏡野町高山九四八

主祭神　国常立命　外一柱
例祭　十月八日　**境内地**　三九〇・二九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　篭殿
摂末社　饒石神社　金閣神社
崇敬者数　五〇〇人
宮司　宮尾　旭
責任役員　長滝　実　小谷貞夫　柚木　弘
由緒沿革　創建年代・由緒等は不詳である。国内神社名帳に所載の神社である。

布勢神社　旧郷社

苫田郡富村大字富西谷二二〇

主祭神　素盞嗚尊　櫛稲田媛命
例祭　十月九日　五月五日御田植祭
境内地　九一八・四八
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　籠殿　随身門　輿倉
摂末社　福井神社　斉神社　愛宕神社　素盞神社　祖霊社　招魂社
氏子数　二五〇戸
宮司　宮尾金利
責任役員　押阪勝忠　生駒満昌　長田明志
宝物　獅子面　**特殊神事**　お田植祭
由緒沿革　古くは布施両宮大明神・明神様あるいは大宮と呼び、富荘二十四ヶ村の総鎮守であった。東西に社殿があり、鎮座地は富村大字富西谷宮原の平地で、明治五年郷社に指定せられた。祭日は一歳三度で、お田植祭は五月五日、大祭礼は十月九日、霜月祭は十二月五日である。富の荘の総鎮守として、社領は三町八反で、毎年盛大なお田植祭を行なっている。このお田植祭は古風で、昭和三十七年四月民俗資料として、県の文化財に指定せられた。

古川神社　旧村社

苫田郡鏡野町古川一三一七

主祭神　大山祇神　土祖神　月読命　宇迦御魂神
例祭　十月十七日　**境内地**　五七・六坪
主要建物　本殿　拝殿　釣殿　神饌所　神庫
摂末社　時雄神社　金刀比羅神社
氏子数　一五〇戸　**崇敬者数**　五〇人
宮司　河原太津彦
責任役員　武村　正　日笠寅夫
由緒沿革　創建は天智天皇の御宇巳丑年と伝える。神階は正六位上である。本神社は古より郷土の守護神として栄え、社領もあったが中絶した。天正六年九月二十六日に本神社を再建した。地頭方荒神山城主花房助兵衛尉職秀、領家方院庄城主片山左馬助秀胤が戊亥の守護神として再建した事が梁牌にある。明治二年正月鶴田藩主松平武聰が病気平癒のため、神鏡並に幣料を奉納した。

堀坂神社　旧村社

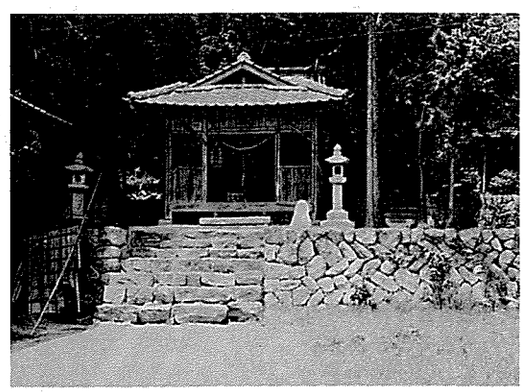
津山市堀坂一〇四六

主祭神　菅原神　天穂日命　大国主命
例祭　十月二十五日
境内地　一、五二二・三四
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　神楽殿　神輿庫
摂末社　稲荷神社　天一神社　荒神社　若宮　祖霊社
氏子数　一八四戸
宮司　湯浅正敬
責任役員　吉永吉廣　高山満夫　高山満夫

三鏡神社　旧無格社

苫田郡鏡野町越畑七七五

由緒沿革　本神社は承安年中の創建で、美作国六十六社の一つである。天正年中火災に罹り社殿を悉く焼失した。天満大自在天神宮、或は天神宮と号した。宝暦二年本殿再建の節、領主が米五石を進献した。文政六年村内釜の口開鑿竣工御礼のため、代官が参拝して神鏡、金子を寄進した。弘化三年領主が家臣に領内を巡回させた時、金幣、金子を献じ武運長久、五穀成就の祈願を行った。明治六年に村社に列格した。



主祭神 誉田別尊　大国主神
例祭 十月十八日　**境内地** 一二六坪
主要建物 本殿　釣殿　拝殿　神具庫　社務所
摂末社 岩山神社　荒神社
氏子数 九〇戸
宮司 欠　**禰宜** 林　易二
責任役員 瀬畑政行　瀬畑隆雄　三木通寿
由緒沿革 創建年月は不詳である。明治四十五年四月四日に、八幡神社に岩尾神社・越畑神社・出雲神社等を合祀し、三鏡神社と改称した。

三橋神社　旧無格社

津山市小姓町六三

主祭神 倉稲魂大神
例祭 十月二十四日　**境内地** 四四坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿
氏子数 一〇〇戸
宮司 井口林士
責任役員 小松遊亀栄　高田義夫
由緒沿革 正徳二年九月二十八日勧請その他不詳。

三室神社　旧村社

苫田郡加茂町大字青柳二七一

主祭神 大己貴命
例祭 十月六日　**境内地** 二八〇坪
主要建物 本殿　幣殿　参籠殿
摂末社 啓神社　稲荷神社　荒神社
氏子数 三五戸　**崇敬者数** 二、〇〇〇人
宮司 湯浅勝興
責任役員 岡田勇一　中井　林　只友柳亮　只友　誠　只友　仁
由緒沿革 本神社は里尾の寺山にある。創建・由緒等不詳である。御祭神は大己貴命・大山祇命・木花咲耶姫命となっているが、「作陽誌」には「父国玉命・事代主命・宇賀魂命」といい、此の神はタタラ師の持来った神である。故に金鋳護神という。また山の神ともいう、と記している。また「上加茂村誌」によると、元禄八年、神祇吉田家の神社録にも加入され、室尾分の氏神として崇敬せられたという。その後明治九年に三室神社と改称し、同四十二年室尾内山神社、直日神社を合祀した。大正二年上加茂神社に合祀せられた。昭和二十四年再び旧跡地に遷座し奉斎せられ今日にいたっている。

珍敷神社　旧村社

苫田郡加茂町大字物見一一四

主祭神 菅原神　高靇神　息長帯比売命　建速須佐之男命　倉稲魂命
例祭 十月二十五日　**境内地** 二五五坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　倉庫
摂末社 山神社　荒神社
由緒沿革 創建は長暦元庚辰年。寛文五年森内記長継公の助成により本殿を再建。元禄六年、享保九年再建立。天保二年女志良世神社を現社名に改称。



氏子数 八〇戸　**崇敬者数** 二、〇〇〇人
宮司 湯浅勝興
責任役員 能勢作一　鈴木幸次郎　小林勇市
特殊神事 花祭り（岡山県重要文化財）
由緒沿革 本神社の創建・由緒等不詳。元天満神社であったが、大正二年に上加茂神社に合祀された。大正二年四月二十二日浦栲の素盞嗚神社・天満神社境内にあった稲荷神社を合祀し、社号を物見神社と改称した。昭和二十四年上加茂神社に合祀せられた旧天満神社の氏神を遷座して今日に至っている。

森神社　旧村社

津山市横山三二一

主祭神 国常立尊　手力男命
例祭 十月九日　**境内地** 九四七坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿
摂末社 八代神社　天神社　荒神社
氏子数 一〇〇戸
宮司 井口定彦
責任役員 杉山頼雄　日下　實　平井淳雄
由緒沿革 口碑によると、戦国時代に此の地の領主の荒尾志摩守が京都の伏見から、稲荷神社の御分霊を勧請したものと伝えている。勧請年代は不詳で、もと町内字朝伏に鎮座していたのを、寛文四年に現在地に遷座した。明治四十五年一月境外末社の国常立神社を合祀した。

森原神社　旧村社

苫田郡鏡野町新森原五四七

主祭神 天穂日命　大己貴命　蛭子命　豊磐間戸神　櫛磐間戸神　素盞嗚尊
例祭 十月十日　**境内地** 九三五坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社 稲荷神社　荒神社　国常立神社　荒神社
氏子数 一〇二戸　**崇敬者数** 五〇〇人
宮司 平島勝彦
責任役員 中江　潔　田村　恵　名和和幸　和田守弘
由緒沿革 本神社は長久四年十一月五日目崎城主金剛入道正雅が城の鬼門除として勧請し天神宮と称し崇敬した。文明年中毛利日向に敗れ、日向の裔が城主となり本神社を崇敬した。明治初年、森原神社と改称した。大正四年十一月、豊磐間戸神社、櫛磐間戸神社、荒神社を合祀した。大正十二年十一月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

八出神社　旧郷社

津山市八出三五七

主祭神 菅原神
例祭 十月二十五日　**境内地** 九六八・八二坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　社務所　倉庫
摂末社 稲荷神社　荒神社　八幡神社　老松神社
氏子数 五〇〇戸
宮司 石田実夫
責任役員 須江長蔵　陶　敏郎　須江順一
由緒沿革 作陽誌に曰く、長岡庄、八出神社。在八出邑之氏祠也伝言菅公左遷之時到此地留八日而出去謂八出者略之也普按菅公昌泰四年謂八出千宰府其道皆経海上未聞出於作州説恐非也一説天暦年中菅公之霊降此祀人言帰路此地清霊留八月而去亦朝三暮四之言也蓋本洲植月有梶並等諸氏矣姓菅原其部象甚盛大平記所謂美作菅家一黨者是也雖未詳其世系並以菅公為鼻祖宜哉其祖廟之多特八出梶並之祠人心所帰仰最超他豈無其故哉姑関其説而可也。文徳実録載天安元年四月辰菅原朝臣是善今為美作守云云是善者菅公父也事跡所縁既尚矣。

八頭神社　旧無格社

津山市桶屋町一

主祭神 倉稲魂命
例祭 十月三日　**境内地** 九三・三五坪
主要建物 本殿
摂末社 若美禰神社
氏子数 二〇〇戸
宮司 井口林士
責任役員 粉川照夫　水島　昇
由緒沿革 本神社は明和七年神職熱田石見が勧請した。文化十五年二月山城国稲荷本社に請うて正一位稲荷の神階を受け、八頭神社と号した。

八坂神社　旧村社

津山市近長五五〇

主祭神　素盞嗚尊
例祭　十月二十二日　**境内地**　八二三・八〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神楽殿
氏子数　五〇戸
宮司　黒田元留
責任役員　甲田寅夫　甲田三郎　今田鶴一　甲田頼光
由緒沿革　創建は弘仁十二年である。牛頭天王を奉祀している。明治元年に八坂神社と改称した。

山西神社　旧村社

津山市高野山西一六〇九

主祭神　菟道稚郎皇子命
例祭　十月二十日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　金刀比羅神社　天神社　荒神社
氏子数　一二〇戸
宮司　片山舎泰
責任役員　河本久二　近藤正之　仁木照紀　高橋輝男
由緒沿革　創建年月・由緒等不詳であるが、もと乙宮にあり乙宮大明神と称し、もとの山西村の氏神である。祭神は応神天皇の御子で、仁徳天皇の兄に当らせられる。うじのわきいらつこの命である。



陽地神社　旧村社

津山市高野山西一六〇九

主祭神　伊邪那岐命　伊邪那美命
例祭　十月二十日　**境内地**　六三〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　高先神社　杉神社　岩谷神社　荒神社
氏子数　三〇〇戸
宮司　片山舎泰
責任役員　松田重太郎　松本正松　勝浦和平　広瀬美之作　保田三一
由緒沿革　創建年代由緒等不詳であるが、御祭神は伊邪那岐・伊邪那美大神であって、多賀大社よりの勧請と云い伝えられ、明治以前は乳釈迦様の愛称をもって乳のよく出る神として妊産婦の信仰が厚く、明治の始め陽地神社と改称して、此の地方の氏神として村社に列せられた。

吉田神社　旧村社

津山市神戸二九二

主祭神　天児屋根命　武雷神　斎主神　比咩大神　高皇産霊神　興台産霊神　稚彦霊神　神皇産霊神　火産霊神
例祭　十月十日　**境内地**　一、五二七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫
摂末社　御先神社　荒神社　若宮　伊勢社
氏子数　一五〇戸
宮司　河原太津彦
責任役員　杉山興弥　日原農夫也
由緒沿革　創建年代は不詳である。承久三年後鳥羽上皇が隠岐に御遷幸の途次、神戸郷院庄に御駐蹕あらせられた時に、后宮が御病気に悩み給わったので、上皇は后宮の病気平癒祈願の御親祭のため、諸神勧請の神社であると伝えている。寛文四年国主森長継が現在地に御遷座し改築した。明治六年二月村社に列した。明治四十年五月二十二日神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

吉田神社　旧村社

津山市吉田六四八

主祭神　大己貴神
例祭　十月十日　**境内地**　二、一八二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　金刀比羅社　稲荷神社　天満宮　荒神社
生目八幡社　御先社
氏子数　六五戸
宮司　横林武彦
責任役員　安藤峯一　神崎統雄　金崎　正　稲垣晴夫
由緒沿革　本神社の勧請年月日等不詳。往古出雲大社の御分霊を大字の南北に祀り、両国主大明神と称した。明治四年北の国司神社を合祀して吉田神社と改称した。明治五年北の国司神社跡に金刀比羅社を祀った。明治六年村社に列した。大正十年十二月に神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

芳野神社　旧村社

苫田郡鏡野町大字宗枝四六五

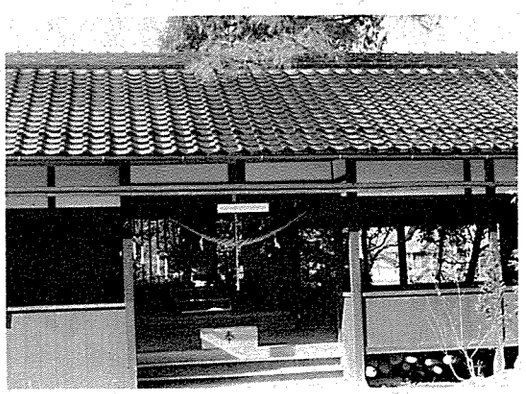
主祭神　素盞嗚尊
例祭　十月十七日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　籠殿
摂末社　地主神　荒神社
氏子数　二五戸
宮司　杉山正宣



吉原神社　旧村社

苫田郡鏡野町吉原三八八

主祭神　伊弉諾命　伊弉冉命　木花開耶姫命
例祭　十月十七日　**境内地**　一八一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　倉庫
摂末社　荒神社
責任役員　上山禎一　杉山忠二
由緒沿革　天仁元年の勧請。作陽誌に「宗枝神社在宗枝村式号今宮氏神也。祭祀九月二十七日。境内東西二十間南北六十間」とある。大正三年十月十日同町寺元字茶臼山に宗枝神社に合祀し、昭和二十七年十月八日もとの地に遷座した。境外末社は夜中神社である。



吉見神社　旧村社

津山市吉見五〇九

主祭神　大日霎尊　大己貴命
氏子数　一五〇戸
宮司　杉山正宣
責任役員　戸田　等　原田　勝　坂手申武
由緒沿革　本神社の創建は天仁元年で、由緒等は不詳である。明治十二年九月二十二日村社に列格した。大正三年十月十日芳野神社を合祀した。昭和二十七年十月八日現地に遷座した。御社殿は芳野神社末社を利用し移転改築した。

例　祭　十月十七日　**境内地**　八一六・八七坪
主要建物　本殿　拝殿　幣殿　神楽殿
氏子数　一二〇戸
宮　司　易　淳臣
責任役員　田渕欣治　早瀬正一　赤田　強　中井正一
由緒沿革　文徳天皇仁寿元年三月十九日に字岩尾山麓に創建して大日霎命を勧請し、女一神社と称した。元和二年に字京上に遷座した。後冷泉天皇の安和元年九月十八日に字田中に、社殿を創建し、大己貴命を奉斎し、国司神社と称した。元和二年九月十九日に同神社を字京上に遷座して二社を合祀した。明治六年二月村社に列し吉見神社と改称した。大正六年二月無格社十二神社を合祀した。大正十年十月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

若王神社　旧村社

津山市名坂二一四一

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月二十日　**境内地**　五七〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社
氏子数　七〇戸
宮　司　水島　文
責任役員　山本覚平　本山又一
由緒沿革　創建年月は不詳である。美作神俗通覧記に曰く、若王神社は文安甲子年に田渕城を築造の初め、第一東平字田渕に神社を創建して、田渕若王宮と崇敬し、城も田渕城と称して、城の鎮守神社であったが、天文十三年雲州尼子氏の軍に攻められて没落廃城となった。慶長十七年九月に村人によって、現在地に遷座し、若王宮と改称し氏神として尊崇した。

霊代（神体）

神社の祭神は無形の神霊にましますので、これを象徴し、表現する物を対象として祭ることが神社の伝統となっている。この神霊の象徴物、又は表現物を霊代或は神体という。霊代は鏡・玉・剣・笏・神像・神幣・神符であるが、古代の特殊な伝統から、神奈備の山・霊域を囲む瀑布・巨石の磐座・無数の小石の累積等が神体となっている神社もある。

県の神社数

神社数は時代により変化があり、戦後は宗教法人となった神社だけが統計に出ているから、現実に存在する神社で統計にのらない神社、従前の二社以上が一宗教法人になっている場合もあるため、神社数は非常に少くなったような観を呈している。
旧明細帳神社数四、九九八。神社本庁所属神社数一、六二六。旧官国幣社数四。別表神社数五。現在の各支部神社数は別表に記載してある。

社名

神社の社名は多様で、その由来は神社創建と深い関連がある。即ち奉斎している御祭神の御尊名を社名としているもの、奉斎している御祭神の御神徳等を社名としているもの、創建の事情等を社名としたもの、宗社の御祭神を勧請して奉斎し、宗社の社名をそのまゝ奉称しているもの等に大別出来るが、上記の大別を兼ねたものもある。また大神宮・神宮・宮・大神社・大社・神社・社・大明神・大神・明神等の称号がある。神社が国家管理時代には、社号に上下の差等があって、勝手に呼称することは禁止されていたが、現在は自由になっている。

玉野支部　（二八社）

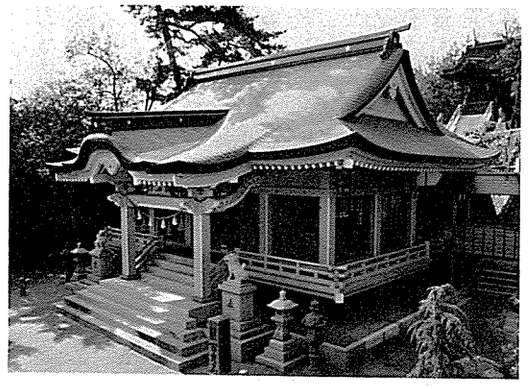
五十猛神社　玉野市広岡七〇三……七八
稲荷神社　〃　下山坂一五二三……七八
御前八幡宮　〃　御崎二―二―三……七八
加茂神社　〃　木目九一〇……七八
鴨神社　〃　長尾一〇七三……七九
熊野神社　〃　沼二二七……七九
荒神社　〃　大藪五三七……七九
荒神社　〃　後閑三三三……七九
荒神社　〃　上山坂八三六……七九
荒神社　〃　東田井地五一七……八〇
荒神社　〃　西田井地五四五……八〇
玉比咩神社　〃　玉五―六〇五……八〇
天神宮　〃　八浜町大崎一六九―一・一七〇…八〇
天神宮　玉野市用吉八六五……八〇
八幡宮　〃　八浜町大崎一九三〇―一・一九三一……八〇
八幡宮　〃　槌ケ原二〇二二……八一
八幡宮　〃　宇野二―三〇―二……八一
八幡宮　〃　八浜町八浜一〇九二……八一
八幡宮　〃　渋川二一九……八二
八幡宮　〃　小島地一一三二……八二
八幡宮　〃　後閑一五〇〇……八二
八幡宮　〃　田井一〇五七……八二
八幡宮　〃　用吉六〇一……八三
八幡宮　〃　番田一六三一……八三
八幡宮　〃　胸上一五〇〇……八三
早瀧比咩神社　〃　滝七七三……八四
日吉神社　〃　田井二四三二……八四
水守神社　〃　山田八五六……八四

祭祀

神社は神霊を招請し、神霊に奉仕するところである。この神霊に対する奉仕が広い意味で祭祀である。現今、各地の神社は氏神が圧倒的に多いことは、神社の祭祀は氏子という集団の祭祀が重要な意味があり、社会的に祭られるのが、大きな特色である。祭祀は神社によりいろ〳〵な方法・形式があり、内容には種々の意義をもっている。祭祀を行うことは敬神崇祖・敬神報賽の心を生活上に具現することであり、神人相接する如く、神人一体として行われるべきものである。神職は神々に奉仕し、祭祀を司り、民意を神々に奏上し、神意を民生に周知させ、神徳を宣布することが神職の教化活動の中心である。
祭祀の内容は次のように大別出来ると思う。一、祈願　二、神恩報賽　三、神徳頌讃　四、献進　五、神意奉戴　六、慰霊安鎮　七、報告　八、禊祓除災　九、卜占　一〇、霊験呪祝　以上の如く類別出来るが、単一の目的の祭祀もあるが、数個又は大多数を含んで行われる祭祀が多い。上記の他に動機による分類、様式による分類も出来る。祭式上から大祭・中祭・小祭・諸式に区別して祭祀を斎行することになっている。また殿上祭祀・庭上祭祀・域内祭祀・域外祭祀の別があり、恒例祭祀・臨時祭祀がある。他に各神社の特殊神事がある。

御前八幡宮　旧村社

玉野市御崎二―二一三



主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后　配祀日本武尊・猿田彦命
例　祭　十月十六日・十七日
境内地　一、五五七坪
主要建物　本殿　廊下　幣殿　釣殿　拝殿　客殿　渡廊下
摂末社　姫島神社（天神社）
氏子数　三、〇〇〇戸　**崇敬者数**　二、〇〇〇人
宮　司　堀　倫之　**禰　宜**　堀　良枝
責任役員　田川公一　相川琢次　四宮喜太郎
宝　物　大刀一口　牛玉一個　馬角一個
由緒沿革　創建年月不詳であるが、建武の頃は山上の御鎮座であったが、天文年間今の社地に奉遷したと「吉備温故」及び「備陽国誌」にある。当地方の古社で、藩主の崇敬が厚く、社領高一石五斗二升一合。昭和十八年九月十日当八幡宮に和田御鎮座八幡宮、和田御鎮座御前神社を合祀して、御前神社の旧社地に移し、社名を御前八幡宮と改称した。

稲荷神社　旧無格社

玉野市下山坂一五二三

主祭神　倉稲魂命
例　祭　十月十六日　**境内地**　六一坪
主要建物　本殿　拝殿
崇敬者数　三二〇人
宮　司　欠
由緒沿革　創建年代・由緒不詳。

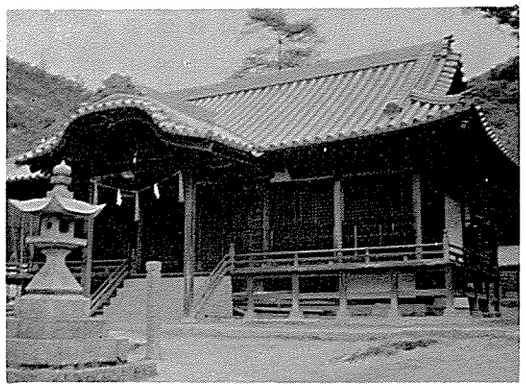
加茂神社　旧村社

玉野市木目九一〇

主祭神　阿遅鉏高日子根命
例　祭　十月十五日・十六日
境内地　九六三坪
主要建物　本殿　廊下　幣殿　拝殿
摂末社　龍神社
氏子数　一〇〇戸　**崇敬者数**　六〇人
宮　司　堀　倫之
責任役員　橋本頼夫　伊達武志　近藤四郎
宝　物　棟札
由緒沿革　当神社の創建年月不詳。中世は加茂善児宮または善児宮といったが、明治初年旧号に復した。一説に鴨神社は当社であるというが、何等証するものがない。以前は現社地より五町許り東方の山頂の御鎮座であったが、何れの頃か字摩奥谷という所に移転したが、宝暦十庚辰年更に現地に奉遷したという。

鴨神社　旧郷社

玉野市長尾一〇七三



主祭神　味鉏高日子根命　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月十六日　**境内地**　三、八七六・一坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　社務所
摂末社　荒神社　稲荷神社　宮嶋神社　石鉄神社　木野山宮　疫神社　素盞嗚神社
氏子数　三〇〇戸　**崇敬者数**　一、六〇〇人
宮　司　吉野家範
責任役員　金広　浩　今川邦弘　三宅祐郎　巻幡　達　河合光男　木村茂夫
由緒沿革　当神社は延喜初年の創建。延喜式神名帳に鴨神社（鴨神小）とある児島郡内最古の神社で、備前国式内二十六社の一である。平安期初頭に大和国葛上郡加茂に鎮座する高加茂神社の神を勧請し創建したもの。鎌倉中期後堀河天皇の貞永二年、宇佐八幡宮を勧請し合祀した。以後八幡宮と称したが明治二年旧号に復し、郷社に列した。もと、社領田一反歩あった。明治四十年一月、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

熊野神社　旧村社

玉野市沼二二七

主祭神　伊弉册尊
例　祭　十月十一日　**境内地**　一、二二〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社　素盞嗚神社　大仙宮
氏子数　六〇戸　**崇敬者数**　一八〇人
宮　司　近藤　司
責任役員　緋田　一　平井　剛　明日英雄
由緒沿革　紀伊熊野神社から勧請したが、年代は不詳である。明治三十六年十月、火災のため烏有に帰し、現社殿は明治三十七年一月の再建である。

荒神社　旧村社

玉野市大藪五三七

主祭神　素盞嗚尊　武甕槌命
例　祭　十月五日　**境内地**　三六七坪
主要建物　本殿　廊下　幣殿　釣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　楠見神社　地神社
氏子数　七〇戸　**崇敬者数**　二〇〇人
宮　司　近藤　司
責任役員　高畑武男　相賀康治　藤原貞三　三宅嘉博
宝　物　棟札一枚　正徳三年四月
由緒沿革　創建年月等不詳。本殿は正徳三年の再建である。明治四十年九月、神饌幣帛料を供進することのできる神社に指定せられた。大正十年九月二十日、境外無格社楠見神社を合祀した。

荒神社　旧無格社

玉野市上山坂八三六

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　四月十日　**境内地**　一二六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　塩竈神社　稲荷神社
氏子数　二五戸　**崇敬神数**　七〇人
宮　司　近藤　司
責任役員　藤原文男　藤原福一
宝　物　棟札　宝永四年六月
由緒沿革　創建年月由緒等不詳。

例　祭　十月十六日　境内地　四二六坪
主要建物　本殿　拝殿
崇敬者数　三二〇人
宮　司　欠
由緒沿革　創建年代・由緒不詳。

荒神社　旧無格社

玉野市東田井地五一七

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月十三日　境内地　三二三坪
主要建物　本殿　拝殿
崇敬者数　二八〇人
宮　司　欠
由緒沿革　創建年代・由緒不詳。

荒神社　旧無格社

玉野市西田井地五四五

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月十三日　境内地　九〇坪
主要建物　本殿　拝殿
崇敬者数　四一〇人
宮　司　欠
由緒沿革　創建年月日・由緒不詳。

玉比咩神社　旧村社

玉野市玉五―六〇五

主祭神　豊玉姫命
例　祭　十月九日・十日
境内地　二、一七〇坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　神輿庫　社務所
摂末社　荒神社　若宮　臥龍稲荷神社　玉石神社　嘉陽神社　伊勢宮　臥龍稲荷神社奥宮
氏子数　四、八〇〇戸　崇敬者数　一〇、〇〇〇人
宮　司　近土重則　禰　宜　近土泰彦
権禰宜　近土文子
責任役員　中吉浅吉　三木新一　中平一夫　山本軍治
由緒沿革　当神社の創建は土御門天皇文明十八年以前と思われる。備前国神名帳総社本に、「児島郡に坐す十一社の内、加茂郷玉村座玉比咩神社」とあり、応永本に「児島郡に座す九社の内従四位上玉比咩明神」西大寺本に「児島郡に坐す九社の内玉比呼明神」とある。徳川時代に、池田綱政・継政は元禄元年、享保十九年に社殿を造営した。明治二年旧号の玉比咩神社に復した。

天神宮　旧無格社

玉野市八浜町大崎一六九―一・一七〇

主祭神　菅原道真朝臣
例　祭　十月十四日　境内地　一、五一四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　秋葉宮　地神宮　紅梅神社
崇敬者数　九一〇人
宮　司　尾崎　良
責任役員　大塚　巴　高原楠夫　高原勤一
由緒沿革　文暦元年十月創建。菅原道真公が太宰府へ左遷の際、この地にお立寄りになったとき、海中の清水を取って硯水にお用いになった。この清水を取られた岩を俗に「ゲウノダン」という。それで硯井天満宮と申し上げる。海中に清水の湧く井戸があって「硯井の水」という。文教の神として霊験あらかたである。

天神宮　旧村社

玉野市用吉八六五

主祭神　菅原道真朝臣
例　祭　十月十七日　境内地　五三一・九七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社　稲荷神社
氏子数　八〇戸　崇敬者数　一〇〇人
宮　司　堀　正臣
責任役員　脇坂重文　大賀豊次　歳常虎雄
由緒沿革　享和元年三月七日の創建で、以前は常山の頂上天神丸に御鎮座であったのを現在地に奉遷した。

八幡宮　旧村社

玉野市八浜町大崎一九三〇―一・一九三一

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后

例　祭　十月十五日　境内地　一、六三二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　祇園宮　地神宮
氏子数　三〇〇戸　崇敬者数　一、〇〇〇人
宮　司　尾崎　良
責任役員　大塚　巴　高原楠夫　三道　高
由緒沿革　当神社は承久二年創建。前年源実朝が鶴岡八幡宮に参拝したとき、大地震があったので、所々に八幡宮を祭祀したが、その一社として創建した。古昔、社地は一小島であったために渦の宮と称した。池田家の尊信が篤く度々代参があった。昭和二十年十一月、神饌幣帛料を供進すべき神社に指定せられた。

八幡宮　旧村社

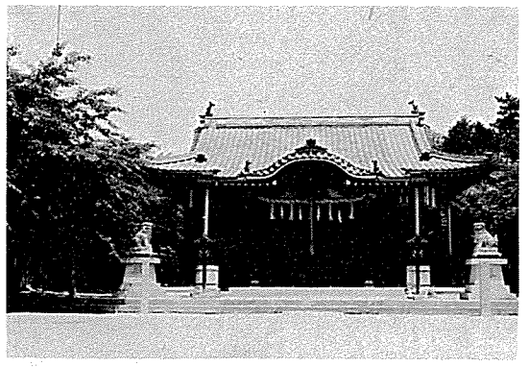
玉野市槌ヶ原二〇二二

主祭神　品陀和気命　息長足姫命　王依姫命　比売神　加茂津角身命
例　祭　十月十五日　境内地　一、三五〇・三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫
摂末社　荒神社　兵主神社　武甕槌神社　素盞嗚神社　宇賀神社　熊野神社　荒神社
氏子数　二五〇戸　崇敬者数　九九〇人
宮　司　吉野家範
責任役員　三宅定重　三宅百市
由緒沿革　当神社は現在地に御鎮座以前に、西方葛山の頂に相当古くから御鎮座していたのを、円融天皇の天禄三年十月現在地に奉遷した。中御門天皇の正徳二年十一月に本殿改築、明治五年五月十一日村社に列格した。昭和三年十月、神饌幣帛料を供進することのできる神社に指定せられた。

八幡宮　旧村社

玉野市宇野二―三〇―二

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月十三日・十四日
境内地　一、五一五坪
主要建物　本殿　幣殿　中殿　拝殿　随身門　社務所　神庫
摂末社　若宮神社　稲荷神社　野児島神社



氏子数　二、〇〇〇戸　崇敬者数　五、〇〇〇人
宮　司　吉野家範
責任役員　朝倉利正　榧　二郎　岡本明義　藤原正憲　長田四郎　篠原正友　山下定明　藤原一信　小金　守　藤井福市　八田　薫　高橋静恵
由緒沿革　創建年代不詳。もと藤井大生浦の現藤井稲荷神社の麓に鎮座し、宇野村の鎮守として祭られていた。寛文六年備前国内の小社を寄宮とした時、産土神として残された社で、享保三年この地の御崎宮の跡地の小丸山に奉遷せられた。昭和十四年十一月火災のため全焼。昭和十七年に再建したのが現在の社殿である。

八幡宮　旧村社

玉野市八浜町八浜一〇九二

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后　仁徳天皇
例　祭　十月十五日　境内地　二、五一四坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　神庫　絵馬殿
摂末社　快神社　御崎神社　天満宮　荒神宮　石鎚宮　恵美須宮
氏子数　五〇〇戸　崇敬者数　三、〇〇〇人
宮　司　尾崎　良
責任役員　柏谷敏男　小谷千三　金川一二三　藤原弘　藤原基義
宝　物　棟札二枚（市文化財）
由緒沿革　創建年月等不詳。現存の棟札中最古のものは応永三十四年二月二十七日とあるをもって、それ以前の創建と思われる。池田藩主代々の崇敬神社である。造営、修理、祈願、社領、代参、参拝等せられた事実が多い。

八幡宮　旧村社

玉野市渋川二一九



由緒沿革　当神社の創建年月は不詳。古は山の中腹にあったが、寛文九年、城主池田光政公が稲川、西村、村田、郡志、浅井の各氏、地頭加賀氏、堀氏等に再造営を命じ現在の社地に奉遷したという。

八幡宮　旧村社

玉野市小島地一一三一

主祭神　大雀命
例祭　十月十五日・十六日
境内地　一、五三二・七五坪
主要建物　本殿　廊下　幣殿　拝殿　神輿倉
氏子数　六〇戸　**崇敬者数**　五〇人
宮司　堀　倫之
責任役員　水井福夫　石井国雄　井上利男
由緒沿革　勧請年月不詳であるが、御内陣の箱に元禄七年八月二十一日とあるので、この時の創建と推測せられる。

八幡宮　旧村社

玉野市後閑一五〇〇

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例祭　十月十五日　**境内地**　三〇六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿倉
摂末社　（素盞嗚神社　大山神社　龍神社　地神社）
荒神社
氏子数　八〇戸　**崇敬者数**　二二〇人
宮司　近藤　司
責任役員　井上暉蔵　伊東　司
宝物　棟札二枚　元禄五年三月・寛政十一年八月
由緒沿革　創建年月等不詳。後閑の宮山にある。当神社はもと古宮にあったのをこの地に奉遷したもので、現在の建築は元禄五年の再建である。



八幡宮　旧村社

玉野市田井一〇五七

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例祭　十月十五日　**境内地**　三〇六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　稲荷神社　木野山神社　厳島神社　他九社
氏子数　一、八〇〇戸　**崇敬者数**　四、〇〇〇人
宮司　萩野文二　**禰宜**　萩野泰子
責任役員　三原大蔵　原　敬　宮田寿一　熊沢　仁
岡本秋夫
由緒沿革　本神社の創建について、御内陣の内部に文正元年丙戌十一月十五日願主佐々木筑前守源久信とあるにより、この時に奉斎せられたかとも考えられる。「吉備温故秘録」に「田井新左衛門信高居住す。建武の頃の人なり。中略この子孫夢に八幡の神霊不測の告を蒙ること数度ありけるに依り、当村に宇佐八幡宮を勧請せし由」と。大正八年四月神饌幣帛料供進すべき神社に指定。

八幡宮　旧村社

玉野市用吉六〇一

主祭神　応神天皇　神功皇后　仲哀天皇
例祭　十月十七日
境内地　一、五六三・一一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社
氏子数　一〇〇戸　**崇敬者数**　一〇〇人
宮司　堀　正臣
責任役員　大賀安夫　小橋　久　森田喜久市　藤井亀

八幡宮　旧村社

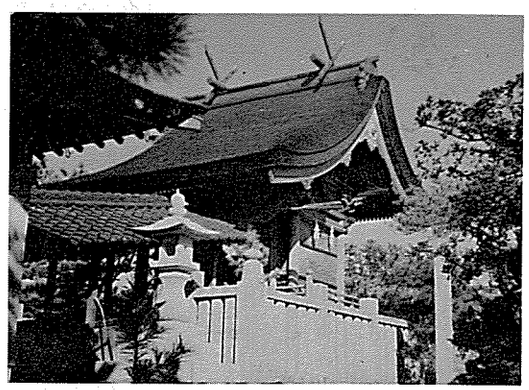
玉野市番田一六三一

主祭神　仲哀天皇　外二柱
例祭　十月十五日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　三社稲荷　荒神社　祇園社　砂黒神社
氏子数　一、七四七人
宮司　尾崎保志



由緒沿革　本神社の棟木に記してある日づけによると元文二年十一月二十六日とあるが、その他は不詳である。「備陽国誌」には「二百余年前、創建年代不詳」とある。

責任役員　森原義彰
由緒沿革　創建年月日不詳。吉備温故に、神功皇后が三韓御征伐の時、此処に船掛りせられ御揚陸の際、大きな亀が遊ぶのを御覧になり、遊亀山と名付けられた由、又村前に鉾島があり、天候が悪いので三種の神器をこの島に御移しになったところ、空が晴れたので、以来鉾島と称した由。この説は何の書にも見当らないが、古からの語り伝えであるから記すとある。この由緒により、その後宇佐八幡宮を勧請して産土神として奉斎したとの口碑がある。



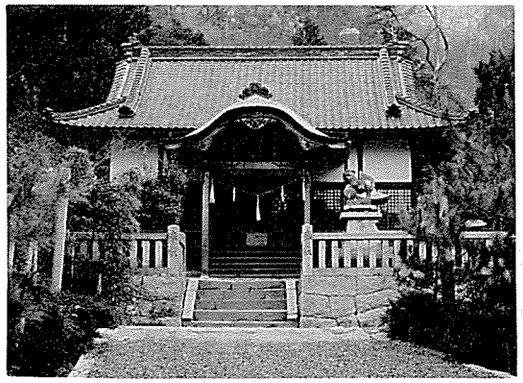
八幡宮　旧村社

玉野市胸上一五〇

主祭神　瀬織津姫命　速秋津姫命　天吉葛命
例　祭　十月十五日・十六日
境内地　三、五〇二・三二坪
主要建物　本殿　釣殿　幣殿　拝殿
摂末社　素盞嗚神社　滝神社　荒神社　岩上神社
稲荷神社
氏子数　一五〇戸
崇敬者数　二五〇人
宮　司　吉野家範
責任役員　堀内早苗　依田　雄　松岡　剛
由緒沿革　当神社は備前国内式外百五社の一で、神階は正四位下。中世早滝大明神、または単に大明神、あるいは明神と称したが、明治二年旧号に復した。（境内の碑文に大宝元年三月十五日紀州熊野山十二社の一を勧請云々とあるが根拠はない。）明治四十年九月二十七日村社に列格。同時に神饌幣帛料を供進することができる神社に指定せられた。

日吉神社　旧村社

玉野市田井二四三二



主祭神　大山咋命　大己貴命　外五柱
例　祭　四月十三日　**境内地**　八八三・五五坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿
摂末社　若宮　山神社　素盞嗚神社　稲荷神社
氏子数　三五戸　**崇敬者数**　二〇〇人
宮　司　尾崎　良
責任役員　長谷井　智　長谷井武一郎
由緒沿革　当神社は貞享四年害虫除の神として近江国日吉神社の御分霊を奉斎したようで、山王権現と称して崇敬された。幕末、明治、大正の末まで、各地の農民が参拝して繁昌した。今に残る玉垣や燈籠に往時の面影をしのぶことができる。現在の本殿は文久三年、幣殿、拝殿は明治十二年の建築である。明治二年日吉神社と改称。

水守神社　旧村社

玉野市山田八五六

主祭神　罔象女命
例　祭　十月十四日・十五日　祈年祭二月十七日
新嘗祭十一月二十三日
境内地　一、九六二坪
主要建物　本殿　廊下　幣殿　釣殿　拝殿
摂末社　諏訪神社　天神社　素盞嗚神社　稲荷神社
氏子数　四三八戸　**崇敬者数**　一、三〇〇人
宮　司　近藤　司
責任役員　木下　勇　三宅卓三　成山九一
宝　物　木像三体　石額牛玉　棟札　旧記
由緒沿革　創建年代不詳。旧記によると、当地に御貢蔵と御殿とを建て、貢物を収納していたが、そのことがやみ、公家が御神像を残されたので、水守大明神として御殿に奉斎したという。元亀年中、三宅城主が社殿を再建した。其後社殿も荒廃したので、貞享五年現社地に社殿を造営し、奉斎移転した。明治六年十月に村社列格。同四十年九月、神饌幣帛料を供進することができる神社に指定せられた。

玉島支部（二四社）

稲荷神社　倉敷市玉島八島七四五……八六
稲荷神社　〃　玉島四三〇―八……八六
滑（大国主）神社　〃　玉島黒崎一四〇八……八六
大国主神社　玉島道口二八一七……八六
御崎神社　〃　玉島富四二六……八六
御崎神社　〃　玉島黒崎二八〇八……八六
柏島神社　〃　玉島柏島七〇八六……八七
神前神社　〃　玉島八島三四九〇……八七
黒瀬神社　〃　玉島黒崎一七九五……八八
荒神社　〃　玉島富一六三……八八
荒神社　〃　玉島黒崎一四二二……八八
荒神社　倉敷市玉島黒崎五三九……八八
〃　玉島乙島三三七二……八八
塩竈神社　〃　玉島勇崎二―九七四……八九
七神社　〃　玉島黒崎一〇六八三……八九
諏訪神社　〃　玉島道口二六五……九〇
諏訪神社　〃　玉島黒崎五五四九……九〇
地神社　〃　玉島八島三六四……九〇
戸島神社　〃　玉島乙島一二五一……九〇
長尾神社　〃　玉島長尾二二八七……九一
羽黒神社　〃　玉島中央町一―二―一……九一
箸蔵神社　〃　玉島乙島二四五〇……九二
八幡神社　〃　玉島道口二四六九……九二
矢崎神社　〃　玉島黒崎四四六八……九三

神名

御祭神の御神名はその御神徳や御性格によるが、美称尊称の語を添えて奉称している。また御神名を一部省略して奉称する場合もあり、醜名によって奉称する場合もある。これらは御神徳を称えて尊敬と親愛、時には恐怖の心を現わしたものもある。御神名は日本書紀・古事記・古語拾遺・風土記・祝詞式・神名帳・姓氏録等の古典に基づいているものが多い。また数種の御神名のある神もある。

神号・社格・神位・神階

御神名には何々神と称号をそえて奉称している。これが御神号である。御神号には神・大神・大明神・天神・天王・王子等がある。神仏混淆時代には権現・大権現・菩薩・大菩薩等があった。

神社は伊勢皇大神宮は別格として、その他は性格上尊卑上下の区別があるべきではないが、自然にその規模・経済・信仰等から差別が出来て、政治的・社会的に待遇上の差別がうまれた。崇神天皇のとき天社・国社を定めて、神地・神戸を定められた。聖武天皇天平年間に神階（位）制度を実施せられた。県内の神社の神も叙階（位）になっているものがあった。叙位になると位田・位禄をうけた。明治以後はこの制度が廃止となった。醍醐天皇のとき延喜式の勅撰があり、その神名帳に登録せられた神を奉斎した神社を、式社（六国史所載の神社を国史現在社と云うが、当時では由緒のある古社であった）或は式内社といい、登録してない神社を式外社と云っている。県下の式内社は四十九社である。

稲荷神社　旧無格社

倉敷市玉島八島七四五

主祭神　保食神
例祭　十月十六日・十七日
境内地　四五二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　日光神社　美保神社　山王神社　荒魂神社　山崎神社　天神社　速川神社
崇敬者数　五〇人
宮司　桑野正之
責任役員　吉川喜代一　西山晴源　高本龍平
由緒沿革　文久年間の神職家の火災のため書類が焼失して詳細不明である。寛政年間に勧請したと思われる。糸崎山の頂上に鎮座せられ、島地の氏子百戸の信仰が厚い。

稲荷神社　旧無格社

倉敷市玉島四三〇一八

主祭神　倉稲魂命
例祭　八月一日
境内地　三、二八六坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　御崎神社
崇敬者数　一六八人
宮司　福田睦雄
責任役員　石井熙昭

由緒沿革　創建年代は万延元年である。備中玉島元郷社羽黒神社の摂社として玉島市内中小路中町・加根町・金古町の町内の人々の崇敬が篤く、経費を奉納して維持保存せられている。

滑(大国主)神社　旧無格社

倉敷市玉島黒崎一四〇八

主祭神　大国主命
例祭　九月四日
主要建物　本社(石祠)
氏子数　一〇〇戸
宮司　神田経夫
責任役員　江原春生　古城毅一　道広一男
由緒沿革　創建年代不詳。大国主命を勧請したと伝えている。この地は郷戸で、口碑によると牛が岩の上から滑り落ち死亡したので、神を祀って牛の祟りを払ったという。その故事から又の名を滑神社とも奉称した。村社御前神社の摂社である。

大国主神社　旧無格社

倉敷市玉島道口二八一七

主祭神　大国主命　猿田彦命
例祭　八月二十二日
境内地　六八坪
主要建物　本殿　拝殿

御前神社　旧村社

倉敷市玉島黒崎二八〇八

主祭神　吉備津彦命
例祭　十月十日
境内地　七一三坪
氏子数　三五人
宮司　桑野純一
由緒沿革　創建は治暦年間らしい。由緒は不詳である。

御崎神社　旧村社

倉敷市玉島富四二六

主祭神　玉依姫神
例祭　十月二十五日・二十六日
境内地　七五六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所
摂末社　山神社　白髪神社
氏子数　一一〇戸
宮司　桑野正之
責任役員　西山豊　花土亮　中山善喜
由緒沿革　数百年前に祭祀したものであるが、文献上では不明である。八幡山の頂上の風光明媚な場所に祭祀せられている。慶長六年に御本殿改築等の棟札がある。又文化八年改築したもので、富部落の氏神として信仰が厚い。



主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　若宮
氏子数　五〇〇戸
宮司　神田経夫
責任役員　中塚正彬　浜野良雄　石橋卓二　初村孝志
崇敬者数　一一〇人
禰宜　神田英経
夏　江原春生　古城毅一
由緒沿革　創建年代不詳。後宇多天皇弘安二年、戸神社が佐方に創建され、黒崎沙美南浦はその氏子となった。その後御前神社が創建せられた。江戸時代には御前大明神として崇敬せられた。降って昭和十七年三月十四日、社殿炎上。昭和二十七年に幣殿、同三十三年に拝殿、同四十六年七月本殿を夫々再建した。



柏島神社　旧村社

倉敷市玉島柏島七〇八六

主祭神　応神天皇　吉備津彦命
例祭　十月十二日・十三日
境内地　八一五・一二坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿　向拝
摂末社　豊浦神社　荒神社　大森神社
氏子数　一、〇〇〇戸
崇敬者数　八〇〇人
宮司　亀山昭三
禰宜　亀山誠子
責任役員　田辺元恵　小幡関蔵　柚木勘造　西山孝士
西野仙六
宝物　祭神の御神体二　神鏡二面　神輿二台

主祭神　猿田彦神
例祭　十月二十五日・二六日
境内地　六九〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫　神饌所
摂末社　厳島神社　荒魂神社　前魂神社
氏子数　五五〇戸
崇敬者数　一〇人
宮司　桑野正之
責任役員　谷野主一郎　黒川最一　三宅忠之　西山晴源
宝物　亀山焼甕
由緒沿革　正保年代上竹村の亀山村と称した。この神社の東側で甕を焼いた「かま」跡がある。よって亀山と云ったと伝えられている。伝説によると寛文年間に此の地区が、埋めたてられたという。延宝六年天王山から移転し奉祭した。後、寛延二年御本殿の建替えの棟札がある。文久年間に神職家が火災のため、関係書類を焼失し、詳細は不明である。現在は自動車道・防火施設・神社用水道・便所等が完備したが、数年来松

神前神社　旧村社

倉敷市玉島八島三四九〇

由緒沿革　天正十二年三月勧請されたもので、願主赤沢兵庫頭政信が創建し、はじめ八幡宮と称せられた。明治四十五年本殿・幣殿の改築を行い、大正元年十二月御前神社を合祀して、柏島神社と改称した。なお当神社は昭和十七年五月拝殿向拝を新築した。昭和十九年九月中殿幣殿を新築し、さらに玉垣を拡張し、社前の神域を整備した。



宮　司　神田経夫
責任役員　江原春生　古城毅一　道広一男
由緒沿革　創建年代不詳。村社御前神社の境外摂社である。昭和五十年に改築した。

荒神社　旧無格社

倉敷市玉島富一六三

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　五月四日　**境内地**　一四九坪
主要建物　本殿　拝殿
崇敬者数　五〇人
宮　司　桑野正之
責任役員　花土　亮　西山　豊　中山善喜
由緒沿革　富部落の中央の山の中腹に、慶長年間に祭祀したものである。文久年間の神職家の火災のため書類が消失し、詳細は不明である。富部落の信仰が厚い。

荒神社　旧無格社

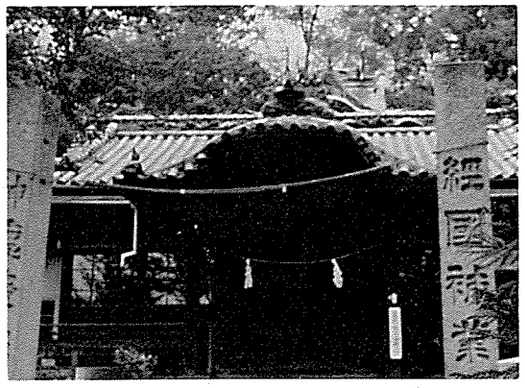
倉敷市玉島黒崎五三九

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　九月五日　**境内地**　一一五坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　七五戸
宮　司　神田経夫
崇敬者数　三〇人
責任役員　西岡賢治　西岡　勉　西岡　旭
由緒沿革　創建年代不詳。本神社は屋守北迫の荒神様として氏子の信仰が厚い。御前神社の摂社である。

金刀比羅神社　旧村社

倉敷市玉島乙島三三七二

主祭神　大物主神
例　祭　十月十日　**境内地**　七七二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　神札納所　儀式殿（客殿）　休憩所



喰虫の被害で、数百年来の松が全滅したのでそのあとに植樹し、毎年数回手入れを奉仕している。倉敷市文化財指定となっている。

黒瀬神社　旧無格社

倉敷市玉島黒崎一七九五

主祭神　黒瀬大神
例　祭　十月二十二日　**境内地**　一五九坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　四二戸

荒神社　旧無格社

倉敷市玉島黒崎一四二二

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十一月五日　**境内地**　三七四坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　一〇〇戸
宮　司　神田経夫

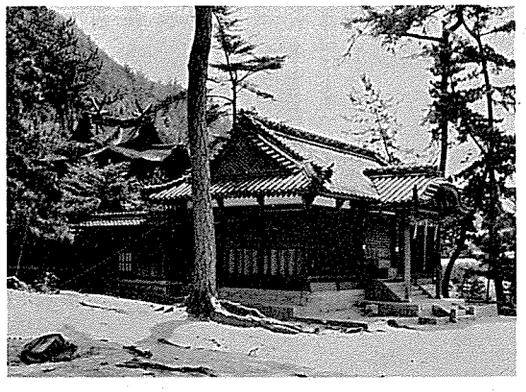
摂末社　稲荷神社　滝沢神社
崇敬者数　五〇〇人
宮　司　滝澤祐一　**禰　宜**　滝澤彰洋
責任役員　滝沢芳雄　滝沢健三郎　滝沢忠義　滝沢弥夫一　松下富太
宝　物　徳川家紋文庫　古銭
由緒沿革　貞観年間に天台宗の円乗院が創建された時、鎮守神として祀られ、後円乗院が火災で焼失したので、当地に移して祀った。松山藩主水谷公が玉島新開地を造成し、玉島港が開かれてから、海上安全・疫病除の神として浅口郡一円の崇敬を受けた。明治末期、大正初期は参詣者で雑閙し、社号標も玉島通町に建て、露天商も店を連ねて隆昌を極めたものである。



鹽竈神社　旧村社

倉敷市玉島勇崎二一九七四

主祭神　猿田彦命
例　祭　十月十日　**境内地**　四八九坪
主要建物　本殿　釣殿　幣殿　拝殿　社務所　神庫
摂末社　水谷神社　地神社　稲荷神社　厳島神社　荒神社　客人神社
氏子数　三五〇戸　**崇敬者数**　一〇〇人
宮　司　神田経夫　**禰　宜**　神田英経
責任役員　道広富次郎　上松幸夫　吉田武夫　中藤石男　森石正夫
由緒沿革　創建年代不詳。上古製塩地として有名であった夕崎が、近世に干拓せられて勇崎と改名し、こゝに塩竈宮を創建して、猿田彦命を勧請し、製塩に努力した。明治四十年五月二十二日神饌幣帛料供進神社として指定せられた。



七神社　旧村社

倉敷市玉島黒崎一〇六八三

主祭神　大己貴命（相殿）菅原神　高淤加美命　素戔嗚尊　櫛淤加美命　建御名方命　事代主命　土祖命
例　祭　十月二十五日　**境内地**　五三六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　三〇〇戸　**崇敬者数**　一二〇人

宮　司　神田経夫　　**禰　宜**　神田英経
責任役員　藤沢十七夫　渡辺義明　妹尾大助
由緒沿革　創建年代不詳。黒崎海岸に七社大明神、天神、荒神社を創建した。よって南浦の地名が生れた。明治四十四年三月二十三日菅原神外六柱神を合祀。明治中年、村社に昇格し神饌幣帛料供進神社に指定された。昭和三十七年五月、本殿屋根葺替をし、同五十一年度より幣殿、拝殿を修理した。

諏訪神社　旧無格社

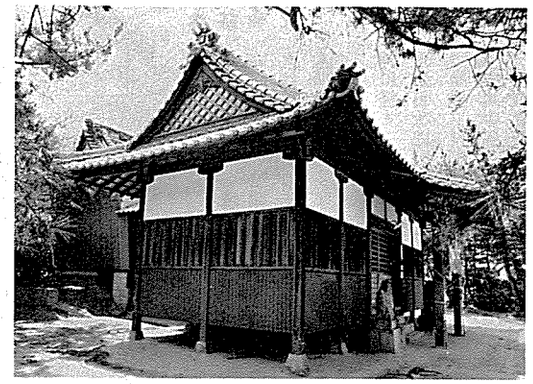
倉敷市玉島道口二六五

主祭神　建御名方命
例　祭　五月九日　　**境内地**　一九坪
主要建物　本殿流造　拝殿
崇敬者数　一二〇人
宮　司　桑野純一
責任役員　磯部伯太　田中久吉　澤根弥曽七
由緒沿革　創建は治暦年間で、その他は不詳である。

諏訪神社　旧村社

倉敷市玉島黒崎五五四九

主祭神　建御名方命　経津主命　大己貴命　事代主命　岐命
例　祭　十月二十七日　　**境内地**　九三六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　下神社　十二神社
氏子数　三五〇戸
宮　司　神田経夫　　**崇敬者数**　一一〇人
責任役員　茂本只治　児島多喜男　末広信夫　　**禰　宜**　神田英経
由緒沿革　創建年代不詳。黒崎の海岸に諏訪大明神、荒神、恵比須社、山王宮を住民と共に創建した。明治三十七年十二月末日に社殿焼失し、同三十九年六月本殿を再建。明治四十五年五月無格社五社を合祀した。昭和七年九月五日神饌幣帛料供進神社に指定された。昭和四十八年に社殿の大修理を行なった。



地神社　旧無格社

倉敷市玉島八島三六四

主祭神　土御祖神
例　祭　社日　　**境内地**　六九四坪
主要建物　本殿　拝殿
崇敬者数　五〇人
宮　司　桑野正之
責任役員　吉川喜代一　西山晴源　高本龍平
由緒沿革　玉島八島島地の西地区の小山の頂上に祭祀し、氏子たちの信仰が厚い。寛政年間に勧請したものと思われる。文久年間の神職家の火災のため、書類が焼失し詳細は不明である。

戸島神社　旧郷社

倉敷市玉島乙島一二五一

主祭神　伊邪那岐神　伊邪那美神　天照大御神　誉田別尊
例　祭　十月三十日　　**境内地**　九、〇八〇坪
主要建物　本殿　釣殿　幣殿　拝殿　神庫　直会殿
社務所
摂末社　山神社　龍王神社　岩殿神社



氏子数　一、四〇〇戸　　**崇敬者数**　六〇〇人
宮　司　桑野武彦　　**禰　宜**　桑野典彦
責任役員　樋口福寿　大島　上　浅原恒夫　滝沢英治　猪木文十郎　香西松市　片島尚敬　森分穂政　香西繁松　守屋共市　猪木英市　滝沢郁郎　小野正二　富士野始一
宝　物　神輿一体
由緒沿革　創建年代は不詳であるが、鎌倉末期の創建と推定せられる。旧社名を養父母大明神と称した。貞治年中、小幡大和守友義が本殿改築を寄進した。天和三年水谷左京亮勝宗が本殿材木を寄進した。明治四年八幡宮を合祀し、戸島神社と改称した。当地は幕府直轄地であったので代々の代官が崇敬した。明治十年村社に、昭和十八年郷社に列せられた。

長尾神社　旧村社

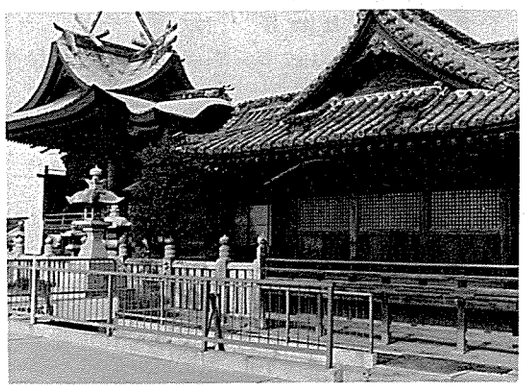
倉敷市玉島長尾二二八七



主祭神　品陀和気命　他二十三柱
例　祭　十月十八日　　**境内地**　一、七五五坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿　神庫　社務所
摂末社　恵比須神社　地神社　秋葉宮　他八社
氏子数　八〇〇戸
宮　司　福田睦雄　　**禰　宜**　福田　隆
権禰宜　福田紘子
責任役員　小野久彦　片岡正志　田辺　寛　田辺甲子男　小野為三郎
宝　物　神鏡二面
由緒沿革　応永年中宇佐八幡宮から勧請し、天正年中に毛利備中守隆元の祈願所であった。後松山城主池田備中守同出雲守の新田開墾の祈願所となった。寛永十八年水谷伊勢守は新旧の開墾が成り、境外田三反二畝二十二歩を給せられた。明治にいたるまで、数度の建替があった。現在の建物は明治十二年六月建替えられたものである。明治三年村社に列した。

羽黒神社　旧郷社

倉敷市玉島中央町一—十二—一



主祭神　玉依姫命　大国主命　素盞嗚尊
例　祭　十月十四日・十五日
境内地　七三九坪
主要建物　本殿　釣殿　幣殿　拝殿　絵馬殿　神庫
社務所　水谷会館　羽黒神社会館
摂末社　天神社　住吉　水谷神社　稲荷神社　熊田神社　他七社
氏子数　一、五〇〇戸　**崇敬者数**　五〇〇人
宮　司　福田睦雄　**禰　宜**　福田　隆
権禰宜　福田紘子
責任役員　赤松潤吉　菊池俊夫　太田栄一　仁科桂一
池田金吾　牧　新蔵　小野鶴雄　中野重太郎　佐藤
薫　高越秀明　西　節夫
宝　物　大太刀一振（逸見竹貫斉　源義隆社前謹作）
特殊神事　境内末社天満宮船渡御管絃祭
由緒沿革　万治元年備中国松山城主水谷左京亮勝宗公が当地を開墾したとき、旧領地出羽国から羽黒宮を移祀し、開墾落成を祈願した。翌二年正月に起工し、同年十二月に終工した。ところが玉が山頭から出たので、ここを玉島と呼んだ。寛文五年社宇を改築し、羽黒大権現と称して、水谷家代々崇敬の祈願所と定めた。水谷家から代々社領米九石一斗を寄進せられている。浅口郷全域にその神威を及ぼした。明治三年に郷社となった。

箸藏神社　旧村社

倉敷市玉島乙島二四五〇

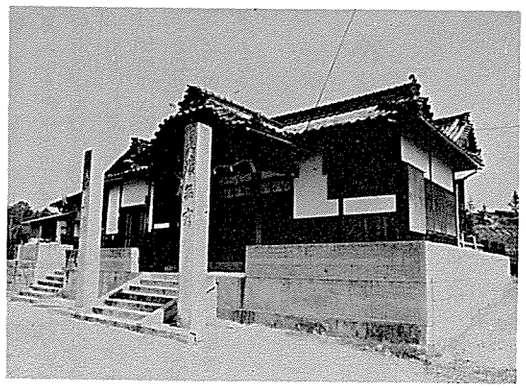
主祭神　大物主命　少彦名命



例　祭　十月十一日　**境内地**　五七二坪
主要建物　本殿　釣殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　護王神社
氏子数　三五〇戸　**崇敬者数**　五〇人
宮　司　原　貴保　**禰　宜**　原なほみ
責任役員　滝沢一美　中塚磐夫　原田国市
由緒沿革　往古乙島村が内海の一島であった頃、時の庄屋守屋重左衛門により、濃田に出雲国から少彦名命を勧請し、伊予国から石鎚大明神を勧請して奉斎したものである。百六十年前乙島村の庄屋守屋重左衛門の計画のもとに社殿を再建し、村民の加護及び乙島開発工事促進の祈願をした。孤島であったが、新町築堤により、本土と連結し、大発展の基礎が築き上げられた。村民尊崇の神社である。

八幡神社　旧村社

倉敷市玉島道口二四六九



主祭神　神功皇后　応神天皇　玉依姫命　大己貴命
祓戸神
例　祭　十月二十六日　**境内地**　六五〇坪
主要建物　本殿　釣殿　幣殿　拝殿
摂末社　大国主神社　諏訪神社　地神社　金刀比羅神社　広峯神社　沼名前神社　姫神社
氏子数　三八〇戸　**崇敬者数**　一、〇〇〇人
宮　司　桑野純一
責任役員　田中佐太郎　片山武市　水川一一

主祭神　地主命
例　祭　五月三日　**境内地**　一四四坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　二五〇戸　**崇敬者数**　七〇人
宮　司　神田経夫
責任役員　中塚正彬　岡部　明　建部忠信
由緒沿革　創建年代不詳。小原に創建したと伝えられている。その後修理再建が行われ、祭日には氏子全戸が参拝する習慣が今日まで行われている。明治十一年に矢崎神社と改称した。昭和五十一年に、社殿、参道等を整備した。

由緒沿革　創建年代不詳。昔当地が港湾であった頃に、海上の安全を祈るために御祭神を勧請した。たまたま京都からの一人の旅人が風浪に悩み、この港に寄港しようとして二夜苦しみ、北の山上に一霊光が現れ難なく入港出来たので、一首の和歌を詠じて社前に常夜燈を寄進したという。常に西下の航路の安全を祈願するところであったという。

矢崎神社　旧無格社

倉敷市玉島黒崎四四六八

明治以後の社格と現在

総社

明治四年太政官布告によって神社の社格をきめ、伊勢皇大神宮を除いて、全国の神社に社格を与えて待遇を区別した。社格は官幣社・国幣社・府県社・郷社・村社であって、官幣社は大・中・小及び別格の四種に、国幣社は大・中・小の三種に分け、その他の神社は一般に無格社と通称した。

戦後神社の国家管理は廃止となり、社格は廃止となった。神社本庁に所属する神社のうち、全国的に崇敬されている神社を別表神社として神社本庁が指定している。

明治三十九年勅令によって、神饌幣帛料供進神社に指定された神社が県内に多数あった。その后も指定になった神社もあった。

上古以来国司は管内の神社を巡拝する制があったが、中古以来は管内の便宜の地に総合神社を創建し、または既存の一社を指定して国司が参拝し祭祀を行った。この神社を総社と称えた。総社は一国一社とは限らず、一地域一社もあった。

春祭

農業を立国とした我が国は、農耕の折り目ごとに祭祀や年中行事を行った。神社の祭祀は春と秋とが基となり、後に夏祭がつくられた。春祭は豊作祈願を目的とし、農耕開始にあたり、豊作を祈念する祭祀である。春祭は年頭の祈年祭、初春の行事と春の新緑の候とに斎行する。また春は花の季節であるから、桜会や桜祭をする神社がある。

神社の祭神

奉斎されている神祇は天神・地祇といわれ、八百万神といわれている。また皇統の祖神・人臣の神々・帰化人系の神に分けてみることも出来る。また上代における信仰の特色は、自然崇拝とシャーマニズムであるが、次第に人格神の性格を認め、多くの神々が、それ〴〵の地域で祭られ、部落生活の精神的基盤となった。これが氏神であるが、必ずしも部落民の血縁的祖神とは限らず、自然神として部落生活の中心となる場合が多いと思われる。

一宮

一国或は一郷内の神社で、由緒深く信仰の厚い神社が、その地区の中心的神社となり、その一位の神社を一ノ宮と奉称し、これに次ぐ神社を二ノ宮・三ノ宮と称えるようになった。これは区域内の神社の順位を示すもので、制度ではなく一般の通称から次第に固定化して公認されたものである。

氏子と崇敬者

氏子とは氏の祖に対する氏の子孫のことを言う。共同の祖先である氏神を戴く氏族人をいう。

氏神は氏子に神護を加え、氏子は赤心で祖神に奉仕するのが、日本民族の神人関係である。氏神はやがて土地の守護神となり、出生地の神を氏神と仰ぐようになり、氏神は産土神ともなり、氏子は産土子となった。更に時代が降るにつれて、出生地に関係なく、又氏族関係の有無を問わず、居住地の神社の氏子区域内の人は、その神社の氏子と呼ばれた。

氏子は若干名の氏子総代を選出し、神社の経営・維持に協力した。

氏子区域をもたない神社には氏子がなく、神社の運営、維持には、地域に関係なくその神社の崇敬者中から総代を選び、その任にあたることになる。

笏

束帯の時手にもつ具。「サク」ともいう。笏の字音は本来「コツ」であるが、骨と同音であるのを忌みて、笏と尺と通用するので「シャク」と呼んだとの説もある。その長さが一尺許りであり、又柞の木で作るので「サク」と通じて「シャク」という。笏は別名を手板ともいう。後には衣冠直衣着用のときに把ることもあった。笏はもと忽忘に備える為に用いたが、君前にあって教命を受ける時、或は奏事に遺漏なきようにするために、押紙をして記し、また儀式の次第等を記したものと、古書にある。その他老人が拝をする時に杖とし、又君前で或る事柄を指示し、公宴の時にこれを拍って拍子とし、駒引の時扇を以て打鳴らす等に用いられたが、後には主として容儀を整える具となり、これを把るにも一定の作法故実があるようになった。笏は柞・櫟・柊・桜・ふくら等が使用された。笏の扱い方について、持笏・置笏・把笏・懐笏・正笏等があり、神社祭式の中に規定せられて居る。

神社の起源

神社の成立は有史以前の共同体社会で、祭りの場が生活の基本的行事となっていたと考えられる。われ〳〵の先祖がそれぞれの土地に定着し、共同体を組織し、その部落の首長が主宰した行事であり、政治経済などすべての原動力であった。この時代の祭場が、神籬・磐境・磐座・神奈備・御室といわれるもので、今日でも、古い神社にはこの形態を残しているものが多数存在している。時代が降るとともに、徐々に社殿が出現するようになり、奈良時代には今日見られるような、神社建築のもといが出来たと思われる。

神社神道

氏神、産土神をはじめ、天皇・皇族・偉人・義士烈士・戦歿者などを神として奉斎する施設を中心として、祭祀儀礼を含んだ信仰組織の総称である。明治以後神道十三派の教派神道の成立により、それと区別するための分類上の用語である。神社は、昭和二十年までは国家の宗祀として政府の管理下にあったが、現在では一般の伝道的宗教と同様に宗教法人法によって存立が認められ、国家管理は廃止せられた。これによって宗教法人「神社本庁」に包括された。

児島支部（三六社）

天津神社　倉敷市尾原七〇七……九六
天津神社　〃　児島唐琴二―一二―五……九六
稲荷神社　〃　児島田の口六―五―三〇……九六
御崎神社　児島郡灘崎町迫川八七一……九六
祇園神社　倉敷市下津井一―一三―一六……九六
熊野神社　〃　林六八四……九七
熊野神社　児島郡灘崎町奥迫川九五九……九七
鴻八幡宮　倉敷市児島下の町七―一四―一……九七
荒神社　児島郡灘崎町植松三〇七……九八
興除神社　岡山市中畦二六・二七……九八
琴浦神社　倉敷市児島唐琴一―一九―一二……九九
木華佐久耶比咩神社　〃　福江一六七二・一六七三……九九
坂手神社　〃　児島由加一五八六……九九
山神社　〃　児島白尾一〇九五……九九
四柱神社　〃　下津井吹上二―四―一八……九九
正面神社　〃　児島稗田町二七八八……一〇〇
新庄八幡宮　〃　児島阿津二―一八―一……一〇〇
素盞嗚神社　倉敷市木見二一九八……一〇一
素盞嗚神社　〃　尾原二五二……一〇一
素盞嗚神社　児島郡灘崎町片岡一六七七・一六七八……一〇一
素盞嗚神社　倉敷市児島上の町三―一一―四六……一〇一
田土浦座神社　〃　下津井田之浦一―一五―三〇……一〇二
天神宮　〃　児島味野二―五―三……一〇二
天神宮　児島郡灘崎町彦崎七五五……一〇二
天満天神社　倉敷市木見一二四八……一〇三
八幡宮　〃　児島小川二―二―二八……一〇三
八幡宮　〃　児島柳田町一〇一三……一〇三
八幡宮　〃　児島稗田一六六八……一〇四
八幡宮　〃　曽原一一二四……一〇四
福岡神社　〃　林六七五……一〇五
藤田神社　岡山市藤田五〇九―一……一〇五
本荘八幡宮　倉敷市児島通生二二……一〇五
疫神社　〃　林一三七六……一〇六
山村神社　〃　児島由加三五五……一〇六
由加神社　〃　児島由加二八五二……一〇六
別浦海神社　児島郡灘崎町川張八八九……一〇六

天津神社　旧村社

倉敷市尾原七〇七

主祭神　天之御中主神　高皇産霊神　神皇産霊神
例祭　十月二十八日　**境内地**　二、三三六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所
摂末社　河内神社　天満宮　荒神社　伊勢宮　皇霊社
氏子数　一四〇戸
宮司　大守　哲
責任役員　藤原悦太　古市宇馬太　古市　堯　藤原秀太　古市　富　茅野．清
宝物　棟札の一枚　享保・享和扁額欅板古市金峨筆
由緒沿革　創建年月日不詳。旧号を三台明現宮といったのを明治二年に天津神社と改称した。旧藩の記録に寛文七年社僧の金蔵坊が還俗を命ぜられ本神社の神職となったと。それ以前同坊は新熊野山所属の坊であったのだから、かなり古くから存在したものであろう。明治初年尾原天神社又は天神社と書いていたのが天満宮と紛らわしいので津の一字を加えたのだという。

天津神社　旧無格社

倉敷市児島唐琴二―一二―五

主祭神　天之御中主神
例祭　十月第三日曜日
境内地　七二四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
崇敬者数　七〇〇人
宮司　河本貞郁
責任役員　松井嘉平　藤原良三
由緒沿革　昔から鴻八幡宮の飛地末社として、また引網村（現在の唐琴）の産土神として祀られていた。徳川時代には明現社または妙見社とも称えられていたが、明治時代に天神社となり、昭和二十年三月には天津神社と改めた。

稲荷神社　旧無格社

倉敷市児島田の口六―五―三〇

主祭神　倉稲魂命
例祭　十月二十二日　**境内地**　三二二坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　素盞嗚神社
崇敬者数　七〇〇人
宮司　河本貞郁
責任役員　尾崎節三　尾崎柾治　尾崎秀一
由緒沿革　創立年月は不詳であるが、古来から鴻八幡宮の飛地の末社であって、また、もと田の口村の産土神として崇敬せられていた。明治となって稲荷神社となった。

御崎神社　旧村社

児島郡灘崎町迫川八七一

主祭神　大国魂命幸魂
例祭　十月三日　**境内地**　四〇三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　若宮
氏子数　八五〇戸
宮司　大守　哲
責任役員　藤原三郎　三宅正平　櫛田陽一郎　長崎能雄　十河一市　佐々木増一
由緒沿革　創建年月は不詳であるが元暦年間に奉斎せられたという。もと、京殿という地に鎮座していたが、何時頃か現在地に奉遷したという。常山城主上野高徳が崇敬した神社で、また池田侯が崇敬した。旧本殿は享保九年に建立。後、大正六年十一月改築した。昭和二年九月、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

祇園神社　旧村社

倉敷市下津井一―一三―一六

主祭神　東殿　長浜神　八社大明神　西殿　素盞嗚尊　奇稲田姫命大蛇麁正
例祭　旧六月十三日・十四日
境内地　三、〇二六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　絵馬殿
摂末社　境内　金刀比羅宮　厳島神社　海神社　天神宮　稲荷宮　由加神社　境外　木里神社
氏子数　準氏子六〇〇戸
崇敬者数　三、〇〇〇人
宮司　赤星　治
責任役員　麻山米蔵　萬谷茂雄　森　定勇　薮内隆司　新井　一



宝物　倉敷市重要文化財指定　祇園文書八冊　六歌仙絵馬一面
由緒沿革　本神社の境内地は旧城址であって、城の鎮守として長浜大明神を奉斎した。江戸時代に備後鞆の津から祇園宮を奉遷した。下津井港の発展につれて神威は山陽・山陰・九州・北陸の諸国に及んだ。下津井城主池田氏は廃城の後までも崇敬厚く文久三年には参道を寄進。明治三年十二月素盞嗚神社と改称。明治四十三年十月八柱神社を合祀。同二十一年九月祇園神社と改称。昭和三年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

熊野神社　旧郷社

倉敷市林六八四

主祭神　伊邪那美神　伊邪那岐神　家都御子神　速玉之男神　等十三柱
例祭　十月十九日　**境内地**　四、四一八坪
主要建物　第一殿　第二殿　第三殿　第四殿　第五殿　拝殿　社務所他
摂末社　祇雄武社　龍神社　厳島神社　火神社　八尾羅宮
氏子数　四五〇戸　**崇敬者数**　一〇、〇〇〇人
宮司　大守　哲
責任役員　木村信義　木村定夫　三宅善男　藤原寅二
宝物　池田藩主奉納書　備前秀光太刀　外
特殊神事　大名行列
由緒沿革　大宝元年紀州熊野本宮を勧請した。聖武天皇は児島一円を神領に寄進された。天平宝字五年、当神社を本宮とし、由加に那智、木見に新宮を建て新熊野三山と称した。承久三年冷泉宮頼仁親王この地に配流せられ二十六年間在住し歿せられた。木見に葬祀。この間後鳥羽院供養塔を建てられた。応仁元年兵火のため社殿焼失。大願寺僧天誉が明応元年再建。（その後社殿が全部復興した。）毛利氏を始め武将の崇敬篤く、池田光政は社殿を再建し、年料二百石を奉納した。明治四年、神仏分離により熊野神社と称し、同五年郷社列格。明治四十一年神饌幣帛供進神社に指定せられた。（国・県重文）社殿六棟。境内地山林は県史跡。



熊野神社　旧村社

児島郡灘崎町奥迫川九五九

主祭神　家都美御子神　熊野夫須美大神　外十一社
例祭　十月十日　**境内地**　四七四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社　天津神社
氏子数　五五戸
宮司　大守　哲
責任役員　橘　元重　藤原訶命雄　藤原　彰
由緒沿革　本神社の創建年代は不詳。もと、若一王子権現と称していたのを、明治初年に改称した。明治三年十二月村社に列格。昭和十五年五月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

鴻八幡宮（鴻の宮）　旧県社

倉敷市児島下の町七―一四―一

主祭神　誉田別尊　足仲彦尊　息長帯姫命　玉依姫命　仲姫命



例　祭　十月第二土曜日・日曜日
境内地　二、六〇四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　随身門　手水舎　社務所　斎館　神庫二棟　氏子参集所　鳥居
摂末社　若宮神社　熊野神社　綿津見神社　鴨神社　荒神社　鷲神社　塩竈神社　大国神社
氏子数　三、三〇〇戸
宮　司　河本貞郁　**禰　宜**　河本貞紀
責任役員　橋本末治　洲脇勝太郎　尾崎芳郎　佐藤浩太郎　清板才治　松香通夫　難波道弘　尾崎柾治　明石歓太郎　角南勝一
宝　物　狛犬一対（銘建武三年正月二十九日慶尊）
特殊神事　例祭日当日神輿の神幸がある。その祭、山車十数台境内に参集し「祭ばやし」を奏し殷盛を極める。

荒神社　旧村社

児島郡灘崎町植松三〇七

由緒沿革　大宝元年宇佐から勧請したと伝えられ、古来鴻の郷の総氏神として、また地方の名社として官民に尊崇されている。後醍醐天皇の建武の頃、妙法院宮尊澄親王が讃岐国詫間に渡らせ給う時、当神社に御祈願せられ、事成って御帰還の際、彫工慶尊に命じて寄進せられたと伝える狛犬一対が現存している。備陽記所載の「鴻の鳥」の伝説により、当神社を鴻の宮という。大正十年九月に神饌幣帛料供進神社に指定せられ、その後社運開けて社務所等の新築がなり、神域が整備された。昭和十九年六月、鴻八幡神社と改められ七月に県社に例格。昭和二十九年三月、鴻八幡宮と旧号に復した。

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月八日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所
摂末社　天神宮　地神宮　和霊神社　龍神宮　外三社
氏子数　一〇〇戸
宮　司　大守　哲
責任役員　近藤三二　大水熊雄　藤井繁雄　田辺久雄
由緒沿革　創立年代は不詳であるが、口碑に依ると応永年中彦崎村の者が海面を埋立てて、植松の地を開墾した時に石祠を発堀した。それに荒神宮という彫刻があったので、社殿を建立し氏神として奉斎したという。
境内地　二四九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　鳥居
摂末社　若宮神社　熊野神社　綿津見神社　鴨神社　荒神社　鷲神社　塩竈神社　大国神社
氏子数　三、三〇〇戸
宮　司　河本貞郁　**禰　宜**　河本貞紀
責任役員　橋本末治　洲脇勝太郎　尾崎芳郎　佐藤浩太郎　清板才治　松香通夫　難波道弘　尾崎柾治　明石歓太郎　角南勝一
宝　物　狛犬一対（銘建武三年正月二十九日慶尊）
特殊神事　例祭日当日神輿の神幸がある。その祭、山車十数台境内に参集し「祭ばやし」を奏し殷盛を極める。



興除神社　旧村社

岡山市中畦二六・二七

主祭神　久々能智神　金山毘古神　埴安姫神　弥都波能売神　豊宇気姫神　迦具土神　大綿津見神
例　祭　十月十三日・十四日
境内地　七九八坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　社務所　敬神館等
摂末社　海神　荒神　八重垣神
氏子数　一、三〇〇戸
宮　司　定金利光
責任役員　横溝和一　坂田　清　和田寒三　中村忠一　丸山敬三

宝　物　興除新田社地検地渡帳　請取証文（控）
由緒沿革　本神社は興除新田の開墾成功の際、旧藩主池田公から京都吉田神祇伯に願い出て、天保三年九月二十一日に神霊を迎え、（同四年九月十四日に御遷宮をして、）興除旧五か村の産土神として奉斎した。社領三石二斗余を年々附せられた。明治十一年十月に本殿を、同二十七年十月に釣殿・拝殿を改築し、同四十年五月に幣殿を建築した。大正十四年十二月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

琴浦天神社　旧無格社

倉敷市児島唐琴一一一九一一二

主祭神　菅原道真
例　祭　五月二十五日　**境内地**　二四三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
崇敬者数　七〇〇人
宮　司　河本貞郁
責任役員　松井嘉平　藤原良三
由緒沿革　創建の年月は不詳であるが、備陽国誌に「社司の説に延喜年中菅丞相筑紫へ左遷の時、この処に泊り給う云云」また「菅公御滞在の円浄坊は後焼出せり。社をこの坊に建つ。これ当社の創立なりと」の記事がある。古来、鴻八幡宮の飛地末社であったが、明治になって琴浦天神社となった。

木華佐久耶比咩神社　旧郷社

倉敷市福江一六七二・一六七三

主祭神　木華佐久耶比咩命　配祀　大国主命　大山祇命
例　祭　十月十日・十一日
境内地　二、一一三坪
遙拝地　一、五〇〇坪
主要建物　本殿　遙拝殿　幣殿　釣殿　拝殿
摂末社　高霧神社　岩長比咩神社　素盞嗚神社
氏子数　一三五戸
責任役員
宮　司　三宅光信
責任役員　千田昂次　難波実治郎　阿部一明　片山武志
特殊神事　御鳴動御釜祭（二月十一日）
由緒沿革　創建年月は不詳だが備前国内に於ける延喜式外百五社の一つであって、相当古い時代の創建であることは明かである。今なお創建の古さを証するに足る古土器が出土している。神階従四位下、社領高二石五斗（備陽国誌・吉備温故誌）。中世は福南山明現宮と呼んだが、明治二年旧号に復した。永く五流一派の修験道場として且つ一般の崇敬も篤く、明治六年五月郷社列格。昭和二十一年神祇院に於て由緒上県社に該当するものとに認められた。（神祇院考証官鳥羽正雄証明）。昭和二十三年二月十七日社殿炎上のため、山麓に遙拝所を建設し、山上の神社を奥宮と称し奉っている。

坂手神社　旧村社

倉敷市児島由加一五八六

主祭神　事代主命　相殿　少彦名命
例　祭　十月十二日　**境内地**　一九三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社　厳島神社
氏子数　五五戸　**崇敬者数**　二〇〇人
宮　司　三宅光信
責任役員　水井岩雄　山崎英男　木下熊男
由緒沿革　本神社は延暦年中の創建であることは古老の伝えるところで、以前は東北方に鎮座されていたのを何時の頃からか現在地に移転したものという。今も宮地という称が残っている。昭和十五年十月二日神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

山神社　旧村社

倉敷市児島白尾一〇九五

主祭神　大山祇命
例　祭　十月五日　**境内地**　四七三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　絵馬堂
摂末社　荒神社　厳島神社
氏子数　五五戸　**崇敬者数**　二〇〇人
宮　司　三宅光信
責任役員　水井岩雄　山崎英男　木下熊男
由緒沿革　本神社は延暦年中の創建であることは古老の伝えるところで、以前は東北方に鎮座されていたのを何時の頃からか現在地に移転したものという。今も宮地という称が残っている。昭和十五年十月二日神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

四柱神社　旧村社

倉敷市下津井吹上二一四一一八

主祭神　表筒男命　中筒男命　底筒男命　息長帯比

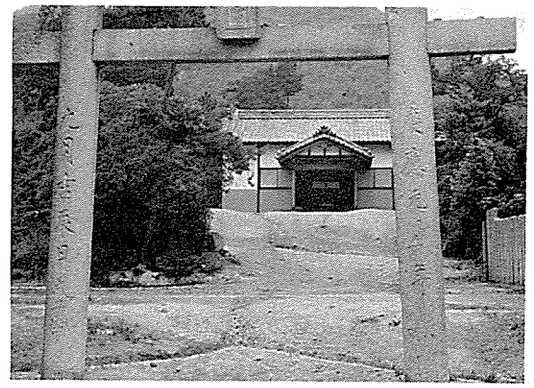
売命

例　祭　十一月二日・三日
境内地　八四二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神門　崇敬者集会所
摂末社　和霊神社
氏子数　準氏子二二〇戸
宮　司　赤星　治
責任役員　西原卯三郎　宮本宗夫
由緒沿革　朱雀天皇の御宇承平年間に、摂州住吉の神を勧請したと伝えている。古来、吹上の鎮守として崇敬せられた。境内山林の竹木は池田藩家老天城の池田氏が支配していた。当地の俳人昆陽野斧花女の寛政十二年頃の句に、「春風に手斧の音や宮普請」があり、これに依って現存社殿の建設年代を推定できる。

正面神社　旧無格社

倉敷市児島稗田町二七八八

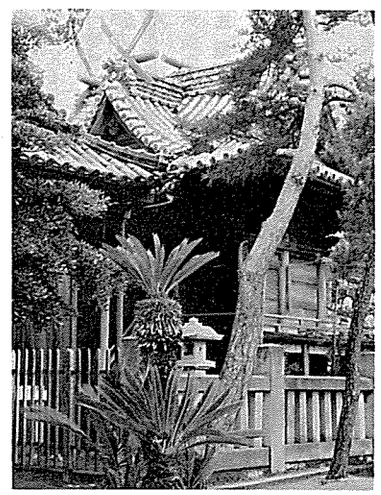
主祭神　素盞嗚尊
例　祭　旧六月七日・十四日
境内地　三一〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿殿
摂末社　竜王宮　稲荷宮　福南山宮
崇敬者数　二〇〇人
宮　司　三宅和敬
責任役員　片沼鉄男　片山樟夫　片山忠志　森本　強
由緒沿革　創建は不詳だが古くから鎮座していたことは布目瓦等が附近から出土することからもわかる。往古は祇園宮と称えていたが、安政五年正面宮と改め、明治三十二年正面神社と改称した。昔、社辺に「しきび」の大木があって、内海を通航するとき、夜は霊光を発したと伝える。この大木を伐って七つの観音像を刻んで各所の社寺に祀った。参道近くに三島中洲の碑がある。



新庄八幡宮　旧村社

倉敷市児島阿津二一一八一一

主祭神　品陀和気命　息長帯比売命　足仲彦命　合祀　塩土老翁　蛭子神
例　祭　十月第二日曜日・その前日当日祭
境内地　七、七九三坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　社務所　神庫
摂末社　若宮　祓戸神社　境外　素盞嗚神社　外五社
氏子数　二、二〇〇戸
宮　司　藤山秀夫
責任役員　中塚勇　黒明武四　神馬政竹　塚本　晟　山本立身　小津野寿男　松本　賢　大玉若松　笹井義孝
宝　物　社伝記
由緒沿革　創建は大宝元年で、豊前国宇佐八幡宮から勧請したと伝えている。当神社は火災に遭って旧記が悉く烏有に帰した。明応二年三月三日の再建、元亀三年九月二十日の再建等のことが古書類に残っている。明治四十三年三月五日に塩釜神社・八柱神社・海神社・恵須宮を合祀した。昭和三年九月、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。昭和三十年十月大島飛地境内神社海神社を創立した。



素盞嗚神社　旧無格社

倉敷市木見二一九八

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月十一日
境内地　二三八坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　二八戸
宮　司　大守　哲
責任役員　山県千秋　山県義人　山県役太郎
由緒沿革　本神社は長保年間の奉斎という。明治十六年大火のため焼失した。社殿はその後再建した。池田藩の神社明細帳によると、天満天神宮の末社という。昭和十九年、疫神社を素盞嗚神社と改称した。

素盞嗚神社　旧無格社

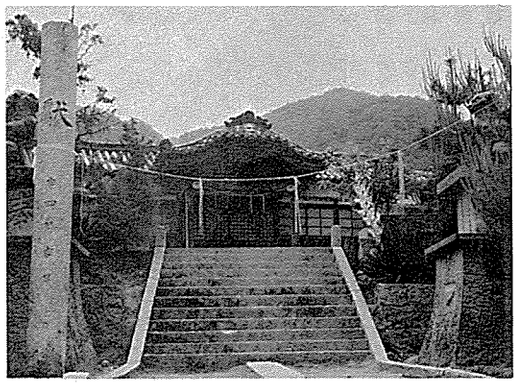
倉敷市尾原二五二

主祭神　素盞嗚尊　大己貴命　少彦名命
例　祭　十月十八日
境内地　一三五・七坪
主要建物　本殿　拝殿
崇敬者数　五〇人
宮　司　大守　哲
責任役員　藤原悦太　藤原太郎　藤原　繁
由緒沿革　創建年月日は不詳であるが、旧藩の記録、古棟札等によって、相当昔から村民の崇敬が篤かった神社であることは明かである。昭和十八年の神社整備の際に旧号「疫神社」を「素盞嗚神社」と改めた。現在の本殿は、もと、天津神社の社殿であったのを、明治初年譲りうけたものだと古老は伝えている。

素盞嗚神社　旧村社

児島郡灘崎町片岡一六七七・一六七八

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月十六日・十七日
境内地　一、二一九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所
摂末社　荒神社　疫神社　素盞嗚神社　木野山神社
氏子数　二二〇戸
宮　司　三宅和敬
責任役員　二部野元三郎　古家野明正
宝　物　棟札（明暦二年）

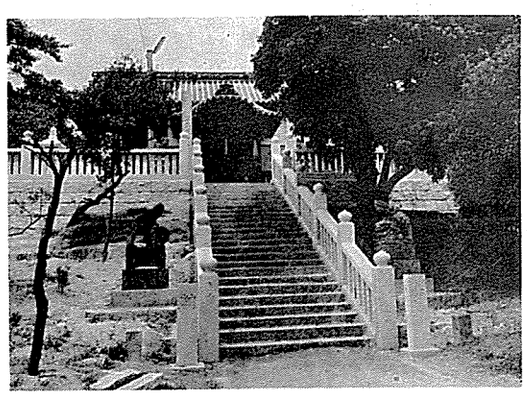


由緒沿革　創建年月は不詳だが相当古いらしく、昔から片岡字中村に奉斎され、川張・片岡・宗津三か村の産土神であったらしい。後、明暦二年九月現地に奉遷し、荘大明神として崇敬せられていた。安政六年三月に本殿と社殿全部を改築した。明治二年荘大明神を素盞嗚神社と改称した。昭和十年十月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

素盞嗚神社（天王社）　旧無格社

倉敷市児島上の町三一一一四六

主祭神　素盞嗚命
例　祭　十月十八日
境内地　六一五坪



主要建物 本殿　幣殿　拝殿　雑器庫　鳥居
崇敬者数 七〇〇人
宮　司 河本貞郁
責任役員 松香通夫　鎌田靖明　岡田武司
由緒沿革 創立の年月は不詳であるが、当地の鎌田氏の先祖が出雲から勧請したといい伝えている。古来から鴻八幡宮の飛地の末社であり、上村（現在の上の町）の産土神として祀られていた。徳川時代は天王社または牛頭天王とも称えられていた。明治となって素盞嗚神社と改称せられた。

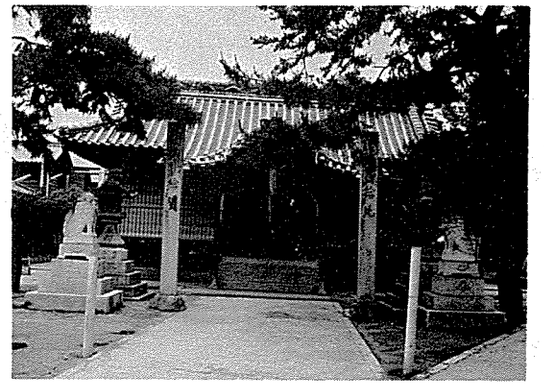
田土浦座神社　旧無格社

倉敷市下津井田之浦一―一五―三〇

主祭神 大綿津見命
例　祭 八月二日　**境内地** 五八〇坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　社務所
崇敬者数 一、〇〇〇人
宮　司 藤山秀夫
責任役員 笹井義孝　山口壮平　岡本　進　田原　強
片山大吉　野上安静　宮野　満　坂本喜志男
由緒沿革 本神社は延喜式内社であるが、創立年代は不詳で久しく明神と称していた。古老の口碑によれば、当神社は度々社殿が改築せられたが、今は往古の盛観を失い大いに縮少している。鎮座地を今は田之浦というが恐らく田土浦の誤らしく、石製の手水鉢に田土浦村と刻まれている。池田家の崇敬は一方ならず、池田綱政はその揮毫の書を献納して崇敬の誠を致した。

天神宮　旧村社

倉敷市児島味野二―五―三



主祭神 菅原神
例　祭 十一月四日
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　社務所
崇敬者数 三五〇人
宮　司 藤山秀夫
責任役員 中塚　勇　神馬政竹　藤原嘉明
由緒沿革 古老の口碑によれば、応永十四年阿波国の岩崎五郎左衛門なる者が、同国から神霊を守護し奉り（神霊を奉載した舟の着いた所を天神川といい今もある。）さて、尾首坂（今、疫神上という）まで来て、これを祭祀し、やがて文明四年になって柘榴浜（今の鎮座地）に移したものだという。これは備陽国誌に記載してある。



天神社　旧村社

児島郡灘崎町彦崎七五五

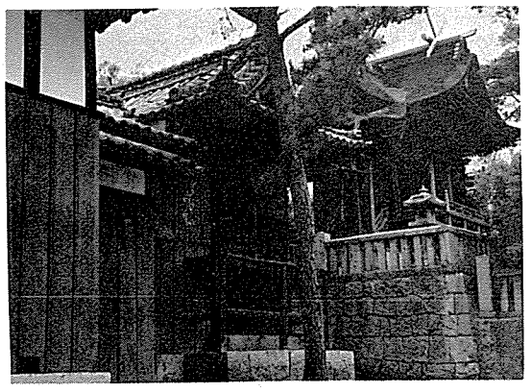
主祭神 菅原道真朝臣
例　祭 十月第三日曜日
境内地 七、三九四坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　社務所　鐘楼

摂末社 稲荷神社　荒神社
氏子数 六〇〇戸
宮　司 田中幹雄
責任役員 若林雄一　大森三二　福森　猛
宝　物 獅子狛犬一対
由緒沿革 本神社は文永年中、常住院宣応法印の勧請で、応永年中両度修復した。鎮座地「天神山」の老齢の樹木、社蔵の宝物の年代、また棟札等によってみると、相当の古社であると推定される。往古の社名は「天神宮」とか「天神」と称せられたが、明治になって「天神社」と改めた。昭和二年十月、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。昭和二十一年三月、神祇院考証課長から由緒上郷社に該当する神社であると認められた。

天満天神社　旧村社

倉敷市木見一二四八

主祭神 菅原道真朝臣
例　祭 十月十八日　**境内地** 一、九四六坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿
摂末社 十二神社　厳島神社　岩椿神社
氏子数 一九〇戸
宮　司 大守　哲
責任役員 三沢　保　山田堅　尾崎金重　三沢数太
由緒沿革 仁和年中菅原道真公が、讃岐守に任ぜられ赴任の途中、船がたまたまこの隣浦を過ぎる時に、この郷の長、三宅某なる者が出迎えて尊敬を尽したために頗る仁恵を蒙った。公の薨去の後、正暦三年三宅氏が下谷に社殿を造営奉斎したに創まる。後、応永年中正無田に遷したという。昭和二十年六月神饌幣帛供進神社に指定せられた。弘安五年、応永三十五年再興の棟札がある。



八幡宮　旧村社

倉敷市児島小川二―二一―二八

主祭神 応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭 十月五日・六日
境内地 二、一七二坪
主要建物 本殿　釣殿　祝詞殿　幣殿　拝殿　神供所
向拝　遙拝殿
摂末社 稲荷社　若宮　今宮　天神宮　皇大神宮
地神宮　金刀比羅宮　明治神宮　橿原神宮　木野山宮
氏子数 一、〇〇〇戸
宮　司 三宅和敬
責任役員 柘野伊之助　城本米太郎　岡野順太郎　岡野敏夫　原　信雄
宝　物 棟札写　**特殊神事** 神幸式
由緒沿革 当神社の創建は応永年間と伝えている。当時、村人の鴨井某が八幡の神を尊崇していた為に、旱天、洪水、地震等の難を免かれた。この為、村人が挙って八幡宮を崇敬した。そこで神社を建て氏神として祭るようになった。慶長五年鴨井助右衛門が願主となって修復し、明暦、延宝年間にも修理を加えた由が棟札、記録にある。大正九年十月、神饌幣帛料供進指定神社にせられた。

八幡宮　旧村社

倉敷市児島郡柳田町一〇一三

主祭神 応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭 十月五日・六日
境内地 四、二八九坪
主要建物 本殿　拝殿　向拝　社務所　神庫
摂末社 荒神宮　竜神社　若宮　伊勢宮　橿原宮
氏子数 五五〇戸
宮　司 三宅和敬
責任役員 小仙稔夫　大幸幸雄　百々幸之祐　永井啓一
宝　物 棟札（慶長）　随身像（慶長）



由緒沿革　当神社の創建は不詳だが応永年間の鎮座と推察する。もとは後方の上の山にあったという。池田藩主の崇敬があり、池田出羽守は毎年初穂を奉献していたという。慶長五年改築の棟札がある。佐々井市衛門尉の造営である。また、慶長六年八月奉納の随身像二体が現存している。

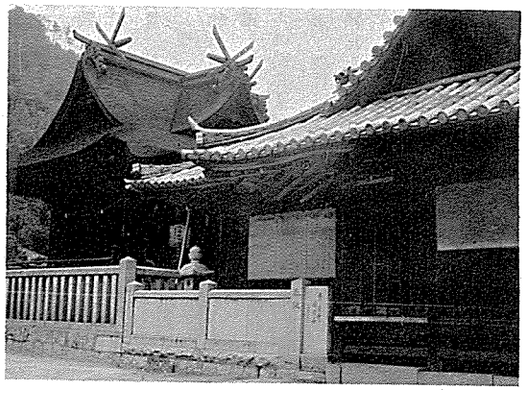
八幡宮　旧村社

倉敷市児島稗田町一六六八

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月五日・六日
境内地　二、三三三坪



主要建物　本殿　祝詞殿　幣殿　拝殿　神庫　神輿庫　社務所
摂末社　高良神社　松尾神社　天神宮
氏子数　六五〇戸
宮　司　三宅和敬
責任役員　片山忠志　森本　強　片沼鉄男　片山樟夫
宝　物　棟札（天明）二　社名額（正徳）
特殊神事　当屋神事
由緒沿革　当神社の創建年月日は不詳であるが、昔は現在地の北方の山上に鎮座していたが、応永年間に現地に奉遷した。もとは畷の庄の産土神として鎮斎せられていた。池田勝入斎若殿が献備された社号額や、池田藩の奉納された御定紋の御幕などから、藩主の崇敬の篤かったことが偲ばれる。大名の参勤交代の時、此の宮下で休憩又は止宿して代参した。特に土佐侯は参拝を恒例とした。



八幡神社　旧郷社

倉敷市曽原一一二四

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月十八日・十九日
境内地　二、二二一坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　神饌所　神供所
摂末社　地主神社　神田神社　素盞嗚神社　秋葉神社　皇大神宮

氏子数　一五〇戸
宮　司　三宅和敬
責任役員　原昇一郎　武鑓　寛　武鑓進衛
宝　物　随身像　狛犬　唐獅子　棟札十五枚
特殊神事　神幸式
由緒沿革　神功皇后が三韓征伐の帰途難風のため、清田田槌の浦に舟を止めて、田の中に行啓せられたので清田と呼んだ。後、清滝の山に祠を建てて祀った。長徳三年現地に奉遷し児島一円の総鎮守とした。現在では二十二の村の氏神となっている。本神社は皇室の崇敬、武将、諸候の崇敬が厚く、永久年間の頼仁親王奉納と伝える大般若経が現存する。

福岡神社　旧村社

倉敷市林六七五

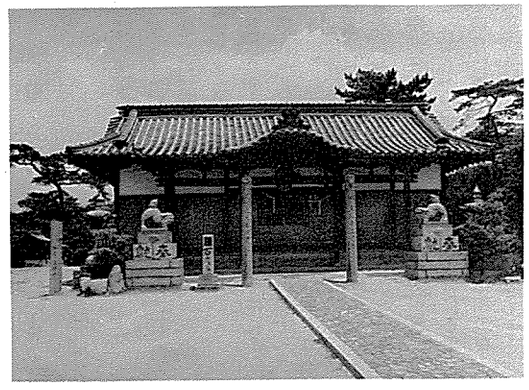
主祭神　猿田彦命　磐長比売命
例　祭　十月二十四日　**境内地**　二六三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　雙同神社
崇敬者数　一〇〇人
宮　司　大守　哲
責任役員　山下順之助　村上強志　高畠信明　辻　節夫
宝　物　棟札一（享保十四年六月）
由緒沿革　創建年月日は不詳であるが、神武天皇の五十八年と明治四年の書上帳にある。郷中最古の産土神であり。宝永二年八月の再建。熊野神社由緒によれば、御鎮座の前、神輿の船が水島灘を過ぎられた時、海浜に白髪、額に浪の文をなした老翁が斧鉞をとり船に対って「此れより北方に霊地あり、福岡の邑如意宝満の峯という。宜しく速かに鎮斎すべし」と。こうして熊野神社の鎮座をみた。老翁が佇立なさった石を、社の後方に斎い鎮め、地主の神として祀ったと。



藤田神社　旧村社

岡山市藤田五〇九一一

主祭神　豊受大神　大国主命　少彦名命
例　祭　五月五日・十月十五日
境内地　七〇〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
氏子数　一、八〇〇戸　**崇敬者数**　一〇〇人
宮　司　今井　忠　**禰　宜**　今井勝子
責任役員　岡崎鹿夫　長保一郎　岩本久夫　高橋九助　高田正直　河内　毅
由緒沿革　実業界の偉人、藤田傳三郎翁による。児島湾干拓の大事業により藤田村が創立せられるに伴い、村民の信仰の中心として、大正四年二月当神社が設立せられた。境内地、諸施設等はもともと藤田組の寄附による。大正十五年二月に神饌幣帛料供進神社に指定せられた。



本荘八幡宮　旧郷社

倉敷市児島通生二二一

主祭神　品陀和気命　足仲彦命　息長帯比売命
例　祭　十月第二土曜日・日曜日
境内地　八、〇四四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　境内　若宮天神社　外九社　境外　王子神社　塩生神社　住吉神社
氏子数　六五〇戸　**崇敬者数**　二、五〇〇人
宮　司　赤星　治

責任役員　岸本　正　原　光治　三宅　猛　大森寿夫
宝　物　重文　森寛斎画双雞図絵馬一面　岡山藩主歴代寄進状九通　石造明神鳥居一基（応永二十八年建立）
由緒沿革　大宝元年豊前国宇佐からの勧請という。延暦十三年坂上田村麿が神封百五十戸を寄進した。弘安二年正月社領八十石の寄進をうけた。天正三年兵火で社殿炎上。慶長十年下津井城主池田長政が社領二十五石を寄進。以後、歴代の岡山藩主は藩崇敬の社として尊信した。本神社は児島郡南部十数か村の大氏神として尊信せられている。明治七年郷社に列格。同二十七年本殿改築。明治四十一年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

疫神社　旧無格社

倉敷市林一三七六

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月十九日　**境内地**　六四坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　地神社
崇敬者数　五〇人
宮　司　大守　哲
責任役員　谷田強志　安倉卓治　古市靖雄
由緒沿革　当神社の創建年代は不詳であるが、岡山藩池田家文書神社明細帳に依ると、熊野神社末社とある。

山村神社　旧村社

倉敷市児島由加三五五

主祭神　大山祇命
例　祭　十月第二日曜日
境内地　五〇〇坪
主要建物　本殿　素殿　釣殿　拝殿
摂末社　荒神社
氏子数　九戸
宮　司　河本貞郁
責任役員　石井敏雄　石井舜太郎　藤原重一
由緒沿革　創立は文禄五年と記されている。旧号を柴坂王子宮と称えていたが、明治二年に山村神社と改号した。池田家撮要録によれば「田壱畝弐拾歩高参斗二升、先年より修理料供物料に立来高外」とある。吉備温故秘録には、「社領高参斗弐升坂手王子」と記されている。

由加神社　旧県社

倉敷市児島由加二八五二

主祭神　彦狭知命　手置帆負命
例　祭　旧六月二十二日・二十三日
境内地　二、一四八・八坪
主要建物　本殿　釣殿　幣殿　拝殿　神門　社務所
摂末社　稲荷神社　素盞嗚神社　天津神社　菅原神社　佐渡稲荷神社
崇敬者数　二〇〇人
宮　司　佐伯　正
責任役員　藤原丈夫　佐伯増弘
由緒沿革　瑜伽山略記によれば、天平年中の鎮座という。中世、由加大権現と称し蓮台寺の社僧が奉仕していた。以前は現在の社地から、東北数町の古瑜伽の谷間に鎮座していたのを、元禄の頃移転したという。宝暦十二年、国守池田継政が社参せられてから、代々の藩主の尊信が殊に篤く、毎年奉幣使を特派せられている。また、定紋付麻幕、燈籠の寄進も行われた。明治五年四月、由加神社と改称し村社となり、同十四年三月、県社に列格する。



別浦海神社　旧村社

児島郡灘崎町川張八八九

主祭神　少童神
例　祭　十月十六日・十七日
境内地　三二四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　素盞嗚神社　荒神社　特牛神社
氏子数　一五〇戸
宮　司　三宅和敬
責任役員　星島善昭　星島逸雄
由緒沿革　本神社は延宝四年九月六日の創建で、社号を別浦海龍王と称えていたが、明治二年五月に別浦海神社と改称した。明治四年九月十六日に本殿を、明治三十年四月に拝殿を改築している。昭和二年十一月に神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

御津南支部　（四一社）

天津神社　岡山市楢津二〇五〇……一〇八
嚴島神社　御津郡建部町大字西原七一八……一〇八
宇甘神社　〃　御津町大字紙工宮脇一五八七……一〇八
艮御崎神社　岡山市辛川市場一六〇……一〇八
御崎神社　〃　横尾六九九……一〇九
金山鳴瀧神社　御津郡御津町中山九八〇……一〇九
木神社　岡山市福谷四二八……一〇九
吉備津彦神社　〃　一宮一〇四三……一〇九
佐久良神社　御津郡建部町大字桜一一六六……一一〇
正八幡宮　〃　建部町品田二九九……一一〇
菅野八幡宮　岡山市西菅野二九三八……一一〇
素盞嗚神社　〃　芳賀二八七六……一一一
田原八幡宮　〃　田原八一三……一一一
多自枯鴨神社　御津郡建部町田地子五四二……一一一
天神宮　〃　建部町大字中田一五……一一一
天神宮　〃　建部町品田久具一一四八……一一二
富沢神社　〃　建部町富沢一四五……一一二
七社八幡宮　〃　建部町建部上八……一一二
八幡宮　岡山市高野八六四……一一三
八幡宮　〃　西辛川一一一四……一一三
八幡宮　〃　日応寺八九五……一一三
八幡宮　〃　三和一二六八……一一三
八幡宮　岡山市富吉一八五九……一一三
八幡宮　〃　中原一一四八……一一四
八幡宮　〃　長野九六二……一一四
八幡宮　〃　松尾四九六……一一四
八幡宮　〃　芳賀一四一六……一一四
八幡宮　〃　一宮尾上一五三〇……一一四
白山神社　〃　首部二三六……一一五
日吉神社　〃　佐山一三四八……一一五
松尾神社　〃　三和一七五七……一一五
松尾神社　〃　東菅野一六八四……一一五
松尾神社　〃　富原一〇五七……一一五
眞名井神社　御津郡御津町中泉一一九……一一五
眞名井神社　〃　建部町大字市場六九……一一六
神社　岡山市柏谷八三〇……一一六
宮地神社　御津郡建部町宮地一〇八……一一六
宗形神社　岡山市一宮大窪一九三……一一七
山野神社　御津郡宇甘東村大字宇甘七七一……一一七
靱負神社　岡山市芳賀下芳賀三四〇〇……一一七
若宮八幡宮　〃　楢津三〇四三……一一七

天津神社　旧村社

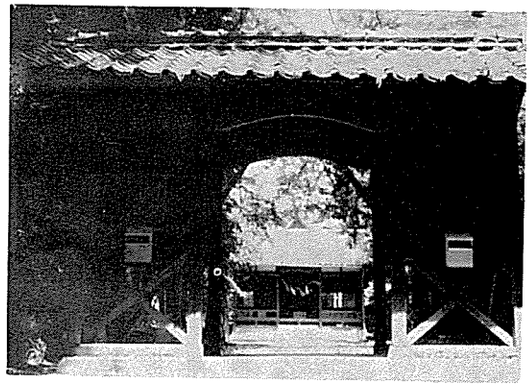
岡山市楢津二〇五〇

主祭神　高皇産霊神　天之御中主神　神皇産霊神
例　祭　十月十七日　**境内地**　一、一七二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　鳥居　燈籠
摂末社　荒神社　八幡宮　春日神社
氏子数　一〇六戸
宮　司　竹原常夫
責任役員　荒木治夫　小野田盛幸　吉原光男
由緒沿革　本神社の創建は約一千年前と伝えられている。天保十年に荘大な御社殿を造営してから、参拝者が多くなり、今日の荘麗な御社殿となった。

嚴島神社　旧村社

御津郡建部町大字西原七一八

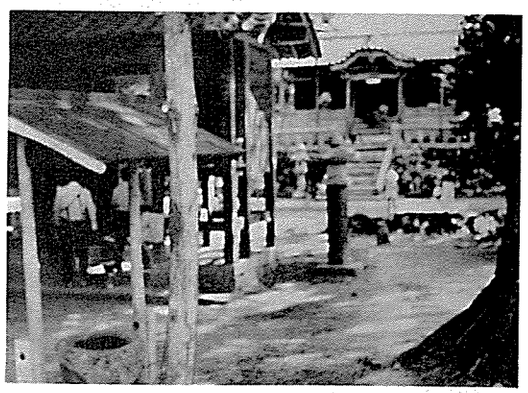
主祭神　市杵島姫命
例　祭　十月二十一日　**境内地**　七二一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
氏子数　三五戸　**崇敬者数**　一二人
宮　司　石坂四郎
責任役員　竹中英夫　長尾　寛　長尾純平
由緒沿革　創建年代不詳。古くは厳島大明神と奉称したが、明治二年に厳島神社と改称し神社を造営した。享保年間に尼子義久が毛利元成の軍と戦って利あらず、敗走する時に幼児を乳母に託した。乳母は幼児を懐いて民家の床下にかくれ、遂に難をのがれたのは、厳島大明神の加護であると、此の地に祠を建てて奉祀した。これが今日の厳島神社であるとの古老の伝説である。



宇甘神社　旧村社

御津郡御津町大字紙工宮脇一五八七

主祭神　不詳(大蔵大明神　加茂大明神)別雷命　仲哀天皇　応神天皇　外五神
例　祭　十月二十日　小祭　九月十五日
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　龍王神　天満宮　三宝光神
氏子数　九〇戸　**崇敬者数**　二五〇人
宮　司　菱川文輔
責任役員　福井虎男
由緒沿革　伏見天皇の永仁二年に、この宮脇大蔵の地に氏神様として大蔵大明神を奉祀したのが起源であろう。後土御門天皇の明応五年六月大洪水のため、加茂市場の加茂大明神の御霊社がこの地に流れて鎮座した。貞享四年改築、安政三年御本殿葺替、翌四年拝殿を建築した。大正三年宇甘神社と改称し、村社に列格した。



艮御崎神社　旧村社

岡山市辛川市場一六〇

主祭神　温羅和魂　外一柱

例　祭　十月二十二日　**境内地**　一、〇二七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　随身門
氏子数　七五戸　**崇敬者数**　五〇人
宮　司　黒住虎雄
責任役員　小林源太郎　矢吹甚衛　馬場春治
由緒沿革　本神社は艮御崎宮と称して、小丸山古墳の丘陵にある。丘陵のまたの名を中山塚という。「吉備津彦命為西道将軍吉備の国時有吉備冠者俟命之軍雖唯患各泯而已、冀免我罪為君之臣応退逆徒、君現神我又為使者之神加賞爵於国民云云艮御崎宮是也」

御崎神社　旧村社

岡山市横尾六九九

主祭神　大己貴命
例　祭　十月二十六日　**境内地**　四六一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社
氏子数　二一〇人
宮　司　佐野光正　**禰　宜**　伊丹正秋
責任役員　今井勘治　高木茂樹　坪江茂市
由緒沿革　明応二年三月に当地の住人が伊勢参宮の帰路、奈良の春日神社に参拝し御分霊を勧請して、御崎神社を当地に創建したと古老の口伝にある。この時金幣を拝授し、本殿内に奉安し現存している。その頃各地に兵乱があり、信仰は薄くなったが、本神社に祈願すれば成就するとて、参拝者が多くなったと云う。文禄四年に御本殿を再建。明治二十五年七月に御本殿を改築し現在に至っている。

金山鳴瀧神社　旧村社

御津郡御津町中山九八〇

主祭神　鳴瀧大神　応神天皇　天照大御神　春日大神
例　祭　十月十日　**境内地**　五〇三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
氏子数　八六戸
宮　司　末広勅忠
責任役員　中山武夫　後藤　稔　森元忠志
由緒沿革　神階従五位下、国内神名帳所載の神社である。本神社は本国総社神名帳に金山鳴滝神社、山本氏本に従五位下金山鳴滝明神と記載してある。金山は御野津高の両郡に跨る高山で、背面は本部津高郷に属している。金山の中腹から落ちたぎり、中山の村間を清く流れる滝の下に御鎮座して、滝津瀬を司り、公田の用水を守護する神様であるから、金山鳴滝神と尊称すると申伝えている。

木神社　旧村社

岡山市福谷四二八

主祭神　句々廼馳命
例　祭　十月十七日　**境内地**　一三六坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　七四人
責任役員　伊丹鉄夫　伊丹広太郎　伊丹静夫

吉備津彦神社　旧国幣小社

岡山市一宮一〇四三

主祭神　吉備津彦命
例　祭　十月第三土曜日・日曜日
境内地　一〇五、二八五・四五坪

由緒沿革　本神社は享保十三戊申四月の創建で、木蔵大明神と尊称し、御社殿も広大な建物であったが、兵乱のため御社殿や宝物を焼失し、氏子は離散したが、文化四年四月に再興した。明治初年になり木蔵大明神木神社と改称し、御本社を改築した。昭和十五年に拝殿を改築し現在に至っている。



主要建物　本殿　渡殿　釣殿　祭文殿　軒廊　拝殿
随身門　神饌所　社務所
摂末社　子安神社　外十九社
氏子数　五五〇戸
宮　司　宮司代務者　田口好清
責任役員　草野八治　斎藤外佐太　深井亀次郎　黒住勝輝　虫明　巽
宝　物　太刀　十二面鏡　棟札　古鉄四角燈籠　古文書禁制　知行目録　社領寄進状　外七〇点
特殊神事　御幡献納　流鏑馬神事
由緒沿革　本神社は孝徳天皇の御代、吉備国から備前国を分置し、その宗祀として崇めた。平安時代には国司の崇敬が厚く、鎌倉時代には武家の保護があった。建治二年院宣により遷宮、建武・応永年間に足利氏によって造営せられた。室町時代には赤松・浦上次いで豊臣秀吉等の崇敬が厚く、江戸時代には藩主池田照直が社領三百石を寄進した。歴代藩主の崇敬が厚かった。昭和三年に国幣小社に列格。備前国の一宮として尊崇を受け現在に至った。社前の一対の石燈籠は我国最大のものである。

佐久良神社　旧村社

御津郡建部町大字桜一一六六

主祭神　木花咲夜姫命　大山津見命　岩長姫命
例　祭　十月十五日　**境内地**　五四六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　天神社
氏子数　七五戸　**崇敬者数**　六〇人
宮　司　石坂四郎



責任役員　千田　潔　小山弼　吉幸景雄
由緒沿革　本神社は第一一二代霊元天皇の寛文五年に桜村字王子谷に、王子大明神として勧請した。その後大水害により、享保二年正月現位置に勧請し、同十二年六月十五日に鳥居を築造し、明治二年に佐久良神社と改称し今日に至っている。本神社の篦焼は名物として古くより一般に認められている。

正八幡宮　旧村社

御津郡建部町品田二九九

主祭神　応神天皇　仲哀天皇
例　祭　十月十五日　**境内地**　三九六・八坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　二八戸　**崇敬者数**　三〇〇人
宮　司　海士部重徳　**禰　宜**　瀬能太郎
責任役員　田渕方四　善木芳三郎　田渕　武　河原武正
由緒沿革　創建年代不詳。御津郡建部町品田の御鎮座である。山城国石清水八幡宮を勧請したとの伝えがある。二月の初午に氏子はもとより多数の崇敬者が参拝し賑う神社である。



菅野八幡宮　旧村社

岡山市西菅野二九三八

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月二十三日・二十四日
境内地　七四五・五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
氏子数　七〇戸
宮　司　大守麟児
責任役員　信江通男　鳴村宇多治　川田元平
由緒沿革　創建年代、由緒は不詳である。元西回の御鎮座であったのを、寛文九己酉歳潤十月に現在地に御遷宮申し上げた。元治元年四月拝殿を建立、屋根の葺替をした。明治四十五年六月二日改築。昭和四十八年十二月拝殿を改築した。当地の氏神である。

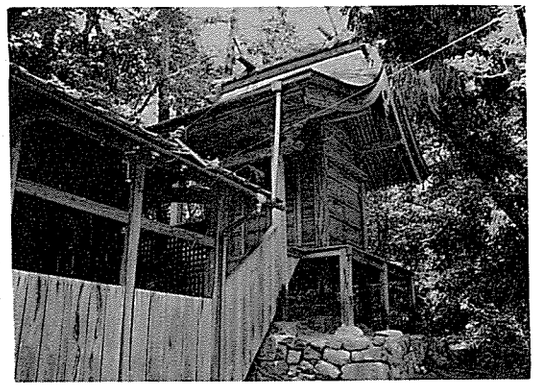
素盞嗚神社　旧村社

岡山市芳賀二八七六

主祭神　誉田天皇　天津神
例　祭　十月十七日　**境内地**　一四〇坪
主要建物　本殿
氏子数　二五九人
宮　司　佐野光正　**禰　宜**　伊丹正秋
責任役員　市川玉雄　市川数太　市川銀次郎
由緒沿革　往古越後国芳賀郡芳賀村から、御祭神をお迎えした時からこの村を芳賀村と呼び、御社殿を創建して疫神社と奉称した。宝暦二年に御社殿を改築した。当時兵乱があって拝殿と古文書を焼失したとの口伝がある。明治二年に社号を素盞嗚神社と改称し、御本殿の屋根を銅板に葺替えて現在に至った。

田原八幡宮　旧村社

岡山市田原八一三



主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后
例　祭　十月十六日・十七日
境内地　七六七・二五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　番神社
氏子数　九〇戸　**崇敬者数**　四三〇人
宮　司　大守麟児
責任役員　上田新太郎　河田文太郎　田中優暉治　河田岩磨　渡辺寿美衛

由緒沿革　創建年代由緒は不詳であるが、寛文年間の創建と推定出来る。田原部落の氏神として信仰、団結の中心となっている。

多自枯鴨神社　旧郷社

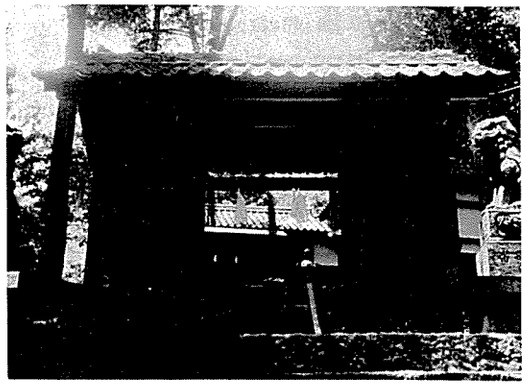
御津郡建部町田地子五四二

主祭神　鴨事代主神
例　祭　十月十五日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　幡神社　賽神社　龍神社　山神社　稲荷神社　天神宮　道祖神
氏子数　五二戸　**崇敬者数**　一八〇人
責任役員　大頭　栄　河田正教　行森　博
由緒沿革　創建年代は不詳。延喜の頃多自枯鴨神社、中古以来は五社八幡宮と称した。明治二年式社改により旧号に復した。式外社であり、神位従四位下であった。享保十六年七月九日火災のため古書類宝物縁記が鳥有に帰した。村名を田地子と称したのは多自枯鴨、多自枯布勢両式外神社の鎮座によったものという。本神社は出雲大社の御分霊を奉祀している。和銅六年美作国南条郡下神目村に分社を創建した。現在の(県社)志呂神社である。明治六年郷社に列した。

天神宮　旧村社

御津郡建部町大字中田一五

主祭神　菅原道真

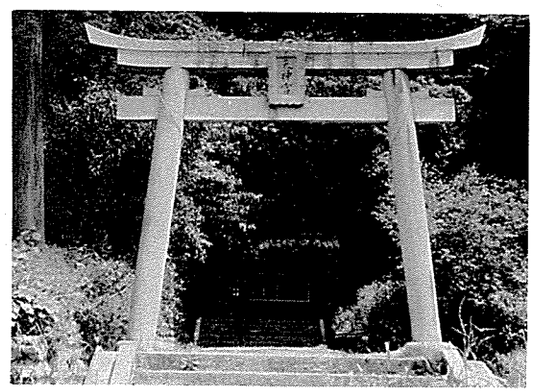


例　祭　十月十五日　**境内地**　一、六九六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　社務所
摂末社　八幡神社　春日神社
氏子数　二四〇戸　**崇敬者数**　二八人
宮　司　石坂四郎
責任役員　河原文雄　藤井省巳　笹野　修
由緒沿革　創建は不詳であるが、鎌倉時代の初期の勧請と伝えられている。永禄年間に火災で、社殿・縁起書・古文書・宝物等が灰になった。現社殿は延宝二年の再建である。建部郷六代の領主池田宗春は特に崇敬厚く、その子孫累代祭祀料献穀等を寄進したが、明治二年に之を廃した。

天神宮

御津郡建部町品田久具一一四八

旧無格社



主祭神　菅原道真
例　祭　十月十五日　**境内地**　一九〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　六〇戸　**崇敬者数**　一〇〇人
宮　司　石坂四郎
責任役員　善木昭昌　大内喜鶴　森　久一　小坂田和男　大内利昌
由緒沿革　創建年代・由緒不詳。

富沢神社

御津郡建部町富沢一四五

旧村社

主祭神　春日大神　外二柱（天照大神　誉田別尊）
例　祭　十月十五日　**境内地**　八二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫
摂末社　古宮神社（藤田神社）
氏子数　七五戸　**崇敬者数**　二〇〇人
宮　司　日野宏哉
責任役員　原田金次　山崎知治　重本　稔　金島　稔　五味浅春　熱田忠義　行森雅之　藤原昭一
特殊神事　獅子舞　棒使
由緒沿革　創建年代は不詳であるが、延享二年の池田家文書に、富沢番神二社とあり、元、幡神宮又は番神宮と称えていた小山・藤田の二社を明治二年に富沢神社、藤田神社と改称。明治六年に富沢神社が村社に列格し、明治二十五年に藤田神社を合祀して今の富沢神社となった。十二月十五日の小祭と称する当屋移しの神事は、往古の祭りと暮しを知る上で貴重な神事である。

七社八幡宮

御津郡建部町建部上八

旧村社

主祭神　応神天皇　外六柱
例　祭　十月十五日　**境内地**　四五〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　御輿庫
摂末社　天神社　龍神社
氏子数　一八〇戸　**崇敬者数**　一三人



宮　司　石坂四郎
責任役員　徳田元市　河原英二　栗原藤衛
由緒沿革　創建年代不詳。正中十二年八月の勧請札が最古の徴証である。日本武尊が東西征戦に樹立せられた武功を、後世に伝えるため、この建部村に奉祀し、併せて尊に縁故の深い、応神天皇・仲哀天皇・神功皇后・仁徳天皇・武内宿禰・玉依姫神を合祀し、七社八幡宮と奉称した。

八幡宮

岡山市高野八六四

旧村社

主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后
例　祭　十月九日　**境内地**　三〇二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　二一三戸
宮　司　末広勅忠
責任役員　窪田半四郎　窪田虎男　村井寿喜
由緒沿革　由緒創建年代は不詳である。

八幡宮

岡山市三和一二六八

旧村社

主祭神　応神天皇
例　祭　九月十四日　**境内地**　五〇三・二八坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　三一五戸
宮　司　田口好清
責任役員　蜂谷唯二　難波豊太
由緒沿革　創建は建武年間である。明治十二年九月十四日村社に列格した。

八幡宮

岡山市富吉一八五九

旧村社

主祭神　誉田天皇　神功皇后　玉依姫命
例　祭　十月二十二日　**境内地**　二一〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　荒神社　天神社
氏子数　一三八人
責任役員　斉藤今一　横田慎一郎　横田直孝
由緒沿革　寛文元暦十月にこの地に勧請鎮守した。元禄十五年に御社殿を建立した。昭和十五年四月に拝殿・末社を改築し、現在に至っている。

八幡宮

岡山市日応寺八九五

旧村社

主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后
例　祭　十月十七日　**境内地**　一九二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　三十三番神
氏子数　五二戸
宮　司　末広勅忠
責任役員　信江益次　信江　操　吉田一太
由緒沿革　創建年代・由緒は不詳である。

八幡宮

岡山市西辛川一一一四

旧村社

主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后
例　祭　十月十四日　**境内地**　一八〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社
氏子数　四八九人
宮　司　佐野光正　**禰　宜**　伊丹正秋
責任役員　河田　清　太田　力　片山太郎
由緒沿革　本神社の勧請は宝暦年間以前で、往古の詳細は不詳であるが、明応年間の建造であるとの古老の

由緒沿革　本神社の勧請は明応年間以前で、三社八幡宮と奉称した。宝暦四年七月に本神社を創建した。当時の棟札が現存している。もと本神社は当村の古尾の山上にあったのを、現在地に奉遷した。安政三年に改築、明治二年に銅板に葺替え、昭和十五年に拝殿を改築し現在に至っている。

八幡宮　旧村社

岡山市中原一一四八

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后　猿田彦命
例祭　十月十五日　境内地　三八五坪
主要建物　本殿　拝殿　随身門
氏子数　一二〇人
責任役員　益田　長　大森正一　益岡辰夫
由緒沿革　清和天皇貞観三年当時の武士の土地の侵略か甚しいので、八幡宮と云えば其難をまぬがれることが出来ると云う信仰があったので、筥崎八幡宮の御分霊を奉戴して、此の地に御社殿を造営した。氏子の守護神として尊崇した。

八幡宮　旧村社

岡山市長野九六二

主祭神　誉田天皇　神功皇后　玉依姫命
例祭　十月二十六日　境内地　一五五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社
氏子数　一九三人
宮司　佐野光正　禰宜　伊丹正秋
責任役員　児子安太郎　伊丹米男　神崎賢太郎

八幡宮　旧村社

岡山市一宮尾上一五三〇

主祭神　誉田天皇　神功皇后　中山主命
例祭　十月十七日　境内地　二一〇坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　二九五人
宮司　佐野光正　禰宜　伊丹正秋
責任役員　西岡健太郎　西岡仲一　西岡利太
由緒沿革　本神社の勧請は元禄年間以前で凡そ四百年の古社であると、寛文三年に建立したとの古老の伝えがある。明治二年に御本殿を改築、大正三年に拝殿を改築して現在に至っている。

八幡宮　旧村社

岡山市松尾四九六

主祭神　応神天皇　神功皇后　玉依姫命
例祭　十月十七日　境内地　二一〇坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　九五人
宮司　佐野光正　禰宜　伊丹正秋
責任役員　岸　静夫　岸　鹿光　岸　弘基
由緒沿革　本神社は寛文元暦以前の創建で、寛政三年に御本殿・拝殿を建築したと云う古老の口伝がある。天保十二年四月に本神社を改築し、更に明治四十五年に拝殿を建築し、昭和二十四年十月に御本殿を改築し現在に至っている。

八幡宮　旧村社

岡山市芳賀一四一六

主祭神　応神天皇　神功皇后　中山主命
例祭　十月二十二日　境内地　三〇七・五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　御神輿庫
摂末社　八徳神社　大蔵神社　稲荷神社　天神社
細女神社
氏子数　九八〇人
宮司　江口式部
責任役員　中山佐七　深井喜代治　則武　一
由緒沿革　創建は永保元年八月である。備前国旧藩主池田家文庫本に津高郡尾上村鎮座八幡宮とある。本神社は吉備氏（吉備之臣）がこの地に住居して次第に繁栄し、その祖 中山主命を この地に祀った。後に御祭神決定のとき応神天皇を祀り八幡宮と称した。明治四年十月に村社に列格。昭和十六年に明治三十九年勅令第九十六号第一条第二項により神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

口伝がある。安政三年に本社殿を改築、大正三年に常夜燈を建立した。昭和三年三月に本社殿を修繕し、社務所を建造し、現在に至った。

八幡宮　旧村社

岡山市中原一一四八

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后　猿田彦命
例祭　十月十五日　境内地　三八五坪
主要建物　本殿　拝殿　随身門
氏子数　一二〇人
責任役員　益田　長　大森正一　益岡辰夫
由緒沿革　清和天皇貞観三年当時の武士の土地の侵略か甚しいので、八幡宮と云えば其難をまぬがれることが出来ると云う信仰があったので、筥崎八幡宮の御分霊を奉戴して、此の地に御社殿を造営した。氏子の守護神として尊崇した。

八幡宮　旧村社

岡山市長野九六二

主祭神　誉田天皇　神功皇后　玉依姫命
例祭　十月二十六日　境内地　一五五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社
氏子数　一九三人
宮司　佐野光正　禰宜　伊丹正秋
責任役員　児子安太郎　伊丹米男　神崎賢太郎

白山神社　旧村社

岡山市首部二三六

主祭神　伊邪那美命　菊理姫命
例祭　十月二十六日　境内地　三三九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
氏子数　一一三戸
責任役員　人見　寛　林　安夫　常光　毅
由緒沿革　光孝天皇の御代仁和元年に、加賀国白山比咩神社の御祭神の御分霊を白山権現として勧請した。明治二年に白山神社と改称した。

日吉神社　旧村社

岡山市佐山一三四八

主祭神　大山祇命　応神天皇　天児屋根命
例祭　十月十七日　境内地　三三三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
氏子数　一一八戸　五二二人
宮司　竹原常夫
責任役員　丹原丁之　尾野明良　丹原己代太　丹原司郎
由緒沿革　本神社の創建は約一千年前と伝えられている。天保十年に壮麗な社殿を造営してから、参拝者が多くなり今日の広大な社殿を築造するに至った。

松尾神社　旧村社

岡山市三和一七五七

主祭神　大山咋命　市杵島姫命
例祭　十月二十五日　境内地　一八〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社
氏子数　二四戸
宮司　佐野光正　禰宜　伊丹正秋
責任役員　藤井幹吾　遠藤　始　重谷定秋
由緒沿革　創建年代不詳。往古は松尾宮及び松尾大明神と称し、下安部倉字古宮の鎮座であったが、延宝二年現在の地に遷座した。延宝四年本殿を建築、寛政三年三月拝殿を建築、安政六年釣屋を建築、文化四年本殿を改築、明治二十四年拝殿・幣殿を整備した。

松尾神社　旧村社

岡山市東畦野一六八四

主祭神　大山咋命　市杵島姫命　天津児屋根命
例祭　十月十四日　境内地　三、四二四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
氏子数　八六戸
宮司　末広勅忠　禰宜　末広恒則
責任役員　金光覚二　岩井時次郎　坂本正夫
由緒沿革　創建年代・由緒は不詳である。旧号を松尾大明神と奉称したが、明治二年松尾神社と改称した。

松尾神社　旧村社

岡山市富原一〇五七

主祭神　大山咋命　月夜見命
例祭　五月八日・十月十五日・十六日
境内地　二七六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　二八〇戸
宮司　竹原常夫
責任役員　蜂谷静太　森川栄次郎　蜂谷正義
由緒沿革　天文三年農作物が不作のため百姓が生活に困窮したので、京都山城国葛野の松尾山田に御鎮座の穀物神の大山咋命の御分霊を奉戴して、この地に祭祀した。それより農作物が繁茂し、氏子は繁昌したという。以後当地の守護神となり氏神様とあがめられた。

真名井神社　旧村社

御津郡御津町中泉一一九

主祭神　五男三女神
例祭　十月二十日　境内地　四二四坪

主要建物 本殿　幣殿　拝殿　随身門　神輿庫
氏子数 一七四人
責任役員 宮本邇太　海野藤市　海野元道
由緒沿革 創建年代・由緒不詳。

真名井神社　旧無格社

御津郡建部町大字市場六九



主祭神 五男三女神
例祭 十月十五日　**境内地** 一五七坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿

氏子数 一〇七戸
宮司 石坂四郎
責任役員 石井照男　藤井吾造　藤井秋男
由緒沿革 創建年代・由緒不詳。古くは王子権現と尊称したが、明治二年に真名井神社と改称した。

神神社　旧郷社

岡山市柏谷八三〇

主祭神 大物主命　外十二柱　（相殿 応神天皇　仁徳天皇　紀州熊野大神　五男三女神　神功皇后　玉依姫命
例祭 十月十五日　**境内地** 八、二九八坪
主要建物 本殿　幣殿　釣殿　拝殿　社務所　随身門
氏子数 三五六戸　**崇敬者数** 五〇人
宮司 黒住虎雄
責任役員 則武正義　黒崎喜蔵　何森敏男　溝口一夫
特殊神事 神山の裾に鯨岩、またの名を稚児岩と申す鯨に似ている大岩があって、大神また御子神等この鯨岩に乗りまして、この神山の裾につき給う。その後、古来この大岩の御前で、御迎えの神事を正月五日に行う。
由緒沿革 本神社は本国総社神明帳に神明神、山本氏本に従四位神大明神と記載のある旧社で、備前式内外古社百二十八社の一である。元亀・天正の頃、岩倉八幡宮と称した。明治三年神神社と称し郷社に列せられた。明治四十四年隣村四ヶ村の神社を合祀し、神山の頂に鎮座している。

宮地神社　旧無格社

御津郡建部町宮地一〇八

主祭神 天照大御神　春日大神　誉田天皇
例祭 十月十五日　**境内地** 一二〇坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　輿部屋
氏子数 四〇六人
宮司 石坂四郎
責任役員 河本英司　河本昭吾　岡本葭勝
由緒沿革 創建年代不詳。旧号は幡神社と奉称した。明治二年に宮地神社と改称した。



主祭神 田心姫命　湍津姫命　市杵島姫命　素盞嗚尊
例祭 十月十七日
境内地 三、二七二・四八坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　神饌所　参集所　社務所
摂末社 疫神社　祖霊社
氏子数 五二〇人
宮司 佐野光正
責任役員 秋山和平　児玉　元　大森良一　脇本栄治　森　豊　難波武師
由緒沿革 延喜式に宗形神社、本国（備前）総神名帳に宗形神社、備前一宮吉備津彦神社左楽頭本に宗形神社と記載してある。本郡二所の名社である。明治四年十月郷社に列格。明治四十年一月二十七日、明治三十九年勅令第九十六号第一条第二項に依り、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

宗形神社　旧郷社

岡山市一宮大窪一九三

氏子数 一七四人
責任役員 露梨正己　二宮三郎　赤木英雄
由緒沿革 創建年代・由緒不詳。

靱負神社　旧村社

岡山市芳賀下芳賀三四〇〇

主祭神 天忍日命　長白羽命　大歳命
例祭 十月十七日　**境内地** 九〇七・七三坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿
摂末社 疫神社
氏子数 二四〇人
宮司 佐野光正
責任役員 今井喜太郎　角南宗一光　角南幾三郎　三宅時夫　斉藤　忠　板野正人　今井　博
由緒沿革 本国（備前）総社神名帳に靱負神社、山本氏本に従四位下靱負明神と記載してある神社で、天忍日命を奉斎する社で、本国式内外古社百二十八社の内の一社である。明治四年に村社に列格した。

山野神社　旧村社

御津郡宇甘東村大字宇甘七七一

主祭神 大山津見神　野槌神
例祭 十月二十日　**境内地** 三四二坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　随身門　神輿庫

若宮八幡宮　旧村社

岡山市楢津三〇四三

主祭神 仁徳天皇　応神天皇　神功皇后　玉依姫命
例祭 十月十七日　**境内地** 八七六坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　随身門　神輿庫
氏子数 一七四人
責任役員 二宮三郎　赤木英雄
由緒沿革 創建年代・由緒不詳。

主要建物 本殿　幣殿　拝殿
摂末社 番神
氏子数 七〇戸
宮司 竹原常夫
責任役員 久世喜三郎　竹原久夫　久世平治
由緒沿革 本神社の創建年代は不詳であるが、住民が難波の仁徳天皇の御陵に参拝し、その御分霊を祀ったと伝えられる。寛政三年に御本殿を改築。文化四年十一月に幣殿・拝殿を造営。文政十三年九月に番神・石鳥居を造設。明治三十二年九月・三十七年一月に両側の石燈籠を築造。昭和十二年四月に随身門を再建、玉垣六十六尺を造営した。

鈴

祭祀又は神拝用の発音器である。主として金属製であるが、稀には土製もある。神事用は銅、真鍮製が多い。神前にかけて麻縄又は五色の布等を垂れ、参拝者が振り動かして鳴らす。また、比較的小形の鈴を十数箇集めて、神楽の採物として巫女が神前舞踊の動作につれて、打鳴らすことは現今も行われている。これが神楽鈴である。五十鈴川の名は多数の鈴の意味である。「倭訓栞」によると「鈴とよむは音の涼しきより名くるなるべし」とある。鈴を神事に使用したのは神代以来からであるらしい。

氏子区域

神社を中心として慣習上定められている地域をいう。その区域内の居住者は当然その神社の氏子と推定される。原則として各神社の氏子区域は互に重複しないことである。

随身門

門の両脇の間に随身像を置く建物。随身とは俗に矢大臣、左大臣といゝ、剣を帯び矢を負うた姿である。或は豊磐間戸、奇磐間戸の二神と伝えている。門の形式は種々である。楼門の場合もあるが、一般には単層門である。現存の最古のものは吉備津神社の南北随身門二棟がある。国宝である。中世以降随身に替えて仁王にした例が多くなった。

鳥居

神社の特色の一つに鳥居がある。これは神門の一つであるが、その意味は「通り入る」から起った、又「鳥がとまる」からであると云われている。古来の鳥居は白木であるが、仏教伝来の影響を受けた朱塗のものもある。

鳥居の形状の上から直線式ものと、幾分曲線式のものと二つに分けられる。直線式の代表的なものが神明鳥居である。曲線式の代表的なものが明神鳥居である。神明鳥居は柱二本と笠木と貫の四つの材から出来ている。貫は柱の外には貫き出ないようになっている。柱と笠木とは丸太であり、貫は丸太か角材を用いてあるが、丸太の方が古代の形式である。

明神鳥居は二本の柱と貫、島木、笠、額束の六つの材からなっている。柱のみ丸太で、他は角材で、笠木には鎬があるので、断面は五角形になっている。柱には転びがあり、笠木、島木には曲線がつき、両端になるほど反り上っている。

この明神鳥居の変形に四脚鳥居がある。これは明神鳥居の柱の前後に抱柱がつき、貫で連結して固めたものである。これは「両部鳥居」とも云われている。

鳥居は古代に住宅建築の入口の門として作ったもので、神社では神域に入る関門として重視されている。簡素な建物であるが、構造の美しさは独特なもので、神社特有のものである。様式は種々に発達したが、その神社の建築様式や祭神と密接に結びついているものが多い。鳥居のうちでは左の如き名称で呼ばれているものが有名である。神明鳥居・明神鳥居・両部鳥居・鹿島鳥居・山王鳥居・三輪鳥居・住吉鳥居・春日鳥居等である。

神門

神社の入口には鳥居があり、神門と云うべきであるが、別に神門を持っているものがある。これは神仏混淆の思想から建てられたものが多く、旧仁王門等の楼門を改造して神門としたものが多い。神門は神社の威儀を表現することの他に、夜間閉鎖して本殿等の安全をはかる為のものもある。

神符守札

神社から氏子崇敬者に授与し、頒賜する、信仰の象徴物を神符守札と云う。神符、守札、大麻、お剣先、お札、神札、お守、護符、祈禱札など種種の言葉が用いられているが、その区別は明瞭でない。これは何等の制度もなく、神学的な意義もなく、一般に崇敬意識の表明として、神から人に与えられ、その霊威にふれたいという気持を反映し、自然に必要としたものである。

神符の拝戴者は護符として、除災招福の呪符と考えているものと、神棚等に奉安して崇敬の念を深め、身体に帯び、日夕神明と共にあるという、精神的緊張を保とうとするものとがある。

神符・守札は年々新しく拝受し、清新の気分をもって奉戴し奉斎すべきである。

神符に類するものとして、破魔矢・破魔弓・絵馬・面・鈴・飴・菓子など種々のものが、縁起品として授与されている。

御津北支部（二九社）

青樹神社　御津郡加茂川町竹部二六四……一二〇
愛宕神社　〃　加茂川町竹部二〇七三……一二〇
天津神社　〃　加茂川町細田一三七二……一二〇
天津神社　〃　加茂川町小森一〇一二……一二〇
天計神社　〃　加茂川町豊岡下二六六七……一二一
岩山神社　〃　加茂川町豊岡上一五八三……一二一
加財神社　〃　加茂川町高富六六七……一二一
風神社　〃　加茂川町広面一二六九……一二一
鴨神社　〃　加茂川町上加茂四七一……一二二
木野山神社　久米郡旭町西一四〇二―三・一四〇二―四……一二二
化氣神社　御津郡加茂川町案田五……一二二
金刀比羅宮　〃　加茂川町広面二六四一……一二三
金刀比羅神社　〃　加茂川町加茂市場九八九……一二三
三所神社　〃　加茂川町三納谷一一七九……一二三
重岡神社　御津郡加茂川町尾原一一〇二……一二四
素盞嗚神社　〃　加茂川町和田一二九……一二四
總社　〃　加茂川町加茂市場一五六七……一二五
高盛神社　〃　加茂川町高谷一五七七……一二五
天神社　〃　加茂川町竹部一〇三五……一二五
天満神社　〃　加茂川町上野六九六……一二六
土井神社　〃　加茂川町下土井一七四六……一二六
能瀬神社　〃　加茂川町美原三〇七……一二六
八幡宮　久米郡旭町江与味一一九一……一二七
八幡宮　御津郡加茂川町豊岡上一八四……一二七
日吉神社　〃　加茂川町下加茂一四七九……一二七
火雷神社　〃　加茂川町上田西一五八……一二八
松尾神社　〃　加茂川町上田東五〇六……一二八
森神社　〃　加茂川町三谷三九二……一二九
八神稲荷神社　〃　加茂川町尾原四〇五―一……一二九

青樹神社　旧無格社

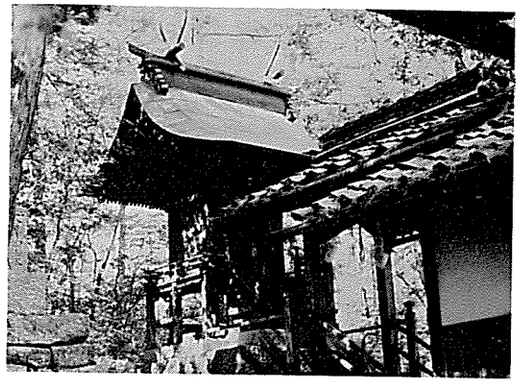
御津郡加茂川町竹部二六四

主祭神　事代主神　三穂津姫命
例祭　十月十三日　**境内地**　四一・五坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　斎神社　疫神社
氏子数　二五戸　**崇敬者数**　六五人
宮司　福島子徳
責任役員　小山東伯　小山一郎　中西生雄
由緒沿革　後陽成天皇の慶長十一年、出雲国美保関神社を勧請奉祀したと伝える。古くから青樹大明神と号し、悪疫退除、農作物および牛馬の守護神として尊崇する者が多い。備中足守藩主の崇敬が篤く、当時は社地が広かったという。現社殿は寛文二年造営のものである。

愛宕神社　旧無格社

御津郡加茂川町竹部二〇七三

主祭神　火之炬彦命
例祭　四月二十四日・七月二十四日・十月二十五日
境内地　七〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社　山神社　大倉神社　外六社
氏子数　五〇戸　**崇敬者数**　二一〇人
禰宜　草地　護
責任役員　奥村潤一　川上仙太　鴨崎定男



天津神社　旧村社

御津郡加茂川町細田一三七二

主祭神　天之御中主尊
例祭　十月二十四日　**境内地**　一、八八〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　森神社
氏子数　六三戸　**崇敬者数**　五、〇〇〇人
宮司　近藤　静
責任役員　津島　豊　福本安治　岸田静昌
由緒沿革　陽成天皇の元慶三年の創建と伝えられる。その他由緒不詳。鎮座地は加茂川町竹部鳴滝七三番地から現鎮座地に移転している。

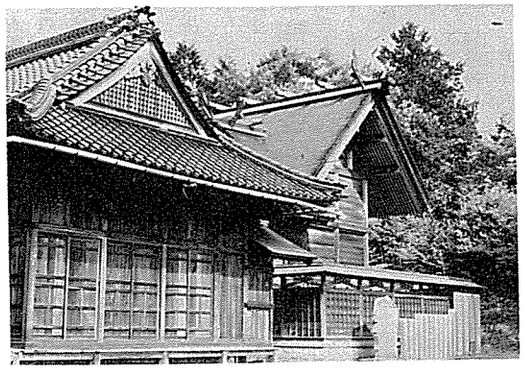
天津神社　旧村社

御津郡加茂川町小森一〇一二

主祭神　天之御中主命　建御賀豆智大神　伊波比主大神
例祭　十月十日　**境内地**　五七五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　絵馬殿
摂末社　愛宕神社　荒神社　疫神社　厳島神社
氏子数　三二戸
宮司　杭田　功
責任役員　大釜敏雄　浅田琢美　石田英三　清原導芳
由緒沿革　口碑によれば、建保年中旱魃があり小森字星原で郷人が雨乞をして霊験を得、寄瑞があったので百坂の城主菱川右京輔が社殿を建立して明現と称し、産土神として鎮祭したという。菱川右京輔は御供田壱町歩を奉納。明治になって天津神社と改称した。

天計神社　旧村社

御津郡加茂川町豊岡下二六六七



主祭神　手置帆負命　彦狭知命
例祭　十月十九日　**境内地**　一、五三三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所　参集所
摂末社　荒神社　若宮
氏子数　九〇戸
宮司　代務者　杉田武義
責任役員　片山舜市　宮脇定太郎　光森仙二
宝物　金幣一垂　鹿角一基
特殊神事　けけろう祭　名衆祭

岩山神社　旧無格社

御津郡加茂川町豊岡上一五八三

主祭神　磐長姫命
例祭　十月二十四日　**境内地**　一八〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫
摂末社　水神社
氏子数　二〇戸　**崇敬者数**　一〇〇人
宮司　光居　矸
責任役員　早原　猛　繁森幸男　小林誠二
由緒沿革　本神社の創建は天正元年三月で、もと五社神社と称していた。昭和二十年四月、岩山神社と改称した。

加財神社　旧無格社

御津郡加茂川町高富六六七

主祭神　宇迦之御魂神
例祭　旧十月亥の日　**境内地**　五〇七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫
摂末社　水神社
氏子数　二〇戸
宮司　光居　矸
責任役員　早原　猛　繁森幸男　小林誠二
由緒沿革　当神社は本国総社神明帳に天計神社、山本氏本に正五位上天計神社と記してある旧社である。もと、天岩山という処に鎮座していたのを、寛弘年中、豊岡下の居住者松久家外十家が大勝山の山林を寄付して今の社地に奉遷したと伝えている。寛文十二年に社殿炎上し延宝六年七月改築。昭和十二年四月に類焼、同十三年十二月改築。明治四十四年十二月、神饌幣帛料供進神社に指定せられている。

風神社　旧村社

御津郡加茂川町広面一二六九

主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫
氏子数　一七戸　**崇敬者数**　二〇〇人
宮司　杭田　功
責任役員　草地知之　草地哲夫
由緒沿革　本神社の創建は天暦二年と伝えている。小本宮山毘沙門寺の守護神である。明和六年頃は梶井天王と称したが、文政年間には嘉財天王と改称した。更に明治初年に加財神社と称することになった。



主祭神　志那津比古命　志那津比女命　相殿品陀別天皇　足仲彦天皇　息長帯比売命

例　祭　十月二十日　**境内地**　一、〇一一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所
摂末社　荒神社　五社神社　沼名前神社　金刀比羅宮　建勲社　地神社
氏子数　四六戸
宮　司　近藤　静
責任役員　河田貞雄　戸田定雄　片倉　正　西信芳三　安藤育善
由緒沿革　崇神天皇の御代、四道将軍吉備津彦命の中国平定の際、その臣鼓彦命が雨坪山の山嶺に小社を建立して、志那津比古命・志那津比女命を勧請した。後、朱雀天皇の承平五年九月九日現地に奉遷（鎮斎）して風谷大明神と称え奉った。明治二年風神社と改めた。明治四十五年六月境外末社八幡宮を相殿として合祀した。昭和十一年十一月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

鴨神社　旧郷社

御津郡加茂川町上加茂四七一

主祭神　別雷神
例　祭　十月十九日　**境内地**　一、四七九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　金刀比羅神社　稲荷神社　森神社　忠魂社
氏子数　一一〇戸　**崇敬者数**　一、五〇〇人
宮　司　福島康臣
責任役員　伊賀　寛　山崎健順　伊賀正之
宝　物　刀剣

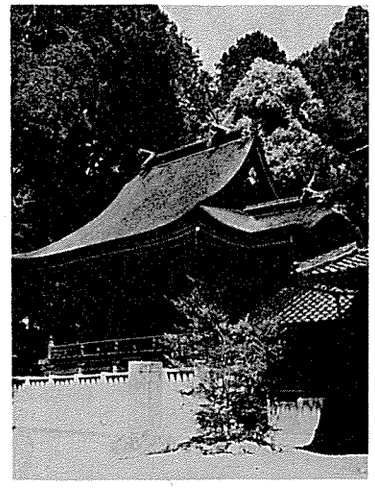


由緒沿革　弘仁二年、山城国愛宕郡加茂大明神を勧請したという。延喜の制、小社に列し、本国総社神明帳に従四位下鴨明神と載せている。虎倉城主伊賀氏が天文十年に社殿を造営し社領を献じた。池田光政公が社殿・末社を造営し、社領米を献進している。池田家代代の崇敬が篤かった。古くは鴨大明神、賀茂大明神また加茂大明神と称していたが、現在は鴨神社と号する。

木野山神社

久米郡旭町西一四〇二―三・一四〇二―四

主祭神　大山祇命　豊玉彦命　大己貴命
例　祭　十月十日　**境内地**　九〇坪
主要建物　本殿　幣殿
氏子数　二〇戸
宮　司　杉田武義
責任役員　二枝典正　大島喜一　真木猪佐夫
由緒沿革　文久年間に悪性の流感が蔓延した。その際御神徳によってその侵入を防止しようと、木野山神社を奉斎し熱心に信仰したところ、霊験があって、一人も感冒にかかって侵されるものがなかったという。御神徳をたたえ、崇敬の念を増し、近辺から参拝者が漸次増加した。



主祭神　伊奢沙和気神　武甕槌命　経津主命　天児屋根命　比売神
例　祭　十月十九日・二十日

化気神社　旧郷社

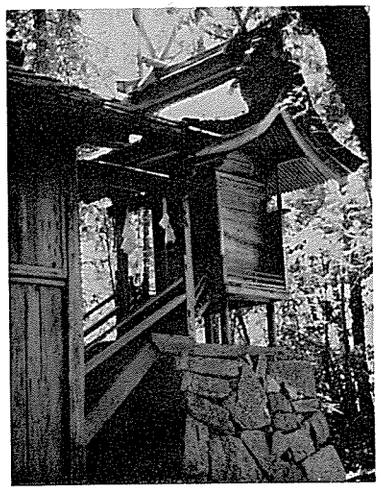
御津郡加茂川町案田五

境内地　二、五九一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　絵馬殿　社務所
摂末社　若宮　水上神社　荒神社　外八社
氏子数　二四〇戸　**崇敬者数**　一、五〇〇人
宮　司　代務者　杭田　功
禰　宜　草地　護　草地已郎
責任役員　小倉虎狼　池本千年　石井弘志
宝　物　鹿角（イザサワケ）　風月燈籠（池田継政公奉納）　檜板額（二条為長書）
特殊神事　苗衆祭　一月十日　七月十六日　十二月一日　備前加茂大祭
由緒沿革　崇神天皇の十年、大吉備津彦命がこの峯においでになり、御食津神を祀って伊奢沙和気神と名づけられた。化気は笥飯と同じである。元正天皇の御代に神異があって春日大神を勧請した。後一條天皇の御代、現地に奉遷し神領を附けられた。近世、武家庶民の信仰が厚かった。神輿の屋根は毎年例祭に榊葉をもって葺き替える。

金刀比羅宮　旧無格社

御津郡加茂川町広面二六四一

主祭神　大物主神　相殿崇徳上皇
例　祭　十一月十日　**境内地**　一三八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社　祇園宮　川合神社　護王社
氏子数　九戸
宮　司　河田伊久夫

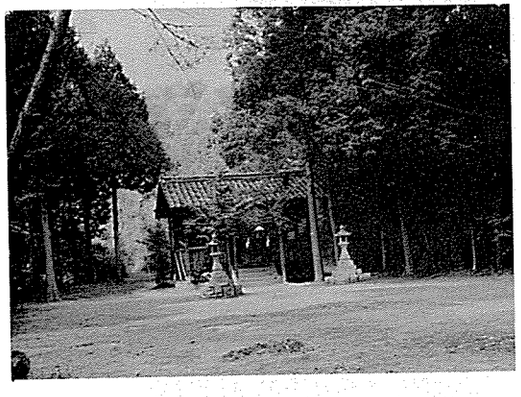


責任役員　時信友雄　藤井哲也　藤井万喜夫　河田治男
由緒沿革　当神社は讃岐国象頭山鎮座の金刀比羅宮の御分霊を奉祀したものであり、御祭神は大物主命、相殿は崇徳上皇である。文政四年、時の半頭源朝臣河田伊勢松が琴平山に小社を築造して奉祀した。嘉永二年、本殿・拝殿の建築をした。

金刀比羅神社　旧無格社

御津郡加茂町加茂市場九八九

主祭神　大物主命
例　祭　十月十日
主要建物　本殿　幣殿
氏子数　七八戸
宮　司　福島子徳
禰　宜　福島康臣
境内地　五七〇坪
崇敬者数　五、二〇〇人

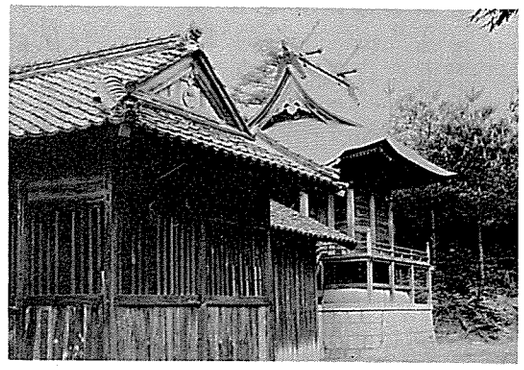


責任役員　毛呂静夫　由井　憲　菱川文輔　綱島敏治　片山一樹　井上　勇
特殊神事　渡燈籠
由緒沿革　後宇多天皇の弘安年中に、讃州金刀比羅宮を勧請し奉祀したと伝えている。天正の頃廃墟となったが、寛政五年三月、再び建立した。地方の崇敬神社として年々参拝者が増加したので、明治三十八年に本殿・幣殿・拝殿を改築し、参道を造成して社地を拡張した。当加茂郷および備中竹荘民の崇敬が篤い。

三所神社　旧村社

御津郡加茂町三納谷一一七九

主祭神　伊邪那美命　事解男命　速玉男命

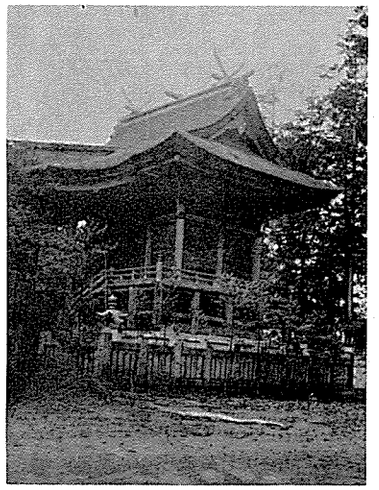


例　祭　十月十九日　**境内地**　八三二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所
摂末社　海神社　注連神社　斎宮　荒神社
氏子数　七〇戸　**崇敬者数**　三〇〇人
宮　司　海士部重徳　**禰　宜**　海士部満徳
責任役員　海士部正夫　葛原静雄　中山照男

由緒沿革　円融天皇の天元二年、当山の麓の池に夜々光りものが現われ、人々が怪み畏れ、霜峯の強士老翁らが衣服を正し、身を清め池に至り、熊野権現の神託を畏んで若宮の峯に守護神三所権現として鎮祀したと伝えている。備前藩主池田家の崇敬厚く、毎年御供米二斗一升を奉献。明治二年、三所権現を三所神社と改号した。大正十年九月、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

重岡神社　旧村社

御津郡加茂川町尾原一一〇二

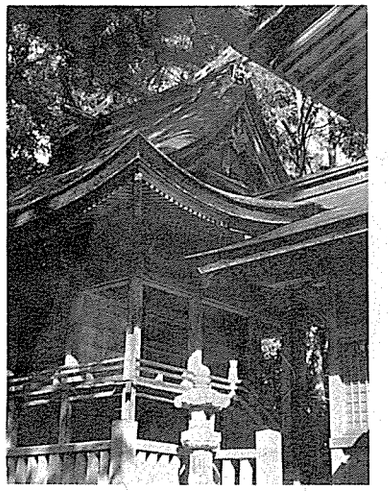


主祭神　菅原神　外十一柱
例　祭　十月二十日　**境内地**　一、四五二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　神供所　社務所　随身門
摂末社　祇園神社　外十社
氏子数　三一〇戸　**崇敬者数**　一、〇〇〇人
宮　司　杉田武養　**禰　宜**　行森克己
責任役員　小林健太郎　江原善市　河原　隆
宝　物　獅子頭

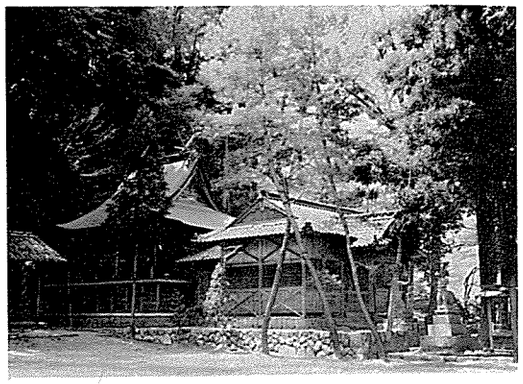
由緒沿革　元亀二年京都北野天満宮から勧請。新山城主の鎮守神として天満宮と称し、獅子頭を奉納した。明治六年、天神社と改称した。明治四十三年五月智利火神社・大国主神社・八幡宮・高野神社を合祀して、重岡神社と改称した。大正七年五月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。大正十一年八月本殿・幣殿・拝殿を改築した。

素盞嗚神社　旧郷社

御津郡加茂川町和田一二九



主祭神　素盞嗚尊　稲田姫命
例　祭　十月十九日　**境内地**　二、三二八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　参籠所　絵馬殿　神輿庫　社務所
摂末社　一之神社　外九社
氏子数　三〇〇戸　**崇敬者数**　一、二〇〇人
宮　司　土居義範
責任役員　笹井　博　赤木典生　藤田品次　能勢善次　河田　勇
宝　物　狛犬一対　翁面　池田光政公寄進絵馬



總社　旧郷社

御津郡加茂川町加茂市場一五六七

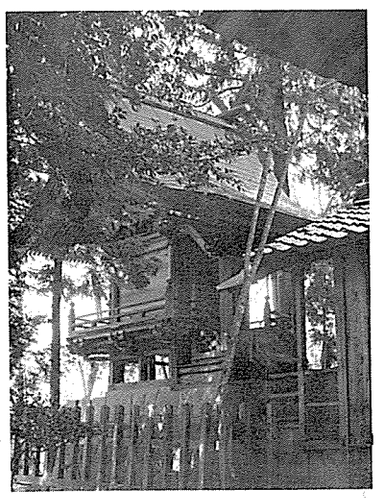
由緒沿革　村上天皇の天暦元年に信源上人が山城国八坂祇園社の御分霊を勧請したという。牛頭天王と称した。当時加茂の庄は人家が少なく、山野茂り、魔風が盛んであったので、鎮守として勧請した。その後、連綿として今の地に鎮座している。もと鷲林寺住職が祝詞職及び別当を勤めていたが、戦国の末、土居左馬介友縄が神主となり代々奉仕している。大正十年郷社列格。

主祭神　大已貴命　相殿八社諸神
例　祭　十月十九日　**境内地**　三、一五七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所
摂末社　貴船神社　外十社
氏子数　四五戸　**崇敬者数**　七、五〇〇人
宮　司　福島康臣　**禰　宜**　菱川文輔
責任役員　森元正三郎　井上　武　浜田　昇　浜田　章
宝　物　長刀一振（池田光政寄進）石造八角燈籠（弘安四年）本地仏石地蔵（貞治四年）県文化財指定
特殊神事　備前加茂大祭（無形文化財指定）
由緒沿革　宝亀二年の創建。備前国長田荘の宗祀であった。天喜年間、加茂郷鎮座の八社を配祀して備前加茂大祭を創始し、現在に至っている。弘安四年の国難に当たり、社頭に石灯籠が献ぜられ敵国降伏の祈願が行われた。永正年中、虎倉城主伊賀久隆が社殿を再建した。寛文九年、池田光政が社殿・末社を造営して社領米三石・長刀を献じた。明治四十年九月、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。昭和十四年十二月郷社に列格。

高盛神社　旧無格社

御津郡加茂川町高谷一五七七

主祭神　御年命　大年命　若年命
例　祭　十一月二十日　**境内地**　一五〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　三五戸　**崇敬者数**　一五〇人
宮　司　土居義範
責任役員　河田　勇　大月澄治　難波　正

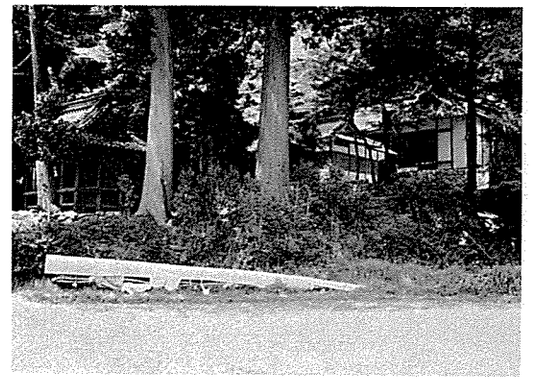


天神社　旧村社

御津郡加茂川町竹部一〇三五

由緒沿革　当神社は弘化三年、村方中が協議して愛宕山に勧請し、十月の中の亥の日を祭礼と定めた。明治十年四月二日に東盛に奉遷して、社殿・幣殿・拝殿を造営し、玄猪天王宮を高盛神社と改めた。明治十一年三月十六日に存置願いが許可された。

主祭神　天穂日命　菅原神
例　祭　十月二十五日　**境内地**　四二一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所
摂末社　斎神社　素盞嗚神社　大歳神社　豊受神社
氏子数　七〇戸　**崇敬者数**　三五〇人
宮　司　福島子徳　**禰　宜**　福島康臣
責任役員　難波寛作　小山芳高　小山一郎　藤森一夫　田中茂亭木



由緒沿革　応永元年九月、備中竹部郷の鎮守として創建した。加持家一統が代々尊崇し、社殿を造営し社領として山林数十町歩を寄進するなどの至誠を捧げている。江戸期には備中声守の藩主豊臣公定公の祈願所として崇敬が篤く、享保二年には公自筆の桑華蒙求を献じ社領を奉っている。安永九年、社殿を造営した。昭和二年十月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

主祭神　菅原神
例　祭　十月二十五日　**境内地**　五〇〇坪

天満神社　旧無格社

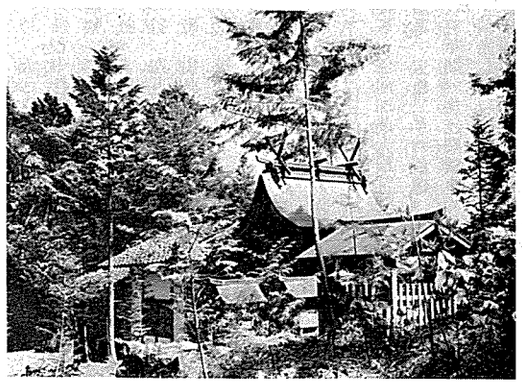
御津郡加茂川町上野六九六

主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所
摂末社　遠部神社　御崎神社　荒神社
氏子数　六〇戸
宮　司　海士部重徳
崇敬者数　五〇〇人
責任役員　遠部弘志　片山　薫　植田定夫　清本政夫　**禰　宜**　草地巳郎

由緒沿革　宝暦九年四月十五日、筑前国太宰府から松平宗政が勧請した神社で、明和元年正月に宗政公が奉納した天満天神宮の釣鐘があったが、大東亜戦争に徴発せられて、現在はない。また、宗政公の室藤子姫が経本を奉納した。

土井神社　旧村社

御津郡加茂川町下土井一七四六



主祭神　保食神　玉藻明神　事代主神　三穂津姫神
例　祭　十月二十一日　**境内地**　三五九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫
摂末社　若宮　荒神社　疫神社　御崎神社　天神社　龍神社　荒神社
氏子数　一〇五戸　**崇敬者数**　六五〇人
宮　司　福島子徳
責任役員　中山照男　中山一富　本俊金男　石伊光治　熱田　昇　沼本英雄　和多景雄　金田一郎

由緒沿革　後冷泉天皇の天喜年中の創建と伝える。文亀五年に作州高田城主三浦貞兼が玉藻明神を三浦家の鎮守として当神社に勧請して配祀した。後、虎倉城主伊賀氏の家老土井次郎左衛門の妻が、天正六年に社殿を造営した。後、玉藻明神と称えて加茂郷の鎮守として斎った。明治二年に土井神社と旧号に復した。明治五年に美保関から事代主神・美保津姫神を勧請して配祀した。

能瀬神社　旧無格社

御津郡加茂川町美原三〇七

主祭神　建速素盞嗚尊　櫛稲田姫命
例　祭　十月二十六日　**境内地**　五三九・五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　四〇戸　**崇敬者数**　二〇〇人
宮　司　土居義範
責任役員　岡本　潔　藤原久明　日名重信　河本光市

由緒沿革　寛保元年、野原村を中心として悪疫が蔓延したので、山城国八坂祇園社に大祈願をして悪疫がおさまったので、延享元年六月、祇園社の御祭神の分霊

を勧請して祇園宮と称えた。明治維新の際、敷村・野原村を大字美原と改称した。その折に祇園宮を能瀬神社と改称した。慶応四年四月、改築が行われた。



主祭神　品陀和気命　外六柱
例　祭　十月十五日　**境内地**　一、七六三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所
摂末社　天神社　外七社
氏子数　一五〇戸
宮　司　杉田武義　**禰　宜**　杉田良爾
責任役員　富田貞男　加原　清　大釜信夫　難波　護
宝　物　御神刀一振　金幣一垂　御神鏡一基
特殊神事　うどん祭

八幡宮　旧村社

久米郡旭町江与味一一九一

由緒沿革　当神社は、むかし当村の古翁が京都にのぼって石清水八幡宮へ参拝して勧請し、三鉾山に社殿を造って鎮斎した。その後、光山へ移り給うとの託宣により光山へ登ると樹上に靄羽鴈俣根入の箭が飛んで来て光を放つという不思議の霊験があったので、社殿を移して奉斎したという。今の江興味村のおこりは「疫病」を「エヤミ」と続むのにちなんだものだという。鎮守神との縁故が深い。



主祭神　品陀和気命　外五柱
例　祭　十月十九日　**境内地**　六〇六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所
摂末社　竈神社　若宮社　祇園社　亀山神社　斎宮
氏子数　一〇〇戸
宮　司　光居　矸
責任役員　神田　章　坂本博雄　金森克己　土井　衛

由緒沿革　延喜二年山城国石清水八幡宮から、河内村字亀山の地に奉遷したという。その時、疫病が流行したが村人がこの神を祈願したところ、疫病はたちどころにおさまった。という口傳がある。その時境内の檜の大木に七つの燈火が点ぜられていたと伝えられている。

八幡宮　旧村社

御津郡加茂川町豊岡上一一八四

主祭神　大山咋命　大己貴命　少彦名命
例　祭　十月十九日　**境内地**　一、四五七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿　神具庫　社務所
摂末社　稲荷神社　注連神社
氏子数　一三〇戸　**崇敬者数**　一、五〇〇人
宮　司　福島子徳　**禰　宜**　向崎作雄
責任役員　石居文太郎　小林俊治　片山邦男
宝　物　甲冑弐領　刀剣一振　弘安什宝七個

由緒沿革　延喜二年、近江国坂本の日吉山王宮を勧請したという。鎌倉期には備前守護職梶原景時が尊崇し、弘安九年に什器を献った。天文十八年には虎倉城主の伊賀久隆が社殿を造営した。延宝四年、備前藩主池田光政が社殿を造営し社領米を献進した。池田家は代々

日吉神社　旧郷社

御津郡加茂川町下加茂一四七九

例　祭　十月十九日　**境内地**　六〇六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所
摂末社　竈神社　若宮社　祇園社　亀山神社　斎宮
氏子数　一〇〇戸
宮　司　光居　矸
責任役員　神田　章　坂本博雄　金森克己　土井　衛

由緒沿革　当神社は、むかし当村の古翁が京都にのぼって石清水八幡宮へ参拝して勧請し、三鉾山に社殿を造って鎮斎した。その後、光山へ移り給うとの託宣により光山へ登ると樹上に靄羽鴈俣根入の箭が飛んで来て光を放つという不思議の霊験があったので、社殿を



社領米を献じ、継政公は享保十九年五月、疫病退除の祈禱の上神符を納めるなど代々崇敬が篤かった。

火雷神社（ほのいかづち）　旧無格社

御津郡加茂川町上田西一五八

主祭神　火雷神
例　祭　十月十四日　**境内地**　一六一・七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　九〇戸　**崇敬者数**　五〇〇人
宮　司　海士部重徳
責任役員　片山通臣　赤木与志男　能勢宏利
由緒沿革　当神社は加茂川町三納谷に鎮座の三所神社の境外末社であって、円融天皇の頃上田西村に火災や悪病が流行したので、人々が話し合いの結果、火雷神を祭神として、三所権現の末社として黒杭魔法松に鎮め奉った。ところが忽ち霊験があらわれ、それが各地に伝わり、現在では県下はもとより、広島県東条方面からの参拝者のある神社である。



松尾（まつお）神社　旧郷社

御津郡加茂川町上田東五〇六

主祭神　市寸島姫命　大山咋神
例　祭　十月十九日　**境内地**　二、二四三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所
摂末社　大山神社　山神社　外十社
氏子数　二七三戸　**崇敬者数**　一、〇〇〇人
宮　司　近藤　静　**禰　宜**　杭田　功
責任役員　清水伊勢男　福島正教　仁宮鉄太郎　合田五十六　綱島秀男
由緒沿革　当神社は元明天皇の御代、和銅六年四月、厳島明神の霊験に感銘し、御崎山に小社を創祀して御崎大明神と称した。後、一条天皇の寛弘五年に山城国葛野郡松尾神社の大山咋神の御分霊を勧請して松尾大明神と称え奉った。その後藩主国老を始めて一般郷民の崇敬が厚く、逐年崇敬者が増加して郷土の守護神として鎮座している。



森神社　旧無格社

御津郡加茂川町三谷三九二

主祭神　宇迦之御魂命
例　祭　九月十八日　**境内地**　四三〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　祇園神社　荒神社　荒神社　金刀比羅神社
氏子数　二五戸　**崇敬者数**　一〇〇人
宮　司　杭田　功
責任役員　谷口才治　草地　稔　竹林正信
由緒沿革　創建は享保年間と考えられる。詳細は不明。

八神稲荷（やがみいなり）神社　旧無格社

御津郡加茂川町尾原四〇五―一

主祭神　八上比売命
例　祭　十一月三日　**境内地**　一四〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　倉庫
氏子数　二〇〇戸　**崇敬者数**　六〇〇人
責任役員　石井節三　石井喜久夫
由緒沿革　往時この地方は凶作が打続き餓死する者が多かった。そこで旧城山に、安永元年出雲の国から八上比売命を勧請奉祀し、五穀豊穣の神として祈った。元治元年十二月社殿が火災のため類焼した。翌二年正月、現在地に奉遷し、八神大明神と称し、五穀成就・災害防除の神として信仰している。昭和十年四月、社殿・幣殿・拝殿を改築した。

人生儀礼

人は生れてから成長の段階に従って、一つ一つ通過して行く儀礼があり、これを通過儀礼とも云う。この個人儀礼は、人間が社会的に関連しあって存在するから、社会儀礼となっていると考えられる。

出産

人生儀礼の最初は出産である。出産は、その子供が祖先の神の魂を受けついで生れて来たものとの考えがある。出産時に昔は、武家では宮中にならって「散米」「鳴弦」などが行われていた。

命名

子供が生れて七日目に名をつけるのが普通であって、地方によっては種々の祝いごとが行われている。氏神様に参拝して報告し、加護をお祈りするもので、成長を祝い、将来を予めお祝いする行事である。

誕生祝は成長の一つの節であって、地方によって格を認め、霊性を備えるものと考えた。名が付けられると、名前を半紙に書いて神棚に貼るのは、名前を報告して、その家の名の継続と守護とを祈願するためである。

初宮詣

子供が生れてから約三十日を過ぎた頃に参拝するが、地方によってまち〳〵で五十日、百日の地方もある。氏神様に参拝し、氏神様に氏子として認めていただくことである。この時は、里方の親から紋付の晴着を贈るのが通例である。紋はそれを着る人が祖霊を背負っていることを意味するので、紋付を着て祖先伝来の魂を受け継いだ生児が、氏神様に参拝することになります。

初誕生

誕生祝は成長の一つの節であって、地方によっては種々の祝いごとが行われている。氏神様に参拝して報告し、加護をお祈りするもので、成長を祝い、将来を予めお祝いする行事である。

七五三

十一月十五日に、三歳と五歳の男児、三歳と七歳の女児を両親がつれて、氏神様に参詣する行事である。

この七五三の祝いは、江戸時代に将軍綱吉の子の徳松君が行ったと云うが、江戸時代に一般化し、現在では全国的な習俗になっている。

これは奇数を陽数として尊重する大陸の風習がわが国に採用され、いつしか固定するようになったものであろう。子供は神の子というが、江戸時代に人別帳（戸籍）にこの時に記入し、一人前に扱われたという。これも、出産にあたり安産祈願をした子供が、氏神様に参拝して成長を報告し、氏神様の守護を祈念する風習で、祖先の神々の御守護のもとに「よつぎ」の子供を祝福する行事である。

成人式

一人前の人間になったことを公認する式が成人式である。現在では、公民権が与えられ、選挙権が与えられ、社会的に認められて、大人の資格を与えられることになった。神社に参拝して成人の報告と、前途の平安を祈念して人生の一つの節目となっている行事である。

結婚式

結婚式の九割以上が神前結婚式である。神代に伊邪那岐・伊邪那美二柱の神が、「天の御柱」をめぐって結婚された神話は、天の御柱が神霊の宿る木であるから、神前結婚式であると拝察出来るので、神代以来の伝統であるといえる。新婦の角かくし、綿帽子は、神の御前に出るためである。祝詞奏上ののちの盃事は、神に供えて神霊のこもった御神酒を汲みかわすことである。玉串奉奠は神に報告し、神恩に謝し、ご加護を祈念する誠の心を表したものである。よって、結婚式は神様に報告するものであるのに対して、披露宴は人間に対して社会的に承認を求める儀式である。

結婚記念日

結婚記念日を祝う習慣は元来西洋のものであるが、我国では明治二十七年三月九日に明治天皇、大正十四年五月十日に大正天皇が、それぞれ御成婚二十五年を御奉祝になった。また昭和四十九年に、今上陛下が御成婚五十年をお祝いになった。年数これより民間でもお祝いをするようになった。年数によって名称がつけられているが、満一年は紙婚・十年は錫婚・二十五年は銀婚・三十年は真珠婚・五十年は金婚・七十五年はダイヤモンド婚と呼称されている。

この記念日は神に感謝の誠を捧げ、神にご加護を祈念する行事で、神社でお祝いを行うようになった。

このように外来儀礼をとり入れ、神事に結びつけて斎行するところが、日本人のくらしと祭との関係をのべている。

厄ばらい

人がある年齢になると、厄年と云って、厄ばらいをする風習が古来からあり、平安時代に公家の間で盛んであった。

「厄」は、年ばかりでなく月・日・時厄があるので、厄を除くために「厄祓」を神社で執り行った。厄年は、男子の二十五歳・四十二歳・六十一歳、女子の十九歳・三十三歳が一生の大厄とされている。

またこの年には、それぞれ前厄・本厄・後厄とあり、前後三年間を慎むものとしていた。これは、氏神神社に参拝して厄祓をしてもらうと、厄が転じて福となる、との信仰によるものである。この年齢になると、肉体的にも精神的にも大きく変化するので、人生の折り目に神の力によって、厄を取除く神事を行うものと考えていた。

御津東支部（三三社）

天津神社　御津郡御津町芳谷八五三……一三二
天津神社　〃　御津町新庄二五六一……一三二
天津神社　〃　建部町大田一五三三……一三二
天津神社　〃　建部町土師方一五八九……一三二
天降布勢神社　〃　建部町大田一〇二五……一三三
天松神社　〃　御津町新庄一八六四……一三三
石上布都魂神社　赤磐郡吉井町石上一四四八……一三三
伊田八幡神社　御津郡御津町伊田三二〇五……一三四
大曽根神社　〃　御津町川高五一一……一三四
河瀬神社　〃　御津町草生一八〇七……一三四
熊野神社　〃　新庄町新庄宮谷一一九五……一三四
熊野神社　〃　御津町河内二三六……一三五
熊野神社　〃　建部町大田三七二二……一三五
熊野神社　〃　建部町吉田三〇九……一三五
古森神社　〃　御津町鹿瀬宮三七六……一三五
正八幡宮　〃　御津町高津五二一……一三六
正八幡宮　〃　建部町小倉三五四……一三六
素盞嗚神社　〃　御津町川高二三四……一三六
素盞嗚神社　〃　御津町高津一〇五九……一三六
住吉神社　〃　建部町土師方三五二……一三六
天神宮　〃　御津町芳谷一一三一……一三七
天神宮　〃　御津町大字芳谷九〇九……一三七
徳蔵神社　御津郡御津町河内二〇九〇……一三七
七曲神社　〃　御津町金川六〇二……一三七
楢村布勢神社　御津郡矢原一〇四六……一三八
八幡宮　〃　御津町国ヶ原八五六……一三八
八幡宮　〃　御津町宇垣六七六……一三八
八幡宮　〃　御津町大字吉尾四四……一三八
八幡宮　〃　御津町河内三一三五……一三九
八幡宮　〃　御津郡宇垣一三四〇……一三九
八幡神社　〃　御津町平岡西字須道六三八……一三九
日吉神社　〃　建部町大田二一一九六……一三九
真名井神社　〃〃　御津町中泉一三四三……一三九

玉串

榊の小枝に紙垂をつけたもので、神に誠心を捧げ、感謝の念をもって神の加護をいただく為に、神前に玉串を奉奠して礼拝するのが、神拝の最高の形式となっている。これは神霊と自分の心とが一体となる神秘な儀礼である。玉串の奉り方は、神前に進んで一揖し、「の」の字なりに廻しながら、本を神前に向けて、案（机）の上に静かに置き、二拝、二拍子、一拝して退くのである。

天津神社　旧村社

御津郡御津町芳谷八五三

主祭神　天神　天之御中主神
例　祭　十月二十三日　**境内地**　九五坪
主要建物　本殿
氏子数　一六戸　**崇敬者数**　六〇人
宮　司　在里幸宗
責任役員　佐藤　倫　佐藤　毅　西　保男　草地正行
由緒沿革　本神社の創建年月は不詳。明治六年三月村社に列格した。口碑によると、芳谷の山上滝ノ城の城主伊賀左衛門が、本神社を守護神として勧請したが、落城の後、芳谷の部落民が鎮守の神として尊崇した。旭川通行の船が、真下の坊主岩でしばしば難破するので、占ってみると、櫂の音が神慮に触れるためであったので、恐懼して北東部の閑静な現在地に、河を背にして遷座したとの言い伝えがある。

天津神社　旧村社

御津郡御津町新庄二五六一

主祭神　天之御中主神
例　祭　十月十五日　**境内地**　二六四坪
主要建物　本殿　拝殿　鳥居
氏子数　三八戸　**崇敬者数**　三二人
宮　司　物部繁徳
責任役員　藤原正一　岩井万平　神達定吉
特殊神事　夏踊り



天津神社　旧村社

御津郡建部町大田一五三三

主祭神　天之御中主命
例　祭　十月二十日　**境内地**　四四〇・六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神輿庫
摂末社　素盞嗚神社
氏子数　一三戸　**崇敬者数**　六三人
宮　司　在里　巍
責任役員　楢村寿男　宮木中務　安田圭雄
由緒沿革　社記に安康天皇の甲午年、御所から吏官佐内家光公が、備前国赤坂郡宅美郷武枝庄大田邑に氏神鎮座のため、御祭神天之御中主命を奉遷し給うたとある。大田邑字国松の中央に鎮座し、明現宮と尊称し古来から五穀豊穣の守護神として崇敬せられている。延暦三年に社殿を改築し、天正年間に社殿を造営した。平重盛公から神鏡の奉納があったと伝えられている。又、池田光政公からも御供料として田四畝三歩を奉納せられている。



天津神社　旧村社

御津郡建部町土師方一五八九

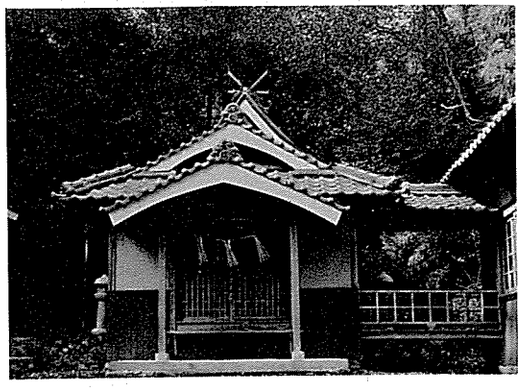
由緒沿革　創建年月日・由緒不詳。明治維新前、赤磐郡仁堀東村の法華寺に四方棒の御輿等の種々の宝物があったのを遷したと伝えているが、不受不施宗となってから、神社にか、わりのある物を売却したり焼却したりした。拝殿石段までも取りこわした由で、崇敬もままならず本殿だけが草の中にあったが、現在は拝殿、本殿に通ずる渡廊下を建築している。石段跡は鉄道古枕木でつくる。

主祭神　天之御中主神
例　祭　十月二十日　**境内地**　三四四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　春日神社　荒神社
氏子数　二三戸　**崇敬者数**　一〇二人
宮　司　佐藤竹治
責任役員　信山長衛　景山　濃
由緒沿革　本神社社掌であった山中家の系図によると、山中家は永禄年間に、天津神社の神職として奉仕したことがある。このことから当部落の産土神として、すでに里人が崇敬していたので、創建は永禄年間以前と推察出来る。もと妙見七社大明神と奉称し、山上の御鎮座であったのを、約一五〇年前に現在の地に御遷座し今日に至っている。

天降布勢神社　旧村社

御津郡建部町大田一〇二五

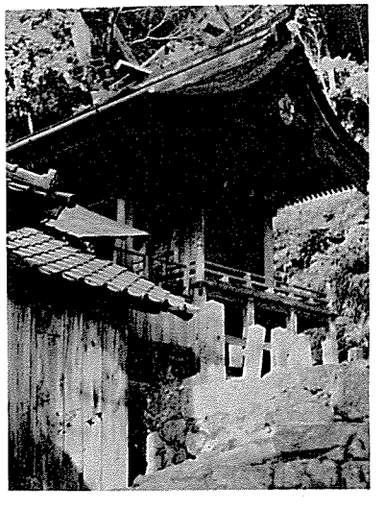
主祭神　大己貴命
例　祭　十月二十日　**境内地**　一、一一九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫
摂末社　稲荷神社
氏子数　三〇戸　**崇敬者数**　八〇人
宮　司　在里　巍
責任役員　伊丹　猛　猪谷　斉　伊丹　明
由緒沿革　口碑によると、清和天皇の御宇、天下七明神と称し、大田村山上の流鏑馬に祀った。旭川八幡附近で河船が頻々と災難に逢ったので、これは山上の天下大明神の神威に触れるためだと恐懼して、平地古宮に遷座したが、ここでも牛馬の危難があったという。後陽成天皇の御代に現在地に奉遷し、天降布勢神社と改称した。本神社の御祭神は医薬の神で、特に癩患に霊験顕著であると伝えられている。



天松神社　旧村社

御津郡御津町新庄一八六四

主祭神　高皇産霊神　神皇産霊神
例　祭　十月十五日　**境内地**　一、七三九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　鳥居
摂末社　八幡宮　稲荷神社
氏子数　七〇戸　**崇敬者数**　三四五人
宮　司　物部繁徳
責任役員　神達信守　卯善常雄　家光三志
由緒沿革　本神社は本国神名帳に天松神社、山本氏本に正五位下天松明神と記載してある。備前国式内外在社一二八社の一である。中頃三社権現と称し、明治二年熊野神社と改称したと云うから、其の頃は紀州熊野の三社を勧請していたらしい。(因に熊野権現とは本宮に伊弉冊命、新宮に事解男命、那智に速玉男神を祀る。此の三社を合せて熊野三山・熊野三社・熊野三所権現と呼ぶ)、当地方でも神仏混淆の時代、勧請したものであろう。



石上布都魂神社　旧郷社

赤磐郡吉井町石上一四四八

主祭神　素盞嗚命
例　祭　十月二十日・二十一日（二日間）
境内地　八、一一〇坪
主要建物　本殿　拝殿　社務所　大石燈籠　手水舎　鳥居　元宮
摂末社　稲荷神社　外八社
氏子数　一一〇戸　**崇敬者数**　約二、〇〇〇人
宮　司　物部繁徳　**禰　宜**　物部忠三郎
責任役員　杉本勝四郎　野村鉄夫　雄松良司
宝　物　池田継政書軸一巻・太刀一振
特殊神事　十月二十日御津町二社へ神幸行列
由緒沿革　延喜の制で小社に列した古社で、備前古一宮である。布都魂とは素盞嗚命が大蛇を退治せられた麁正の霊剣で、この剣の鎮座について書紀には大和国とも吉備神部の許とも書いてある。前者は石上神宮、後者は本神社であると伝えている。寛文九年藩主池田光政公が再興し、爾来累代藩主から社領二十石をおくられ、厚い崇敬を享けた。明治六年郷社に列し、昭和二十一年、由緒により、県社に相当と認められた。岡山県指定自然保護林椎の原生林は神域である。

伊田八幡神社　旧村社

御津郡御津町伊田三二〇五

主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后
例　祭　十月十日　**境内地**　一、二七五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　稲荷神社　妙見宮
氏子数　一八〇戸　**崇敬者数**　七五〇人
宮　司　物部繁徳
責任役員　安田一正　浦上安夫　西山一夫　藤本朝六　花房一雄　坂田勉　内藤賢吉
特殊神事　祭礼時の奉納相撲
由緒沿革　もと山頂に奉斎し、常久寺と称して、社僧が神主であったが、寛文年間藩主池田光政のとき、社僧を廃した。延宝三年八月現在地に社殿を建立し奉遷した。例祭には古くは寺部若一王子権現に御神幸があったが、中古事故のため神輿が破損し神幸が中絶したので、奉納角力を行う事になった。古来武の守護神として尊崇し、旧藩池田家より社領三石五斗五升二合の寄進があった。

大曽根神社　旧村社

御津郡御津町川高五二一

主祭神　天照大神
例　祭　十月十五日　**境内地**　一五八・五四坪
主要建物　本殿　拝殿　幣殿　鳥居
氏子数　二六戸　**崇敬者数**　一二三人
宮　司　物部繁徳
責任役員　小西　邃　小西　憩　中下源市
由緒沿革　創建年月日は不詳。天保十四年九月十九日に置数馬が本殿屋根葺替寄進の棟札がある。池田家神社帳には社地一段二十歩官林とともに境内除地とある。

河瀬神社　旧村社

御津郡御津町草生　一八〇七

主祭神　瀬織津毘売命　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后　春日大神
例　祭　十月二十日　**境内地**　六一坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿
氏子数　一三〇戸
宮　司　池田浩宥
責任役員　吉井政男　是近種男　神家新三
由緒沿革　本神社は本国総社神明帳に河瀬神社、山本氏本に正五位下河瀬明神と記載せられる旧社で、西大川草生村字泉辺りの鎮座で、これより川瀬神社と称え奉る神社であると伝えている。



熊野神社　旧村社

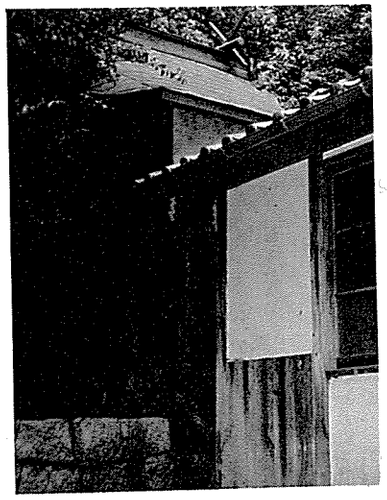
御津郡御津町新庄宮谷一一九五

主祭神　伊弉諾尊　伊弉冉尊
例　祭　十月十八日　**境内地**　一、一五九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神楽殿　随身門
摂末社　春日神社　荒神　若宮　稲荷神社　吉田神社　海童神社　天満宮
氏子数　六二戸　**崇敬者数**　二、〇〇〇人
宮　司　物部繁徳
責任役員　片山　悦　田村清房　古家常春　宇野敬夫
宝　物　町重要文化財　天文廿一年作　五体の仏像、同棟札、本殿慶安五年棟上・棟札、狗犬二体
特殊神事　御神幸　御旅所の祭典
由緒沿革　延喜式神名帳による熊野座神社の御分霊を祭る。創建年月不詳。天文年間は若一王子大宮、慶安年間は若王子権現社、天保年間は十二社権現宮と称せられた。口碑によると、鳥居のそばの老杉は建久年間に植えたものと伝えられている。建武年間に赤松則祐、慶長年間に難波将監、宇喜多家滅亡後は池田利隆が崇敬し、光政公から郷の総社として、神領三石九斗の寄進があり、明治維新に至っている。

熊野神社　旧村社

御津郡御津町河内二三六

主祭神　伊弉諾尊　伊弉冉尊
例　祭　十月八日　**境内地**　六二四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　六二戸　**崇敬者数**　八五人
宮　司　池田浩宥
責任役員　江見芳光　馬場与寿治　江見滝男
由緒沿革　創建年月日・由緒は不詳。



熊野神社　旧村社

御津郡建部町大田三七二二

主祭神　伊弉諾尊　伊弉冉尊
例　祭　十月二十日　**境内地**　一四六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫　随身門
摂末社　海神神社　天神宮　春日神社
氏子数　八六戸
宮　司　佐藤竹治
責任役員　山本藤夫　江田藤一　大崎嘉太四
宝　物　棟札（慶長十四年）
由緒沿革　本神社創建年月は不詳であるが、旧号を八幡宮と奉称し、竹枝村吉田・土師方・太田・小倉の大氏神であった。延文年間金川城主松田某が、本殿を改造した。その後松田左近将監元成が社殿及び附属建物を建造した。天正年間宇喜多直家・秀秋の崇敬をうけた。備前国主池田輝政は慶長十四年六月十四日現在の社殿を改築した。明治五年十二社権現宮を熊野神社と改称し今日に至っている。

古森神社　旧村社

御津郡御津町鹿瀬宮三七六

主祭神　手力男命
例　祭　十月二十日　**境内地**　四一一・三〇坪
主要建物　本殿　拝殿　幣殿
摂末社　国司神社

主祭神　大己貴命
例　祭　十月二十日　**境内地**　一七四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫
氏子数　七〇戸　**崇敬者数**　二六〇人
宮　司　在里幸宗
責任役員　中島孝止　田渕寿司　山本正夫
由緒沿革　本神社は元慶元年、武枝庄下谷村の氏神として宇白石に勧請し、鴨布施明神と奉称していた。その後、山王権現と改称した。康正三年白石城主新田左衛門氏光公が社殿を修復した。寛文十一年四月当時の氏子・崇敬者が協議し、現地に社殿を造営し、熊野神社と改称し、氏神として尊崇している。

氏子数　四〇戸
宮　司　池田浩宥
責任役員　江田　宏　江田　智　江田楠男
由緒沿革　創建年月日不詳。旧号を古森大明神と称し、明治二年に古森神社と改称した。

正八幡宮　旧村社

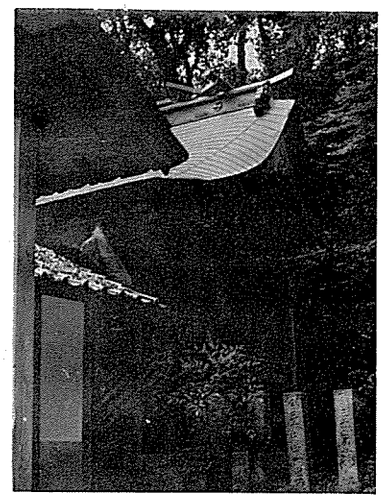
御津郡御津町高津五二一

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后　火火出見命
例　祭　十月二十日　**境内地**　四五三・二五坪
主要建物　本殿　拝殿　随身門
氏子数　九二戸
宮　司　池田浩宥
責任役員　楢村栄一　山本　茂　楢村明聖
由緒沿革　創建年代不詳。現在の御本殿は室町時代の建築で、出雲大社の御本殿に似ていると云われている。明治以前は社地六段二畝二十一歩を所有していた。明治末期社殿の一部を補修したゝめ重要文化財の指定にもれている。盗難にかゝった高麗犬一対は県重要文化財の指定を受けていた。

正八幡宮　旧村社

御津郡建部町小倉三五四

主祭神　仲哀天皇　外二柱
例　祭　十月二十日



主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷社
氏子数　五〇戸
宮　司　在里幸宗
責任役員　那須　操　寺門熊夫　寺門　堯
由緒沿革　本神社は文明十八年以前の創建と伝えられる古社である。池田家文庫神社帳に一反七畝境内除地とある。現在は一反二十四歩である。境内を囲む山林は明治四十年九月国有林払下げにより、神社の所有となっている。

素盞嗚神社　旧村社

御津郡御津町高津一〇五九

主祭神　素盞嗚尊　稲田姫命
例　祭　十月二十日　**境内地**　一九五・七五坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　二五戸
宮　司　池田浩宥
責任役員　奥野　稔　森川　一　細川　久
由緒沿革　創建年月日不詳。明治以前は現在の宇甘東に四社、宇甘西に七社、金川町草生河瀬神社、鹿瀬古森神社・金川七曲神社等十四社の神輿が境内地に集り、厳粛な祭儀を行った。十月二十日の例祭には参詣者が境内を埋め終日賑わった。よって現在でも大宮とよばれている。社地六段二十九歩を所有したことがある。往時は繁栄していたと推察出来る。

素盞嗚神社　旧村社

御津郡御津町高津一〇五九

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月十四日　**境内地**　五九五坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　二四戸
宮　司　物部繁徳
責任役員　矢鍋元市　矢鍋道正　西田富士夫
由緒沿革　創建は元禄七年。由緒不詳。

住吉神社　旧村社

御津郡建部町土師方三五二

主祭神　上筒男神　中筒男神　底筒男神
例　祭　十月二十日　**境内地**　三六〇坪

主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　海神神社
氏子数　四五戸
宮　司　佐藤竹治
由緒沿革　地名を松尾というところから考えると、最初は松尾神社と呼び、次に小森神社となり、次に住吉神社となったものと思われる。大山咋命を祀った松尾神社が最も古く、長かったために、地名の松尾が生まれたのであらう。

天神宮　旧村社

御津郡御津町御津町芳谷一一三二

主祭神　菅原道真
例　祭　十月二十五日　**境内地**　一、一六七坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　木山神社　稲荷神社
氏子数　八戸　**崇敬者数**　三五人
宮　司　物部忠三郎
責任役員　藤岡　栄　赤木照夫　反谷政之
由緒沿革　創建年月日は元禄二年。由緒は不詳。

天神宮　旧村社

御津郡御津町大字芳谷九〇九

主祭神　菅原道真

例　祭　十月二十五日　**境内地**　五九六坪
主要建物　本殿　神輿殿　鳥居
摂末社　六社宮　愛宕　祇園　金比羅　木山　山ノ神
氏子数　二五戸　**崇敬者数**　七八人
宮　司　物部忠三郎
責任役員　内藤市之亟　真賀正孝　山陰常次郎　内藤虎狼
由緒沿革　創建年月日は元禄元年。由緒は不詳。明神鳥居には明治四十二年六月吉日で、伊部焼狛犬には明治四十一年十月二十四日と彫る。学問の神として古くから尊崇され、今日に至っている。

徳藏神社　旧郷社

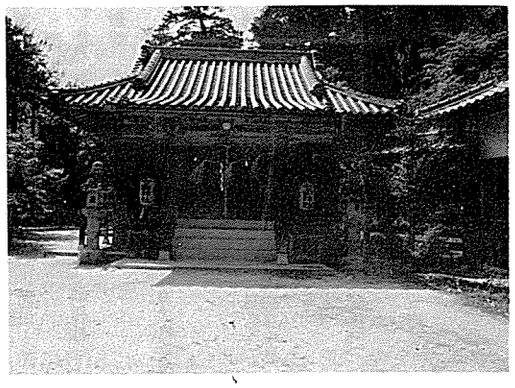
御津郡御津町河内二〇九〇

主祭神　徳藏神
例　祭　十月八日　**境内地**　三、三三五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
氏子数　八六戸
宮　司　池田浩宥
責任役員　藤原健一　田中　勇　人見敏明
由緒沿革　本神社は本国総社神名帳に、徳藏神社、山本氏本に従五位下徳藏明神と記載してある旧社である。御鎮座地を徳藏山と称し、古城跡があり、大平記に徳倉と記してある。山勢嶮岨で、往昔は一山悉く神域であったと伝えている。

七曲神社　旧村社

御津郡御津町金川六〇二

主祭神　天照大神　春日大神　八幡大神
例　祭　十月二十日　**境内地**　一、二六二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫　随身門　手水舎
摂末社　稲荷神社　外九社
氏子数　二六一戸　**崇敬者数**　八二六人
宮　司　物部繁徳
責任役員　鈴木銀弥　江田正志　船守喜代治　森安秋男　横山　恵　影山高一　寺門嘉藤次



宝　物　神楽獅子一式

由緒沿革　もと佐波山の麓に御鎮座であったのを、慶長八年日置忠俊が金川を領有するとともに、城山の東五丁ほどの山麓に奉遷したという。寛永九年池田光政が備前に国替えとなって、小神富久を新に神事を執行わせた。寛文九年に現在地に奉遷した。延宝二年卜部兼方が神籬・正印霊を御宮におさめて遷宮した。延宝三年日置忠明が新社殿を造営した。その後度々修築したが、現在の社殿は昭和十三年に竣工したものである。

楢村布勢神社　旧村社

御津郡御津町矢原一〇四六



主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后
例　祭　十月二十四日　**境内地**　一、一八五坪
主要建物　本殿　拝殿　門麻殿
氏子数　七五戸　**崇敬者数**　三五〇人
宮　司　在里幸宗
責任役員　楢村　清　鳩場信与　白髭誠一
由緒沿革　本神社は本国総社神明帳および山本氏本に記載の、備前国式内外古社一二八社の一で、十二社権現・楢村布勢明神と尊称せられた。創建年月日は不詳であるが、もとの矢原城主楢村氏が守護神として奉祀し、落城とともに、楢村一家が熊谷神行寺の現在地に奉遷したと伝えられている。延宝六年三月再建。楢村布勢神社と改称した。昭和十四年十月本殿・幣殿・拝殿を改築した。

八幡宮　旧村社

御津郡御津町宇垣六七六、

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月七日　**境内地**　六八一・五坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　五四戸
宮　司　池田浩宥
責任役員　北山喜正　竹谷真一　吉村悦寿
由緒沿革　創建年月日・由緒等不詳。

八幡宮　旧村社

御津郡御津町大字吉尾四四

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月九日
境内地　一、七六四・四三坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿
氏子数　二〇〇戸
宮　司　池田浩宥
責任役員　三ノ上政治　加藤　浩　片山岩三郎
由緒沿革　創建年月日・由緒は不詳である。幕政時代には社地五段一畝があった。

主祭神　大己貴命
例　祭　十月二十日　**境内地**　一、一八五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　七五戸　**崇敬者数**　三五〇人
宮　司　在里幸宗
責任役員　楢村　清　鳩場信与　白髭誠一
由緒沿革　本神社は本国総社神明帳および山本氏本に記載の、備前国式内外古社一二八社の一で、十二社権現・楢村布勢明神と尊称せられた。創建年月日は不詳であるが、もとの矢原城主楢村氏が守護神として奉祀し、落城とともに、楢村一家が熊谷神行寺の現在地に奉遷したと伝えられている。延宝六年三月再建。楢村布勢神社と改称した。昭和十四年十月本殿・幣殿・拝殿を改築した。

八幡宮　旧村社

御津郡御津町宇垣六七六、

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月七日　**境内地**　六八一・五坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　五四戸
宮　司　池田浩宥
責任役員　北山喜正　竹谷真一　吉村悦寿
由緒沿革　創建年月日・由緒等不詳。

八幡宮　旧村社

御津郡御津町大字吉尾四四

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月九日
境内地　一、七六四・四三坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿
氏子数　二〇〇戸
宮　司　池田浩宥
責任役員　三ノ上政治　加藤　浩　片山岩三郎
由緒沿革　創建年月日・由緒は不詳である。幕政時代には社地五段一畝があった。

八幡宮　旧村社

御津郡御津町河内三一三五

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月八日　**境内地**　三二八・二五坪
主要建物　本殿
氏子数　二〇戸
宮　司　池田浩宥
責任役員　舞原　初　戸田東吉　舞原寛一
由緒沿革　創建年月日・由緒等不詳である。

八幡宮　旧村社

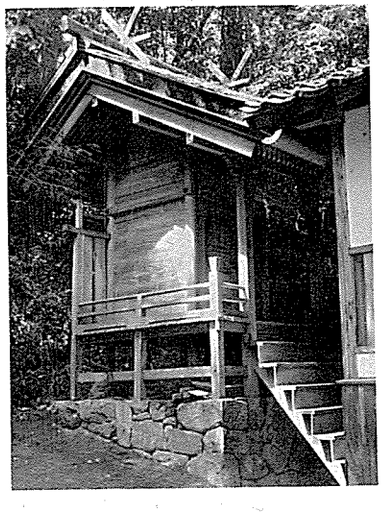
御津郡御津町宇垣一三四〇

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月八日　**境内地**　三一三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　五四戸　**崇敬者数**　二五〇人
宮　司　池田浩宥
責任役員　安達数雄　逢沢春男　岡村貞二
由緒沿革　創建年月日不詳。幕政時代には社地が一反歩あった。

八幡神社　旧村社

御津郡御津町平岡西字須道六三八

主祭神　仲哀天皇　外二神
例　祭　十月二十日　**境内地**　八〇七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　社務所　明神鳥居
摂末社　荒神宮　国司神社　稲荷神社
氏子数　四七戸　**崇敬者数**　三五〇人
宮　司　物部繁徳
責任役員　葛城敏雄　横山完吾　若佐公貞
特殊神事　秋祭石上布都魂神社と神幸行列あり
由緒沿革　旧五城村大字平岡西字下河田一一二一番地から移転し、昭和三年十月十五日遷座済の届をした。昭和二十年六月五日付で八幡宮を八幡神社と改称した。



由緒沿革　社記に近淡海国日枝山日吉神社御祭神大山咋命の御分霊を奉迎し、赤坂郡竹枝庄大田邑字中村坂本に、武門並に土地鎮護の神として創建したとある。安政六年四月山腹険阻の地に奉遷し、現在に至っている。

日吉神社　旧村社

御津郡御津町中泉一三四三

主祭神　大山咋命　外二柱
例　祭　十月二十日　**境内地**　四八坪
主要建物　本殿　籠殿　神輿庫
摂末社　荒神社
氏子数　三〇戸　**崇敬者数**　一五〇人
宮　司　在里　巍
責任役員　牧　義男　光田泰之　河本金司

真名井神社　旧村社

御津郡御津町中泉一三四三

主祭神　五男三女神
例　祭　十月二十日　**境内地**　三五六坪
主要建物　本殿　随身門
氏子数　五五戸
宮　司　池田浩宥
責任役員　河原金二郎　河田忠臣　河田安美
由緒沿革　創建年月日・由緒は不詳。

神道

神道とは何であろうかを、内容上、本質上定義することは困難な問題であって、古来より学者の間で、いろ〳〵な説が出されている。

終戦後GHQで編集した Religion in Japan を、文部省で邦訳し、「日本の宗教」の名で出版された。その中に次のようにみている。

神道は、自然的環境と人間的環境とに対する、人間の多様な反応の綜合物であり、日本人の思想と習慣との組織の中に織り込まれた切り離すことの出来ない「生活の道」なのである。

そのイデオロギーの或るものは世界の脅威となった。しかし、その中には単純な、ナイーヴな、そして政治的に無害なイデオロギーも沢山ある。その教義には、本来ならば国民が、より高い教養を得て、国民生活を絶えず豊かにする価値あるように思われるものもかなりある。神道は日本固有の宗教で、悠久の昔から日本人の生活の一部であったが、余り多く外国の影響を受けたので、定義することは容易でない。

神道の本質という問題も、狭い神学的立場をとる場合と、広い包容性に基づく場合とでは異って来る。

終戦前に、故河野省三博士の「神道の研究」の冒頭に、「神道とは神の道である。神の道とは日本民族祖先以来の生活原理である。日本民族は、皇祖天照大御神の御神徳を歎美し、体現し、発揚し奉ることを以て生活の原則とし、国家の理想として来たのである。而して、その生活原理が天之御中主神、若くは国常立尊に渕源する神の命（みこと）であると信じ、天照大御神の御子孫たる日嗣の御子、即ち、すめらみこと（天皇）に奉仕することによって実現されるものと信じ、すめらみことも亦その御神徳を継承し恢弘することによって、天つ神の命が完うされるものと信ぜられてをるのである。」と記されている。内容は本居宣長の「直毘霊」の表現をかえたものと云っても差支えないほど近似性のある神道の定義づけである。終戦前までは、大体この定義の線が神道意識の標準になっていたと思う。

昭和三十一年に神社本庁が発表した「敬神生活の綱領」は、今日では、一応神社神道の基本信条の意味をもつものとなっている。

小野祖教文学博士は「神道の基礎知識と基礎問題」と云う著書のなかで神道について、あらゆる観点から考察せられているが、そのうちで、神道とは「日本民族古来の伝統に従って、天照大御神を最高至貴の神として崇敬し、天神地祇八百万の神と祖先とを奉祀し、神々の御心に仕える精神を以って社会に奉仕し、天皇に表現される大和の精神を以って祖国の発展を祈り、世界人類の幸福を願ってやまない生活をすること」であると述べてある。

赤磐郡支部（一一三社）

阿保田神社　赤磐郡瀬戸町万富一九八九……一四四
愛宕神社　〃　赤坂町小原一七四九……一四四
天津神社　〃　赤坂町今井一三二四……一四四
天津神社　〃　赤坂町南佐古田三五〇……一四四
天津神社　〃　瀬戸町大内二二三九……一四四
天津神社　〃　吉井町黒沢一二五……一四四
雨垂布勢神社　〃　瀬戸町肩脊二二〇三……一四五
雨引神社　〃　熊山町沢原一七一二……一四五
天大徳宇津神社　〃　山陽町津崎五九四……一四五
伊勢神社　〃　山陽町穂崎七八九……一四五
伊勢神社　〃　瀬戸町笹岡一五七……一四六
厳島神社　〃　赤坂町山口二〇四四……一四六
疫隅神社　〃　山陽町河本七一六……一四六
恵美須神社　〃　山陽町上市二九六・二九七……一四六
大石箱疊神社　〃　赤坂町東軽部一四五九……一四六
大国主神社　〃　山陽町神田一二六……一四七
於奠神社　〃　熊山町可真下五二三……一四七
柴狭神社　〃　瀬戸町大内二二九五……一四七
御崎神社　〃　赤坂町多賀八七四……一四七
春日神社　〃　山陽町馬屋八一二……一四七
春日神社　〃　熊山町小瀬木三四七……一四八
春日神社　〃　熊山町円光寺四三七……一四八
春日神社　赤磐郡瀬戸町坂根一〇二……一四八
春日神社　〃　瀬戸町宿奥一〇四九……一四八
片山神社　〃　赤坂町由津里二二八八……一四九
神時神社　〃　瀬戸町鍛治屋一五六二……一四九
鴨　神社　吉井町仁堀西六七八……一四九
鴨上松原神社　〃　吉井町中山二五九……一四九
賀茂祇前神社　〃　山陽町熊崎三三三……一五〇
鴨新田神社　〃　吉井町塩木二九九……一五〇
鴨高岡神社　〃　吉井町戸津野一五四二……一五〇
鴨常普神社　〃　吉井町小鎌一一〇四……一五〇
鴨長尾神社　〃　山陽町長尾九七一……一五一
鴨布勢神社　〃　山陽町上仁保六九九……一五一
鴨布勢神社　〃　赤坂町多賀一六〇一……一五一
熊野神社　〃　熊山町野間一〇一……一五一
熊野神社　〃　赤坂町山口二〇七九……一五一
熊野神社　〃　赤坂町西軽部六〇〇……一五二
熊野神社　〃　山陽町正崎一三二一……一五二
熊野神社　〃　山陽町馬屋一二二七……一五二
熊野神社　〃　山陽町穂崎二一五二……一五二
熊野神社　〃　山陽町斗有九四〇……一五二
熊野神社　〃　赤坂町町苅田一一八四……一五二
熊野神社　〃　熊山町徳富一〇……一五二
熊野神社　〃　吉井町河原屋二八七……一五三
熊山神社　〃　熊山町奥吉原一五二六……一五三

神根歳彦神社　赤磐郡赤坂町大苅田一〇六九……一五三
五坐神社　〃　吉井町黒沢一九五〇……一五三
験田神社　〃　熊山町可真上七八四……一五四
正八幡宮　〃　山陽町西中一五八二……一五四
正八幡宮　〃　瀬戸町沖三二……一五四
正八幡宮　〃　熊山町奥吉原四七九……一五四
素盞嗚神社　〃　瀬戸町観音寺一四二……一五四
素盞嗚神社　〃　山陽町高屋一五四六……一五五
素盞嗚神社　〃　瀬戸町宗堂一〇一〇……一五五
素盞嗚神社　〃　吉井町戸津野九九六……一五五
諏訪神社　〃　瀬戸町大内二〇〇五……一五五
諏訪神社　〃　吉井町周匝一〇三四……一五五
天神社　〃　赤坂町小原一一九九……一五七
天神宮　〃　赤坂町小原一四一……一五七
天神宮　〃　赤坂町惣分二八九六……一五七
天地神社　〃　赤坂町東軽部一七二六……一五七
天満宮　〃　赤坂町西窪田六〇……一五八
天満宮　〃　山陽町穂崎二〇六九……一五八
天満宮　赤磐郡吉井町黒本一六九一……一五八
中八幡宮　〃　山陽町尾谷一〇七一……一五八
西中八満宮　〃　山陽町西中一七四九……一五八
沼田神社　〃　山陽町沼田一……一五九
八幡宮　〃　吉井町仁堀中五〇……一五九
八幡宮　〃　吉井町福田九七三……一五九
八幡宮　〃　山陽町下仁保八二三……一五九
八幡宮　〃　赤坂町山口七……一五九
八幡宮　〃　瀬戸町江尻一六八……一六〇
八幡宮　〃　赤坂町大屋四二八……一六〇
八幡宮　〃　赤坂町惣分九〇四……一六〇
八幡宮　〃　赤坂町惣分二三四二……一六〇
八幡宮　〃　吉井町周匝一六二二……一六二
八幡宮　〃　吉井町草生三八三……一六二
八幡宮　〃　熊山町勢力六七八……一六二
八幡宮　〃　熊山町弓削九一五……一六二
八幡神社　〃　瀬戸町菊山九七九……一六二
八幡和気神社　〃　熊山町佐古六八五……一六三
八幡和気降居神社　赤磐郡熊山町岡六〇八……一六三
堰爪神社　〃　瀬戸町万富一一二九……一六三
日吉神社　〃　熊山町石蓮寺七二九……一六三
日吉神社　〃　瀬戸町江尻四九一……一六三
平野神社　〃　熊山町弥上一二六……一六四
布勢神社　〃　吉井町仁堀西一〇二七……一六四
布勢巨神社　〃　吉井町中勢実六五……一六四
福山神社　〃　熊山町松木権現谷一九……一六五
松尾神社　〃　瀬戸町瀬戸六七七……一六五
松尾神社　〃　赤坂町坂辺五五七……一六五
松尾神社　赤磐郡山陽町穂崎一七三〇……一六五
見上神社　〃　熊山町弥上四五〇……一六五
水分神社　〃　熊山町酌田六五一……一六六
神神社　〃　瀬戸町肩脊二〇八二……一六六
宗形神社　〃　赤坂町北佐古田八七五……一六六
宗形神社　〃　吉井町是里三二三五……一六六
山上籠神社　〃　吉井町合田四〇四……一六七
湯山神社　〃　赤坂町山手六〇〇……一六七
和田神社　〃　山陽町和田四五三……一六七

年祝いの意味

古くから四十歳・五十歳・六十歳と、十年ごとに行われる算賀年寿のお祝いである。還暦の祝・古稀の祝・喜寿の祝・米寿の祝・白寿の祝等がある。多くの場合、神社に参拝して御礼を申し上げ、お祓いを受けますので、厄と福とは表裏一体であるとの観念があった。

このように連続する生命、即ち親から子への繰返しが、神事儀礼を伝えて来たので、神と人との関連であって、伝統行事である。

伝統行事を伝承する営みは、祖先の心を知ることにつながる。今に伝えられる年中行事や人生儀礼の数々に、長い年月の間に祖先が祈念したあとをかえりみるとき、祖先と子孫の温い心の通い合いを知らされる。

秋祭

春祭とともに、農業、殊に稲作の終りに、神の恩恵を感謝し、更に来年の豊作を祈願する祭である。アキは収穫の豊穣を意味する古語である。

阿保田神社　旧村社

赤磐郡瀬戸町万富一九八九

主祭神　阿保田神
例　祭　十月十日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　稲荷神社
氏子数　四七三人　**崇敬者数**　五〇人
責任役員　大岩弥三郎　片岡猪惣治　岡本　勲
由緒沿革　本神社は本国神明帳に阿保田神社、山本氏本に従五位上阿保田明神と記載してある旧社で、備前国式内外一二八社の一である。

天津神社　旧村社

赤磐郡赤坂町今井一三二四

主祭神　天之御中主命
例　祭　十月十七日　**境内地**　一、二四三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　五五戸
宮　司　吉田三郎
責任役員　斉藤寛一　光好　賢　栗正一男
由緒沿革　創立年月日由緒等不詳。

愛宕神社　旧村社

赤磐郡赤坂町小原一七四九

主祭神　軸遇突智命
例　祭　十月十四日・十五日
境内地　一、五〇二坪
主要建物　本殿　拝殿　鳥居
摂末社　摩利支天王碑
氏子数　三六戸　**崇敬者数**　一五〇人
宮　司　藤井勝見
責任役員　谷国富太　松岡悦男　山岡信男
由緒沿革　創建は文化五年五月である。昭和二十年十二月一日村社に列格した。

天津神社　旧村社

赤磐郡赤坂町南佐古田三五〇

主祭神　天御中主尊
例　祭　十月五日　**境内地**　九四〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　三三戸
宮　司　吉田三郎
責任役員　清野右正　花房君男　花房　実
由緒沿革　創立年月等不詳。

天津神社　旧村社

赤磐郡瀬戸町大内二二三九

主祭神　天之御中主神
例　祭　四月十五日　**境内地**　八四〇・五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
崇敬者数　五〇〇人
宮　司　青江主計
責任役員　奥田正美　横山樹一　永井寿男
由緒沿革　創建年月日は不詳である。古老の伝によると、中古に本神社を山麓に勧請したが、武士が乗馬のまゝ本神社を過ぎると、必ず落馬するとのことで、現在の位置に勧請したとのことである。

天津神社　旧村社

赤磐郡吉井町黒沢一二五

主祭神　天御中主尊
例　祭　十月十七日　**境内地**　六二七坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　荒神社
氏子数　八人　**崇敬者数**　五人
責任役員　村田平作　大西三平　牧野多賀雄
由緒沿革　黒沢村持井田裏山頂上、俗に妙見峠に鎮座の妙見菩薩を、寛正年間に山麓の現在の地に勧請遷座した。宝暦年間に本殿・鳥居を改築した。古老の言によると此の妙見菩薩は霊験あらたかで、当時周匝の川を通る舟は、皆転覆したため、御社殿を山麓に遷座したと云い伝えている。



雨垂布勢神社　旧郷社

赤磐郡瀬戸町肩脊二二〇三

主祭神　大己貴命
例　祭　十月十九日
境内地　二、七六六・九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　稲荷神社　荒神社　素盞嗚神社　保食神社
氏子数　五四戸
宮　司　青江貞夫
責任役員　木庭寛二　入江　浄　塩見貞男　土井憲治
由緒沿革　創建年月は不詳である。本国総社神明帳に雨垂布勢神社。山本氏本に従二位雨垂布勢明神と記載してある。備前国式外古社百二十八社の一である。古伝に曰く、古くは郷社領国幣百五社ノ一であると。備陽国誌に曰く「孝謙天皇の御宇奥州黒川郡の天足大明神を勧請す。此社の氏子は故あって伯州大山へ参詣しない由言伝う」とある。

雨引神社　旧村社

赤磐郡熊山町沢原一七一二

主祭神　高靇神
例　祭　十月二十一日　**境内地**　七四二・七四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　鳥居
摂末社　稲荷神社
氏子数　四五〇人
宮　司　三原倉四郎
責任役員　小竹伊左久　権次梅次郎　小山通義　小竹一男　岡本三代吉　岡本照長　当郷数左　豊田　真
由緒沿革　本神社は備前国総社神名帳に雨引神社、山本氏本に正六位下雨引明神と記載してある式内外古社一二八社の一で、中古に御所大明神と称していたが、明治三年に旧号に復した。沢原の鎮守神として崇敬し、旱魃の時には里人が社前に集り、雨乞の祈願を行い霊験が顕著であった。往古は社殿が後の山頂にあったと云う。棟札に雨引大明神正遷宮宝暦元巳卯閏七月吉日。奉葺替御所宮嘉永五年子三月吉日云々。石鳥居の額に御所宮柱に弘化四年丁未九月十七日氏子中とある。御所大明神と云うのは、足利義政の御所京都一条南小川西に御所があり、小川御所と云うのは将軍が新に造った御所である。文明八年に行幸があり、足利八代将軍の義政の死後に夫人日野富子は此処に移り住み、京都の小川御所に鎮座の御所八幡宮を此の地に勧請したと云う。

天大徳宇津神社　旧村社

赤磐郡山陽町津崎五九四

主祭神　天大徳宇津神
例　祭　十月十七日　**境内地**　三五一・五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所
摂末社　稲荷神社　素盞嗚神社　荒神社
氏子数　二六戸
宮　司　青江貞夫
責任役員　中務　薫　真野　操　真野武雄
由緒沿革　創建年月日は不詳である。本国総社神明帳に「天大徳宇津神社」、山本氏本に「正五位下天大徳宇津明神」と記載してある。備前国式外古社百二十八社の一である。

伊勢神社　旧村社

赤磐郡山陽町穂崎七八九

主祭神　天照大神　豊受大神

例　祭　十月二十一日　境内地　八一六・九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社
宮　司　佐藤忠男
責任役員　横田民治　横田二郎　阿部　広　阿部猛男
由緒沿革　創建年月は不詳であるが、かつて両宮神社と称したことがある。戦国時代に和田伊織が、こゝを居城としたことがあったと伝えられている。

伊勢神社　旧村社

赤磐郡瀬戸町笹岡一五七

主祭神　天照大神　天児屋根命　品陀和気命　八幡大神　春日大神
例　祭　十月十五日　境内地　二、〇四一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社
氏子数　一五〇戸
宮　司　宮脇清典
責任役員　石原正法
由緒沿革　由緒は不詳。本神社は藩政時代に天照大神宮と称したが、明治二年に笹岡大神宮と改称し、明治六年に村社に列した。旧藩政時代の社領は御免帳立に五斗とある。

巌島神社　旧村社

赤磐郡赤坂町山口二〇四四

主祭神　市杵島姫命

例　祭　十月十四日・十五日
境内地　七八三・二八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　山神社
氏子数　七五戸
宮　司　矢田　堅
責任役員　小坂文男　小坂寿男　田中昭次
由緒沿革　天保三年四月吉日に鳥居を建立とある。これ以前の御鎮座らしい。創建は貞享元年以前らしい。岡山藩文庫神社収納仕訳帳に「赤坂磐梨二備前国赤坂郡山口村巌島神社宮林松本目通二尺四尺廻迄二十本代金相場九一両一歩祭木神供薪等々」の文献がある。

疫隅神社　旧村社

赤磐郡山陽町河本七一六

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月十日　境内地　一、三八九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　控所　釜殿
摂末社　稲荷神社　龍王宮　八幡宮　桜神社　荒神宮
氏子数　九〇戸
宮　司　佐藤忠男
責任役員　生本高弘　山本砂男　井上幸夫
由緒沿革　創建年代は元禄三年で、備前国内神名帳所載の神社である。

恵美須神社　旧村社

赤磐郡山陽町上市二九六・二九七

主祭神　事代主神
例　祭　十月十七日　境内地　九八坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　荒神社　天神社
氏子数　三〇戸
宮　司　佐藤忠男
責任役員　塩見武士　友実金市　岡本登志雄
由緒沿革　創建年月は不詳であるが、神名帳に赤坂郡上市村鎮座とある。

大石箱畳神社　旧村社

赤磐郡赤坂町東軽部一四五九

主祭神　大石箱畳神
例　祭　十月三日　境内地　三、四八九坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　九〇戸
宮　司　吉田三郎
責任役員　是友　昭　福井信太　題府健一　福井和男
由緒沿革　本神社の創建年月は不詳であるが、本国総社神名帳に「大石箱畳神社」、山本氏本に「従五位下

大石箱畳明神」と記載してある古社である。正殿は大石箱畳と云う大磐石を御神殿とし、或は御神体として奉斎した旧例がある。

大國主神社　旧村社

赤磐郡山陽町神田一二六

主祭神　大国主神
例　祭　十月十七日　境内地　一、一一二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社
氏子数　二五戸
宮司　司　佐藤忠男
責任役員　中永五一　中永夏男　中永　巍
由緒沿革　創建は寛文年間で、尾崎大明神と奉称していたが、明治四年頃より大国主神社と改称した。

於奠神社　旧村社

赤磐郡熊山町可真下五二三

主祭神　於奠神　八幡三神
例　祭　十月二十一日・二十二日
境内地　一、六六六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門

摂末社　稲荷神社　地神　風神　天満宮
氏子数　一二〇戸
宮　司　矢田　堅　矢田勘一
責任役員　藤本茂正　松田栄張　大橋千秋　松田亀男
由緒沿革　式外神社領国幣百五社之内、従五位上、本神社は春日造で御祭神は於奠神と神名帳に見えている。中比王八幡宮と称して居った。住吉神は上筒男・中筒男・底筒男の三神で、風の神は級長津彦神と奉称し、伊弉諾伊弉美二神の御子である。旧号於奠神社は中古には称王八幡宮、明治二年には称正八幡宮と称した。明治三年に旧号に復した。神社の創建は寛文六年以前と岡山藩庁に記してある。

柴狭神社　旧村社

赤磐郡瀬戸町大内二二九五

主祭神　柴狭神
例　祭　十月二十三日
境内地　一、八六七・七五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　稲荷神社　荒神社
氏子数　五〇戸　崇敬者数　十五人
責任役員　徳田　貢　宇垣幹雄　松本寿志
由緒沿革　創建年月は不詳であるが、本国総社神名帳に「柴狭神社」、山本氏本に「正六位下柴狭明神」とある古社で、備前国式外社百二十八社の一である。

御崎神社　旧村社

赤磐郡赤坂町多賀八七四一

主祭神　大国主命
例　祭　十月十四日・十五日
境内地　一、六七四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　鳥居
摂末社　稲荷神社　荒神社　地神社
氏子数　三三戸　崇敬者数　一三〇人
宮　司　藤井勝見
責任役員　友次岩海　南　隆好　滝川俊雄
由緒沿革　創建年代は不詳である。

春日神社　旧村社

赤磐郡山陽町馬屋八一二

主祭神　天照大神　春日大神
例　祭　十月二十一日　境内地　一、九三八坪
主要建物　本殿　拝殿　幣殿　釣殿
摂末社　稲荷神社
宮　司　佐藤忠男
責任役員　石原金吾　平井喜志男　平井富士雄
由緒沿革　創建は元禄元年であるが、由緒等は不詳である。

春日神社　旧村社

赤磐郡熊山町小瀬木三四七

主祭神　南都春日神
例　祭　十月十五日
境内地　二、七八二・〇九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　鳥居
摂末社　稲荷神社　荒神社
氏子数　八〇六人　**崇敬者数**　四五〇人
宮　司　小森一郎
責任役員　佐々木丘太　石田元広　土井安男
由緒沿革　創建年代は不詳である。古くは春日大明神と称していたが、明治初年に春日神社と改称した。鈴井の大藪の中に鎮座していたが、たび〳〵の大水に遭い現在地に遷宮し奉った。明治三十九年九月十七日に山林一反六畝九歩を境内に編入した。

春日神社　旧村社

赤磐郡熊山町円光寺四三七

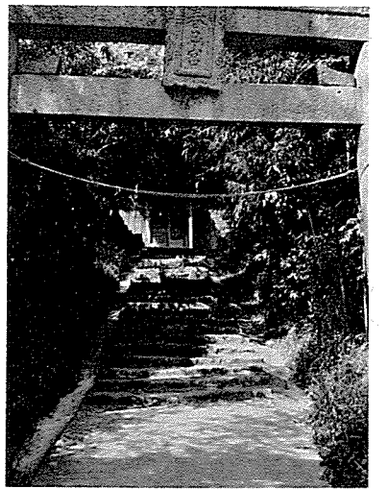
主祭神　武甕槌命　天児屋根命　経津主命　姫大神

例　祭　十月十五日
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　稲荷神社
氏子数　一六八人
宮　司　佐藤忠男
責任役員　青木司雄　芳形近太　桐山市衛
由緒沿革　創建年代は不詳であるが、天保二年五月一日に再建せられた。石根依根主神社の氏子であったが、明治四年十月十九日に同神社から分離して本神社の氏子となった。

春日神社　旧村社

赤磐郡瀬戸町坂根一〇二

主祭神　天児屋根命
例　祭　十月九日・十日
境内地　六一七・六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　稲荷神社　荒神社
氏子数　五五戸　**崇敬者数**　一〇〇人
宮　司　青江貞夫
責任役員　吉田利彰　吉田政男　重吉輝男　佐近里司
由緒沿革　創建は和銅五年である。本神社は元吉岡郷及び磐梨郷中の郷村であったが、元禄年間に火災によりり本神社を焼失した、め社格を失った。元禄三年五月に旧殿を再建した古社である。



春日神社　旧村社

赤磐郡瀬戸町宿奥一〇四九

主祭神　武甕槌命　経津主命　天児屋根命　比売乃神
例　祭　十月十五日
境内地　一、〇六〇・一三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　牛神社　若宮
氏子数　五五人　**崇敬者数**　二五七人
宮　司　久山万吉
責任役員　黒田賢一　田中武一　日原琢之　黒田成也　井上克治
由緒沿革　勧請年月は不詳であるが、第一〇七代後陽成天皇の文禄四年十二月、御津郡金山寺古記録に、備前四十八寺領及大社領目録に、「畠一反上道郡宿奥村大

明神領」と記してある。御正体は束帯の座像で、第一〇九代光格天皇の寛政の頃に、子供数名が社壇に上り扉を開き、御正体を持出して弄んだために、手足が膀腫して、傍に転んだのを神官が認め、祓い清めて神殿に祀り、罪を謝したので、神の怒が静まったのは奇特であると伝えている。

片山神社　旧郷社

赤磐郡赤坂町由津里二二八八

主祭神　阿遅鉏高日子根命
例　祭　十月十五日　**境内地**　二、四三〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　御崎神社　熊野神社　祇園神社
氏子数　八〇戸
宮　司　吉田三郎
責任役員　難波志郎　逢坂喜一　坂本仁司
由緒沿革　本神社の創建は孝霊天皇の御宇七十二年に、吉備若日子建王子が播磨を征せられた時に、籠って祈り給うた。天平二年九月一日に建替、永承四年に神社仏舎利納めの時に、峰から麓に遷座した。片山大明神と称し正三位の神位を贈られた。延喜式赤坂之部鴨三社の一で、明治三年三月に郷社となった。

神時神社　旧村社

赤磐郡瀬戸町鍛冶屋一五六二

主祭神　霹靂神

例　祭　十月十日　**境内地**　八五〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社
氏子数　一五〇戸　**崇敬者数**　五〇人
宮　司　佐藤忠男　**禰　宜**　吉岡猛雄
責任役員　岸本農武郎　額田太郎　杉原肇
由緒沿革　創建は宝暦年間で、神社明細帳に備前国磐梨郡鍛冶屋村に鎮座の神時神社で、式外の神社で、社領国幣一〇五社の内である。勧請当初は神時神社と称した。中古には天神宮と称したが、明治三年に旧称に復した。石見の国の霹靂神と同神であると云う。

鴨神社　旧村社

赤磐郡吉井町仁堀西六七八

主祭神　別雷神
例　祭　十月十八日
境内地　四、八六〇・九二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　龍王宮　稲荷社
氏子数　六五戸　**崇敬者数**　四〇〇人
宮　司　在里巍　**禰　宜**　在里幸宗
責任役員　馬場吉太　杉能節　佐藤義美
由緒沿革　本神社は延喜式内の古社で、京都上加茂大明神の御分社として、明治初年迄は京都上加茂神社の社家松下氏・西池氏の両家が社務を統理し、本村で高百五十石を領し、その収納で運営にあたったが、明治維新以来社家は廃止せられ、当地に社掌を置き、造営等総て氏子の負担となった。当神社は古来雷除けの神として尊敬厚く、毎年五月三日の雷除祈願祭には、近郷近在からの参拝が多い。



鴨上松原神社　旧村社

赤磐郡吉井町中山二五九

主祭神　阿遅鉏高日子根神　事代主神　高龗神　大山咋神
例　祭　十月十五日　**境内地**　七五四・一六坪

主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　稲荷神社
氏子数　一二〇人
責任役員　坂本　武　橘　正孝　橘　誠一
由緒沿革　本神社は本国総社神明帳に、鴨上松神社。山本氏本に正四位下鴨上松原明神と記載してある。備前国式内外一二八社の一である。棟札に正保三年二月三日に池田伊賀守が、本殿を造営したとある。明治三十九年勅令第九十六号第一条第二項により、同四十年岡山県令第三十四号を以って神饌幣帛料の供進神社に指定せられた。大正三年十月二十三日に無格社高麗神社、同日吉神社に合祀せられた。

賀茂祇前神社　旧村社

赤磐郡山陽町熊崎三三三

主祭神　大己貴命
例祭　十月十八日　**境内地**　一、三一三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　御輿庫
摂末社　貴布禰神社　荒神社　稲荷神社　祇園社
氏子数　六八〇人
宮司　三原倉四郎
責任役員　犬飼喜代志　藤原和太　皿井久光
由緒沿革　本神社の創建は不詳であるが、本国総社神名帳に賀茂祇園神社、山本氏本に正五位下賀茂祇前明神と記してある。備前国式外の神社預国幣百五社の内である。御祭神は鴨代主命であったが、明治三十一年十一月に大己貴命となり、相殿に八幡大神を奉斎し、熊崎・鴨前・下市の産土神である。左記のような棟札がある。永和二年二月吉日上棟賀茂祇前大明神。天正九年吉日棟上熊崎八幡宮。延宝八年九月吉日文面不明。享保十六年七月十九日奉造吉備前国赤坂郡熊崎邑正八幡宮本殿渡殿拝殿。明和七年五月吉日御屋根葺替。文政十一年八月吉日奉建替正八幡宮。天保八年二月正八幡宮幣殿建替。弘化三年四月十九日奉葺替八幡宮本殿。慶応四年八月十二日本殿葺替。明治十六年九月十六日奉賀茂祇前神社幣殿拝殿葺替。明治二十一年九月本殿拝殿葺替。明治四十年御本殿改築落成。昭和三年十月十二日幣帛料供進神社指定。昭和十六年九月十五日御本殿屋根檜皮葺替。

鴨新田神社　旧村社

赤磐郡吉井町塩木二九九

主祭神　別雷神
例祭　十月十八日
境内地　一、八四六・七七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫
摂末社　稲生神社
氏子数　八七人
責任役員　杉本四郎　角南太郎　長光忠雄
由緒沿革　創建年月日は不詳であるが、本国総社神明帳に鴨新田神社。山本氏本に正四位下新田明神社と記載してある、備前国式内外古社一二八社の一である。
宝物　刀剣一振
由緒沿革　神社名は中頃十二社権現と云ったことがある。吉備温故には、軻遇突智命・埴山姫命・罔象女・雅彦霊命・彦火火出見尊・葺不合尊・天照大神・国常立尊・忍穂耳命・伊弉冊尊・速玉之男・事解之男の十二神を記してある。明治維新後に現今の社名となった。

鴨高岡神社　旧村社

赤磐郡吉井町戸津野一五四二

主祭神　事代主命
例祭　十月十七日　**境内地**　三、五四四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫　随身門
摂末社　稲荷神社
氏子数　四十五戸　二〇〇人
宮司　門野幸得
責任役員　南石喜一　佐藤義美　安東叶農
由緒沿革　本神社の創建年代は不詳である。本国総社神名帳に鴨高岡神社、山本氏本に正四位下鴨高岡明神と記載してある旧社である。備前国式内外古社一二八社の一である。

鴨常普神社　旧村社

赤磐郡吉井町小鎌一一〇四

主祭神　別雷神
例祭　十月十七日　**境内地**　一、〇八五坪
主要建物　本殿　拝殿　神饌所　籠殿
摂末社　荒神社　稲荷神社　七社神社
氏子数　六四戸
宮司　在里幸宗
責任役員　井坂馬之亟　岸本作治　服部忠臣

主祭神　大国主命
例祭　十月十八日　**境内地**　一、七四三坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　荒神社　天神社
氏子数　四〇戸
宮司　佐藤忠男
責任役員　藤野一清　大森正臣　石原　馨
由緒沿革　創建は興国元年で、本国総社神名帳に鴨長尾神社従四位下と記載せられている。備前国式内外古社一二八社の一である。

鴨長尾神社　旧郷社

赤磐郡山陽町長尾九七一

主祭神　大己貴命　事代主命　相殿　大山祇命　木花咲耶姫命
例祭　十月十七日・十八日
境内地　一、三〇四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　祇園神社
氏子数　四〇戸
宮司　矢田勘一

鴨布勢神社　旧村社

赤磐郡山陽町上仁保六九九

主祭神　水分命
例祭　十二月十七日　**境内地**　四〇一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　多賀神社　八幡宮　熊野神社
氏子数　八〇戸
宮司　吉田三郎
責任役員　岩本正始　森川東南　若林碩衛
由緒沿革　本神社の創建は元禄八年三月で、備前国式内外古社一二八社の一である。明治四年二月に天津神社と改称したが、明治六年にもとの鴨布勢神社と改称した。現在の御社殿は元禄八年三月の建築で、古来旱魃の時に、雨壺に水を盛り祈雨祭を執行している。

熊野神社　旧村社

赤磐郡熊山町野間一〇一

主祭神　伊邪那岐命　伊邪那美命
例祭　十月十四日・十五日
境内地　八九〇・五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　荒神社
氏子数　七五戸
宮司　矢田　堅
責任役員　小坂寿男　小坂文男　田中昭次
由緒沿革　本神社の創建は貞享以前であるらしい。御本殿改築は貞享元年第一一二代霊元天皇紀元二三四四年と棟札に記録がある。崩れ落ちた額面に若王権現とある。鳥居は室町末期頃の建立で、石材は小豆島の石である。第一の鳥居に文久二年と刻んである。

鴨布勢神社　旧村社

赤磐郡赤坂町多賀一六〇一

主祭神　伊邪那岐命　伊邪那美命
例祭　十二月十七日　**境内地**　二四二坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　二五戸
宮司　矢田　堅
責任役員　河田和義　田中和彦　檜原　哲
由緒沿革　寛文六年以前の創建で、旧社号は黒田権現である。昔は陰暦八月二十七・八日は、於奠神社大祭であり、九月十五・六日は熊野神社の大祭であったが、明治五年頃に熊野神社の氏子となった。現在は十月十二日の祭典を小祭とし、十月二十一・二日の祭典を客祭と称して大祭としている。於奠神社と同日に大祭を行っている。

熊野神社　旧村社

赤磐郡赤坂町山口二〇七九

主祭神　伊邪那岐命　伊邪那美命
例祭　十月十四日・十五日
境内地　八九〇・五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　荒神社
氏子数　七五戸
宮司　矢田　堅
責任役員　小坂寿男　小坂文男　田中昭次
由緒沿革　本神社の創建は貞享以前であるらしい。御本殿改築は貞享元年第一一二代霊元天皇紀元二三四四年と棟札に記録がある。崩れ落ちた額面に若王権現とある。鳥居は室町末期頃の建立で、石材は小豆島の石である。第一の鳥居に文久二年と刻んである。

熊野神社　旧村社

赤磐郡赤坂町西軽部六〇〇

主祭神　熊野久須毘神　伊弉冉尊　伊弉諾尊
例祭　十月四日　**境内地**　一、一一九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　八〇戸
宮司　吉田三郎
責任役員　国富信太　額田義光　岩藤一男
由緒沿革　創立年月日・由緒等不詳。

熊野神社　旧村社

赤磐郡山陽町正崎一三二一

主祭神　伊邪那岐神　伊邪那美神
例祭　十月十七日　**境内地**　三四八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　荒神社　祇園神社
氏子数　五〇戸
宮司　佐藤忠男　**禰宜**　佐藤武文
責任役員　田中正則　塩見信義　花房富男
由緒沿革　創建年代は不詳であるが、寛文元年に再建せられた。文久三年四月十日に熊野神社と改称した。その他の由緒等は不明である。

熊野神社　旧村社

赤磐郡山陽町馬屋一二二七

主祭神　熊野速玉神
例祭　十月二十一日　**境内地**　七二五・七坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　稲荷神社
宮司　佐藤忠男
由緒沿革　創建は元禄三年であるが、由緒等は不詳である。

熊野神社　旧村社

赤磐郡山陽町穂崎二一五二

主祭神　熊野速玉命
例祭　十月十五日　**境内地**　四二一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社
宮司　佐藤忠男
責任役員　安井　潔　則安鉄太郎　故引一夫
由緒沿革　創建は元禄元年であるが、由緒等は不詳である。

熊野神社　旧村社

赤磐郡山陽町斗有九四〇

主祭神　家津御子神　熊野速玉神　熊野夫須美神
例祭　七月十四日　**境内地**　九三三・八〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
氏子数　一六二人　**崇敬者数**　五〇〇人
宮司　小森一郎
責任役員　和気武男　石田元広　土井安男

熊野神社　旧村社

赤磐郡熊山町徳富一〇

主祭神　同紀州熊野神
例祭　十月十八日　**境内地**　七七一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　熊野神社　天神宮
氏子数　四五〇人
責任役員　岡村一男　岡村恒一　光岡市次
由緒沿革　創建由緒は不詳。

熊野神社　旧村社

赤磐郡赤坂町苅田一一八四

主祭神　伊邪那美命
例祭　十月十八日　**境内地**　三七七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　二〇戸
宮司　佐藤忠男
責任役員　山本　豊　山本　寿　山本一衛
由緒沿革　創建年代・由緒等は不詳である。

熊野神社　旧村社

赤磐郡吉井町河原屋二八七

主祭神　伊弉冉尊
例祭　十月十五日　**境内地**　六九五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　河原屋神社
氏子数　六八人　**崇敬者数**　二五人
責任役員　戸田広次　尾関鹿太　尾関直市
由緒沿革　本神社は口碑によると、此の熊野神社の御神霊の御遷座の時、字先の谷の路傍に岩があり、その岩の上に御輿を据えて休んだ。その後岩は一段下に落ちて墓の台石となっている。これによって神社の御鎮座地は、部落の下の山上であったらしい。創建は天保十四年である。

熊山神社　旧村社

赤磐郡熊山町奥吉原一五二六

主祭神　大国主命
例祭　五月二十四日

由緒沿革　創建年代は不詳である。紀州熊野神を勧請し、旧熊野権現と称したが、明治初年になって熊野神社と改称した。

熊野神社　旧村社

赤磐郡吉井町河原屋二八七

主祭神　伊弉冉尊
例祭　十月十五日　**境内地**　六九五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　河原屋神社
氏子数　六八人　**崇敬者数**　二五人
責任役員　戸田広次　尾関鹿太　尾関直市
由緒沿革　本神社は口碑によると、此の熊野神社の御神霊の御遷座の時、字先の谷の路傍に岩があり、その岩の上に御輿を据えて休んだ。その後岩は一段下に落ちて墓の台石となっている。これによって神社の御鎮座地は、部落の下の山上であったらしい。創建は天保十四年である。

熊山神社　旧村社

赤磐郡熊山町奥吉原一五二六

主祭神　大国主命
例祭　五月二十四日

神根歳彦神社　旧村社

赤磐郡赤坂町大苅田一〇六九

主祭神　大歳神
例祭　十月十五日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
境内地　二、〇四三坪
摂末社　稲荷神社　貴船神社
氏子数　八〇戸
宮司　佐藤忠男
責任役員　難波種正　深田勝寿
由緒沿革　創建は元禄元年で、由緒等は不詳である。本国総社神名帳に神根歳彦神社、山本氏本に正五位下神根歳彦明神と記載してある。備前国式内外古社一二八社の一である。

五坐神社　旧村社

赤磐郡吉井町黒沢一九五〇

主祭神　素盞嗚尊　天照大神　応神天皇　天児屋根命　天穂日命
例祭　十月十七日　**境内地**　一、五八四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社
氏子数　二六五人
責任役員　青山繁徳　直原源太郎　神本仙造
由緒沿革　創建年月日は不詳であるが、棟札に寛正元年に再建立の事が明記してある。古昔仁徳天皇の寵姫黒比売命を奉祀している。室原の社地に鎮座していたのを、故あって寛正庚申年に現在の地に移し、五坐山と号し五神を合祀した。総社の制を定められたときに、周匝郷の総社として尊崇した。寛文年間以来備前国老池田公が本神社の尊厳なのを崇拝し、再度の御寄進があった古社である。

験田神社　旧村社

赤磐郡熊山町可真上七八四

主祭神　験田乃神
例　祭　十月十五日・十六日
境内地　三六六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　天神社　稲荷神社　海神社　上村神社
氏子数　八〇戸
宮　司　矢田　堅
責任役員　赤枝耕四郎　小山俊夫　白石　求　西山進　藤野新一　岡崎浪夫　行本　治　立石博司　奥田節夫　上村　裕
由緒沿革　式外神社預国幣百五社之内従五位上、本殿は一間社流造本瓦葺、神名帳には験田神とある。中途正八幡宮と称した。昭和三年に神饌幣帛料供進の村社となった。海神社は伊弉諾伊弉冉の御子で海事を掌らせ給う御神で、御子に豊玉毘売命がある。慶長九年以前の創建で、明治三十九年に神饌幣帛料を供進する神社に指定せられた。

正八幡宮　旧村社

赤磐郡山陽町西中一五八二

主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后
例　祭　十月六日・七日
境内地　一七八・三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　荒神社
氏子数　四五戸
宮　司　青江貞夫
責任役員　岩藤寿夫　岡村義雅　藤原武一
由緒沿革　本神社は古伝によると、神功皇后が三韓討伐の時の舟調度の地として云伝えられて、大字沖と云う字名も港のあったことと、隣接町村にその古跡があることとで、討征順路であり舟廻りであった。このことから武神として三神を勧請した。以来霊験あらたかなのでその名が知られている。創建年月は不詳である。

素盞嗚神社　旧村社

赤磐郡瀬戸町観音寺一四二一

主祭神　素盞嗚尊　稲田姫命　大己貴命
例　祭　十月十五日　**境内地**　一、五二七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　若宮　八幡神社
氏子数　九〇戸
宮　司　久山万吉

例　祭　十月十八日　**境内地**　四一六坪
主要建物　本殿　拝殿
宮　司　矢田勘一
責任役員　藤原一二生　有森太郎　釣井作松
由緒沿革　棟札に「文化十有四歳丑九月二日に奉立替。一、安政六年　四月二十七日奉葺正八幡宮本殿。一、石鳥居額正八幡宮文政二年巳辰奉献森為衛門道寛建之。昭和十二年五月八日奉新築屋根銅板葺檜材」とある。

正八幡宮　旧村社

赤磐郡瀬戸町沖三二

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后　彦火々出見尊
例　祭　十月二十四日　**境内地**　五三一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神供所　鳥居
摂末社　歯岩社　夕日明現　朝日明現　稲荷社　祇園社　地鎮社
氏子数　四〇〇人　**崇敬者数**　四〇〇人
宮　司　三原倉四郎
責任役員　日笠照雄　山田恒夫　武本鹿夫
由緒沿革　創建年代は不詳である。往古は赤岩の鎮座であったものが、現在地に遷座した。神社明細帳によると、社領米石高四斗一升八合である。



責任役員　戸松克行　矢部善三郎　岡本　敏　万代智保
宝　物　随身像
由緒沿革　創建年月・由緒等は不詳である。

素盞嗚神社　旧村社

赤磐郡山陽町高屋一五四六

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月十七日　**境内地**　二一、四三二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　天神宮
氏子数　五〇戸
宮　司　佐藤忠男
責任役員　青井　廉　花房正生　花房要三

由緒沿革　創建年代は不詳であるが、安政四年朝日に御社殿を再建した。明治四年十月に祇園牛頭天王宮と称していたのを、現在の神社名に改称した。

素盞嗚神社　旧村社

赤磐郡瀬戸町宗堂一〇一〇

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月十五日　**境内地**　二五五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　五五戸
宮　司　佐藤忠男
責任役員　藤原直忠　笹野二郎　笹野　仁
由緒沿革　創建年代は不詳であるが、寛文元年五月十日の再建である。由緒等は不明である。

諏訪神社　旧村社

赤磐郡瀬戸町大内二〇〇五

氏子数　三二戸　一四四人
宮　司　門野幸得
責任役員　浦上貞一　藤田政徳　平尾雅雄
由緒沿革　創建年代は不詳である。神代の頃に素盞嗚尊が大蛇を御退治の後に、御剣を山方の血洗いの瀑布で御洗滌の上、本神社に奉納せられたので、字名を剣山と云ったと。古来口碑に伝わっている。

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月十八日　**境内地**　一、一四八・八一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　稲荷神社

主祭神　建御名方神
例　祭　十月二十三日　**境内地**　九一四・五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　稲荷神社　荒神社　天神社　素盞嗚神社
氏子数　二〇戸
宮　司　青江主計
責任役員　永井寿男　永井　洋　藤原立志
由緒沿革　創建年代は不詳である。本神社は古老の伝によると安産の守神として崇敬厚く、遠近を問わず参拝者が多い。

諏訪神社　旧村社

赤磐郡吉井町周匝一〇三四

主祭神　建御名方神

例　　祭　七月二十七日　境内地　六四一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　稲荷神社
氏子数　二三五人　崇敬者数　六五〇人
責任役員　原嘉太郎　堤　諄一　篠田　茂
由緒沿革　御祭神は信濃国諏訪明神である。伝説によると本神社の御神像は、昔是里村山鳥城の鎮守として安置してあったのを、城の陥る時に、敵兵が麓の滝山川に捨てたのが、周匝の南西に漂着していたのを発見して、協議の上、町の南端に社殿を造り奉祀したのが、現在の諏訪神社である。祭日の前夜は賑やかな踊りを境内で行い、当日は角力を行う。

大仙宮　旧村社

赤磐郡熊山町吉原八九一

主祭神　大智明権現
例　　祭　九月十五日
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　二〇〇人　崇敬者数　二〇〇人
責任役員　柏藤　一　岡野茂次郎　畑　誠一
由緒沿革　安永二年の頃、牛馬の病殊の外多く、附近の農民は恐々として一日も安堵出来ない有様であったので、部落民が相談して伯耆大仙大智明権現と云う、牛馬の守護神を祭って、牛馬の安全を祈願した。

高星神社　旧村社

赤磐郡吉井町稲蒔四八〇

主祭神　高星神　阿遅鉏高日子根命　瀬織津比売命
例　　祭　十月十七日　境内地　二、四一六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　天神社　荒神宮
氏子数　六四戸　崇敬者数　九人
責任役員　南部元二　松本忠治郎　末藤千十郎
由緒沿革　本郡高星山の鎮座で、宝永元年申四月に再建した。本国神明帳に高星神社。山本氏本に正四位下高星明神と記載してある旧社である。高星山は磐梨郡の龍天山、御津郡の金山、津高郡の化気山、和気郡の熊山等国中五高山のうち最も勝れた名山である。山中に「ヒレダラ星」と云う大石がある。此処が神社の旧跡である。現在地に奉祀した年代は不明である。

武内神社　旧村社

赤磐郡熊山町千体五一〇

主祭神　武内宿禰
例　　祭　十月十五日
境内地　一、一九一・〇五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　随身門
摂末社　荒神社　稲荷神社
氏子数　二七〇戸
宮　　司　三原倉四郎
責任役員　下村竹夫　南　未男　有吉為男
由緒沿革　創建年代は不詳である。記録によると寛文十年九月に舞殿を再興し、貞享元年三月及び享保十五年八月に神殿・拝殿の造築をした。現在の本殿は文政元年九月十八日の建立である。

武津神社　旧村社

赤磐郡熊山町稗田四七一

主祭神　天宇受売命　天御中主尊　素盞鳴尊
例　　祭　十月十七日　境内地　一四〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　五五戸
宮　　司　矢田　堅
責任役員　野波　襄　野波能一　森　和雄　梶木股三　野波正司
由緒沿革　本神社の御社殿は流造・銅板葺で、何時の頃か天王山の頂にあった天津神社裏に御鎮座の、祇園神社を合祀した。よって天津神社の御祭神は祇園神社の御祭神をも奉祀している。

築領八幡宮　旧村社

赤磐郡瀬戸町下七四一

主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后

例　　祭　十月七日・八日
境内地　七〇九・九一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　前殿
摂末社　稲荷社　荒神社　祇園宮
氏子数　一二八戸　崇敬者数　三六五人
宮　　司　青江貞夫
責任役員　有松義勝　松本定平　井原正昭　石原勝利
由緒沿革　創建は文久二年である。本神社は社格としての古事はないが、当地内は神功皇后の三韓討伐の順路で、その古跡が残っている。三武神の仲哀天皇・応神天皇・神功皇后を勧請して、産土神築領八幡宮と号し、その霊験があらたかで地方に知られている。

寺地八幡宮　旧村社

赤磐郡瀬戸町寺地一一〇八

主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后
例　　祭　十月八日　境内地　三七六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社
氏子数　三〇戸　崇敬者数　五〇人
宮　　司　青江貞夫
責任役員　井本丈夫　藤原邦夫　土井浪五郎　藤原茂延
由緒沿革　元禄元年より六十年前の創建とあるが、年月日は不詳である。元禄年間に祠官の西崎勝太輔が奉仕のとき、京都吉田殿から神社の御神体は、造り・形容・年代等が最も優れて居り、国宝に準ずるものとの評価をうけた。

天神社　旧村社

赤磐郡赤坂町小原一一九九

主祭神　菅原道真命
例　　祭　十月十四日・十五日
主要建物　本殿　拝殿　鳥居
摂末社　稲荷神社　地神社　荒神社
氏子数　一二戸　崇敬者数　三〇人
宮　　司　藤井勝見
責任役員　頼則　昇　頼則　強　戸川金吾
由緒沿革　創建年代は不詳であるが、慶安二年以前と推定せられる。

天神宮　旧村社

赤磐郡赤坂町小原一四一

主祭神　菅原道真
例　　祭　十月十五日
境内地　一、〇三〇・五二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　熊野神社　素盞鳴神社　稲荷社　荒神社
氏子数　三七戸　崇敬者数　二〇〇人
宮　　司　藤井勝見
責任役員　戸川寿太郎　堀　睦夫　戸川芳明
宝　　物　灯籠
由緒沿革　勧請年月は不詳。寛保三年以前の創建らしい。天保九年に建替。明治二十一年、昭和四十二年に屋根の葺替。昭和四十五年に拝殿の大修理をした。

天神宮　旧村社

赤磐郡赤坂町惣分二八九六

主祭神　菅原道真命
例　　祭　十月十四日・十五日
境内地　二、二一二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　鳥居
摂末社　金刀比羅宮　荒神社　地神社　牛神社
氏子数　三五戸　崇敬者数　一五〇人
宮　　司　藤井勝見
責任役員　周藤俊一　四十塚晴夫　重松貞知　小倉安太郎
由緒沿革　創建年代は不詳であるが、寛保二年以前と推測せられる。明治八年に焼失し、明治十一年に再建した。

天地神社　旧村社

赤磐郡赤坂町東軽部一七二六

主祭神　伊弉冉尊　伊弉諾尊

例　祭　十月十五日　**境内地**　八、〇九四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神輿庫　社務所
摂末社　疫隅神社　出雲大社　稲荷神社　和霊神社　伊勢神宮
氏子数　二四五戸
宮　司　吉田三郎
責任役員　若林　好　額田憲一　清野　守　光好　賢　杉本経雄
宝　物　神鏡二　刀一振
由緒沿革　創建年月は不詳であるが、本国総社神名帳に「天地神社」、大滝本に「正五位上天地大明神」と記載してある、備前国の式内外一二八社の一である。淡路国の岩屋村の天地大神宮と同神と言い伝えている。

天満宮　旧村社

赤磐郡赤坂町西窪田六〇

主祭神　菅原道真公
例　祭　十月十四日・十五日
境内地　三、九〇三・六九坪
主要建物　本殿　釣殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神宮　稲荷神社　地神　祇園神社
氏子数　五〇戸
宮　司　矢田勘一
責任役員　越宗太猪五郎　重友　忠　内藤　嵩
由緒沿革　九州太宰府からの勧請で、石燈籠に慶応二年丙寅三月吉祥日と刻んである。その他不詳。

天満宮　旧村社

赤磐郡山陽町沼田一

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月十八日　**境内地**　三、一五四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫
摂末社　稲荷神社　荒神社
氏子数　一八〇戸
宮　司　佐藤忠男
責任役員　藤原隆正　矢吹一彦　橋本芳治
由緒沿革　創建は興国三年で、本国総社神名帳に正五位下沼田明神と記載してある。備前国式内外古社一二八社の一である。旧鳥取郷の一宮で維新前迄は藩主池田家より社領米一石四斗九升五合の寄進があった。中古野原八幡宮と称したが、明治二年旧号に復し沼田神社と称した。

天満宮　旧村社

赤磐郡吉井町黒本一六九一

主祭神　菅原神
例　祭　十月十八日
主要建物　本殿　拝殿　幣殿
摂末社　沼名前神社　八五戸
氏子数　岡本元一郎　高原一郎
責任役員　創建年代は不詳であるが、「寛政四年十一月に社殿を建立した。大施主大林氏子中大工是里村嵐島久四郎」と記した棟札がある。
由緒沿革

中八幡宮　旧村社

赤磐郡山陽町穂崎二〇六九

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月十八日
境内地　三三〇・七二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社
氏子数　三八二戸
宮　司　三原倉四郎
責任役員　平島　勇　岸田友一　西岡豊治
由緒沿革　創建は寛文年間であるが、由緒等は不詳である。

天満宮　旧村社

赤磐郡山陽町穂崎二〇七一

主祭神　菅原道真
例　祭　十月七日　**境内地**　三三〇・七二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社
宮　司　佐藤忠男
責任役員　小野　勲　小野健次　小野　薫
由緒沿革　創建は寛文年間であるが、由緒等は不詳である。

西中八幡宮　旧村社

赤磐郡山陽町西中一七四九

主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后
例　祭　十月十八日　**境内地**　五五七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　稲荷神社
氏子数　七五戸
宮　司　矢田勘一
責任役員　藤原一二生　有森太郎　釣井作松

中八幡宮　旧村社

赤磐郡山陽町尾谷一〇七一

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月十八日
境内地　一、七六四・〇八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　鳥居
摂末社　稲荷神社
氏子数　三八二戸
宮　司　三原倉四郎
責任役員　平島　勇　岸田友一　西岡豊治
由緒沿革　創建年代は不詳であるが、寛文二年以前の創建であるらしい。昭和十八年三月三十日に神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

由緒沿革　最古の棟札に「享保四年己亥四月吉日奉造立備前国赤坂郡西山村に鎮座中八幡宮本殿釣殿一安政三年辰四月吉日幣殿拝殿屋根葺替」とある。

沼田神社　旧村社

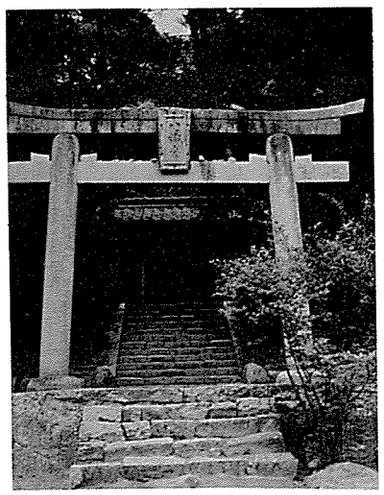
赤磐郡山陽町沼田一

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月十八日　**境内地**　三、一五四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫
摂末社　稲荷神社　荒神社
氏子数　一八〇戸
宮　司　佐藤忠男
責任役員　藤原隆正　矢吹一彦　橋本芳治
由緒沿革　創建は興国三年で、本国総社神名帳に正五位下沼田明神と記載してある。備前国式内外古社一二八社の一である。旧鳥取郷の一宮で維新前迄は藩主池田家より社領米一石四斗九升五合の寄進があった。中古野原八幡宮と称したが、明治二年旧号に復し沼田神社と称した。

八幡宮　旧村社

赤磐郡吉井町仁堀中五〇

主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后



例　祭　十月十五日　**境内地**　五、五四六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　籠殿　神輿庫
摂末社　松尾神社　金刀比羅神社　貴船神社　日吉神社
氏子数　二〇五戸
宮　司　在里　巍
責任役員　弓元五月　坂本義友　小野　初　藤原　香　水原修爾　野田明雄
由緒沿革　本神社の創建は寛文年間と伝えられている。赤松左馬之助が戦勝を祈願し、霊験者しく、よって老臣梶原景盛に、永享十年三月十五日に本神社を造営させた。備前藩主池田家の崇敬篤く、社領の大字仁堀東、仁堀中より、御検地帳立で一石二斗九升を寄進した。
崇敬者数　四五〇人

八幡宮　旧村社

赤磐郡吉井町福田九七三

主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后
例　祭　十月十五日　**境内地**　一、一〇二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　春日神社　巻神社　稲荷神社　姫神社
氏子数　六〇戸
責任役員　中原長九郎　平井軍一　平井靖夫　田渕艶太
由緒沿革　創建は明暦二年八月二日で福満池の西山麓に、南東に面して奉祀する。御神像の銘に、「赤坂郡之内福多村之住人施主田渕伊右衛門、明暦二年八月吉日」とある。

八幡宮　旧村社

赤磐郡山陽町下仁保八二三

主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后
例　祭　十月十七日・十八日
境内地　一、二一四・七五坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　神輿庫
摂末社　疫隅神社　稲荷神社
氏子数　七五戸
宮　司　矢田勘一
責任役員　小坂鹿之助　花房信助　小坂忠義　大野武男
由緒沿革　創建年月・由緒等は不詳である。

八幡宮　旧村社

赤磐郡赤坂町山口七

主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后

例　祭　旧八月十五日　**境内地**　一、六〇四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　七五戸
宮　司　矢田　堅
責任役員　小坂寿男　小坂文男　田中昭次
由緒沿革　天保五年十一月に鳥居を建立。明治二十九年八月に御本殿の葺替をした。熊野神社大祭の当日御神幸渡御神事を行う相宮である。創建年代は不詳である。

八幡宮　旧村社

赤磐郡瀬戸町江尻一六八

主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后
例　祭　十月九日
境内地　一、〇〇八・五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　稲荷神社　荒神社　素盞嗚神社　保食神社
氏子数　六〇戸　**崇敬者数**　七〇人
宮　司　青江貞夫
責任役員　塩見　博　横山範雄　峰政茂已　荒島　薫
由緒沿革　創建年代不詳である。毎年一月十三日に（明治四十二年までは陰暦十二月十三日）氏子の家で、本神社所有の神田から収穫した米で、濁酒を醸造し盛大な稲尾行事があったが、酒造税発布により濁酒を廃して、清酒で行事を執行した。

八幡宮　旧村社

赤磐郡赤坂町北佐古田一一四〇

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
境内地　一、六五七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　鳥居
摂末社　稲荷神社　天神社　山王社
氏子数　一三戸　**崇敬者数**　四〇人
責任役員　時本信男　時本豊太　古矢　保
由緒沿革　創建年月は不詳。宝暦十二年に御本殿を建立した。もと津野尾八幡宮と称したが、明治二年に八幡宮と改称した。

八幡宮　旧村社

赤磐郡山陽町和田二五〇

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月二十一日　**境内地**　三三五坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿
摂末社　龍神社
宮　司　佐藤忠男
責任役員　阿部正信　井上正男　横田英雄
由緒沿革　創建年代は元禄二年であるが、由緒等は不詳である。

代々廟社
氏子数　五二戸　**崇敬者数**　一七〇人
宮　司　藤井勝見
責任役員　湯原英一　赤田間喜男　繁松五六　大深起資
宝　物　大金幣一　薙刀一
由緒沿革　天暦二年に神告があり、村民の八郎が発起し、資金を奉斎して、山城国男山八幡宮の幸魂を奉迎し、稲妻山に御鎮座の稲田姫命の祠に合祀した。その年疫病が流行したが、忽然と消除して霊験が著しかった。永正六年八月御社殿を改築し、以来稲妻八幡宮と称し、広く氏子守護神として鎮斎した。明治維新の時に稲妻の文字を除いて、八幡宮と改称した。

八幡宮　旧村社

赤磐郡赤坂町惣分二三四二

主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后
例　祭　十月十四日・十五日
境内地　七四七・八一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　鳥居
摂末社　稲荷神社　土祖神
氏子数　八戸　**崇敬者数**　五六人
宮　司　藤井勝見
責任役員　常安明夫　小坂　操
由緒沿革　創建年代不詳。文安三年の懸仏がある。天保三年に御本殿を建立した。

八幡宮　旧村社

赤磐郡赤坂町惣分九〇四

主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后
例　祭　十月十五日
境内地　三、一三一・二四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　鳥居
摂末社　稲荷神社　疫神社　地神塔　荒神社　社司
代々廟社
氏子数　五二戸　**崇敬者数**　一七〇人
宮　司　藤井勝見
責任役員　行正利隆　行正藤一　森下音五郎　豊田一夫
由緒沿革　創建由緒等は不詳。本殿は明暦三年に建立。安永七年建替。

八幡宮　旧村社

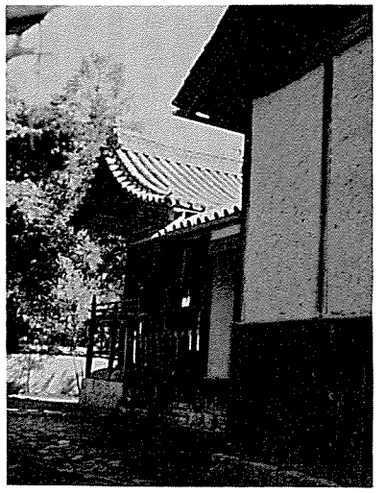
赤磐郡赤坂町大屋四二八

例　祭　十月十四日・十五日
境内地　七七六・三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　鳥居
摂末社　天津神社　稲荷神社　祇園神社
氏子数　三五戸　**崇敬者数**　一五〇人
宮　司　藤井勝見
責任役員　行正藤一　森下音五郎　豊田一夫
由緒沿革　創建由緒等は不詳。本殿は明暦三年に建立。

八幡宮　旧村社

赤磐郡山陽町日古木七六七

主祭神　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月十八日　**境内地**　八二一・七二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　荒神社
氏子数　七〇戸
宮　司　佐藤忠男
責任役員　井原弘人　梅井信一　行本　均
由緒沿革　創建年月は元禄二年であるが、由緒等は不詳である。



八幡宮　旧村社

赤磐郡山陽町穂崎二〇九九

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月十日
境内地　一、〇八七・一二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　祇園神社　天神社　荒神社
氏子数　一七〇戸
宮　司　佐藤忠男
責任役員　道満宣威　佐藤富郎　高見　守
由緒沿革　創建年代・由緒等は不詳である。

八幡宮　旧村社

赤磐郡山陽町馬屋九九〇

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后

例　祭　九月三十日　境内地　六〇〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社
氏子数　一五〇人
宮　司　大橋基八
責任役員　太田直太　大森清一　石遠政人
由緒沿革　創建年代は弘安三年である。由緒等は不明である。

八幡宮　旧村社

赤磐郡吉井町周匝一六二一

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月十五日　境内地　六〇・四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　稲荷神社
氏子数　二三五人
宮　司　景山晃夫
責任役員　加納　鎮　篠田隆一　延原正之助
由緒沿革　本神社は天正年間に、本郡周匝郷黒本字榊葉に御鎮座の氏神を、茶臼山城主笹部勘介が居城を構えた時に、本神社を尊崇して城下に御遷坐した。笹部氏は緋威の鎧一領、外に紫紺威鎧に副太刀（久国）一口を奉納した。応長八年池田忠継公より代々本神社を尊崇して社領を寄進した。

八幡宮　旧村社

赤磐郡吉井町草生三八三

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后

例　祭　十月十五日　境内地　四五〇坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　四七人
責任役員　楢原延太郎　楢原友太郎　小川佐多次
由緒沿革　赤磐郡誌に御祭神八幡三神坐像とある。明治四年に神社の御祭神を確定した時に、慶長年間に八幡宮の御祭神を勧請していたと伝えている。

八幡宮　旧村社

赤磐郡熊山町勢力六七八

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月十七日　境内地　三一二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　釣殿　随身門　神庫
摂末社　稲荷神社
氏子数　四、二五〇人
宮　司　三原倉四郎
責任役員　南　秋夫　矢部　巌　寺見正証
由緒沿革　創建年代は不詳である。往古は大谷八幡宮と称したが、安元二年に遷座し、大字の勢力・千体を氏子区域とした。明治二十四年四月に山陽鉄道布設により現地に奉遷し、現在に至っている。

八幡神社　旧村社

赤磐郡瀬戸町菊山九七九

主祭神　足仲彦命　息長帯比売命　誉田別尊
例　祭　十月十日　境内地　一、一八六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　荒神社
氏子数　三〇戸
宮　司　佐藤忠男
責任役員　井本芳男　松本美作　小坂二夫
由緒沿革　創建年代は不詳であるが、寛文元年に再建せられた。由緒等は不明である。

例　祭　十月十五日　境内地　四五〇坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　四七人
責任役員　楢原延太郎　楢原友太郎　小川佐多次
由緒沿革　赤磐郡誌に御祭神八幡三神坐像とある。明治四年に神社の御祭神を確定した時に、慶長年間に八幡宮の御祭神を勧請していたと伝えている。

八幡宮　旧村社

赤磐郡熊山町勢力六七八

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月十七日　境内地　三一二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　釣殿　随身門　神庫
摂末社　稲荷神社
氏子数　四、二五〇人
宮　司　三原倉四郎
責任役員　南　秋夫　矢部　巌　寺見正証
由緒沿革　創建年代は不詳である。往古は大谷八幡宮と称したが、安元二年に遷座し、大字の勢力・千体を氏子区域とした。明治二十四年四月に山陽鉄道布設により現地に奉遷し、現在に至っている。

八幡神社　旧村社

赤磐郡瀬戸町菊山九七九

主祭神　足仲彦命　息長帯比売命　誉田別尊
例　祭　十月十日　境内地　一、一八六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　荒神社
氏子数　三〇戸
宮　司　佐藤忠男
責任役員　井本芳男　松本美作　小坂二夫
由緒沿革　創建年代は不詳であるが、寛文元年に再建せられた。由緒等は不明である。

例　祭　十月十八日　境内地　一九八・九七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　稲荷神社　神武天皇社　若宮　蚕養神社
山神社　荒神社
氏子数　八一六人
宮　司　三原倉四郎
責任役員　伊久幾男　寺尾恒彦　伊久輝道
由緒沿革　創建年代は不詳である。熊山山脈の宮ヶ鼻の山上の鎮座であったが、正治元年に現在地に遷宮した。九州の宇佐八幡宮の御分霊を勧請したとの棟札がある。明治初年から八幡宮と称し尊崇した。弓削及び対岸の二日市の産土神である。

八幡和気神社　旧郷社

赤磐郡熊山町佐古六八五

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月十五日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　絵馬殿　社務所
摂末社　稲荷神社　荒神社　日吉神社　榎本荒神社
石山八幡宮　護王神社
氏子数　一、二五〇人　崇敬者数　二五〇人
宮　司　小森一郎
責任役員　小林元重　佐々助一　横谷一男
由緒沿革　延暦三年に和気清麻呂公が、豊前国宇佐八幡宮を勧請して創建した。備前総社神名帳に記載の式内外古社一二八社の一で、古来石生郡総鎮守祈願所であった。和気清麻呂卿の第五子真綱が宮司となり、その子孫代々が宮司として近世に至り、縁故者相継ぎ現在に至っている。備陽国誌に浦上正宗が田地五町八段を寄進、天文年間に小野田城主の先祖小野田宗右衛門尉茂行が社殿を再興、寛文七年に池田光政公が鳥居を寄進したとあり、棟札が現存している。本殿は元和九年・明暦二年・寛文七年に改築した。社名はもと八幡和気神社と称したが、中古に八幡大菩薩和気宮又は八幡宮と称したが、明治二年に八幡和気神社に復称した。

八幡和気降居神社　旧村社

赤磐郡熊山町岡六〇八

主祭神　天児屋根命

例　祭　十月二十日　境内地　七七〇・九九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　荒神社
氏子数　二六四人　崇敬者数　四六人
宮　司　小森一郎
責任役員　横谷一男　行本縫一　実盛武四
由緒沿革　創建年代は不詳である。往古は王子権現と奉称したが、明治三年に八幡和気降居神社と改称した。本神社は本郡熊山町佐古に鎮座の八幡和気神社の降居の宮であったと伝えている。明治四十年九月十三日に山林一段九畝二十八歩を境内に編入した。

堰爪神社　旧村社

赤磐郡瀬戸町万富一一二九

主祭神　堰爪神
例　祭　十月十日　境内地　七四二・六坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　五〇戸
宮　司　矢田　堅
責任役員　居郷保當　土井和正　堤一二三
由緒沿革　本国総社神明帳に、堰爪神社という式外神社預国幣百五社の内で、旧社号は堰爪神社である。中古以来熊野権現、明治二年には熊野神社と号したが、明治三年に旧社号に復した。後醍醐天皇が隠岐国に遷らせ給う時に、赤松則村が此の処に十二社権現を勧請して、天皇の幸多き事を御祈願したのが、此の宮の起りである。

日吉神社　旧村社

赤磐郡熊山町石蓮寺七二九

主祭神　大山咋命
例　祭　十月十七日　境内地　二二六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　釣殿
摂末社　稲荷神社　龍神社　荒神社　祇園社　伏見魂神社
氏子数　二一戸
宮　司　矢田　堅
責任役員　小竹森力　小竹森石男　栗原　亨　小野峯一
由緒沿革　建久六年頃の創建らしい。その他は不詳である。

日吉神社　旧村社

赤磐郡瀬戸町江尻四九一

主祭神　大山咋命
例　祭　十月二十日　境内地　八八・二五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
崇敬者数　三八〇人
宮　司　青江貞夫
責任役員　土井貞治　江尻　晋　塩見　博
由緒沿革　創建年代不詳である。本神社の現境内外の一帯を山王山と称したので、神社も旧号を山王宮と称していた。

平野神社　旧村社

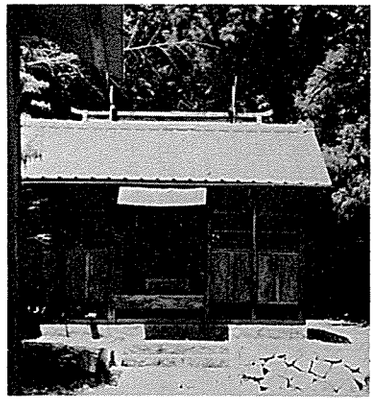
赤磐郡熊山町弥上一二六

主祭神　今木神　久度神　古開神　比売神
例祭　十月九日　**境内地**　二一六・四八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　六〇人
責任役員　大久保濱治　岡本佐太郎　赤井千鶴
由緒沿革　創建は嘉永五年以前である。嘉永五年六月に鳥居を建立。明治二十六年五月一日に本殿・拝殿を建替。明治二十六年九月に本殿屋根の葺替を行った。

布勢神社　旧郷社

赤磐郡吉井町仁堀西一〇二七

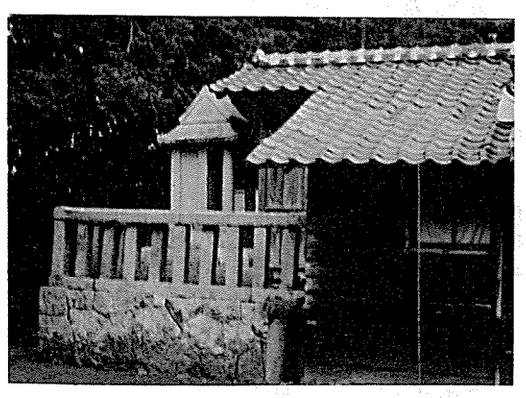
主祭神　大穴牟遅神
例祭　十月十五日
境内地　七、四七七・七九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　籠殿
摂末社　稲荷社
氏子数　六五戸
崇敬者数　二四〇人
宮司　在里　巍　**禰宜**　在里幸宗
責任役員　内田安雄　杉本寿雄　重森　剛
由緒沿革　本神社は延喜式内の旧社。古伝に垂仁天皇の御宇、南海の渡船屢々転覆の難があり、帝、博士に命じて、占わしめ給うに、「こは吉備の国布勢大明神の神威なり、社殿を七谷七畝の山麓に遷し、北面に勧請ありたし」と奏上した。よって現在の山麓の地に勧し、社殿を造営したと伝えている。寛文九年に再建。池田光政公が、本殿を造営した。仁堀庄十ヶ村の大社で、明治六年に郷社に列せられた。



布勢巨神社　旧村社

赤磐郡吉井町中勢実六五

主祭神　事代主命　伊弉冉尊　伊弉諾尊
例祭　十月二十三日
境内地　一、〇六〇・八七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　籠殿　神輿庫
摂末社　海神社　冠者宮　稲荷社　今宮
氏子数　六六戸　**崇敬者数**　二〇〇人
宮司　在里　巍　**禰宜**　在里幸宗
責任役員　岸本竹治　利広高徳　水島一雄
由緒沿革　本神社は本国神名帳に、布勢巨神社。山本氏本に、正四位下布勢巨明神と記載の旧社である。龍天山の山頂の眺望絶佳の地に鎮座せられている。古昔、式内社布勢神社は此の山に御鎮座せられていたが、後世仁堀西に遷された。現在は布勢巨神社のみとなっている。古来祈雨・祈晴・祈穀の神社として著名である。



福山神社　旧無格社

赤磐郡熊山町松木権現谷一九

主祭神　大山祇神
例祭　十月二十一日　**境内地**　六一一・三一坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　荒神社
氏子数　六十六人
宮司　小森一郎
責任役員　内田賢正　畑　清文　内田定一
由緒沿革　創建年代・由緒等は不詳である。

松尾神社　旧村社

赤磐郡瀬戸町瀬戸六七七

主祭神　大己貴命　相殿　松御崎大明神　菅原道真公
例祭　十月七日
境内地　四、五六〇・〇三坪　飛地　四五〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　前殿
摂末社　稲荷神社　祇園宮
氏子数　二一七戸　**崇敬者数**　五八〇人
宮司　青江貞夫
責任役員　片山敦公　片山岸雄　目黒　巌　宗友世志信　高原久夫　田中寿名夫

松尾神社　旧村社

赤磐郡赤坂町坂辺五五七

主祭神　大山咋命
例祭　十月十四日・十五日
境内地　四、九五三・〇七坪
主要建物　本殿（神明造）　幣殿　拝殿　随身門　鳥居（二基）
摂末社　祇園神社　稲荷神社　国司神社　地神社
氏子数　六五戸
宮司　藤井勝見
責任役員　高見三男　岡本　豊　土江　要
宝物　木製獅子　狗犬一対　青銅製大鉾先二
由緒沿革　元享二年に山城国葛野郡鎮座の松尾神社の御分霊を御遷座して、地元十一ヶ村の氏子が協力して創建した。備前国一二八社の内式外旧社である。慶長五年金吾中納言が、この宮に祈願して霊験を感じ、社田四町八反余を寄進せられた。寛文三年火災で焼失。この時に宝物御朱印等も失った。貞享三年に再建。大由緒沿革　本神社は本国総社神明帳に「松尾神社」、山本氏本に「正三位松尾大明神」と記載してある旧社で、備前国式外古社百二十八社の一社である。元禄三年に司官の西崎勝太輔が社領として二反二畝をのこした。文政二年己卯四月に備前国磐梨郡瀬戸村の御崎大明神の境内に、正一位稲荷大明神を安鎮した。天保十四年七月二十四日に神祇官領長侍従卜部朝臣房芳から、西崎亘・藤原保友に神道裁許状が与えられた。

松尾神社　旧村社

赤磐郡山陽町穂崎一七三〇

主祭神　大己貴命
例祭　十月二十二日　**境内地**　五七六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　疫隅神社
氏子数　七〇〇人
責任役員　馬場　伸　安井　清　矢部　栄
由緒沿革　創建年代・由緒等は不詳である。元禄時代の創建らしい。正二年に八幡宮を合祀した。昭和五十一年十月に御本殿の屋根を銅板に葺替えた。明治三十九年勅令第九六号第一番第二項により神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

見上神社　旧村社

赤磐郡熊山町弥上四五〇

主祭神　仁徳天皇　応神天皇　神功皇后
例祭　十月五日・六日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　稲荷神社　毘沙門社

氏子数　四五戸
宮　司　矢田　堅
責任役員　小山清一　久山力男　大石良雄　小田　公
由緒沿革　本神社は石袖式円墳の前に、流造茅葺の御社殿である。古墳の主の礼拝所として発達した神社で、大きな花崗岩が一箇ある。松田左近将監元成の臣、はっぱ弥五郎が此処に落ちのび、此の石に寄りかかって切腹し果てた。村人は此の最期に同情して若宮として祀った。それが見上神社の縁起であると云われている。三代実録に「貞観七年七月二十六日己巳備前国真加山神社・見上神社叙従四位下」とある。

水分神社　旧村社

赤磐郡熊山町酌田六五一

主祭神　天水分神　国水分神　応神天皇
例　祭　十月十三日　**境内地**　一、五七八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　稲荷神社
氏子数　一五〇人
宮　司　赤木美作守
責任役員　末本鹿十郎　末本笑夫　末藤好一
由緒沿革　創建は安永元年以前、子守八幡宮と奉称した。社地は一町二畝。右者池田家蔵書備前国神社書上帳を写した。本社屋根葺替・拝殿建立は安永八年十一月。本社葺替は文化八年五月、文政十年三月、天保五年四月。手水鉢奉献は天保五年四月。本社葺替は安政三年四月。随身門建立は明治十一年。屋根葺替は大正十二年五月。石段及び鳥居建立は昭和六年五月。拝殿改築は昭和九年四月。随身門の改築は昭和二十一年五月。本殿屋根の葺替は昭和二十四年五月である。

神神社　旧村社

赤磐郡瀬戸町肩脊二〇八二

主祭神　大己貴命幸魂
例　祭　十月十五日
境内地　二、〇六一・一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　稲荷神社　荒神社　素盞嗚神社　保食神社
氏子数　二七戸
宮　司　青江貞夫
責任役員　赤松誠一　金光　勇　北山石松
由緒沿革　創建年月は不詳であるが、本国総社神明帳に「神神社」山本氏本に「正四位下神明神」と記載する旧社で、備前国式外社百二十八社の一である。

宗形神社　旧村社

赤磐郡赤坂町北佐古田八七五

主祭神　奥津島比売命
例　祭　十月二十四日　**境内地**　三四〇坪
主要建物　本殿　幣殿　随身門
氏子数　三三戸
宮　司　吉田三郎
責任役員　竹内林太郎　若林　好　清野甲重
由緒沿革　創立年月日・由緒不詳。

宗形神社　旧縣社

赤磐郡吉井町是里二三五

主祭神　大己貴命幸魂　少彦名命　多紀理毘売命　市寸嶋比売命　田心比売命　大己貴命　大日雲命　豊宇気比売命　須佐之男命　菅原神　速玉男之命　伊邪那美命　事解男命　大山咋命
例　祭　十月十六日　**境内地**　四、九三一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神庫　神供所　神楽殿　社務所
摂末社　稲荷神社　香椎神社　竹内神社　武内神社　一位神社　新田神社
氏子数　九〇〇人　**崇敬者数**　一三〇人
宮　司　門野幸得
責任役員　是松常次郎　奥本正夫　荒島弥太郎
由緒沿革　本神社は崇神天皇の御代に勧請した、式内の旧社である。仁徳天皇が吉備国海部直女黒比売を寵し、本国山方の里に行幸させられた時に、黒比売は本神社に奉迎し奉った。帝は欣然として御製に「やまかたにまけるあをなもきひひと、ともにしつめはたぬしくもあるか」と詠み給うた。これにより現在に至るまで、諸人は山方の大宮と称するようになった。当時帝から宗形神社の神領として神地三四町、神戸若干を寄進せられた。よって今に其地名を京免及び神戸と呼んで

いる。池田忠継公は慶長九年検地の節に村内の中田二反高三石二斗を社領として寄進せられた。暦代の天皇の御崇敬厚く、神位従四位上に叙せられ後正一位に昇進贈位せられた。現在の社殿は貞享五年五月十六日に竣工落成した。国主池田綱政公が再建資として玄米拾石を寄進した。往古、氏子は七十五ヶ村あり、その区域は西南は本郡の山陽町、東北は津山市に至っていた。古式祭には社家から神酒七十五樽・神饌七十五膳・神餅七十五台・甘酒二瓶を献供する例であった。現在に至るまでこの旧式を斎行している。明治十四年十二月二十二日に県社に昇格した。

山上龍神社　旧村社

赤磐郡吉井町合田四〇四

主祭神　高龗神
例　祭　十月二十日　**境内地**　六七四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　鳥居
摂末社　稲荷神社
氏子数　一九戸
宮　司　藤井勝見
責任役員　藤原義一　藤原　巌　藤原次男　中島　弘
由緒沿革　御鎮座の年月日は不詳であるが、正徳二年・天保十五年及び明治十年の棟札がある。備前藩主池田家から社領の寄進があったという。口碑によると本神社の東方約四丁の山上に岩石が重畳している。その巨岩の上に白幣が降臨したのを、現在地に御社殿を建立して奉斎したという。後世神懸りのあった其岩で本社の他に、一社の鳥居を建立した。龍神社と称していたのを山上龍神社と改称した。

湯山神社　旧村社

赤磐郡赤坂町山手六〇〇

主祭神　大己貴命　少彦名命
例　祭　十月十四日・十五日
境内地　一、三六九・六九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　随身門　鳥居
摂末社　出雲神社　稲荷神社　祇園神社　地神
氏子数　三四戸　**崇敬者数**　一四〇人
宮　司　藤井勝見
責任役員　佐々木広志　林　栄　佐々木静市　井上一
宝　物　獅子　大鼓
由緒沿革　創建年代は不詳であるが、総社神明帳に湯山神社、山本氏本に従四位下湯山神社と記載してある。この神社は昔湯山部落の御祭神であったが、中古、津野尾八幡宮に合併し湯山神社と称して、村の東方に御社殿を建立した。社殿は南西面に、流造銅板葺である。御本殿の建立は嘉永元年である。

和田神社　旧村社

赤磐郡山陽町和田四五三

主祭神　海神
例　祭　十月二十一日　**境内地**　二一・五七
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社
氏子数　一四戸
宮司　佐藤忠男
責任役員　小坂為三郎　社　安彦
由緒沿革　創建は元禄三年であるが、由緒などは不詳である。

正月

太古祖先は正月のことを「オリメ（折目）」といって、旧暦一月十五日に当る満月の日を元旦として、祝祭の行事を行っていた。

太陰暦は支那から約一千年前に渡来し、一月を正月とし、一日を元日として六・七日頃までを大正月として祝った。また一月十五日を中心に、小正月として祝う風習がつゞいていた。

明治になってから官公庁・学校を中心に、新正月を祝うようになった。

正月にまつる神様は天照大御神、年神、産土神である。

正月の行事は民族本来の「オリメ」の行事としてこの神々をお祭りするのである。

門松

正月に門松を立てるのは、神様をお迎えする依代（よりしろ）である。雌雄の松を枝の数三、五、七と数えて切ってたてる。青竹や梅を添え、根元に砂を盛る等は近頃の風習であり、又印刷物で代用している地方もある。

注連飾（しめかざり）

しめなわは、神前又は神事を行う所に引いて、清浄な場所として区切るのに用いる。左よりにない、藁すべを三、五、七とたれ、紙四手（しで）をその間にはさむ、中央に昆布・裏白のしだ、ほんだわら、橙等をつけるのが、正月の注縄飾りである。

正月行事

神床に伊勢神宮の大麻（たいま）、氏神様のお札を祭り、門松を立て、注連飾を飾って正月を迎えるのが本来の姿である。

夏祭

夏は四季のうち、万物の最もよく成長する時である。この万物の成長を神様の御恩頼によるものと感謝の誠を捧げ、今後大雨・台風の害がなく、立派に成長し豊穣な収穫を祈願すると共に、暑気が酷しい折柄、神様の御加護によって身体の壮健を祈願する祭典である。

神社では夏六月三十日と、冬十二月三十一日とに大祓の神事を斎行する。

この祭典は、日々の生活の中で、思いがけなく犯した罪・穢を祓い清めて、すが〳〵しい心身になる行事である。古来よりうけついだ伝統のある祭典である。神道では、祓の行事は除災・病気平癒の祭典である。現今では、夏の大祓と夏祭とを同時に執行っている神社が多い。

夏まつりに茅の輪くゞり、人形の使用は、祓の行事を行って心身を清める神事である。

和気・備前支部（五九社）

天津神社 備前市伊部六二九……一七一
天石門別神社 和気郡佐伯町岩戸六五五……一七一
伊勢神社 〃 和気町保曽一六六〇……一七一
井田神社 備前市穂浪八三九……一七一
石立神社 〃 麻宇那一二六〇……一七二
石長姫神社 〃 香登西二七六……一七二
石根依立神社 和気郡和気町原七六一……一七二
宇佐八幡宮 〃 佐伯町米沢三六六……一七二
宇佐八幡宮 備前市西片上一……一七三
恵美須宮 〃 西片上一八七一……一七三
大内神社 〃 香登本一二四九……一七三
大瀧神社 〃 大内九四九……一七四
御崎神社 和気郡佐伯町苫木三一一……一七四
鏡石神社 備前市八木山七五七……一七四
春日神社 和気郡日生町大字日生一一八〇……一七四
春日神社 〃 日生町大字大多府三……一七四
春日神社 〃 吉永町大字吉永中四七……一七五
春日神社 〃 和気町田原一三四八……一七五
金彦神社 〃 吉永町大字金谷三七〇……一七五
木木須神社 備前市 伊部四五〇……一七五
履掛天神宮 〃 伊部一五五九……一七五
熊野神社 和気郡和気町本一二二八……一七六
荒神社 備前市穂波二三三五……一七六
荒神社 和気郡吉永町大字福満一〇六四……一七六
荒神社 備前市三石二二一……一七六
神根神社 和気郡吉永町神根一一四七……一七六
山神社 備前市伊里中五三七……一七七
閑谷神社 〃 閑谷七四八……一七七
正八幡宮 和気郡吉永町大字吉永中四八……一七七
素盞嗚神社 〃 佐伯町北山方一八七六……一七七
住吉神社 備前市穂波三〇四三……一七七
滝谷神社 和気郡吉永町大字多麻一三四三……一七八
天神宮 備前市福田九八二……一七八
天神宮 〃 畠田九三六……一七八
天神社 〃 友延二……一七八
天神社 〃 木谷八……一七九
天神社 和気郡吉永町大字南方五二七……一七九
天神社 〃 吉永町大字岩崎一八四……一七九
天神宮 〃 吉永町大字三股一九九……一七九
長田神社 〃 和気町日笠下二七……一七九
八幡宮 〃 日生町大字日生八〇四……一八〇
八幡宮 〃 佐伯町南山方五八二……一八〇
八幡宮 〃 佐伯町矢田一一八〇……一八〇
八幡宮 〃 佐伯町塩田二五九……一八〇
八幡宮 備前市坂根五六……一八〇
八幡宮 〃 新庄一六一四……一八〇

八幡宮　和気郡保曽一〇二四……一八一
八幡宮　〃　和気町益原一一九〇……一八一
八幡宮　〃　和気町吉田二五〇一……一八一
八幡宮　〃　日生町大字寒河一〇二二……一八一
八幡宮　備前市浦伊部一五……一八二
八幡宮　〃　久々井五三八……一八二
八幡宮　〃　三石三二一六……一八二
日吉神社　和気郡吉永町大字加賀美一二〇九……一八二
福神社　備前市閑谷二〇九……一八二
松村神社　和気郡和気町田原下一三六三……一八三
水行谷神社　〃　和気町大中山一九九四……一八三
由加神社　〃　和気町大田原四三八……一八三
和気神社　〃　和気町藤野一三八五……一八三

千木

社殿の屋上、破風の両端に交叉している角のような木を、千木という。また比木とも、片削とも云っている。風切穴である長方形の穴をあけてある。

伊勢神宮の内外宮の千木は、内宮は千木の内を削ぎ、外宮は千木の外をそいでである。

堅魚木

社殿の棟の上に、太く短かい円形の棒を並べて置いてあるのを、「かつをぎ」といゝ、堅緒木・葛緒木・堅魚木・堅木と書くが、また斗木とも云っている。

古事記伝には、「堅魚は屋上なる堅魚木なり。カツヲといふ名はカタウヲの切りたるにて、屋上に置くカツヲギもその形の鰹節に似たる故の名なり。大神宮儀式帳に、堅魚十枚（長さ各七尺、径一尺七寸）材木の両端は金を以て銜るとあり、本は風防ぎの為にて、貴き賤しきおしなべてあるものなると、やゝ世移りては、天皇の御殿などのは、おのづから銜りとなりて、こよなく荘厳かりけむ」とある。

相殿（あいどの）

神社で一社殿に主神のほか一柱以上の神を合祀する場合、本殿の二間を一つに合わせて造った社殿を相殿または相殿造と言い、その祭神を相殿神という。

相殿神には二柱以上共に主神であるときと、一は主神、他は配祀神のときとがある。相殿神は主神に対する配神のことで、待遇は一段下がるのが通例である。

天津神社（あまつ）　旧村社

備前市伊部六二九



主祭神　少彦名命　菅原道真公
例祭　十月二十六日　**境内地**　四三三・三〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　随身門　神門　倉庫
摂末社　稲荷神社　素戔嗚神社　神武神社　阿須波神社　祈雨神社　奥田神社　保食神社
氏子数　六〇〇戸
宮司　日幡直之　**禰宜**　日幡行雄
責任役員　中村才八　佐藤晋　木村強　前嶋敏男　若林一利
宝物　豊臣秀吉奉納国次刀剣（市重要文化財）　延宝六年棟札
特殊神事　神幸祭　獅子舞　相撲大会
由緒沿革　本神社の創建年代は不詳。応永十八年以前であることは古老の口碑に徴して明かである。本神社は往古浦伊部に鎮座していたのを神託によって天正七年現在地に遷座した。延宝六年七月、社殿を改造。社領高四石七斗は池田家墨印地畑から寄附せられた。大正十年十月二十四日神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

天石門別神社（あめのいわとわけ）　旧村社

和気郡佐伯町岩戸六五五

主祭神　天手力男命　菅原道真公
例祭　十月十四日　**境内地**　二三八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社
氏子数　一三二戸
宮司　入矢静太
責任役員　畑本知一　松本志真夫　須波銀治　中西太郎　長宗菅志　浦上良隆
由緒沿革　本神社の創建は不詳であるが、往古天神山嶺上に鎮座していた。天津社と称し、本村岩戸、田土、龍ヶ鼻等の産土神で備前国神名帳（総社本）に天石門別神社とある。山本氏本に正五位下天石門別明神とある。当国百二十八社の一である。天文二年領主浦上遠江守宗景が、この地に城を築くため、神社を山麓即ち現在の所に遷座した。

伊勢神社（いせ）　旧村社

和気郡和気町保曾一六六〇

主祭神　天照大神　豊受大神
例祭　十月十六日　**境内地**　三七五・七三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　八幡宮　荒神社　天神社
氏子数　五八戸　**崇敬者数**　二〇五人
宮司　行正瑞穂
責任役員　高原延一　木庭一郎　谷口要　高原一男
由緒沿革　本神社は伊勢神宮の御祭神天照大神、豊受大神を祀している。古名は天照大神宮と称し、後陽成天皇の御宇慶長十四年伊勢両皇大神宮から御神霊を勧請して創建した。霊元天皇の御宇、延宝八年再建。また寛文二年九月正徳二年五月、宝暦八年八月造営の棟札がある。後、社名を伊勢神社と称し社領高四斗二升で、宮地は山林共に五反余ある。明治四十三年に近辺の神社三社を合祀した。

井田神社　旧無格社

備前市穂浪八三九

主祭神　少童神

例　祭　十月　日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　貴布禰神社　矢坂神社　淡島神社　稲荷神社　天神社
氏子数　八〇戸
宮　司　宮宅林平
責任役員　藤原忠夫　花岡三郎
由緒沿革　芳烈公が井田御開発の節、寛文元年（丑）三月、村中の信仰によって、仲提海中石を祭神と奉称した。其の後、文化十年（酉）三月に西京の土御門家より木像を勧請し奉斎した。昭和二年七月十八日不慮の火災により全社殿を焼失した。昭和五年五月十八日氏子の協力によって再建し今日に至っている。昭和十九年に龍神社を井田神社と変更した。昭和二十年天神社の飛地境内神社と成ったが、昭和五十四年独立して井田神社として設立した。

石立神社　旧郷社

備前市麻宇那一二六〇

主祭神　石立神　武甕槌命　経津主神　天児屋根命
例　祭　十月二十六日　**境内地**　七、二四〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　釣殿　社務所
摂末社　重岩権現　祇園宮　稲荷神社　山神社　伊勢神社
氏子数　五〇〇戸
宮　司　宮宅邦男　**禰　宜**　宮宅安秋
責任役員　藤巻正一　山本光男

由緒沿革　本神社の創建は建保以前という。備前国神名帳には正五位下石立明神とある。口碑によると、大石の霊異を感じ、これを神石として社殿を造営し、石立神社と称した。建保年間姫大神外三神を奉斎して春日明神と称した。応永二十二年再興、寛文七年池田光政が造営。現在の本社は元禄八年の再興。寛文年中から明治維新まで池田家から弐石七斗を受けた。慶応四年春日神社と改めたが、明治三年石立神社と旧の名に改めた。明治六年郷社に列格した。

石長姫神社　旧村社

備前市香登西一七六

主祭神　磐長姫
例　祭　十月二十三日　**境内地**　三二九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　社門　倉庫
摂末社　稲荷神社　外四社
氏子数　九〇戸　**崇敬者数**　六〇人
宮　司　吉田重敏
責任役員　矢田太郎　石原周一
由緒沿革　創建年代不詳。寛和二年の再興。元大将軍と奉称したが、明治二年三月官許を得て、石長姫神社と改称した。

石根依立神社　旧村社

和気郡和気町原七六一

主祭神　石根依立神　応神天皇　神功皇后　軻遇突智命　大己貴命　素盞嗚尊
例　祭　十月十九日・二十日
境内地　二、一七五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　稲荷神社　日枝神社　金刀比羅宮　熊野神社
氏子数　一三〇戸
宮　司　矢田　堅
責任役員　近藤知喜　中原柾司　近藤　勉
由緒沿革　本神社の創建年代は不詳。本国神名帳（総社本）に石根依立神社、山本氏本に従五位上石根依立明神と記されている旧社である。石根依立神は本郡の国魂である。境内に奇霊石、境外に石御神、夫婦石等がある。明治四十三年、村の東端にあった箱崎大明神を合祀した。当社から西の路傍に径三米ばかりの大石がある、その傍に長方形の自然石があり、石神という。

宇佐八幡宮　旧郷社

和気郡佐伯町米沢三六六

主祭神　応神天皇　外八社（豊前国宇佐八幡宮）
相殿磐梨郡式内外三十九社神
例　祭　十月六日　**境内地**　一、五五七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　随身門　神庫　神輿庫　社務所
摂末社　土田神社　御年神社　和気神社　金刀比羅神社　由加神社　稲荷神社　秋葉神社　粟島神社　雨引神社
氏子数　四八〇戸

宮　司　入矢静太　**禰　宜**　入矢武彦
責任役員　吉田猛夫　遠藤敏久　中村照太郎
宝　物　建武二年縁起巻　宝亀二年、文治四年、正平十七年棟札外三面
特殊神事　御輿渡御
由緒沿革　旧社地は片山にあり、神社名は神村山神社で、本神社は弘仁三年、一里四方の殺生を禁止。天平十年、墾田百五十九町歩を神田として奉納。承和十三年神宮を十二名と定めた。永禄四年二月、城主浦上宗景が社地・神田を没収し、神社を現在地に奉遷した。桓武天皇から総社の二字額を賜わり、池大納言が豊前国宇佐八幡宮から八幡神を勧請し、総社宇佐八幡宮を社号とした。

宇佐八幡宮　旧村社

備前市西片上一

主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后
例　祭　五月十日　**境内地**　四八一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　門守殿　宝物殿　御輿倉　社務所
氏子数　一、二〇〇戸
宮　司　松末日出子　**禰　宜**　松末啓輔
責任役員　梶田武男　松浦　泰　和気高策
由緒沿革　本神社は延元元年の創建である。後醍醐天皇の御宇、足利尊氏が多々良浜合戦の時、宇佐八幡宮に参籠して武運を祈り、ために勝利を得ることができた。東上の途中当所字富田松山に宇佐八幡宮を勧請した。応永元年に　和鹿林山頂に遷座し、正保三年に現在の地に遷座した。足利尊氏が神田五十余町歩を寄進している。寛永十一年から維新まで池田氏から毎年八石九斗九合の寄進を受けた。

恵美須宮　旧無格社

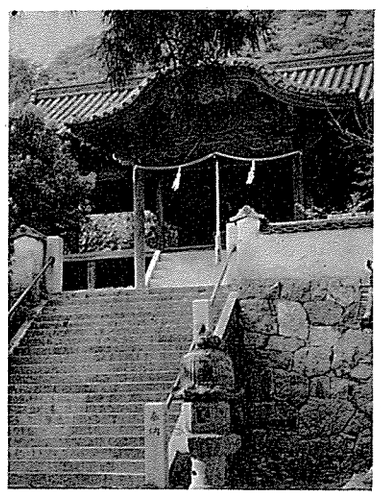
備前市西片上一八七一

主祭神　蛭児命
例　祭　二月十日　**境内地**　一、一二〇坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿
摂末社　いぼ神様　若宮
氏子数　一、二〇〇戸
宮　司　松末日出子
責任役員　梶田武男　松浦　泰　和気高策
由緒沿革　本神社の創建年代は不詳であるが、始め西片上に鎮座していたのを現在の地に奉遷したらしい。かっては福徳の神、海上安全、大漁祈願の人々が多く中国、四国、遠くは大阪方面からも参拝者があった。本神社は内座長浜にあって、南面は海に臨んでいたが、片上鉄道の開通により神社の風格を害し、危険であるため、昭和八年現在の地に移転した。

大内神社　旧郷社

備前市香登本一二四九

主祭神　大山津見神　大市比売神　木花之佐久夜毘売神　大香山戸臣神
例　祭　十月二十三日　**境内地**　八八八坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　社門　随身門　社務所
摂末社　武内稲荷神社　外十社
氏子数　二三〇戸
宮　司　吉田重敬
責任役員　伊永一之　小林敏男　楠原清馬
由緒沿革　創建年代不詳。大宝年中香登臣秦大兄が修繕をしたと社記にあるので、千二百五十年以前の創建であろう。備前国内神名帳に、正二位大内神社、その他の神名帳に、従二位大内大明神、四社大明神、春日四社大明神、大内神社等とある。明治二年官許を得て名称を大内神社と定めた。明治五年、郷社に列した。大正十年十月に神饌幣帛料供進神社に指定せられた。



大瀧神社　旧村社

備前市大内九四九

主祭神　岡象女神　菅原道真公　油滝神　比売神
例祭　十月二十五日　**境内地**　八九一・四七坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　随身門　社門
摂末社　稲荷神社　外六社
氏子数　九五戸　**崇敬者数**　一〇〇人
宮司　吉田重敬
責任役員　一井　勉　友光午夫
由緒沿革　創建年月不詳。大正九年十二月十五日の許可により村社天神社、同油滝神社、同姫神社、を大滝神社に合祀し、もとの天神社境内に移転した。もと大滝神社は備前国内神明帳に、「従四位大滝大明神」と記してある。大滝という山嶺の飛泉の傍に鎮座しているので大滝神社と尊称した。

御崎神社　旧村社

和気郡佐伯町苦木三一一

主祭神　天之御中主神　瀬織津姫命　宇迦御魂命　素盞嗚尊
例祭　十月八日　**境内地**　二〇一・七二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿

摂末社　稲荷神社　荒神社
氏子数　三二戸
宮司　入矢静太
責任役員　高坂丑之助　高田　肇　高原　照
由緒沿革　本神社は、もと大字苦木林谷の地に奉斎していたが、明治十九年に現在の地に遷座した。明治四十年八幡宮、河瀬神社を合祀した。

鏡石神社　旧村社

備前市八木山七五七

主祭神　火星照命
例祭　十月十二日
境内地　六、〇四一・六七坪
主要建物　本殿　拝殿　社務所
摂末社　広高神社　真心堂
氏子数　三二〇人
宮司　八木良実
責任役員　江見恒夫　菊政静雄　池田光政奉納大太刀
宝物
由緒沿革　創建年月・由緒不詳。

春日神社　旧郷社

和気郡日生町大字日生一一八〇

主祭神　武甕槌命　斎主命　天児屋根命　姫大神
例祭　十月二十五日　**境内地**　五九二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　荒神社　金刀比羅神社　恵美須神社　天神社　龍神社　素盞嗚命神社
氏子数　七五戸　**崇敬者数**　二〇〇人
宮司　那須正彦　**禰宜**　那須正尚

春日神社　旧村社

和気郡日生町大字大多府三

主祭神　武甕槌命　斎主命　天児屋根命　姫大神
例祭　十月十五日　**境内地**　一、〇五二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　倉庫　社務所
摂末社　恵美須神社　稲荷神社　天神社　祖霊社（靖国神社）
氏子数　二、〇〇〇戸　**崇敬者数**　七、〇〇〇人
宮司　那須正彦　**禰宜**　那須正英
責任役員　有吉　賢　星尾正一　橋本豊治
宝物　神鏡二面　社記一　大刀一　弓一　獅子一対
特殊神事　御輿御神幸
由緒沿革　嘉吉年間の創建。もと宇宮谷に勧請したのを嘉吉年中旧領主赤松氏が今の地に遷し再建した。もと日生神社、厳島神社といったが、後、春日神社と改めた。旧領主の赤松氏、宇喜多氏、池田氏の尊崇深く、境内除地、神田、社領太刀等の寄進があった。明治十七年三月郷社に列格。明治四十年一月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

責任役員　寺下義弘　木羅六郎　亀井和三治
宝物　鏡二面　太鼓
由緒沿革　宝永三年邑久郡邑久郷村鎮座の春日神社を勧請し、翌四年建立。那須帯刀を祠官に命じ、同年六月十日正遷宮し、安政三年四月九日、百五十年祭を奉仕して現在に至っている。

春日神社　旧村社

和気郡吉永町大字吉永中四七

主祭神　天児屋根命　武甕槌命　経津主命
例祭　十月二十日
境内地　一、六三四・六坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　向拝　絵馬殿　随身門
摂末社　注連神社　愛宕神社
崇敬者数　一、八〇〇人
宮司　新庄章二
責任役員　安東稔夫　森本　勉　武元猛男
由緒沿革　本神社の創建年代不詳。中古は注進春日大明神、また注進大明神と称し、正和四年九月十日の相撲田楽および流鏑馬の数番を列記した田楽板がある。社領は、寛永十一年、岡山藩主池田光政以来、畑高七斗の寄進があった。

春日神社

和気郡和気町田原一三四八

主祭神　武甕槌神

例祭　十月十八日　**境内地**　二二七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
由緒沿革　創建年代・由緒不詳。

金彦神社　旧村社

和気郡吉永町大字金谷三七〇

主祭神　金山彦命　軻遇突知命　素盞嗚尊　大山祇命　大国主命
例祭　十月十五日
境内地　一、二三九・〇三坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿
神饌所　絵馬殿　神庫
摂末社　国司神社　稲荷神社
氏子数　三〇〇戸　**崇敬者数**
宮司　新庄章二
責任役員　中柄一馬　三村千年　大饗笹男　高橋誠一　有吉晋太
由緒沿革　本神社の創建年月・由緒等不詳である。本国総社帳に金彦神社、山本氏本に正五位下金彦明神と記載する旧社で、備前式外一二八社の一社である。

木須神社　旧村社

備前市伊部四五〇

主祭神　磐土命　大綾津日神　底筒男神　埴土神　表筒男神　中筒男神
例祭　十月五日　**境内地**　四六一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
崇敬者数　一三〇人
摂末社　稲荷神社　竈大神
宮司　日幡直之
責任役員　若林一利　前嶋敏男
由緒沿革　本神社の創建年代は詳かでない。延宝八年九月の神社帳に、小幡山木々須大明神とある。古来、村民の崇敬が篤い。

履掛天神宮　旧無格社

備前市伊部一五五九

主祭神　菅原道真公
例祭　十月二十六日　**境内地**　三六八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神門
摂末社　貴船神社　稲荷社　祇園社
崇敬者数　一、五七五人
宮司　日幡直之
責任役員　佐藤　晋　中村才八　木村　強
特殊神事　神幸祭　獅子舞
由緒沿革　本神社の創立年代は不詳であるが、古老の口碑によると菅公西下の時、休憩せられた跡に菅公を奉祀し、履掛天神宮と称した。境内に公の履を掛けられた大石がある。今でもこの大石を崇敬している。古くは伊部村を菅原荘と呼んだのも、この古事に因るものである。和気組にこの神社が属っている。

熊野神社　旧村社

和気郡和気町本一二二八

主祭神　皇子権現
例祭　四月十四日　**境内地**　四二六坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　一五〇人　**崇敬者数**　一五〇人
由緒沿革　創建年代・由緒不詳。

荒神社　旧村社

備前市穂波二三三五

主祭神　素盞嗚尊
例祭　十月第三土曜日・日曜日
境内地　四五九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　素盞嗚神社　金刀比羅神社
氏子数　二五〇戸
宮司　宮宅林平
責任役員　峠本京一　青山武夫
由緒沿革　明記を欠くが、寛永年間池田家下役人が素盞嗚尊を奉祀し、当時は小さき石祠であったのを、享保年間に本殿、幣殿、拝殿を改築し、更に大正九年に改築し現在に至った。

荒神社　旧村社

和気郡吉永町大字福満一〇六四

主祭神　素盞嗚尊
例祭　十月十六日　**境内地**　一、五〇七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　七〇戸
宮司　新庄章二
責任役員　有吉晋太　有吉末太　浜田慎太郎
由緒沿革　本神社の創建年代は不詳。享保三年六月十五日の記録に、「前代より荒神社川向に御鎮座の処、度々の洪水に川岸崩れ申すに付、願を以って北山へ宮処替仕る。川向荒神社跡生立次第、御宮建立の足に後世仕筈、尤も北山は名主庄左衛門自林にて宮処寄進仕也」とある。

荒神社　旧村社

備前市三石二二一一

主祭神　素盞嗚尊
例祭　十月十五日　**境内地**　五〇九・二五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　二九二人　**崇敬者数**　四五人
宮司　八木良実
責任役員　津村良吉　小橋愛吉　小林　巌
由緒沿革　創建年代・由緒は不詳。備前国和気郡三石村春日神社の末社であった事は、明治四年官国幣社以下神官家録制によって明瞭である。昭和十九年村社に列格した。

神根神社　旧郷社

和気郡吉永町神根一一四七

主祭神　木花開耶姫命　外十二柱
例祭　十月二十三日　**境内地**　三、〇四五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫　随身門　社務所
摂末社　天神社　御霊社
氏子数　二六五戸　**崇敬者数**　二、九五〇人
宮司　北川　正
責任役員　国光富男　宗国一章
特殊神事　神楽
由緒沿革　延喜式神名帳に「備前国和気郡神根神社」とある。備前国神名帳（西大寺本）に「従二位神根大明神」とある。孝昭帝の臨幸の時、神根本村溪流に紅葉の樹で橋を渡した。帝より紅葉川と名を賜うたと備陽国誌に載せている。寛文十年池田光政が社殿を再建した。明治五年郷社に列格。明治四十年一月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。明治四十三年五月、御崎神社外五社を合祀した。昭和二十五年九月、御霊社を新築した。

山神社　旧村社

備前市伊里中五三七

主祭神　大山祇命
例祭　十月二十四日　**境内地**　三七三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社　天神社
氏子数　一四〇戸
宮司　宮宅林平
責任役員　武本兆弘　徳永　通
由緒沿革　創建年月は不詳だが、宝歴年代に創建したものと伝えられている。御鎮座の当初から山神社とか、嵯峨明神とか併称して奉祟した。明治四十三年八月二十八日火災に罹り棟札、古文書を焼失した。

閑谷神社　旧縣社

備前市閑谷七四八

主祭神　池田輝政　池田利隆　池田光政
例祭　四月二十五日　十月二十五日
境内地　七七四坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿　神庫　神饌所　中門
氏子数　一七〇戸　**崇敬者数**　五〇〇人
宮司　宮司代務者　新庄章二

正八幡宮　旧村社

和気郡吉永町大字吉永中四八

主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后
見命　天御中主神
例祭　九月二十三日　**境内地**　三、九一一坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　荒神社　稲荷神社
氏子数　六〇〇戸
宮司　新庄章二
責任役員　岡本虎雄　尾本　弘　高取　勉
由緒沿革　天正五年新田庄北方、東山の城主明石三郎庄衛門尉景季が創建したと伝える。

素盞嗚神社　旧村社

和気郡佐伯町北山方一八七六

祠官　吉原貞郎
責任役員　池田隆政　山根次郎　延里亮輔
宝物　文化財光政公像　本殿　幣殿　拝殿　中門
由緒沿革　備前藩主池田光政は、寛文年間学校を興した。貞享三年、その霊を祭り、その像を安置して芳烈祠と称した。（芳烈は公のおくりな）明治四年祖父輝政、父利隆を合祀して閑谷神社と呼称した。明治八年十月県社に列格。明治天皇侍従差遣。明治十八年、明治天皇行幸。大正十五年今上天皇行幸。昭和二十五年重要文化財に指定。

主祭神　素盞嗚尊　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
天御中主命　天一目命
例祭　十月十四日　**境内地**　九七一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　八王神社　稲荷神社　八坂神社
氏子数　三七戸
宮司　入矢静太
責任役員　高坂猪平　田鍋民男　山本数興
特殊神事　獅子舞
由緒沿革　天長二年九月九日金田正時が出雲の国から神魂を竹馬に奉じて現在の地に勧請した。もと、竹馬天王宮と称し、中世牛頭天王宮と改称し、明治二年更に現在の社名に改めた。その竹を西方の地に投棄したが自然に生育して、千有余年の現在連綿と生育している。大正三年、附近の四村社を合祀して素盞嗚神社と改称した。

住吉神社　旧村社

備前市穂浪三〇四三

主祭神　底筒男神　中筒男神　表筒男神　神功皇后
例祭　十月十三日　**境内地**　五六〇坪

主要建物 本殿　幣殿　拝殿　釣殿
摂末社 恵美須神社　祇園神社　稲荷神社　荒神社
氏子数 六〇〇戸
宮　司 宮宅林平
責任役員 石野梅助　丸谷儀一
由緒沿革 創建年月日不詳。正保二年社殿が荒廃したのを帝釈天王が大願主となって社殿を再興した。宝永七年社殿を改築、享保十年屋根葺替。口碑によると、神功皇后が朝鮮征伐の途次、暴風で海上が荒れたため、当神社に参籠せられ、玉体の御安泰・武運長久の御祈願を遊ばされたと伝える。その故で中古から神功皇后を合祀した。明治四十四年数社を合祀した。昭和八年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

滝谷神社　旧村社

和気郡吉永町大字多麻一三四三

主祭神 少彦名命　大己貴命　事代主命
例　祭 十月二十二日　**境内地** 五、二四九坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社 多麻神社
氏子数 四〇戸
宮　司 長尾正澄
責任役員 大峠教一　高橋一美　竹内忠夫
由緒沿革 創建年代・由緒不詳。

天神宮　旧村社

備前市福田九八二

主祭神 菅丞相
例　祭 十月十五日　**境内地** 五七七坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　社務所
氏子数 五〇戸
宮　司 宮司代務者　日幡行雄
責任役員 守時　甫　守時文也　守時真一　大井与亀
由緒沿革 本神社の創建年月等不詳。御本殿内の記文に、応永七年庚辰二月二十五日香登白久田の社と有る。本神社棟札（元禄七年）に往昔正保三丙戌年再興とある。

天神宮　旧村社

備前市友延二

主祭神 菅原道真公
例　祭 十月十日　**境内地** 二三三坪
主要建物 本殿　幣殿　釣殿　拝殿
氏子数 五〇戸
宮　司 宮司代務者　日幡行雄
責任役員 森重楠夫　三木説三郎　鈴木直江　伊久智登士
宝　物 明治二年ダンジリ　伊勢参宮　おかげ参り額
特殊神事 禰家行事
由緒沿革 創建年代・由緒不詳。江戸末期建立の本殿、拝殿、神門、随身門等が整備されて、現在も禰家を定めて、祭祀が厳修され、氏子の崇敬が深い。

天神社　旧村社

備前市友延一

主祭神 菅原道真公
例　祭 十月二三日　**境内地** 五、七一八坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　随身門　社務所
摂末社 早和佐神社　稲荷神社　井田神社
氏子数 二七〇戸
宮　司 宮宅林平
責任役員 大饗貞雄　大饗規一
由緒沿革 菅原道真を祀る。応永三十年の創建と伝えられる。明治二十一年社殿再興の棟札にあるように、本村の大字穂浪字高座の芝生の上に流れ着かれたのを、現在御鎮座の神晒山を拓いて社殿を新築し、九月九日に遷座した。康正二年社殿を新築し、天満天神宮と称したのを明治六年天神社と改称した。延宝、天和の頃から明治六年まで、十か村の産土神として旧藩主の崇敬厚く、明治維新まで社領参石弐斗寄進されていた。伊里中・友延・井田三か村の産土神である。

天神社　旧村社

備前市木谷八

主祭神 菅原道真公
例　祭 十月二十九日　**境内地** 二五八坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　釣殿
摂末社 岡崎神社　荒神社　稲荷神社　瘡神社　六社権現
氏子数 八〇戸
宮　司 宮宅林平
責任役員 杉本夏治　佐々井譲
由緒沿革 往古は木谷村氏神として奥谷に鎮座した。万治三年秋、現在地に遷座した。和気郡五天神の一として尊崇が厚く、池田家から社領高一石四斗を寄進せられていた。天和二年三月、旧木谷村の一部を関谷新田村と改称し、住民はみな福河村福浦新田に移住した。本神社も元禄年間福浦に勧請し、後、現在地に遷座した。安政六年春に御本殿も葺替、文政三年九月釣殿・御拝所建立。現在の社殿は明治二十三年十月の建立である。

天神社　旧村社

和気郡吉永町大字南方五二七

主祭神 菅原道真命

例　祭 十月十八日　**境内地** 五八〇坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿
崇敬者数 三五〇人
宮　司 新庄章二
責任役員 森本　勉　滝川鉄雄　万波　渉
由緒沿革 創建年代・由緒不詳。明治五年村社に列格した。

天神社　旧村社

和気郡吉永町大字岩崎一八四

主祭神 菅原道真命
例　祭 五月七日　**境内地** 一四六坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿
崇敬者数 三五〇人
宮　司 新庄章二
責任役員 尾本　弘　真殿　正　則枝岩男
由緒沿革 創建年代・由緒不詳。明治五年村社に列格。

天神社　旧無格社

和気郡吉永町大字三股一九九

主祭神 菅原道真命

例　祭 五月十五日　**境内地** 一三八坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿
崇敬者数 三五〇人
宮　司 新庄章二
責任役員 岡本虎雄　久次　操　久次勝利
由緒沿革 創建年代・由緒不詳。

長田神社　旧郷社

和気郡和気町日笠下二七

主祭神 事代主命　天照大神　春日大神　神功皇后外十三柱
例　祭 十月十日・十一日
境内地 七一九坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　随身門　社務所　休憩所
摂末社 稲荷神　若宮　八坂神　護国神　保食神　素盞嗚命
氏子数 五五〇戸　**崇敬者数** 一、五五〇人
宮　司 行正瑞穂　**禰　宜** 行正哲穂
責任役員 日下利昌　瀧本　隆　吉久太郎　赤石　健　大富重美　片山恒一
宝　物 神輿三基　**特殊神事** 御神幸祭
由緒沿革 本神社は本国総社本神名帳に長田神社とある。山本氏本には「正三位長田大明神」と記載する当国旧社百二十八社の一である。中古になり宇佐の八幡宮を勧請して配祀し、八幡宮と奉称した。明治初年の頃再び長田神社と呼び、寛文年中から明治の際まで社

が首唱して村民と謀り、南山方の八木尾の地に新に社殿を造った。同年二月十五日に矢田八幡宮から神霊を迎え、南山方氏神として奉祀した。更に元文四年五月三日南山方新宮の地に社殿を造営し、ここに奉遷した。寛政二年九月十六日社殿を改築した。現在の社殿である。

八幡宮 旧村社

和気郡日生町大字日生八〇四

主祭神 応神天皇 仲哀天皇 神功皇后
例祭 五月二十七日 **境内地** 一、一五九坪
主要建物 本殿 幣殿 拝殿
摂末社 金刀比羅神社 稲荷神社
氏子数 三〇〇戸 **崇敬者数** 一、〇〇〇人
宮司 那須正彦 **禰宜** 那須正寛
責任役員 有吉賢 星尾正一 橋本豊治
宝物 鏡一面 獅子白石一対
特殊神事 御神幸
由緒沿革 創建由緒不詳。延宝二年八月再建。

八幡宮 旧村社

和気郡佐伯町南山方五八二

主祭神 仲哀天皇 応神天皇 神功皇后
例祭 十月八日 **境内地** 一、七一二坪
主要建物 本殿 幣殿 拝殿 神楽殿
摂末社 山神社
氏子数 二八戸
宮司 入矢静太
責任役員 石田敏治 延原朝守
由緒沿革 寛文六年、南山方の惣右門、又右門の二氏が首唱して村民と謀り、南山方の八木尾の地に新に社殿を造った。同年二月十五日に矢田八幡宮から神霊を迎え、南山方氏神として奉祀した。更に元文四年五月三日南山方新宮の地に社殿を造営し、ここに奉遷した。寛政二年九月十六日社殿を改築した。現在の社殿である。

八幡宮 旧村社

和気郡佐伯町矢田一一八〇

主祭神 天照大神 春日大神 応神天皇
例祭 十月八日
主要建物 本殿 幣殿 拝殿
摂末社 金刀比羅神社 素盞嗚神社
氏子数 七八戸
宮司 入矢静太
責任役員 坪井一明 赤田正貫 坪井文磨
宝物 石造九重塔（昭和四十八年文化財指定）
由緒沿革 本神社の由緒は寛文年中に蓮生寺と称する寺があった。寛文下文の制で、備前藩主池田光政により蓮生寺を廃して、現在の所に社殿を造営し、蓮生寺の僧を還俗させて八幡神の祀官とした。

八幡宮 旧村社

和気郡佐伯町塩田二五九

主祭神 仲哀天皇 神功皇后
例祭 十月八日 **境内地** 一、一三一・八二坪
主要建物 本殿 幣殿 拝殿 随身門
摂末社 松尾神社
氏子数 一三〇戸
宮司 入矢静太
責任役員 宮本実太 藤井実 山田次郎
由緒沿革 本神社は奥塩田村大日浦山から、元禄二年に移し、享和二年の創建と伝える。

八幡宮 旧村社

備前市坂根五六

主祭神 応神天皇 仲哀天皇 神功皇后
例祭 十月二十七日 **境内地** 一、七二二坪
主要建物 本殿 幣殿 拝殿 社門
摂末社 稲荷神社 祇園神社 木山神社 大将軍社
氏子数 六三戸
宮司 吉田重敬
責任役員 山形四郎 馬場豊司
由緒沿革 創建年月・由緒不詳。（元禄年中奉遷）。

八幡宮 旧村社

備前市新庄一六一四

主祭神 応神天皇 外九柱神

領として畑高五石一斗を旧岡山藩主池田家から受けた。

八幡宮 旧村社

和気郡日生町大字日生八〇四

主祭神 応神天皇 仲哀天皇 神功皇后
例祭 五月二十七日 **境内地** 一、一五九坪
主要建物 本殿 幣殿 拝殿
摂末社 金刀比羅神社 稲荷神社
氏子数 三〇〇戸 **崇敬者数** 一、〇〇〇人
宮司 那須正彦 **禰宜** 那須正寛
責任役員 有吉賢 星尾正一 橋本豊治
宝物 鏡一面 獅子白石一対
特殊神事 御神幸
由緒沿革 創建由緒不詳。延宝二年八月再建。

八幡宮 旧村社

和気郡佐伯町南山方五八二

主祭神 仲哀天皇 応神天皇 神功皇后
例祭 十月八日 **境内地** 一、七一二坪
主要建物 本殿 幣殿 拝殿 神楽殿
摂末社 山神社
氏子数 二八戸
宮司 入矢静太
責任役員 石田敏治 延原朝守
由緒沿革 寛文六年、南山方の惣右門、又右門の二氏が首唱して村民と謀り、南山方の八木尾の地に新に社殿を造った。同年二月十五日に矢田八幡宮から神霊を迎え、南山方氏神として奉祀した。更に元文四年五月三日南山方新宮の地に社殿を造営し、ここに奉遷した。寛政二年九月十六日社殿を改築した。現在の社殿である。

八幡宮 旧村社

和気郡佐伯町矢田一一八〇

主祭神 天照大神 春日大神 応神天皇
例祭 十月八日
主要建物 本殿 幣殿 拝殿
摂末社 金刀比羅神社 稲荷神社
氏子数 七八戸
宮司 入矢静太
責任役員 坪井一明 赤田正貫 坪井文磨
宝物 石造九重塔（昭和四十八年文化財指定）
由緒沿革 本神社の由緒は寛文年中に蓮生寺と称する寺があった。寛文下文の制で、備前藩主池田光政により蓮生寺を廃して、現在の所に社殿を造営し、蓮生寺の僧を還俗させて八幡神の祀官とした。

八幡宮 旧村社

和気郡佐伯町塩田二五九

主祭神 仲哀天皇 神功皇后
例祭 十月八日 **境内地** 一、一三一・八二坪
主要建物 本殿 幣殿 拝殿 随身門
摂末社 松尾神社
氏子数 一三〇戸
宮司 入矢静太
責任役員 宮本実太 藤井実 山田次郎
由緒沿革 本神社は奥塩田村大日浦山から、元禄二年に移し、享和二年の創建と伝える。

八幡宮 旧村社

備前市坂根五六

主祭神 応神天皇 仲哀天皇 神功皇后
例祭 十月二十七日 **境内地** 一、七二二坪
主要建物 本殿 幣殿 拝殿 社門
摂末社 稲荷神社 祇園神社 木山神社 大将軍社
氏子数 六三戸
宮司 吉田重敬
責任役員 山形四郎 馬場豊司
由緒沿革 創建年月・由緒不詳。（元禄年中奉遷）。

八幡宮 旧村社

備前市新庄一六一四

主祭神 応神天皇 外九柱神
例祭 十月十九日
境内地 二、二五一・四八坪
主要建物 本殿 幣殿 拝殿 随身門 社門
摂末社 稲荷神社
氏子数 七八戸
宮司 吉田重敬
責任役員 西谷松夫 小林定士
由緒沿革 創建年月・由緒等不詳。明治四十二年八月十五日、大字地内に鎮座の武松神社外六社を合祀した。

八幡宮 旧村社

和気郡和気町保曽一〇二四

主祭神 仲哀天皇 応神天皇 神功皇后
例祭 十月十九日 **境内地** 四七三・三坪
主要建物 本殿 釣殿 拝殿 随身門
摂末社 山神社
氏子数 四二戸 **崇敬者数** 一二五人
宮司 行正瑞穂
責任役員 草加和已 草加豊 宗友一男 安広英夫
宝物 神楽獅子 **特殊神事** 神楽祭
由緒沿革 本神社の創建は往古で、口碑によると古くは室原八幡宮と称し、又、子安八幡ともいって地方の尊崇が厚く、室原地方の氏神として崇敬し、崇敬者も年々増加している。

八幡宮 旧村社

和気郡和気町益原一一九〇

主祭神 仲哀天皇 応神天皇 神功皇后 相殿 天照大神 春日大神
例祭 十月七日 **境内地** 六〇九・四九坪
主要建物 本殿 幣殿 拝殿
摂末社 若宮社
氏子数 一五五戸
宮司 行正哲穂
責任役員 杉本昌男 藤井良知 長島一二三 藤井義雄
特殊神事 神幸祭
由緒沿革 創建年月・由緒不詳。寛文六年社殿を造営し、仲哀天皇、応神天皇、神功皇后を奉祀し、社領高一石二斗一升一合六勺を受け、毎年八月十四日、十五日を祭例日とする。

八幡宮 旧村社

和気郡和気町吉田二五〇一

主祭神 仲哀天皇 外拾柱
例祭 十月十七日 **境内地** 二、三二二坪
主要建物 本殿 幣殿 拝殿 随身門
摂末社 素盞嗚神社 稲荷神社 天神宮
氏子数 一八〇戸 **崇敬者数** 一、一〇〇人
宮司 北川正
責任役員 有吉栄一 戸嶋潤三
由緒沿革 創建年代・由緒不詳。元禄七年に大字吉田西の宮にあったのを、天保七年十月に現在地に移転新築した。明治四十五年五月に、村社日吉神社、瀧神社、天津神社、無格社志位武神社、荒神社を合祀した。昭和十四年一月三十一日神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

八幡宮 旧村社

和気郡日生町大字寒河一〇二二

主祭神 仲哀天皇 応神天皇 神功皇后 木花開耶姫命
例祭 十月二十三日
境内地 一、七三五・六坪
主要建物 本殿 幣殿 拝殿 釣殿 絵馬殿 社務所
摂末社 鹿久居八幡宮 金刀比羅宮 荒神社
氏子数 四二八戸 **崇敬者数** 二、一四〇人
宮司 代務者 那須正彦
禰宜 中村宏材
責任役員 萩原文哉 大村唯志 岩崎肇 三木正明
由緒沿革 創建年代不詳。口碑によると、昔は宮の谷に鎮座していたのを現在の地に勧請したという。当国藩主池田侯の崇敬社で、社領六斗を寄進せられた由が

主祭神　大国主尊　外五柱（倉稲魂神　高龗神　奥津日子神　奥津比売神　大山祇神）
例　祭　十月四日　境内地
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神門　随身門
社務所　各殿
摂末社　（和気）靖国宮
宮司兼任　一〇〇人
氏子数　八〇〇戸
崇敬者数　一〇〇人
由緒沿革　新田郷の総鎮守で創建は不詳であるが、天平勝宝八年、康保元年、天永三年に御造営の記録がある。天喜元年に社殿を修復し、元禄十三年に現在地に遷座した。同時に九州宇佐八幡宮から神功皇后の霊石を乞請けて当社の側に神殿を建立した。明治二十年社号を旧に復し、同五年郷社に列した。明治四十三年遠近の三十二社を合祀した。

和気神社

主祭神　和気清麻呂命　佐波夜命　弟彦王命　和気広虫命　佐波夜命　応神天皇　外二十一柱
例　祭　十月第二日曜日
境内地　一、二六八坪
本殿　幣殿　拝殿　神門
社務所　各殿
摂末社　（和気）靖国宮
宮司兼任　一〇〇人
氏子数　八〇〇戸
崇敬者数　一〇〇人
由緒沿革　大国主尊を祭神とし、天平勝宝八年、和気清麻呂公が勅願により、神亀五年に池田郷公が再建。元暦年間に源頼朝公が再建。寛永四年に池田綱政公が再建。元治元年池田藩主参詣。明治元年山王宮と称したのを吉神社と改称した。

備前市閑谷二〇九

福岡神社

主祭神　大国主尊　外五柱（倉稲魂神　高龗神　奥津日子神　奥津比売神）
例　祭　十月十四日　境内地
本殿　幣殿　拝殿　神門
由緒沿革　第四十六代聖武天皇の勅願により、神亀五年創立と伝える。元暦年間に源頼朝公が再建。寛永四年に池田綱政公が再建。元治元年池田藩主参詣。明治元年山王宮と称したのを吉神社と改称した。
社務所　各殿
摂末社　竹内真一　富沢正次　杉山　伍
宮司兼任　一七戸
氏子数　一七戸
崇敬者数　一〇〇人
例　祭　十月二十二日　境内地
本殿　幣殿　拝殿　幌造
主要建物　大物主尊　国常立尊　忍穂耳尊　国狭槌尊
摂末社　伊弉冉尊　現々杵尊　埴根命
由緒沿革　本神社創建年代不詳。延宝年間以前の御鎮座であり崇敬した。宝永年間に現在地へ遷座、以来氏子の崇敬厚く、久々井村水村として栄えており、久々井湾で水にうで身を清め、大祭に参拝する。お日待、大祭には明らかに禁数であるとは明らかに禁数であるとは明らかに禁数であるとは



相殿　応神天皇
例　祭　四月・十月二十日・二十一日
境内地　三、〇〇〇坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　絵馬堂　随身門
社務所
摂末社　猿田彦神社　稲荷神社　大神宮　天神社　虫神社
氏子数　二八〇戸　**崇敬者数**　二、〇〇〇人
宮　司　小森一郎　**禰　宜**　小森成彦
責任役員　三好誠之　早瀬原太　徳永正好　徳長　茂　馬場次郎　日下常志
宝　物　御神体（祭神名札）　鏡
特殊神事　樽神輿四台　相撲

由緒沿革　垂仁天皇の皇子鐸石別命の玄孫弟彦王が軍功により磐梨県に封ぜられ入居治政、一族大いに蕃衍し、本神社は鐸石別遠祖を祭神とする和気氏の氏神である。もと、和気宮又、大内大明神と称した。天正十九年現地に奉遷、文禄二年に猿目神社と改称した。明治四十二年六月、鐸石別命に清麿公外三柱を加え、更に国造神社を合祀して、大正三年和気神社と復称した。大正八年応神天皇を相殿とし県社に列した。

拍手

はくしゅは神拝の時、或は神事に行なう作法の一形式である。手を拍ち鳴らす拍子である。特にカシワデの語義には、古来諸説があるが、普通は拍を柏と誤ったのだと解している。上代の食器にカシワ（柏）の葉を用いたことに関連があり、拍子をカシワデと訓むようになったのであろう。日本独特の敬礼作法で、神拝の作法である。古い時代の拍ち方は不明である。現在では、左右の手を肩の高さに上げ、前方やゝ斜めに掌を合せ、右手の指端を左手指先の一関節ほど摺下げ、徐ろに打合せ、また静かに元に戻すのが普通である。一般の神社祭式では二拍子が普通であるが、伊勢神宮では八開手が行なわれ、四度拍つことを再度繰返し、さらにその終りに一度拍って、此の作法を終る。神葬祭に音を立てずに手を拍つのを忍手といっている。祝詞奏上後の二拝に次いで、二拍子一拝を行なうのが、神社本庁の現行作法となっている。

天津罪（あまつつみ）

須佐之男命が天上で犯された罪。農耕に関係のある罪のことである。古代では、農業と他の職業とは分離せず、すべて農民であったから、一般に人間の罪をさしている。要するに農耕民族としての我が日本人の間に、古代から懐かれてきた罪の観念である。

邑久・西大寺支部（七五社）

安仁神社　岡山市一宮八九五……一八七
天津神社　邑久郡邑久町宗三　一七六……一八七
伊登美宮　岡山市東片岡一一九〇……一八七
稲荷神社　岡山市水門七一五……一八七
稲荷神社　邑久郡長船町牛文一五四九……一八七
宇佐八幡宮　〃　長船町服部一二九……一八八
牛神社　〃　邑久町豊原一六〇五……一八八
牛窓神社　〃　牛窓町二一四七……一八八
恵美須宮　〃　長船町福岡七七一……一八八
恵比須宮　〃　牛窓町牛窓二五八三……一八八
大富八幡宮　〃　邑久町大富八二六一一……一八九
日佐神社　〃　邑久町豊原二六三三……一八九
乙子神社　岡山市乙子二三七……一八九
小野島神社　邑久郡牛窓町長浜一一四九……一八九
御崎神社　〃　牛窓町鹿忍六三九……一八九
麻御山神社　岡山市邑久郷二九四八……一九〇
加茂神社　邑久郡長船町服部一二九……一九〇
笠松神社　〃　邑久町豊原二九四一……一九〇
鹿忍神社　〃　牛窓町鹿忍四八八……一九〇
春日神社　岡山市上阿知一……一九一
春日神社　邑久郡牛窓町長浜九一四……一九一
春日神社　岡山市西大寺新一五・一六……一九一
片山日子神社　邑久郡長船町土師七九九……一九一
神前神社　岡山市神崎二四六六……一九二
木鍋八幡宮　邑久郡長船町土師二一九一……一九二
貴船神社　〃　邑久町山田庄一三六六……一九二
荒神社　岡山市上阿知二三四九……一九二
荒神社　邑久郡邑久町豊原八七〇……一九三
荒神社　岡山市西大寺一宮一六五七……一九三
幸地山神社　〃　邑久郷一三二八……一九三
金刀比羅神社　邑久郡牛窓町牛窓二九四〇……一九三
御霊社　〃　牛窓町四三四五……一九三
五香宮　〃　牛窓町牛窓二七二〇……一九四
正八幡宮　〃　邑久町尻海九八〇……一九四
素盞嗚神社　〃　牛窓町牛窓四九二八……一九四
諏訪神社　〃　長船町牛文一〇二三……一九四
千次神社　〃　牛窓町千手一四五……一九四
多賀神社　〃　長船町磯上二八八九……一九五
宝神社　岡山市宝伝三八〇三……一九五
瀧神社　〃　西大寺一宮一六五七……一九五
綱掛石神社　〃　東片岡一六九五……一九五
天神社　〃　東片岡一五九三……一九五
天神社　邑久郡牛窓町牛窓三二二四……一九六
天神社　〃　邑久町大窪二一二一……一九六
天満宮　岡山市犬島六七一一……一九六
殿上西神社　備前市佐山二一九……一九六

豊原北島神社　邑久郡邑久町北島一一八六……一九六
豊原角神社　岡山市西大寺浜一〇四一一……一九七
豊原南島神社　〃　長浜一四七四……一九七
八幡宮　邑久郡邑久町豆田七五五……一九七
八幡宮　〃　邑久町福元二五七……一九七
八幡宮　〃　邑久町福中九六〇……一九八
八幡宮　〃　邑久町虫明一……一九八
八幡宮　岡山市東片岡九八〇……一九八
八幡宮　邑久郡長船町八日市二五二……一九八
八幡宮　〃　長船町服部一一一九……一九九
八幡宮　〃　長船町牛文四六六……一九九
八幡宮　〃　邑久町下山田二〇五六……一九九
八幡宮　〃　邑久町上笠加一……一九九
八幡宮　備前市鶴海三七一二……一九九
八幡宮　岡山市西大寺川口二三二……二〇〇
八幡宮　邑久郡邑久町大窪四一八……二〇〇
八幡宮　〃　邑久町山手一〇二六……二〇〇
八幡宮　〃　邑久町山手一六七九……二〇〇
八幡宮　〃　長船町飯井二七〇三……二〇〇
八幡宮　〃　邑久町尾張三九八……二〇〇一
堰爪神社　〃　邑久町福山二〇二……二〇〇一
日吉神社　〃　長船町服部一一一九……二〇〇一
日吉神社　〃　邑久町豊原二九四一……二〇〇一
松江伊津岐神社　岡山市邑久郷一五〇〇……二〇〇一
美和神社　邑久郡長船町福里三四一……二〇〇二
美和神社　〃　長船町東須恵一〇六四……二〇〇二
湯次神社　〃　長船町磯上三二七七……二〇〇二
靱負神社　〃　長船町長船一一五一……二〇〇二
若宮八幡宮　〃　邑久町尻海三〇三八……二〇〇三

拝

拝の字は、漢音で「ハイ」と訓むが、国語で普通に「ヲガム」また「ヲロガム」とよむ、古くは「ウロガム」といった。その「ロ」の字を省略して「ヲガム」となった。

これは体を屈折させて敬礼するのをいったのである。

神祇に対する作法の中で、最上の誠と敬とを表現する作法である。古くは拝の作法は、答拝、屈拝・伏拝・吉拝・凶拝・拝伏・揖拝・笏拝・列拝などがあった。現在では、起拝・立拝・居拝等が行われている。上体を九十度前に伏するのをいう。

安仁神社　旧国幣中社

岡山市一宮八九五

主祭神　五瀬命
例祭　十月十一日　**境内地**　六、〇〇〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　渡廊　瑞垣門　神庫　神饌所　上、下社務所
摂末社　荒神社　稲荷神社　左・右補神社
氏子数　六〇戸　**崇敬者数**　一、八〇〇人
宮司　磯崎旭郎　**禰宜**　三原千幸
責任役員　川崎直助　森本綾夫　植木貞　宮崎平四郎
宝物　銅鐸（重文指定）
由緒沿革　久方宮と称した。備前国の二宮、西大寺の一宮である。明治四年国幣中社に列せられた。仁明天皇の承和八年二月、名神に預らしめられ、醍醐天皇の延喜の制で名神大社に列し、康永三年四月の火災で古記録は悉く焼失した。降って寛永年間、池田綱政が再建し、寛文六年五月池田光政が更に社殿を造営した。神領は中古一三〇〇石であったが、宇喜多秀秋の時没収せられ、池田光政の時五石が寄せられた。宝永二年の改築で面目を一新した。

天津神社　旧村社

邑久郡邑久町宗三　一七六

主祭神　天之御中主命

伊登美宮　旧無格社

岡山市東片岡一一九〇

例祭　十月二十五日　**境内地**　四八・七二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　素盞嗚神社　大隅神社　荒神社
氏子数　三〇戸　**崇敬者数**　一五〇人
宮司　島津一正
責任役員　岡本友義　坂井勉
由緒沿革　当神社は文亀二年一月六日夜亥刻、山城国明現山から勧請し、明現様と称して人々の崇敬が厚い。元文元年十一月六日、池田内匠頭、御鷹狩の節御参詣の記録がある。秋の大祭に際し、村中総出で径三十センチ位もある大注連をない、鳥居に張る習慣がある。

稲荷神社　旧村社

岡山市水門七一五

主祭神　倉稲魂神　配祀神　土祖神　保食神
例祭　十月十五日　**境内地**　五一・二九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
氏子数　一〇〇戸
宮司　高原家康
責任役員　入江商次　高原実
由緒沿革　備陽国誌に稲荷宮牛文村とある。宝暦十一年神社書上帖には牛文村の内稲荷山稲荷神社所祭三座とある。明治五年村社に列格された。

例祭　十月二十一日　**境内地**　一、七七七・二四坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　社務所　随身門
摂末社　稲荷神社　疫神社　金刀比羅宮（荒神社）亀石神社（外三社）
氏子数　五〇〇戸　**崇敬者数**　二、〇〇〇人
宮司　光本亀男　**禰宜**　小橋繁
責任役員　近藤克己　中野敏夫　妹尾喬
由緒沿革　宝永六年九月十一日国主池田綱政公が開墾地の氏神として、邑久郡土師村木鍋山御鎮座の稲荷神社を、幸島山に勧請した。正徳二年十二月五日御本殿を建立。明治十三年二月社殿を改築、同十四年四月上棟式を行った。明治四十五年一月一日神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

稲荷神社　旧村社

邑久郡長船町牛文一五四九

主祭神　幾多神
例祭　五月十五日　**境内地**　二・八八坪
主要建物　本殿
由緒沿革　創建年月不詳。伊登美宮は屯集宮の義で、神武天皇の御東征の時、従い奉った将士の駐屯した処で幾多の神を祭る社である。昔から安仁神社の摂社として地方民の崇敬が厚い。

主祭神　高龗神　倉稲魂神　瓊々杵尊　外五柱

宇佐八幡宮

邑久郡長船町服部一二九

主祭神 比咩大神　品陀和気命　息長帯姫命
例祭 十月十日　**境内地** 三九三坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　随身門　神門
摂末社 稲荷神社　疫神社
氏子数 一〇〇戸
宮司 大西定之
責任役員 野田昇一　石原武男
由緒沿革 口碑に往古豊前国宇佐から勧請と伝えている。寛文六年、藩主池田光政公から代々社領高四石九斗六升の寄進があったが、明治三年になって廃止となった。

牛神社

邑久郡邑久町豊原一六〇五

主祭神 保食神　泰盞嗚尊
例祭 七月八日
主要建物 本殿　拝殿
摂末社 稲荷神社　稲荷神社
氏子数 一〇〇戸
宮司 島津一正
責任役員 小林恒一　穂積末利　今田郁夫　小林義治

牛窓神社　旧縣社

邑久郡牛窓町二一四七

主祭神 応神天皇　神功皇后　武内宿禰　比売神
配祀 仁徳天皇　泰盞嗚尊　大山咋命　地主神　武甕槌神　斎主神　天児屋根命
例祭 十月二十五日
主要建物 本殿　幣殿　拝殿
奏楽所　手洗舎
摂末社 稲荷神社　祓殿神社　亀山神社　愛宕神社
素盞嗚神社　吉田神社　武内神社　若宮神社
氏子数 九一三戸
宮司 岡崎義弘
責任役員 高橋完太　坂口嘉三郎　馬場　栄　那須光行
由緒沿革 本神社の創建年代不詳。山本氏本「備前国神名帳」に従三位牛窓明神とある。石清水宮寺領内備前別宮内牛窓別宮と称え、保元三年の官寺領および極楽寺諸国庄園官符官宣旨、並びに元暦二年正月九日源頼朝下文等の史乗に、八幡宮寺領備前国牛窓別宮と散見している古社である。明治六年郷社に、昭和十五年県社に列格した。

恵美須宮　旧無格社

邑久郡長船町福岡七七一

主祭神 事代主命
例祭 五月十五日　**境内地** 二八坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿
氏子数 四〇戸
責任役員 東原太良　高原　薫
由緒沿革 創立年代・由緒不詳。

恵比須宮　旧村社

邑久郡牛窓町牛窓二五八三

主祭神 恵比須神
例祭 十月十日　**境内地** 一〇一・〇四坪
主要建物 本殿　拝殿
崇敬者数 一〇〇人
責任役員 高橋完太　坂口嘉三郎　馬場　栄　那須光行
由緒沿革 本神社の創建年代は不詳であるが、古くから漁業者の守護神として尊崇していた。宝暦四年十月願い出、社地を海辺に新に造り社殿を建立し、旧社地（五香宮境内地）から御遷座した。

大富八幡宮　旧村社

邑久郡邑久町大富八二六一一

主祭神 品陀和気天皇　息長帯比売命　比咩大神
例祭 十月二十四日　**境内地** 二、〇二三坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　渡殿
氏子数 一〇〇戸
宮司 島津一正
責任役員 大和　保　岡本金一　本田由紀雄
由緒沿革 嘉暦年中、児島高徳の臣大富太郎幸範の崇敬の厚かった神社である。この関係上、大富太郎幸範を境内神社に奉祀した。池田藩主から社領八斗を明治四年まで受領した。明治四十四年十一月十五日、同村豊原北島神社に合祀した。昭和二十一年十一月十五日氏子の熱望で、豊原北島神社から分離した。

日佐神社　旧村社

邑久郡邑久町豊原二六三三

主祭神 日佐神
例祭 十月十六日
境内地 一、一二三・五四坪
主要建物 本殿　幣殿　釣殿　拝殿　社務所
摂末社 稲荷神社　荒神社
氏子数 一〇〇戸
宮司 島津一正
責任役員 小林恒一　穂積末利　今田郁夫　小林義治
由緒沿革 創建年月日・由緒等は不詳。貞享の頃天神社と改称し、一般に日佐天神と称した。宝暦十三年天満宮と改称し、明治三年二月祈年祭、十一月新嘗祭の国祭が行われ国主池田章政が幣帛を供進した。明治九年十月十九日、日佐神社と復号し、祭神を日佐神と改めた。

乙子神社　旧村社

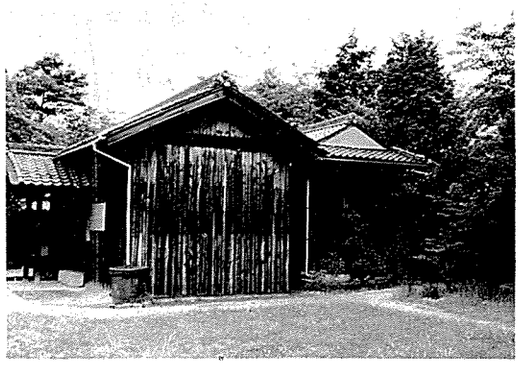
岡山市乙子二三七

主祭神 若御毛沼命　猿田彦命
例祭 十月十八日　**境内地** 四七一・〇九坪
主要建物 本殿　幣殿　釣殿　拝殿
摂末社 住吉神社　天満宮　稲荷神社　風神社　塩竈社　保食神社
氏子数 七〇戸
宮司 大脇義男
崇敬者数 七〇人
責任役員 上岡仁美　上岡三郎
由緒沿革 創建年月・由緒不詳。社殿は乙子城地域の乙子城山にあり、当地の守護神として乙子神社という。

御崎神社　旧村社

邑久郡牛窓町鹿忍六三九

例祭 十月三日
主要建物 本殿　幣殿　拝殿
摂末社 稲荷神社
責任役員 塩見立志　原野甲子郎　則次君夫
由緒沿革 本神社の創建年月日不詳。古来から祇園宮と称して崇敬せられた。寛延三年六月七日に再建した由が棟札に記されている。



小野島神社　旧無格社

邑久郡牛窓町長浜一一四九

主祭神 素盞嗚尊

主祭神　大己貴神　大物主神
例　祭　五月十四日・十五日
境内地　一五七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　釣殿　社務所
摂末社　宇賀神社　稲荷神社　塩竈神社　疫神社
氏子数　五〇〇戸　**崇敬者数**　三、〇〇〇人
宮　司　村上久志
責任役員　長尾貞三　為房　勇　小崎竹四　鳴坂四十四　三浦兼雄　山本　隆
由緒沿革　本神社の勧請年月は不詳であるが、往古出雲小浜より御遷座との口碑がある。また寛文八年新築の棟札がある。古来霊験著しく、崇敬者は各地にまたがり、県外にも多数の信者がある。従来社殿の増改築については崇敬者の寄附によるのを慣例としていたが、現在は崇敬者寄附および氏子寄附で行っている。

麻御山神社　旧村社

岡山市邑久郷二九四八

主祭神　天日鷲命
例　祭　十月十七日　**境内地**　一、二三九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神供所
摂末社　稲荷神社　天満神社　下松神社　荒神社　春日神社
氏子数　八三戸　**崇敬者数**　二〇〇人
宮　司　宮司代務者　松島章雄
責任役員　森本初佐　谷口　但　森本勝利
由緒沿革　本国総社神名帳に「麻御山神社」、山本氏本には「従五位麻御山神」と記されている。貞享元年の神社改帳には、「祈禱村麻御山大明神」と、また宝暦年中の神社書上帳には「邑久郷村之内吉塔山麻御山大明神」とある。今も神山を麻御山という。神武天皇の御東征に御供をした者が、天皇が吉備の高島に御滞在のとき、詔によって斎服を調進するため、ここに麻を植え紡績なさったのがもとゝなって奉斎した神社である。

加茂神社　旧村社

邑久郡長船町服部一二九

主祭神　別雷神
例　祭　十月二十九日　**境内地**　宇佐八幡宮境内
主要建物　本殿
宮　司　大西定之
責任役員　野田昇一　石原武男
由緒沿革　創建年月・由緒不詳。

笠松神社　旧村社

邑久郡邑久町豊原二九四一

主祭神　笠松神
例　祭　十月二十八日　**境内地**　二、九八一・一九坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　随身門　神饌所
摂末社　稲荷神社　山神社　金山彦神社　天満宮
氏子数　三〇〇戸
宮　司　島津一正
責任役員　中尾綾夫　外二名
由緒沿革　本神社の創建年月日・由緒等不詳。応永の頃、笠松明見神と称えたが、後、笠松明見宮と称えた。明治元年には笠松神社と改称した。池田章政から幣帛の供進をうけた。明治九年十月十九日御祭神を笠松神と改めた。

鹿忍神社　旧村社

邑久郡牛窓町鹿忍四八八

主祭神　天児屋根命　経津主命　武甕槌命　姫大神
山田彦命
例　祭　十月十四日・十五日
境内地　二、九一八・九二坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　随身門　社務所
摂末社　楽前神社　菅原神
氏子数　五〇〇戸　**崇敬者数**　二、〇〇〇人
宮　司　村上久志　**禰　宜**　村上妙子
責任役員　長尾貞三　小崎竹四　三浦兼雄　鳴坂四十四　為房　勇
由緒沿革　創建年代不詳。たゞし、神護景雲年中の再建棟札があると、元文三年の取調上申書控にあったというが今は見当らない。社号は五社大明神と号したが、



明治二年鹿忍神社と改めた。往古は鹿歩山明神、稲の神と唱え、社壇十二宇、社領田十八町歩で、社家も多数あったという。今なお、お社領田・御供田・神楽田・勝負田・明神田・当家田等の字が処々に有る。当神社は明治初年の頃、古社稲津神社であろうかと取調べたことがある。弘安の役には寄異の霊験があったという。池田家から、寛文年中から明治五年まで社領一石、家禄二石八斗の寄進があった。

春日神社　旧村社

岡山市上阿知一

主祭神　天児屋根命　相殿　経津主神　武甕槌命
姫大神　天之御中主神
例　祭　十月十日　**境内地**　四二二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　長床
摂末社　稲荷神社　大元神社　阿知神社　荒神社
氏子数　一三八戸　**崇敬者数**　一〇〇人
宮　司　屯倉武夫
責任役員　岡本彦雄　柴田輝雄　武内太計夫
由緒沿革　本神社は往昔本村の内、桜田という地に御鎮座にあったのを今の社地に奉遷した。天児屋根命は太古朱桜をお用いになったことが記紀に見えている。旧社地に桜田という名は、これに縁故のある名である。また、下阿知村の内に野串山がある。野串はヌグシの意で玉串山という義で、天児屋根命に関係があると思える。

春日神社　旧村社

邑久郡牛窓町長浜九一四

主祭神　天児屋根命　武甕槌命　斎主命　姫大神
例　祭　十月二日
境内地　一、七一七・四六坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　神饌所　随身門
摂末社　荒神社　稲荷神社　薬師神社
氏子数　一二〇戸
禰　宜　田村秀男
責任役員　塩見立志　原野甲子郎　則次君夫
由緒沿革　本神社の創建年月日不詳。慶雲三年申四月及び慶長十三年卯月再建立と棟札にある。古来卜祭と唱え、神前に粥を焚き、二寸五分の竹管三本を入れ、その年の五穀の豊凶を卜した。これは古くから神託によるものと口碑に伝えている。昭和十七年二月、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

春日神社　旧村社

岡山市西大寺新一五一六

主祭神　天児屋根命　武甕槌命　斎主命　比売神
例　祭　十月十六日
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿
摂末社　荒神社　稲荷神社
氏子数　六〇戸
宮　司　祝部三郎
責任役員　小田良介　行司完一　矢部坂次　小田兼夫
由緒沿革　本神社は文和元年の頃、大和国春日神社から勧請したものと口碑に残っている。往古は田村字大明神に鎮座せられたが、その後、同村字大仏に、また寛仁七年三月には現在の社地にお遷し申し上げた。本神社の旧御神号を春日大明神と申し、今なおその遺跡が存している。

片山日子神社　旧郷社

邑久郡長船町土師七九九

主祭神　片山日子命

る。中古社号を神崎大明神と称し、御祭神は猿田彦命であったが、明治二年旧号神前神社の名に復し、祭神として珍彦命を奉斎した。神武天皇の御東征の海路と御嚮導せられた神であるので、例祭の相嘗に高島神を祭り、三十六台の御神饌を献ずる例がある。明治四十二年九月、無格社素盞嗚神社を合祀した。同四十四年十二月、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

例　祭　十月十日・十一日
境内地　五〇二・八九坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　随身門
摂末社　木野山神社　稲荷神社
氏子数　二〇〇戸
宮　司　高原家康
責任役員　牧野　勉　安達兼明　井上泰彦
由緒沿革　明治六年郷社に列格。延喜式神名帳に伊勢国鈴鹿郡片山神社と同神とある。備前国神名帳には従二位片山日子神社とある。往古現在の社地の前方の神山に鎮座していたのを、人皇第七十一代後冷泉天皇の御宇、天喜三年乙未八月、勅により現在の地に御遷座したと言う。明治四十年一月、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

神前神社　旧村社

岡山市神崎二四六六

主祭神　珍彦命　素盞嗚尊
例　祭　十月十九日
境内地　二、〇〇四・一九坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　随身門
摂末社　稲荷神社　六社　大物主神社
氏子数　二五〇戸　**崇敬者数**　一五〇人
宮　司　屯倉武夫
責任役員　岡崎若松　森　毅
由緒沿革　本神社は備前国神名帳（総社本）に神前神社、山本氏本に従三位神前明神と記してある旧社であ

木鍋八幡宮　旧村社

邑久郡長船町土師二一九一

主祭神　木閇宿禰命　外三神　相殿　大山咋命　外三神
例　祭　十月十日・十一日
境内地　七七七坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　随身門　社務所
摂末社　荒神宮　天満宮　保食神社　稲荷神社
氏子数　二〇〇戸　**崇敬者数**　三〇人
宮　司　高原家康
責任役員　久山徳一　石原　甫　藤原初雄
由緒沿革　木鍋とは木閇の訛伝で、木閇は気陪で、豊受の受と同じ意で、五穀を守護し給う縁由である。木閇宿禰命は、大和国広瀬郡木瓶村に御住居になっていたのを土師村に奉祀し、木閇神社と称した。人皇第四十九代光仁天皇の宝亀三年正月、備前守藤原朝臣雄依が神託を蒙って大和国奈良郡から八幡宮を勧請し、木鍋八幡宮とした。本神社は癇疾の者に霊応著しき神徳がある。明治四十年十月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

貴船神社

邑久郡邑久町山田庄一三六六

主祭神　高龗神
例　祭　十月二十三日
境内地　三、五六二・五五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　滝宮神社　奥神社　西神社　稲荷神社
氏子数　九〇戸
宮　司　島津一正　**禰　宜**　大森二郎
責任役員　朝倉　満　秋山　弘　川井虎男
由緒沿革　本神社は創建年月日は不詳であるが、山城国愛宕郡官幣社貴船神社の御分霊を、古くから才名円通寺の代々の別当職が神職を兼ねて奉仕した。旧社号は貴船大明神と称した。

荒神社　旧無格社

岡山市上阿知二三四九

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　七月二十六日　**境内地**　一三四坪

主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社
氏子数　七二戸
宮　司　屯倉武夫
責任役員　岡本彦雄　柴田公夫　近藤茂雄
由緒沿革　創建年月・由緒不詳。往昔上阿知中山にあったが、現地に移された。明治十二年七月十五日長床を新築した。本殿及び拝殿は明治三十四年五月大改修を行った。

荒神社　旧無格社

邑久郡邑久町豊原八七〇

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月五日　**境内地**　三七・八四坪
主要建物　本殿
崇敬者数　三〇人
宮　司　島津一正
責任役員　中尾綾夫　外三名
由緒沿革　創建年月日・由緒等不詳。

荒神社　旧無格社

岡山市西大寺一宮一六五七

主祭神　火産霊神　国津比古神　奥津比売神

例　祭　十月十六日　**境内地**　五九・三一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
責任役員　川崎直助　森本嘉太郎
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳。往昔から産土滝神社の末社で地方民の崇敬が篤い。

幸地山神社　旧村社

岡山市邑久郷一三二八

主祭神　応神天皇　相殿　神功皇后　姫大神　菅原神　天之御中主命
例　祭　十月九日
境内地　一三、三一七・八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　長床　神楽殿
摂末社　大元神社　稲荷神社　荒神社　厳島神社　天之御中主神社　日吉神社
氏子数　二〇八戸　**崇敬者数**　一、〇四〇人
宮　司　児仁井昌一
責任役員　浮田保太　山本鉄二
由緒沿革　本神社は数度の火災で古文書等を失ったが、昔は八幡宮・天神社といったのを、昭和二十年幸地山神社と改称した。「備陽国志」によると、石清水から勧請したらしく、本神社は一郡の総社であったため、郡中の式内外古社を例祭に配祀した。宇喜多氏の崇敬あつく、池田家は社領を寄進した。天神社は往古幸地山東北にあったのを現在地に遷座したという。幸地山は神武天皇御東征の御時、御船を停められたともいう。

金刀比羅神社　旧無格社

邑久郡牛窓町牛窓二九四〇

主祭神　大物主神
例　祭　九月二十八日　**境内地**　六三〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
崇敬者数　一〇〇人
責任役員　高橋完太　坂口嘉三郎　馬場　栄　那須光行
由緒沿革　本神社の創建年代は不詳であるが、牛窓神社古文書に、寛文八年八幡宮に寄宮があったという。享保年間城山に御社殿を建立し移し鎮め奉った。

御霊社　旧村社

邑久郡牛窓町四三四五

主祭神　仁徳天皇
例　祭　十月二十三日　**境内地**　四九四・六八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社
崇敬者数　一〇〇人
責任役員　高橋完太　坂口嘉三郎　馬場　栄　那須光行

由緒沿革　本神社の創建年代は不詳。往古綾浦の御鎮座であったのを、寛文八年八幡宮宮地内に御社殿を建立して遷したと伝える。享保八年十二月願い出、享保十三年三月綾浦に宮屋敷を新にし、御社殿を建立して御遷座し、村内一統を氏子とし、守護神として尊崇をあつめた。明治初年村社になった。

五香宮　旧村社

邑久郡牛窓町牛窓二七二〇

主祭神　住吉三神　神功皇后　応神天皇
例祭　十月十日　**境内地**　五八三・四六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
宮司　岡崎義弘
責任役員　高橋完太　坂口嘉三郎　馬場栄　那須光行
由緒沿革　本神社の創建は不詳。往古は住吉三神を奉祀したが、寛文七年十月池田光政公が再建し、神功皇后を配祀して五香宮と改称した。池田家累代の崇敬が厚く、瑞籬鳥居等の寄進があった。口碑によると、神功皇后が熊襲御親征のみぎり、吉備の海を御通過の節、牛窓の浦に御投錨、当神社に戦勝を御祈願をされたという。後、三韓から御凱戦の上、御鎧等を奉納されたと伝える。

正八幡宮　旧村社

邑久郡邑久町尻海九八〇

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后　外十柱神
例祭　十月十日　**境内地**　一、〇一三坪
主要建物　本殿　本殿　拝殿　幣殿
摂末社　護王神社　荒神社　稲荷神社　大国主神社
氏子数　七〇戸
宮司　屯倉武夫
責任役員　岡崎勉　出射文男　大重春男
由緒沿革　本神社の創建年代不詳。中古は地主権現と称し、千手山弘法寺の社僧が奉仕していた。明治三年十二月から神職が奉仕し、社号を千次神社と往古に復した。本神社は池田家の崇敬が深く、元禄十一年三月、社領百石の寄進があった。天明四年、池田宗政が山王宮を再建し、明治三年十一月まで社領五十石を奉納した。同十二月更に拾五俵一斗四升二合を奉納し、明治五年六月まで寄進した。明治四十年十月、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

多賀神社　旧村社

邑久郡長船町磯上二八八九

主祭神　伊邪那岐命　素盞嗚尊　大山津見命　奥津彦命　奥津姫命　保食神
例祭　十月二十日　**境内地**　八二五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神門　随身門　社務所
摂末社　稲荷神社　美和神社
宮司　島津一正
責任役員　高原茂　黒田貢
由緒沿革　本神社の創建年代は嘉応以前と思われる。

例祭　十月十日　**境内地**　一〇、九八九坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　随身門
摂末社　高良神社外四社　飛地境内神社七社
氏子数　五〇〇戸　**崇敬者数**　二〇〇人
宮司　川崎弘海
責任役員　宇津木正　古武勝美
宝物　棟札三枚　金幣二本　木造狗犬一対
特殊神事　禰家制度　御神幸
由緒沿革　元正天皇の養老元年、豊前宇佐から勧請。応永年中、備前沙弥が本社を建立。社領は九十町。元亀年中、浦上遠州が大願主となり、市村真補入道、河村左衛門が神殿を再建し、五十石の寄進があったが、これは後、金吾中納言により没収された。後、池田輝政以来累代一石が寄進せられた。寛文十二年七月本社並びに釣殿・拝殿・廻廊その他再興に当り、池田継政から米十石の寄進をうけている。明治四十二年神饌幣帛料供進神社に指定せられ、翌年村社伊勢荒魂神社外六社を合祀した。

素盞嗚神社　旧村社

邑久郡牛窓町牛窓四九二八

主祭神　素盞嗚尊
例祭　十月二十三日
境内地　一、五三三・二五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社
責任役員　高橋完太　坂口嘉三郎　馬場栄　那須光行

千次神社　旧村社

邑久郡牛窓町千手一四五

主祭神　千次神　日吉神

由緒沿革　本神社の創建年代不詳。社記によると、寛文八年に紺浦の疫神社を八幡宮御宮地に御遷座申し上げ、社殿を建立して奉仕したとある。（牛窓神社記録）。同記に享保五年に宮屋敷に御社殿を建立してお遷し申し、たとある。

諏訪神社　旧村社

邑久郡長船町牛文一〇二三

主祭神　建御名方神　相殿事代主神外三神
例祭　十月十二日　**境内地**　七七二・七三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　社務所
摂末社　稲荷神社　池鯉鮒神社　疫神社　牛神社　東照宮　木野山神社
氏子数　一〇〇戸
宮司　高原家康
責任役員　高原実　渋谷清
由緒沿革　「備陽国志」に〈諏訪大明神牛文村〉とある。宝暦十一年神社書上帖には、相殿四座の内三座は同殿、東照権現の御社は一尾越別殿とある。明治五年村社に列格された。

赤枝織部と藤原為房とが嘉応元年大和国三輪の里から、備前国邑久郡磯上の内柏山に移住した。為房は大三輪明神の衛士であったため、御分神の御分霊を多賀神社の境内に勧請し、明徳元年多賀神社の麓に住居したという。

宝神社　旧無格社

岡山市宝伝三八〇三

摂末社　疫神社
氏子数　六〇戸
宮司　磯崎旭郎
責任役員　山本一郎　藤原弘道　川崎直助　森本綾夫
由緒沿革　本神社の創建年代不詳。「備陽国誌」に瀧権現とあり、現在その社名を刻んだ豊島石片を本殿内に保存している。けだし神社名は前方懸崖の直下に奔流している丸山川の瀧津瀬によって起った名であろう。この地方の産土神として尊崇きわめて篤い。境内末社疫神社の例祭には子供角力の神事があって賑う。

主祭神　彦火火出見尊
例祭　十月二十三日　**境内地**　二〇〇坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　牛神社
氏子数　一五〇戸
宮司　光本亀男　**禰宜**　小橋繁
責任役員　浮田直行　吉永碩夫　豊田豊　浮田正志
由緒沿革　創建年月・由緒不詳。

綱掛石神社　旧無格社

岡山市東片岡一六九五

主祭神　田心姫命　狭依姫命　湍津姫命
例祭　十月九日　**境内地**　七二四・六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
責任役員　川崎直助　植木貞　森本綾夫　横井準章
由緒沿革　創建年月日等不詳。神武天皇の御東征の時、御船の纜を掛け給うた石だという大きな石がある。この石の下に奉斎する社であって、安仁神社の末社として地方民の崇敬が厚い。

瀧神社　旧村社

岡山市西大寺一宮一六五七

主祭神　瀬織津姫命　大已貴命　素盞嗚尊
例祭　十月十日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門

天神社　旧無格社

岡山市東片岡一五九三

主祭神　菅原道真神

例　祭　十月十五日
主要建物　本殿　拝殿　幣殿
崇敬者数　四〇人
責任役員　植木　貞　高平仲市
由緒沿革　旧国幣中社安仁神社の境外末社で、古道里近郊の崇敬が厚い。

天神社　旧村社

邑久郡牛窓町牛窓三二二四

主祭神　少彦名神　相殿菅原神
例　祭　十月十二日
境内地　二、一六〇・二二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　荒神社
崇敬者数　二〇〇人
責任役員　高橋完太　坂口嘉三郎　馬場　栄　那須光行
由緒沿革　本神社の創建年代は不詳であるが、本町の中央に御鎮座せられ、牛窓神社の春季大祭の時の神幸の宮となる。享保時代は一か月間、宝暦時代以後は十五日間、或は七日間牛窓神社を相殿に奉祀する。特に商業の守護神として尊崇をうけたという。宝暦六年四月に菅原神を太宰府天満宮から勧請し相殿に奉祀した。

天神社　旧村社

邑久郡邑久町大窪一一一二

主祭神　少彦名命　菅原神
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　随身門　手水舎
社務所
摂末社　若宮神社　稲荷神社　気比神社　天神社
氏子数　三〇〇戸
宮　司　川崎弘海　禰　宜　業合隆雄
責任役員　岡崎英男　内田静夫
宝　物　色々威甲冑一領（国指定重要文化財）
由緒沿革　本神社は備前国神名帳山本氏本に「従五位上豊原北島神」とある備前国古社百五社の一である。至徳元年の扁額には上八幡大菩薩、降って貞享の頃には正八幡宮とある。明治三年現在の神社名に改めた。明治四年郷社に列格。明治四十一年一月、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。同四十二年五月に保食神社、同四十四年九月八幡宮をそれ〳〵合祀した。「備陽国誌」に八幡宮社領八石三斗五升七合所祭応神天皇、社記略に「舒明天皇六年十二月十五日豊前宇佐より勧請す」とある。

豊原角神社　旧村社

岡山市西大寺浜一〇四一一

主祭神　豊原角神　大己貴命　少彦名神
例　祭　十月十五日
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　随身門
摂末社　稲荷神社　荒神社
氏子数　一八〇戸
責任役員　瓶井　貢　末瀧改治　原田　巧　槁本　久
由緒沿革　本神社はもと白山権現と称していた。明治二年白山神社と改称し、同三年豊原角神社と改称した。社領は五十石。池田光政が社領四百七斗九升九合を浜村内高引で奉献した。応永元年に火災のため古文書を焼失して。創建の年代由緒は不明である。

豊原南島神社　旧村社

岡山市長沼一四七四

主祭神　豊原南島神
例　祭　十月六日　境内地　九六〇・九坪
主要建物　本殿　奥拝殿　中拝殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　荒神社
氏子数　一八九戸
宮　司　川崎弘海
責任役員　佐藤一正　末安力男　佐藤　敏　那須貫一　相沢信男　池本克巳
由緒沿革　本神社は「備前式社考」には「従五位上豊原南嶋明神」山本氏本には「従五位上豊原南嶋明神」とある。備前国古社百二十八社の一である。明治四十二年五月、境外末社円定寺村社素盞嗚神社、荒神社、寺前伊勢宮、八柱神社、岩神、松殿神社、中姓寺荒神社、東谷荒神社、田原神社を合祀した。

八幡宮　旧村社

邑久郡邑久町豆田七五五

主祭神　神功皇后　応神天皇　姫大神
例　祭　十月十日　境内地　五九六坪
主要建物　本殿　弊殿　拝殿　門　物置
摂末社　稲荷神社　若宮　池岩神社　保食神社　荒神社
氏子数　六〇戸　崇敬者数　三〇〇人
宮　司　島津一正
責任役員　福間　一　岡　勝雄
由緒沿革　当神社は創立年月日、由緒など不詳であるが、社領二石二斗の神社である。摂社の一つ池岩神社は、通称〝お祇園様〟として旧六月十四日の祭日には、昭和十九年頃までダシ（史上伝説上の名場面を実物大の人形で再現）を飾っていた。今も屋台店が出、花火

例　祭　十月十六日　境内地　九四・四七坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　荒神社　牛神社　薬司神社
崇敬者数　一〇〇人
宮　司　島津一正
責任役員　小倉正三　服部義明
由緒沿革　創建年月日・由緒等は不詳であるが、天文御帳に天神社とある古社である。

天満宮　旧村社

岡山市犬島六七一一

主祭神　菅原道真公　相殿八幡大神　春日大神
例　祭　五月三日　十一月三日
境内地　二四一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　物置
摂末社　荒神社　金刀比羅宮　祇園社
氏子数　一三四戸　崇敬者数　三〇〇人
宮　司　光本亀男　井上時男　中山謙二　禰　宜　小橋　繁
責任役員　中村万三郎
由緒沿革　本神社は往古犬島に在って、豊島石の社であったが、文明元年九月再建して木の社とし、正徳元年九月池田公の命で御社造営御廻の際、当島奉行河瀬、社司片岡が相殿三神を勧請した由である。元文三年九月再建立。延享四年九月石材で再建した。明和四年、拝殿を再建、安永五年屋根葺替、文政十二年本殿改築。明治三十二年十月、字六郎島の現位置に新築遷座し奉った。当島には菅公にゆかりの伝承がある。

豊原北島神社　旧郷社

邑久郡邑久町北島一一八六

主祭神　豊原北島神　品陀和気天皇　息長帯媛命
比咩大神　外六柱神
例　祭　十月十五日

殿上西神社　旧村社

備前市佐山二二九

主祭神　殿上西神　殿上東神　外四柱
例　祭　十月一日
境内地　一、七八七・三五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　随身門
摂末社　高良神社　稲荷神社　保食神社　荒神社
氏子数　一六三戸
宮　司　高原家康　禰　宜　武内浩子
責任役員　有道義明　藤沢幹夫　小長春次
宝　物　日本刀（長船祐定）　天狗面
由緒沿革　本神社は本国総社名帳に「殿上西神社」山本氏本に「従五位上殿上西明神」と記載してある。備前国古社百二十八社の一社である。明治四十二年に殿上東棟神社と　春日神社とを合祀した。社領一石。

例　祭　十月第三日曜日
境内地　四八〇坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　随身門
摂末社　荒神社　伊羅神社　稲荷神社　本宮　愛宕神社　若宮　明現神社
氏子数　一〇二戸　崇敬者数　五一〇人
宮　司　島津一正
責任役員　宮宅睦治　末石慶太
由緒沿革　本神社は創建年月日・由緒など不詳である。「備陽国誌」に土戸八幡宮とあるのは当神社のことで社領一石であった。この地方の鎮守神として崇敬が篤い。

八幡宮　旧村社

邑久郡邑久町福元二五七

主祭神　神功皇后　応神天皇　玉依姫命
例　祭　十月十日　境内地　五九六坪
主要建物　本殿　弊殿　拝殿　門　物置
摂末社　稲荷神社　若宮　池岩神社　保食神社　荒神社
氏子数　六〇戸　崇敬者数　三〇〇人
宮　司　島津一正
責任役員　福間　一　岡　勝雄
由緒沿革　当神社は創立年月日、由緒など不詳であるが、社領二石二斗の神社である。摂社の一つ池岩神社は、通称〝お祇園様〟として旧六月十四日の祭日には、昭和十九年頃までダシ（史上伝説上の名場面を実物大の人形で再現）を飾っていた。今も屋台店が出、花火

八幡宮 旧村社

岡山市東片岡九八〇

主祭神 応神天皇 仲哀天皇 神功皇后
例　祭 十月十二日
主要建物 本殿 幣殿 拝殿 随身門 長床
摂末社 稲荷社 疫神社 片岡別宮社 荒神社 牛神社
氏子数 四四〇戸
宮　司 光本亀男　**禰　宜** 小橋 繁
責任役員 光本政一　井上五一　井上新次　山本忠一
由緒沿革 文治二年八月二十一日、山城国男山八幡宮から奉斎した。大正十二年十月十五日神饌幣帛料供進神社に指定された。

八幡宮 旧村社

邑久郡邑久町上笹加二

主祭神 仲哀天皇 応神天皇 神功皇后
例　祭 十月十四日　**境内地** 七三坪
主要建物 本殿 幣殿 拝殿 随身門 社務所
摂末社 荒神社 若宮 磐長姫神社 稲荷神社
氏子数 五〇戸
責任役員 山本秋男　竹原末雄

八幡宮 旧村社

邑久郡長船町八日市二五二

主祭神 仲哀天皇 応神天皇 神功皇后
例　祭 十月十四日　**境内地** 七三坪
主要建物 本殿 幣殿 拝殿 随身門
摂末社 若宮 磐長姫神社 稲荷神社
氏子数 五〇戸
責任役員 竹原末雄　山本秋男

八幡宮 旧村社

邑久郡邑久町上笹加二

主祭神 仲哀天皇 応神天皇 神功皇后
例　祭 十月十四日　**境内地** 五、三八坪
主要建物 本殿 幣殿 随身門 社務所
摂末社 四社神社 五社神社 稲荷神社
氏子数 一、〇三二人
宮　司 小坂琢美　**禰　宜** 高原家康
責任役員 原田梅七　高原一馬　大森唯治
会　物 唐細工の面　上つ鞘、下つ鞘の総馬　(文禄元年豊臣秀吉朝鮮征伐の際奉納)

由緒沿革 本神社は延文五年四月、播州雲野城主脇坂忠兵衛尉祖を蒙って、豊前国から八幡宮を勧請してこの地を創祖した。本神社は仲哀天皇の皇子を首座に奉祀しているので皇子八幡宮と称していたのを、文禄年中、王持と改称した。享保三年と天保十一年に改築を重ねている。明治四十三年五月、八幡宮・北池宮・稲荷神社等の四神社を合祀し、更に大正元年五社神社を合祀した。

八幡宮 旧村社

備前市鶴海三七一二

主祭神 仲哀天皇 応神天皇 神功皇后

由緒沿革 備陽国史および宝暦十一年の神社書上帳、また寛文十一年の神社改帳に八日市村八幡宮とある。池田家所蔵文書に、明治三年庚午書上神社明細帳六号の部備前国邑久郡八幡宮社地一反八畝歩とある。嵌、外に宮籔二反歩境内除地とある。

八幡宮 旧村社

邑久郡長船町服部二一七

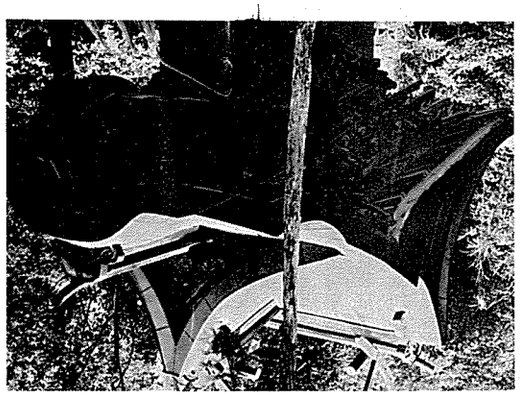
主祭神 品陀和気命
例　祭 十月二十九日　**境内地** 三三八坪
氏子数 三〇〇戸
宮　司 大原武久
責任役員 野田昇一　石原武男
由緒沿革 池田家所蔵文書に、明治三年庚午書上神社明細帳六、邑久郡の部に備前国邑久郡服部村鎮座八幡宮社地一畝弐十一歩とある。

八幡宮 旧村社

邑久郡邑久町下山田一〇五六

主要建物 本殿 拝殿 随身門 社務所
摂末社 稲荷神社 天神社 荒神社 若宮
氏子数 二三〇人
兼務者数
宮　司 田渕 勇 **禰　宜** 大脇洋男
責任役員 鎧 田渕一雄 **会　計** 田渕 鎧
特殊神事 七瓶神幸
由緒沿革 創建年代不詳。
経っている。文明十八年以前に社殿が焼失し、西門坊は所属の神宮寺で、聖武天皇御在位の時の建立である。当神社は称徳八幡宮とも称した。

主祭神 応神天皇 仲哀天皇 神功皇后 上宮男命
例　祭 十月四日　**境内地** 七六坪



を打ち上げ、近郷の崇敬者より多数参拝し、夏祭としてにぎわっていた。最近少しさ復興しようという気運がある。

八幡宮 旧村社

邑久郡邑久町福中九六〇

主祭神 神功皇后 応神天皇 玉依姫命
例　祭 十月二十四日
境内地 三、八九九・五二坪
主要建物 本殿 拝殿 随身門 物置
摂末社 速凪神社 伊勢宮 松殿神社 五社宮
氏子数 一八〇戸　**崇敬者数** 九〇〇人
宮　司 島津一正　**禰　宜** 次田圭介
責任役員 家野富太　今田 稔
由緒沿革 本神社の創建年月日、由緒などは不詳。備前国古社二十八社の一で、国主池田氏が崇敬し、社領として毎年米三石四斗七升の寄進が明治三年まであった。祭礼の夜、鎮座地宮山に青年団員の手で高く掲げられる十二張の提燈の明りは遠く小豆島からも見えたという。本殿は昭和十一年改築。数年後、随身門を改築した。

八幡宮 旧村社

邑久郡長船町八日市二五二

主祭神 応神天皇　仲哀天皇　神功皇后　外十七柱

例　祭 十月六日
境内地 二、九〇一・六四坪
主要建物 本殿 幣殿 拝殿 釣殿
摂末社 伊勢神社 荒神社
氏子数 一、〇三〇戸
宮　司 小橋 繁
禰　宜 井上五一
責任役員 光本政一　井上新次　山本忠一
由緒沿革 文治二年八月二十一日、山城国男山八幡宮から奉斎した。大正十二年十月十五日神饌幣帛料供進神社に指定された。

中筒男命　底筒男命
例　祭　十月一日　**境内地**　五七七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　祇園宮　天神社　稲荷神社　寄宮　荒神社
氏子数　二四五戸
宮　司　高原家康
責任役員　横山松之助　小林敏行　谷本源太郎
宝　物　日本刀一振り（長船祐包作）
由緒沿革　仲哀天皇が海路で九州に御親征なさったときご避難せられたので現在の地に男山八幡宮を勧請奉祀したと伝えられている。明治四十二年住吉島に鎮座の住吉神社を合祀した。池田家から八幡宮に二斗七升、住吉神社に五斗二升の寄進があった。

八幡宮　旧村社

岡山市西大寺川口二三二

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月十六日　**境内地**　一五五・二二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社
氏子数　四〇戸
責任役員　阿部蔦男　阿部好文　柴　弘司
由緒沿革　本神社は往古、上道郡雄神村窪八幡宮の御神幸所であったという。往時吉井川が本村の東を流れ神崎村に注いでいた当時は、金岡東荘の内であったと口碑に伝えている。勧請由緒不詳。

八幡宮　旧村社

邑久郡邑久町大窪四一八
主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月十八日　**境内地**　五九一・五一坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　随身門
摂末社　稲荷神社　天満宮　倉稲神社　牛神社
氏子数　一五〇戸
宮　司　島津一正
責任役員　小倉正三　祇園清太　青木正昭　奥田紋男
由緒沿革　本神社の創建年月日・由緒等は不詳であるが、もと大ヶ島村阿智山にあり、阿智本八幡宮と奉称した。仁平三癸酉年九月現在地に奉遷した。享保の頃、八幡宮と改称した。池田家から社領三石五斗七升の寄進が明治三年までつゞいた。

八幡宮　旧村社

邑久郡邑久町山手一〇二六
主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后
例　祭　十月六日
境内地　一、九五八・四四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　稲荷神社　西荒神社　東荒神社　日吉神社
氏子数　六〇戸
宮　司　島津一正　**禰　宜**　大森二郎
責任役員　吉峰正作　嘉数隆宗　嘉数多喜夫
由緒沿革　本神社の創建年代不詳。明治八年、八幡宮と改称した。

八幡宮　旧村社

邑久郡長船町飯井二七〇三
主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月十六日
境内地　二、四二六・一四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　稲荷神社　牛神社
氏子数　六〇戸
宮　司　島津一正　**禰　宜**　大森二郎
責任役員　宇治忠夫　長瀬武士　太田義夫
由緒沿革　式外の古社で、もと字早稲田に坐す従五位上稲都神社に鎮座せられていたが、宝亀二年九月某日、王金明徳阿字八幡宮を八幡山の麓に奉遷した。

八幡宮　旧村社

邑久郡邑久町山手一六七九
例　祭　十月十五日　**境内地**　六一二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　疫隅社　天神社　荒神社　佐多彦神社　天照大神　天津神社　高良神社　保食宇賀神社　若宮神社　宇賀神社
氏子数　一二〇戸
禰　宜　池畑太根夫
責任役員　岡崎義興　木村一男
由緒沿革　飯井八幡宮は往昔、須恵の広高山から勧請した由で、広高八幡宮の高の字をとり、往昔は飯高八幡宮と称した。寛文年中の記には伊高とある。維新後、伊良高八幡宮と称した。

八幡宮　旧村社

邑久郡邑久町尾張三九八
主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月六日　**境内地**　四三九・六三坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　随身門
摂末社　秋葉宮　大神宮　金神社　稲荷神社　大松神社　荒神社　薬師宮　乾角神社　祇園宮　天満宮
責任役員　川崎武士　大倉昭一　上村清員
由緒沿革　式外古社で、もと山手村早稲田に坐す従五位上稲都神社に鎮座せられていたが、宝亀二年九月、十町余り未申の方尾張村に奉遷し八幡宮と改称し、祀官堀田左門が奉仕した。至徳三年改築。神職堀田茂大夫は元禄三年五月二十六日死亡し、嗣子なく記録は散逸した。池田家から社領一石六斗を明治三年まで寄附せられている。

堰爪神社　旧村社

邑久郡邑久町福山二〇二
主祭神　堰爪神
例　祭　十月十九日
境内地　二、二八三・七六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　稲荷神社　木野山神社　素盞嗚神社
氏子数　七〇戸
宮　司　島津一正
責任役員　太田勲　三木留五郎　川部政夫
由緒沿革　創建年月日・由緒等不詳。古くから八幡宮堰爪神社相殿とし、明治初年神社整理の際、氏神に、八幡宮が相殿に変更されている。明治四十四年には八幡宮のみを豊原北島神社に合祀した。本国神名帳には「正三位堰爪大明神」とある。明治九年十月十九日、堰爪神社と復称し御祭神を堰爪神と改定された。大正十一年五月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

日吉神社　旧村社

邑久郡邑久町豊原二九四一
例　祭　九月三十日　**境内地**　宇佐八幡宮境内
主要建物　本殿
宮　司　大西定之
責任役員　野田昇一　石原武男
由緒沿革　創建年月・由緒不詳。

松江伊津岐神社　旧村社

岡山市邑久郷一五〇〇
主祭神　大山咋命
例　祭　五月八日
氏子数　三〇戸
宮　司　島津一正
責任役員　中尾綾夫　外三名
由緒沿革　本神社の創建年月日・由緒等不詳。もと、大ヶ島村大雄山大賀島寺の境内の御鎮座であったが、明治二年火災のため社殿全部が焼失したので、笠松神社に相殿として奉斎した。

日吉神社

邑久郡長船町服部一一一九
主祭神　大山咋命　外相殿四柱

主祭神　五瀬命　若御毛沼命

例　祭　十月十二日　**境内地**　二三一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂　末　社　稲荷神社　沼名前神社
氏　子　数　二七戸　**崇敬者数**　一五〇人
宮　　司　児仁井昌一
責任役員　出射一夫　近成尚阜　出射輝夫
由緒沿革　式外古社備前国百二十八社の一社で、創建由緒不詳であるが、古老の口碑に、往昔神武天皇が御東征の時、皇兄五瀬命が太伯海に御船を進めさせ給うて、この太伯村邑久郷の入江に舟をお泊めになったのを、国人どもが待ち斎き奉った地であるから、古くは待江といった。今松江と書くのは仮の字である。

美和神社　旧村社

邑久郡長船町福里三四一

主祭神　大物主神
例　祭　十月二十四日　**境内地**　一〇二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神門　神庫
摂　末　社　若宮　四社宮　稲荷神社　疫隅神社　松尾神社　備後神社
宮　　司　大西定之
責任役員　雪吉　晃　池畑辰男
由緒沿革　延享三年寅十二月十八日延喜式内美和神社再興上願。延享四年参月御聞届。寛延二年社殿完成し、神霊を奉遷した。

美和神社　旧郷社

邑久郡長船町東須恵一〇六四

主祭神　大物主神　相殿　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后　天照大神荒魂　天日方奇日方命
例　祭　十月九日
境内地　二、七八三・五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂　末　社　武甕槌神社　稲荷神社　日吉神社　天神社
氏　子　数　二〇〇戸
禰　宜　池畑太根夫
責任役員　成本　均　大森　益
由緒沿革　邑久郡三座の一つとして、当神社の名が延喜式神名帳に見えている。明治三年二月の祈年祭、同十一月の新嘗祭と両度の国祭が行われたとき、藩主池田章政が幣帛を供進せられている。明治六年郷社に列せられた。明治四十一年一月、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

湯次神社　旧村社

邑久郡長船町磯上三二七七

主祭神　湯次神　菅原神　素盞嗚尊　奥津彦命　奥津姫命　倉稲魂命　保食神
例　祭　十月十九日　**境内地**　七〇三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神門　随身門　社務所
氏　子　数　二〇〇戸
宮　　司　島津一正
責任役員　高原　茂　黒田　貢
由緒沿革　本神社は備前国総社本、山本氏本、大滝本、西大寺本、に従五位上湯次上湯次明神とある。備前国百二十八社の一つである。往古家高山の中央にあったが、嘉吉元年山麓の現在の地に移転したと言う。現在でも旧社地に根石の断片が点々としている。中古から家高八幡宮と称したが、明治三年二月旧号の湯次神社と社号を改めた。文明八年、浦上則元・島村景貫が本殿を再建、寛文六年から明治三年迄、池田家から社領畑八斗の寄進があった。昭和二十年六月、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

靱負神社　旧村社

邑久郡長船町長船一一五一

主祭神　天忍日命　御真木入日子印仁恵命　菅原神　少彦名命　天目一神　豊受大神　磐長比売神　大年之神　倉稲魂命　火産霊神　奥津比古神　奥津比売神
例　祭　十月二十一日
境内地　四、〇一七・三九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
氏　子　数　九五戸　**崇敬者数**　五三人
宮　　司　大脇義男　**禰　宜**　高原弘美
由緒沿革　本神社は備前国神名帳（総社本）に「靱負

神社」山本氏本に「従五位上靱負明神」と記載してある備前国古社一二八社の一社で、宝暦年中神社書上帳に、長船村五位大明神と記載してあるのは、神階によって称え奉ったものであろう。明治四十四年十二月、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

若宮八幡宮　旧村社

邑久郡邑久町尻海三〇三八

主祭神　仲哀天皇　仁徳天皇　神功皇后　大山祇神
例　祭　十月十六日　**境内地**　三、七一八坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　随身門　社務所
摂　末　社　神田稲荷神社　外十六社　飛地境内神社一社
氏　子　数　二九〇戸　**崇敬者数**　八〇〇人
宮　　司　川崎弘海
責任役員　金居春夫　神坂寿夫
宝　　物　棟札二枚　金幣二本　掛軸二本　絵馬十二面（県重要文化財指定を含む）
特殊神事　禰家行事と末社神田稲荷神社の会陽修正会祭
由緒沿革　古くは字大土井カベラに鎮座し、結体角弥藤蔵秀則、朝日寺、横尾光花寺の三家が奉仕したが、寛正六年乙酉十四日現在の地に移転した。社領八斗。明治四十二年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。翌年五月二十八日、村社大山祇神社外境外末社を合祀した。末社の神田稲荷神社は神徳顕著であるため人々の尊崇が篤い。寛政年間また明治四十年に改築した。

家建て

私達日本人には、物と心、物と神とは一つであるとする、深い考えがあり、物の出来るのは、すべて神の御恵によるという、美しい信仰がある。例えば、新しく家を建てようとすれば、先ずその土地の神々様をまつり、つゞいて工事の区切り区切りには、必ずそれぞれのお祭をして、工事の安全や、その家に住む人々の、永遠の幸福をお祈りするのを大切なしきたりとして、今でも次のような祭祀を厳重に行っている。

地鎮祭

トコシズメノマツリとよむが、近来は音読している。古くから鎮祭・鎮謝・地祭・鎮地・鎮・地曳・地勧請等という。

土木・建築等の起工に当り、常日頃よりその土地を守護し給う産土神、大地を主宰し給う大地主神に奉告し、工事の安全や順調な竣工を祈願する祭儀である。この起源は古く、古語拾遺の神武天皇の条、日本書紀の持統天皇の条に、大宮地の霊を祀られたことが記載してある。大正四年の明治神宮御造営に当り、儀式の基準が整った。

地鎮祭後に行われる祭儀には次の如きものがある。

釿始祭　チョウナハジメとも云い、大工の仕事始めを祝う祭である。
立柱祭　ハシラダテの祭で、始めて柱をたて荒木組をはじめる祭である。
上棟祭　荒木建てが全部終り、棟木上げがすんだ時に行う、ムネアゲ祭である。これは棟札を納め、祝餅を播いて祝う祭である。
家堅祭　ヤガタメの祭であるが、地方によっては「ヤウツリ」とも云う。新築落成の祭である。氏神様をはじめ家屋守護の神様を祭り、感謝の誠を捧げて、家の永遠の繁栄を祈念する祭典である。
後鎮祭　家堅祭の後に、前庭で土地の神様に感謝を捧げる祭である。

このほか、大きなビルディング等では、工事の記録を銅板に刻み、建物の基礎に納める定礎祭がある。

これらは、日本人の神に対する、つゝましい心の現れで、誠に美しい風習である。

節句

節句のわけ

長い長い人間生活に、一つの楽しみと、つゝましい願いをこめて、一年をいくつかに区切り、その季節の変りめ毎に、いろいろの行事を行ったのが節句である。

節句と節供

せっくは節句とも節供とも書き、節句は季節の句切りと云う意味であり、節供は季節の変り目毎に、神様をまつり、その時その時の季節のものを神様にお供えしたことから、こんな字を用いるようになった。

いろいろの節句

今皆さんのおうちで行われる節句には、大体次の五つの大きなものがある。

その一、若菜（わかな）の節句　正月の七日に、七草かゆを作ってお供えし、長寿と健康を祈る。

その二、上巳（じょうみ）の節句　桃の節句とも云い、三月三日に**ひな**をかざりあられや菱餅などを供えて、女の子の健康と幸福を祈る。

その三、端午（たんご）の節句　五月五日に武者人形をかざり、菖蒲（しょうぶ）と茅（かや）とよもぎで屋根を葺き、鯉のぼりをたて、柏餅をお供えして男の子の健康と出世を祈る。

その四、七夕の節句　七月七日の夜、笹に五色の短冊をつけ、栗やとうもろこしなどを供えて、**けんぎゅうとしょくじょ**という二つの星をまつり、子供たちの学問や技芸の上達を祈る。

その五、重陽（ちょうよう）の節句　菊の節句とも云います。九月九日に、菊をかざり、菊酒をお供えして、長寿を祈る。陰暦を用いていた頃には丁度菊が真盛りになるので、菊見の宴なども開いていた。

節句はこのように、日本人の生活の中に生まれた喜びとささやかな**祈り**の美しい風習であり、生き方の智恵である。即ちこの季節、季節の行事のくり返しによって人間のくらしに、一つのはげましを与えて来た。激しい世の移り変りのためいつの間にかこんな床しい習わしも忘れ去られようとしているが、とにかく、その家なり人なりによって、せめてこれ等の日を楽しい家庭の祝日として、神さまをまつり、家族団楽の佳き日としたいものである。

上道・西大寺支部（二七社）

石津神社　岡山市吉井七一六……二〇六
恵比須宮　〃　西大寺一二二三……二〇六
雄神川神社　〃　西大寺一四九一……二〇六
金山八幡宮　〃　西大寺上一一一九一一〇……二〇六
北居都神社　〃　東平島一四六八……二〇六
窪八幡宮　〃　久保六一八……二〇七
素盞嗚神社　〃　藤井六五八……二〇七
總社八幡宮　〃　藤井九二九……二〇七
竹原神社　〃　竹原二一九……二〇七
武部神社　〃　谷尻三九……二〇七
立河神社　〃　草ケ部一七四七……二〇八
天神八王子月尾宮　〃　西庄一七三……二〇八
天満宮　〃　金田一〇五一……二〇八
中山八幡宮　岡山市古都南方二七五四……二〇九
八幡宮　〃　内ケ原一……二〇九
八幡宮　〃　百枝月一四六六……二〇九
八幡宮　〃　楢原九七四……二〇九
八幡宮　〃　藤井五五三……二一〇
八幡宮　〃　沼一五一九……二一〇
八幡宮　〃　中尾八〇五……二一〇
福岡神社　〃　西祖二一八・浅川五一九……二一〇
布勢神社　〃　大多羅町五四一一……二一一
宗形神社　〃　沼一八〇一……二一一
裳掛天満宮　〃　金岡一四五八……二一一
山口神社　〃　西大寺市場町一一六七……二一一
往来神社　〃　宍甘一〇〇三……二一一
小童神社　〃　浦間一六三六……二一二

八幡信仰

八幡神にたいする信仰で、最も普及した信仰の一つである。この信仰の源は、九州の宇佐八幡であると言われている。これが中央に進出するのは、奈良の大仏鋳造のとき、宇佐から禰宜尼大神朝臣杜女が上京し、八幡神が大仏鋳造を授けようと託宣したと伝えている。これによって、宇佐八幡神は国家の大事業に関係することとなった。天応元年朝廷から大菩薩号を贈られ、神仏習合の先駆となった。貞観二年、僧行教によって山城石清水に勧請した。この時より、祭神を応神天皇・神功皇后であるとの説が広まり、王城鎮護の神として尊崇し、伊勢につぐ第二の宗廟と称せられた。やがて、源氏の氏神となり、武家政権の成立と共に、武人に篤く信仰されるようになった。

一方、処女懐胎・聖母神子の母子神伝承を基底として、一般民衆の間に広まり、有力な神格として全国的に祭られるに至った。

石津神社　旧村社

岡山市吉井七一六

主祭神　野見宿禰
例　祭　十月十五日　**境内地**　八一一坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　神庫　随身門
摂末社　鈿女神社　稲荷神社　八幡宮　天満宮　荒神社　疫神社
氏子数　一二〇戸
宮　司　大西定之
責任役員　東原太良　吉田　広
由緒沿革　本神社は備前国総社神名帳に石津神社、又山本氏本に正四位上石津明神と記載され、備前国式内外古社百二十八社の一である。宝暦年中改神社書上帳に石津大明神所祭則石津連祖野見宿禰とあるのによって、御祭神は詳に知られる。宝物として、黒田左衛門筆の絵馬一面がある。

恵比須宮　旧無格社

岡山市西大寺一二三三

主祭神　事代主神
例　祭　九月十三日　**境内地**　二〇・六四坪
主要建物　本殿
氏子数　七〇戸

金山八幡宮　旧村社

岡山市西大寺上一一一九一一〇

主祭神　仲哀天皇
例　祭　十月六日　**境内地**　三六二・四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
崇敬者数　三〇〇人
氏子数　七〇戸
責任役員　阿部武雄　太田幸男　川崎武彦
由緒沿革　創建年代・由緒は不詳であるが、玉垣等によると江戸中期の創建であろう。

雄神川神社　旧郷社

岡山市西大寺一四九一

主祭神　神日本磐余彦尊　火々出見尊　天照大神　豊受大神　少彦名命　孝明天皇
例　祭　十月十三日　**境内地**　四三三・九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　社務所
摂末社　稲荷神社　英霊社　**崇敬者数**　三〇〇人
氏子数　五〇戸
責任役員　山崎軍治　軽部醇治
由緒沿革　明治十二年十一月八日創建。

北居都神社　旧村社

岡山市東平島一四六八

主祭神　八束水臣津奴命　築杵等手留比古命
例　祭　十月二十一日　**境内地**　二、五六六坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　神門　神輿庫　社務所
摂末社　祇園宮　天神社　稲荷神社　荒神社　保食神社　多賀神社　祖霊社
氏子数　二五〇戸　**崇敬者数**　七〇人
宮　司　坪井　正
責任役員　吉田　博　加藤辰夫　藤原　智
由緒沿革　創建年月不詳。社伝によると八束水臣津奴命は築杵等手留比古命とご兄弟で、素盞嗚命の御子である。八束水臣津奴命が真銕吹く吉備の国に到りましたところ、遠い昔の上津道居都の辺りは海であったが、築杵等手留比古命と力を協せ、殖産興業の道を教え給い、漣波寄せる平島居都の御山に鎮り給うた。（北居都神社縁記）上代は八束水臣津奴命を北居都、南居都の両神社に分祀し、築杵等手留比古命を西平島築杵神社に奉斎した。神功皇后が三韓征伐の時この津に碇泊せられ、帰途にも船寄し給うたと伝えている。この縁で、住吉三神・神功皇后・仲哀天皇を配祀するようになった。明治四十三年五月九日に本宮北居都神社に、築杵神社・南居都八幡宮・帆負八幡宮を合祀し今日に至っている。神階は従五位上で、延喜式外社、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

宮　司　代務者　松島章雄
責任役員　矢定春吉　藤原鹿一　杉山　清　三宅繁男　岡崎　昇
由緒沿革　昭和二十二年十二月二十二日に火災にかかり創建年代・由緒等は不詳である。

窪八幡宮　旧郷社

岡山市久保六一八

主祭神　品陀和気命　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月十二日　十三日　十四日
境内地　六三六・六三坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿
摂末社　若宮神社　稲荷神社　合祀社　祇園社
氏子数　四、〇〇〇戸　**崇敬者数**　三〇〇人
宮　司　祝部三郎
責任役員　四名
由緒沿革　創建年代不詳。久保の地は江戸時代には備前国上道（或は上東）郡久保村と称し、中世には備前国金岡東荘と称した。これ以前のことは明らかではないが、和名抄に見える上道郡豆田郷の地内に属していたものと思われる。吉井川が児島湾に注ぐ地点に近く、河口の都市の西大寺町に接し、自然の要衝をなし文化が早くから開けた地である。

素盞嗚神社　旧村社

岡山市藤井六五八

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　四月十五日　**境内地**　一〇四坪
主要建物　本殿　拝殿
宮　司　三宅利範
由緒沿革　創建年代・由緒は不詳。

総社八幡宮　旧村社

岡山市藤井九二九

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月十日　**境内地**　九三九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社　稲荷神社
氏子数　四〇戸
宮　司　三宅利範
由緒沿革　創建年代・由緒は不詳。

竹原神社　旧村社

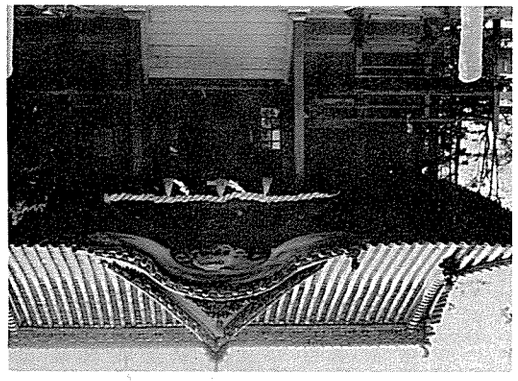
岡山市竹原二一九

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后　大山祇命　木花咲耶姫命　磐長姫命　稲田姫命
例　祭　十月二十日　**境内地**　一、七〇二坪
主要建物　本殿　幣殿　釣屋　拝殿　神輿庫　随身門
摂末社　稲荷社　荒神社　金刀比羅社　木野山神社　素盞嗚神社
氏子数　一二〇戸　**崇敬者数**　三〇〇人
責任役員　根岸熊史　石原勘一　根岸万三　塩見　勇　額田　保
宝　物　高麗犬一対（左甚五郎作）
由緒沿革　創建年代不詳。大正二年十月十四日村社片岡神社、八幡宮、貴船神社三社を合祀して竹原神社と改称した。

武部神社　旧村社

岡山市谷尻三九

主祭神　稲依別命　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后
例　祭　十月二十二日　**境内地**　六六三坪



主祭神　菅原道真公
例　祭　五月十二日・十月二十三日

同一宮の楽頭本に土東郡天神月尾神とある。古は宮地八町四方なり。朝廷より備前国の正税を死て御社を造らしめ賜ふ。又和気郡大瀧寺、上道郡西大寺広谷寺の修正会に百二十八社を祈れり、その神名を読申事御社を読申すに上東郡坐天神八王子月尾宮と上読申すに読申よう其神名帳に見えたり」とある。

岡山市金田一〇五一

天満宮（てんまんぐう）　旧村社

岡山市西七十三

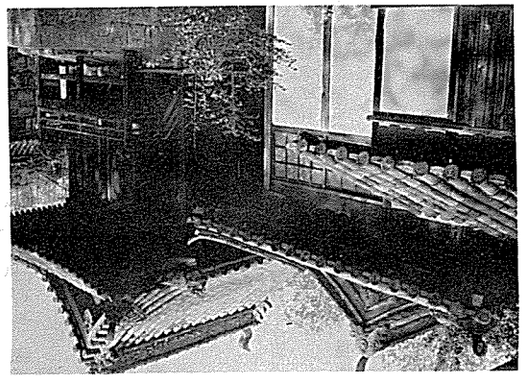
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　荒神社　稲荷神社　菜盛嶋神社　三社宮
崇敬者数　八〇〇人

例祭神　高龗神　闇龗神　罔象女神
例　祭　十月二十三日　境内地　一、八三八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　稲荷神社　菜盛嶋神社　金刀比羅神社　保食神社　荒神社
氏子数　八〇〇戸
宮　司　三宅利範
責任役員　羽原喜治　坂根直敏
宝　物　古記録一巻
由緒沿革　創建年代不詳。備前国総社神名帳に記載の

立石（たていし）神社　旧郷社

岡山市草ケ部一七四七

主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
由緒沿革　創建は明暦三年丁酉歳十二月廿九日夜怪火のため炎上。翌四年四月萱葺本殿を建立。寛文十一年二月瓦葺本殿を造営。その後営繕数次に及んでいる。明治維新は武部八幡宮と称したが、明治二年に武部の二字を除き八幡宮と改称し、明治六年村社に列せられた。明治十三年五月十五日に武部神社と改称した。旧藩政時代の社領は七斗五升であった。



民子（たみこ）神社　旧村社

岡山市古松五一四六

境内地　七九八坪
主要建物　本殿　幣殿　渡殿　拝殿　神楽殿　随身門
摂末社　素盞嗚神社　若宮　春彦神社
宮司不在祭
氏子数　三〇〇戸　**崇敬者数**　八二八人
宮　司　荻野文二　**禰　宜**　荻野素子
責任役員　大橋武男　小泉清一　松尾健治郎　寺尾茂　小泉芳夫
由緒沿革　創建年月不詳。里人に墾田を諭されたる。延喜式に体息ならんとき，里人は皆公稲祠として祀った。慶長五年秋殿わると里人は皆公稲祠として祀った。慶長五年秋殿宇を大いに興した。寛文十一年秋増改築し、末社三祠を祀った。天保四年夏に大修理、明治十九年秋に増改築した。昭和四年秋修理，その後毎年修理を重ね，昭和五十二年神忌一〇七五年に記念修理を行い整備に力め現在に至っている。

中山（なかやま）八幡（はちまん）宮　旧村社

岡山市古都南方二七五四

主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后
例　祭　十月十日
境内地　七〇〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　倉庫
摂末社　稲荷神社　荒神社　素盞嗚神社　注連神社
宮　司　三宅利範　**禰　宜**　野崎清夫

境内地は文化八年に神社と寺院が分離されたが、神位従五位上玉河明神とある。明治二年に八幡宮と改称したが、明治六年に河神社と改称した。昭和二年四月廿五日幣帛供進を造らしめ賜ふ。又和気郡大瀧寺、上道郡西大寺広谷寺の修正会に百二十八社を祈れり、その神名を読申事御社を読申すに上東郡坐天神八王子月尾宮と上読申すに読申よう其神名帳に見えたり」とある。

岡山市金田一〇五一

八幡（はちまん）宮　旧村社

岡山市福原九七四

主祭神　誉田別尊　足仲彦命　息長帯比売命
例　祭　十月十八日　**境内地**　六一七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　荒神社　素盞嗚神社　注連神社

宮　司　坪田直夫　**禰　宜**　坪田
責任役員　野崎清夫　片岡敏夫　川本重夫
由緒沿革　創建年代不詳。

八幡（はちまん）宮　旧村社

岡山市古松一四六六

主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后
例　祭　十月十日　**境内地**　七〇〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　稲荷神社　大和神社　稲荷神社　祇園神社
宮司不在祭
氏子数　三〇〇戸　**崇敬者数**　八二八人
宮　司　荻野文二　**禰　宜**　荻野素子
責任役員　大橋武男　小泉清一　松尾健治郎　寺尾茂
由緒沿革　創建年月不詳。里人に墾田を諭されたる。延喜式に体息ならんとき，里人は皆公稲祠として祀った。慶長五年秋殿わると里人は皆公稲祠として祀った。慶長五年秋殿宇を大いに興した。寛文十一年秋増改築し、末社三祠を祀った。天保四年夏に大修理、明治十九年秋に増改築した。昭和四年秋修理，その後毎年修理を重ね，昭和五十二年神忌一〇七五年に記念修理を行い整備に力

八幡（はちまん）宮　旧村社

主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后
例　祭　十月十八日　**境内地**　六一七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　稲荷神社　荒神社　素盞嗚神社　注連神社

宮　司　坪田直夫　**禰　宜**　坪田
責任役員　野崎清夫　片岡敏夫　川本重夫
由緒沿革　創建年代不詳。

八幡（はちまん）宮　旧村社

岡山市福原九七四

主祭神　誉田別尊　足仲彦命　息長帯比売命
例　祭　十月十八日　**境内地**　六一七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　倉庫
摂末社　荒神社　素盞嗚神社　注連神社

宮　司　三宅利範　**禰　宜**　野崎清夫
責任役員　野崎清夫　片岡敏夫　川本重夫
由緒沿革　創建年代不詳。

八幡（はちまん）宮　旧村社

岡山市古都南方二七五四

主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后
例　祭　十月十日　**境内地**　七〇〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　倉庫
摂末社　稲荷神社　大和神社　稲荷神社　祇園神社
宮司不在祭
氏子数　三〇〇戸　**崇敬者数**　八二八人
宮　司　荻野文二　**禰　宜**　荻野素子
責任役員　大橋武男　小泉清一　松尾健治郎　寺尾茂
由緒沿革　創建年月不詳。里人に墾田を諭されたる。延喜式に体息ならんとき，里人は皆公稲祠として祀った。慶長五年秋殿わると里人は皆公稲祠として祀った。慶長五年秋殿宇を大いに興した。寛文十一年秋増改築し、末社三祠を祀った。天保四年夏に大修理、明治十九年秋に増改築した。昭和四年秋修理，その後毎年修理を重ね，昭和五十二年神忌一〇七五年に記念修理を行い整備に力

摂末社　若宮　天神社／稲荷神社　荒神社　神崎神社
氏子数　六〇戸　**崇敬者数**　二〇〇人
禰宜　田井良一
責任役員　奥山公明　大森康彦　井上雅夫　佐々木基隆
由緒沿革　社伝によると、本村が古昔海岸であった頃和田津見神と祭祀し、東南の山上に鎮座していたが、清和天皇の貞観元年に八幡宮を合祀し、寛文三年二月に現在地の和田の御崎に御遷座し、和田八幡宮と奉称した。明治元年に八幡宮と改称し奉った。

八幡宮　旧村社

岡山市藤井五五三



主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例祭　十月十日　**境内地**　五五三坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　随身門　神輿庫
摂末社　美和神社
氏子数　八〇戸
宮司　三宅利範
由緒沿革　創建年代不詳。

八幡宮　旧村社

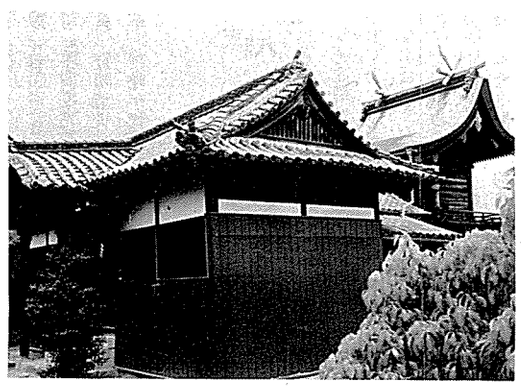
岡山市沼一五一九

主祭神　仲哀天皇　神功皇后　応神天皇
例祭　十月十日　**境内地**　七〇五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　若宮　荒神社
氏子数　七〇戸
宮司　三宅利範
由緒沿革　文暦元年の創建。若宮を寛元年間に合祀し、素盞嗚尊を勧請した。国鉄新幹線を敷設する時に遷座し、現在地に昭和四十五年十二月二十日に新築し奉斎した。

八幡宮　旧村社

岡山市中尾八〇五

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例祭　十月十日　**境内地**　一、九一七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　釣殿　随身門
摂末社　宗像神社　稲荷神社　今宮
氏子数　一七〇戸
宮司　三宅利範
由緒沿革　創建年代不詳。本殿は宝暦二年に全焼し、同年十二月に再建した。六社大明神と奉称し、社領八石の寄進を受けたことがあった。



福岡神社　旧郷社

岡山市西祖二一八・浅川五一九

主祭神　武甕槌神　経津主神　天児屋根命　姫大神

仲哀天皇　応神天皇
例祭　十月七日　**境内地**　五、七二五坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　社務所
摂末社　国主神社　八王寺宮　鷺神社　若宮　稲荷神社　歯岩宮
氏子数　二〇〇戸
責任役員　那須保雄　渋谷清輔　横山義勝
由緒沿革　長和五年八月十七日の創建で、もと春日大明神と称していたのを福岡神社と改称した。明治四十三年十二月二十一日御休村矢井宮山村社八幡宮を合祀した。

布勢神社　旧村社

岡山市大多羅町五四一一

主祭神　大己貴命　外九柱
例祭　十月二日・三日
境内地　二、四七五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社
氏子数　四〇〇戸
禰宜　中山八重子
責任役員　岡　孝志　石原八百二　岸本武夫　溝口晃　吉田清史
由緒沿革　宝亀二年八月創建。社伝によると「本国総社本」に正三位布勢大明神と記載せられており、備前国式内外古社百二十八社の一であるという。寛文六年池田光政の神社整理の政策により、神仏分離し、薬神寺は廃寺となり、もとの社格に復した。正徳二年綱政は七十一社の寄宮の内社殿の荒廃した六十六社を拡張してこれに統合した。

宗形神社　旧村社

岡山市沼一八〇一

主祭神　三女神
例祭　十月二十六日　**境内地**　四五四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社
宮司　三宅利範
由緒沿革　創建年代・由緒等は不詳である。

裳掛天満宮　旧無格社

岡山市金岡一四五八

主祭神　菅原道真公
例祭　十月二十三日・五月十五日　**境内地**　一二五坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿
崇敬者数　二〇〇人
責任役員　岡崎三四郎　加沢武雄

由緒沿革　社伝によると昌泰四年正月上旬、菅公が筑紫へ左遷される途次、この金岡の沖で日が暮れ、海上は暗く風波は荒かった。この時こゝに灯明の光を発見して、舟を着け上陸し、裳を松にかけられたという。もと宝琳寺の鎮守であったが、寛文年間に藩命により、寺から分離して裳掛天満宮と呼んだ。

山口神社　旧無格社

岡山市西大寺市場町一一六七

主祭神　素盞嗚神
例祭　五月十三日　**境内地**　一四九・四坪
主要建物　本殿　社務所
崇敬者数　七〇戸
責任役員　原田　年　永光金市
由緒沿革　創建年代不詳。磯屋（山口氏）が周防から当地に移住した時、その御祭神を奉斎した神社といわれている。

往来神社　旧村社

岡山市宍甘一〇〇三

主祭神　八衢比古神　八衢比女神　久那戸神

例　祭　十月十一日
境内地　二、六五九・九五坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　随身門
摂末社　砂山神社　木野山神社　大宮神社　天満神社　牛神社　稲荷社
氏子数　一〇五戸　**崇敬者数**　五〇〇人
宮　司　代務者　松島章雄
責任役員　小坂徳雄　佐藤　巌　石村　勉
由緒沿革　本神社は備前国神名帳総社本に、往来神社山本氏本並に西大寺本に、正三位往来明神、金剛寺本に正三位往来大明神と記載せられている。備前国式内外古社百二十八社の一で、中古正八幡宮と称したことがある。元侯爵池田家所蔵の御国中神社縁起棟札之写に、文化二年文政十年の石燈籠銘等に、上道郡宍甘村正八幡宮棟札、正保三年鳥居之年号、延徳二年とある棟札は現存しないが、豊島石の壱輪鳥居は現存し、延徳二年庚潤八月吉日の文字がある。

少童（わだつみ）神社　旧村社

岡山市浦間一六三六

主祭神　綿津見神
例　祭　十月十五日　**境内地**　七〇四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神門
摂末社　稲荷神社　保食神社　荒神社　今神社
氏子数　四五戸　**崇敬者数**　一五人
宮　司　坪井　正
責任役員　草信邦重　渋野清郎
由緒沿革　創建年代不詳。明治初年村社に列してから少童神社と奉称した。境内外一帯の地名を龍王山と云い、明治維新までは龍王宮と称していた。綿津見神を奉斎し、この地方の雨乞の神として尊信が厚い。

稲荷信仰

稲荷大神、即ち京都市伏見稲荷大社の主祭神である宇迦之御魂神の信仰である。ウカノミタマノカミは、五穀をはじめ、すべての食物や蚕桑のことをつかさどる神で、「稲生（ほナ）り」が約音便でイナリとなった。その神像が稲を荷っているところから、稲荷の字を充てたといわれている。

わが国は、太古から農業国で、米を主食としていたから、農耕神を信仰し、これが自然に稲荷信仰と結びついたと考えられる。平安時代には、朝野の尊信をあつめて社運が隆盛となり、稲荷信仰も広く伝播し、初午には一般民衆が群参する有様となった。

中世から近世にかけて工業が興り、商業が盛んになると、農耕神から殖産興業神・商業神・屋敷神と拡大し、「衣食住の大祖、万民豊楽の神霊」と仰がれ、農村だけでなく、大名・町家の随所に稲荷神が勧請された。これは全国的な傾向であって、現代も引きつゞき行われ、神社数は全国で三万余に達し、諸神のうちで最も多い

稲荷神の神使をキツネとする民間信仰は、中世頃からである。これは、ウカノミタマノカミの一名を御饌津神（みけつかみ）というので、キツネの古名のケツとの音通から、三狐（みけ）神の字をあてたことにもとづいている。

仏家では、稲荷神を経典中の荼枳尼天（だきにてん）に習合して、狐に付会しているが、これは本来の稲荷信仰とはいいがたい。

都窪支部（三七社）

愛宕神社　都窪郡早島町大字早島五二五九……二一四
厳島神社　岡山市山田八〇二……二一四
稲荷神社　倉敷市茶屋町帯江新田一五四七……二一四
稲荷神社　岡山市庭瀬七七六……二一四
岩倉神社　倉敷市日畑西組二〇三……二一四
御前神社　岡山市妹尾八九七……二一五
御崎神社　〃　西花尻一三八……二一五
祇園神社　〃　大福四九六……二一五
吉備護國神社　〃　西花尻一一〇八……二一五
國鉾神社　都窪郡早島町大字早島一五五一……二一六
熊野神社　〃　早島町大字矢尾六三一……二一六
栗坂神社　倉敷市栗坂五九二……二一六
栗村神社　岡山市妹尾一五一三……二一六
荒神社　都窪郡早島町大字前潟一六四……二一七
荒神社　〃　早島町大字早島六八二……二一七
荒神社　〃　早島町大字早島五二五八……二一七
伍社神社　岡山市山田一一四八……二一七
鯉喰神社　倉敷市矢部一〇九……二一七
須佐之男神社　岡山市中撫川五〇二……二一八
清山神社　〃　庭瀬八二八……二一八
住吉神社　倉敷市茶屋町早島新田六九〇……二一八
鶴崎神社　都窪郡早島町大字早島二二二〇……二一九
天神社　岡山市東花尻五二五……二一九
天神社　〃　西花尻二七九……二一九
八幡神社　〃　川入一一六五……二一九
八幡神社　〃　川入一四六……二二〇
八幡神社　〃　大福二六……二二〇
八幡神社　倉敷市上東三四一……二二〇
八幡神社　岡山市大内田五二五……二二〇
八幡神社　〃　中撫川五五一……二二一
両児神社　倉敷市松島九四三……二二一
船越神社　都窪郡早島町大字早島四三八……二二一
真宮神社　倉敷市西尾五〇四……二二二
箕島神社　岡山市箕島二三二五―一……二二二
龍神社　都窪郡早島町大字早島一三……二二二
和霊神社　〃　山手村岡谷九八一……二二三
若宮神社　倉敷市山地三八七……二二三

愛宕神社　旧無格社

都窪郡早島町大字早島五二五九

主祭神　火之迦具土神
例　祭　六月二十四日　**境内地**　二五五・三八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　金刀比羅宮
崇敬者数　三二〇人
責任役員　小郷賢太郎　坪井寿一　小郷　寛　小郷鹿夫
由緒沿革　本神社は享禄四年、部落の守護の神として現在の地をトして奉斎した。爾来村民の信仰が厚い。

嚴島神社　旧村社

岡山市山田八〇二一

主祭神　市杵島比売命　火之迦具土神　宇迦之御魂命
例　祭　十月十八日　**境内地**　七九二・八六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　塞神社
氏子数　三五〇戸
宮　司　佐野光正
責任役員　吉田誠一　河内歳太　河内松造　秋山寛造
由緒沿革　創建は天正年中に、安芸嚴島神社の御分霊を奉斎したと云う。明治十年五月村社に列格した。

稲荷神社　旧村社

倉敷市茶屋町帯江新田一五四七

主祭神　宇迦之御魂神　素盞嗚尊　大市比売命
例　祭　十月十五日　**境内地**　八六〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　社務所　神庫
摂末社　地神社　荒神社　秋葉神社　八坂神社　綿積神社　龍神社　吉備津神社　冲神社
氏子数　六、〇五五人
宮　司　大守　哲　**禰宜**　田邊保夫
責任役員　石原謙三　清坂耕章　難波栄一
由緒沿革　享保十九年伏見稲荷宮の御分霊を勧請した。安永三年領主戸川右門亮村真公が社殿を再建した。寛政六年四月随身門を再建した。明治五年稲荷神社と改称した。大正三年九月二十四日神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

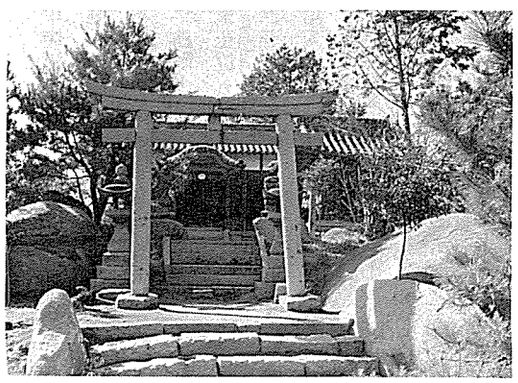
稲荷神社　旧無格社

岡山市庭瀬七七六

主祭神　倉稲魂命　大土祖命　水分命
例　祭　六月二十八日　**境内地**　二三・一坪
主要建物　本殿
崇敬者数　三〇人
宮　司　佐野光正
由緒沿革　創建は延喜年間である。この地が海で浅瀬となっていたので、航行の船舶は難航したので、醍醐天皇の延喜年間に、この地に祠を建て、稲荷神社を奉斎した。この地の浅瀬は新しい瀬であるから新瀬で、庭瀬の地名の発祥である。

岩倉神社　旧村社

倉敷市日畑西組二〇三

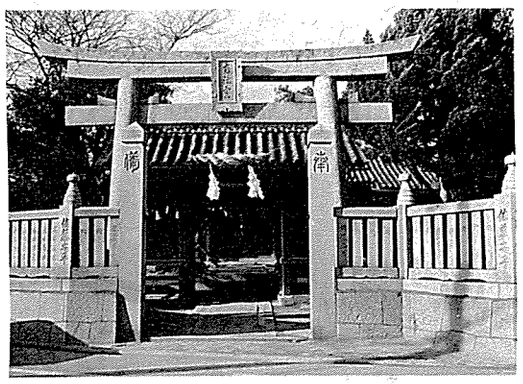


主祭神　大稲船命
例　祭　十月二十三日　**境内地**　一、一〇八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　鐘楼
摂末社　荒神社　牛神社　日畑神社
氏子数　八五戸　**崇敬者数**　四〇〇人
宮　司　笹岡佐逸
責任役員　森田　勇　難波武夫　難波英一郎
由緒沿革　吉備津彦命が吉備国に下向のとき、片岡の伊狭穂が栗坂の里で、稲を苅って軍卒に命じて、船に積み北に向ったが、急流なので船を廻して、西の岬に荷上げして、軍糧を献じたので名を大稲船と賜った。潮流の急な所を瀬口、稲を荷上げした所を稲倉と云った。後に稲倉が岩倉と転訛した。仁徳天皇の御代に吉備津宮の五社殿を創建したとき、この岬に社殿を創建したと云う。元禄年間に再興し、明和五年及び安政年間に再建し、現在に至っている。

御前神社　旧村社

岡山市妹尾八九七

主祭神　彦五十狭芹彦命　相殿　闇龗神
例　祭　十月十七日　**境内地**　四〇八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　随身門
摂末社　恵比須神社　天満神社　嚴島神社
氏子数　六〇〇戸　**崇敬者数**　二、〇〇〇人
宮　司　笹岡佐逸
責任役員　山本音一　香西日切太　安田貴一
由緒沿革　創建年月・由緒は不詳である。此の地一帯は



潟瀬であったが、後陽成天皇の慶長の初期頃から漸く開け、吉備津彦命の御子孫に当る命を、勧請して氏神として奉斎した。相殿の龍王宮は、慶長四年十月に、水難風害の除災を祈念するために奉斎した。

御崎神社　旧無格社

岡山市西花尻一三八

主祭神　吉備武彦命
例　祭　十月十六日　**境内地**　一九〇・〇七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　鳥居
崇敬者数　五〇人
宮　司　佐野光正
由緒沿革　本神社の創建は延喜年中という。醍醐天皇の延喜年中、大吉備津彦命の御墓を守護する御崎の神として創建せられたと伝える。

祇園神社　旧村社

岡山市大福四九六

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月十八日　**境内地**　九八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　加佐守神社　須賀神社　菅原神社　妙生神社　地神社
氏子数　二五〇人
宮　司　佐野光正
責任役員　吉田　清　多田三代古　平松亀伝治
由緒沿革　創建は建武年中に、備後鞆津祇園宮を、この地に勧請奉斎したものである。明治八年村社に列格した時に、進雄神社と改称した。昭和五十三年七月六日祇園神社と改称した。

吉備護國神社

岡山市西花尻一一〇八

主祭神　国家公共につくして死せし人の霊

例　祭　十月最終日曜日
境内地　四三三坪
主要建物　本殿　拝殿　釣殿　向拝
氏子数　二六〇世帯　崇敬者数　五三〇人
宮　司　佐野光正
由緒沿革　終戦により公祭慰霊の不可を憂い、吉備町関係の国家公共につくして死没せられた霊を慰めようとして、八幡神社境内神社祖霊社を昭和二十一年設立して慰霊の祭典をしていた。昭和二十一年十月二十一日、祖霊社を吉備護国神社と改称し独立神社とした。そして遺族を氏子として現在に至っている。昭和四十六年三月二十五日承認された。

國鉾神社　旧無格社

都窪郡早島町大字早島一五五一

主祭神　大国主命
例　祭　五月二日　境内地　一、四〇〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　金刀比羅神社　天満宮　焼火神社　稲荷神社　和霊神社
崇敬者数　二〇〇人
宮　司　広山泰三
責任役員　納所　明　安原勝朗　畑　達　浅沼　君夫
由緒沿革　本神社は延享元年現境内地に奉斎した。神道管領吉田家から「国鉾神社」との神号を賜わり、以来領主をはじめ村人が篤く崇敬した。

熊野神社　旧村社

都窪郡早島町大字矢尾六三一

主祭神　伊邪那美神　速玉之男神　事解之神
例　祭　十月第三日曜日
境内地　四八〇坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿
摂末社　荒神社　厄神社
氏子数　一〇六戸
宮　司　太田忠二
責任役員　大森　勢　林　義雄　林　勇　林　桂市　林　通保　林　辰海　林　富二　平松小竹
由緒沿革　本神社は人皇百五代、後奈良天皇の御宇、天文三年に熊野本宮から勧請し、当地字熊野の地に社殿を創建し、二社権現と称えた。天正六年現在地に奉遷した。明治三年権現号を廃して、熊野神社と改称した。

栗坂神社　旧村社

倉敷市栗坂五九二

主祭神　留玉臣命
例　祭　十月二十四日　境内地　二七四坪
主要建物　本殿　拝殿　神楽所
摂末社　八幡神社　住吉神社　宗形神社　疫神社　荒神社　若宮神社
氏子数　五七五人　崇敬者数　一二〇人
宮　司　佐野光正
由緒沿革　本神社の創建年月は不詳である。この神は大吉備津彦命が吉備の国御征討の時、随従した神である。栗坂村は同神の産土の由で、これによって古来から栗坂村に斎るといわれる。右は吉備津神社の社伝に詳しく記されている。



栗村神社　旧村社

岡山市妹尾一五一三

主祭神　和田叔奈麿命
例　祭　十月十七日　境内地　一、五九〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　釣殿
氏子数　六〇〇戸　崇敬者数　二、〇〇〇人
宮　司　大橋基八
責任役員　橋本政衛　高木蒔夫　槌田貞朝　佐藤武史　池内光夫　大山　実　福島悠紀雄
由緒沿革　創建年代・由緒は不詳である。口碑によると、和田叔奈麿命は吉備津彦命の軍勢に従って功績をたてられた。また土地の発展のため種々の施策をたてられた命の徳を讃仰して奉斎されたという。建造物は応永、天正、寛文年間に修築して現在に至っている。

荒神社　旧無格社

都窪郡早島町大字前潟一六四

主祭神　火之迦具土神
例　祭　十一月五日　境内地　一二二・六二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
崇敬者数　四〇〇人
宮　司　広山泰三
責任役員　山崎政虎　石田健二　中戸龍一
由緒沿革　本神社は寛永二年の創建で、以来この地方の住民の崇敬が篤い。

荒神社　旧無格社

都窪郡早島町大字早島六八二

主祭神　火之迦具土神
例　祭　十月二十八日　境内地　一三七・三六坪
主要建物　本殿　拝殿
崇敬者数　一六〇人
宮　司　広山泰三
責任役員　佐藤喜三郎　沢田広次　沢田留次郎
由緒沿革　伝えによると、本神社は享禄年間に村の守護神として奉斎し、以来村民の崇敬が篤い。

荒神社　旧無格社

都窪郡早島町大字早島五二五八

主祭神　火之迦具土神
例　祭　十月二十八日　境内地　一六八・五九坪
主要建物　本殿　拝殿
崇敬者数　三〇〇人
宮　司　広山泰三
責任役員　井谷禎三郎　坪井俊雄　山崎　固
由緒沿革　本神社は天文年間に現在の地に奉斎し、村民の守護神として崇敬が篤い。

伍社神社　旧村社

岡山市山田一一四八

主祭神　天照大神　大吉備津彦命　市杵島姫命　須佐之男命　誉田別尊
例　祭　十月十八日
境内地　一、二七一・一一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社　塞神社　稲荷神社
氏子数　三五〇人
宮　司　佐野光正
責任役員　笠石久米次郎　笠石国大郎　吉田斐夫　木内鉄治　料治善四郎
由緒沿革　承保年中に、天照大神を土地の守護神として奉斎した。明治四年五月村社に列格した。

鯉喰神社　旧村社

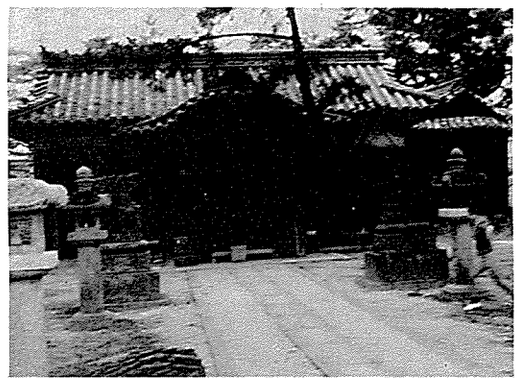
倉敷市矢部一〇九

主祭神　夜目山主命　夜目麿命　他三柱神
例　祭　十月二十四日　境内地　四七八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所

摂末社　大蔵神社　祇園神社　大元神社　天満宮
東照宮　荒神社　牛神社
氏子数　六八七人
宮　司　藤井　敬
由緒沿革　本神社は仁徳天皇吉備国に行幸のとき、吉備津宮とその末社七十二社を創建せられたが、その末社の一である。社殿は元禄十四年四月、天保十三年三月に造営し、現在に至った。大正六年四月、庄村矢部字向山村社楯築神社を合祀した。大正六年十月四日神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

須佐之男神社　旧村社

岡山市中撫川五〇二



主祭神　建速須佐之男命　櫛名田比売命　大穴牟遅命
例　祭　十月十六日　**境内地**　三八四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　控殿
摂末社　稲荷神社
氏子数　四〇〇戸
宮　司　中島達夫
責任役員　太田六平　次田　猛
由緒沿革　往昔、吉備中山に大吉備津彦命鎮座後、十握剣を宝物として彼の社に納めた。寛喜年中に彼の社が回禄の際、御剣を此の地に遷して奉斎した。御剣は彼の社に奉遷後、御剣の縁に依って須佐之男命・天照大御神を跡地に祭った。後、須佐之男神・櫛稲田姫神・大穴牟遅神を祭って上社とした。寛永年中社号を疫神社とし明治二年現在の社名とした。社殿は寛永六年・元禄三年九月、天保六年八月に夫々再興している。昭和三十一年八月、本殿炎上。同五十四年六月に本殿を改築した。

清山神社　旧村社

岡山市庭瀬　八二八

主祭神　板倉重昌　板倉重矩
例　祭　十月十七日　**境内地**　三五七・二四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　秋葉神社
崇敬者数　二〇人
宮　司　佐野光正
由緒沿革　本神社の創建は、寛政六年九月十五日である。旧庭瀬藩主の祖を寛政六年九月十五日奉祀したものである。明治十四年九月二十四日村社に列格、明治四十年十月二日神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

住吉神社　旧村社

倉敷市茶屋町早島新田六九〇

主祭神　表筒男命　中筒男命　底筒男命　息長帯比売命
例　祭　十月十五日　**境内地**　六九〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　社務所　神庫
摂末社　進雄神社　荒神社　稲荷神社　鍋森神社
地神社　素盞嗚神社
氏子数　一、六〇四戸
宮　司　平田義忠
由緒沿革　創建は宝永六年十一月吉日である。本神社の所在地は宝永元年に開墾に着工し、宝永四年に完成した開墾地である。宝永六年十一月領主戸川公により、摂津国堺に御鎮座の住吉四柱神を勧請した。本村の産土神として尊信せられた。領主は神社敷地を除地とし、氏子は社殿奉建・祭具奉納・土地奉献等一丸となって崇敬した。明治四年一月二十七日神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

主祭神　吉備津彦命荒魂
例　祭　十月第三日曜日
境内地　一、八九〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神輿庫
摂末社　八幡神社　素盞嗚神社　鹿島神社　大己貴神社　金刀比羅神社　稲荷神社
氏子数　一、八〇〇戸　**崇敬者数**　四〇〇人

鶴崎神社　旧郷社

都窪郡早島町大字早島二二二〇



宮　司　広山泰三
責任役員　大森　主　真鍋伝夫　小原亀美　山崎政虎
小村貢次　溝手周一　佐藤慎七　藤原理平
宝　物　絵馬　狩野喜信筆（早島町文化財指定）
由緒沿革　本神社は、貞和六年二月二十一日に、吉備の中山から吉備津彦命荒魂を奉斎した。以来旧領主浮田氏、旗本戸川氏累代はもとより郷民が篤く崇敬した。享保年間、神祇菅領から神階正一位に叙せられた。本神社はもと、御崎宮と称したが、明治御維新から鶴崎神社と改称した。明治四年郷社に列せられた。

天神社　旧村社

岡山市東花尻二二五

主祭神　菅原神
例　祭　十月十六日　**境内地**　二三〇・七一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　鐘殿　神庫　社務所
氏子数　八〇人
宮　司　佐野光正
由緒沿革　本神社の創建は徳川家光の時代である。昭和十八年三月三十一日神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

天神社　旧村社

岡山市西花尻二七九

主祭神　菅原神
例　祭　十月十六日　**境内地**　一一一・二九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　九五人
宮　司　佐野光正
由緒沿革　本神社の創建は鎌倉時代である。その後詳かでない。昭和十八年三月三十一日神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

八幡神社　旧村社

岡山市川入一一六五

主祭神　応神天皇　神功皇后　玉依姫命
例　祭　十月十七日　**境内地**　九八九・七坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　斎館　絵馬殿
摂末社　稲荷神社　恵比須神社　祖霊社　道通宮
若宮八幡神社
氏子数　三〇〇人　**崇敬者数**　三〇〇人
宮　司　佐野光正
由緒沿革　創建は仁徳天皇の御代である。備中誌及び吉備津神社旧記によると、仁徳天皇の御宇勅命によって、吉備津神社の末社として創建せられた。和気清麿公が宇佐に下向のとき、山陽道で道鏡の一味が追跡して来たのを、神使の猪数十頭が追払ったと云う故事によって、世人は厄除守護の神として崇敬した。古代には神社前は海であったので、貿易船等が神社前を航行するとき、坐礁したり、難破したときに、神前に祈願して難を除いたと伝えられている。中古から「厄除八幡」と尊称し、遠近からの参詣者が多い。旧庭瀬藩主

板倉氏・戸川氏から祭祀費の寄進をうけていた。享保年中社殿改築の時に板倉氏が寄進した。昭和十一年から社殿改築修理を起し、同十四年に完成した。明治三十九年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

八幡神社　旧無格社

岡山市川入一四六

主祭神　誉田別尊
例祭　十月十七日　**境内地**　二五四・〇三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　鐘楼
氏子数　七〇人
宮司　佐野光正
由緒沿革　創建は享保年間である。旧庭瀬藩主戸川達安が、日蓮宗に帰依し、当町川入字八幡西の八幡神社から、御分霊をこの地に奉祀して水門守護の番神としてお祭りした。

八幡神社　旧無格社

岡山市大福二六

主祭神　大雀命
例祭　十月十八日　**境内地**　一三一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神供所
摂末社　稲荷神社　須賀神社　菅原神社
氏子数　六〇戸
宮司　佐野光正
責任役員　吉崎卯三郎　増田敏郎　山本金一郎
由緒沿革　元亀年中に、古老が卜占で、この地に鴨数千羽が飛来しているのは、大雀命を守護し奉るためであるとして、この地の池畔に一祠を創建して、大雀命を奉斎したと伝えられている。

八幡神社　旧村社

倉敷市上東三四一

主祭神　品陀和気命　相殿　大雀命　道返神　闇龗神　新相殿　衝立船戸神　高靇神
例祭　十月二十四日　**境内地**　七八六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　荒神社　浮洲神社　塞神社　地神社　稲荷神社　疫神社　山上神社　外十二神社
氏子数　一、一七〇人
宮司　橋本甚一
責任役員　板谷嘉雄　板谷隆雄　山崎郁太郎
由緒沿革　本神社の創建は万寿年間である。万寿二年主神八幡神社、若宮神社（宇遅和紀郎子命）の二神社を創立。その後応徳三年、久寿二年、嘉禄二年、至徳二年、文明十六年、天正三年、享保十一年、明治七年に建替または修覆を行った。明治七年九月若宮神社を八幡神社の相殿とし一社とした。同八年高靇神・闇龗神の二社を、明治十一年二月衝立船戸神・道返神の二社を相殿として合祀した。村社に列した。大正七年五月、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。同十四年五月に本殿屋根を銅板に葺替えた。

八幡神社　旧村社

岡山市大内田五二五



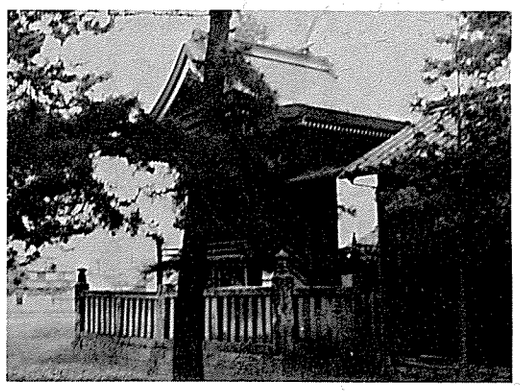
主祭神　品陀和気命
例祭　十月十七日　**境内地**　二、五八八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿

摂末社　天満神社　秋葉神社　荒神社　大蔵神社
氏子数　一二〇戸
宮司　中島達夫
責任役員　光畑三郎　光畑童次　坪井強郷
由緒沿革　本神社の由緒沿革は不詳であるが、昔は多数の信者があって、特に境内天満神社は郡中一円が信徒で池田家の崇敬が殊に篤かった。毎年六月二十四日の祭典には領主の代参があり、今も天神祭の別称として上祭（オカミマツリ）の名が残っている。維新前の祭事が厳重に執行されていたことを物語っている。

八幡神社　旧村社

岡山市中撫川五五一

主祭神　品陀和気命　天照大御神　天児屋根命
例祭　十月十六日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　大元神社　時吉神社　三魂神社　荒神社
氏子数　一五〇戸
宮司　中島達夫
責任役員　太田　明　難波暦志
由緒沿革　往昔、吉備中山に大吉備津彦命鎮座後、十握剣を宝物として彼の社に納めた。寛喜年中に彼の社が回禄の際、御剣を此の地に遷して奉斎した。御剣は彼の社に奉遷後、御剣の縁に依って天照大御神・須佐之男命を跡地に祭った。後、天照大御神を祀り下社とした。寛永年間に八幡神・春日神を勧請して八幡神社と改号した。慶長の頃再興し、元禄十五年にも再興し現在に至っている。



両児神社　旧村社

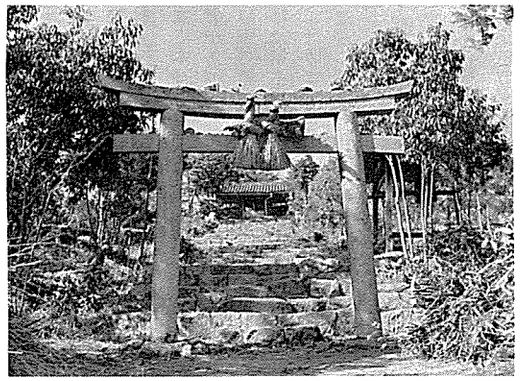
倉敷市松島九四三

主祭神　伊邪那岐命　伊邪那美命　天照皇大神　月夜見大神　品陀和気命
例祭　十月二十三日・二十四日
境内地　四、〇三〇坪
主要建物　本殿　拝殿　随身門　参集所　社務所　倉庫
摂末社　金刀比羅宮　賀茂別雷社　愛宕神社　大歳神社　七社宮　久崎神社　牛神社　下神社　疫神社　稲荷神社　天満神社　御太刀神社　両部神社　宗像神社　若宮神社　木野山神社　地神社　英霊社　春日神社　荒神社　龍王神社
氏子数　三四五戸
崇敬者数　一五人
宮司　井上敏象　**禰宜**　井上　健
責任役員　小野　茂　三宅修三
由緒沿革　本神社の創建は伝承によると、神功皇后が征新羅の砌り、当神社で神祇を奉斎せられ、凱戦後再び石太刀・鏑矢を奉納せられた。時に皇子二歳となられるに因み、二子神社と称した。称徳天皇の御宇松島山に遷座せられた。万寿元年万寿庄の総鎮守で、寛文七年春三月御普請奉行が神前から坂道も普請した。明治五年御社号を両児神社と改称した。なお、当神社は蘭草の祖神として崇敬せられている。

船越神社　旧無格社

都窪郡早島町大字早島四三八

主祭神　船越大神
例祭　十月二十五日　**境内地**　三五・六七坪
主要建物　本殿　拝殿
崇敬者数　一〇〇人
宮司　広山泰三
責任役員　船越昌敏　船起良平　船越隆二
由緒沿革　昔、この地が海浜の頃、吉備津彦命が当国



真宮神社　旧村社

倉敷市西尾五〇四

主祭神　建速須佐之男命　相殿　保食神
例祭　十月二十三日　**境内地**　三、〇九五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　鐘楼
摂末社　御歳神社　牛社
氏子数　二〇〇戸　**崇敬者数**　二〇〇人
宮司　笹岡佐逸
責任役員　国府周一　内田規一郎　内田圭雄
由緒沿革　本神社の創建年月・由緒は不詳である。神域地にある高台地には古墳群があり、現在の神域は眺望に優れてをり、民俗学上からも貴重な場所と言える。

箕島神社　旧村社

岡山市箕島二三二五―一

主祭神　品陀和気命　櫛振命
例祭　十月二十一日　**境内地**　二九〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　綿津見神社
氏子数　六二〇戸
宮司　三宅光信
責任役員　浅越　茂　真野徳一　平松政雄
由緒沿革　勧請年月日は不詳であるが、箕島には氏神が東西にあり、現箕島神社の境内地に八幡宮があり、東部に汗入の汗入御崎宮を八幡宮境内に遷座し、箕島神社と改称した。現在本殿が二棟あるのは、両氏神を一境内に奉斎したためである。明治十二年十二月村社に列格した。明治十四年四月に幣殿・拝殿・神供所を移転造営した。明治四十四年二月、無格社九社を合祀した。旧領主花房家の崇敬が篤く、汗入に御鎮座当時の御社殿は花房家の造営によるものである。



龍神社　旧無格社

都窪郡早島町大字早島一三

主祭神　和多都美神
例祭　六月一日
境内地　一、〇八九・九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿

摂末社　進雄神社　荒神社　鍋森神社
崇敬者数　一、〇〇〇人
宮司　広山泰三
責任役員　佐藤慎七　谷本勘二　船越洋平
由緒沿革　本神社は延享元年、領主戸川氏が社殿を造営し、和多津美神を奉斎し、近郷三か村の水神として尊崇した。旱天の時は、近傍の農民は殊更に尊崇が篤く、年々六月一日、例祭を盛大に執り行った。

和霊神社　旧村社

都窪郡山手村岡谷九八一

主祭神　山家清兵衛公
例祭　五月二十三日　**境内地**　四九六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　社務所　祭器庫
摂末社　厳島神社　木山神社　荒神社　広峰神社　由加神社
氏子数　三六〇戸
宮司　室山武彦
責任役員　橋本良輔　小野秀二
由緒沿革　本神社は宝暦三年に、伊予宇和島鎮座の和霊神社を勧請した。その後、二回社殿が焼失、明治三十年十一月再建した。現在の社殿である。明治十四年九月廿四日村社に列格した。大正十二年二月二日、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

主祭神　大雀命
例祭　十月二十四日　**境内地**　七五二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　八幡神社　荒神社　大歳神社　生谷神社
氏子数　八〇〇人
宮司　井上敏象
責任役員　犬飼三二　小野　浩　曽谷鉄夫
由緒沿革　本神社の創建年月は不詳である。この地は往古から、日蓮宗の寺院が多く、神社に対して崇敬の念がうすく、書類等が逸散したので、由緒は不明である。現在では氏子が一六〇戸あって、神社の運営は順調である。

若宮神社　旧村社

倉敷市山地三八七

主祭神　和多都美神
例祭　六月一日
境内地　一、〇八九・九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿

天社（あまつやしろ）

上代における一種の社格である。国社に対するもので、天社は天神を祀る社、国社は地祇を祀る社である。上代には一般の神社をこの二つに分けて取り扱った。制度的にこの語が用いられたのは、崇神天皇の七年十一月の紀に、天社・国社と神地・神戸とを定めたとある。垂仁天皇の二十七年八月の紀に、諸社に奉幣し、さらに神地・神戸を定め、恒例の祭を奉仕したとあるのが初めてゞある。

神職（神社本庁）

神社の職員のうち、宮司、権宮司、禰宜、権禰宜を神職と云う。神職は階位を有し、神社神道を信奉する者のうちから任用する。但し、宮司及び宮司代務者は、年齢二十年以上であること。即ち神職とは、本庁の庁規に基づき、所定の階位を有し、神社神道を信奉する者で、神社の所定の職員に任命され、神職身分を授けられて、神明に奉仕し、神社神道に基づく宗教活動に従事し、社務をつかさどる者を云う。

注連縄（しめなわ）

標縄・七五三縄・印縄・鎮・御清縄・〆縄・締縄・示縄・著見縄・四手縄・しめかざり・みしめ等の類字がある。神前又は神聖・清浄な場所を標すために引き亘し、或は張り廻らす縄をいう。古来諸説があるが、附会のものが多い。神代巻天石屋戸の段に見える尻久米縄（記）・端出之縄（紀）・斯利久迷縄（拾遺）等から始ると云われる。材料は藁が多く、稀には蕉麻苧で、左縄にない所々に藁の端を垂れる。その藁の数を七・五・三又は一・五・三とし、更に時代と共に種々の形が現れている。四方に張る時は東北の隅から始めて、東南・西南・西北・北を経て東北に結ぶ。一面に張るときは二説がある。主に標縄の本即ちない始めを左（神前に向って右）にする。垂紙の付け方は普通は四下り左折りのものを、一面に二垂・四垂・八垂等の数にする。現在は注連縄の字が多く用いられている。

里宮（さとみや）

里にある宮の意で、奥宮・山宮の対称である。同一神社であって二ヶ所に神社があるとき、麓にあるのを里宮といい、山上を奥宮とか山宮という。

里宮は遙拝所として一般人の便をはかったものとの説がある。しかし柳田国男は別の説を出している。即ち日本の農耕社会では、春は山から神を迎え、秋は山に送る田の神信仰があるが、この田の神は同時に同族とか家々の祖先神であると考えられる。氏神祭の古い形は、祖霊の鎮まる山の宮居から一定の期日に里の宮へ迎えて祭り、その後で山へ送るが、ここには山を他界とする観念との結合があると云う説である。

山宮（やまみや）

一社で二か処の祭場を持つ神社の場合に、山頂など高い処の祭場をいい、里宮の対称である。秋宮春宮、上社下社、本宮前宮などの呼称がある。両祭場に社殿や聖地を設け、山全体を対象とすることもあるが、春秋両季に神が移動すると伝え、それを象徴する神事がある。人の死後は霊魂が山中に鎮まり、年を経て祖先神となると観念されている祖先観や山中他界観を背景にした信仰である。春秋両季の神の移動は、山宮から神を迎えて氏神祭を営むための伝承であるが、神が春から秋、秋から春まで両社を移動して常在する信仰は、田の神と山の神の春秋両季の移動と対応する同一観念の現象である。

浅口郡支部（八八社）

愛宕神社　浅口郡船穂町大字水江七九九……二一七
天津神社　〃　鴨方町大字小坂東一〇〇六……二一七
稲荷神社　〃　金光町大字佐方二六六七……二一七
稲荷神社　〃　金光町大字占見二三二五……二一七
稲荷神社　〃　船穂町大字水江九五六……二一七
稲荷神社　〃　船穂町大字柳井原一九五二……二一八
稲荷神社　〃　里庄町大字里見九三一一……二一八
祝神社　〃　船穂町大字船穂一七〇四……二一八
磐岩神社　〃　金光町大字地頭下一〇四七……二一八
艮神社　〃　鴨方町大字小坂西四六二九……二一八
艮神社　〃　里庄町大字里見七二七六……二一九
大浦神社　〃　寄島町大字寄島七七五六……二一九
大川神社　〃　鴨方町大字益坂二六五……二三〇
大川神社　〃　金光町大字占見二一一七……二三〇
大歳天神社　〃　鴨方町大字本庄二〇三七……二三〇
大宮神社　〃　金光町大字占見一五八三……二三〇
大森神社　〃　金光町大字占見新田一六六三……二三一
大森神社　〃　金光町大字下竹七三六……二三一
御崎神社　〃　船穂町大字柳井原一三二二……二三二
御崎神社　〃　金光町大字下竹一九一八……二三二
海神社　〃　金光町大字占見二三七一……二三二
春日神社　浅口郡金光町大字佐方一三八九……二三二
金乃神社　〃　金光町大字大谷二四八―一……二三二
鴨神社　〃　鴨方町鴨方三三〇……二三三
加茂八幡神社　〃　金光町大字大谷六六一……二三三
川添神社　〃　船穂町大字船穂一四四三―二……二三四
木山神社　〃　里庄町大字里見七一〇二……二三四
軍神社　〃　鴨方町大字小坂東六二九……二三四
荒神社　〃　鴨方町大字深田二六六七……二三四
荒神社　〃　鴨方町大字深田五八二……二三五
荒神社　〃　鴨方町大字深田二一三二……二三五
荒神社　〃　金光町大字佐方一一一九……二三五
荒神社　〃　金光町大字佐方三一七二……二三五
荒神社　〃　金光町大字佐方一五七八……二三五
荒神社　〃　金光町大字占見二一一二……二三五
荒神社　〃　金光町大字佐方三三七……二三六
荒神社　〃　金光町大字佐方一三八六……二三六
荒神社　〃　金光町大字占見二四二六……二三六
荒神社　〃　金光町占見二五四九……二三六
荒神社　〃　金光町大字占見九六六……二三六
荒神社　〃　金光町大字占見二二二〇……二三六
荒神社　〃　金光町大字占見二三三六……二三七
荒神社　〃　金光町大字占見一七六三……二三七
荒神社　〃　金光町大字占見新田二九六……二三七
荒神社　〃　金光町大字下竹一六〇〇……二三七

荒神社　浅口郡里庄町大字里見九五九四……二三七
荒神社　〃　里庄町大字里見九七二八……二三八
荒神社　〃　里庄町大字里見五五六四……二三八
荒神社　〃　里庄町大字里見一七七一……二三八
荒神社　〃　里庄町大字里見八六三九……二三八
荒神社　〃　里庄町大字里見四四四四……二三九
荒神社　〃　里庄町大字里見六九三六……二三九
金刀比羅神社　〃　船穂町大字船穂七一四七……二三九
塞神社　〃　船穂町大字船穂七五九四……二三九
里木神社　〃　船穂町大字船穂三五七四……二三九
山神社　〃　里庄町里見一三二三……二四〇
素盞嗚神社　〃　里庄町大字浜中五二〇……二四〇
素盞嗚神社　〃　船穂町大字船穂四七四六……二四〇
諏訪神社　〃　金光町大字佐方二四八〇……二四〇
太老神社　〃　金光町大字上竹二三九〇……二四一
高岡神社　〃　里庄町大字里見五七八一……二四一
建神社　〃　船穂町大字柳井原一七四四……二四一
天神社　〃　鴨方町大字深田二〇二……二四一
天神社　〃　寄島町大字柴木一五一二八……二四二
天神社　〃　鴨方町大字小坂西六一七……二四二
天神社　〃　金光町大字佐方二〇八〇……二四二
天満神社　〃　金光町大字占見三七九……二四二
天満神社　〃　金光町大字占見新田二七四三…二四二
天満神社　〃　金光町大字上竹三〇三……二四三
天満神社　浅口郡里庄町里見六二七〇……二四三
戸神社　〃　金光町大字佐方二四九九……二四三
仁志神社　〃　船穂町大字船穂三八七五……二四四
西森神社　〃　里庄町大字里見七九六三……二四四
八幡神社　〃　里庄町大字新庄二七〇二……二四四
八幡神社　〃　鴨方町大字小坂東二九三六……二四四
八幡神社　〃　船穂町大字船穂六六六四……二四五
八幡神社　〃　金光町大字佐方三三九……二四五
八幡神社　〃　寄島町大字宮三二〇四……二四五
日吉神社　〃　里庄町大字新庄五八七七……二四五
日吉神社　〃　里庄町大字新庄一六六四……二四六
日吉神社　〃　鴨方町大字地頭上三一九……二四六
船穂神社　〃　船穂町大字船穂五四一九……二四六
真止戸山神社　〃　鴨方町大字六条院六九一九……二四六
御名方神社　〃　船穂町大字船穂四九七四……二四七
八重神社　〃　金光町大字八重二〇五……二四七
疫神社　〃　金光町大字占見一四三二……二四七
山神社　〃　金光町大字占見一一一八……二四七
六神社　〃　金光町大字占見新田二九一五…二四八

愛宕神社　旧無格社

浅口郡船穂町大字水江七九九

主祭神　迦具土神
例祭　六月五日　**境内地**　三三五・二二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　奥神社　高津神社
氏子数　五〇戸　**崇敬者数**　一〇人
宮司　桑野純一
責任役員　萩原東馬　岩崎只三郎　小野開三　小野又一郎
由緒沿革　創建は寛文三年であるが、由緒は不詳である。

天津神社　旧無格社

浅口郡鴨方町大字小坂東一〇〇六

主祭神　天御中主命
例祭　旧九月九日　**境内地**　四五坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　なし
氏子数　一五〇戸　**崇敬者数**　四五〇人
宮司　武貞秀
責任役員　松原勉　吉田若恵　田上四方一　永原元夫　河原幸夫　亀岡一之　山部義夫
由緒沿革　創建は寛正三年四月九日。天津神社はもと、阿部山にある昔の阿部清明の屋敷跡と伝えられる所に鎮座していたものを、その山麓下である現在の地に、奉遷したものという。例祭には近隣町村よりの参拝者が多い。

稲荷神社　旧無格社

浅口郡金光町大字佐方二六六七

主祭神　倉稲魂命
例祭　九月十日　**境内地**　二四八坪
主要建物　本社
摂末社　なし
氏子数　五五戸
宮司　神田経夫
責任役員　堀　二三夫　荒木悦男　堀　幸夫
由緒沿革　本神社の勧請年月は不詳であるが、倉稲魂命の霊を奈良井の現在地に勧請し今日に至っている。この間修理再建ごとに、大氏神の戸神社の境外摂社の関係上、戸神社を仮殿として、同神社に御神体を仮遷宮するならわしである。本神社は昔から氏子はなく、農業の神として、熱心な崇敬者で運営せられている。

稲荷神社　旧無格社

浅口郡金光町大字占見二三二五

主祭神　倉稲魂命
例祭　十一月二十三日　**境内地**　一三七坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　なし
氏子数　二八戸　**崇敬者数**　三〇人
宮司　唐川節夫
責任役員　山田信行　藤澤幸雄
由緒沿革　本神社の勧請は寛政年間である。例祭には、全氏子が参拝し、祭典に奉仕する。昭和五十一年三月に本殿、拝殿を改築した。

稲荷神社　旧無格社

浅口郡船穂町大字水江九五六

主祭神　宇迦之御魂神
例祭　七月二十三日　**境内地**　一〇〇・三四坪
主要建物　本殿　拝殿　神楽殿

摂末社　なし
氏子数　六〇戸　　**崇敬者数**　一〇人
宮　司　桑野純一
責任役員　萩原東馬　岩崎只三郎　小野開三　小野又一郎
由緒沿革　創建は慶安二年であるが、由緒は不詳である。

稲荷神社（いなり）　旧無社

浅口郡船穂町大字柳井原一九五二

主祭神　宇迦之御魂神
例　祭　十月一日　　**境内地**　一〇八坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　なし
氏子数　五〇戸　　**崇敬者数**　五人
宮　司　桑野純一
責任役員　横溝鶴一　平松一朗
由緒沿革　創建は明暦二年であるが、由緒は不詳である。

稲荷神社（いなり）　旧無格社

浅口郡里庄町大字里見九三二一

主祭神　倉稲魂命

例　祭　八月二十五日　　**境内地**　三十二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　なし
氏子数　五八戸
宮　司　桑野典彦
責任役員　定兼寿太　仁科数一
由緒沿革　創建は元禄八年で、出雲国より勧請したという。祭礼には相撲を奉納し、部落民相集って七十五膳という特異の祭儀を行う。本殿は明治十九年一月に、拝殿は昭和八年十一月に造営した。

祝神社（いわい）　旧無格社

浅口郡船穂町大字船穂一七〇四

主祭神　大日霊貴尊　天児屋根命　譽田別尊
例　祭　十一月十三日
境内地　五九・四四坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　地神社
氏子数　一〇〇戸
宮　司　桑野純一
責任役員　高見光海　小野　薫　小野泰志
由緒沿革　創建は延享二年であるが、由緒は不詳である。

艮神社（うしとら）　旧無格社

浅口郡鴨方町大字小坂西四六二九

主祭神　吉備津彦命

磐岩神社（いわむら）　旧村社

浅口郡金光町大字地頭下一〇四七

主祭神　経津主命　保食神　葛木一言主命　妻盞嗚尊
例　祭　十月二十日　　**境内地**　九六二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫　社務所
摂末社　稲荷神社　安岐神社　疫神社
氏子数　一二〇戸　　**崇敬者数**　三五〇人
宮　司　西山峻爾　　**禰　宜**　西山貞子
責任役員　松本鉄夫　安田一利　吉田寛一　安田文男
由緒沿革　口碑によると、一千数百年前に屯倉の設けがあって、曲浦にそう枢要の地であったが、また海匪も頻々と出没した。巨巌が数十百個嶷立するこの要害の地に、下総の国から武神を勧請し、巨巌を鎮護神としたという。戦国時代に神社の後方の山嶺に、宍戸安芸守が拠り、御鏡一台を寄進した。現在末社に安芸神社があるのは、城主安芸守に関係があるといわれる。

例　祭　十月十一日　　**境内地**　七二・八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　疫神社
氏子数　五〇戸　　**崇敬者数**　一五〇人
宮　司　武貞　秀
責任役員　横山　稔　横山宝逸　横山広一　横山要平
由緒沿革　創建は養老二年三月二十日。むかし吉備津彦命が備中一円を御平定のみぎり、この引野の地に留り、周辺一帯の賊を平定せられた。平定後従者三十三名を鎮護のためこの地に留められた。後、命は薨去し給い、吉備真金中山の里に葬り、吉備津神社として奉祀したが、従者三十三名は交代して神主となり、その後も代々引続き祭事を執行して来た。引野の地からは、吉備津神社本宮が、丑寅の方位に当っているので、この引野の社を艮神社と命名したという。

艮神社（うしとら）　旧無格社

浅口郡里庄町大字里見七二七六

主祭神　吉備津彦命
例　祭　九月九日　　**境内地**　四五〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　なし
崇敬者数　一、一九五人
宮　司　桑野典彦
責任役員　生宗　進　松原伝次郎
由緒沿革　創建は天文十四年である。戦国時代に當町の南境、大島村柴木の西端に聳える茶臼山に、大内義隆の幕下の大内摂津守が築城した時に、天災頻りに起り、又悪疫が流行して、人民が非常に苦しんだので、備中一の宮の吉備津神社の御分霊を勧請して、社を建て祈願し、その御霊験によって悪疫が終息したので、城の艮の方位に新に社殿を建立して祀った。その後悪疫が流行する時、早害に苦しむ時は、部落民が集って祈願した。その後に社殿を改築し、九月八日の夜は大相撲を奉納し、翌日祭典を行う例となった。後世村内八幡宮の祠官が、この神社の祠官を兼ねるようになったので八幡宮の末社となった。現在の社殿は明治十二年八月の造営である。

大浦神社（おおうら）　旧郷社

浅口郡寄島町大字寄島七七五六

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月第一土・日曜日
境内地　二、六八五坪
主要建物　本殿　幣殿　祝詞殿　拝殿　神庫　絵馬殿
社務所
摂末社　龍神社　天神社　吉備津神社　松尾神社
和霊神社　八幡神社　塩釜神社　天神社　荒神社　山神社
氏子数　七〇〇戸　　**崇敬者数**　三、〇〇〇人
宮　司　小川暎興　　**禰　宜**　小川恵美
責任役員　坂本　登　坂本正志　大島正三　山本亀蔵



頃末敏一
宝　物　土器　獅子面　鬼面
特殊神事　競馬十二懸行事

由緒沿革　神功皇后が三韓征伐から御帰還の時、皇子譽田別尊・大臣武内宿祢、その他の群臣と共に、吉備の寄島（三郎島）で天神地祇を祭り、武功を告げられた。その後に、安部晴明がその地に社を建て、応神天皇、仲哀天皇、神功皇后の三神を祭り、氏神とした。これが本神社の創りである。永禄年間に毛利氏の部将細川下野守通薫が田畑二十町歩ならびに、宝物を寄進した。しかし本島は参拝に不便なので、現在の地に遷座するに至った。元和三年に社殿を改築した。その後社殿が破損したので、六ヶ村が申し合せて、元禄六年

再建し、同十六年に鳥居を建てた。宝暦十一年十二月十四日社殿が炎上し、同十二年に再建した。文政・明治・大正と次々に修理を加え、大正十四年に本殿、幣殿の大改築を行った。昭和二十年一月十日に郷社に列格した。その後は屋根の修理・玉垣の改築・社務所の増築を行い、社運は隆昌である。

大川神社　旧村社

浅口郡鴨方町大字益坂一六五

主祭神　罔象女命
例　祭　十月十日　**境内地**　一、一七八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿・神庫　社務所
摂末社　金比羅宮・石槌大権現　龍王宮
氏子数　一三二戸　**崇敬者数**　四〇〇人
宮　司　西山峻爾　**禰　宜**　西山貞子
責任役員　石部喜代治　田辺　広　田村康次　柚木直澄
由緒沿革　口碑に、一一〇〇年程前この地方に、疫病が大流行した時、安芸の国から疫病平癒の神として勧請したという。戦国時代鴨山城主細川氏や、安芸守城主宍戸氏が大祭には必ず参拝し、初穂料を献じた。宝暦十二年に神殿修築のとき地頭職伊木豊後守が、領林の松四本を献じた。文化十年の改築に当っては地頭職伊木要之祐が、金百匹を献じている。

大川神社　旧無格社

浅口郡金光町大字占見二一一七

主祭神　罔象女命
例　祭　十月十六日　**境内地**　三三・二坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　なし
氏子数　四九戸
宮　司　唐川節夫
責任役員　山田満美　山田敏夫
崇敬者数　五五人
由緒沿革　本神社は寛政年間に、浅口郡鴨方町大字益坂鎮座の大川神社を勧請し、奉祀した神社である。以来同部落の信仰の中心である。祭日には氏子が参拝し、祭典に奉仕している。

大歳天神社　旧村社

浅口郡鴨方町大字本庄二〇三七

主祭神　大歳神　少彦名命　大己貴命
例　祭　十月六日
境内地　二、五四六・二五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫　神饌所
摂末社　五社神社
氏子数　二三〇戸　**崇敬者数**　六九〇人
宮　司　武貞　秀
責任役員　丸本市松　山田卓吾　筒井嘉久馬
宝　物　大太鼓　銅鏡
由緒沿革　承和三年九月十日の創建。口碑によると、平安時代に京都から大歳神を勧請したという。戦国時代に鴨山城主細川公は五穀豊穣を祈願し、農民の繁栄を祈念した。徳川時代に鴨方藩主池田信濃守は初穂料等を献納し、厚く尊崇したと謂う。社殿はもと宏壮美麗であったが、逐次朽廃破損したので、大正八年に拝殿を、その後本殿を再建した。

大宮神社　旧村社

浅口郡金光町大字占見一五八三

主祭神　大己貴命
例　祭　十月二十日
境内地　二、六八七・五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫(二)
摂末社　日吉神社　地神社　龍田神社　和霊神社　國神大明神　金刀比羅宮　天満宮　木山神社
氏子数　五五三戸　**崇敬者数**　五五〇人
宮　司　唐川節夫
責任役員　浅野　報　多々野貢　二階堂幹治　山田郁夫　大橋秋太　久戸瀬恒祐　赤澤廸吉
宝　物　樟の「一宮大明神」と記された鳥居の額

木彫像二五体



由緒沿革　本神社の創建は天智天皇の御代と伝えられ、当時から一の宮であった。祭神大己貴命は大国主命と松尾の神の同体神であって、大和諸社中創建の最も古いといわれる元官幣大社三輪神社の御祭神大物主神と同体である。文安三年寅に社殿その他焼失。ただ樟の額が現存している。現在の社殿は、元禄十三年辰八月の建立で、寛政六年寅十一月に屋根葺替えが行なわれた。

大森神社　旧無格社

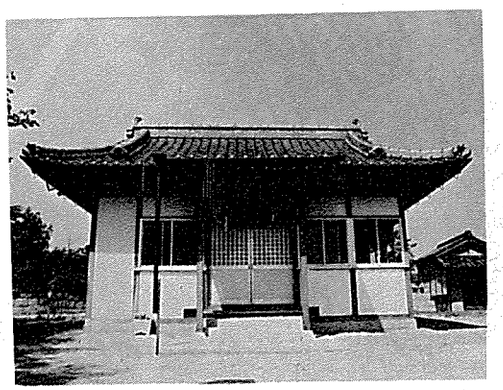
浅口郡金光町大字占見新田一六六三

主祭神　高皇産霊尊　匂句廼馳命　稚日女尊
例　祭　十月十四日
境内地　二五七・一五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社
氏子数　七三戸　**崇敬者数**　八〇人
宮　司　唐川節夫
責任役員　山下梅太　柚木洋坪
由緒沿革　本神社は天保年間に町内下竹大森神社を勧請した。無格社としては稀にみる社殿を有し、本殿・幣殿・拝殿を具備している。最近拝殿を改築した。例祭日には氏子青年の奉納角力があった。旧正月十三日の夜はお日待祭を行なう。氏神大宮神社の御神幸の御旅所である。昭和五十年十月に拝殿を改築した。

大森神社　旧村社

浅口郡金光町大字下竹七三六

主祭神　句句廼馳命　高皇産霊尊　稚日女尊
例　祭　十月十二日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫
摂末社　厄神社
氏子数　一八〇戸　**崇敬者数**　五〇〇人
宮　司　桑野純一
責任役員　柚木春男　木科晃正　末吉信雄　清水定夫　辻喜右ヱ門



由緒沿革　創建年代は寛文年間である。由緒は不詳である。

御崎神社　旧村社

浅口郡船穂町大字柳井原一三二二

主祭神　大已貴命
境内地　一、一六三坪　**例祭**　十月十七日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神庫
摂末社　なし
氏子数　一一〇戸　**崇敬者数**　三〇人
宮司　桑野純一
責任役員　横溝智勇士　横溝三保次　田辺豊一　平松熊治　浅野一郎
由緒沿革　寛文二年の創建と思われる。

御崎神社　旧無格社

浅口郡金光町大字下竹一九一八

主祭神　玉依姫命　大已貴命　建御名方命
例祭　五月十一日　**境内地**　六〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　十七戸
宮司　桑野純一
責任役員　末吉信雄　佐藤敏夫　末吉堅次　末吉清　佐藤薫
由緒沿革　創建年代は享保年間である。

海神社　旧無格社

浅口郡金光町大字占見二三七一

主祭神　綿積豊玉彦命
例祭　六月十八日　**境内地**　一九三坪
主要建物　本殿
氏子数　三七八戸　**崇敬者数**　四二〇人
宮司　唐川節夫
責任役員　久戸瀬正一　渡辺耀正
由緒沿革　本神社の御祭神は綿積豊玉彦命であり、勧請は享保年間である。龍王山の山腹にあって、干魃の時は全氏子が参拝し、祈雨の祈願祭を執行う習慣があった。
宮司　神田経夫
責任役員　荒木熊吉　原田敏彦　友田陽太郎
由緒沿革　勧請年月は不詳である。明治十一年七月六日に春日神社と改称した。昭和五十二年屋根の葺替えが完成した。

春日神社　旧無格社

浅口郡金光町大字佐方一三八九

主祭神　天児屋根命
例祭　九月九日（重陽節句）
境内地　四六坪
主要建物　本社
氏子数　二〇〇戸　**崇敬者数**　三〇人

金乃神社　旧無格社

浅口郡金光町大字大谷二四八―一



主祭神　素盞嗚尊　大日霊貴尊　金山彦命　思金神　生神金光大神
例祭　九月二十二日　**境内地**　六九三坪
主要建物　本殿　幣殿　神饌殿　手水舎
摂末社　客人社　七屋社　木綿崎社
氏子数　**崇敬者数**　八八人
宮司　金光家邦
責任役員　定金亀夫　中山祝子
由緒沿革　本神社は紀元一千八百年代に、金光家の遠祖川上家の奉斎に始まり、素盞嗚神社と称し、後金神宮又は金神社と称していたが、明治十一年五月に金乃神社と改称した。天保十二年九月に初代神職金光大陣が奉仕し、領主蒔田相模守廣孝の崇敬が厚く、その祈願所に定められた。明治二十二年九月に今の社殿を建築した。昭和二十九年一月に宗教法人法により岡山県知事三木行治の認証を得た。

鴨神社　旧村社

浅口郡鴨方町鴨方三三〇

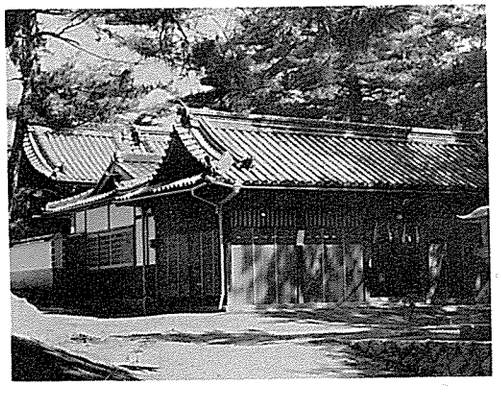
主祭神　鴨別命
例祭　十月十日　**境内地**　七二四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　地利積神社　王子神社　地神社　春日神社　外十二社
氏子数　三〇〇戸　**崇敬者数**　一、〇〇〇人
宮司　桑野武彦
責任役員　柚木寅男　小西好太郎　山田徳太郎　亀川博
宝物　木造唐獅子二面



由緒沿革　平安時代の初期、京都から加茂明神を勧請した。鴨方旧藩主池田信濃守の氏神として、毎年初穂料を献じ、鴨山城主の祈願社であった。備前国主池田光政公累代家譜にも見えており、社殿の壮厳、華麗な神社である。

加茂八幡神社　旧村社

浅口郡金光町大字大谷六六一



主祭神　瓊々杵尊　別雷命　譽田別尊　相殿大吉備津彦命外五柱
例祭　十月二十二日
境内地　一、三五二坪
主要建物　本殿(二)　幣殿　拝殿　神輿倉

摂末社　荒神社　早馬神社　平田神社他合十二社
氏子数　三五〇戸　**崇敬者数**　二五〇人
宮　司　金光立成　**禰　宜**　金光京子
責任役員　藤井吉祝　三宅時雄　沖　晃次　河手久寿一　経遠　弘　定金与平　山内幹恵
由緒沿革　加茂神社は金光町大谷須恵の鎮守として、承和年間に現在地に鎮座奉斎せられた。社殿は幾度か再建せられたが、現在の社殿は享保二年二月に建立せられたものである。八幡神社は天明八年八月に現在地に遷宮せられ、現在の社殿は文化十年九月に再建したものである。昭和十六年一月に新たに大吉備津彦命を奉斎し、二社を合祀して加茂八幡神社と改称し、神饌幣帛供進神社に指定せられた。

川添神社　旧無格社

浅口郡船穂町大字船穂一四四三―二

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月七日　**境内地**　九四五㎡
主要建物　本殿　拝殿　倉庫
摂末社　恵比須神社　稲荷神社　木ノ山神社　巌島神社
氏子数　二六〇戸　**崇敬者数**　一〇四人
宮　司　桑野純一
責任役員　森永照雄　中桐脩造　中桐祝詞　中桐哲己　中桐清輝　中桐師郎　兼信　実　小野計男
由緒沿革　船穂町中新田のこの地は、正保寛文年間当時の領主水谷氏が開拓整備してから、農家が移住し漸次増加して、部落を形成した。当時の住民が守護神として荒神様を勧請し、川添神社として祭祀を行い、今日に至っている。

木山神社　旧無格社、

浅口郡里庄町大字里見七一〇二

主祭神　須佐之男命
例　祭　九月二十日　**境内地**　一六三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫
崇敬者数　五五〇人
宮　司　桑野典彦
責任役員　小野　豊　松原伝次郎
由緒沿革　弘化の頃当地の磯右衛門が神仏を信仰し、美作国真庭郡木山村の木山宮に度々参詣し、晩年に小祠を建て、木山の神を祀り、社守をした。当時村内天満宮の祠官が、木山の神の祠官を兼ねてから、社殿を改築し天満宮の摂社とした。現在の社殿は明治三十七年の造営である。境内には嘉永七年建立の石燈籠がある。

軍神社　旧無格社

浅口郡鴨方町大字小坂東六二九

主祭神　武甕槌神　経津主命
例　祭　十月二十四日　**境内地**　一六三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫
氏子数　一五〇人　**崇敬者数**　四五〇人
宮　司　武貞　秀
責任役員　松原　勉　吉田若恵　田上四方一　永原元夫　河原幸夫　亀岡一之　山部義夫
由緒沿革　正平六年五月五日の創建。建武年間に小坂越中守が要害山（一名杉山）の山城に居城し、降って戦国時代には、備中鴨方城主細川遍薫の重臣の河田紀伊守陸長や、毛利元就の家臣小坂宗右衛門経通の居城となった。備陽国誌によると、この頃神社はこの山城に奉祀してあり、その後、現在の山麓に奉遷したものである。

荒神社　旧無格社

浅口郡鴨方町大字深田二六六七

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　九月十三日　**境内地**　三〇坪
主要建物　拝殿堂
氏子数　五〇戸
責任役員　吉川武夫　石井喜備太
由緒沿革　延宝年間に、部落の協和と農業奨励のため、素盞嗚尊を御祭神とする荒神社を創建した。

荒神社　旧無格社

浅口郡鴨方町大字深田五八二

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　八月二十八日　**境内地**　六八坪
主要建物　本殿　拝殿　神庫
氏子数　五〇戸
責任役員　吉川武夫　石井喜備太
由緒沿革　延宝年間に、部落の協和と農業奨励のため、素盞嗚尊を御祭神とする荒神社を創建した。

荒神社　旧無格社

浅口郡鴨方町大字深田二一三二

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　九月十五日　**境内地**　七五坪
主要建物　拝殿
氏子数　五〇戸
責任役員　吉川武夫　石井喜備太
由緒沿革　延宝の頃、農業奨励と部落協和のため、各地に荒神社を設立した際、当神社も部落の鎮守として創建せられた。

荒神社　旧無格社

浅口郡金光町大字佐方一一一九

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　九月二十七日　**境内地**　二四五坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　六〇戸
宮　司　神田経夫
責任役員　友田靖雄　友田　豊　平田英士
特殊神事　五年毎に神楽年として、神楽舞奉納
由緒沿革　御鎮座地を昔才蔵坊と称していたので、現在でも才蔵坊の荒神様として、氏子の信仰が厚い。勧請年月は不詳であるが、現在の拝殿は、慶応二年に再建されている。御本殿の改築は明治三十一年であったが、昭和五十二年に御本殿の屋根を銅板葺きに、拝殿も倍近くに拡大し、面目を一新した。

荒神社　旧無格社

浅口郡金光町大字佐方三一七二

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　九月十五日　**境内地**　一五三坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　四〇戸
宮　司　神田経夫
責任役員　佐川一正　河田良雄　藤沢　定
由緒沿革　本神社の御鎮座地の古名を宗昌という。よって今日でも宗昌の荒神社と奉称している。勧請年月は不詳であるが、明細帳によれば、神田神官の造営による。以来氏子の信仰が厚く祭礼には、全氏子が参拝する。

荒神社　旧無格社

浅口郡金光町大字佐方一五七八

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　九月一日　**境内地**　一四六坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　五三戸
宮　司　神田経夫
責任役員　佐川一正　河田良雄　藤沢　定
由緒沿革　本神社の御鎮座地の古名を宗昌という。よって今日でも宗昌の荒神社と奉称している。勧請年月は不詳であるが、明細帳によれば、神田神官の造営による。以来氏子の信仰が厚く、御神徳は益々高揚せられている。

荒神社　旧無格社

浅口郡金光町大字佐方二一一二

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　九月十五日　**境内地**　一五三坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　四〇戸
宮　司　神田経夫
責任役員　友田靖雄　平田英士
由緒沿革　御鎮座地を昔才蔵坊と称していたので、現在でも才蔵坊の荒神様として、氏子の信仰が厚い。勧請年月は不詳であるが、現在の拝殿は、慶応二年に再建されている。御本殿の改築は明治三十一年であったが、昭和五十二年に御本殿の屋根を銅板葺きに、拝殿も倍近くに拡大し、面目を一新した。

例祭神 素盞嗚尊
例祭 九月一日 **境内地** 九六坪
主要建物 本殿 拝殿
氏子数 五五戸
宮司 神田経夫
責任役員 藤沢達人 渡辺再治 堀 二三夫
由緒沿革 創建年代は不詳。昔の地名馬場に鎮座しているので、馬場の荒神社と申し上げる。宮原と宗本との荒神様である。祭礼には宮司が参進し、当番氏子多数が参拝奉仕する。年によっては神楽舞を奉納する。

荒神社 旧無格社

浅口郡金光町大字佐方三三七

主祭神 素盞嗚尊
例祭 九月二十七日 **境内地** 二八三坪
主要建物 本社
氏子数 六〇戸
宮司 神田経夫
責任役員 古沢金六 清水文四郎 久本信之
由緒沿革 勧請年代は不詳である。山根八幡神社の下に造営せられているので、山根荒神社と申し上げる。境内地が平地なので、神楽並びに踊の奉納に適している。祭日には参拝者が多い。

荒神社 旧無格社

浅口郡金光町大字佐方一三八六

主祭神 素盞嗚尊
例祭 五月十五日 **境内地** 九六坪
主要建物 本殿 拝殿
氏子数 三五戸
宮司 神田経夫
責任役員 吉田悦治 吉田義雄 堀 善正
由緒沿革 鎮座地が、正学院という地名なので、正学院荒神社と奉称する。勧請年月は不詳だが、神田神官と氏子とが協力して造営した。以来氏子の信仰が厚く、盛大に祭事を厳修する。特に神楽年の宵祭は格別賑う。第十七号台風を受けたが、氏子の奉仕で、昭和五十二年五月一日に再建が完成した。

荒神社 旧無格社

浅口郡金光町大字占見一四二六

主祭神 素盞嗚尊
例祭 十月十二日 **境内地** 八〇坪
主要建物 本殿 拝殿
氏子数 一〇戸
宮司 唐川節夫
責任役員 田中稔太 藤沢伯一
由緒沿革 本神社は明和年間に勧請した。例祭には、全氏子が参拝し、祭典に奉仕する。

荒神社 旧無格社

浅口郡金光町大字占見一二五四九

主祭神 素盞嗚尊
例祭 十月二十三日 **境内地** 三九坪
主要建物 本殿 拝殿
氏子数 二五戸 **崇敬者数** 二八人
宮司 唐川節夫
責任役員 香取寛一 香取成男
由緒沿革 本神社の勧請は明和年間である。例祭には全氏子が参拝し、祭典に奉仕する。

荒神社 旧無格社

浅口郡金光町大字占見九六六

主祭神 素盞嗚尊
例祭 十月二十八日 **境内地** 二〇坪
主要建物 本殿 拝殿
氏子数 四五戸 **崇敬者数** 五〇人
宮司 唐川節夫
責任役員 杉本千壽太 大橋秋太
由緒沿革 本神社の勧請は寛政年間である。例祭には、全氏子が参拝し、祭典に奉仕する。

荒神社 旧無格社

浅口郡金光町大字占見二二二〇

主祭神 素盞嗚尊

例祭 十月十五日 **境内地** 二六坪
主要建物 本殿 拝殿
氏子数 七六戸 **崇敬者数** 八五人
宮司 唐川節夫
責任役員 矢桐克己 渡辺真一
由緒沿革 本神社の勧請は寛政年間である。例祭には、全氏子が参拝し、祭典に奉仕する。

荒神社 旧無格社

浅口郡金光町大字占見二三三六

主祭神 素戔嗚尊
例祭 十一月二十三日
境内地 二九〇坪
主要建物 本殿 拝殿
氏子数 二八戸 **崇敬者数** 三〇人
宮司 唐川節夫
責任役員 山田郁夫 山田誠一
由緒沿革 本神社の勧請は享保年間である。例祭には氏子が参拝し、祭典に奉仕する。

荒神社 旧無格社

浅口郡金光町大字占見一七六三

主祭神 素戔嗚尊

例祭 十月十三日
境内地 二六九・七七坪
主要建物 本殿 拝殿
摂末社 貴布祢神社
氏子数 六四戸
宮司 唐川節夫
責任役員 三近滝三郎 赤澤禮吉
由緒沿革 本神社の御祭神は素戔嗚尊であり、奉祀は文化五年である。遙照山の南麓にある。昔て同山の一隅に鎮座していたのを、勧請移転したという伝説がある。例祭は最近、氏子を東西講地に分け、参拝奉仕する習慣となった。神社は部落の中央にあって、公会堂に代用している。旧正月十日の夜はお日待と称し、全戸が参拝し、翌十一日の朝お日待祭を行う。

荒神社 旧無格社

浅口郡金光町大字占見二四二六

主祭神 素戔嗚尊
例祭 十月十九日
境内地 六一・八四坪
主要建物 本殿 拝殿
摂末社 稲荷神社 七社宮
氏子数 一二二戸 **崇敬者数** 一三五人
宮司 唐川節夫
責任役員 中務新一 西澤道夫
由緒沿革 本神社は隣接の稲荷神社および七社宮を合祀し、勧請の年月は不詳であるが、常夜燈の寄進年月日から推測すると、文政年間の創祀であろう。例祭日には氏子が参拝し、祭典に奉仕する。夜は子供の奉納角力がある。合祀の稲荷神社の例祭には、氏子が祭典に奉仕する。

荒神社 旧無格社

浅口郡金光町大字下竹一六〇〇

主祭神 素盞嗚尊 加茂御祖神 土祖神
例祭 十月二十七日 **境内地** 六〇坪
主要建物 本殿 幣殿 拝殿
摂末社 地神社
氏子数 五〇戸
宮司 桑野純一
責任役員 辻喜右ヱ門 柚木春男 清水定雄 末吉信雄 木科晃正
由緒沿革 創建年代は享保年間である。

荒神社 旧無格社

浅口郡里庄町大字里見九五九四

主祭神 素盞嗚尊

例　祭　十二月二十七日
境内地　四〇・一六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　一六七人
宮　司　桑野典彦
責任役員　仁科　易　仁科幸一
由緒沿革　本神社は領主池田家の農業奨励の旨を承け、各部落に荒神社を創建して部落の鎮守神として奉祀した。神職家の伝によると八幡宮の祠官が、備後の国鞆の沼名前神社の御分霊を勧請したとある。毎年正月十日の夜、日待祭を行いその年の天候の順調を祈り、二月九日には百年祭を行い、風雨順時・五穀豊穣を祈り、十二月二十七日には神楽祭を行う例である。

荒神社　旧無格社

浅口郡里庄町大字里見九七二八

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十一月二十七日　**境内地**　二〇・八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
崇敬者数　八一人
宮　司　桑野典彦
責任役員　定兼忠重　定兼清示
由緒沿革　創建は延寶二年である。本神社は領主池田家の農業奨励の旨を承け、延宝年間に各部落に荒神社を創建し、鎮守神とした。神職家の伝えによると、当時に林村八幡宮の祠官であった、吉山掃部守定が備後国鞆の沼名前神社の御分霊を勧請したとある。毎年日待祭、百年祭、神楽祭を執り行っている。

荒神社　旧無格社

浅口郡里庄町大字里見五五六四

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月十五日　**境内地**　六〇坪
主要建物　本殿　拝殿
崇敬者数　二一六人
責任役員　貞利一男　生実武夫
由緒沿革　本神社は領主池田家の農業奨励の政策により延寶年間に、各部落に荒神社を創建した。当時村内の八幡宮の祠官が、備後国鞆から沼名前神社の御分霊を勧請したと伝えている。毎年正月十二日に日待祭を行って、天候の順調を祈り、二月九日に百手祭を行い、風雨順時五穀豊穣を祈願し、十月十五日に神楽祭を行う例である。

荒神社　旧無格社

浅口郡里庄町大字里見八六三九

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月十五日　**境内地**　七七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　二三〇人
宮　司　桑野典彦
責任役員　原田舜一郎　広末　清
由緒沿革　本神社は領主池田家の農業奨励の旨を受け、延寶二年に各部落に荒神社を創建し、鎮守神とした。神職家の伝えによると、当時村内の八幡宮の祠官が備後国鞆の沼名前神社の御分霊を勧請したとある。毎年正月七日の日待祭、二月九日の百手祭等を行う。

主要建物　本殿　拝殿
崇敬者数　一〇三人
宮　司　桑野典彦
責任役員　金田盛太郎　斉藤作一
由緒沿革　延寶二年領主池田家の勧めによって、荒神社を建て農業の神とした。毎年正月二日、日待祭。二月九日、百手祭。六月十三日、害虫駆除悪疫終息の夏祭。十月十五日、神楽祭を行った。

荒神社　旧無格社

浅口郡里庄町大字里見一七七一

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月十五日
境内地　三八・六三坪

塞神社　旧無格社

浅口郡船穂町大字船穂七五九四

境内地　一九一・二五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
崇敬者数　五五〇人
宮　司　桑野典彦
責任役員　生宗　進　虫明鎮雄
由緒沿革　延寶年間に、領主池田家の農業の神の素盞嗚尊を、御祭神とする荒神社を各部落に創建した。毎年正月八日、日待祭。二月九日、百手祭。一月一日、神楽祭を行っている。

金刀比羅神社　旧無格社

浅口郡船穂町大字船穂七一四七

主祭神　大物主命
例　祭　三月十日　**境内地**　一七九・四坪
主要建物　本殿
崇敬者数　五人
摂末社　岬神社
氏子数　六〇戸
宮　司　桑野純一
責任役員　井上　保　中原佐平次　浅野隆正
由緒沿革　創建は文化元年であるが、由緒は不詳である。

荒神社　旧無格社

浅口郡里庄町大字里見四四四四

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　一月一日　**境内地**　一四七・四七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
崇敬者数　五九五人
宮　司　桑野典彦
責任役員　小野邦一　吉澤定一
由緒沿革　本神社は領主池田家の農業奨励の政策により延寶年間に、各部落に荒神社を創建した。当時村内の八幡宮の祠官が、備後国鞆から沼名前神社の御分霊を勧請したと伝えている。毎年正月十二日に日待祭を行って、天候の順調を祈り、二月九日に百手祭を行い、風雨順時五穀豊穣を祈願し、十月十五日に神楽祭を行う例である。

荒神社　旧無格社

浅口郡里庄町大字里見六九三六

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　一月一日

里木神社　旧無格社

浅口郡船穂町大字船穂三五七四

主祭神　八衢比古命　八衢比賣命　久那戸乃神
例　祭　六月七日　**境内地**　三六・〇四坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　七前神社
氏子数　五〇戸　**崇敬者数**　一〇人
宮　司　桑野純一
責任役員　井上　保　中原左平次　浅野隆正
由緒沿革　創建は享和元年であるが、由緒は不詳である。

金刀比羅神社　旧無格社

浅口郡船穂町大字船穂三五七四

主祭神　賛狭之八耳神
例　祭　五月十三日　**境内地**　四四五・八九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　加茂神社　寒谷神社　金刀比羅神社　貴船神社
氏子数　六〇〇戸　**崇敬者数**　二〇人

宮　司　桑野純一
責任役員　中原　勉　小野末広　吉田卯一
由緒沿革　創建は慶安四年で、享保八年社殿を改築した。現在地は船穂郷の開墾以前の岬で、大正九年当社地の接続地から、貝塚が発見せられた事からして、この地は早くから開けていたので、神を奉祀したものであろう。

山神社（さん）　旧無格社

浅口郡里庄町里見一三二三

主祭神　大山祇大神
例　祭　十月十日　**境内地**　一、二四六・五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　二〇〇戸
宮　司　桑野典彦
責任役員　佐藤市太郎　徳山倫一
由緒沿革　創建年月は元禄八年八月である。当地高岡神社の末社であったが、現在は地区の氏神として奉祀している。

素盞嗚神社（すさのお）　旧村社

浅口郡里庄町大字浜中五二〇

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月十日　**境内地**　五八五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社
氏子数　八二戸
宮　司　小川峡興
責任役員　仁科勝敏　古宮　実　妹尾義正　妹尾伊勢治
由緒沿革　慶長七年十月二十八日の創建である。角力の神・乳の神として信仰が厚い。

素盞嗚神社（すさのお）　旧無格社

浅口郡船穂町大字船穂四七四六

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　六月七日　**境内地**　一一五・三八坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　三〇戸　**崇敬者数**　一〇人
宮　司　桑野純一
責任役員　兼信壽一郎　兼信　昭　兼信乾治
由緒沿革　創建は宝永元年であるが、由緒は不詳である。

諏訪神社（すわ）　旧村社

浅口郡金光町大字佐方二四八〇

主祭神　建御名方命　配祀経津主命　大己貴命　岐神
例　祭　五月五日　**境内地**　一、二六七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　下神社　十二神社
氏子数　一九〇戸
宮　司　神田経夫　**禰　宜**　神田英経
責任役員　吉田治郎　藤沢真八　平田二六郎



由緒沿革　弘化四年未十二月の神田大和守宮司の証拠物写帳によると、後陽成天皇の豊臣秀吉時代、慶長二年に藤沢越中守が兵部公の願いにより、兵部公の故郷信濃国から勧請し、兵部公の鎮守として祀っていた。公が慶長五年に長州に移られてから、この地の氏神として祀っている。維新まで祭礼に座席の儀があって有名である。昭和十七年に社殿を再建した。

太老（たろう）神社　旧無格社

浅口郡金光町大字上竹二三九〇

主祭神　天鈿女命
例　祭　旧九月十四・十五日
境内地　一七二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　厄神社　奥の院
氏子数　一三〇戸　**崇敬者数**　二〇人
宮　司　桑野正之
責任役員　武　敏夫　岡野忠雄　田中正毅
特殊神事　角力奉納
由緒沿革　天鈿女命は天三岩戸開きの時、神楽を奏した神であり、岐神は天孫降臨の時に、その途に待ち迎えて道案内をした神である。創建は慶長六年九月十五日で、武の神として信仰が厚い。例祭には相撲を奉納する。相当由緒のある由であるが、神職家が文久年間に火災にあい書類を焼失したため不詳である。

高岡（たかおか）神社　旧村社

浅口郡里庄町大字里見五七八一

主祭神　応神天皇
例　祭　十月十日　**境内地**　一、八九三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝幣　神輿庫
摂末社　日吉神社
氏子数　一八〇戸
宮　司　桑野純一
責任役員　赤木仲一　竹内園恵
崇敬者数　五〇〇人
由緒沿革　創建は建仁八年八月である。神功皇后征韓の御帰路、船泊りせられたこの処に、奥州から八幡宮を勧請した。三条天皇の長和五年十一月二日の大嘗祭に、内蔵権頭善滋朝臣為政が備中高岡神社の和歌として「祝子が祈るもしるく高岡の社の神や君をまもらむ」て歌っている。慶長年間に現在の地に移転した。享保十二年八月再建した。



建神社（たける）　旧無格社

浅口郡船穂町大字柳井原一七四四

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　二月十三日　**境内地**　三一七・一三坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　三〇戸
宮　司　桑野純一
責任役員　横溝晴夫　難波源一　横溝三保次
由緒沿革　創建は正保四年であるが、由緒は不詳である。

天神社（てん）　旧村社

浅口郡鴨方町大字深田二〇二一

主祭神　菅原神　天穂日命　渡會春彦
例　祭　十月第二日曜日
境内地　九〇七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫
摂末社　素盞嗚神社
氏子数　一八二戸
宮　司　小川暎興

責任役員　吉川武夫　石井喜備太

由緒沿革　菅公が築紫に貶せられた時、一夜を過された遺跡と伝えられている。里庄町岩村の岩滝山に、村上天皇の天暦九年に祠を建てて、天穂日命、菅原神、渡會春彦を祀った。後世、岩滝山を天満山という。霊元天皇の延宝三年に当地と里見、小坂西の三ヶ所に分祀した。

天神社　旧村社

浅口郡寄島町大字柴木一五一二八

主祭神　菅原道真
例祭　十月十月　**境内地**　三九四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　日拝殿
摂末社　荒神社
氏子数　一〇〇戸
宮司　小川暎興
責任役員　花房　薫　経遠　實　笠原広一　花房　進
由緒沿革　本神社は延宝二年十月十七日に京都北野神社から、当地に勧請し創建した。昭和二十一年十月一日に村社に列格した。

天神社　旧無格社

浅口郡鴨方町大字小坂西六一七

主祭神　菅原大神
例祭　九月二十四日　**境内地**　二五四坪
主要建物　本社
氏子数　三五戸
宮司　神田経夫
責任役員　弓削元雄　藤沢正志　藤沢正明
由緒沿革　勧請年月は不詳である。享保十一丙午年十一月の佐方村神社改書上帳に、祠官神田丹後守境内除地一反六畝と記載してある。明治三年十二月神社書上帳に、神田宮司の天神宮記録として、宮社・祭神・勧請・祭日・社地・造営等に関して記載せられている。

天満神社　旧無格社

浅口郡金光町大字占見三七九

主祭神　菅原天神
例祭　十月十六日　**境内地**　一七・五坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　七社宮　稲荷宮
氏子数　一七戸　**崇敬者数**　二〇人
宮司　唐川節夫
責任役員　逸見秀一　逸見一男
由緒沿革　本神社は明和二年酉九月に、九州太宰府天満宮を勧請した。例祭には氏子が参拝し、家内安全の神札を拝受した。

天満神社　旧無格社

浅口郡金光町大字占見新田二七四三

主祭神　菅原天神

例祭　七月二十五日
境内地　一〇四・九三坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　荒神社
氏子数　二〇九戸　**崇敬者数**　二三〇人
宮司　唐川節夫　石部輝吉
責任役員
由緒沿革　本神社は寛政年間に、九州太宰府の天満宮を勧請した。例祭日には氏子部落代表が祭典に奉仕する。かつて祭礼当日文墨祭を行ない、地方文化の向上の一助をなした。

天満神社　旧村社

浅口郡金光町大字上竹三〇三

主祭神　菅原道真
例祭　十月第二土・日曜日
境内地　一八〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫
摂末社　龍神社　地神社
氏子数　一三〇戸
宮司　桑野正之
責任役員　武　哲朗　西山潮次　桑野美正
特殊神事　大当番祭
由緒沿革　御祭神の菅原道真は天満大自在威徳大神の称号を賜った神であって、長禄二年八月二十四日に武築前守が信濃国から勧請した。村の中央に鎮祭し、上竹村民の氏神として崇拝した。神職家が文久年間に火災にあい、関係書類が焼失して由緒は不詳である。昭和四十二年の火災で神社に保管していたものも焼失した。



主祭神　菅原神　天穂日命　渡會春彦

天満神社　旧村社

浅口郡里庄町里見六二七〇

例祭　十月十日　**境内地**　一、九八五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫
摂末社　地神社
氏子数　二三〇戸　**崇敬者数**　八〇〇人
宮司　桑野純一
責任役員　広末專一　亀岡敏喜　松原　勲　吉沢義夫
由緒沿革　創建年月は天暦九年八月四日である。本神社は菅原公が西遷の際、一夜を過された遺跡と伝える岩村の天満山に、後奈良天皇の享禄二年小祠を建てて、菅公・天穂日命、渡會春彦を祀ったのに創まる。霊元天皇の延寶三年に、鴨方町小坂および当地に分祀した元禄三年九月建立の石鳥居が現存する。昭和十三年本殿を後方六間の高さ六尺の地に曳き上げ、又祝詞殿、幣殿を新築した。

戸神社　旧村社

浅口郡金光町大字佐方二四九九

主祭神　一言主命　相殿　素盞嗚尊
例祭　十月二十二日　**境内地**　五九七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　地神社
氏子数　二五〇戸　**崇敬者数**　五〇人
宮司　神田経夫
禰宜　神田英経　**権禰宜**　神田文子
責任役員　友田　武　古沢金六　藤沢武夫
由緒沿革　弘化四年未十二月の神田大和守宮司の証拠

物写帳によると、後宇多天皇の弘安二年に当村字望月原に勧請した。建武二年に小丸山城主の佐井七郎の願いにより、小丸山に遷座した。氏子は佐方庄七箇村で、佐方・須恵・大谷・黒崎・屋守・佐見・南浦に及んでいる。後に現在の宮原山に遷座し奉った。明応二年の再建の札が現存している。

仁志神社　旧無格社

浅口郡船穂町大字船穂三八七五

主祭神　八衢比古命　八衢比賣命　久那戸神
例祭　八月十九日
境内地　四九七・七二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　地神社　高徳神社
氏子数　五〇戸　**崇敬者数**　一〇人
宮司　桑野純一
責任役員　小山太一　武政佐人　武政謙吾　山本広士　横山清士
由緒沿革　創建は宝暦九年であるが、由緒は不詳である。

西森神社　旧無格社

浅口郡里庄町大字里見七九六三

主祭神　蛭子命
例祭　九月十二日　**境内地**　三四・五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
崇敬者数　一、〇七二人
宮司　桑野典彦
責任役員　佐藤右馬治　佐藤一郎
由緒沿革　享保三年六月疫病流行の際に、出雲の簸川上から蛭子の命の御分霊を勧請して、社を建てて信心し、悪疫が終息したので、池口村の崇敬神社となった。大病人のある時は裸参りをして、平癒を祈願する慣習がある。現在の社殿は昭和十五年十月の建立である。

八幡神社　旧村社

浅口郡里庄町大字新庄二七〇二

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　仁徳天皇
例祭　十月十日　**境内地**　一、三一八坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿
摂末社　荒神社
氏子数　一八〇戸
宮司　小川暎興
責任役員　江原貞一　平野一正　安田左武郎　西崎此徳　平野繁己　徳永豊
由緒沿革　今から約四百年前の創建と推察せられる。この地の氏神である。

八幡神社　旧村社

浅口郡鴨方町大字小坂東二九三六

主祭神　譽田別尊　相殿　足仲彦尊　気長足姫尊
例祭　十月十日
境内地　八三〇・二五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫　禱番小屋　社務所
摂末社　春日神社　素盞嗚神社　荒神社　御神神社
氏子数　六五四戸　**崇敬者数**　一、九六二人
宮司　武貞秀
責任役員　伊沢保　原勝恵　田中近義　横山稔
由緒沿革　創建は宝亀五年八月十五日。寛文・宝暦年中の神社書上帳に、八幡宮とある。小坂・東小坂・西深田の三ヶ村の産土宮である。神功皇后の三韓征伐の供奉をした仕丁三人が、功労により大御盞をいただいたといい、その土器を摺子鉢という。現在に至るまで祭典及びおわけ祭のときに用いられている。寛文七年に神仏混淆が改められて八幡神社となった。その後元禄五年に本殿を改築。寛保三年に御屋根の葺替えを奉仕した。

八幡神社　旧無格社

浅口郡船穂町大字船穂六六六四

主祭神　譽田別尊　玉依姫命　神功皇后
例祭　八月二十二日
境内地　一〇一・一七坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　三〇戸　**崇敬者数**　五人
宮司　桑野純一
責任役員　井上壽　浅野徳勇　平本文左衛門
由緒沿革　創建は元禄三年であるが、由緒は不詳である。

八幡神社　旧村社

浅口郡金光町大字佐方二三九

主祭神　譽田別尊
例祭　十月二十三日　**境内地**　五三六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　若宮
氏子数　六〇戸　**崇敬者数**　一〇人
宮司　神田経夫　**禰宜**　神田英経
責任役員　古沢金吾　清水文四郎　久本信之
由緒沿革　本神社の創建について、神田宮司家の書物によると、宝徳四年即ち享徳元年、後花園天皇の御代の将軍足利義政の時に勧請した。佐方・須恵・大谷・屋守・占見・六条院の六箇村の氏神であった。今なお祭礼には六ヶ村中の最古の村の屋守から、神馬二頭で御神幸になり、先頭の鉾持神事に供奉する。

八幡神社　旧村社

浅口郡寄島町大字宮三二〇四

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例祭　十月三日　**境内地**　八七三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫
摂末社　恵比須神社　荒神社
氏子数　七〇〇戸
宮司　鈴鹿千秋（宮司代務者　福田睦雄）
禰宜　中山寛
責任役員　高渕賢士　岡部貴一　笠原菊松
由緒沿革　仲哀天皇の遺志をつぎ、神功皇后が征韓の業を遂げて、凱旋せられた時に、寄島に寄泊せられて天神地祇を奉祀せられた。後にこの霊地に応神・仲哀・神功皇后の三神を奉祀し氏神とした。永禄年間に毛利氏の武将細川下野守道重が、田畑二十丁歩と宝物を寄進した。本島は海上十丁余りも隔てていて、参拝に不便なため、慶長五年に現在地に遷座した。



日吉神社　旧村社

浅口郡里庄町大字新庄五八七七

主祭神　大山咋命
例祭　十月十日　**境内地**　一、二一七坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿
摂末社　山神社　荒神社

氏子数　一五〇戸
宮　司　小川暎興
責任役員　加藤比禎夫　磯田　剛　藤谷時次郎　岡崎　博
由緒沿革　本神社は大山咋命を主神として奉斎している。創建年月日は不詳。明治四年五月村社に列格した。

日吉神社　旧村社

浅口郡里庄町大字新庄一六六四

主祭神　大山祇命
例　祭　十月十日　**境内地**　五九四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　四五戸
宮　司　小川暎興
責任役員　定岡長一　佐藤一昌　中尾徳一
由緒沿革　本神社は大山祇命を主神として奉斎し、創建は寛永十三年四月である。文政元年に社殿を改築している。

日吉神社　旧村社

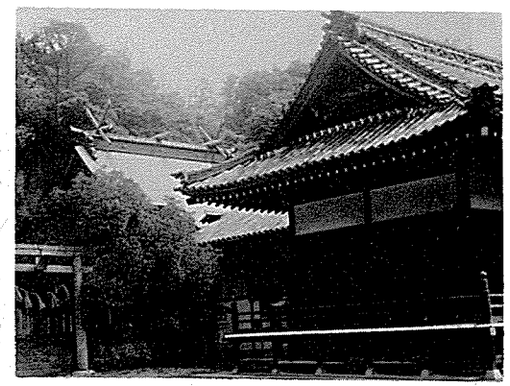
浅口郡鴨方町大字地頭上三二九

主祭神　大已貴命　大山咋命
例　祭　十月六日　**境内地**　一、三〇〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫　社務所
摂末社　住吉神社
氏子数　九二戸
宮　司　西山峻爾　**禰　宜**　西山貞子
責任役員　柚木壽人　石部貞樹　勝田　精　今井嘉芳
由緒沿革　口碑によると、遙照山を比叡山に、玉島笠岡間の内海を琵琶湖に擬し、叡山の麓、琵琶湖のほとりの元官幣大社日吉神社の御分霊を、この内海畔地に勧請したという。戦国時代に鴨山城主細川通董公から矛五本の献納があった。一時池田光政公の領地のとき、近郷の六三七社の寄宮として、これを社内に合祀し、氏子は仁正院と呼んだ。今なお仁正院祭を執り行っている。

船穂神社　旧郷社

浅口郡船穂町大字船穂五四一九

主祭神　大已貴命
例　祭　十月二十三日
境内地　二、九〇一・三六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　絵馬殿　神庫　神饌所
摂末社　小野神社　稲荷神社　國津神社
氏子数　一、〇〇〇戸　**崇敬者数**　五〇人
宮　司　桑野純一
責任役員　中桐一雄　小野計男　佐野伯雄　吉田卯一
由緒沿革　正保元年頃、御崎神社として創建した。明治五年村社に列し、明治十七年船穂神社と改称し郷社に列した。明治四十年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。



真止戸山神社　旧郷社

浅口郡鴨方町大字六条院六九一九

主祭神　素盞嗚尊他七柱

例　祭　十月十九日　**境内地**　八九九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　絵馬殿　通夜殿　社務所
摂末社　住吉神社　向日神社
氏子数　一、〇七〇戸
宮　司　宮司代務者　福田睦雄
禰　宜　中山　寛
責任役員　高田　勲　高橋森恵　山下　実　藤沢弘郎
由緒沿革　光仁天皇の宝亀二年に、吉備真備公が播州広峯神社から勧請して本神社を創建した。武門の尊信が厚く、永禄年間に細川下野守通董や小坂城主河内紀伊守隆長や鴨方藩主池田信濃守政信等が厚く信仰し、明治に至るまで、代々池田家の祈願所とされた。明治四十三年に村内の神社全部を当社に合祀した。昭和六年に社殿を整備し郷社となった。

御名方神社　旧無格社

浅口郡船穂町大字船穂四九七四

主祭神　建御名方命
例　祭　六月二十四日
境内地　二一七・三七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　和霊神社　備中十八神
氏子数　五〇〇戸　**崇敬者数**　一〇〇人
宮　司　桑野純一
責任役員　花田喜平　岡本幸太郎　花田暎三　花田卓之　花田晴夫
由緒沿革　創建は寛文元年である。古くは王子宮と称し、大已貴命の御子建御名方神を祀った。後に御名方神社と改称した。

八重神社　旧村社

浅口郡金光町大字八重二〇五

主祭神　土御祖神　猿田彦神　日吉神
例　祭　十月第三土・日曜日
境内地　一一一坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿
摂末社　木野山神社
氏子数　一一〇戸
宮　司　桑野正之
責任役員　大橋真一　大橋重行　西山朝二
由緒沿革　寛政年間に地神社として、創建したものと思われ、もと氏神は玉島八島の神前神社であったが、参拝に遠く不便のため、明治年間に、神前神社の主祭神猿田彦神を、配神に迎えて鎮祀し、八重神社と称し、氏神として信仰するようになった。昭和二十一年に村社となった。最近里見川の河川工事等で、境内をせばめられた。昭和五十年に拝殿、幣殿を新築し本殿を上に移し、昭和五十年十月十一日に落成報告祭を執行した。

疫神社　旧無格社

浅口郡金光町大字占見一四三二

主祭神　素戔嗚尊
例　祭　十月十三日　**境内地**　一〇五坪
主要建物　本殿
氏子数　七六戸　**崇敬者数**　八五人
宮　司　唐川節夫
責任役員　大橋順一　渡辺時男
由緒沿革　本神社の勧請は寛政年間である。例祭には、全氏子が参拝し、祭典に奉仕する。氏神大宮神社のご神幸の御旅所である。

山神社　旧無格社

浅口郡金光町大字占見一一一八

主祭神　大山祇命
例　祭　十月十八日　**境内地**　一六三・一九坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　木乃山神社
氏子数　七六戸　**崇敬者数**　八五人
宮　司　唐川節夫

責任役員　八方正雄　大橋尚之

由緒沿革　本神社は寛政年間に広島県大三島大山祇神社を勧請した。例祭には氏子が参拝し、祭典に奉仕した。夜は子供角力がある。

六神社　旧無格社

浅口郡金光町大字占見新田二九一五

主祭神　伊弉諾尊　伊弉冉尊　正哉吾勝尊　鉾女命
大日霎貴尊　猿田彦命

例祭　十月十五日　**境内地**　二八四・二九坪

主要建物　本殿　拝殿

氏子数　二〇九戸　**崇敬者数**　二三〇人

宮司　唐川節夫

責任役員　鍋谷基次　鍋谷孝志

由緒沿革　本神社の勧請年月は寛政年間である。例祭日は十月十日で、夜は子供の花負力がある。その日宮司、当番の氏子が参拝して祭典を奉仕する。

神社の建築美

神社は各時代ごとに色々な様式を発達させて、各時代の代表的構造美を現代に伝えている。それらの中には日本古代の技法と、大陸から伝来した技法とが融合して、日本民族の神道の信仰が、美の創造に中心的役割を果している。即ち太古の無建築時代から有建築時代に移行して、美しい建築様式を発展させ、日本的建築美を創造した。建築の材料は檜を最上として、独特な美を表現し、宗教的雰囲気を醸成している。

古代には素木造で彩色もなかったが、弘仁時代以後仏教の影響を受けて、木材に朱と黄土とを塗るようになった。春日大社等がその好例である。鎌倉時代には細部に彫刻されたが、これは天竺様や唐様の影響である。室町時代になると彫刻が特に発達した。徳川時代には東照宮の如く、豪壮華麗な彩色と彫刻とが頂点に達したと思われる。現代では古代の素木造や、簡単な彫刻を好む傾向となり、彩色も不振となっている。新しい建築材料としてコンクリート造の神社が出現するようになった。この傾向は今後益々発達するものと考えられる。東京の日枝神社、神田神社、神戸の湊川神社などが代表的なものである。岡山市内では三門の國神社の本殿が、最初のコンクリート造である。

笠岡支部（六〇社）

一宮神社　笠岡市西大島四〇六一……二五一
厳島神社　〃　生江浜八七四……二五一
稲荷神社　〃　入江六九五……二五一
稲荷神社　〃　笠岡二三六三……二五一
稲荷神社　〃　西の浜五五九七……二五一
稲荷神社　〃　笠岡一八三九……二五一
艮神社　〃　大宜三五五……二五二
丑寅神社　〃　尾坂二二〇九……二五二
皇子神社　〃　押撫四四三……二五二
大鳥神社　〃　大島五六三九……二五三
大歳神社　〃　金浦三五四……二五三
大歳神社　〃　絵師二七三……二五三
大歳神社　〃　馬飼六〇九……二五三
大歳神社　〃　飛島五七七〇……二五三
御滝神社　〃　西大島七一一〇……二五三
笠神社　〃　笠岡六七九……二五四
春日神社　〃　小平井一九六五……二五四
葛城神社　〃　大河一二八三……二五五
河神社　〃　大島中八一八三……二五五
北八幡神社　〃　笠岡五二八九……二五五
霧見神社　〃　相生一〇六八……二五六
熊野神社　〃　篠坂六八三……二五六
荒神社　笠岡市押撫三五三……二五六
荒神社　〃　大島中一四四一……二五六
神島神社　〃　神島外浦一七〇六……二五七
甲弩神社　〃　甲弩七八九……二五七
佐山神社　〃　篠坂一九八三……二五七
四社神社　〃　白石島八五四……二五七
島神社　〃　飛島六八九五……二五七
聖霊神社　〃　西大戸七八〇……二五八
菅原神社　〃　吉浜一六六一……二五八
菅原神社　〃　用之江二〇四七……二五八
素盞嗚神社　〃　大島中一一三九……二五九
諏訪神社　〃　北木島三三一九……二五九
諏訪神社　〃　園井一〇六六……二五九
諏訪神社　〃　篠坂一六八一……二五九
田方神社　〃　金浦三五四……二五九
高麗神社　〃　笠岡二二八四……二六〇
高島神社　〃　高島四六九〇……二六〇
武宮神社　〃　走出一〇三二……二六〇
天神社　〃　神島五三三五……二六〇
天神社　〃　東大戸一九六四……二六〇
天神社　〃　大島中四三〇六……二六一
天神社　〃　大島中一五一二八……二六一
天満神社　〃　笠岡五五三一……二六一
徳民於賀神社　〃　富岡八六三……二六一

道通神社　笠岡市横島一三八九……二六二
箱田山神社　〃　吉田三〇九九……二六二
八幡神社　〃　山口三五五〇……二六二
八幡神社　〃　関戸三〇〇……二六二
八幡神社　〃　今立一二五……二六三
八幡神社　〃　茂平七二八……二六三
八幡神社　〃　有田　二二七〇……二六三
八幡神社　笠岡市金浦三五四……二六三
八幡神社　〃　西大島三六七四……二六三
八幡神社　〃　真鍋島四九一二……二六四
日吉神社　〃　広浜二七四……二六四
明神神社　〃　広浜六三……二六四
海神社　〃　新賀一六八八……二六四
綿津見神社　〃　今立一一六三……二六五

依代（よりしろ）

祭りにあたって神霊が降臨するための標示物をいう。樹木・石などの自然物の場合と、幟・柱・御幣・花などの鋪設の場合とがある。神籬・磐境・執物等も古代から認められている。現代では樹木が依代と考えられている。自然の森や木立のある聖域に降臨するとの観念から、その一部を祭場に立てたり、装飾をほどこすにいたり、多様化したものであろう。また聖である木の枝などを手にした者が神の憑依体として神の意志を伝え、祭りにあずかる者の象徴となった。

祓

心身のつみけがれをはらって清浄になる行事をいう。祓の神話では、伊弉諾尊が黄泉を訪れて、ふれたけがれを海水をあびて禊を行なったこと、いま一つは素戔嗚尊が高天原での暴行を罪として、その代償の贖物を出させたこと、この二つが祓の権輿とせられる。すなわち禊祓は穢と罪とに対する二通の祓がある。禊祓は神事のために清浄になる吉事祓で事前に行なうものである。今日行なわれている祓は不祥を祓い福を求める祓として世俗化したものである。

一宮（いつきゅう）神社　旧村社

笠岡市西大島四〇六一

主祭神　吉備津彦命
例祭　十月第一土・日曜日
境内地　一、四五四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　天神社　菅原神社　沖神社　住吉神社　嚴島神社
氏子数　二〇〇戸
宮司　小川暎興
責任役員　枝松主夫　大島繁二　仁科佐久太　廣常好量
由緒沿革　文正年間に備中一宮、吉備津宮から勧請し明治六年村社に列格。明治八年第四回の改築を行った。

嚴島（いつく しま）神社　旧村社

笠岡市生江浜八七四

主祭神　市杵島姫命外二女神
例祭　九月十七日　**境内地**　四五二坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿
摂末社　荒神社　金刀比羅宮
氏子数　一七七戸　**崇敬者数**　五五〇人
宮司　志水主計
責任役員　藤井宮一　藤井浪太郎　藤井勉　北村伊三夫
由緒沿革　口伝によると住民ことごとく海によって生計を営むをもって、海上安全の守護神として嚴島神社を勧請したという。勧請年月は、不詳であるが、最初生江浜字風呂の谷という山腹に奉祀したという。宝永年中現在の所に社殿を造営し、今日に至っている。よって知り、新兵衛がこれを勧請し、今日に及んだと伝えている。

稲荷（いなり）神社　旧無格社

笠岡市笠岡一三六三

主祭神　倉稲魂命
例祭　九月十五日　**境内地**　三五四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社　恵美須神社　嚴島神社
氏子数　三〇〇戸
宮司　平田義見
責任役員　西島稔　山下覚一
由緒沿革　正徳年間鳥越新兵が、入江新田及び西大島新田を開墾しようとし、正徳二年公儀の許を得、享保九年工を起し、同十一年竣工した。当時海面埋立の必要上土砂採取のため、大殿洲小殿洲を官から無償拂下を得たが、たまたま大殿洲に小祠があることを神夢によって知り、新兵衛がこれを勧請し、今日に及んだと伝えている。

稲荷（いなり）神社　旧無格社

笠岡市笠岡一三六三

主祭神　宇迦之御魂神
例祭　四月五日　**境内地**　五、七〇五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社　恵美須神社　五社稲荷神社　沼名前神社　白王稲荷社外十四社
崇敬者数　二、四五〇人
宮司　田野口操
責任役員　萬木徳一郎　小林保
宝物　甲冑　狗犬
由緒沿革　本神社の創建は弘治元年正月、村上隆重が古城山に築城し、城内の鎮守として勧請した。元禄十三年の御検地水帳に古城山稲荷社地の一畝六歩と山林一町一反八畝十五歩が除地となっている。宝暦六年から文化十三年にわたり、社殿工作物の寄進が全国に及んでいる。当神社は領主、代官はもとより、地方人一般の信仰が厚く、社運が隆盛であった。

稲荷神社（いなり）　旧無格社
（俗称朝庫稲荷神社）

笠岡市西の浜五五九七

主祭神　倉稲魂命
例　祭　旧六月十七日　**境内地**　四〇坪
主要建物　本殿　社務所
摂末社　末社一棟八社　金精神社
崇敬者数　七五〇人
宮　司　小川光庸
責任役員　前川茂市　角田晴志
由緒沿革　勧請は安政五年六月二十五日である。明治十七年八月二十五日、出水により流失した。現社殿はその後の建造である。

稲荷（いなり）神社　旧無格社

笠岡市笠岡一八三九

主祭神　倉稲魂神
例　祭　六月三十日　**境内地**　三一九坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿　神輿庫　社務所
摂末社　明神社　御崎神社

艮（うしとら）神社　旧村社

笠岡市大宜三五五

主祭神　吉備津彦命　幸魂神
例　祭　旧九月二十九日
境内地　二、六七四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社　貴布禰神社
宮　司　志水主計
責任役員　松浦　昇　松浦伸樹　鳥越時敏
由緒沿革　勧請年月等不詳。もと、丑寅宮と称したが明治四年艮神社と改称。現在の社殿は文化三年に造営されたものである。昭和六年村社に列格。

丑寅（うしとら）神社　旧村社

笠岡市尾坂二二〇九

主祭神　大吉備津日子命　若建吉備津日子命
例　祭　十月九日　**境内地**　二七〇坪
主要建物　本殿　拝殿　神輿庫
摂末社　荒神社　天神社
氏子数　一四五戸　**崇敬者数**　五八〇人
宮　司　黒坂英人　**禰　宜**　川上　操
責任役員　山県　倫　石井唯夫　西田昭二　佐藤　保　中野　勇
由緒沿革　本神社の勧請は後冷泉天皇の御宇永承元年である。寛文十一年霜月、時の国守従四位上少将源光政公の崇敬により再建が行われた。明治四十年五月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

皇子（おうじ）神社　旧村社

笠岡市押撫四四三

主祭神　神日本磐余彦命
例　祭　十月八日　**境内地**　六五二坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　五〇戸　**崇敬者数**　二〇〇人
宮　司　瀬能太郎
責任役員　的場　実　西　学　佐藤　功
由緒沿革　本神社の創建は寛政元年十月八日であってもと皇子大明神と称した。明治四年一月神社調査の際皇子神社と改称した。明治十年三月村社に列せられた。

大鳥（おおとり）神社　旧村社

笠岡市大島五六三九

主祭神　日本武尊　若年神
例　祭　九月八日　**境内地**　二九一坪
主要建物　本殿　拝殿　釣殿
摂末社　金刀比羅神社　早馬神社　若宮神社　若歳神社
氏子数　一一〇戸　**崇敬者数**　三五〇人
責任役員　三崎弥三郎　中井豊吉　三宅福一
由緒沿革　創建は元禄五年である。もと大島明神と称したのを、明治四年の神社指定に当り、大鳥神社と改称し、明治十二年村社に列格した。

大歳（おおとし）神社　旧無格社

笠岡市金浦三五四

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月二十八日　**境内地**　二四坪
主要建物　本殿　拝殿
崇敬者数　一五〇人

宮　司　志水主計
責任役員　酒井定男　**禰　宜**　守屋格一
由緒沿革　勧請年月等不詳であるが、鎌倉時代の創建と伝えられている。

大歳（おおとし）神社　旧村社

笠岡市絵師二七三

主祭神　大歳神　若歳神　御年神
例　祭　旧九月十三日　**境内地**　六九一坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　御歳神社　若歳神社
氏子数　四八戸
宮　司　渡辺　巧
責任役員　塩飽福一　藤沢八郎　塩飽　稔
由緒沿革　創建年代由緒不詳。旧号、大歳大明神と称し、明治初年から大歳神社と改称した。現社殿は寛保二年に建造されたものである。明治五年村社に列格した。

大歳（おおとし）神社　旧村社

笠岡市馬飼六〇九

主祭神　大歳神　御年神　若歳神
例　祭　十月十五日　**境内地**　一五〇坪
主要建物　本殿　随身門
摂末社　金刀比羅神社
宮　司　田野口操
由緒沿革　本神社は元禄年間の創建といわれているが由緒等不詳である。

御滝（おんたき）神社　旧村社

笠岡市西大島七一一〇

主祭神　伊弉冉命
例　祭　六月十八日　**境内地**　七四九・二九坪

境内地　一、四四一坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　荒神社　平松神社　桜神社　荒神社　十二神社
氏子数　六二戸　**崇敬者数**　一八〇人
宮　司　渡辺　巧
責任役員　小林弘史　坂本健一郎　小林一之
由緒沿革　創建年代由緒不詳。

大歳（おおとし）神社　旧無格社

笠岡市飛島五七七〇

主祭神　大歳神　若歳神
例　祭　旧九月十三日　**境内地**　六九一坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　御歳神社　若歳神社
氏子数　四八戸
宮　司　渡辺　巧
責任役員　塩飽福一　藤沢八郎　塩飽　稔
由緒沿革　創建年代由緒不詳。旧号、大歳大明神と称し、明治初年から大歳神社と改称した。現社殿は寛保二年に建造されたものである。明治五年村社に列格した。

大歳（おおとし）神社　旧村社

笠岡市馬飼六〇九

主祭神　大歳神
例　祭　秋土用入当日

主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　祈雨神社
宮　司　小川暎興
由緒沿革　本神社の創建は寛文六年である。

笠神社　旧村社（元郷社）

笠岡市笠岡六七九



主祭神　応神天皇　天照皇大神
例　祭　十月第二土・日曜日
境内地　一、二九四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　沼名前神社
氏子数　五、〇〇〇戸
宮　司　小川光庸　**禰　宜**　山田　誠
責任役員　鈴鹿方雄　森山高次郎　仁科昌義　広井英一
由緒沿革　古城山城主村上八郎左衛門隆重の書状に、「当所伏越八幡宮造立堅固候条鳶其忠功云々」とある。伏越八幡宮、宮地八幡宮、東八幡宮等の名は笠神社の中古から慣例の古称であって、現在の笠神社は「備中国本宮書記署」によって、社号の復旧を願い出て、明治四年正式神社名となった。小田県当時は郷社であった。

春日神社　旧村社

笠岡市小平井一九六五

主祭神　天児屋根命　太玉命　経津主命　建雷命　外二神
例　祭　十月第二日曜日
境内地　一、三二七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　荒神社　水分神社　立石神社
氏子数　二七八戸　**崇敬者数**　一、〇〇〇人
宮　司　守屋格一
責任役員　原田倫道　藤井森一　森山哲夫
宝　物　花崗岩製明神鳥居　昭和三十五年八月二十五日（岡山県重要文化財に指定）



由緒沿革　本神社の創建は建武二年三月と伝えている。口碑によると、陶山義高が元弘年間、笠置山落城の際、南都春日神社の神鏡と木像とを奉携し、建武二年三月、社殿を奉建し、神鏡と木像を奉祀して春日神社と称して厚く崇敬したという。その後、渡辺杢之正が小平井の領主となり、天文四年社殿を再建し、山林三反余歩を寄進した。

葛城神社　旧村社

笠岡市大河一二八三



主祭神　一言主命
例　祭　十月十日　**境内地**　一七六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　蛭子神社

氏子数　九〇戸　**崇敬者数**　七〇〇人
宮　司　守屋格一
責任役員　黒田　清　藤原晴良　藤原　一
由緒沿革　口碑によると、往古、大和国藩士前田某は葛城山に鎮座の葛城大明神を厚く信仰していた。たまたま大河村字とのやまに滞在して葛城大明神の御分霊を奉斎した。その後、文安元年に宮の地に新殿を修築して奉遷した。正徳年間に領主、代官が霊験の著しいのに感じ鳥居を献納した。明治三年十一月、葛城神社と改称した。

河神社　旧村社

笠岡市大島中八一八三

主祭神　大山祇命
例　祭　十月第三土・日曜日
境内地　一、〇四七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫
摂末社　荒神社　稲荷神社　天神社　天神社　荒神社
氏子数　三五〇戸
宮　司　小川暎興
責任役員　片岡治郎一　住吉隆治　住吉　巴
由緒沿革　創建は永禄元年といわれ、山王宮と称していたが、明治三年河神社に改められた。明治六年村社に列格し明治二十年に社殿再建している。

北八幡神社　旧無格社

笠岡市笠岡五二八九



主祭神　応神天皇
例　祭　旧八月十五日　**境内地**　五七二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　祝詞殿
摂末社　稲荷神社　和霊神社
氏子数　五〇〇戸　**崇敬者数**　三〇〇人
宮　司　小川光庸
責任役員　桝平精二　田林角一

由緒沿革　本神社の創建年代は不詳。寛永三年に東八幡宮（現在の笠神社）を分祀したともいう。天明の頃代官所の信仰が次第に厚くなった。もと、北八幡宮と称していたが、後に北八幡神社と改称した。現在は川辺屋町を中心とする氏子によって維持経営せられている。

霧見神社　旧村社

笠岡市相生一〇六八



主祭神　伊弉諾尊　伊弉冉尊
例祭　十月十日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
境内地　二二六坪
摂末社　大歳神社
氏子数　六〇戸
宮司　守屋格一
崇敬者数　二五〇人
責任役員　高細勉　平井重雄　氷上利夫
由緒沿革　口碑によると、当地方では近江国多賀大明神の信仰が厚く、正暦年間に御分霊を勧請して多賀権現宮として奉斎した。宝暦四年五月、領主内方鉄五郎が高さ四尺余りの石造の丸灯籠を奉納している。今日に至っても、御代官燈籠と呼んでいる。明治三年十二月霧見神社と改称した。明治五年村社に列格した。

熊野神社　旧無格社

笠岡市篠坂六八三

主祭神　伊弉冉尊
例祭　十月十日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　龍神社　荒神社　大歳神社　十二神社　齋神社
氏子数　四六戸
宮司　小川光庸
責任役員　西江渉　樋上正彦　佃数都
特殊神事　鳥祭
由緒沿革　本神社の創建は寛治五年と伝えられる。紀州熊野本宮から御分霊を勧請奉斎したという。明治四年社号を熊野神社と改称した。明治十年三月、村社に列した。本神社は篠坂上郷四十余戸の氏神として、往古から尊信されている。

荒神社　旧無格社

笠岡市押撫三五三

主祭神　素盞嗚尊
例祭　十一月七日
境内地　三五坪
主要建物　本殿
氏子数　一八戸
宮司　黒坂吉三郎
責任役員　福山市坪生　桑田友志　松浦　昇
由緒沿革　本神社の創建は明和四年十月である。昔から水野領土で、広島県深安郡坪生村民の崇敬社であり、産土神と称した。明治三十八年十月三十一日に荒神社となった。俗称は尻借荒神という。

荒神社　旧無格社

笠岡市大島中一四四一

主祭神　奥津彦命　奥津姫命
例祭　十一月一日
境内地　二八・九一坪

主要建物　注連鳥居
宮司　小川映興
由緒沿革　本神社の創建年月日由緒等不詳である。

神島神社（俗称興世明神）　旧村社

笠岡市神島外浦一七〇六

主祭神　神武天皇
例祭　九月最後の土・日曜日
境内地　四七一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所
摂末社　戎神社
氏子数　四五〇戸
宮司　小川光庸
責任役員　妹尾太一　藪田末正　上田　儁　岩井英明
由緒沿革　本神社の創建は延喜年間と伝えている。延喜式内備中十八社の一つである。神殿はかつて福山藩主水野美作守が改築したもの。神苑内には杉宮内大輔の篆額、大教正田中頼庸撰文の高島神社の碑がある。

甲弩神社　旧村社

笠岡市甲弩七八九

主祭神　伊邪那岐命　素盞嗚尊　吉備津彦命
例祭　十月第三日曜日
境内地　一、〇七二・五七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神楽殿　社務所
摂末社　荒神社　八尊社　諸神社　地神社　伊勢神社　安岐都芸社　瘡神社　出雲大社　丑神社　弁天社
氏子数　二八〇戸
宮司　守本壮平
崇敬者数　一、〇〇〇人
責任役員　大山清　横原敏男　木山隆弘　池田忠男
特殊神事　七年神楽
由緒沿革　神護景雲元年九月の創建。古くは甲弩郷七箇村の大氏神と伝えられる。艮宮または大明神とも称せられる。元暦文治の頃源平争乱のため、文書宝物を多く失った。寛永十四年、国守池田出雲守により再建。宝永七年、領守代官万年七郎右衛門により再建。明治五年社格御定の際村社に列格。甲弩神社と改称。同四十年五月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

佐山神社　旧村社

笠岡市篠坂一九八三

主祭神　猿田彦命
例祭　十月十日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　十二神社　御崎神社
氏子数　三〇戸
宮司　黒坂吉三郎
責任役員　内山　透　内山正義　内山弘志　内山信雄
由緒沿革　本神社は明和年中の創建である。往古から佐山大明神と称え、本村の氏神として尊崇している。明治四年正月に佐山神社と改称した。同十年、村社に列格した。

四社神社　旧村社

笠岡市白石島八五四

主祭神　丹生津比賣命　仲哀天皇　高野日子命
例祭　旧八月十七日
境内地　一〇九坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　三一〇戸
崇敬者数　九〇〇人
責任役員　山川真一　原田鹿太郎　山川繁市
由緒沿革　山内守護神開龍寺の鎮守として勧請したものである。元暦年間の源平水島合戦の菩提を弔うために建立した。明治維新の時、神仏を分離し、四社明神を氏神とよんで氏神とした。昭和五十年社殿を再建した。

島神社　旧無格社

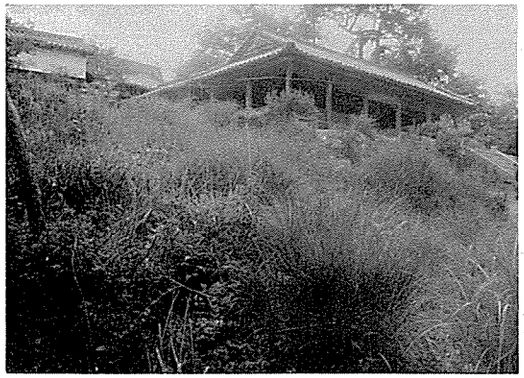
笠岡市飛島六八九五

主祭神　神武天皇

例　祭　旧六月十七日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　一〇〇戸
責任役員　藪田光夫　岡本　譲　山河竹市　釜本岩夫
由緒沿革　創建は元禄年中で、由緒等不詳。大祭には村民総出で舟乗し、島を一周して、十船の行列がお召し船のおともをするのが常例となっている。京阪神に出かせぎの若者も、この日ばかりは帰郷しお祭に参加している。

聖霊神社　旧村社

笠岡市西大戸七八〇



主祭神　吉備津彦命
例　祭　十月第二日曜日
境内地　六六一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社　水分神社
氏子数　八〇戸
宮　司　守屋格一
責任役員　藤原忠臣　増成　壽　村上　実
由緒沿革　口碑によると、むかし当地方に清滝という小瀑布があって、その渕に怪物が棲み人々を苦しめていた。時に吉備津彦命が当地方御通過の際、人民の苦しみを救うため渕の怪物を退治せられた。それは水虬であった。人民は命の御徳を仰ぎ、氏神として尊崇し清瀧大明神と称した。明治三年十二月、聖霊神社と改称した。

菅原神社　旧村社

笠岡市用之江二〇四七

主祭神　菅原道真公
例　祭　九月十五日　**境内地**　二、四四四坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿
摂末社　大歳神社　沼名前神社　吉備彦神社　巖島神社　水分神社
氏子数　三五〇戸　**崇敬者数**　三五〇人
宮　司　志水主計　**禰　宜**　志水義則
責任役員　佐藤威男　藤本生一　佐藤定男　河合　清
由緒沿革　本神社の創建は延宝三年六月、備後福山の城主水野勝種の勧請造営と伝えている。享保二年、寛政五年、文化十三年に社殿の屋根葺を、文政六年には拝殿の再建をした。大正十年には本殿、拝殿の修覆をした。昭和二十五年十月、本殿、神輿蔵の修理をした。

菅原神社　旧村社

笠岡市用之江二〇四七

主祭神　菅原神　少彦名神
例　祭　十月十日　**境内地**　二、四四四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　八幡神社　貴船神社　稲荷神社　龍王神社
氏子数　一四五戸　**崇敬者数**　九〇〇人
宮　司　志水主計　**禰　宜**　大山秀憲
責任役員　城戸睦夫　城戸富待　三好明宗　加藤　弘　藤井哲夫　三好勝象
由緒沿革　万治二年創建。初め天神宮と称した。元禄年間に福山藩主水野日向守が神田を献じて崇敬している。毎年八月例祭には神田作米により、盛大な神事が斎行された。寛延三年本殿を再建。天明二年拝殿釣殿を増築。明治四年菅原神社と改称した。明治三十八年本殿、拝殿を修理した。昭和六年村社となった。

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　旧六月七日　**境内地**　六七五坪
主要建物　本殿　幣殿　中殿　拝殿　神庫　船庫
摂末社　戉神社　大明神社　由加神社
氏子数　二五〇戸
宮　司　小川暎興
責任役員　浅野覚男　浅野　隆　黒住武雄
由緒沿革　元亀三年に備後国鞆の浦祇園宮から素盞嗚命を勧請し、天王宮と称し、明治六年十二月に素盞嗚神社と改称した。文久三年十一月十日領主池田政詮が岡山藩主池田茂政と共に海岸防備のため、長浜砲台を巡察する途中、奉幣祈願している。後、鴨方藩主の崇敬が多大であった。昭和二十一年一月村社に列した。

諏訪神社　旧村社

笠岡市北本島三三一九

主祭神　建御名方命
例　祭　旧六月十七・十八日

素盞嗚神社　旧村社

笠岡市大島中一一三九

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　旧六月七日　**境内地**　六七五坪
主要建物　本殿　幣殿　中殿　拝殿　神庫　船庫
摂末社　戉神社　大明神社　由加神社
氏子数　二五〇戸
宮　司　小川暎興
責任役員　浅野覚男　浅野　隆　黒住武雄
由緒沿革　元亀三年に備後国鞆の浦祇園宮から素盞嗚命を勧請し、天王宮と称し、明治六年十二月に素盞嗚神社と改称した。文久三年十一月十日領主池田政詮が岡山藩主池田茂政と共に海岸防備のため、長浜砲台を巡察する途中、奉幣祈願している。後、鴨方藩主の崇敬が多大であった。昭和二十一年一月村社に列した。

諏訪神社　旧村社

笠岡市北本島三三一九

主祭神　建御名方命
例　祭　旧六月十七・十八日
境内地　四七七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　八幡神社
氏子数　七〇〇戸　**崇敬者数**　三、〇〇〇人
宮　司　瀬能太郎
責任役員　河田作平　藤谷元春　山本芳市
由緒沿革　本神社の創建は不明であるが、元禄十二年九月に改築し、また寛保三年八月と寛政十一年六月と殿その他の建物がことごとく炎上したが、同四十三年十月再建した。

諏訪神社　旧無格社

笠岡市園井一〇六六

主祭神　建御名方富命
例　祭　旧七月二十七日　**境内地**　一〇四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　一二〇戸
宮　司　守屋格一
責任役員　石丸登美二　馬上　正　仁科寿喜夫　小寺徳一　仁科　保
崇敬者数　六六〇人
由緒沿革　本神社は口碑によれば敬神の念の篤かった某が、信州の国諏訪神社の御分霊を奉戴して帰り、自家の祝神として勧請した由であるが年月は不詳である。社号を昔は諏訪明神宮と称えていたが、明治初年諏訪神社と改称した。

境内地　四七七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　八幡神社
氏子数　七〇〇戸　**崇敬者数**　三、〇〇〇人
宮　司　瀬能太郎
責任役員　河田作平　藤谷元春　山本芳市
由緒沿革　本神社の創建は不明であるが、元禄十二年九月に改築し、また寛保三年八月と寛政十一年六月と殿その他の建物がことごとく炎上したが、同四十三年十月再建した。

諏訪神社　旧村社

笠岡市篠坂一六八一

主祭神　建御名方主命
例　祭　十月八日　**境内地**　二三一坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　五一戸　**崇敬者数**　一五〇人
宮　司　笠原重麿
責任役員　金平　博　金平清茂　掛谷政夫
由緒沿革　本神社の創建は元禄元年という。篠坂字諏訪の山腹に鎮座している。篠坂中組および下部落の氏神である。もと、諏訪大明神と唱えたのを、明治四年一月諏訪神社と改称した。明治五年七月村社に列格した。

田方神社　旧無格社

笠岡市金浦三五四

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　六月十三日　**境内地**　九七坪
主要建物　本殿　拝殿
崇敬者数　一五〇人

宮　司　志水主計　　**禰　宜**　守屋格一
責任役員　酒井定男
由緒沿革　創建は鎌倉時代で由緒等不詳。

高龗神社（高龗住吉神社）　旧無格社

笠岡市笠岡一二八四

主祭神　高龗神　大山祇神　雷神　住吉大神
例　祭　旧六月一日　旧六月二十八日
境内地　二九九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　恵美須神社　猿田彦神社　嚴島神社
氏子数　三〇〇戸
宮　司　小川光庸
責任役員　毛利元一　広井英一　三宅栄吉
由緒沿革　元禄検地帳に高尾神社の名号が見えている。後、再転して現位置に遷った。宝永の頃には龗神社、（おがみ神社）と呼んでいたようだ。里人は今日では「たかを神社」と呼んでいる。明治二十八年紡績工場を設立するにあたって本神社は現在地へ移った。昭和三十二年六月、住吉神社を合祀し、社殿を新築し、遷座して現在に至っている。

高島神社　旧無格社

笠岡市高島四六九〇

主祭神　神武天皇
例　祭　五月五日　　**境内地**　三一〇坪
主要建物　本殿
氏子数　一〇〇戸　　**崇敬者数**　一〇〇人
宮　司　渡辺更生　　**禰　宜**　定金恒次
責任役員　河田作一
由緒沿革　創建不詳。明治維新後、従来の社名「神武皇帝宮」「神武天皇宮」または神武天皇神社・神武天皇社を改めて高島神社と改称した。明治十二年官幣大社創設を請願した。同十四年内務卿から太政官に伺い出て允許により、お手植の榊を植え、玉垣を建造し、官有地に編入した。

武宮神社　旧村社

笠岡市走出一〇三二

主祭神　建速須佐之男命　伊邪那岐命　櫛名田比賣命　合祀九柱神
例　祭　十月二十日　　**境内地**　四三五・八六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　五宮神社
氏子数　三七七戸　　**崇敬者数**　五〇人
宮　司　木山儁　　**禰　宜**　木山武彦
責任役員　藤田時雄　森佐太郎　片岡　清　田中誠一
由緒沿革　創建は称徳天皇の御宇神護景雲元年九月。後村上天皇の正平十六年、再建。また、正親町天皇の元正九年領主紀朝臣小田乗清が大願主となって造営のことがあった。明治四十年五月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。同四十五年村内鎮座八幡神社外五社を合祀した。

天神社　旧村社

笠岡市東大戸一九六四

主祭神　菅原神　少彦名神

例　祭　十月十八日　　**境内地**　一、四六七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　二八〇戸　　**崇敬者数**　一、二五〇人
責任役員　高橋武男　守屋角一
由緒沿革　本神社は少彦名命を祀り、口碑によれば、建保五年領主某が鳥羽山長法寺から、北野天満天神の御分霊御尊像を受けて本神社に合祀したという。本神社の御神体菅公の尊像（定朝の作）は鳥羽法皇の京都鳥羽殿に、長法寺薬師如来像と共に祭られていたもので、平氏西下の時奉じて屋島から陶山城に移し、そこに安置していたものを本神社に合祀したのである。享保六年に幣殿を再建もた。明治四十年五月村社に列格し、神饌幣帛供進神社に指定せられた。

天神社　旧村社

笠岡市大島中四三〇六

主祭神　菅原道真
例　祭　五月十五日　　**境内地**　三五五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　大神社　荒神社　山神社
氏子数　一五〇戸
宮　司　小川暎興
責任役員　原田良雄　山本近一　二階堂将逸
由緒沿革　寛永三年九月十五日筑紫太宰府の天満宮から勧請し、氏神とした。現在の本殿は明治二十八年九月に改築したものである。

天神社　旧村社

笠岡市大島中一五一二八

主祭神　菅原道真
例　祭　十月十七日　　**境内地**　三九四・八五坪
主要建物　日拝殿
摂末社　荒神社　荒神社
宮　司　小川暎興
由緒沿革　本神社は延宝二年十月十七日に京都北野神社から勧請した。

天満神社　旧無格社

笠岡市笠岡五五三一

主祭神　菅原道真公
例　祭　九月二十五日　　**境内地**　四三二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社
氏子数　三〇〇戸
宮　司　小川光庸
責任役員　西山　勝　関藤友八　関藤熙一

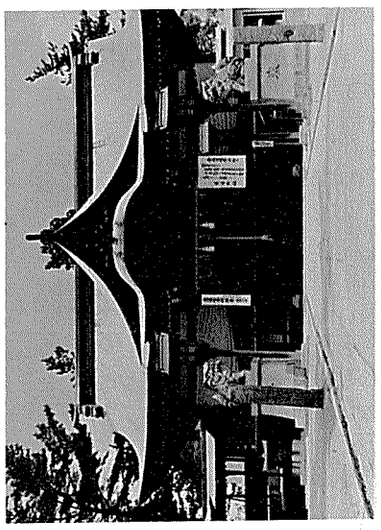
徳民於賀神社　旧村社

笠岡市富岡八六三

主祭神　大国主命
例　祭　十月第三日曜日
境内地　一、二五二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫
摂末社　御歳神社　素盞嗚神社　金刀比羅神社
氏子数　三五〇戸
宮　司　小川光庸　　**禰　宜**　山田　誠
責任役員　小野隆士　大熊忠夫　神田和則
由緒沿革　延宝二年の創建。富岡千拓地の鎮守として福山藩家老上田玄蕃が、七面大明神を勧請したといわれる。富岡新田ができてから、富岡村の誕生は、天和二年と記録されている。明治初年の神仏分離に際し神社書上帳に始めて徳民於賀神社の名が見える。しかし地元の人は七面大明神或は七面様と呼称している。
由緒沿革　創建は天正八年である。現在の御神体は元禄八年の謹刻であって、現社殿は享保六年の建築である。

道通神社　旧村社

笠岡市横島一三八九



主祭神　篠田彦命　応神天皇
例祭　十一月二十日　**境内地**　一、六五〇坪
主要建物　本殿　釣殿　奥拝殿　拝殿　神札授与所　神饌所　休憩所　社務所
由緒沿革　明治末年頃火災により社殿焼失、由緒等不詳。
責任役員　小寺徳一　仁科保
宮司　守屋格一
氏子数　二五〇戸　**崇敬者数**　一、〇〇〇人

八幡神社　旧村社

笠岡市今立一一五

主祭神　応神天皇
例祭　十月五日
境内地　七九二・七五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　二五〇戸　**崇敬者数**　一、〇〇〇人
宮司　守屋格一
責任役員　小寺徳一　仁科保
由緒沿革　明治末年頃火災により社殿焼失、由緒等不詳。

箱田山神社　旧村社

笠岡市吉田三〇九九

主祭神　吉備津彦命　上津綿津見神、少彦名神　素盞嗚神　大年神　応神天皇
例祭　十月十四日　**境内地**　五一七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　四〇〇戸　**崇敬者数**　二〇〇人
宮司　渡辺更生
責任役員　重見多喜男　高原久治　石田多賀志　鶴藤虎男
由緒沿革　創建年月由緒不詳。明治五年村社に列格。

八幡神社　旧村社

笠岡市有田二一七〇

主祭神　応神天皇　神功皇后　玉依姫
例祭　十月第一日曜日
境内地　二、六〇六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　一四六戸　**崇敬者数**　八〇〇人
宮司　志水主計　**禰宜**　大山秀憲
責任役員　大本保衛　寺田完　高田芳人　松浦日吉
由緒沿革　創建年代は不詳だが、宝永三年四月再建、明治六年村社に列格。漁村の守護神として奉祀した。海上安全、大漁繁栄の神として今日に至っている。寛政十年笠岡の地で丸木により建造されたお舟みこしは、今日なお例祭には村中を巡幸し、昔日の漁村の祭りをしのばせている。

八幡神社　旧村社

笠岡市茂平七一八

主祭神　応神天皇　神功皇后　玉依姫
例祭　十月十日　**境内地**　三六八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　天神社　荒神社　金刀比羅宮
氏子数　八二戸　**崇敬者数**　二〇〇人
宮司　渡辺更生
責任役員　森田孝士　梶田堅一　森田浦夫　森田信義
由緒沿革　仁治三年八月の創建。明治五年一月一日村社に列格。明治二十三年十月十日現在地に移築した。明治四十年五月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

八幡神社　旧村社

笠岡市山口三五〇

明治四十五年神饌幣帛料供進神社に指定された。

八幡神社　旧村社

笠岡市関戸三〇〇

主祭神　応神天皇　素盞嗚尊

八幡神社　旧村社

笠岡市西大島三六七四

主祭神　応神天皇

八幡神社　旧村社

笠岡市金浦三五四

例祭　八月十四日　**境内地**　五七六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　田方神社　大歳神社
氏子数数　五八〇戸　**崇敬者数**　一、五〇〇人
宮司　志水主計
責任役員　片山正雄
由緒沿革　創建は鎌倉時代と伝えるが、由緒等不詳。

八幡神社　旧村社

笠岡市関戸三〇〇

主祭神　応神天皇　神功皇后　玉依姫

八幡神社　旧村社

笠岡市山口三五〇

例祭　十月十五日　**境内地**　二三八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　倉庫
摂末社　荒神社　天神社
氏子数数　三七四戸　**崇敬者数**　七〇人
宮司　木山倫
責任役員　平本武夫　山部明　木山生憩　高木甲一
由緒沿革　本神社の創建は弘治元年、土豪広井一郎右衛門がこの地に鎮守社として祀ったものといわれる。寛文十二年、広井六郎左衛門が山城国石清水八幡宮を勧請奉祀した。現在の社殿は明治二十一年の建築である。明治四十年五月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。大正二年十月三日艮大明神外十一社を合祀した。

八幡神社　旧村社

笠岡市茂平七一八

例祭　十月八日　**境内地**　二、一五六坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数数　一八〇戸　**崇敬者数**　五五〇人
宮司　志水主計
責任役員　高田秀雄　坂本学　森岡巧
由緒沿革　本神社の創建は明暦二年四月である。もと八幡宮と称して、往古から本村の氏神であった。明治四年一月、神社名を八幡神社と改称した。村社列格。

例　祭　十月第一土・日曜日
境内地　二、二五四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　小黒崎神社　鳥之江神社
氏子数　三五〇戸
宮　司　小川暎興
責任役員　松枝主夫　大島繁二　仁科佐久太　広常好量
由緒沿革　文禄四年四月十五日、応神天皇の御木像が、菜切と称する器に乗って、海岸に漂着した。これを現在菜切と言う部落の山頂に勧請した。慶長二年本殿を改築した。明治六年村社に列格。昭和五十一年に本殿屋根茸替え等の大修理を行った。

八幡神社　旧村社

笠岡市真鍋島四九一二

主祭神　神功皇后　応神天皇　三女神
例　祭　八月十五日　**境内地**　五七六一坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿　神輿庫　随身門
摂末社　木野山神社他八社
氏子数　三八一戸　**崇敬者数**　九五〇人
責任役員　志村一夫　数口恭平　久一滝夫
由緒沿革　創建は元禄五年四月。もと大島大明神と称したが、後真鍋島八幡神社とした。文政十二年社殿再築。明治四年社格御定めにより六島氏神となり、明治十二年村社に列格した。

日吉神社　旧村社

笠岡市広浜二七四

主祭神　大山咋命
例　祭　旧九月一日　**境内地**　三九六坪
主要建物　本殿　拝殿　釣殿
摂末社　御歳神社
氏子数　四八戸
宮　司　渡辺　巧
責任役員　東山伯平　東山貞雄　渡辺正儀
由緒沿革　創建は応永四年と伝えている。大字広浜に鎮座し、広浜住民の崇敬が篤い。明治六年に村社に列格した。

明神神社　旧無格社

笠岡市広浜六三

主祭神　海童神
例　祭　十月一日　**境内地**　四四五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　釣殿
宮　司　小川映興

海神社　旧村社

笠岡市新賀一六八八

由緒沿革　本神社の創建年月日、由緒等不詳である。
主祭神　豊玉彦命　豊玉比賣命
例　祭　十月十五日　**境内地**　一八四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿



摂末社　荒神社　木山神社
氏子数　二二〇戸　**崇敬者数**　二五〇人
宮　司　平田義見
責任役員　安藤公也　藤井　寛　佐藤文啓
由緒沿革　本神社は、鎌倉時代、時の守護職が攝津国から御分霊を奉戴し、小字宮の後に奉祀した。徳川時代になって領主一ツ橋家の崇敬が篤く、屢次の造営と寄進があったという。大正五年一月、神社整理の際、本社を再建し、小字宮の後から現在の場所に移し、無格社七社を合祀した。

綿津見神社　旧無格社

笠岡市今立一一六三

主祭神　上津綿津見神　中津綿津見神　底津綿津見神　上筒男神　中筒男神　底筒男神
例　祭　旧八月二十五日
境内地　二六四坪
主要建物　本殿　幣殿・拝殿
氏子数　三五〇戸
責任役員　仁科康夫　山下義雄　小寺守一
由緒沿革　創建年月、由緒不詳。今立と園井の境に鎮座し、園井、今立の氏神である。祭日は園井部落は旧八月二十五日、今立部落は旧九月十五日行う。俗称を六柱神社、又は六柱権現といっている。

天神信仰

神として崇められた菅原道真の霊に対する信仰。本来、天神は地神に対する「アマツカミ」で、特定の神をさすものではなかったが、後に雷神信仰と結びつき、平安時代以後は特に道真の霊への信仰と混同した。道真の死後その霊が当時の御霊信仰や、雷神信仰と結びつき、天神とは道真のことを云うようになった。天暦元年（九四七）、京都北野に道真の霊を祀り（北野神社）、天満大自在天神とか大政威徳天神などと称した。また火雷天神ともいった。この信仰は室町時代に全盛となり、やがて文の道の大祖と称せられ、文学・詩歌の神として崇められた。

初午行事

二月の最初の午の日を祝う行事である。京都伏見の稲荷神社の祭神が、山上三ヶ峰に降臨せられたのが、和銅四年（七一一）二月十一日（または九日）という伝えがある。その日が初午であったので縁日にしたと云う。紀貫之集に、延喜六年（九〇六）の二月初午に稲荷詣をした時の歌があり、今昔物語にも二月初午に稲荷山に参る者の多いことが記されている。稲荷神は早くから農業神・商業神などの職業神として信仰されたのみでなく、広く開進の神として信仰されている。二月は農業の開始の前の氏神祭、田の神祭の時期でもあるため、初午の行事が全国的に拡がったと思われるが、その背景に田の神の神使としての狐の信仰があったのが原因と考えられる。

熊野信仰

熊野三山である本宮・新宮・那智の三社を中心として、平安時代とくに院政末期に全国的に流布した浄土的な信仰である。熊野とは神聖を意味している言葉で、伊邪那岐命を葬った花窟（はないわ）が熊野にあるとい神代紀の一書の記載や神武東征には熊野神邑という名が神武紀にあるなど、この地が神々の鎮まる霊地として早くから、知られている土地である。このことからこの土地は、神秘な異郷意識や他界神仙の思想が生じ、平安期には、この古代的な信仰が浄土思想の普及と結合し、弥陀の浄土とする信仰となり、世に「蟻の熊野詣」と呼ばれた。浄土教が流布すると、本宮の祭神は弥陀、新宮の祭神は観音、那智の祭神は勢至を本地とする信仰となり、本宮を証誠殿、新宮・那智を両所権現と呼んで、熊野詣が全国的な流行となった。白河・鳥羽・崇徳・後白河・後鳥羽・後嵯峨・亀山の各上皇合せて一〇六度にもなっているが、後白河上皇は三十四度であった。しかし戦国の世になるにつれて衰頽して行った。

小田支部（四五社）

岩山神社　小田郡矢掛町浅海七五二……二六八
岩山神社　〃　矢掛町中一九一二……二六八
磐裂神社　〃　美星町大字東水砂八一八……二六八
鵜江神社　〃　矢掛町小林一八五七……二六九
鵜江神社　〃　矢掛町西川面一三三四……二六九
宇佐八幡神社　〃　美星町大字黒忠三四三〇……二六九
鵜成神社　〃　矢掛町宇内二〇三一……二七〇
大元鵜江神社　〃　矢掛町東川面一八〇六……二七〇
御崎神社　〃　矢掛町南山田一〇六二……二七一
木野山神社　〃　美星町大字星田三二〇九……二七一
吉備津神社　〃　矢掛町大字上高末四〇二七……二七一
貴布祢神社　〃　矢掛町江良一八〇七……二七二
國司神社　〃　美星町三山一二一五……二七二
木花神社　〃　矢掛町内田一五〇六……二七二
越出神社　〃　美星町大字宇戸谷一二一……二七三
山神社　〃　美星町大字上高末四九四四……二七三
山神社　〃　美星町大字宇戸谷九七六……二七三
四位神社　〃　矢掛町本堀八四七……二七三
諏訪神社　〃　矢掛町下高末二八九六……二七四
崇道神社　〃　矢掛町里山田一六八四……二七四
大宰神社　〃　美星町三山六四八……二七四
中山神社　〃　美星町大字明治六七五七……二七五
雷神社　小田郡矢掛町里山田二四六四……二七五
萩原神社　〃　矢掛町横谷二三三一……二七五
八幡神社　〃　矢掛町字角一四九八……二七六
八幡神社　〃　矢掛町上高末二五六七……二七六
八幡神社　〃　美星町大字宇戸谷二〇三六……二七六
八幡神社　〃　美星町大字三山五五六七……二七六
八幡神社　〃　美星町大字星田五〇五……二七七
八幡神社　〃　美星町大字明治一〇一六……二七七
八幡神社　〃　美星町大字明治四八一一……二七八
八幡神社　〃　矢掛町東三成三〇二二……二七八
八幡神社　〃　美星町大字宇戸七三九……二七八
八幡神社　〃　美星町大字鳥頭一八三六……二七九
日吉神社　〃　矢掛町小田五七三五……二七九
福頼神社　〃　矢掛町横谷　一五三五……二七九
武荅神社　〃　矢掛町小田五六三四……二八〇
星尾神社　〃　美星町大字星田一二七六……二八〇
明剱神社　〃　矢掛町内田六二七……二八一
明剱神社　〃　矢掛町下高末一五一四……二八一
明剱神社　〃　美星町大倉一〇一五……二八一
明剱神社　〃　美星町大字西水砂二〇九……二八二
明剱神社　〃　美星町黒木一〇五……二八二
矢掛神社　〃　矢掛町一五七……二八二
若宮神社　〃　矢掛町江良六〇三……二八三

岩山神社　旧村社

小田郡矢掛町浅海七五二



主祭神　石土毘古神　石巣比賣神
例祭　十月十九日
境内地　二〇三・五坪
主要建物　本殿　浜床　釣殿　祝詞殿　幣殿　向拝　神楽殿　神輿庫　随身門
摂末社　筒井神社　巌島神社　祇園社　吉備津神社
氏子数　二〇五戸
宮司　清水克巳
責任役員　柏原　章　森本一男　高月貴夫　長谷川茂雄　末永忠夫　酒渡満雄
由緒沿革　本神社は西川面式内社鵜江神社の分祀と伝えられ、創建年月は不詳だが、石鳥居建立の元禄四年以前の創建である。現在の社殿は安永五年の建立である。岩山大明神、または岩山宮という古称を岩山神社と改称した。明治四年七月村社に列格した。

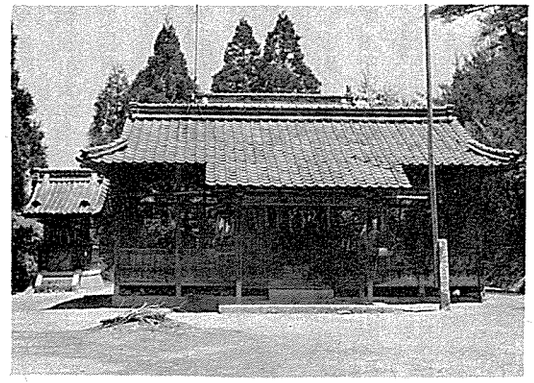
岩山神社　旧村社

小田郡矢掛町中一九一二

主祭神　神日本磐余彦尊
例祭　十月二十一日
境内地　二九二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫　神楽殿　随身門
摂末社　萩原神社　稲荷神社　天神社　石槌神社　若宮神社　御崎神社　龍王神社
氏子数　一二〇戸
宮司　多賀誠三
責任役員　山邊春樹　國司鹿治　岡野増夫
由緒沿革　御祭神、神日本磐余彦尊が吉備高島の宮御滞在中の神徳を仰ぎ勧請したもので、元亀、天正の頃には既に社殿が建立されてあったことは口碑および地名によって証せられる。弥高山寶泉寺住職が社僧として祭事を司り岩山権現宮と称していた。延宝五年十二月の水谷検地帳にも、また、花房検地にも除地としてある。明治四年村社列格、岩山神社と改称した。

磐裂神社　旧村社

小田郡美星町大字東水砂八一八



主祭神　磐裂神　根裂神　経津主神
例祭　十月二十四日
境内地　一一七・八坪

主要建物　本殿　幣殿　拝殿　舞殿　神庫
摂末社　黒丸神社　荒神社
氏子数　二〇〇戸
宮司
責任役員　滝川義男　古城靖夫　武富夫
宝物　神鏡
特殊神事　湯立行事
由緒沿革　本神社は大正元年矢掛神社に合祀したが、終戦後また独立して現在に至っている。

鵜江神社　旧村社

小田郡矢掛町小林一八五七

主祭神　吉備津彦命
例祭　十月二十三日
境内地　八〇〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　舞殿　神庫
摂末社　黒丸神社　荒神社
氏子数　二〇〇戸
宮司
責任役員　滝川義男　古城靖夫　武富夫
宝物　神鏡
特殊神事　湯立行事
由緒沿革　本神社は大正元年矢掛神社に合祀したが、終戦後また独立して現在に至っている。

主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神楽殿
摂末社　下山神社　宇津神社
氏子数　一一七戸
宮司　神崎忠夫
崇敬者数　四五〇人
責任役員　妹尾年夫　安部金次郎　佐藤　孝　川上逸雄　西山京一　片岡達雄
由緒沿革　本神社は口碑によれば吉備津彦命が宝剣を埋められた処を尊崇して瑞籬をめぐらして奉祀した。後、建武元年、吉備津宮の祠官が御分霊を奉安して磐裂宮と尊称した。本殿は方延元年の再建である。明治十年磐裂神社と称するようになった。幣殿・拝殿は明治二十三年の再建である。本神社は布束の三躰妙見宮から暦応三年十月分座したと伝えられている。

鵜江神社　旧郷社

小田郡矢掛町西川面一三三四



主祭神　吉備津彦命
例祭　十月十四日
境内地　六九六・六八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　随身門　社務所　神庫
摂末社　巌島神社　里吉神社　黒丸神社　暁神社　若富神社
氏子数　二〇〇戸
宮司　多賀康人
責任役員　関戸春男　羽田逸二　池田純一　妹尾弘志　妹尾儀一
由緒沿革　本神社は延喜式内社で、文徳実録所載の神社であり、従五以下に叙せられている。本神社は仁徳天皇の勅令により、吉備津神社の五社の神殿が創建せられたその一社として創まり、特に別宮と称せられた由である。また、仁徳天皇の鵜江神社へ立寄られた口碑が小田郡誌に見えている。明治四十年一月、神饌幣帛供進神社に指定せられた。本殿創建以降十一回も屋根葺替えを行っている。棟札は永禄七歳の分以下十枚ある。

宇佐八幡神社　旧村社

小田郡美星町大字黒忠三四三〇

主祭神　応神天皇　神功皇后　姫大神　天之御中主神　彦火火出見尊
例祭　十月二十八日
境内地　四九五・五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所
摂末社　皇神社　荒神社　沼名前神社　水分神社他七社
氏子数　三一〇戸
崇敬者数　一、二五〇人
宮司　神崎忠夫
禰宜　神崎宣武

責任役員　原田迫治　三宅　斉　妹尾朝市　山下　胖
橋本　弘
特殊神事　御湯立行事



由緒沿革　大永三年黒忠村領主竹野井光高が豊前国宇佐神宮の御分霊を奉遷し現地に社を建立した。天文五年神鏡を奉納している。天正九年には竹野井氏高・春高が宮社を再建している。元禄十五年、また宮祀再建の事があった。現社殿は宝暦二年の再建で、拝殿は安政五年の再建である。社務所は昭和二十八年十月建立した。
昭和五十一年四月十五日モデル神社に指定せられた。

鵜成神社　旧村社

小田郡矢掛町宇内二〇三一



主祭神　吉備津彦命
例　祭　十月十五日
境内地　一四〇・七九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　岩山神社　明剱神社　御崎神社　稲荷神社
出雲大社
氏子数　一〇二戸
宮　司　渡辺源一
責任役員　三宅三夫　野木晴男　渡辺鉄夫　有安　健
安原小一　妹尾　渉
由緒沿革　本神社創建は慶安三年九月。小田郡矢掛町宇内の氏神として宇内大明神と称した。もともと鵜江神社の御分霊を奉遷した神社である。吉備津彦命を奉葬した時、お棺が鳴動して一羽の鵜がこの地に止った由緒によって鵜成大明神とおよびすることになった。境内地の所有山林は免租地であった。創建以来屋根葺替修理は五回に及んでいる。明治五年頃村社に列格した。

大元鵜江神社　旧村社

小田郡矢掛町東川面一八〇六

主祭神　吉備津彦命　宇良御玉命　相殿　天之御中主神
例　祭　十月十四日　**境内地**　五四九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫　舞居
摂末社　北田神社　荒神社
氏子数　一七〇戸　**崇敬者数**　五〇人
宮　司　鳥越磐根　**禰　宜**　鳥越真澄
責任役員　木山十一　池田武夫　高岡一郎

由緒沿革　延喜式神名帳には小田郡小社三座とあるが、西隣の西川面にも鵜江神社があるので記述が分明でない。口碑によれば吉備津彦命を中山の南峯に斂葬した時、お棺が鳴動して鵜が一羽飛び出し西方に翔った。その止った処を鵜江神社とひろく伝えている。往古の火災によって宝物・旧書を失っている。明治四年大元鵜江神社と改め村社に列格した。

御崎神社　旧村社

小田郡矢掛町南山田一〇六二

主祭神　若日子建吉備津彦命　譽田別尊　猿田日古命
例　祭　十月二十・二十一日
主要建物　本殿　拝殿　随身門
摂末社　天神社　神前神社　八幡神社　疫神社　龍王神社
氏子数　一八五戸　**崇敬者数**　五五〇人
宮　司　渡辺源一
責任役員　原野政夫　乗本政夫　小川大右　毛利光明
江本　豊　岡本　弘　広畑　要　萩野千秋　原野　忠
特殊神事　百々手祭（二月一日）
由緒沿革　本神社の創建年代は不詳。記録によれば慶長年間と思われる。口碑によると、吉備津彦命が賊平定のため当地方へ入られた時、抵抗を続けた賊を平定して村人を救われたので、命を祭神としていると伝えられている。その故事にちなんで、毎年二月一日、粕酒を飲み、弓を引き鬼を撃つ百々手祭の神事がある。



木野山神社　旧無格社

小田郡美星町大字星田三二〇九

主祭神　大山津見ノ命
例　祭　四月十五日　**境内地**　一六四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫
氏子数　二四戸　**崇敬者数**　八〇人
宮　司　田邊乃聖
責任役員　橋本友一　上田久雄　守屋宗一　橋本美佐夫
由緒沿革　本神社の創建は応永十年八月と伝えている。往古、大吉備津彦命が鬼ヶ嶽の賊を征伐された時、弓をひき給うたところ、その矢の羽の無いものがこの地に落ちた。この事により、羽無という。降って応永十年八月、備中国一宮吉備津宮に説通知憧大和尚が参殿、御分霊を拝戴し、現在地に社殿を造営して信仰した。

吉備津神社　旧村社

小田郡矢掛町大字上高末四〇二七

主祭神　大吉備津彦命
例　祭　十月二十日　**境内地**　四四一・二五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫
摂末社　荒神社　山神社　地神社　火御崎神社　十二神社　木野山神社
氏子数　二四戸　**崇敬者数**　八〇人
宮　司　田邊乃聖
責任役員　橋本友一　上田久雄　守屋宗一　橋本美佐夫
由緒沿革　本神社の創建は応永十年八月と伝えている。往古、大吉備津彦命が鬼ヶ嶽の賊を征伐された時、弓をひき給うたところ、その矢の羽の無いものがこの地に落ちた。この事により、羽無という。降って応永十年八月、備中国一宮吉備津宮に説通知憧大和尚が参殿、御分霊を拝戴し、現在地に社殿を造営して信仰した。
氏子数　二七〇戸
崇敬者数　五、〇〇〇人
宮　司　妹尾　勉
責任役員　仕田原秀夫　大野呂九一　川上静衛
由緒沿革　明治元年四月、上房郡今津鎮座の木野山神社から御分霊を勧請。同年御社殿を建立し、氏子または崇敬者の信仰をあつめて発展した。

貴布祢神社（きふね）　旧村社

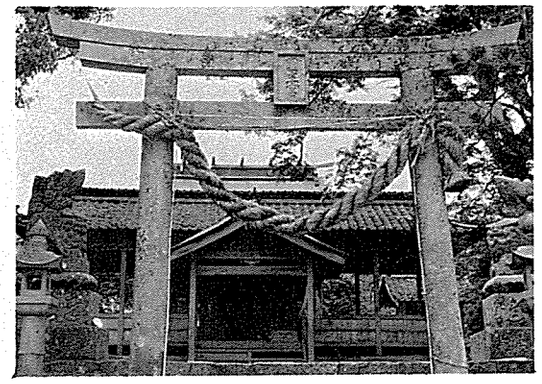
小田郡矢掛町江良一八〇七

主祭神　雷神　大山祇神　高龗神
例祭　十二月二十五日　**境内地**　四二六坪
主要建物　本殿　幣殿　祝詞殿　神楽殿　社務所
氏子数　一五〇戸
宮司　渡辺源一
責任役員　土諤太郎　守屋光雄　守屋都一　鳥越芳夫　片山　登　佐藤勝夫　佐藤京一　佐藤繁雄　松田国一
由緒沿革　創建は元禄年間であろう。旧社格は村社。元禄七年には板倉攝津守の祈願所となった。京都愛宕郡鞍馬村大字貴船の貴船神社の御祭神を分祀したものと伝えられている。

國司（くにし）神社　旧村社

小田郡美星町三山一二一五

主祭神　大己貴命
例祭　十月二十四日　**境内地**　二一三・八六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫
摂末社　荒神社　太宰神社



氏子数　二二〇戸
宮司　妹尾　勉
責任役員　細川精一　杉原　昇　大元吉郎　山室　靖
由緒沿革　本神社の創建は延宝八年と伝え、大國主命を祀り、土地の人の信仰するところである。三山大明神と称した。宝暦の頃、社殿を建立し、國主宮と称した。後、國司神社と改称した。明治五年七月村社に列格。昭和五年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

木花（このはな）神社　旧村社

小田郡矢掛町内田一五〇六



主祭神　木花佐久耶姫命　大宮姫命
例祭　十月二十日　**境内地**　一一八・五六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫
摂末社　荒神社　火崎神社　木野山神社　水分神社
氏子数　四三戸　**崇敬者数**　一五〇人

宮司　中村春治　**禰宜**　中村和昭
責任役員　岡田卓史　阿部昭夫　斎藤　茂　三宅佳一
由緒沿革　本神社の創建は応永元年五月と伝えているが不詳である。昭和二十九年九月十日の大暴風の際、御本殿屋根が大破したので銅板で葺替えた。同三十年九月、幣殿、拝殿、神楽殿、炊事室、便所、末社二社の改築を行った。明治六年七月、村社に列格した。

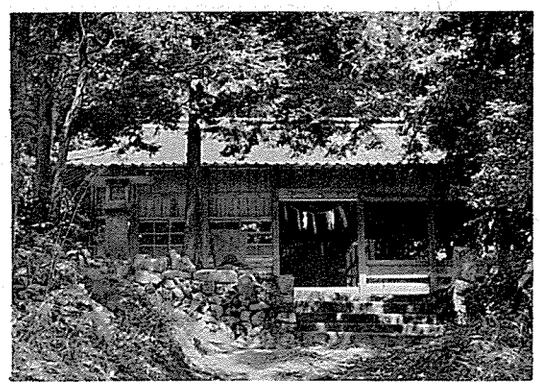
越出（こしで）神社　旧無格社

小田郡美星町大字宇戸谷一二一

主祭神　猿田彦命　相殿天宇受賣命
例祭　十月十七日
境内地　一〇七・九八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　出雲大社　荒神社
氏子数　二四戸　**崇敬者数**　一〇〇人
宮司　佐伯隆治
責任役員　光守　稔　定井収介　定家光夫
由緒沿革　本神社の創建は享保二年。梵天王宮と称して宇戸村民の崇敬が厚く、現在の地に斎祀。明治五年の社格お定めの節に越出神社と改称した。

山（さん）神社　旧無格社

小田郡美星町大字上高末四九四四



主祭神　大山祇命
例祭　十月十八日　**境内地**　九四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社
氏子数　三二戸
崇敬者数　一〇五人
宮司　神崎忠夫
責任役員　長谷川幸一　岡本利一　長谷川大助
由緒沿革　享保二年高末村住民の崇敬が厚く、上高末に祭祀した。明治初年高末村と分離して宇戸村と合併の際、山神社と称した。

山（さん）神社　旧無格社

小田郡美星町大字宇戸谷九七六

主祭神　大山咋命
例祭　十月十八日　**境内地**　九四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫
摂末社　荒神社　火御崎神社
氏子数　三二戸　**崇敬者数**　二五人
宮司　田邊乃聖
責任役員　瀧本　茂　長谷川隆志　長谷川唯男
由緒沿革　本神社の創建は、口碑によれば建仁元年の勧請と伝えられている。淡路国日枝山から勧請したとも、比叡山から長谷川家の先祖が勧請したともいわれる。鎮守神として奉祀したのは烏頭八幡神社氏子である。

四位（しい）神社　旧村社

小田郡矢掛町本堀八四七

主祭神　吉備津彦命　岩山之神
例祭　十月十日　**境内地**　三一七・四一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神輿庫

氏子数　一六二戸　　**崇敬者数**　三〇〇人
宮　司　浅倉　博
責任役員　鳥越繁一　増田　章　江木　仁　妹尾正夫
鳥越　運　古城秀夫



由緒沿革　本神社は仁賢天皇六年の創建と伝えている。小田郡矢掛町西川面式内社鵜江神社の分社と伝えられれるが不詳。延宝五年水谷左京亮の検地帳によると、宮屋敷弐畝十歩・山林八反歩が除地の扱いとなっている。尚、その五十六年以前も除地の扱いがしてある。氏子文屋友右衛門（年月不詳）が神田弐反八畝六歩を寄進、年々その神田米で祭典を執行していた。
（農地調製法施行以前まで）

諏訪神社

旧村社

小田郡矢掛町下高末二八九六



主祭神　建御名方命　八坂入比賣命
例　祭　十月二十日　**境内地**　二八五坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　荒神社　御崎神社　若宮神社
氏子数　七九戸
宮　司　渡辺源一
責任役員　片山剛夫　大元克巳　中村定夫
由緒沿革　本神社は明応七年に勧請。貞享元年に再建。元禄六年十月、諏訪大明神の鳥居を建立。明和七年極月炎上。同八年再建。七月二十六日正遷座を奉仕した。大正元年、境内に荒神社、御崎神社を合祀した。

崇道神社

旧村社

小田郡矢掛町里山田一六八四

主祭神　舎人親王
例　祭　十月二十一日　**境内地**　八七六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　天神社　國司神社
氏子数　二〇〇戸　**崇敬者数**　八〇〇人
宮　司　多賀誠三
責任役員　土屋義雄　原田　守　岸野徳太郎
由緒沿革　本神社は昔（凡そ三百年前と推定）から崇道大明神または崇道宮とも称せられ、旧里山田村の氏神であった。氏子の尊信厚く里山田区の土地を境内地として鎮座している。

大宰神社

旧無格社

小田郡美星町三山六四八

主祭神　倉稲魂命

例　祭　十月二十四日　**境内地**　一五三・五二坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　二三戸
宮　司　妹尾　勉
責任役員　高尾省吾　高尾一三男　山本　猛
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳。古老の口伝えよると、嘉禄年間、橘氏の鎮守の神として祀っていたのが後世、苅屋部落民が崇敬するところとなった。明時年間社格お定めの時、國司神社の末社となり、また昭和二十九年同國司神社の飛地境内神社となった。昭和四十五年十一月十九日新設（大宰神社）現在に至っている。

中山神社

旧村社

小田郡美星町大字明治六七五七

主祭神　天之御中主命　神皇産霊神　高皇産霊神
例　祭　十月十九日　**境内地**　一二六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫
氏子数　四五戸　**崇敬者数**　七人
宮　司　藤井多聞
責任役員　谷本　正　松本源一　難波　実
宝　物　棟札
由緒沿革　本神社は建武年間の創建と伝えられている。元亀二年神殿再建、降って宝永五年、宝暦十年、嘉永元年、明治八年、大正二年社殿、拝殿、本殿を再建した。本神社は貞和五年三月焼失し、嘉永六年正月再度焼失した。

雷神社

旧無格社

小田郡矢掛町里山田二四六四

主祭神　雷神　鳴雷神
例　祭　十月二十一日　**境内地**　二九二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　疫神社
氏子数　四〇戸
宮　司　多賀誠三
責任役員　土屋義雄　原田　守　岸野徳太郎
由緒沿革　本神社は昔は鳴雷大明神、鳴師大明神、雷師大明神と呼ばれた。口碑によると、この土地へ度々落雷し、土地の人を驚かしたため、鳴雷神社として鎮祀したといわれる。本神社はもと、崇道神社の末社であったが、独立神社となった。

萩原神社

旧村社

小田郡矢掛町横谷二三三一

主祭神　天児屋根命　大山祇命外五柱
例　祭　十月二十二日　**境内地**　四八四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神饌所　社務所
摂末社　若宮神社
氏子数　二七〇戸　**崇敬者数**　一、〇〇〇人
宮　司　浅倉　博
責任役員　川井洋之介　斎藤政雄　木村喜久夫　田中卓郎　小野太郎



由緒沿革　本神社創建年代不詳。明治四年三月村社に列格せられた。

八幡神社　旧村社

小田郡矢掛町字角一四九八

主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神庫
摂末社　御崎神社　高良神社他二十五社
氏子数　一三四戸　**崇敬者数**　七二六人
宮　司　中村春治　**禰　宜**　中村和昭
責任役員　岡田孝一　三好忠良　本多　智　友光俊郎
特殊神事　例大祭宵祭に神代神楽奉納



由緒沿革　本神社の創建は明応二年八月と伝えている。口碑によると、伯耆国の住人が名和長年に従ってこの地に住み、数回伊勢神宮に参拝し、石清水八幡宮の御分霊を勧請し、上高末の氏神として崇拝した。明治二十五年本殿、拝殿、幣殿を造営した。大正十二年六月に御本殿屋根を銅葺に改めた。昭和十四年十二月、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

主祭神　応神天皇　外二柱
例　祭　十月二十日　**境内地**　五九七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神楽殿
摂末社　山野神社　荒神社　疫神社
氏子数　七〇戸　**崇敬者数**　五〇人
宮　司　鳥越磐根
責任役員　古中壽多　田辺覚一　林　弘　松永　勇

由緒沿革　本神社の創建は正暦四年八月というが不詳、延應二年、応永三十二年改築の木札が存している。口碑によると、昔、竜王山に鎮座していたが、五百年位前に現在地に勧請した。当地方で一番古い神社である。明治四年七月村社に列格した。

八幡神社　旧村社

小田郡矢掛町上高末二五六七

主祭神　仲哀天皇　神功皇后　応神天皇
例　祭　十月二十日
境内地　三五八・二四坪

八幡神社　旧村社

小田郡美星町大字宇戸谷二〇三六

主祭神　応神天皇
例　祭　十月十八日　**境内地**　二六四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　倉庫
摂末社　明剱神社　天満社　神脇神社
氏子数　五三戸　**崇敬者数**　二〇〇人
宮　司　佐伯隆治
責任役員　藤井　勇　垣内宏之　甲村壮太郎

由緒沿革　口碑によると本神社の創建は崇徳天皇の保延年間と伝えている。後村上天皇の興國二年、岸本兵庫頭が再建。嘉慶二年、八幡宮改築。寛永五年三月、再築。享保十三年造築。大正十三年十月、指定神社となった。

八幡神社　旧無格社

小田郡美星町大字三山五五六七

主祭神　応神天皇
例　祭　十月二十四日
境内地　一五六・八五坪

主祭神　誉田別尊　息長帯比賣命　玉依姫命
例　祭　十二月十八日　**境内地**　二九七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　一二〇戸
宮　司　妹尾　勉
責任役員　妹尾覚之　川上壽夫　大月　勇　三宅　章
竹井寿賀夫

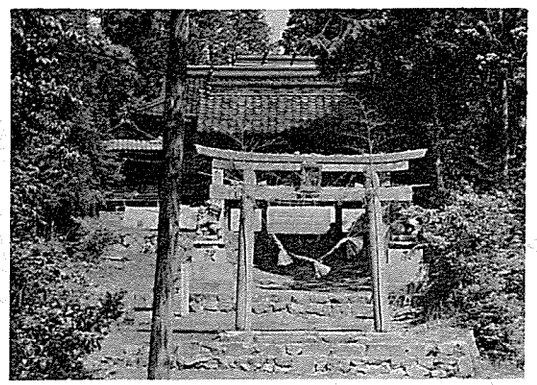
由緒沿革　創建年月日は不詳。もと三村氏の勧請した神社であって、旧号を八幡宮と称し、川東星田の鎮守神として祀っている。氏神星尾神社の摂社五社の一社である。明和年間に御社殿が再建せられている。

八幡神社　旧村社
（俗称　九名八幡宮）

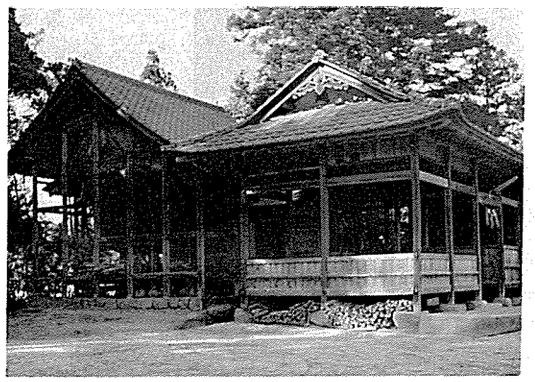
小田郡美星町大字明治一〇一六

主祭神　田心姫命　湍津姫命　市杵島姫命

由緒沿革　往古当九名村の住民が筑前国宗像三前の大神を勧請して氏神とした。元禄十五年冬、柚木与兵衛が氏宮を建立。現御本殿は寛政六年十月に建立した。享和二年頃は妙見宮八幡宮と称した明治九年以後は八幡神社と称した。拝殿、幣殿、社務所は昭和十六年十月



主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　稲荷社　竜王社
氏子数　八二戸　**崇敬者数**　二五〇人
宮　司　神崎忠夫
責任役員　中塚大三　山室勇一　朝原一男
宝　物　金幣（文化十一年九月）
特殊神事　当番と御輿かきは水ごりをとり握り飯を氏子数だけ作り神前に供える。



る。

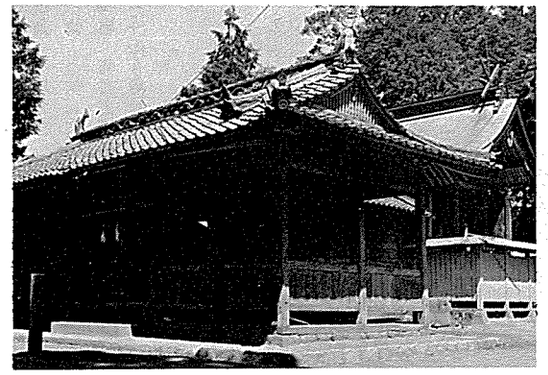
例　祭　十月十五日　**境内地**　九一六・六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　社務所
摂末社　荒神社
氏子数　一六五戸　**崇敬者数**　八五〇人
宮　司　神崎忠夫
責任役員　岡田奎吾　伊達節夫　三村省蔵　滝川義夫
原田賢一　岡田近志　重信佳男
特殊神事　御湯立行事　神楽奉納

由緒沿革　本神社の創建は暦応二年。もと、岸本兵庫頭の鎮守であったが、後世本村宮迫外五ヵ所の人が崇敬するようになり、八幡神社と称した。本殿は棟札によると、「貞享五年四月願主三宅長右衛門尉八幡宮建立」、「寛永十九年三月願主苅屋清右衛門尉再建」とあ

建立。随身門は昭和二十四年十月建立。当神社敷地・山林は領主戸川主馬助の寄進により、社有地となった。

八幡（はちまん）神社　旧村社

小田郡美星町大字明治四八一一



主祭神　仲哀天皇　神功皇后　菅原道真

例　祭　十一月三日
境内地　二五五・七六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　神輿庫
摂末社　水分神社　祖霊社
氏子数　七九戸　**崇敬者数**　三八〇人
宮　司　神崎忠夫
責任役員　田辺一夫　田辺卓尓　原田　正　川上日出雄　坂川騏一郎
由緒沿革　本神社鍵取神主田辺家の始祖が丹波国亀山城天守閣に祀られていた菅原道真公の御分霊を奉遷してこの地に社殿を建て天神宮と称した。天文二年成羽鶴首山の正八幡宮の御分霊を当地の住民が勧請合祀した。明治九年八幡神社と改称した。明治四十四年境外摂社萩中神社・金刀比羅宮・荒神社・大山祇神社を合祀。現在の御本殿は明和七年の再建。幣殿、拝殿は天保十二年の建立である。

八幡（はちまん）神社　旧村社

小田郡矢掛町東三成三〇二二

主祭神　仲哀天皇　神功皇后　応神天皇
例　祭　十月二十三日　**境内地**　二八三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神饌所　社務所　神楽殿
摂末社　天身社　吉備神社
氏子数　二六三戸　**崇敬者数**　七〇〇人
宮　司　浅倉　博　**禰　宜**　浅倉澄夫
責任役員　渡辺平介　川上宅一　門谷芳雄　田中仁郎



由緒沿革　本神社の創建は不詳。寛保元年の再建である。明治四年三月村社に列格。

八幡（はちまん）神社　旧村社

小田郡美星町大字宇戸七三九

主祭神　応神天皇

例　祭　十月十八日　**境内地**　二五九・一九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫
摂末社　龍王神社　荒神社　地神社
氏子数　五〇戸　**崇敬者数**　二五〇人
宮　司　田邊乃聖
責任役員　坂川　昇　坂川行幸　田川武志
由緒沿革　本神社は、泉小三郎親平、田辺又七が、永和元年宇佐八幡宮の御分霊を捧持し、社殿を造営したものと伝えている。その後、享保十五年社殿を再建。天明八年九月、領主庭瀬藩板倉摂津守勝喜侯から御戸張一張の寄進があった。明治十二年八月拝殿再建。大正五年九月拝殿修理、昭和二年神庫再建。昭和十年幣殿の修理を行った。

八幡（はちまん）神社　旧村社

小田郡美星町大字鳥頭一八三六

主祭神　応神天皇　湍津姫命　田心姫命　宗形三神
例　祭　十月十八日
境内地　二二八・〇五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　竜王神社　金摩羅宮　若宮社（祖霊社）地神社（天神社、天王社）
氏子数　五五戸　**崇敬者数**　四〇人
宮　司　田邊乃聖
責任役員　西本典雄　長谷川庄一　渡辺万治　田辺宏太

由緒沿革　永和元年九月、田辺又七が土井山に社殿を造営して宇佐八幡宮の御分霊を奉斎し奉仕した。京家一橋領毛利侯も信仰せられた。元禄十年炎焼。宝永三年七月、領主毛利兵橘から境内幅十五間、長さ二十間の寄進があった。享保二年十月、典八山に勧請。寛政年間領主から社殿修覆の儀を申し付けられ、弘化二年九月、宮山に社殿を新築して、典八山から現在地に奉遷した。

日吉（ひよし）神社　旧無格社

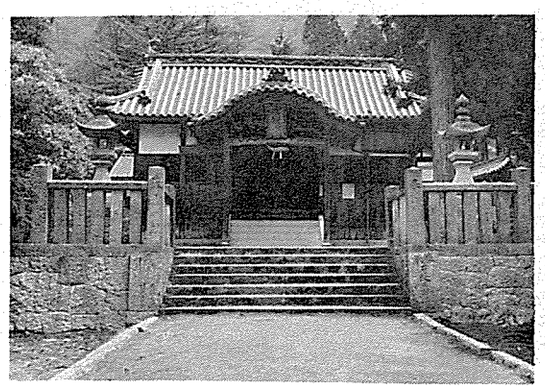
小田郡矢掛町小田五七三五

主祭神　大巳貴命　天児屋根命　國常立尊　大山咋命
例　祭　十月十八日　**境内地**　一七九・七坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿
摂末社　荒神社　恵美須神社
氏子数　一九〇戸
崇敬者数　一五人
宮　司　清水克巳
責任役員　木山由夫　三宅哲也　妹尾作男　大塚武志
由緒沿革　本神社は堀越の産土大神である。創建年代は不詳だが床上小松秀晴の建立との口伝えがある。祭神は四柱であるが、主神は大山咋大神で江州日吉神社の御分霊と古くから語り伝え、石鳥居にも山王宮と刻み、山王宮の愛称で尊崇せられている。秋祭りの当夜、郡宮へ御神霊が出立ちます慣行がある。

福頼（ふくより）神社　旧村社

小田郡矢掛町横谷一五三五

主祭神　素盞嗚尊　大國主命
例　祭　四月十日　**境内地**　四一七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　社務所　籠殿　神庫　随身門



摂末社　太老神社　速武神社　光吉神社　吉岡神社

他十一社

崇敬者数 約一、〇〇〇人

宮　司 福武康子　**禰宜** 福武いずみ

責任役員 福武豊郎　荻原武夫　松田定一　江尻親士

由緒沿革 創建年代不詳。明治三年十二月庭瀬藩庁に提出した書類には、「天正年中毛利様中国御発興ノ砌猿掛城為鎮護再興御座候処其後廃祠同様に相成居候処前領主板倉越中守様御信仰造営被仰付候」とあり、また遙拝神殿、幣殿、前段、末社については、「右は本社高山嶮峻、老若ノ参詣難渋ニ付文政年中御領主ノ依御命山ノ麓ニ造営仕候」とある。明治四十二年村社に列格。

武苔神社　旧村社

小田郡矢掛町小田五六三四

主祭神 素盞嗚尊

例　祭 十月十八日

境内地 七一六・三七坪

主要建物 本殿　幣殿　拝殿　前殿　神饌所　社務所

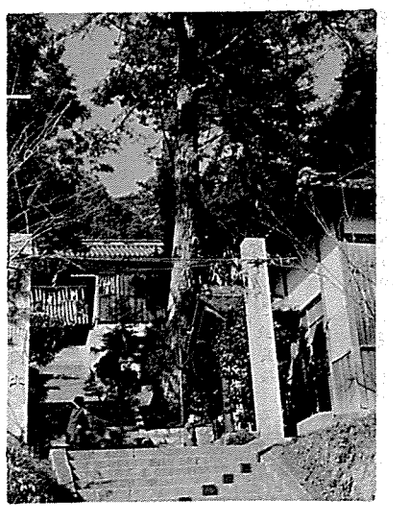
摂末社 郡神社

氏子数 五七〇戸　**崇敬者数** 三五人

宮　司 清水克巳

責任役員 真安武夫　山岡兼吉　中原静夫　小野鹿男

由緒沿革 創建年代は不詳だが、正平二十四年、床上小松秀清が小田庄の地頭職として来た際、神祇七社を再建したが本神社もその一つである。寛永七年天和二年天保十年に社殿を改築している。素盞嗚尊を奉祀し、従来武苔天子宮と呼んでいたが、明治六年武苔神社と改称している。明治七年村社に列格した。明治四十年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。



星尾神社　旧村社

小田郡美星町大字星田一二七六

主祭神 天之御中主神　高御産霊神　神御産霊神

例　祭 十月二十三日

境内地 三四四・四八坪

主要建物 本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫

摂末社 天満神社　杵築神社

氏子数 二七〇戸

宮　司 妹尾　勉

責任役員 大野呂九一　川上静衛　福田武夫



由緒沿革 承久年中に妹尾康定が勧請して星尾大明神と称した。正中元年社殿を建立。貞享年間また明和年間に社殿を再建。大正十五年神饌幣帛料進神社に指定せられた。



明劔神社　旧村社

小田郡矢掛町内田六二七

主祭神 宗像三神

例　祭 十月二十日

境内地 二一四・三三坪

主要建物 本殿　幣殿　拝殿　随身門　神楽殿

摂末社 山田神社　五社合殿　水分神社　荒神社

氏子数 七四戸　**崇敬者数** 二九六人

宮　司 中村春治　**禰　宜** 中村和昭

責任役員 竹内　豊　笠原正夫　古中　昭　守屋　昇

由緒沿革 本神社の創建年月は不詳だが、寛永元年に氏子が再建したという。明治六年七月、村社に列格した。

明劔神社　旧村社

小田郡矢掛町下高末一五一四

主祭神 宗像三柱神

例　祭 十月二十日　**境内地** 一三四坪

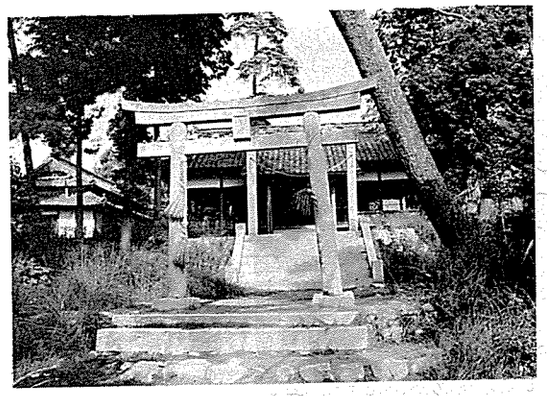
主要建物 本殿　拝殿

氏子数 五八戸

宮　司 渡辺源一

責任役員 長代武一　森下政夫　山本肇　笹井彦太郎　平井重朗　藤田　昇

由緒沿革 本神社は永正五年の創建と伝えている。貞享三年九月に再建の事があった。社記によると、建久七年十月に、この邑長代筑前守が当社を尊崇して再建した。そのために近郷の崇敬が急に加わって社運が隆盛にむかったという。



明劔神社　旧村社

小田郡美星町大倉一〇一五

主祭神 磐裂神　根裂神　経津主神

例　祭 十月二十四日

主要建物 本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所

摂末社 門宮神社　木野山神社

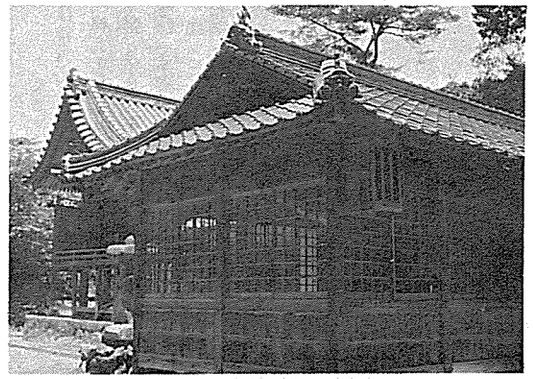
氏子数 九〇戸

宮　司　妹尾　勉
責任役員　三宅伯雄　片岡　茂　広谷勝美　片岡敏男　東田　正
由緒沿革　本神社はもと大倉祝神山に鎮座し土民の信仰するところとなり、暦応三年十月山頂に社殿を建立し三体妙見宮と称した。寶暦二年本殿の再建を見た。明治五年社格御定めの際、村社に列せられ、明剱神社と改称した。明治十年拝殿を建立。昭和五年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。昭和二十三年幣殿、拝殿を再建。

明剱神社　旧村社

小田郡美星町大字西水砂二〇九

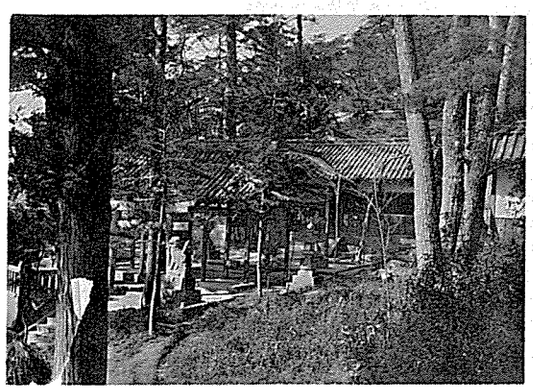
主祭神　経津主神　相殿　磐裂神　根裂神
例　祭　十月十九日　**境内地**　一六〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　八二戸　**崇敬者数**　三五〇人
宮　司　神崎忠夫
責任役員　妹尾章一　河上一夫　池田壽志　瀬尾八十二　鷹家広志
由緒沿革　本神社は大倉村布東に祭祀している三射妙見宮から、暦応三年九月、その一射を畑毛権右衛門が持ち帰り、西水砂亀峯山頂の黒宮に分座し、西水砂村の氏神とした。明治五年社格御定めの節、村社に列せられ明剱神社と改称した。



明剱神社　旧村社

小田郡美星町黒木一〇五

主祭神　磐裂神　根裂神　経津主神
例　祭　十月十七日
境内地　一七一・五四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫
摂末社　荒神社
氏子数　七三戸
宮　司　妹尾　勉
責任役員　藤田剛　金尾正道　金尾　哲　藤原新一
由緒沿革　本神社は暦応三年の創建と伝えている。寛政二年九月、御社殿を再建。降って明治二十六年二月にも社殿が再建せられている。昭和二十年三月、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。



矢掛神社　旧郷社

小田郡矢掛町一五七

主祭神　吉備津彦命
例　祭　十月第四日曜日
境内地　五三五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　斉館　神庫　神饌所　随身門
摂末社　荒神社　天神社
氏子数　一〇〇〇戸　**崇敬者数**　三〇〇人
宮　司　代務者　清水克巳
禰　宜　鳥越真澄
責任役員　新谷一雄　田口卓志　山部五六　大森武夫
宝　物　木造高麗獅子一対
由緒沿革　本神社はもと、丑寅大明神と号し、一宮吉備津神社の七十二末社の一社である。天正三年毛利氏の猿掛城入城の際、当社の大修理を行っている。元禄十二年には庭瀬の板倉氏が鳥居一基を寄進している。文化十四年には随身門が寄進せられている。大正元年小林の鵜江神社を合祀し、矢掛神社と改称した。大正六年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。昭和十七年三月、郷社に列格した。

若宮神社　旧村社

小田郡矢掛町江良六〇三

主祭神　神武天皇
例　祭　十月十七日
境内地　一、〇七三・九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　一五〇戸
宮　司　渡辺源一
責任役員　土　壽太郎　守屋光雄　守屋都一　佐藤繁雄　片山　登　佐藤勝夫　佐藤京一　松田国一　鳥越芳夫



由緒沿革　本神社は小田郡矢掛町東川面式内社鵜江神社から寛永十四年八月、大字江良の宮地に御分霊を奉遷した神社で、若宮大明神または若宮宮と称せられた旧江良村の氏神であった。宝永二年卯月屋敷替をして現在地の山之神に遷座を行い、寛延三年八月、天保十三年六月の改築を経ている。昭和十一年六月若宮宮を若宮神社と改称した。

国史現在社

六国史のなかに記載せられているが、延喜式の神名帳には記載がない、いわゆる式内社ではないが、正式の六国史に社名のある神社をいう。

権現信仰

権現神に対する信仰である。仏・菩薩が衆生済度の方便として、かりに日本の神として身形を現すという思想にもとづいている。元来は仏語であるが、本地垂迹説によって我が国の諸神と結びつけ、特殊な信仰として展開した。特に平安中期以後に権現の称号がさかんになった。代表的なものに、山王権現、熊野権現その他があり、東照権現は最も有名である。明治元年に神仏混淆の禁止で、権現を神号に使用することと、この種の信仰は禁ぜられたが、権現様とは神様の事として一部の民衆の中に依然として信仰しているものがある。

磐座（いわくら）

石座ともかく、磐座は磐境と同じで、神を祀るため磐石で築いた神聖な場所の意味である。社殿建築以前、或はそれと並行して一定の場所、又は随時に清浄な所に神の降臨を仰ぎ、祭を行う時に設けたものである。降臨石、影向石など、呼ばれるものも磐座の一種である。

婦人神職

神社本庁の規程に基づく任用資格をもって神社に奉仕する女性をいう。任用資格は、男子と同じく直階以上の階位と権禰宜以上の役職とである。戦後神社本庁に正式に認められ、現在神職総数の二パーセントを占めている。天照大神の御杖代であった倭姫命の如く、古代では直接神に仕え神意を託宣する役割をもち、殆ど神そのものとされることもあった。後代になって神社信仰の儀礼化が進んで託宣の意義が減少し、巫女的な女性神職の地位が低下してきた。特に明治以降、神職が二十歳以上の男子に限られるようになって員外神職の扱いとなった。現在は男子と同等であるが、服忌・服装・祭式等に未解決の問題もある。

井原・後月支部（六〇社）

県主神社　井原市木之子町三九〇九……二八七
足次神社　〃　西江原町四四……二八七
穴尾八幡神社　〃　青野町一八二四……二八七
井森神社　〃　井原町一六六九……二八八
井森神社　〃　北山町五二二……二八八
糸崎八幡神社　後月郡芳井町西三原一四一九……二八八
茨八幡神社　井原市井原町三三四五……二八九
岩山神社　〃　上出部町一一九八……二八九
岩倉山神社　〃　岩倉町四六三……二八九
皇太子神社　〃　井原町一一五〇……二九〇
大山祇神社　〃　野上町一七五一……二九〇
大山神社　後月郡芳井町天神山五八六……二九〇
王子神社　井原市上稲木町一一三六……二九一
鍵掛岩渡神社　後月郡芳井町山村六二……二九一
片塚山神社　〃　芳井町片塚九二七……二九一
金切神社　井原市神代町五六四……二九二
甲山八幡神社　〃　西江原町五二六の二……二九二
亀山神社　後月郡芳井町與井五〇五……二九二
杵築神社　〃　芳井町簗瀬一四五六……二九三
杵築神社　〃　芳井町山村三〇二三……二九三
杵築神社　〃　芳井町池谷一一八二……二九三
荒神社　〃　芳井町吉井一五二〇……二九四
山神社　後月郡芳井町花滝二八三五……二九四
山神社　〃　芳井町片塚一七七一……二九四
山神社　〃　芳井町池谷五三五……二九四
山神社　〃　芳井町井山一八四七……二九五
三所神社　〃　芳井町梶江四五七……二九五
三所神社　〃　芳井町簗瀬四五七……二九五
菅原神社　井原市西江原町一七七三……二九六
少彦名神社　〃　下稲木町一二二二……二九六
崇道神社　〃　西江原町二七三三……二九六
青龍神社　〃　西方町一一九〇……二九六
青龍神社　後月郡芳井町梶江六七〇……二九七
青龍神社　〃　芳井町簗瀬一五三……二九七
高山千義神社　井原市門田町一四五〇……二九七
武速神社　〃　七日市町五五一の一……二九八
太歳神社　後月郡芳井町梶江一七八……二九八
天神社　〃　芳井町吉井一一四五……二九八
道祖山神社　井原市上稲木町二七五七……二九九
中山天神社　後月郡芳井町東三原三二九五……二九九
長澤神社　井原市大江町四九六二……三〇〇
野宮荒神宮　〃　野上町三八一一……三〇〇
八幡神社　〃　高屋町二一八四……三〇〇
八幡神社　〃　東江原町四六六一……三〇一
八幡神社　〃　野上町九九三……三〇一
八幡神社　〃　稗原町一七三四……三〇一

八幡神社　井原市下出部町一九五……三〇二
八幡神社　〃　笹賀町七八七……三〇二
八幡神社　後月郡芳井町宇戸川二一六九……三〇三
八幡神社　〃　芳井町花滝九九五……三〇三
八幡神社　〃　芳井町井山六九八……三〇三
八幡神社　〃　芳井町種一二〇〇……三〇三
八幡神社　〃　芳井町下鳴一三七八……三〇四

祇園祭

旧暦六月十五日前後に行なわれる夏祭で、天王祭ともいう。祇園祭は清和天皇貞観十一年（八六九）疫病退散のため、神泉苑で営まれた祇園御霊会がはじまりという。疫病、災害の原因を怨霊と考え、それを鎮めるため、外来の厄病神である牛頭天王を祭神として迎え、御霊会を行なった。そして民間で田の神としての信仰を受けていた、素盞嗚命がその荒々しい性格のため、次第に牛頭天王に習合せられ、八坂社の信仰上の勢いを強め、祭りの形も本来賀茂川の水辺で行なう禊祓の神事であったものが、中世以降、華美をこらした山車・鉾・祇園囃子などが加わり、現在の祇園祭の形になった。全国各地に天王社・八坂社が設けられ、祇園祭（天王祭）と称して鉾・山車などの風流物に彩りを加えている。一方、祇園囃子も各地の神楽・獅子舞・念仏踊・盆踊などの中に入れられている。

御稜威（みいつ）

肥前風土記に「威霊とある。」天皇の高く尊い御徳を形容する記で、「イツ」という語に「ミ」という修飾語を付加したものである。肥前風土記に、天皇の命をこうむり、賊徒を伐ちに向ったところ、賊は戦わずして降状した。これは「威霊に非ざるよりは、何にしてかも燃ることを得む」と、健緒組が奏上したと記されている。戦勝のとき天皇をたたえるために用いることが多い。古語の「イツ」とは、厳めしい、尊くはげしく厳しいハタラキの事である。稜威之高鞆（紀）、稜威の道別に道別きて（記・紀・祝詞式）、稜威の雄詰（オタケビ）、稜威雄神（紀）などの例があり、厳稲魂女（イヅウカノメ）、厳香来雷（イツノカグツチ）、厳咒詛（イツノカジリ）、厳野雷（イツノヌツチ）、厳罔象女（イツノミツハノメ）等、厳を用いた例がある。

県主神社（あがたぬし）　旧村社

井原市木之子町三九〇九



主祭神　県守　笠臣　三枚臣　相殿　吉備武彦命　鴨別命　応神天皇

例　祭　十月十七日　**境内地**　五、六五九坪

主要建物　本殿　幣殿　拝殿

摂末社　厳島神社　荒神社　素盞嗚神社　崇道神社　水分神社　稲荷神社

氏子数　四二〇戸

宮　司　藤井正人　**禰宜**　渡辺　悟

責任役員　大山員一　佐藤竹志　野宮秀吉　野宮政夫　東森忠一　山下林助　平坂義弘　佐川国次　笠原久雄

由緒沿革　創建年月日不詳だが、雄略天皇の御代に創まるという。口碑では祭神鴨別命が県守として居をこの地に占め給うたので、その徳を慕い県守大明神と呼んでいたと伝えている。むかし、この地を県の郷と呼んでいる。明治四十四年無格社八幡神社を合祀した。大正九年五月神饌幣帛料供進神社に指定された。

足次神社（あしつぐ）　旧無格社

井原市西江原町四四

主祭神　足名椎神　手名椎神

例　祭　十月十六日　**境内地**　一一八坪

主要建物　本殿　幣殿　拝殿

氏子数　二五〇戸

宮　司　片山孝則

責任役員　守屋　茂　藤井悦郎　藤井春夫

由緒沿革　慶長十二年八月の勧請という。元禄年間当神社御縁記並びに額を吉田家からいただいた。明治四年無格社と定められ、甲山八幡神社の境外摂社となった。

穴尾八幡神社（あなおはちまん）　旧村社

井原市青野町一八二四

主祭神　誉田別尊　息長帯比賣命　比咩神　相殿　天御中主神　高皇産霊神　神皇産霊神　天照大御神

例　祭　十月二十日　**境内地**　三、九一八坪

主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所

摂末社　雨引神社外十社

氏子数　二〇一戸

宮　司　片山孝則

責任役員　三宅忠志　仁城誠一　寺岡　博　朝原　亀山本光一　西田栄太郎　飛田信彦　三宅英太郎　三宅雄一　三宅武雄　山室誠一　三宅千尋　西山貞之　西山光義　笠原　正

由緒沿革　往昔、村民が天御中主神、高皇産霊神、神皇産霊神、天照大御神を勧請し、穴尾山神社と号し、氏神として崇敬した。承応二年八月八幡宮を勧請し、四柱神を相殿と称して穴尾八幡宮とした。明治四年、本殿を穴尾八幡神社、相殿を天津神社と改称した。安永六年八月、本殿を改築し、寛政三年八月拝殿を改築した。昭和三年に神饌幣帛料供進神社に指定された。昭和十年十月社殿を改築増築した。

井森神社（いのもり）　旧村社

井原市井原町一六六九

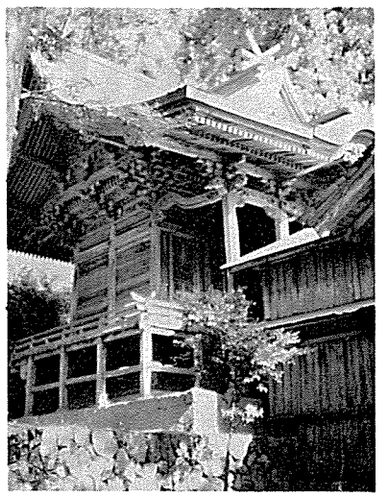


主祭神　吉備武彦命　高龗神　罔象女神
例　祭　十月二十六日　**境内地**　八三六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫
摂末社　荒神社
氏子数　五五〇戸　**崇敬者数**　五〇人
宮　司　三宅　将　**禰　宜**　田辺祥宏
責任役員　高原恒信　渡辺貞治　安倍　巌
由緒沿革　光仁天皇の宝亀元年九月、吉備津彦命の御弟吉備武彦命が吉備の国を鎮め給うたので勧請した。往年、本村星畑の地に樹木雑草が茂り、一夜林中に光を放つものがあり、連夜にわたったので里人は恐れたが、三宅源太夫が光を放つ二玉を得て、高龗神、罔象女神の神慮を畏んで奉祀したという。雨祈の霊験が著しいと伝えている。備中国杉山城主池田備中守長幸公の領で、祈願所である。毎年正月五日に御代参がある。境内末社尾砂子神社は長幸公次男の長信の乳母を祀っている。

井森神社（いのもり）　旧村社

井原市北山町五二二

主祭神　吉備武彦命　高龗神　罔象女神
例　祭　十月二十日　**境内地**　五六・四五坪
主要建物　本殿　拝殿、
摂末社　荒神社
氏子数　三八戸
宮　司　三宅　将
責任役員　渡辺昭而　片山逸男　片山賢而
由緒沿革　口碑によると、青蔭山城内に城主大山某が社殿を造営して奉祀していたが、寛永年間に村民が北山に移して再興したという。明治二十一年本殿を造営。明治三十二年拝殿を新築。



糸崎八幡神社（いとざき）　旧村社

後月郡芳井町西三原一四一九

主祭神　品陀和気天皇　息長帯比賣命
例　祭　十一月十五日　**境内地**　三四四・四六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫
摂末社　厳島神社外八社
氏子数　五〇戸
宮　司　田辺祥宏
責任役員　吉本五十男　山室武雄　田辺　稔　渡辺富男　森原年男　吉岡博志

特殊神事　神祇（渡り拍子）
由緒沿革　寛正二年備後国納所村桜山城主三原豊後守が落ちて来て、三原三郎四郎と称し、西川手村糸崎に本神社を勧請し、西三原村と改め、この神社を氏神とした。明治三十九年十月十八日本殿ならびに社殿を改築した。

茨八幡神社（いばらぎ）　旧村社

井原市井原町三三四五

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月二十六日　**境内地**　五七八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫
摂末社　稲荷神社　荒神社　荒神社　天神社
氏子数　四〇〇戸
宮　司　渡辺孝尚　**禰　宜**　渡辺　悟
責任役員　浅井政夫　出原　実
由緒沿革　創建年代不詳。昭和十九年十月、神饌幣帛料供進神社に指定された。同二十五年幣殿・拝殿を改築した。

岩山神社（いわやま）　旧村社

井原市上出部町一一九八



主祭神　吉備中山地主神　相殿　吉備津彦命　大己貴命
例　祭　十月十八日　**境内地**　二、〇〇二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　恵美須神社　地神社　金刀比羅神社　十二神社　菅原神社
氏子数　四〇〇戸
宮　司　安井俊男
責任役員　広井　薫　山崎高士　原田春雄　岡田　弘　中田重索　井上忠助　土井延一　石井秀太郎　吉岡加市　広井良一　安井敏次　浅野詫美　藤原友志　吉岡財造
宝　物　文永二年棟札をはじめ数枚
由緒沿革　口碑によると、安閑天皇の二年来履屯倉（クグツ）を置かれた際、吉備津神社摂社岩山宮の御分霊を奉祀し、岩山大明神と奉称したのに創る。文永二年、文明十年、宝永元年、元文三年、宝暦十年、天保九年、明治十二年、昭和八年と数度の修改築を経て今日に至っている。明治初年、岩山神社と改称し村社に列した。昭和三年、神饌幣帛料と供進すべき神社に指定された。

岩倉山神社（いわくらやま）　旧村社

井原市岩倉町四六三



主祭神　吉備津彦命　配祀　大国主神　神日本磐余彦尊　猿田彦命
例　祭　十月九日　**境内地**　四六六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社　和霊神社　龍王社
氏子数　二〇〇戸
宮　司　三宅　将
責任役員　豊地鶴太　大塚　清　佐藤保治　丸山尊一　撰　高一　大塚丹二　妹尾敏夫　津組貞男

由緒沿革　本神社の創建は聖武天皇の神亀元年という。吉備津彦命が賊徒平定の時、陣営であった所である。また、山容が吉備中山に相似ているから命を奉祀したのである。社殿の中央に石を堆積した古墳がある。重臣の戦死者を合祀したものという。本殿修築の際は領主毛利家から寄進があった。

皇太子神社　旧村社

井原市井原町一一五〇

主祭神　天忍穂耳神（正哉吾勝勝速日天忍穂耳命）
相殿　天照大御神
例祭　十月二十六日　**境内地**　三一八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社
氏子数　六三〇戸
宮司　安井俊男
責任役員　石井定一　高橋尚之　笠原安夫　渡辺清一　三宅儀一　池田卓雄
由緒沿革　本神社の創建は後醍醐天皇正中二年十月。慶長元年九月二十五日、毛利中納言の代理藤田與三右衛門尉が再建している。昭和十九年十月二十三日神饌幣帛料供進神社に指定された。昭和二十九年本殿修覆。同三十八年十月拝殿修覆。昭和四十五年九月十五日、天照大御神を相殿に配祀した。



大山祇神社　旧村社

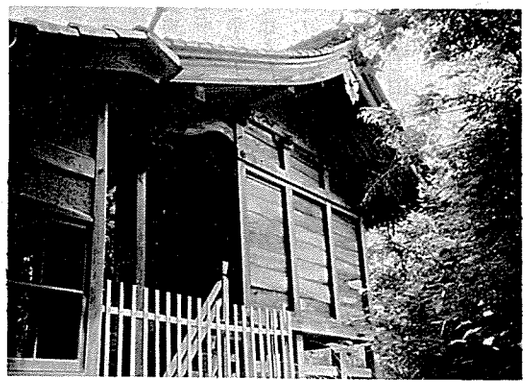
井原市野上町一七五一

主祭神　大山津見(之)命
例祭　十月十九日　**境内地**　五九三・三八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　尾方荒神社
氏子数　九三戸
宮司　妹尾　勉
責任役員　片山　等　福尾義夫　大平伯夫　三宅春常　藤原八十三　青木　茂
由緒沿革　本神社は頂見山寺院の鎮守として、天平八年九月、釈行基の勧請である。寺院が別当であった。建久元年那須小太郎宗晴が社殿を再建。建長三年社殿再建。弘化四年氏子の協力で社殿を再建。明治十一年四月、山王神社を大山祇神社と改めた。大正十二年社殿を改築。昭和三年、神饌幣帛料供進神社に指定。

大山神社　旧村社

後月郡芳井町天神山五八六

主祭神　大山祇命　木之花佐久夜毘賣命　天津日高日子穂穂手見命
例祭　十月二十六日　**境内地**　一二三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　天王神社
氏子数　二六戸
宮司　佐藤一彦
責任役員　西岡武志　藤井敬一　佐藤菊雄　藤井勝義



由緒沿革　本神社の創建は寛文五年であるが、由緒は詳かでない。昭和三十八年十二月、氏子が協議して社殿を改築した。村社に列格したのは明治四年七月。

王子神社　旧無格社

井原市上稲木町一一三六

主祭神　天忍穂別命
例祭　十月十日　**境内地**　一三〇坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　御崎神社　十二神社
氏子数　八五戸
宮司　黒坂吉三郎　**崇敬者数**　二五〇人
責任役員　塩飽英夫　井上住二
由緒沿革　本神社の創建年代は不詳。祭神は天忍穂別命を勧請し、毎年十月十日に例大祭を行う。明治四年王子神社と改称する。氏子崇敬者が多く、氏神様として尊崇が篤い。

鍵掛岩渡神社　旧無格社

後月郡芳井町山村六二

主祭神　梶日女命　岩戸別命
例祭　十一月二十九日(二十三日)
境内地　五三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　二八戸
宮司　渡辺孝尚
責任役員　新田正二　山本千秋
由緒沿革　本神社の創建は永正九年という。もと、丸滝と称する小滝の下に鎮座していた鍵掛神社と、鬼橋と呼ぶ所に奉祀していた岩渡神社を永正九年、高原城主の部将鍵掛城主の朝倉某が祈願のため現地に合祀したものである。明治三十九年四月本殿・拝殿を炎上、同四十年一月社殿を新築した。大正十五年九月、本殿屋根を銅板葺とした。本神社はもと村社杵築神社の摂社であった。

片塚山神社　旧村社

後月郡芳井町片塚九二七

主祭神　大山祇神　外七柱
例祭　十一月二十三日　**境内地**　一二一坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　水分神社　荒神社
氏子数　三〇戸
宮司　藤井正人
責任役員　佐藤　要　三宅辰巳　佐藤　昇　佐藤安男　藤本政夫
由緒沿革　本神社は応保二年伊予国大三島大山祇神社から御分霊を勧請した。明暦年間片塚邑の住人面屋文四郎が発議して本殿を再建。明治四年畦の宮山神社を摂社とした。境内には天然記念物、樹齢六〇〇年の大杉木がある。

金切神社　旧村社

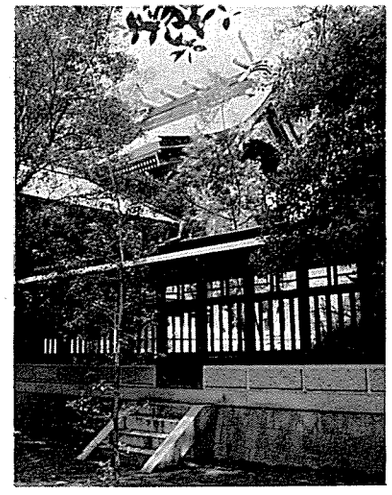
井原市神代町五六四

主祭神　金山彦命外十八柱
例祭　十月二十三日　**境内地**　八四八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社　諸神社
氏子数　一七〇戸
宮司　馬越直樹　禰宜　馬越英樹
責任役員　原田栄一
由緒沿革　口碑に、後冷泉天皇の康平五年頃勧請という。享徳二年高越城主伊勢行長が宝剣を奉納し、武運長久を祈り社殿を造営した。降って、慶長六年小堀新助が大病にかかり当社に祈誓し、全治したため、当社を祈願所と定めた。万治年中、火災のため焼失した。明治初年金切神社と改称した。大正三年村内神社を合祀し村社となった。大正八年神饌幣帛料供進神社に指定された。

甲山八幡神社　旧村社

井原市西江原町五二六の二

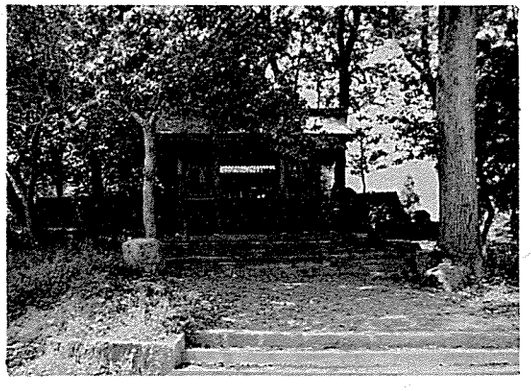
主祭神　応神天皇　息長帯比賣命　比咩神
例祭　十月十五日　**境内地**　四三五一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　奥宮本拝殿
摂末社　熊野神社外十一社
氏子数　一、一〇〇戸
宮司　片山孝則
責任役員　成智計一　藤井和男　武智久寿太　小林良三　森本寿富　多賀八郎　落合保之　猪原保夫　落合敏樹　片山高志　藤井武一郎　飯居旭雄　鴫谷陸奥治



由緒沿革　口碑によると神功皇后征新羅の御帰還の時、祭祀を行われたという。また、吉備津神社七十二字の末社の一つという。建久元年八月、那須小太郎宗晴が先代の神明加護の奉賽として勧請、甲山八幡宮と称した。建長二年那須宗次が再建。寛正元年改修。天正四年社殿改築。慶長十年、寛永五年、貞享三年、元禄三年、宝暦四年にそれぞれ修覆、改築を行った。明治四十年一月、神饌幣帛料供進神社に指定された。昭和十一年十月、社殿新築。昭和二十一年一月、郷社昇格

亀山神社　旧村社

後月郡芳井町與井五〇五



主祭神　月夜見命　天照大神
例祭　十月十九日　**境内地**　一、二九八坪
主要建物　本殿　釣殿　幣殿　拝殿
摂末社　大鳥神社　稲荷神社　荒神社

氏子数　一〇〇戸
宮司　佐藤一彦
責任役員　藤井豊志　藤井明道　藤井英章
由緒沿革　この地に池田某なる者がいて、建久元年の頃、三台妙見宮を勧請したと口碑に伝えている。その後、池田掃部介が延文五年に再建し、ついで天正一年五月池田武平が再建した。明治三年秋、亀山神社と改称した。

杵築神社　旧村社

後月郡芳井町築瀬一四五六

主祭神　八千戈神
例祭　九月一日　**境内地**　一七二坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　一〇〇戸
宮司　三宅　将
責任役員　光田正之　渡辺　隆
由緒沿革　本神社は寛政二年の創建である。当時、梶江、築瀬両村に猪が多く来て、耕作地を喰荒し、住民は困窮し、出雲大社に祈誓し、社殿を建てて崇敬し、その害を免れたという。

杵築神社　旧村社

後月郡芳井町山村三〇一三

主祭神　大已貴命
例祭　十一月二十五日
境内地　九九坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　山神社
氏子数　四五戸
宮司　渡辺孝尚
責任役員　妹尾俊三　高雛正夫
由緒沿革　本神社の創建は慶長年中である。むかしこの部落は山嶽に囲まれ、巨木が繁り猪鹿その他猛禽類が多くて、人畜作物に傷害を加えたので、杵築宮を奉祀して信仰した。当神社はもと字青梅杵築山の頂に勧請していたが、明治初年現在の青梅部落の産土神、山神社の境内に奉遷した。

杵築神社　旧村社

後月郡芳井町池谷一一八二

主祭神　大国主命　素盞嗚尊
例祭　十一月十六日　**境内地**　八二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　五二戸
宮司　佐藤一彦
責任役員　株丹　直　山崎昭二　藤井寿一　花本実男　佐藤　清　熊原靖之



由緒沿革　口碑によると創建は慶安二年である。当時、村中に猪鹿の多く集まり、田畑の農作物に被害が多かったので、出雲国大社に鎮座の大国主命、素盞嗚命の御分霊を勧請し奉ったという。明治十年三月、村社に列した。

荒神社　旧無格社

後月郡芳井町吉井一五二〇

主祭神　須佐之男命
例　祭　十一月二十七日
境内地　三五坪
主要建物　本殿
氏子数　二五〇戸
宮　司　佐藤一彦
責任役員　藤井鹿三　多賀敏夫　三宅　一　今井　豊
由緒沿革　本神社の創建年代は不詳であるが、七か村ごとに大祭を行い、当日夜、産子一戸一人は必ず大当番に参集し、宮上りを行う。この大行列は提灯を手に、産子地区を一巡して本社に至り、祭祀を行う。

山神社　旧村社

後月郡芳井町花滝二八三五

主祭神　大山祇命　木花咲耶姫命　草野姫命　勝速日命
例　祭　十一月二十三日
境内地　二一五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫
摂末社　龍王宮
氏子数　一〇〇戸
宮　司　神崎忠夫　**禰　宜**　丸尾　等　藤丸忠士　滝　寿　名合正嗣
責任役員　本神社の創建は不詳だが、この地は往時、足次郷の一部であった。「よろしく村名を花滝と定め、皇子勝速日神合祀せば村中繁昌ならん」という神託があったので、住民は御神託に従い、神徳を崇敬して氏神とした。元享元年卯月、本殿再建。応永二十四年四月再建。寛文九年四月再建。享保十七年四月再建。天保四年五月再建。
由緒沿革　口碑によると、本神社の創建は応保二年であり、伊予国大三島に鎮座の大山祇大神、木花咲耶姫神を当地に勧請し、村内四十余戸の氏神として崇拝したという。明治三年五月の備中国後月郡池田村明細帳に御除地と見えている。明治十年杵築神社の属社となった。昭和三十六年十一月社殿を改築した。

山神社　旧村社

後月郡芳井町片塚一七七一

主祭神　大山祇神　木花咲耶姫神
例　祭　十一月二十三日
境内地　一一四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　二五戸
宮　司　三宅　将
責任役員　池井唯志　佐藤八郎　佐藤計夫　太田都起夫
由緒沿革　本神社は応保二年に伊予国から勧請した。明治三年五月、備中国後月郡池谷村明細帳に御除地とある。同四年谷の宮村社山神社の摂社となった。



山神社　旧無社

後月郡芳井町池谷五三五

主祭神　大山祇神　木花咲耶姫命
例　祭　十一月十五日　**境内地**　二八六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫
摂末社　荒神社　明剣神社
氏子数　三十五戸
宮　司　佐藤一彦
責任役員　柴田哲士　熊原　久　株丹利守　山崎兼夫



山神社　旧村社

後月郡芳井町井山一八四七

主祭神　大山祇神
例　祭　十一月十五日　**境内地**　三二九坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　二二戸
宮　司　佐藤一彦
責任役員　大山廣恵　曾根時也　三宅仁平　金森民次
由緒沿革　口碑によれば応保二年大和国から勧請したと伝えている。むかしは池谷村仁郷大山氏の鎮守の山神宮であったが、明治元年山神社と改称した。明治十二年村社に列した。慶長七年小堀新助、延宝五年水谷左京亮の検地の時、除地と見えている。鳥居は文政二年二月、夜燈は天保九年十二月の建立である。むかしの祭日は九月二十九日であったが、明治末期に十一月十五日に改めた。

三所神社　旧村社

後月郡芳井町梶江四五七

主祭神　天照皇大神　伊弉諾尊　伊弉冉尊
例　祭　十月九日　**境内地**　二〇六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社　小倉神社　美保神社　御崎神社
氏子数　二七戸
宮　司　安井俊男
責任役員　山本春雄　山本周二　三宅　勇　佐藤　強　山本宣俊　山本敏明　山本　固
由緒沿革　創建年代不詳。古くは三所大明神と称し奉った。建久年間境内の大樹を売却し、その金価で再建した。その後永禄年間三回建立した由を口碑に伝えている。明治初年三所神社と改称した。昭和三十八年五月、本殿を修覆。昭和四十七年五月拝殿を修覆。

三所神社　旧村社

後月郡芳井町築瀬四五七

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十一月二十九日
境内地　二五〇・五坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿　随身門
摂末社　神明神社　山神社
氏子数　二〇戸
宮　司　三宅　将
責任役員　光田七郎　井本義男　光田　登
由緒沿革　往昔、本神社の外、北ヶ市、殿ヶ市にも各一社鎮座していたのを天文二年、本神社に合祀し三所大明神と奉称した。慶長元年、元禄十四年に社殿を再建した。本神社の別当職は十輪院（真言宗）であったが、寛政の頃から神職の司掌する所となった。

菅原神社　旧無格社

井原市西江原町一七七三

主祭神　菅丞相霊
例　祭　十月十六日　**境内地**　四四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社
氏子数　五五戸
宮　司　片山孝則
責任役員　多賀八郎　増成圭一　山室　登
由緒沿革　天暦二年二月勧請し天満宮と称し奉祀した。後、元禄十年八月、森氏が作州津山から移封せられた時、神殿を山後に遷して改築し、守護神として崇めた。元禄十一年から十三年まで年々社米二斗、十四年から宝永二年までは年々五斗、宝永元年、同二年には祭礼費として米二石を奉納している。なお、戸帳、金燈籠寄附もあった。正徳四年三月、社殿を旧地に遷した。寛政六年改築。明治四年甲山八幡神社の摂社となった。昭和十八年、幣殿、拝殿を新築した。

少彦名神社　旧無格社

井原市下稲木町一二二二

主祭神　少彦名命
例　祭　旧八月十七日　**境内地**　一一三坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿
氏子数　一五〇戸　**崇敬者数**　二〇〇人
宮　司　黒坂吉三郎
責任役員　妹尾義正　和田長助　谷　敏雄
由緒沿革　古くから本村天神山にお祀り申し上げ、俗に天神社と呼び、夏の終り頃にハンテン祭を行う風習がある。氏子崇敬神社として信仰が篤い。

崇道神社　旧無格社

井原市西江原町二七三三

主祭神　崇道天皇　日本武尊
例　祭　十月十五日　**境内地**　一五八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　武速神社　荒神社
氏子数　一二〇戸
宮　司　片山孝則
責任役員　片山静太　大山亮平　定光政志　片山晋平
片山富郎　大山雅司　片山　弘　片山文彦　片山　正
片山喜由
由緒沿革　口碑によると、景行天皇の二十五年、小碓命が熊襲を征討し給うた途次、江原で軍馬を休息なさった。その所を休森の宮と称えて小祠を建立した。延暦二十四年、休森の宮に崇道大明神を奉祀。嘉祥三年大和国琴弾原から日本武尊の御分霊を合祀した。森氏が元禄十一年から宝永二年まで社米五斗を奉納した。明治四年甲山八幡神社の摂社となった。昭和十九年十月、大修理。

青龍神社　旧村社

井原市西方町一一九〇



主祭神　表津少童神　中津少童神　底津少童神
例　祭　十月十日　**境内地**　七七六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿

摂末社　木野山神社　御崎神社　祇園神社　上諏訪神社　下諏訪神社　荒神社外五社
氏子数　一〇〇戸
宮　司　藤井正人
責任役員　佐藤久夫　鳥越芳太郎　北田良三　北田昇
藤森　稔　生駒英一　藤井哲郎
由緒沿革　神亀二年の勧請と伝える。当時、打続く旱害に住民が天神地祇を祈願していたところ、神が現われ「吾を祭るならば幸せを招来すべし」とのたまわれ、池に入り少童と変ぜられた。それで池の西の山に社殿を営み奉斎したという。永正年間、天正年間、寛文年間、享保年間改築。明治初年青龍神社と改称した。明治十年、大正十五年改築。同年、神饌幣帛料供進神社に指定された。昭和五年十月改築。

青龍神社　旧村社

後月郡芳井町梶江六七〇

主祭神　孝霊天皇　吉備津彦命
例　祭　十月二十六日　**境内地**　九〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社　山神社
氏子数　二〇戸
宮　司　三宅　将
責任役員　三宅博雄　久津間和夫
由緒沿革　創建は建久年間という。往昔飯名大籔に鎮座していたが、天保三年現地に奉遷した。当時旱害により五穀は皆枯れた。里人は戒慎沐浴して雨を祈ったところ、たちまちにして霊験があって村民は蘇ったという。その霊徳が次第に隣村に及び、各所に御分霊を奉祀している。明治初年、青龍神社と改称した。

青龍神社　旧村社

後月郡芳井町築瀬一五三

主祭神　大倭根子日子賦斗邇命　大吉備津彦命　若吉備津彦命
例　祭　十一月十六日　**境内地**　三二七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社　稲荷神社　丸須典神社
氏子数　三〇戸
宮　司　三宅　将
責任役員　大戸　安　三宅治郎　三宅弘士
由緒沿革　本神社の創建は建久年間という。吉備津彦命が賊徒平定の時、この地に暫く駐し給うて、小田川に簗を設けて漁事を遊ばされたので、ここを簗瀬と呼ぶようになった。大永五年卯月、元和四年九月、正徳四年十二月にそれぞれ再建。昔は聖宮と奉称し、後、聖徳大明神と称え、また青龍大明神と改称した。明治初年に青龍神社と称し奉った。

高山千義神社　旧村社

井原市門田町一四五〇



主祭神　吉備津彦命　相殿十柱神
例　祭　十月十日
境内地　一、〇八四・三八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿

摂末社　巌山神社　荒神社
氏子数　二二〇戸
宮　司　藤井正人
責任役員　吉仲加米一　藤井千尋　鳥越耐一　佐藤英太郎
由緒沿革　神亀二年、吉備津比古命が賊徒平定のため、高山に兵一千騎を屯し給うた古蹟である。高徳を仰ぎ高山千義神社として奉斎した。元弘元年、楠正成が武運長久を祈った時奉納した刀が残っている。寛政九年十二月改築し、降って昭和十一年五月、同二十一年九月改築した。大正十四年六月、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

武速（たけはや）神社　旧村社

井原市七日市町五五一の一

主祭神　素盞嗚尊　稲田姫　八王子
例　祭　十一月六日　**境内地**　九七九・八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫
摂末社　茅輪神社　稲荷神社　菅原神社　恵美須神社　水神社　地神社　巌島神社　木野山神社　荒神社　荒神社　荒神社
氏子数　三五〇戸　**崇敬者数**　七〇〇人
宮　司　安井俊男
責任役員　斉藤芳治　三宅康次　吉岡益夫　斉藤研三　安井泰夫　安井為治　佐能源治
宝　物　縁起一巻　**特殊神事**　火焼火処神事



由緒沿革　本神社の創建は一条天皇の長保三年、疫病流行の際社殿を興して祇園牛頭天王宮と奉称した。近郷除疫の総鎮守である。領主一橋家の祈願所であって、永徳二年社殿を現在地に遷座した。天正二年、元禄九年、嘉永二年改築、修築し領主一橋家の合力をもって成った。明治年間から祇園社と奉称したが、明治三年武速神社と改称した。明治四十年五月神饌幣帛料供進神社に指定された。明治四年村社列格。

太歳（だざい）神社　旧村社

後月郡芳井町梶江一七八

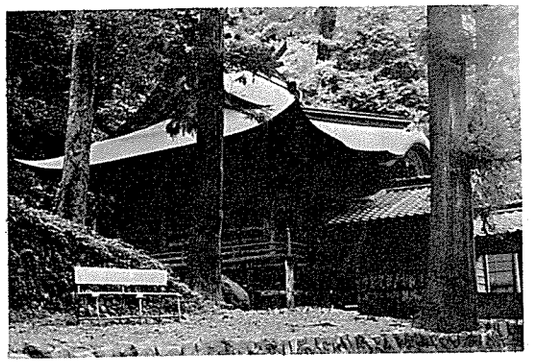
主祭神　大年神　御年神　若年神
例　祭　十月二十七日　**境内地**　一三四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　二五戸
宮　司　三宅　将
責任役員　渡辺石夫　山本実夫　渡辺正二　渡辺健一　渡辺　渡　渡辺好男
由緒沿革　口碑によると文明年間社殿を再建したと伝えている。慶長、元禄年間に改築したという。

天（てん）神社　旧村社

後月郡芳井町吉井一一四五

主祭神　菅原神
例　祭　十月二十五日　**境内地**　三、六九五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所

摂末社　黒丸神社　聖霊神社　八幡神社
氏子数　四二〇戸
宮　司　佐藤一彦
責任役員　花川　弘　妹尾郁生　三宅和夫　多賀敏夫
由緒沿革　菅丞相が自ら刻まれた御像を延喜二年、持ち帰り社殿を造営し御鎮座になったという。御像は後近臣が来て御自画の御影と換えた。文明の頃、雪舟が参詣し御影を大日山に預けた。現本殿は延宝三年、拝殿は文政四年、幣殿は大正四年の造営である。明治四年七月、村社に列格し神饌幣帛料供進神社に指定された。小田川清流に臨み風光明眉で参拝者が多い。



道祖（どうそ）山神社　旧村社

井原市上稲木町二七五七

主祭神　猿田彦命　苅田彦命　苅田姫命
例　祭　十月九・十日
境内地　三一一坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　若宮神社
氏子数　二八〇戸
宮　司　黒坂吉三郎
責任役員　妹尾義正　秀平　寿　塩飽準一　塩飽伍造
由緒沿革　本神社の創建は宝暦年中である。猿田彦命を勧請し毎年九月十日、十一日に行っていた。明治二十七年十月本殿を修理、昭和四十九年に社殿の大修理を行った。

中山（なかやま）天神社　旧村社

後月郡芳井町東三原三二九五

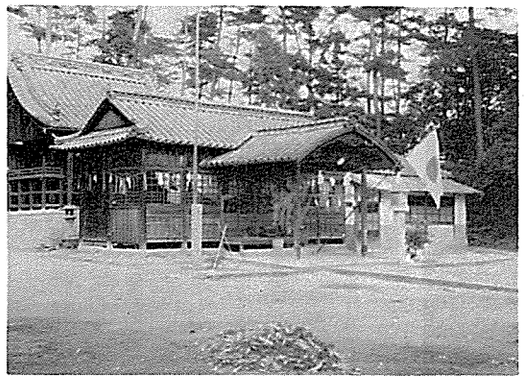
主祭神　少彦名命
例　祭　十一月十六日　**境内地**　七二四・八四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　伊勢神社外九社
氏子数　一一八戸
宮　司　田辺祥宏
責任役員　岡崎義夫　崎山福一　加上十一
特殊神事　神祇（渡り拍子）



由緒沿革　応永二年藤原秀郷の後裔田中市之進が中山に少彦名命を勧請し、天神と奉称した。寛正年間備後の国桜山城主が東川手村に落ちて来て、三原三郎四郎家房と称し、村を東三原村と改め、神社名を中山天神社として氏神とした。

長澤神社　旧村社

井原市大江町四九六二



主祭神　猿田彦命　豊玉彦命　吉備津彦命　菅原道真
例　祭　十月十一日　十二日
境内地　八五一坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿　神楽殿　神輿庫　社務所
摂末社　若宮神社　艮神社
氏子数　三五〇戸
宮　司　黒坂吉三郎　**禰宜**　黒坂英人
崇敬者数　一、二〇〇人
責任役員　橋本　真　大塚宰平　猪原　博
由緒沿革　延久三年、大江郷宮峠に遷座、氏神として郷民の崇敬が厚かった。もとは備後福山藩水野家に属していたが元禄十一年から幕領となった。寛文十二年に大改築を行っている。文政十年十一月、一橋朱印領知となった。明治四年神社名を改称した。同四十二年十一月祭神を合祀した。大正五年拝殿改築。その後氏子の協力により境内小庭園、池を造築した。神域は清閑である。

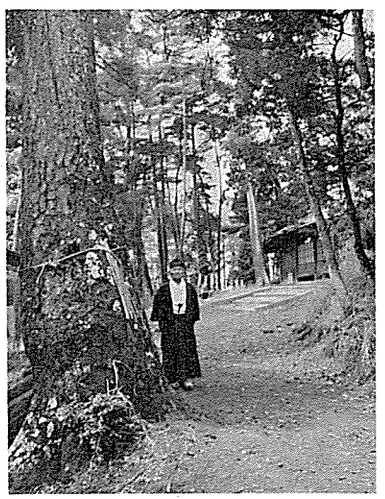
野宮荒神宮　旧無格社

井原市野上町三八一一

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月　**境内地**　三八八坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　一一戸
宮　司　稲葉堯太
責任役員　稲葉　潔　稲葉雄三郎　岡本誠一
由緒沿革　越智玉澄の二十六世河野道有の第三子通種の子通任が伊予を去り、この地に到り、元弘三年十月、荒神社を勧請したという。

八幡神社　旧村社

井原市高屋町二一八四



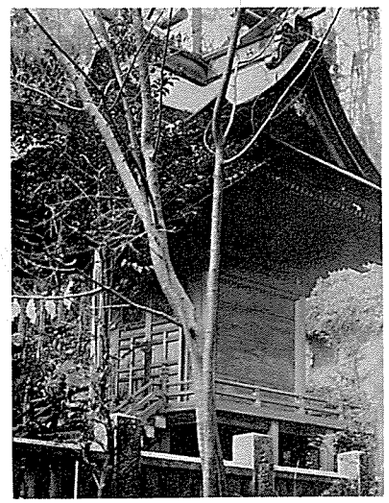
主祭神　宗形神　息長帯比賣命　品陀和気命
例　祭　十月十六日　**境内地**　六五〇坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿　社務所　神輿庫
摂末社　一宮神社　天神社　稲荷神社　小山田神社　十二神社　大山祇神社　荒神社　山神社　伊勢山神社　神明神社　丹生神社　南宮神社　天水分神社　山井田神社　石槌神社　和霊神社
氏子数　一、三〇〇戸
宮　司　藤井秀徳



責任役員　川崎武夫　高橋　斉　猪原久夫
由緒沿革　本神社の創建は弘長二年三月という。再建は明徳二年十一月、文安五年八月、慶長十二年二月、正徳六年四月、明治十五年十一月、大正七年十月十五日等である。同年同月、字御室二、一八二番地から、現在地の二、一八四番地に遷座した。正徳六年四月、火災のため一切の書類を焼失した。棟札その他、一・二の記録と古老の伝唱及び高屋八幡神社誌によって推察するのみである。

八幡神社　旧村社

井原市東江原町四六六一



主祭神　品陀和気命
例　祭　九月十七日　**境内地**　一四六・八坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　荒神社
氏子数　九三戸
宮　司　妹尾　勉
責任役員　片山　等　福尾義夫　青木　茂　三宅春常　藤原八十三　大平伯夫
由緒沿革　建久元年八月、那須小太郎宗晴が建立した。建長二年那須小平太宗次が社殿を再建。天正四年、寛政元年に社殿を再建。弘化四年八月、氏子の協力で社殿再建。

八幡神社　旧無格社

井原市野上町九九三

って慶長五年小堀新助が社殿を復興した。元禄十一年森和泉守長が毎年米一石宛を奉納した。明治十二年三月、東江原村字山中に鎮祭した。明治十六年五月、本殿・直会殿・随身門・神楽殿を新築した。

八幡神社　旧村社

井原市稗原町一七三四

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后　相殿　素

八幡神社　旧村社

井原市笹賀町七八七



由緒沿革　口碑によると、貞観二年八月、川西五ヵ村が協力し勧請し宮原八幡宮と奉称した。往古は今の鎮座地よりも西方にあったのを、正徳元年、現地に奉遷したという。歴代の国司、領主の崇敬が篤かった。明治元年八幡神社と改称した。大正四年十月、神饌幣帛料供進神社に指定された。昭和三年十月、神饌幣帛料供進神社に指定された。

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例祭　十月十八日　**境内地**　一、〇〇〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　一八〇戸
宮司　片山孝則

盞嗚尊外十七柱
例祭　十月二十日　**境内地**　二三四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　築井荒神社
氏子数　五五戸
宮司　三宅　将
責任役員　田中力夫　田中　肇　畝川広之　畝川勝志　徳永賢徳　藤井一夫
由緒沿革　はじめ稗原村三石山上に鎮座していたのを、元禄五年十一月現在の地に移して本殿を建立し、宝暦十三年拝殿を造営している。降って明治二十二年四月拝殿を同二十五年本殿をそれぞれ改築した。大正四年十二月、荒神社、山口神社、杵築神社、十二神社・石鉄神社を合祀した。昭和四年十月十九日神饌幣帛料供進神社に指定された。

八幡神社　旧村社

井原市下出部町一九五

主祭神　応神天皇　神功皇后　三女神
例祭　十月十八日　**境内地**　六四一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　天神社　稲荷神社　荒神社　荒神社
氏子数　九五戸
宮司　片山孝則
責任役員　畑中貞男　田中隆平　山足研治　川上正志　森谷親志　山村卓之　細羽繁一　田中秋男

八幡神社　旧村社

後月郡芳井町宇戸川二一六九

責任役員　鳥越朋市　大橋三郎　石丸　実　久安義雄　石崎壮一　赤木宗治
由緒沿革　本神社の勧請年月日及び沿革は不詳。往古から国司・領主の尊信が厚かった。幕末に一橋領となり、一橋侯は社殿を修築し、神田の高引等を行なった。南斗山金敷寺別当職として神事に関与し、八幡宮と称した。明治元年三月、八幡神社と改称した。昭和三年十月、神饌幣帛料供進神社に指定された。

主祭神　譽田別尊　神功皇后
例祭　十一月二十三日
境内地　一三八坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　神庫
氏子数　一〇〇戸
宮司　安井俊男
責任役員　多賀司郎　西田雄一　森本啓策　多賀司郎　西田繁雄　渡辺信一
由緒沿革　本神社は往古、宇戸川村と稗原村との村境に鎮座し、両村合同の氏神として尊崇した。寛文八年十一月、分離し現在地に鎮祭した。明治四年七月四日村社に列した。昭和三十六年拝殿を修覆。同五十一年七月、本殿を修覆。

八幡神社　旧村社

後月郡芳井町花滝九九五

主祭神　譽田別尊　息長帯比賣命
例祭　十一月二十三日
境内地　四三八・八五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　二〇戸
宮司　妹尾　勉
責任役員　山本　潜　三宅　栄　小山美太
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳であるが、西江原村甲山八幡宮からしたものと伝えている。元和七年氏子が協力して社殿を再建したという。

八幡神社　旧村社

後月郡芳井町井山六九八

主祭神　仲哀天皇　神功皇后
例祭　十一月二十三日
境内地　五五九・六二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿

八幡神社　旧村社

後月郡芳井町宇戸川二一六九

摂末社　国司八幡神社他七社
氏子数　五〇戸
宮司　三宅　将
責任役員　朝原辰男　藤井只文　森岡　胖　佐藤新治　宮本　一
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳。口碑によると、昔、川相村宇内塚に鎮座していたのを佐藤某がひそかにこれを奉遷しようとしたが、村民が追って来るので御神体を井山折出の橋の下に秘した。これから付近の堰水を灌漑する田を応神田と呼び、ここだけは蛭が生じないと伝えられている。取った米を神饌とするのが例である。元禄年中再建。明治二十五年、本殿を改築。昭和四年二月、神饌幣帛料供進神社に指定された。

八幡神社　旧村社

後月郡芳井町種一二〇〇

主祭神　誉田別尊　息長帯比賣命
例祭　十一月二十三日
境内地　一、〇九八坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　天満神社　岩別神社
氏子数　一三〇戸
宮司　妹尾　勉
責任役員　森岡　剛　守安時四郎　小谷吾一
由緒沿革　建武年間に刈屋左右衛門が勧請し、社殿を建立したものと伝えている。昭和十五年十一月、神饌

幣帛料供進神社に指定された。

八幡神社　旧村社

後月郡芳井町下鴫一三七八

主祭神　品陀和気命（配祀）足仲彦命　息長帯比賣命（合祀）高靇神
例祭　十一月二十五日



境内地　五、四四二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　舞殿　神輿庫　社務所
氏子数　一四八戸
宮司　三宅安男
禰宜　三宅英男　権禰宜　長安純子
責任役員　神田正夫　金沢武郎　細川衆三　森中安夫
由緒沿革　後一条天皇の寛仁三年に勧請、小田八幡宮と奉称した。長暦三年八月再建、遷宮の時奇鳥一番が新宮の屋根に止った。この鳥が鴨に似ていたので鴨八幡宮と改称した。嘉暦四年十二月改築、ついで康正二年改築した。明治四十四年二月、摂社意加美神社を合祀。昭和三年十一月神饌幣帛料供進神社に指定された。

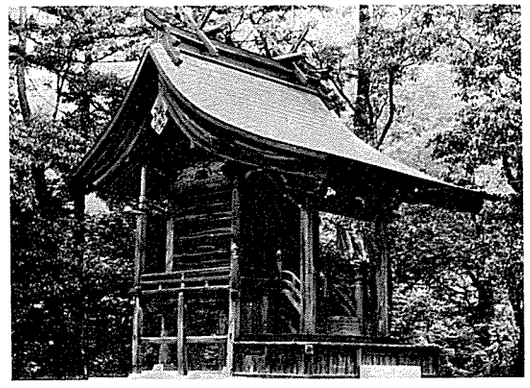
八幡神社　旧村社

後月郡芳井町上鴫一〇八五

主祭神　神功皇后　応神天皇
例祭　十一月二十五日
境内地　一、八七九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　舞殿
氏子数　一一六戸
宮司　渡辺孝尚
責任役員　三宅俊明　三宅明芳　西本一二
由緒沿革　むかし、永正三年、関東管領上杉顕定の次男直彰が備中高原城主となるに及んで、守護神として八幡宮を勧請したものである。直彰の子直重にいたって、高原城が没落して村民が相計って氏神として奉斎した。明治四年七月村社に列格した。

八幡神社　旧村社

後月郡芳井町川相一五〇二



主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后　物部大臣武内宿禰
例祭　十月十七日
境内地　七八四坪

主要建物　本殿　拝殿
摂末社　杵築神社　水分神社
氏子数　一四〇戸
宮司　佐藤一彦
責任役員　小田敏夫　河合信一　河合資郎
由緒沿革　口碑によると、中山城主河合勘解由左衛門が城内に勧請したという。天正六年八月、村民が協議し現地に社殿を造営して移転した。くだって延宝六年八月、社殿を再建した。天正五年作の宮鍵が現存している。棟札には勧請享保五年、再興貞享二年とある。鳥居は寛政八年のもの。文政の頃改築した。むかしの祭日は八月十五日であった。明治四年村社に列した。

八幡神社　旧村社

後月郡芳井町佐屋五七六

主祭神　応神天皇
例祭　十一月十五日　**境内地**　四九〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫
摂末社　荒神社　愛宕神社　山口神社　厳島神社　大蔵神社　大歳神社　地神社
氏子数　二九戸
宮司　佐藤一彦
責任役員　大山　久　花本一三　槇坂嘉一　池田美成　大元義雄　大山重夫
由緒沿革　勧請年月は不詳であるが、天文二年八月再建の記録がある。寛文二年、正徳六年、明和五年、文政十年と数度再建上棟している。文久三年九月屋根替えを行った。神社維持金並びに寄付金応募者に当番株を授与して永遠に勤めしめる制度を設け、苗といっていたが、近年改正した。昭和十年村社に列格、同年、神饌幣帛料供進神社に指定された。



日長山八幡神社　旧村社

井原市野上町四五〇四

主祭神　品陀和気命　息長帯比賣命　宗形三柱神
例祭　十一月二十九日
境内地　六八二・三三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所
摂末社　荒神社　外二社
氏子数　一二〇戸
宮司　三宅　将　**禰宜**　稲葉堯太
責任役員　三村　熙　藤本完一　武田敏郎　宮本寿一　田中高之　稲本知之　稲葉　潔　山本久夫
由緒沿革　本神社は永承五年九月二十八日、三島四郎親清が勧請した。父頼義が鎮守府将軍に任ぜられて、奥州の役を平定し、武運長久を祈願するために、この地を卜して勧請したという。爾来筒井乗明が尊信したが、宇治橋の戦いで戦死したので、住民が祭祀した。建武年間に古管城主の那須家が再建した。文禄年間に法雲城主の三村宗親が再建し、毛利元清が再興した。小堀新助検地の時に除地となった。昭和三年に神饌幣帛料供進神社に指定された。

日吉神社　旧無格社

井原市大江町六一

主祭神　大山咋命
例祭　十月七日　**境内地**　一五坪
主要建物　本殿
摂末社　荒神社
氏子数　二二戸　**崇敬者数**　六五人
宮司　黒坂吉三郎
責任役員　三島　茂　三島貫一　瀬藤　清
由緒沿革　天正年間の七堂伽藍の遺跡寺屋敷がある。山王神社地御検地水帳無年貢地、古文書によると元禄十三年五月とある。往古から山王明神と呼び、氏神とし

て崇敬する宮である。明治四年の神社御改めにより日吉神社と奉称する。

主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　春日神社　厳島神社　恵美須神社
氏子数　七〇〇戸
責任役員　竹内明治　川相恵作　細川時夫　山岡盛男
妹尾梅夫　広井基志
由緒沿革　本神社は式内の旧社であって備中十八神の一つである。延喜式神名帳に「後月郡一座　足次山神社」とある。寛文六年十一月再建。明治五年十一月郷社に列せられた。明治四十年一月、神饌幣帛料供進神社に指定された。昭和二十一年一月十日、神祇院より県社昇格内規に徴して、由緒上県社に該当する旨と認められた。

明知（めうち）神社　旧無格社

井原市上稲木町一九一九

主祭神　瓊々杵命
例祭　十月十日　**境内地**　四一二坪
主要建物　本殿　拝殿　**崇敬者数**　一五〇人
氏子数　四五戸
宮司　黒坂吉三郎
責任役員　井上博志　山本悦士　佃　周一
由緒沿革　宝暦十一年十月、妙字大明神と称して瓊々杵命を勧請した。毎年、十月十日を祭礼としていた。明治四年、社号を明知神社とした。現在にいたるまで、氏子の崇敬の念が厚く信仰心が絶大である。

足次山（あすはやま）神社　旧郷社

井原市井原町二五

主祭神　阿須波神
例祭　十月二十六日　**境内地**　一、三二八坪

寿詞（よごと）

天皇治世の長久繁栄をことほぎ祝う詞である。賀詞とも書く。「日本書紀」孝徳・天智天皇の条に、正月によごとを奉らしめたとある。ほかに大嘗祭に奏上する中臣寿詞、出雲国造が御代始に参賀して奏する神賀詞などがある。奈良朝ころは呪言がよごと（寿詞）とのりと（宣処言（のりとごと）の略）の二つになり、平安朝に入って、もっぱら祝詞と云う言葉のうちに、よごとも含めて呼ぶようになった。「のりと」は上位の尊い神が下々に宣下（のりくだ）す神聖な言葉で、よごとは下位のものから、上位の神々に向って服従を誓う誓詞であった。よは「穀」「齢」があてられるごとく、農産を祝ぐ詞や長寿を祈る詞であった。それが次第に吉事、吉言などと書くようになって、縁起のよい詞という意味に近い内容を持って来た。現代では天皇即位式の際に、内閣総理大臣が寿詞を奏上することになっている。

吉備支部（七一社）

青木神社　総社市井尻野一七……三〇九
秋葉神社　〃　井尻野一三一七……三〇九
葦守八幡宮　岡山市下足守四六八……三〇九
阿宗神社　総社市奥坂九六……三〇九
穴門山神社　吉備郡真備町大字妹八九五……三一〇
伊弉諾神社　総社市真壁一一三六……三一〇
一木神社　〃　溝口七六……三一〇
嚴島神社　〃　中原四四二……三一〇
嚴島神社　〃　真壁九三五……三一一
伊與部神社　〃　下原六九〇……三一一
石畳神社　〃　秦三九九五……三一一
岩山神社　岡山市杉谷一一六六……三一一
艮御崎神社　総社市影字坂折一八一五……三一一
艮御崎神社　吉備郡真備町川辺二〇八……三一二
大井神社　岡山市大井五六……三一二
生石神社　〃　門前一……三一二
王子神社　総社市久代四五七……三一二
御崎神社　〃　久米一二一三……三一三
御崎神社　岡山市立田九一一……三一三
御崎神社　総社市小寺三五〇……三一三
加茂神社　岡山市加茂字加茂宮一二二六……三一三
加茂神社　総社市山田一一〇〇……三一三
懸幡神社　岡山市東山ノ内一三〇三……三一四
上加茂神社　岡山市津寺一九……三一四
上二万神社　吉備郡真備町大字上二万三三六二……三一四
吉備津神社　岡山市吉備津九三一……三一五
國司神社　吉備郡真備町辻田一〇八五……三一五
國司神社　総社市新本一九七五……三一五
國司神社　〃　新本杉山五一四一……三一六
國司神社　〃　日羽三七九……三一六
熊野神社　吉備郡真備町大字尾崎六八二……三一六
荒神社　総社市日羽八九……三一六
五社神社　〃　井尻野一九七六……三一七
下二万神社　吉備郡真備町下二万八八三……三一七
陶神社　倉敷市玉島陶三五三〇……三一七
総社　総社市総社七三一……三一七
跋神社　岡山市上高田三六二八……三一七
天神社　総社市秦二二九七……三一八
天神社　岡山市山ノ上三二二二……三一八
天神社　〃　西山ノ内六八〇……三一八
天満神社　総社市井尻野一七〇五……三一八
西園神社　吉備郡真備町大字市場四四六八……三一九
能勢神社　総社市下倉五二五八……三一九
畑神社　倉敷市玉島陶三五……三一九
八幡神社　総社市美袋四六七……三一九
八幡神社　〃　日羽二三一……三二〇

八幡神社　〃　下倉七八七……三二〇
八幡神社　倉敷市玉島陶七〇三……三二〇
八幡神社　岡山市和井元一〇八……三二一
八幡神社　総社市窪木五九一ノ二……三二一
八幡神社　岡山市惣爪八三……三二一
八幡神社　総社市西山二二五八……三二一
八幡神社　〃　新本杉山三〇五二……三二一
八幡神社　〃　新本七六〇四……三二二
八幡神社　〃　久代五九一七……三二二
八幡神社　〃　久代二五二三……三二二
八幡神社　〃　秦一六一六……三二二
八田神社　吉備郡真備町箭田三八八七……三二三
東薗神社　吉備郡真備町岡田一六九九……三二三
姫社神社　総社市福谷一四二三……三二三
日羽八幡神社　〃　日羽六六一……三二三
古郡神社　〃　総社二四〇五……三二四
別所神社　〃　久代三〇九一……三二四
星神社　岡山市真星一六一五……三二四
麻佐岐神社　総社市秦四〇三五……三二五
丸山神社　〃　門田五九三……三二五
神神社　〃　八代九一八……三二五
百射山神社　〃　三輪一三四七……三二五
矢喰天神社　岡山市高塚一〇八……三二五
横田神社　総社市久代三六一二……三二六
井神社　〃　井尻野九二八……三二六

神札

護符の一種である。無病息災・家内安全・天下泰平などを祈って、神棚など一定の場所にまつり、また身体などにつけるが、この場合はお札を守袋に入れる。神社から出るお札には木・紙・金属製などがあり、社名や神名、祈祷文を書き込んでいる。目的によって多くの種類があり、時代によっても異なっている。初詣の時に、新しいお札をいただく人が多い。

海神（わだつみのかみ）

航海の安全を守護する神のこと。航海の要所に祀られている。有名なのは表筒男神・中筒男神・底筒男神の三神を祀った大阪住吉大社とその系統の神社であり、宗像神社の系統がそれについで、各地に勧請されている。金刀比羅宮・諏訪神社・熊野三社も航海の神として信仰されている。綿津見三神を祀る、兵庫県の海神社も宗敬者が多い。

青木神社（あおき）　旧村社

総社市井尻野二七

主祭神　句句廼馳命
例祭　十月十七日　**境内地**　六〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　猿田彦神社　金比羅神社
氏子数　五〇戸
宮司　角田　榮
責任役員　神野長五郎
由緒沿革　創建年月日は天長年間である。上野伊豆守の崇敬神社で、元文元年六月二十五日社領として田畑四段を寄進した。秦原郷十三社のうち最古の神で、天正の頃荒川平城主川西三郎左衛門少秀は毎年青木祭に幣帛を奉献した。慶長八年十月社僧昌道が社殿を再建し、寛文年間同じく昌仙が造営を行った。明治維新まで旧浅尾藩主蒔田家が年々幣帛を奉献した。

秋葉神社（あきば）　旧無格社

総社市井尻野二三一七

主祭神　遠州秋葉神社分霊
例祭　旧三月十八日　**境内地**　一七一・三〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所
摂末社　金刀比羅神社　**崇敬者数**　九〇〇人
宮司　角田　栄
責任役員　入谷磯二
由緒沿革　本神社は宝暦十一年七月願主蒔田伊勢守家来中島恵左衛門が、北高峯の当所へ遠州秋葉大権現の勧請方願出右御免被仰付本建立成就。明治元年神仏分離により秋葉神社と改称。明治十八年社殿炎上、明治二十一年再建。大正十三年改築。



葦守八幡宮（あしもり）　旧郷社

岡山市下足守四六八

主祭神　応神天皇　神功皇后　玉依媛命　大名持命　吉備武彦命　吉備兄媛命　御友別命
例祭　五月十五日　十月十日
境内地　一、三三八坪
主要建物　本殿　社殿七棟　神庫　鐘楼　社務所
摂末社　四社
氏子数　七〇〇戸　**崇敬者数**　二、八〇〇人
宮司　河田陽一
責任役員　林　宏平　林　見一　中田克己　石田兼吉　伊賀悠紀夫　武田昭康　林　哲夫　土居孝市　稲田謙太郎
宝物　豊臣秀頼奉納神鏡（県指定文化財）　神廟記　馬場先島居（重文）
由緒沿革　社伝によると本神社は、所謂葉田葦森の宮で応神天皇行宮の旧蹟である。葉田葦森は応神天皇の皇妃吉備兄媛の郷里であるため、天皇即位二十三年秋九月に臨幸せられた。この地に行宮を造り留まること数ヶ月であった。兄媛の兄御友別命がその子弟を膳夫とし厚く天皇を饗した。御友別命の御子中津彦命は、天皇崩御の後、その徳を追慕して天皇の御神霊を行宮に斎き祀り葉田葦森の宮と称した。

阿宗神社（あそ）　旧村社

総社市奥坂九六

主祭神　応神天皇　神功皇后　玉依姫命　吉備武彦命
例祭　十月二十日　**境内地**　三二一・九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　社務所

摂末社　荒神社　地神社　天満宮
氏子数　四二〇戸
宮　司　代務者　石井清根
責任役員　小倉輝男
由緒沿革　創建年月不詳。社伝によると旧号を宮原社と称した。三代実録によると、貞観六年二月従五位下、同十月従五位上の神階を授けられた。旧藩主木下家から神輿二台、社領六畝八歩、社務所、御供所等の寄進があった。後に宮原社は奥坂の八幡社に合祀せられた大正十年九月八幡神社の境内社宮原神社を合祀して、新に阿宗神社と称するに至った。

穴門山神社　旧郷社

吉備郡真備町大字妹八九五

主祭神　穴門武姫命　大己貴命　倉稲魂命
例　祭　十月二十四日
境内地　五三九・一二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　釣殿　社務所
摂末社　荒神社　水神社　三島神社　八千戈神社
氏子数　二五〇戸　**崇敬者数**　二、〇〇〇人
宮　司　高見照雄
責任役員　門野文吉　太田一男　阿部重雄　井本助三郎　日名良一
宝　物　和銅神鏡一面
由緒沿革　本神社の創建年月は不詳であるが、社伝によると、延喜式所載下道郡五社の一で、諏訪城主が厚く崇敬した社である。永承年間兵火のため、社殿が悉く焼失した。享保五年吉田家の命により、岡田藩主伊藤播磨守長救が社殿を再建し、明治二十二年現在の社殿を新築した。農産守護の神として近郷から厚く崇敬せられている。

伊弉諾神社　旧村社

総社市真壁一一三六

主祭神　伊弉諾尊
例　祭　十月二十六日
境内地　二四〇・三五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　荒神社
氏子数　六〇戸
宮　司　角田　栄
責任役員　荒木輝夫
由緒沿革　創建は延喜年間より以前らしい。明治維新まで王子権現宮と称し、直壁郷高木村の産土神であった。寛文十二年旧備前藩主池田光政が、領内の諸社を調査し、本神社に社領として、上田二段四畝を寄進し、国家安全を祈願した。維新当時は宮権現大明神と称した。

一木神社　旧無格社

総社市溝口七六

主祭神　横田氏神
例　祭　旧六月六日
境内地　一九四・六〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　五〇人　**崇敬者数**　一、〇〇〇人
宮　司　角田　栄
責任役員　七村由夫
由緒沿革　創建は淳和天皇の天長元年八月らしい。もと横田氏の氏神であった。また厄神として崇敬者が多い。

嚴島神社　旧村社

総社市中原四四二

主祭神　市杵島姫命　天照大神
例　祭　十月十七日
境内地　三六九・八五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　荒神社　稲荷神社

氏子数　一四〇戸
宮　司　角田　栄
責任役員　横田長一
由緒沿革　創建は崇神天皇の御代である。享保六年七月洪水のため、浜の社殿、神域が流失したので、現在の地に遷座し社殿を造営した。岡山藩主池田家が代官奉行を差遣して、社殿を建立し、経費を寄進した。

嚴島神社　旧村社

総社市真壁九三五

主祭神　多岐都比賣命　多紀理毘賣命　市杵島姫命
例　祭　十月二十七日
境内地　六六三・〇五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
氏子数　九〇〇人
宮　司　角田　栄
責任役員　野津平馬
由緒沿革　創建年代は不詳であるが、延喜式内社と考えられる。明和六年、寛政十年、天保四年、文化二年、安政二年、明治三十五年、明治三十六年、大正年間等に社殿、施設等を氏子が寄進している。

伊興部神社　旧無格社

総社市下原六九〇

主祭神　経津主命　武甕槌命　三女神　彦佐島命
例　祭　十月十九日
境内地　三六〇・一三坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　一〇一戸
宮　司　浅野間義男
責任役員　枝松健一　浅沼新一　枝松俊治
由緒沿革　創建年月不明。明治十九年に社殿改築の記念碑がある。明治四十三年一村一社の法令によって存置されたが、その後荒廃した。戦後敬神の念がたかまり、昭和三十九年九月七日復興を決議して現在にいたっている。

石畳神社　旧村社

総社市秦三九九五

主祭神　経津主神
例　祭　七月九日
主要建物　拝殿
宮　司　小橋光一
責任役員　片岡剛英
由緒沿革　本神社は本殿がなく、大自然石を御神体としている。創建年代、由緒等は不詳である。明治四十年五月二十二日村社に列した。

岩山神社　旧村社

岡山市杉谷一一六六

主祭神　建日方別命
例　祭　十月二十五日　**境内地**　一三七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社
氏子数　六八人　**崇敬者数**　三〇〇人
宮　司
責任役員　的場富直　杉本　茂
由緒沿革　本神社の御祭神は、吉備の中山の地主神として大吉備津彦命が、この吉備の国を鎮定し給い、後に岩山神社と称して、攝社五社の一社として鎮祭せられた。應永九年三月その御分霊を勧請して岩山神社と称し、氏神として崇敬した。

艮御崎神社　旧村社

総社市影字坂折一八一五

主祭神　猿田彦命　譽田別尊　相殿大帯姫神
例　祭　十月十五日　**境内地**　四三四・〇七坪

氏子数　八〇戸　　**崇敬者数**　四〇〇人

責任役員　竹田広志

由緒沿革　京都嵯峨花蔵院記録によると、「京都嵯峨花蔵院者後嵯峨天皇御代寛元元年北條時頼建立御嵯峨天皇之後院也…中略建武二年六月尊氏反し…中畧花蔵院宮延元元年備中水内郷下向　畧同年ヨリ正平六年迄免知三百貫預相成同年三月十四日足利尊氏ヨリ定上シ一同年八月上旬花蔵院宮始免領地ヲ御巡見被為有…正平六年八月二十七日皆見太郎重三石清水八幡宮此地勧請吉野皇威ト花蔵院宮御安産奉所伝々」とある。当神社の創建が深く由緒ある神社であることが推察できる。

艮御崎神社（うしとらおんざき）　旧村社

吉備郡真備町川辺二〇八

主祭神　須佐之男命　大国主命　建御名方命　保食神　宇迦魂命　少彦名命　八衢比古命　天之御中主命　大物主命

例祭　十月二十一日　**境内地**　一、四五六坪

主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所

摂末社　稲生社

氏子数　二五〇戸

宮司　浅野間義男

責任役員　青江　昇　鎌田富吉　加藤　昇

由緒沿革　勧請年月日は不詳であるが、現在の棟札に、慶長十五年三月、延宝四年八月、寛永六年五月、明和九年八月のものがある。旧藩主伊藤家も崇敬した。明治維新には武具を奉献している。大正二年三月一日摂社稲生神社外数社を合祀した。

大井神社（おおい）　旧郷社

岡山市大井五六

主祭神　百田大兄命外五柱

例祭　十月二十五日

境内地　一、二九四坪

主要建物　本殿　幣殿　拝殿　御輿庫

摂末社　神明神社　稲荷神社　若宮神社

氏子数　三〇〇戸

宮司　**禰宜**　河田陽一

責任役員　渡辺健治　高坂寛二

由緒沿革　創建は正元元年。吉備津彦命の御妃吉備大井姫命（百田弓矢比賣命）の御父を祭る。寛永二十一年足守藩主木下淡路守が、一石を寄進し祈願所と定めた。明治四十一年の火災によって本殿、幣殿、拝殿等を全焼した。大正四年再建した。

生石神社（おいし）　旧村社

岡山市門前一

主祭神　彦火々出見命

例祭　十月七日

境内地　二五二・八坪

主要建物　本殿　拝殿　神庫

摂末社　稲荷神社　荒神社

氏子数　四〇七戸

宮司　小野　毅

責任役員　樋口初次　田辺宗一　浅野　毅　樋口浅四郎

由緒沿革　創建年月は不詳であるが、往昔の勧請で、

例祭　十月二十六日　**境内地**　三六五坪

主要建物　本殿　幣殿　拝殿

摂末社　荒神社

氏子数　三六〇戸

宮司　瀬能太郎　**禰宜**　笹田準一

責任役員　渡辺芳夫

由緒沿革　創建年代不詳。天文五年社殿を再建した。その跡を現在野宮という。寛文五年十二月十五日現在地に社殿を再建した。嘉永五年四月一条家から藤紋附紫幕一帳、紅釣桃燈八帳および修覆料として白銀貳拾枚の寄附があった。大正四年九月十五日村社八幡神社・村社総堂神社・村社天神社の三社を合祀して、生石神社と改称した。

王子神社（おうじ）　旧無格社

総社市久代四五七

主祭神　応神天皇外九柱

元寿辺良宜神社・火多津留神社・王子神社を合祀し、明治初年王子神社と改称した。明治維新前に火災にかかり、鳥居、棟札が残存しているのみである。

御崎神社（おんざき）　旧村社

総社市久米一二一三

主祭神　吉備武彦命

例祭　十月二十日　**境内地**　七〇七坪

主要建物　本殿　釣殿　幣殿　拝殿　絵馬殿　社務所

摂末社　楽楽森神社　荒神社　木山神社　木野山神社　粟島神社　眼蒼神社　御前神社　保食神社　天神社　素盞嗚神社

氏子数　一五〇戸

宮司　石井文人　**禰宜**　石井清根

責任役員　難波宗一

由緒沿革　旧社記によると、仁徳天皇の御宇の創建という。旧称櫻矢明神、丑寅御崎・御崎名神業祠と称して、吉備津神社御園十二神の一社である。天正年中宇喜多氏の臣延原土佐守が、社寺領没収の際炎上し、天正七年九月に再建した。更に貞享二年九月に再建。安政三年に本殿を再建した。昭和十一年本殿以外を改築した。上足守深茂の大神谷は御祭神吉備武彦命、御友別命二代の御住居跡と伝えている。

御崎神社（おんざき）　旧村社

岡山市立田九一一

主祭神　吉備武彦命

例祭　十月十八日　**境内地**　九五七坪

主要建物　本殿　幣殿　拝殿　**氏子数**　七五戸

宮司　黒住虎雄

責任役員　松田　猛

由緒沿革　弘治年間の創建。御祭神は吉備津神社と関係があるので、両社の大祭には互に幣帛を奉献し、今日に及んでいる。

御崎神社（おんざき）　旧村社

総社市小寺三五〇

主祭神　吉備武彦命　天御中主命　若武吉備津彦命

例祭　十月十九日

境内地　二、一一二・七一坪

主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所

摂末社　荒神社　嚴島神社　角満神社　丸山神社

氏子数　二〇〇戸

宮司　角田　栄

責任役員　吉富光雄

由緒沿革　創建年月日不詳。この地の開墾時から旧小寺村、門田村の氏神として、村の田の中に鎮座していたのを、慶長十四年現在の山麓に奉遷し、旧社地を御供田とした。大正三年五月二十八日に村社浅尾神社を合祀した。旧藩主蒔田家も氏神として幣帛を奉献した。

加茂神社（かも）　旧村社

岡山市加茂字加茂宮一二二六

主祭神　鴨別命

例祭　十月十日　**境内地**　五四〇坪

主要建物　本殿　釣殿　拝殿　神饌所　鐘堂

摂末社　天満神社　幸利神社他二社

氏子数　一三〇戸　**崇敬者数**　五〇人

宮司　黒住虎雄

責任役員　小山米夫　牧野　勇　岩田光男

由緒沿革　本神社の創建年月日、勧請年暦は不詳であるが、京都加茂神社を勧請したと、古老の口碑に伝えている。備中誌所載の神社で、日蓮宗蓮休寺が摂していた。明治初年神主の摂に入った時から、宮守として寮住尼をおき所禱等に当らせて今日に至った。梵鐘に「鐘銘加茂明神弘化四年別当寺、日蓮宗法意山蓮休寺ニアリ」と明記している。摂社に天満神社、幸利神社があり加茂三社宮と称した。

加茂神社（かも）　旧村社

総社市山田一一〇〇

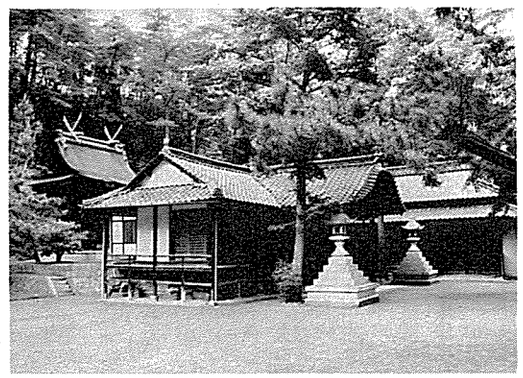
主祭神　瓊々杵命　神日本磐余彦命　別雷命　木花

之開耶姫命　五十鈴姫命
例　祭　十月二十七日
境内地　五八九・六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神庫
摂末社　天神社　保食神社　若宮　稲生社
氏子数　一、〇〇〇人　**崇敬者数**　五〇〇人
宮　司　小野　毅
責任役員　赤木実正　藤原　尚
由緒沿革　本神社は天正九年以前は高鴨神社と称し、味鉏高彦根命を祀っていた。天正九年二月領主鬼三身城主宍戸安藝守隆家公が山城国から、加茂神社を勧請したのが創建である。元禄二年二月梵鐘、七五三柱、鳥居等を奉納した。明治四十三年五月村内無格社全部を合祀し、一村一社とした。明治四十四年十二月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

懸幡神社　旧村社

岡山市東山ノ内一三〇三

主祭神　武甕槌命　経津主命
例　祭　十月第二日曜日
境内地　五三四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫　社務所
氏子数　二五〇戸
宮　司　津島元志
責任役員　石原　元　池上坂一　大西伊三雄　藤原武男



由緒沿革　神武天皇御東征の砌、富島の宮から吉備の奥津方面に荒振る神があると聞かせ給い、平定しようとこの里に入らせられた時に、山の峰に御旗が懸かっており、その旗には武甕槌命、経津主命の御名があったので、此処を懸幡といい二柱の神を奉祀したと伝えられている。本神社は元掛畑明見に鎮座していたが、明治四十五年五月十一日に現在地に遷座し、御崎神社外数社を合祀した。

上加茂神社　旧村社

岡山市津寺一九

主祭神　応神天皇　神功皇后　玉依姫命
例　祭　十月二十四日
境内地　二四二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　絵馬殿　宝物庫
摂末社　大山祇神社　荒神社　水分神社　空山神社　素盞嗚神社　中村神社　奥谷神社　木村神社　加勢神社　諏訪神社　坪田神社　遉摩神社　白鳥神社　影森神社
氏子数　三八〇戸　**崇敬者数**　一、七〇〇人
宮　司　瀧川貞一
責任役員　田渕　茂
由緒沿革　創建年月日不詳。かつて元下二万村大塚に御鎮座せられていたが、元和元年に高見帯刀が上二万

主祭神　神日本磐余彦　火火出見命
例　祭　十月十二日
境内地　五二三・七七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　遠崎神社　荒神社
氏子数　二八〇人
宮　司　佐野光正
責任役員　角谷　正
由緒沿革　創建年代、由緒等は不詳である。

上二万神社　旧村社

吉備郡真備町大字上二万三三六二

主祭神　大吉備津彦大神
例　祭　春季五月第二日曜日・秋季十月第二日曜日



村字中村に勧請した。明治二十九年祝融の災にかかった、直ちに再建築し現在に至っている。

吉備津神社　旧官幣中社

岡山市吉備津九三一

主祭神　大吉備津彦大神
例　祭　春季五月第二日曜日・秋季十月第二日曜日
境内地　一一〇、〇〇〇坪
主要建物　本殿　拝殿（国宝）
摂末社　本宮社他十社
氏子数　八五〇戸　**崇敬者数**　三、〇〇〇人
宮　司　藤井　敬
権禰宜　河田陽一　佐伯正禮　山田貫助　中村　新
責任役員　金友道夫　吉井良夫　池上　充　三宅一男
犬飼博始　小西　要　坪井清一　藤井　駿　伊丹格二
石井祥史
宝　物　銅鐘（重要美術品）一切経連歌（県指定重要文化財）鬼面・古面・狛犬（県指定文化財）
特殊神事　七十五膳据神事（春秋大祭）矢立の神事（一月三日）鳴釜の神事
由緒沿革　社伝によると、仁徳天皇が吉備国に行幸の時、吉備津彦命の霊夢によって、五社の神殿を創建せられたという。仁寿二年官社に列せられ、延喜の制により、名神大社に列し、天慶三年一品の神階に陞られたので、一品吉備津宮、または三備一宮と称した。寛仁年間京畿七道の諸神に、一代一度の奉幣を定められるに当り、これに預った。康平四年・正平六年社殿を焼失したが、明徳元年足利義満が詔により、新に社殿を造営した。これが現在の御社殿である。本神社は古来から産業延命長寿の守護神として信仰せられている。明治四年國幣中社、大正三年官幣中社に列格せられた。

國司神社　旧無格社

総社市新本一九七五

例　祭　十月一日　**境内地**　三八一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
崇敬者数　五〇〇人
宮　司　浅野間義男
責任役員　浅野喜一
由緒沿革　本神社は旧岡田村外五ヵ村上原井領用水組合の用水守護神である。天正の中頃、毛利輝元の郡代國司隠岐守が下道地方を治めていた時、水利の施設がなく農民の苦難となっているのを憂い、薗、川辺、尾崎妹村に通ずる水路の復興に力を注いで、永久に用水取入れ権利を確保したという。

國司神社　旧村社

吉備郡真備町辻田一〇八五

主祭神　大國主命　国司隠岐守
例　祭　十一月十五日　**境内地**　七五七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所
摂末社　稲荷神社　水分神社
氏子数　三〇九戸　**崇敬者数**　一〇六人
宮　司
責任役員　森脇重市　植田都一　小原宝一　若水竹市
宝　物　頭山満の額
特殊神事　古来より赤米で春秋の例祭に赤飯・酒・甘酒を作り参詣者に授与する
由緒沿革　創建年代は不詳であるが、神社附近は勿論当地方には多数の古墳群があり、條里の遺制がある。

またイケバミの池、九頭龍神祀・サイの神・的湯・馬場・カンノシキ・辻・カンノメヒという地名がある。又十回にわたり主基田として卜定せられた。イナイダは隣部落にある。昭和四十八年五月三日文化庁主催で日本の稲作と題してNHK教育テレビで赤米行事を放送した。

國司神社

旧無格社

総社市新本杉山五一四一

主祭神 大国主命　少彦名命
例祭 十一月十五日　**境内地** 一八一・一坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社 稲荷神社
氏子数 八〇五人
宮司 小野　毅
責任役員 橋本　基　神崎長治郎　永田辰次　兼田久次郎
由緒沿革 創建年代は不詳であるが、延喜式脱漏神社として古くから知られている。永禄二年・元和五年・元禄十二年に改築・増築して現在に至っている。古記録に本神社は大国主命、事代主命が國土御造営の際、当地方治平の後、この地を退去せられる時に、赤米を播種したと記載してある。現在では当神田に不思議にも赤米が出来ている。昭和四年社務所を建立した。盗難解除、商業繁栄の神として崇敬の篤い神社である。

五社神社

旧村社

総社市井尻野一九七六

主祭神 加茂大神　石清水八幡神　春日神　日吉神　稲荷神
例祭 十月十八日　**境内地** 一〇一坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿
氏子数 四五戸
宮司 角田　栄
責任役員 今川勝治
由緒沿革 創建年月は不詳であるが、井山宝福寺の鎮守の神であったが、神仏分離によって井山部落の氏神として崇敬している。なお旧号は采遠宮と称していたという。

下二万神社

旧村社

吉備郡真備町下二万八八三

主祭神 棚機姫命
例祭 十月二十二日　**境内地** 一五五坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿
摂末社 青木神社　荒神社　牛神社　金比羅神社

國司神社

旧無格社

総社市日羽三七九

主祭神 大國魂神
例祭 十一月十四日　**境内地** 八八一坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社 八幡神社
氏子数 一七〇戸
宮司 高見照雄
責任役員 瀬切　勇　今田豊一　徳田　勲　渡辺政市
由緒沿革 本神社は元和元年岡田藩主伊藤公の重臣木崎氏が崇敬する、熊野大神を勧請し、もとの氏神八幡神社を境内摂社とした。明治十三年十月本殿、幣殿を改築、明治四十五年四月村内無格社十九社を合祀した。

熊野神社

旧村社

吉備郡真備町大字尾崎六八二

主祭神 伊弉諾尊　伊弉冉尊
例祭 十月二十三日　**境内地** 八八一坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社 八幡神社
氏子数 一七〇戸
宮司 高見照雄
責任役員 瀬切　勇　今田豊一　徳田　勲　渡辺政市
由緒沿革 本神社は元和元年岡田藩主伊藤公の重臣木崎氏が崇敬する、熊野大神を勧請し、もとの氏神八幡神社を境内摂社とした。明治十三年十月本殿、幣殿を改築、明治四十五年四月村内無格社十九社を合祀した。

荒神社

旧無格社

総社市日羽八九

主祭神 猿田彦命
例祭 六月二十八日　**境内地** 五六坪
主要建物 本殿
崇敬者数 一三〇人
宮司 野瀬　剛
責任役員 大月譲平　大月順一
由緒沿革 創建年代不詳であるが、古来氏神八幡神社及び国司神社と共に作原三社宮と称し、崇敬篤い社である。境内に林立する古槍古杉は、約三百年を経たものと認められる。明治四年までは八幡神社の摂社であったが、現在は独立社である。

氏子数 九三戸
宮司 瀧川貞一
責任役員 井上一郎　井上邦香　井上芳郎
特殊神事 御日待祭
由緒沿革 創建年月日不詳。元下二万字大塚に御鎮座の遠摩神社を、延宝五年に大字上二万字鳥打に御遷座のとき、御分霊を現位置に勧請した。村社上二万神社の摂社として崇敬せられていた。社殿は明治十九年に改築して現在に至った。昭和二十年に村社に列格した。
崇敬者数 四五〇人

陶神社

旧村社

倉敷市玉島陶三五三〇

主祭神 素盞嗚尊　稲田姫命　五男三女神
例祭 十月二十八日
境内地 六六七・七五坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　神饌所　絵馬殿　社務所
摂末社 龍神社　御崎神社　牛神社
氏子数 三〇〇戸
宮司 高見照雄
責任役員 臼井　薫　家守克巳　三宅澄一　大松京一
由緒沿革 本神社は創建年月不詳であるが、社伝によると、往古備後國鞆の祇園社の御分霊を勧請し、旧陶村の鎮護神として牛頭天王社と称した。後、陶神社と改め、悪病除けの神として近郷の尊崇が篤かった。明治三年参道を改修し、大正六年に全社殿の大改築、社務所の新築を行った。

総社

旧県社

総社市総社七三一

主祭神 大名持命　須世理姫命　相殿神祇官斎殿八柱神及國司所載社二百九十六社
例祭 十月十九日　**境内地** 五、七六四坪
主要建物 本殿　祝詞殿　拝殿　前殿　神饌所　絵馬殿　回廊　神輿庫　社務所
摂末社 沼田神社　大神神社　古祀末社二十社
氏子数 一、五〇〇戸
宮司 浅野間義男
責任役員 清水阜一　松尾亥子男　山神富太
由緒沿革 創建年月日不詳。大化年間の創建で、備中国の総社である。備中国内大小神祇官社、田社三〇四社の神祇を奉斎してある。十月の例祭には、この三〇四社の外に相殿八柱神と末社十二社を合せて三二四盤の神饌を奉献する古例が存続している。天正年間まで神領があった。天正十年兵火で焼失し、慶長十三年に再建し、貞享四年に改築した。明治五年十一月に県社に列格した。

諏神社

旧県社

岡山市上高田三六二八

主祭神 遣霊彦命　吉備武彦命　高田媛乃命　楽楽

森彦神　吉備津彦命　天穂日命
例　祭　十月二十五日　**境内地**　六三三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　社務所　神庫
摂末社　荒神社　若宮
氏子数　二五〇戸
宮　司　禰宜　千原恭平
責任役員　笹井常雄
由緒沿革　延喜式内社、創建年月日は景行天皇の時という。この地の県主楽楽森彦命の女、高田媛命は吉備津彦命の後である。遣霊彦命は吉備津彦命の脇将で、功により大井庄内五ヶ所を賜わった。後、神と崇め社を建てて五神を合わて祭った。往古は二宮五社大明神と崇めた。寛永年間領主木下氏から祈願所として二石を寄進せられた。明治十四年県社となる。同四十一年十月村社天神社を合祀した。

天神社（てんじんしゃ）　旧村社

総社市秦二二九七

主祭神　菅原道真
例　祭　十月二十四日　**境内地**　一、五五〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　一七〇戸
宮　司
責任役員　野瀬　基
由緒沿革　創建年月不詳。天正年間の荒手城主川西三郎左衛門之秀以来、明治維新の際まで、領主から社費並びに幣物の献納があった。

天神社（てんじんしゃ）　旧村社

岡山市山ノ上三二二一

主祭神　菅原道真命
例　祭　十月二十四日
境内地　一九四・五〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社
宮　司
責任役員　金木鹿蔵　元成良次郎　国定道直
由緒沿革　本神社の御鎮座は不詳であるが、古老の口伝に延喜の御代から奉斎したという。現存する棟札に天神霊とある。慶安三年九月に改築した。

天神社（てんじんしゃ）　旧村社

岡山市西山ノ内六八〇

主祭神　天穂日命　菅原神外大柱
例　祭　十月二十五日　**境内地**　一八〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所
摂末社　日蓮宮　荒神社
氏子数　二、二九五人
宮　司
責任役員　土師米造　大塚宇一　河田宗一
由緒沿革　土御門天皇の建仁年間の勧請である。元徳元年十一月本殿拝殿が炎上し、同二年に再建した。慶長五年に足守藩主木下家の領地となり、代々藩主が尊崇し、社領を奉献した。寛永二年木下淡路守が太刀・幕一張を奉納した。明治四年神饌幣帛供進神社に指定せられた。明治四十二年村社天神社・同厄神社・同八幡神社・同園崎神社・無格社荒神社を合祀した。

天満神社（てんまじんしゃ）　旧村社

総社市井尻野一七〇五

主祭神　菅原神　天児屋根命
例　祭　十月十四日八　**境内地**　九五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　春日神社
氏子数　九〇戸
宮　司　角田　栄
責任役員　村木仁平　村木亀寿一
由緒沿革　創建年月不詳。社伝によると、村木氏の祖が大和国郡山から移住の時、天児屋根命を鎮祭して天神社と称したという。延宝三年社殿を修理した。享保三年四月江戸奉行酒井修理大夫に出願の陳述書に、神主前田大和守が、本神社の神像は天児屋根命であると

申し立てている。境内除地三反三畝である。村木氏の奉斎したものは天児屋根命で、菅原神は後に相殿に奉斎した。

西園神社（にしぞのじんじゃ）　旧村社

吉備郡真備町大字市場四四六八

主祭神　品陀和気命
例　祭　十月二十七日
境内地　六一四・四一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　鐘楼
氏子数　四七〇戸
宮　司
責任役員　浅原　薫　梶谷靖之　林　鶴吉
由緒沿革　本神社は天文九年本村の住人白神右京亮果春が、大願主として社殿を創建して八幡宮と称した。元和六年、寛文十二年・正徳元年・寶暦十二年、寛政五年、享和三年等に大増築を行ったという。これからの棟札が現存している。岡田藩代々の藩主の崇敬が厚く、種々の寄進をしている。明治維新の際西園神社と改称した。

能勢神社（のせじんじゃ）　旧無格社

総社市下倉五二五八

主祭神　天之底立命　天之御中主命　國常立命
例　祭　十月二十三日　**境内地**　一八〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　和霊神社　若宮神社
氏子数　三五〇人
宮　司　浅野間義男
責任役員　一安荒一郎　井上勝二
由緒沿革　創建年代は不詳であるが、社家の古記録の諸社再建棟札写に、弘化二年己八月能勢神社御本殿再建とある。寛保・寶暦等の社寺書上帳に妙見社とあって、すでに当時産土神社として崇敬せられていたと考えられる。

畑神社（はたじんじゃ）　旧無格社

倉敷市玉島陶三五

主祭神　稲田姫命　素盞嗚尊　五男三女神
例　祭　十月二十八日　**境内地**　一五七・五〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　穴羽神社
氏子数　四〇戸
宮　司　高見照雄
責任役員　藤原　孝　森永柏雄　佐守要平
由緒沿革　本神社は創建年月不詳であるが、旧陶村畑部落の氏神として、牛頭天王宮または天王宮と呼ばれ、



八幡神社（はちまんじんじゃ）　旧村社

総社市美袋四六七

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后　相殿　吉備武彦命
寛政年間に畑神社と改称し、明治初年に社殿、社地の大改築を行い今日に至っている。

例　祭　十月十七日　境内地　一、八〇六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　境内末社六社　境外末社五社
氏子数　二七〇戸
宮　司　野瀬　剛
責任役員　安田寅一　秋政方一
由緒沿革　当神社は文政三年炎上の際、由緒、縁起書等が焼失し、創建、社歴等詳知できないが、大永三年八月城主田辺高倫公が再建した棟札控（土屋氏所蔵）をみると、大永三年以前の創建で、八幡宮御崎宮と併称したことが窺知できる。口碑によると、産土神は御崎宮で、後年八幡宮を併せ祀り、尓後併称し単に両宮又は両社とも称え、明治維新に村社に列し、八幡神社と単称することとなった。古来から八月に御崎祭を準例祭、九月に八幡祭を例祭としている。現社殿には文政十二年八月松山藩主が八幡宮御前宮再建の由の棟札がある。昭和六年四月神饌幣帛供進神社に指定せられた。昭和四十年十二月疫神社、川平荒神社、定光寺荒神社、大年神社、二反荒神社の五社を合併境外末社とした。部落内にある地名の宮田・五位田・油料田・おんざき・御崎垣内・宮山・神田等は本神社に関係があったと推察せられる。

八幡神社　旧無格社

総社市日羽二三一

主祭神　応神天皇

例　祭　十月十七日　境内地　一、八〇六坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿
氏子数　二七戸
宮　司　野瀬　剛
責任役員　浅沼包一　浅沼茂夫
由緒沿革　創建年月日不詳。口碑によると、字古宮地内から現地に奉還したという。その頃高野山八百年忌があったという。大月氏所蔵の棟札に、「貞享元年八月奉造立八幡宮一宇云々」とあり、口碑と考え合せると、創建は貞享以前であろう。明治元年に日羽村庄屋への届書に、「向カイチ氏神八幡宮御崎大明神云云」とあるのは、当神社のことで、何時の頃からか、両神社を併斎して、併称したことが窺知せられる。

八幡神社　旧村社

総社市下倉七八七

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月十日　境内地　八三九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　社務所
摂末社　荒神社　能瀬神社　綿津見神社
氏子数　八十戸
宮　司
責任役員　森　薫
由緒沿革　本神社は文禄二年五月十一日、内蔵之助藤原朝臣清忠が山城国男山から八幡宮を奉迎して、山中の祠に奉遷し氏神として崇敬した。由緒、縁起書は文政九年戌三月十日の村中の大火災で焼失した。時の神主藤原朝臣清信が寛永六年、再び社殿を建立して奉祀した。貞享元年六月炎上し、元禄七年九月十六日に、同山を少し降った処に御社殿を移築し、現在に至った。

八幡神社　旧村社

倉敷市玉島陶七〇三

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后　市杵島姫命
例　祭　十月二十七日　境内地　一九三・五七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　釣殿　神饌所　社務所
氏子数　九〇〇人
宮　司　高見照雄
責任役員　藤本勲次　水川市之丞　藤岡力松　井上平治
由緒沿革　創建年月は不詳である。応神天皇を祀り服部村の産土神として崇敬せられ、社殿は元禄十年以来寶暦二年、安政四年に増改築をし現在に至っている。明治初年村社に列し、大正十三年社務所を新築し、昭和七年参道の拡張と大鳥居を建造した。昭和十八年四月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

主祭神　応神天皇
例　祭　十月二十六日　境内地　二八〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　五一五戸
宮　司　黒住虎雄
責任役員　水川与十郎
由緒沿革　創建年月日は不詳であるが、弘治元年大崎見法山へ遷座したという。

八幡神社　旧村社

総社市窪木五九一ノ二

主祭神　応神天皇　須世理姫命　大名持命
例　祭　十月二十三日　境内地　一七〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　鐘楼
氏子数　二八〇戸
宮　司　石井清根
責任役員　岡　靖

八幡神社　旧村社

岡山市和井元一〇八

由緒沿革　文明十二年八月創建。後土御門天皇の御宇、周防国山口城主大内政弘・旗頭備中國加夜郡服部山城主根矢五郎左衛門尉久利が、大内政弘に属して上京し文明十二年八月城内乾丸に勧請した。後に来裔祢屋七郎兵衛親光が冠山城で、羽柴秀吉に敗れて後、天正十二年当城宇喜多直家の臣戸川肥後守宥隣がこれを守り、西の平地窪木に勧請した。

八幡神社

総社市西山二二五八

主祭神　応神天皇　神功皇后　玉依姫命
例　祭　十月十九日　境内地　一五五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　鐘楼
氏子数　一八〇人
宮　司　角田　栄
責任役員　松永由夫
由緒沿革　天正二年石清水八幡宮を勧請し、八田部郷西山宇宮山に本殿を建立し、鎮守八幡宮として奉祀した。明治維新に至り八幡神社と改称した。

主祭神　品陀和気命
例　祭　十月十八日　境内地　三三五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　鐘楼　集会所
摂末社　天満神社　荒神社　白玉神社　稲荷神社
氏子数　七二戸
宮　司　黒住虎雄
責任役員　小西　要　練苧順平　小西延義　難波　薫
由緒沿革　本神社は正八幡宮と尊称し産土神である。慶長十年八月脇本甚太夫正久は石清水八幡宮を勧請したという。その後村内の日蓮宗信城寺の僧が祭祀を行ったが、明治五年六月より神主を補し、神事を行った。爾来産土神として崇敬が篤い。

八幡神社　旧村社

総社市新本杉山三〇五二

主祭神　応神天皇　市杵島姫命　神功皇后　湍津姫命　黒姫命

例　祭　十月十五日　**境内地**　二九七・一八坪
主要建物　本殿　拝殿　神庫　神饌所　鐘楼
摂末社　賀具槌神社　諏訪神社
氏子数　二八〇戸
宮　司　小野　毅　**禰　宜**　小野忠紀
責任役員　槇田豊次郎　神崎　一　小原住三郎　徳田定吉
由緒沿革　創建年代は大永二年と云い、豊前宇佐八幡宮及び筑後高良玉垂神社を勧請した。寛永元年藩主伊藤丹後守が神鏡・短刀・太刀を奉納した。寛永十一年より幣帛料として米一石二斗を奉献した。伊藤家代々の崇敬厚く、神社御神体書上帳、神社明細取調帳、吉備郡史等に銘記してある。当地の氏神として尊崇せられている。

八幡神社（はちまん）　旧村社

総社市新本七六〇四

主祭神　応神天皇　神功皇后　市杵島姫命　湍津姫命　黒姫命
例　祭　十月十五日　**境内地**　四七二・七五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　神庫　鐘楼
摂末社　小竹神社　日吉神社　菅原神社
氏子数　八〇五人
宮　司　小野　毅
責任役員　橋本準一　神崎長治郎　永田辰次　兼田久次郎
由緒沿革　永禄二年豊前国宇佐八幡宮から勧請鎮座した。社記によると明暦二年、寛文八年、寛政八年、嘉永三年社殿の修理を行った。承応三年御神幸の神事を創始した。天承三年鬼之身城主宍戸安芸守隆家が神鏡を奉納した。寛永十一年藩主伊藤長寛公が神鏡及び奉幣料として年々米一石二斗を奉献し、伊藤家累代の尊崇が篤い。明治四年二月一日村社に列格した。

八幡神社（はちまん）　旧無格社

総社市久代五九一七

主祭神　応神天皇　大物主命　素盞嗚尊
例　祭　十月二十四日　**境内地**　四一二・一二坪
主要建物　本殿　拝殿　神庫　鐘楼
摂末社　神功皇后社　天神社　龍田神社　御前神社
氏子数　一、〇二九人
宮　司　小野　毅
責任役員　岸本寿一郎　武縄英一　樋口　亮　宮原春一　田辺恭二
由緒沿革　創建年月は不詳であるが、鎮座地は和名抄にある備中国下道郡釧路郷字月崎の地に、往古から奉斎し、久代村の氏神であった。本神社所蔵の棟札、古文献によると、旧幕時代に領主の本願であり、社殿の修理、器物の奉納等があった。天正年間以後の延宝・寛政・安永・享保等の棟札、その後の棟札等が現存している。

八幡神社（はちまん）　旧無格社

総社市久代二五二三

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月二十二日　**境内地**　二三六・〇七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫　社務所
摂末社　素盞嗚神社　荒神社　諏訪神社　御崎神社　春日神社
氏子数　一八〇人　**崇敬者数**　一〇人
宮　司
責任役員　秋山勝太郎　三上鶴義　三上九郎
由緒沿革　創建は文久元年である。久代字藤原に鎮座し、代々領主の崇敬篤く、板倉家が領主となり、家臣をこの地に居住させ、年々祭祀料の寄進が、明治初年に至った。文久年間に兵火により全焼したと伝えている。明治四十三年部落内の五社を合祀した。

八幡神社（はちまん）　旧村社

総社市泰一六一六

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月十二日

境内地　二〇五坪
主要建物　本殿　神殿　幣殿　拝殿
氏子数　三五〇人　**崇敬者数**　一〇〇人
宮　司　小橋光一
責任役員　片岡邦雄
由緒沿革　創建年代は天文元年六月二十五日である。由緒は不詳である。

八田（はった）神社　旧村社

吉備郡真備町箭田三八八七

主祭神　大己貴命　天穂日命　仲哀天皇　應神天皇　神功皇后　少彦名命
例　祭　十月二十五日　**境内地**　四一八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
氏子数　二、四〇〇人　**崇敬者数**　一〇〇人
宮　司　小橋光一　**禰　宜**　小橋道典
責任役員　長谷川隆夫
由緒沿革　創建年月不詳。大正元年九月元村社白石神社に村社八幡神社及び御崎神社を合祀して、八田神社と奉称した。

東薗（ひがしその）神社　旧村社

吉備郡真備町岡田一六九九

主祭神　猿田彦命　天照大神　倉稲魂命　穴門武姫命　仲哀天皇　水分神
例　祭　十月十七日　**境内地**　三、四二三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　稲生神社　天津神社　国津神社　荒神社　池田神社　春日神社　谷神社
氏子数　四〇〇戸
宮　司　浅野間義男
責任役員　片岡俊一
由緒沿革　社伝によると、毛利輝元が天正三年当地に来た時、陣中守護の神として本村字岡に勧請したという。慶長三年伊藤丹後守が領主となってから、厚く崇敬した。元禄十四年には伊藤播磨守が本殿を造営し、以後年々奉幣している。大正四年八月十三日無格社稲生神社、穴門山神社、水分神社を合祀した。

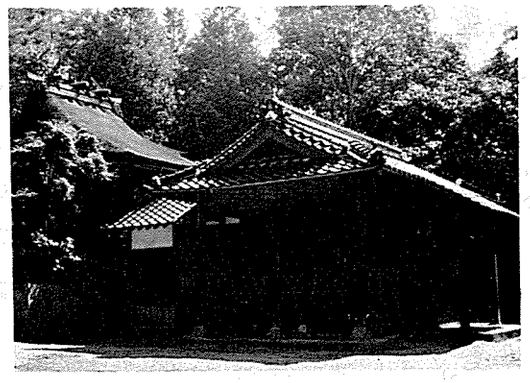
姫社神社（ひめこそ）　旧無格社

総社市福谷一四二三

主祭神　比賣語曽神
例　祭　十月二十八日
境内地　三三五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
氏子数　四〇〇人
宮　司　小橋光一
責任役員　板野義夫
由緒沿革　創建年代、由緒等は不詳である。

日羽八幡神社（ひわはちまん）　旧村社

総社市日羽六六一



主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十月十日　**境内地**　九六七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　一二〇戸
宮　司　野瀬　剛
責任役員　浅野間益男　中村重一
由緒沿革　本神社は創建年月不詳であるが、口碑によ

ると、加比波羅別（貝原氏の遠祖という）が御前神（吉備津彦命の荒御魂）を勧請し、後に雄畧天皇の朝、應神天皇・仲哀天皇・神功皇后を勧請し、日羽郷の鎮守としたという。旧杉山藩主が、山林一町二反、御供米高三斗・神田一反五畝を奉納したことも伝えられている。明治四年村社に列格した。

古郡神社（ふるごおり）　旧村社

総社市総社二四〇五

主祭神　吉備武彦命
例祭　十月九日　**境内地**　四二三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　宝物庫
宮司　角田　栄
責任役員　松永愛市
由緒沿革　延喜式内社であるが、創建年月日不詳。永仁六年の裏書のある服部郷の古図に、宮山が見え、宮山の東には古都の里、宮妹川の名がある。備中風土記に「名宮瀬川、川西者吉備建日子命之宮此三世王故名宮瀬」とある。正長元年の大風に倒壊し、久米村御崎神社に奉遷し、嘉永四年七月西山の旧社地に社殿を造営し、奉遷したと伝えている。

別所神社（べっしょ）　旧無格社

総社市久代三〇九一

主祭神　大国主命
例祭　十月二十二日
境内地　三三七・九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　御崎神社　春日神社　稲荷神社
氏子数　三〇〇人　**崇敬者数**　二一人
宮司　小野　毅
責任役員　剱持勇三郎　白神洋士
由緒沿革　創建年代は不詳であるが、往昔七社神社と称し、毛利の臣宍戸元孝鬼之身城主となって、社殿の建立、修築をしたと伝えている。明治二年三月社殿を全焼したので、古記録、棟札を焼失した。

星神社（ほし）　旧村社

岡山市真星一六一五

主祭神　稜威雄走命　伊邪那岐命　素盞嗚尊
例祭　十月第三日曜日
境内地　六八〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫　社務所
摂末社　浮霊前社　荒神社　若宮社　龍王社



由緒沿革　天武天皇の白凰年間の創建と伝えられ、本神社の縁起書によると、当山に霊雲降り蔽うこと三十五日にわたり、その中に星のような光があるので、恐れて近づく人がない。即ち三つの星・三つの巌が落ちた。これを崇敬すれば、土地が繁栄すると、これによってこの地に神社を構えて氏神として奉斎し、この地を真星邑と称えるようになった。明治四十二年五月十一日に天津神社、疫神社を合祀した。
氏子数　八〇戸
宮司　津島元志
責任役員　小倉　隆　小出哲夫　難波國重　難波貞雄

麻佐岐（まさき）神社　旧村社

総社市秦四〇三五

主祭神　大國魂神
例祭　七月十二日　**境内地**　五五坪
主要建物　拝殿
崇敬者数　四〇〇人
宮司　小橋光一
責任役員　片岡剛英
由緒沿革　本神社には本殿がない。大岩を御神体としている。明治四十年五月二十二日村社に列格した。創建年代、由緒は不詳である。

丸山（まる）神社　旧無格社

総社市門田五九二

主祭神　宇迦之御魂命　蒔田藩主代々の御神霊
例祭　三月十五日　**境内地**　二三二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　一〇〇人　**崇敬者数**　五〇〇人
宮司　角田　栄
責任役員　吉富光雄

神社（みわ）　旧村社

総社市八代九・八

主祭神　大物主命　応神天皇
天照大神　春日神　大山咋命　素盞嗚尊　他
例祭　十月二十五日
境内地　一、三三三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
氏子数　三〇〇戸
宮司　浅野間義男
責任役員　片岡三藏　明石精夫
由緒沿革　延喜式内社。創建年月日不詳。文徳天皇嘉祥四年正月正六位上。清和天皇貞観元年正月従五位下に敍せられた旧社である。明治四十三年七月十五日村社八幡神社、摂社八代神社、摂社伊與部神社を合祀した。

百射山（もも）神社　旧村社

総社市三輪一三四七

主祭神　吉備武彦命
例祭　十月二十六日
境内地　四九七・五七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　鐘楼
氏子数　五五戸
宮司　石井清根

由緒沿革　稲荷大神として尊崇せられ、蒔田家祖先は尾州から起り、氏神として祭祀していたが、当地に居城するようになり、先祖の神霊を合祀し、城の守護神として鎮祭した。蒔田家から永代祈禱料を奉納した。明治四十四年火災のため貴重品等を焼失した。

矢喰天（やぐいてん）神社　旧村社

岡山市高塚一〇八

主祭神　大山祇命
例祭　十月二十四日
境内地　二、二〇八・六六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　御崎神社　荒神社　天神社
氏子数　一六〇戸
宮司　角田　栄
責任役員　平田綾男　中村　基　河田静男　海老原寿太
由緒沿革　延喜式内社。三代実録によると、文徳天皇嘉承四年正月に正六位上。清和天皇貞観元年正月従五位下に叙せられた。寛文十二年池田光政公が福（旧名百射山）の中腹幸山から三和神社、御崎神社の社地に社殿を造営し、遷座合祀した。山林を寄進、太刀一振を奉納した。当地は備前浅尾領の入会地で、浅尾藩主代々が崇敬し、慶応二年御紋付幕一帳を奉納した。

責任役員　畑中三郎

由緒沿革　創建年代は不詳。矢喰宮ともいう。伝承によると、大吉備津彦命・吉備武彦命が温羅を討伐された時、温羅の防戦により苦戦がつづいた。その時命が放たれた双矢の一矢が温羅の左眼に命中し、一矢は温羅の投じた岩と喰い合うて落ちたという。その岩は現在も境内にあって、その側に下向に枝を生じた大竹がある。これがその矢であるといわれる。この事由により矢喰宮と呼称せられた。

横田神社（よこた）　旧村社

総社市久代三六一二

主祭神　天穂日命

例祭　十月二十二日

境内地　一、五三六・〇八坪

主要建物　本殿　幣殿　拝殿

摂末社　天神社　龍田神社　廣瀬神社

氏子数　二、〇〇〇人　**崇敬者数**　五〇人

宮司　小野　毅

責任役員　渡辺藤二郎　荒木　寛　木口羊平　木口実男　福田　豪　高田　板

由緒沿革　創建年月は不詳であるが、延喜式内社で、文徳天皇嘉祥四年正六位上の神階を授けられ、清和天皇貞観元年従五位下を授けられた。宝暦七年社殿が大破したが、文政十年修理を完了し遷座祭を執行った。爾来郷土の人の尊崇を受けて現在に至っている。

井神社　旧村社

総社市井尻野九二八

主祭神　罔象女神　水分神　妹尾兼康

例祭　十月十八日

主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌殿　社務所

摂末社　稲荷神社　荒神社

氏子数　三〇戸

宮司　角田　栄

責任役員　中島修一

由緒沿革　創建年月日不詳。延喜式税上に備中国堰溝料稲一万七千束とある。安徳天皇寿永元年領主妹尾太郎兼康が領地内に水利を開き旱害を除こうとして、本神社に祈願し、高梁川を堰いて樋を造り、湛井溝を開鑿した。報賽のため社殿を改築した。寿永二年八月「四季祭次第定申事」として本神社の掟を定め、上郷下郷から、それぞれ神楽銭を献納し、神社の修繕をした。

八百萬神

日本書紀には八十万神（やそよろずのかみ）とある。多くの神々の義で、固有名詞ではない。八百万とは数の多いことをいう語で、実数を示した語ではない。本居宣長は「八百万は数の多き至極を云えり」と云っている。八十万神・八十万群神・八十諸神・八百万千万神なども同様である。日本書紀に、天照大御神が天の石屋戸にさしこもった時、八十万神が天安河辺に会合して、その祷るべきさまを計ったとある。古事記にも同様のことを記して、八百万神天安河原に神集いに集い云々とある。

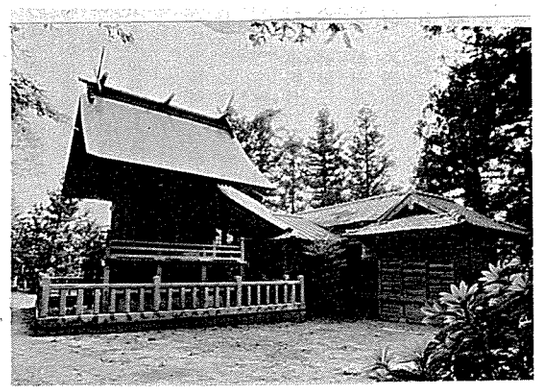
高梁・上房支部　（八二社）

阿口神社　上房郡北房町大字阿口六〇四……三二九
阿部神社　高梁市落合町阿部一八五八……三二九
天津神社　〃　松原町大津寄一〇八四……三二九
一宮神社　〃　高倉町大瀬八長二二五三……三三〇
厳島神社　上房郡北房町大字下呰部四九……三三〇
井戸鐘乳穴神社　〃　北房町大字上水田八四二五……三三〇
稲荷神社　高梁市津川町八川五四六……三三一
稲荷神社　〃　落合町近似一一七……三三一
磐裂神社　〃　松原町松岡八八四……三三一
岩牟良神社　上房郡賀陽町大字竹荘一〇七四……三三一
岩山神社　高梁市巨瀬町三三三五……三三二
大己貴神社　〃　高倉町田井四〇七一……三三二
大物主神社　〃　落合町近似一〇四四……三三二
大和山神社　上房郡賀陽町大字納地一三〇……三三二
御崎神社　〃　北房町大字上水田一九八三……三三三
御崎神社　高梁市巨瀬町五〇六八……三三三
御前神社　〃　落合町阿部七六……三三三
御前神社　〃　御前町二三三一……三三四
御前神社　〃　宇治町大字六田一二〇七……三三四
御前神社　〃　高倉町田井鍛冶四五二二……三三四
御前神社　〃　宇治遠原二四七〇……三三五
上有漢神社　上房郡有漢町大字上有漢二五四〇の三……三三五
川合神社　上房郡賀陽町大字田土三一一三……三三五
神崎神社　高梁市玉川町玉一四〇の二……三三六
木野山神社　〃　津川町大字今津一二一一……三三六
清実八幡神社　〃　宇治町本郷四〇六……三三六
熊野神社　〃　中井町西方六三九九……三三七
熊野神社　〃　松山六五七〇……三三七
五社神社　〃　松原町春木九〇七……三三七
御王神社　上房郡賀陽町大字上竹四七一六……三三八
郡神社　〃　北房町大字上水田三九九……三三八
金刀比羅神社　〃　北房町大字上中津井二六……三三八
三神社　高梁市玉川町大谷三一三七……三三九
三座神社　〃　中井町西方一九四三……三三九
山神社　〃　玉川町下切一七二八……三三九
山神社　〃　玉川町下切二五六……三三九
山神社　〃　玉川町増原三四八七……三三九
柴倉神社　〃　中井町大字西方七二〇七……三四〇
杉戸八幡神社　〃　高倉田井一三四六……三四〇
鈴岳神社　上房郡有漢町大字有漢二九五九……三四〇
諏訪神社　高梁市落合町原田一二〇五……三四一
諏訪神社　上房郡有漢町上有漢六八〇二……三四一
高岡神社　〃　北房町大字上中津井二九九九……三四一
天神社　高梁市落合町大字原田一七五一……三四二
天神社　上房郡賀陽町大字上竹七六一……三四二
天神社　〃　巨瀬町六二二三……三四二

天神社　上房郡北房町大字上水田七七六三……三四三
天神社　高梁市中井町大字津々二六九五……三四三
天神社　上房郡北房町大字宮地一七七八……三四三
天満神社　高梁市松原町松岡一六二八……三四四
八幡神社　〃　松山和田町四〇二三の一……三四四
八幡神社　〃　松山三一四……三四四
八幡神社　〃　津川町大字今津一一八九……三四四
八幡神社　〃　宇治町宇治一四九〇……三四五
八幡神社　〃　宇治町大字字穴田七一九……三四五
八幡神社　〃　松原町松岡二一〇一……三四五
八幡神社　〃　松原町神原一三五八……三四六
八幡神社　〃　落合町近似二二六……三四六
八幡神社　〃　玉川町玉一三八二……三四六
八幡神社　〃　落合町福地一五六四……三四六
八幡神社　〃　玉川町増原九七一……三四七
八幡神社　上房郡賀陽町大字上竹三二六八……三四七
八幡神社　〃　賀陽町大字黒土七八三……三四八
八幡神社　高梁市巨瀬町七九一八……三四八
八幡神社　〃　川面町二六五〇……三四八
八幡神社　高梁市巨瀬町四八七五……三四八
八幡神社　上房郡北房町大字下呰部一〇七一……三四九
八幡神社　高梁市中井町津々三五二〇……三四九
八幡神社　上房郡北房町大字五名一八七六……三五〇
東豊野神社　〃　賀陽町大字豊野四一〇一……三五〇
広峰神社　〃　有漢町大字有漢二一八七……三五〇
御鋒神社　高梁市高倉町飯部三四九三……三五一
御嶽神社　〃　中井町津々一四九六……三五一
御嶽神社　〃　中井町西方五〇二二……三五一
八重籬神社　〃　内山下一二〇……三五二
矢倉神社　上房郡賀陽町大字納地二〇四三……三五二
大和神社　〃　賀陽町大字宮地四四五……三五二
吉川八幡宮　〃　賀陽町吉川三九三二……三五三
龍神社　高梁市松山五九四五……三五三
龍神社　〃　高倉町大瀬八長二七一二……三五三
若松神社　〃　宇治町宇治一八一二……三五三
海神社　〃　高倉町田井三四八……三五四

阿口神社（あくち）　旧村社

上房郡北房町大字阿口六〇四



主祭神　高龗神　金山彦命　大山祇命　倉稲魂命
例祭　十月十五日　**境内地**　二六〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　社務所
休憩所

摂末社　若宮社　祖霊社
氏子数　一〇九戸　**崇敬者数**　四四〇人
宮司　長田成徳
責任役員　吉本貞夫　黒田芳夫　延吉亮市　川上留治
宝物　鏡一面　長刀一振
特殊神事　雨乞神事
由緒沿革　本神社は天正十八年六月十五日の創建。当時は鉱山中心の村として栄えた。明治四十三年四月二十五日、各集落にあった無格社十一社を合祀して、竜王山頂に阿口神社を創建した。古来、旱天時に竜王山頂で雨乞神事が度々行われ、その霊験は著しいものがあった。

阿部神社（あべ）　旧村社

高梁市落合町阿部一八五八

主祭神　豊玉姫命　相殿　菅原神　大明神
大山祇神
例祭　十月十日　**境内地**　八三九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　天神社　秋葉神社　山神社　天神社　金刀比羅神社　天神社　荒神社　御鉾神社　大蔵神社　山神社　木野山神社　飛地神社　十一社
氏子数　二三一戸　**崇敬者数**　二三二人
宮司　西林春雄
責任役員　渡辺敏朗　金田茂男　森下健一



由緒沿革　勧請年月日は不詳。徳川時代から阿部村内の総鎮守の神として村民の崇敬が厚い。

天津神社（あまつ）　旧村社

高梁市松原町大津寄一〇八四

主祭神　天之御中主神　高皇産霊神　神皇産霊神
例祭　十一月二十三日
境内地　一九〇坪

主要建物 本殿　幣殿　拝殿　随身門　御輿蔵
摂末社 龍神社　清成神社
氏子数 三八戸
宮　司 山川　庚
責任役員 坂田一二　赤木忠安　山下嗣郎
由緒沿革 宝暦九年五月十五日の創建。口碑では人皇初代の頃勧請したという。崇神天皇の六十六年二月奉斎祭の勅を受けた神社だといっている。弘安四年二月、北条時宗から異国退散の祈願をうけた神社だと伝えられている。社殿は数度再建されたもので、現建物は明治十五年の再建である。明治十五年天津神社と改称した。

一宮神社（いちのみや）　旧無格社

高梁市高倉町大瀬八長二一五三

主祭神 事代主神
例　祭 七月一三日　十月十日　十二月二十日
境内地 一五〇坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　〆柱
氏子数 三四戸　**崇敬者数** 一五〇人
宮　司 内田英男
責任役員 伊達静雄　伊達倉次　川上恒男
由緒沿革 勧請年月日は不詳。元禄八年、本殿及び鳥居を建立。

稲荷神社（いなり）　旧村社

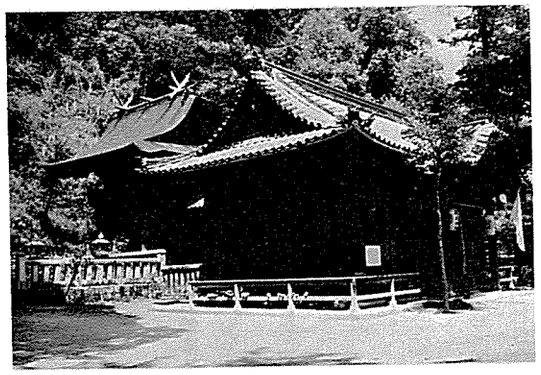
高梁市津川町八川五四六

主祭神 倉稲魂神　豊玉彦命　大己貴命　素盞嗚尊
事代主命　金山彦命
例　祭 十月十二日　**境内地** 二二六坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫
氏子数 一〇五戸
宮　司 大内元信
責任役員 藤井京一　西森　章
宝　物 神鏡三面　棟札一枚
由緒沿革 本神社は正応二年九月十二日の創建と伝えている。もと宇実相寺に鎮祀されていた。大正三年十一月二十一日、村内の十六社を合祀して、的場の地に鎮座の金刀比羅神社に移転遷座し稲荷神社と改称した。

稲荷神社（いなり）　旧無格社

高梁市落合町近似一一七

主祭神 稚産霊神　倉稲魂神　豊受姫神
例　祭 二月初午日　四月一日　六月三十日
十二月一日
境内地 九六三坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　随身門　社務所　しめ柱　神輿庫



摂末社 豊玉神社
崇敬者数 三〇、〇〇〇人
宮　司 内田英男
禰　宜 内田親秀　権禰宜　内田　優
責任役員 三村一士　西井　剛　本多聡裕
宝　物 社記一巻　棟札六枚

由緒沿革 一条天皇の寛弘元年、花山上皇が諸国を御巡覧の際、備中国川上郡阿部村に御滞在あらせられた際、山城国紀伊郡三峰に御鎮座の稲荷大神を御勧請になり、社号を正一位稲荷大明神として奉斎されたことに創る。以来松山城鎮護の神として、代々の松山城主三村、水谷、安藤、石川、板倉各氏が度々社殿を造営寄進し、祭日には参拝又代拝があり、毎年祭祀料を奉納したという。

磐裂神社（いわさく）　旧村社

高梁市松原町松岡八八四

主祭神 天之御中主神　高皇産霊神　神皇産霊神
例　祭 十一月二十三日
境内地 一三六坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　随身門　御輿倉
摂末社 鷺神社
氏子数 四六戸　**崇敬者数** 一〇人
宮　司 山川　庚
責任役員 森　貞治　西平元治　野田沢恒雄
賀多井徳治郎
由緒沿革 創建年月日は宝暦二年二月二日と伝える。神社の古文書によると、人皇十代崇神天皇の御代、既に建立してあったという。その後弘安四年二月、北条時宗から異国退散の祈願をうけた神社だとも伝えられている。明治五年妙見宮を現在の磐裂神社と改称した。

岩牟良神社（いわむら）　旧村社

上房郡賀陽町大字竹荘一〇七四

主祭神 伊弉冉尊　事解男神　速玉男命　譽田別尊

主要建物 本殿　幣殿　拝殿　随身門　御輿蔵
摂末社 龍神社　清成神社
氏子数 三八戸
宮　司 山川　庚
責任役員 坂田一二　赤木忠安　山下嗣郎
由緒沿革 宝暦九年五月十五日の創建。口碑では人皇初代の頃勧請したという。崇神天皇の六十六年二月奉斎祭の勅を受けた神社だといっている。弘安四年二月、北条時宗から異国退散の祈願をうけた神社だと伝えられている。社殿は数度再建されたもので、現建物は明治十五年の再建である。明治十五年天津神社と改称した。

一宮神社（いちのみや）　旧無格社

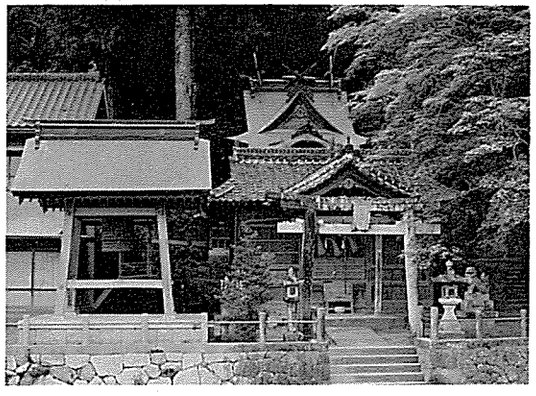
高梁市高倉町大瀬八長二一五三

主祭神 事代主神
例　祭 七月一三日　十月十日　十二月二十日
境内地 一五〇坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　〆柱
氏子数 三四戸　**崇敬者数** 一五〇人
宮　司 内田英男
責任役員 伊達静雄　伊達倉次　川上恒男
由緒沿革 勧請年月日は不詳。元禄八年、本殿及び鳥居を建立。

嚴島神社（いつく）（しま）　旧無格社

上房郡北房町大字下呰部四九

主祭神 市杵島姫命　栗島大明神
例　祭 旧六月十六日　**境内地** 一八三坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所　鐘楼
摂末社 恵比須神社　天神社　福司神社　古古呂與志神社
氏子数 一八〇戸
宮　司 田本景範
責任役員 川島正一　赤木心一　福井　磐



由緒沿革 享保二年三月、毛利氏が当山上に始めて遷座勧請したという古老の伝えがある。現在地にはその後遷座したものである。なお、奥院と伝えて同神社の社殿が当山上に現存している。その後、本殿・社殿が大破するに及んで、氏子達が神威を畏み、明治十五年改築を企画して、同二十年六月二十六日に社殿を再建した。また、昭和二十四年から四十八年に亘り、本殿拝殿等を修理した。

井戸鐘乳穴神社（いどかなちあな）　旧村社

上房郡北房町大字上水田八四二五

主祭神 大名持命　誉田別尊　素盞嗚尊
例　祭 十一月三日　**境内地** 五八八坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　随身門　神輿庫
摂末社 荒神社
氏子数 二六戸　**崇敬者数** 一〇〇人
宮　司 豊田正発
責任役員 森岡輝茂　北川清嗣　峠秀五郎
特殊神事 秋の例祭に当屋祭
由緒沿革 本神社は延喜式内社（備中十八社の一）として、古くから崇敬が篤く、氏子地域内に鐘乳穴という洞穴があり、広く世人の知るところである。当神社には古くから例祭に当屋祭りがあり、現在も古代の形式にのっとり、例祭当日一日だけ当屋と神社とに於いて行っている。

仲哀天皇　神功皇后　他十八柱
例　祭　十月十七日　**境内地**　一、三五一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神門　仮殿　社務所
神輿庫
摂末社　保食神社　西波神社　高龗神社　恵美須神社　荒神社　和霊神社
氏子数　三〇〇戸　**崇敬者数**　二〇〇人
宮　司　柾田千秋
責任役員　仁熊八郎　三井福文　横田数夫
宝　物　御神鏡
由緒沿革　元正天皇の霊亀元年九月、紀伊国牟婁郡鎮座の熊野三所権現を（多気郷の氏神として）勧請した。後世、多気郷十五社の首神として多気荘総社権現宮と称して国守、庶民の崇敬が厚く、松山城主累代の祈願所として奉幣があった。文久年間炎上した。明治初年岩牟良（斎邑）神社と改めた。俗に竹荘総社宮という。明治四十三年十月から翌年三月迄に村社・無格社三十八社を合祀した。神饌幣帛供進神社に指定された。

岩山神社　旧郷社

高梁市巨瀬町三三三五

主祭神　神武天皇　玉依姫命　日本武尊　吉備津彦命　大矢田宿祢
例　祭　十月十日　**境内地**　三二七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神輿庫
社務所
摂末社　荒神社　若宮神社
氏子数　六五戸　**崇敬者数**　六〇人
宮　司　山川則英
責任役員　吉藤恒一　藤森一男
宝　物　棟札　高麗狗　神鏡
由緒沿革　和銅元年（七〇八年）の創建という。国守が厚く崇敬し、天正十年十月、時の領主は社殿の頽廃を痛く憂慮して再建した。備中松山城主水谷左京亮勝宗を初め代々の城主から社殿造営に当って寄進、また は助成があった。明治四十年五月二十二日に村社。昭和四年三月十一日郷社に列せられた。

大己貴神社

高梁市高倉町田井四〇七一

主祭神　大己貴命
例　祭　十一月二十一日　**境内地**　一〇七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
氏子数　二〇戸　**崇敬者数**　一〇人
宮　司　鈴井博貫
責任役員　鈴井　貢　山下　操　小林　進　渡辺一郎
由緒沿革　古書に観応三壬辰十一月建立とある。初め日吉権現と称したが、明治維新の神仏分離に際し、権現呼称の禁止により大己貴神社と改めた。古書に延宝四丙辰正月、柱立棟上御遷宮二月二十七日とある。石鳥居には文化元年の彫刻がある。天明五年再建立の棟札がある。享保六年丑壬七月、寺社御検地により確認された。昭和三十六年十一月改築遷宮を行った。

大物主神社　旧無格社

高梁市落合町近似一〇四四

主祭神　大山祇神　大物主神
例　祭　七月十五日　十月十五日
境内地　二九五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　五〇戸　**崇敬者数**　二〇〇人
宮　司　内田英男
責任役員　西井　剛　三村一士　本多聡裕
宝　物　石灯籠一対（市指定文化財）
手水鉢一（市指定文化財）
由緒沿革　勧請年月日は不詳。松山城主水谷出羽守勝美が元禄六年社殿を寄進した。同年石灯籠一対および水鉢をも寄進している。

大和山神社　旧村社

上房郡賀陽町大字納地一三〇

主祭神　大山祇命　猿田彦命　倉稲魂命　素盞嗚尊

大産霊神
例　祭　十月二十三日　**境内地**　三九九・六八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神輿庫
社務所
摂末社　高龗神社　稲荷神社
氏子数　五〇戸
宮　司　田村瑞神
責任役員　歳原義男　大木精一　大木　勉　大木松男
宝　物　神体四外
由緒沿革　大和山城主土肥頼母が長禄二年九月十八日に伊予国大三島大明神を大和山頂に勧請した。大永元年九月十八日に現在の社地に社殿を築いて遷宮し、以来里人の崇敬が厚く今日に及んでいる。大和山大明神に御供田としてひしゃ田、しりや田を寄進したのは城主土肥頼秀で、永禄五年六月のことである。又、木下肥後守が元文五年、銀六百疋を奉納した願文がある。

御崎神社　旧無格社

上房郡北房町大字上水田一九八三

主祭神　建速須佐之男命
例　祭　十月九日　**境内地**　三九二・三七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫
氏子数　二〇戸　**崇敬者数**　八〇人
宮　司　豊田正発
責任役員　城崎清志

由緒沿革　本神社は天平六年九月九日の創建と伝えられ、水田郷四社の一社である。氏子は小松・荒木・宮高・熊宮の四部落で、疫病退散の御神徳が高く崇敬が厚い。

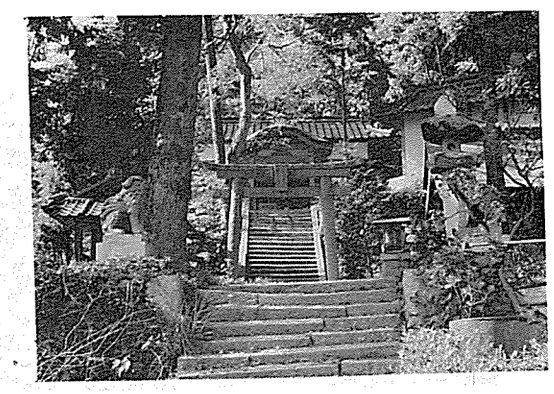
御崎神社　旧村社

高梁市巨瀬町五〇六八

主祭神　天照皇大神　大己貴命　素盞嗚尊　天兒屋根命　武甕槌命　経津主命　八衢彦神
例　祭　十月十二日　**境内地**　三〇五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　社務所
神輿庫
摂末社　稲荷神社
氏子数　一五四戸
宮　司　大内元信　**禰宜**　大内正信
責任役員　河原粂八　小野勝人
宝　物　神像七　神鏡五　棟札五　狛犬一対（重要文化財指定）
由緒沿革　本神社は延喜年間に津川町字横原に奉祀され、承久年間に現在の岩村に奉斎したという。松山城主を始め、一般の敬神が厚かった。寛文元年再建。寛政元年再建。文化八年、天保六年に屋根葺替。昭和十一年に社務所を建築した。

御前神社　旧村社

高梁市落合町阿部七六



主祭神　猿田彦命
例　祭　十月十日　**境内地**　二〇〇・一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫
氏子数　五八戸　**崇敬者数**　八、〇八五人

宮　司　西林春雄
責任役員　上原芳夫　松前辰男　国田一平
由緒沿革　徳川時代から村民の崇敬が厚く、例祭における盛大な御神幸の御儀が今日まで伝わっている。

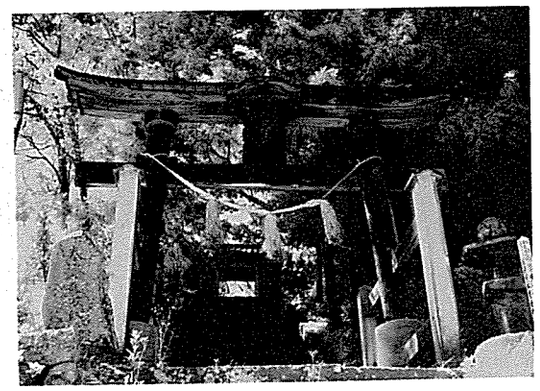
御前神社　旧郷社

高梁市御前町二三三一

主祭神　天照皇大神　猿田彦神　天児屋根命　武甕槌命　応神天皇　建御名方命
例　祭　十月十三日　**境内地**　一、九二五・一四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　社務所　絵馬殿　神輿庫　随神舎
摂末社　日吉神社　須賀神社
氏子数　四〇〇戸
崇敬者数　八〇人
宮　司　安達上位
責任役員　荒木定次郎　仲田勝二　佐々木鉱一郎
由緒沿革　第四十九代光仁天皇の宝亀五年八月、吉備真備公が賀陽郡二位山岩屋から備中松山泉岡に遷座したのが本神社の創建である。尉後秋葉三郎重信が松山城主となり、一国一城の総鎮守として崇敬した。元和三年九月池田長幸が再建。天保十年二月火災により炎上、弘化二年板倉勝職が再建。慶応二年に類焼、明治十四年再建した。昭和二十一年二月郷社に列せられた。

御前神社　旧村社

高梁市宇治遠原二四七〇



主祭神　天照皇大神　八幡大神　春日大神　三輪大神　諏訪大神　鹿島大神　猿田彦大神
例　祭　十一月四日　**境内地**　四二五・三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神庫
氏子数　四〇戸
宮　司　渡辺泰宏
責任役員　渡辺治太郎　藤井義夫　田村　蘩
宝　物　武神像　童子像　こま犬一対（重要文化財）
由緒沿革　旧社記には、人皇第四十三代元明天皇の御宇、和銅六年九月二十九日、伊勢国渡會郡から猿田彦大神を奉遷し、天下泰平、国土安全、諸家豊饒の神として創建したと伝える。天正八年宮殿炎上。同十一癸未年十一月十二日、安芸国の毛利公の家臣赤木右京資忠供公が社殿を造営し、天和元年酉九月二十八日、松山城主水谷左京亮勝宗公が大鳥居を再建した。当社旧記棟札によると、天下泰平、諸家安全、五穀豊饒、牛馬繁昌の守護として崇敬されている。又、享保三年四月十一日宗源宣旨により、正一位本山御前六社大明神の神階を神祇管領からうけている。

上有漢神社　旧村社

上房郡有漢町大字上有漢二五四〇の三

主祭神　大日靈貴尊　天穂日命　吉備津彦命　外十五柱
例　祭　十月十五日　**境内地**　一、一九二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　社務所　神輿庫
摂末社　稲荷神社　招魂社
氏子数　一八〇戸
宮　司　中山　剛　**禰　宜**　中山正敏
責任役員　延原次男　本城義孝　石森男二　藤井　栄
由緒沿革　本神社は大正元年十一月二十五日、字桑野の天満神社に村社四、無格社三十九を仮合祀し、大正二年十月十四日、現在地に本殿他諸建物が落成し、正遷座した。

川合神社　旧村社

上房郡賀陽町大字田土三一一三

主祭神　譽田別尊　息長帯姫命　足仲彦命　外二十一柱
例　祭　十月十八日　**境内地**　六〇四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神門　神輿庫　社務所
摂末社　護王神社　住吉神社　若宮神社
氏子数　二六〇戸　**崇敬者数**　八〇〇人
宮　司　清瀬光政
責任役員　石井千代一　清山忠一　仁澤正志　武村與一
宝　物　棟札一枚　宝鏡三面
特殊神事　夏祭・だし
由緒沿革　人皇十八代履中天皇の三年秋九月十二日、武内宿祢命の御孫葦田宿祢命が初めて居山の峰に石の宝殿を建立した。その後二十九代宣化天皇の四年十一月五日、物部荒甲大連が社を建立した。人皇四十二代文武天皇の御代、大宝元年六月十六日に再建の時、葦田宿祢命の後胤藤森大厳満照が遷宮し奉った。明治四

氏子数　三七戸　**崇敬者数**　一九〇人
宮　司　渡辺伴緒　**禰　宜**　渡辺和民
責任役員　福田大太郎　仲田謙五郎　平　茂

御前神社　旧村社

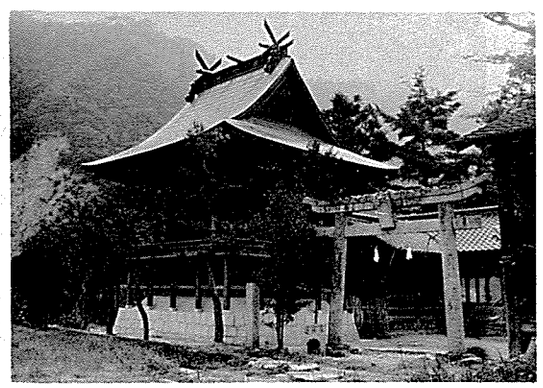
高梁市宇治町大字穴田一二〇七

主祭神　猿田毘古神　外十六柱
例　祭　十一月二十日　**境内地**　三三八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神庫
摂末社　孖嶺神社　火之御崎神社　地王神社
氏子数　九二戸
宮　司　高田芳積
責任役員　竹田利郎　内藤玉一　藤井明夫
由緒沿革　勧請は承久の年とあるだけで詳細は不明。当社の旧社殿は往古水害のため流出し、現在地に奉遷したがその後、火災にあい焼失したこともある。塩田村の大氏として崇敬している。

御前神社　旧村社

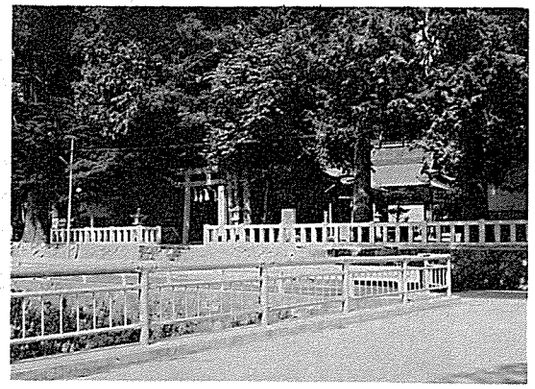
高梁市高倉町田井鍛冶四五二二

主祭神　素盞嗚尊　応神天皇
例　祭　十月十五日　**境内地**　一三二・七五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿



由緒沿革　当神社は、御前大明神と呼称し、欽明天皇の御代に勧請したという。「御前」とは素盞嗚尊の変化である。葦原醜男尊をさすのである。この神は九万八千の軍の神である。いかなる悪魔鬼神も降伏させ給い、最も先に立って追い払い給うゆえに、字訓でも御前と書くのである。旧社格は村社。明治十二年九月二十二日列格。昭和七年、同部落に鎮座していた八幡神社を合祀し、御前神社と呼称した。昭和八年五月、御前神社本殿ならびに幣殿を改築した。

十三年十一月二十五日無格社荒神社外二十二社を合祀した。



神崎神社　旧無格社

高梁市玉川町玉一四〇の二

主祭神　事代主神　大国主命　天兒屋根命
例　祭　七月十一日　十月十日
境内地　四一五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌準備室
摂末社　金刀比羅神社　御崎神社　天神社
氏子数　二四戸
宮　司　内田英男
責任役員　中村恒一　川上　茂　中村　義
由緒沿革　宝暦十年四月二日創建。由緒不明。



木野山神社　旧村社

高梁市津川町大字今津一二一一

主祭神　大山祇命　豊玉彦命　大己貴命
例　祭　十月十六日
境内地　奥宮　二、〇〇〇坪　里宮　八〇〇坪
主要建物　(奥宮)・本殿　祝詞殿　幣殿　釣屋廊下　社務所　鳥居(里宮)・本殿　祝詞殿　幣殿　拝殿　社務所　参集殿　随身門　神輿庫　鳥居(石)　社号標(石)　シメ柱
摂末社　高龗神社　闇龗神社　若宮神社
氏子数　二五〇戸　**崇敬者数**　四十五万人
宮　司　小野通孝　**禰　宜**　小野泰道
責任役員　荒木荘一　森野順一
宝　物　棟札　御神輿
由緒沿革　第六十二代村上天皇の天暦九年九月十六日創建の古社であり、北に中国山脈の連山を望み、南に高梁市街を眼下にみる景勝の地木野山山頂に奥宮がある。山麓の里宮と共に諸願に霊験が著しく、特に流行病、精神病に関して特別の信仰があり、「木野山様」と親しまれ、遠辺の人々の崇敬をあつめている。代々の領主の崇敬が厚く、殊に松山藩主板倉勝静は文久二年三月軍場飼育場守護神として勧請し、元治元年十月長州征伐に際しては武運長久祈願のため社参献幣している。明治九年附属講社が創設され、今日に至っている。

清実八幡神社　旧村社

高梁市宇治町本郷四〇六

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后　外九柱

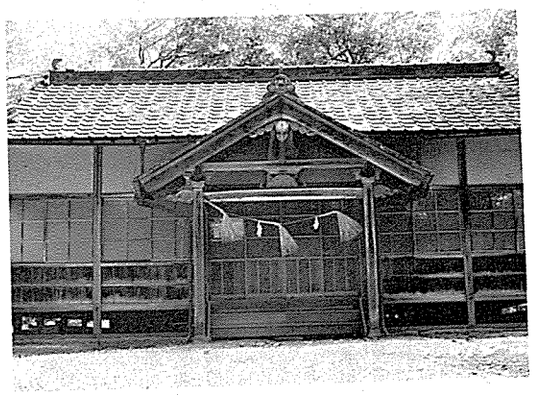
例　祭　十一月十七日　**境内地**　六二八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神輿庫
神楽殿　神饌所
摂末社　杵築神社　火みきき神社
氏子数　六〇戸　**崇敬者数**　一〇〇人
宮　司　藤本正昭
責任役員　赤木慶雄　廣金吉太郎　羽賀舛光
宝　物　棟札・(正和二年)社殿再建(寛文八年)再建　御神体　十一　神鏡　一
特殊神事　御戸開き　旧正月二日　火鎮祭神事　旧三月一日　福寿祭　夏越祭茅輪神事　旧七月二十日
由緒沿革　口碑に、奈良朝期の勧請という。また寛平四年正月、雲州杵築大社の御分霊を祀り、大元清賓宮と称した。承久年中、赤木太郎忠長なるものが当郷近在の三千七百五十石を鎌倉殿から知行所にもらって、信濃国から当郷滝谷へ居城を構えたとき、本国信濃の氏神も迎えて合祀した。大元清賓正八幡宮と称し、四ヵ郷大元郷社と称したという旧記がある。

熊野神社　旧村社

高梁市中井町西方六三九九

主祭神　伊邪那岐命　伊邪那美命
例　祭　十一月三日　**境内地**　三〇三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫
随身門

氏子数　六二戸
宮　司　高岡　浩
責任役員　西村信男　藤井　毅
宝　物　棟札　代官寄進書



由緒沿革　宝徳三年源清秀が紀州熊野神社から御分霊を拝受してこの地に奉斎した。慶長三年、時の代官佐内与助から下附金があり、社殿を整備して西方村の氏神として崇敬した。明治四十三年火災に罹り、翌四十四年、現在の本殿及び社殿を新築した。昭和十八年十一月村社に列格。神饌幣帛供進神社に指定された。

熊野神社　旧無格社

高梁市松山六五七〇

主祭神　伊邪那岐命　伊邪那美命　天照大神
例　祭　九月二十九日　**境内地**　一八五・九一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　一九戸
宮　司　丸山利雄
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳。口碑によると、建武中興の昔、足利氏の一族陶山某がこの地に到って農耕を営み、紀州熊野の御分霊を奉祀して熊野十二社権現として尊崇し、陶山氏一族の代々の氏神として崇拝して現在に至っている。安政三年十二月、領主寄進再建の棟札一枚がある。

五社神社　旧村社

高梁市松原町春木九〇七

主祭神　天照皇大神　応神天皇　天兒屋根命　建御雷命　香取大神
例　祭　十一月二十三日

境内地　二九二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　随身門
摂末社　四十疫神社
氏子数　八〇戸
宮　司　山川秀澄
責任役員　平松　儀　植田鉄五郎　小見山治男
由緒沿革　寛文年年、第百十一代後西天皇の御代に、備中松山城主水谷勝隆公によって建立され、その後元文三年同城主石川総慶により再建され、以来松山城主代々の保護も篤く、大正十二年村社に昇格し、神饌幣帛料供進神社に指定された。

御王神社（ごおう）　旧無格社

上房郡賀陽町大字上竹四七一六

主祭神　素盞嗚尊　天児屋根命　天鈿女命
例　祭　十二月二十三日
境内地　二一一（一、六八二）坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
崇敬者数　一、五〇〇人
宮　司　石井一充
責任役員　平川鶴夫　菅野文雄　小川英雄
宝　物　宝暦八年戊寅正月二十三日　御鎮座壱千年祭奉幣の金幣一
特殊神事　正月二十三日　お還りの祭（宮入祭）
由緒沿革　平城天皇の御代、大同年間に大八幡宮勧請の時、共に鎮護の神として鎮祭した神社であると伝えている。竹之荘内十五社の信仰の中心神社である。興国四年十一月十三日、麻留山へ奉遷鎮祀した。昭和十七年十月十三日神社名の復称が許された。同年十二月十七日に移転改築し、同十九年十二月二十三日遷座し奉った。

郡神社（こおり）　旧郷社

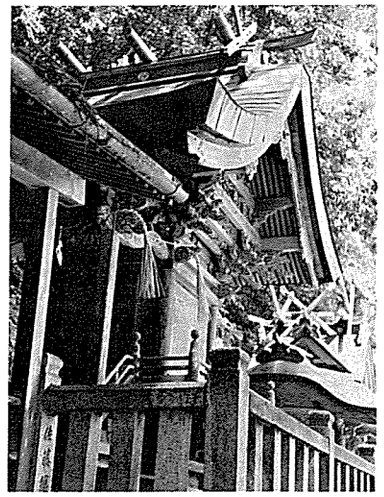
上房郡北房町大字上水田三九九

主祭神　大吉備津彦命
例　祭　十月十七日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　社務所
神輿庫
摂末社　秋葉神社　疫隅神社　桜宮
氏子数　三七〇戸
宮　司　豊田正發
崇敬者数　一、五〇〇人
責任役員　宮田犬一　佐藤篤志　山本産治郎　加戸明　川上忠雄
境内地　九一五坪
由緒沿革　古伝によると、吉備津彦命が諸所の凶徒を誅し、地方御巡幸のとき、当地に御殿を築いて駐り給うた。後に一社を遺跡に建てたのが本神社である。本神社の所在地、字小殿は御殿の転呼であるという。吉備津神社を備中国一宮と称え奉るのに対して、本神社を阿賀郡一宮と称え奉る。（明治三十三年迄阿賀郡であった。）五穀成就・疫病清除の守護神として崇敬が篤い。

金刀比羅（ことひら）神社　旧村社

上房郡北房町大字上中津井二六

主祭神　金山彦命　外十二柱
例　祭　十一月第二日曜日
境内地　五三五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫
摂末社　天満神社
氏子数　四〇〇戸
崇敬者数　二、二三一人
宮　司　高岡　浩
責任役員　中山　仁　高野　豊　貝原　武　中山萬四郎
宝　物　棟札　代官の献額



由緒沿革　延享元年十月十日下中津村陣屋の屋敷内に勧請し、天明八年十月現在地に奉遷した。社殿狭隘なため、元治元年十月九日に再建奉斎したのが現社殿である。代々の代官の尊崇が篤く、毎年寄進米一石を奉納した。秋祭は備北三大祭の一つとして、特に多数の参拝者で賑う。また境内の側壁は磯岩断層で、長さ百米、高さ十米に及び、町の重要文化財に指定されている。

三神（さん）社　旧無格社

高梁市玉川町大谷三一三七

主祭神　天之御中主神　高皇産霊神　神皇産霊神
例　祭　十月二十一日　**境内地**　六四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　一三戸
宮　司　中村信男
責任役員　川上準一　川上　寛
由緒沿革　創建年月日は不詳だが、松山城主の家臣が落人となって当地に土着し川上と改姓し、自家の鎮守としてお祭りしたのが創まり。現在の氏子は全部分家で川上姓である。

三座（さざ）神社　旧無格社

高梁市中井町西方一九四三

主祭神　伊弉諾尊　須勢理姫命　孝霊天皇
例　祭　十月十四日　**境内地**　一七四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫
摂末社　八幡神社
氏子数　四四戸
宮　司　高岡　浩
責任役員　大樫喜一　古米米次
由緒沿革　応永二年四月、中屋宮五良政光が大願主となって国土安全・五穀豊饒を祈願し、この地に奉斎した。

山神（さん）社　旧村社

高梁市玉川町下切一七二八

主祭神　大山祇命
例　祭　十月十日　**境内地**　一二〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
崇敬者数　五〇人
宮　司　中村信男
責任役員　佐藤剛平　森末善吉　森宗喜一
由緒沿革　創建年月不詳。下切鎮座山神社の御分霊を勧請したもの。

山神（さん）社　旧村社

高梁市玉川町下切二五六

主祭神　大山祇命
例　祭　十一月第二日曜日　**境内地**　一六〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　神庫
氏子数　二〇戸
宮　司　中村信男
責任役員　石田寿男　南　金一　平松孝士
由緒沿革　寛文三年八月吉日、備中松山城主の家臣、森宗森定が主命により下切の現在地に勧請した。

山神（さん）社　旧村社

高梁市玉川町増原三四八七

主祭神　大山祇命　稚産霊神　奥津比古神　奥津比

咩神

例　祭　十月二十九日　三十日

境内地　一三五坪

主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫

摂末社　荒神社

氏子数　二三戸

宮　司　中村信男

責任役員　丸山　勲　平松鉄男　長谷川林之助　丸橋豊夫

由緒沿革　創建年月日は不詳だが、口碑によれば玉川村大字増原鎮座の八幡神社の属社として奉斎されたものである。現在の本殿を除く幣殿、拝殿、上屋等は明治二十年六月新築された。

柴倉神社　旧無格社

高梁市中井町大字西方七二〇七

主祭神　天児屋根命　配祀・大山祇神　木花開耶姫命

例　祭　十一月二十三日

境内地　四九〇坪

主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所

摂末社　荒神社　御崎神社

氏子数　三七戸

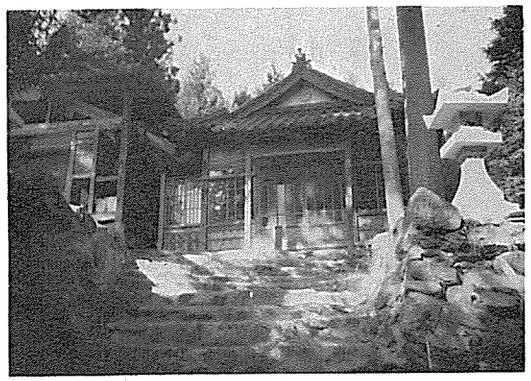
宮　司　安達上位　**禰　宜**　安達明治

崇敬者数　一五〇人

責任役員　宮脇一郎　宮脇一夫

宝　物　御神体三体

特殊神事　弓的祭　天皇祭



由緒沿革　人皇百六代、正親町天皇の御代、天正六年九月十八日に創建された。大願主は藤原右衛門である。

杉戸八幡神社　旧村社

高梁市高倉田井一三四六

主祭神　応神天皇　神功皇后　玉依姫　相殿・建御名方命　神田神　豊玉彦神　外合祀九柱

例　祭　十月十四日　**境内地**　五一三坪

主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神門　神輿庫

氏子数　五〇戸　**崇敬者数**　二〇人

宮　司　鈴井博貫　**禰　宜**　鈴井賢治

責任役員　藤村　巌　則本重夫　黒瀬重敏　新山市蔵

宝　物　棟札　神鏡　御神輿

由緒沿革　釈明天皇の御宇、三年九月豊前の国宇佐八幡宮から勧請した。松山城主水谷左京亮勝宗の時、難波源右衛門、三平彦十郎両役役人が入村し実地御取調の上、先規の通り大氏神と仰せ付けられ、宝暦九年十月、慶応四年四月の松山藩板倉家の御調べの時も確認された。昭和九年大風水害のため全建物が破潰し、昭和十四年再建された。

鈴岳神社　旧郷社

上房郡有漢町大字有漢二九五九

主祭神　吉備津彦命　天照大神　豊受大神　外八柱

例　祭　十月十九日　**境内地**　三、五〇〇坪

主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所

摂末社　三浦神社　護国神社　保食神社　稲荷神社

氏子数　三〇〇戸　**崇敬者数**　一、五〇〇人

宮　司　小原正仁

責任役員　信川秀男　佐分利堅吾

由緒沿革　創建年月日は不詳。備中松山城主水谷出羽守勝美が篤く崇敬した。大正四年十二月十九日、村社

五社を合祀した。大正九年、郷社に列格。

諏訪神社　旧村社

高梁市落合町原田一二〇五

主祭神　建御名方命　事代主神　下照姫命

例　祭　十一月二十三日

境内地　二六八坪

主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神庫

摂末社　木野山神社　金毘羅神社

氏子数　四八戸　**崇敬者数**　二四〇人

宮　司　兼森国広

責任役員　小西権右衛門　山本佐吉　仲田貞弥

宝　物　鏡一面

由緒沿革　寛弘元年、花山上皇が西国廻遊された途次、しばらく阿部見にご駐蹕、その時、信州諏訪神社から分霊を勧請、奉斎した。

諏訪神社　旧村社

上房郡有漢町上有漢六八〇二

主祭神　建御名方命　外七柱

例　祭　十月十六日　**境内地**　二四〇坪

主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所

摂末社　稲荷社

氏子数　八七戸　**崇敬者数**　二〇〇人

宮　司　井口　侑

責任役員　飯山　深　近藤　豊

由緒沿革　弘仁元年、本多善光が当地月山に神社を創り弘仁十四年に上棟式を執行して、諏訪大明神を勧請し、川閑村住民の氏神としたと伝えている。当地の飯山城攻略の際に神社が炎上したので、天正三年九月に新社殿を建立したとの記録がある。また、本神社は古事保存に努めている。

高岡神社　旧郷社

上房郡北房町大字上中津井二九九九

主祭神　大倭根子日子賦斗邇命

例　祭　十月十九日　**境内地**　一、〇五六坪

主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌舎奏楽舎　随身門　社務所　神楽殿　神輿庫

摂末社　疫神社　火之御崎神社　建勲神社　伏見稲荷神社

氏子数　一、〇五〇戸

宮　司　高岡　浩

責任役員　頭山克之　赤木清太郎

宝　物　縁起書　代官献額　寄附書　山田方谷四蔵の額面

特殊神事　宮人　神子　一ツ物参列の例祭　茅の輪くぐり



由緒沿革　延喜四年九月申子日、中井・中津井両村の村境の高丸山に勧請し、仁安三年現在地に奉遷した。中井郷の大氏神として旧四ヵ村の総鎮守である。現社殿は天明年中伊勢亀山藩主石川日向守が再建した。明治四十年村社となり、神饌幣帛供進神社に指定された。大嘗会和歌集巳の帖十一月十二日の部に、五社大明神長和五年十一月二日の部に、主基方備中高岡と題して、「はふりこが祈るもしるく高岡の社の神も君を守れる」内蔵権頭善滋朝臣為政。と詠まれている。また、本殿と樹齢八百年の大杉は町文化財に指定されている。

天神社　旧村社

高梁市落合町大字原田一七五一



主祭神　菅原道真公　少彦名命
例祭　三月十三日　七月第三日曜日　十一月二十三日
境内地　三〇八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫
摂末社　立八大龍王宮
氏子数　一四戸
宮司　中村信男
責任役員　吉岡時夫　西川素衛　吉岡満二郎　西川京一
宝物　絵馬額
由緒沿革　天神社祭一千年祭を明治三十五年二月二十五日にとり行った。また一千五十年祭を昭和二十七年三月吉日にとり行った。明治二十七年一月一日に、御本殿、拝殿を建立した。昭和二十八年三月吉日、拝殿を再築した。

天神社　旧村社

上房郡賀陽町大字上竹七六一

主祭神　天穂日命
道真
例祭　十月十日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫
社務所
摂末社　崇道神社　稲荷神社
氏子数　一三〇戸
宮司　大塚　宏
責任役員　湯上貞造　平川鶴夫　平野良夫　石井一郎
松田幹定
由緒沿革　本神社の主祭神は天穂日命で菅原道真を配祀してある。貞観三年九月二十五日上竹荘大字有津井龍王山頂に創建した。寛和二年九月五日に現在地に奉遷した。後、正暦四年九月二十五日になって菅原道真公を合祀した。松山城主代々の崇敬が篤く、社殿の修復、神田の寄進等があった。

天神社　旧村社

高梁市巨瀬町六二三

主祭神　天穂日命　菅公神
例祭　十一月十六日　**境内地**　五六三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫
摂末社　稲荷神社　荒神社
氏子数　三〇戸　**崇敬者数**　一〇〇人
宮司　大内元信
責任役員　木村宗一　森本貞雄　山下茂夫
宝物　神像一　神鏡二　棟札二
由緒沿革　古記録によれば、本神社の創建は後白河天皇の保元二年、山城国北野天満宮から勧請したと伝える。宝暦二年に社殿を再建した。現在の社殿は明治二十七年五月十二日に再建した。大正十二年四月二十二日銅板で屋根葺替。昭和四十二年、拝殿の屋根葺替を行った。

天神社　旧村社

上房郡北房町大字上水田七七六三

主祭神　天穂日命　菅原神（相殿）・級津彦命　級津姫命
例祭　十一月第一日曜日
境内地　三二七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神輿庫
摂末社　荒神社
氏子数　二〇戸　**崇敬者数**　八〇人
宮司　豊田正發
責任役員　西本尚美　西本峰雄　藤森ヒサミ　堀内一郎　西本敏夫
由緒沿革　本神社は承元元年十月十八日の創建と伝えられる。菅原神は学問の神として崇敬されている。当地は畑単作地帯ゆえに五穀豊饒の守護神として天穂日命、相殿に級津彦命、級津姫命を祭っている。古来、水田郷四社の一社である。旧井殿村の鎮守として崇敬が厚い。

天神社　旧無格社

高梁市中井町大字津々二六九五

主祭神　天穂日命
例祭　十月二十日　**境内地**　一五八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫
氏子数　一四戸
宮司　柴床雅仁
責任役員　宮本敏男　澤　学　藤本厚和
特殊神事　十三年毎奉納神楽を行う　還暦、初老祈念祭を行い記念植樹をする



由緒沿革　慶安四年、出雲国から勧請したものであり郷内六社の荒神社を勧請し、本神社で年末の行事を行う。祭事は十二月十日。その他、社日祭には氏子内の農作物の病虫害退散、六月に穂の上祈禱という祈念の祭事がある。夏越祭七月七日の直会はキュウリに塩かけ、例祭十月二十日の直会には大根の輪切に塩かけで行う。祭神が出雲国から塩を持参されるといい伝えられている。

天神社　旧村社

上房郡北房町大字宮地一七七八



主祭神　天雷命　火産霊命　速秋津彦命　速秋津姫命　外六柱

例　祭　十月二十五日　**境内地**　五八七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所
摂末社　稲荷神社　疫清神社
氏子数　二〇〇戸　**崇敬者数**　三〇〇人
宮　司　柴床雅仁　**禰　宜**　柴床博仁
責任役員　前田正志　楢崎熊雄　友平　茂
宝　物　神鏡一面
特殊神事　遷座式年（二十五年）　初宮詣・竹製の酒樽に赤飯を供える
由緒沿革　寛喜二年二月二十五日、京都北野天満宮からの勧請。本殿、拝殿の建物は寛政四年子六月のものである。大正十年八月五日、天棚戸神社外六社を合祀した。境内末社の穂荷神社は代官遠州浜松の松平侯が巡視の際、山城国稲荷神社の御分霊を奉斎したもの。疫清神社は空海が光明山遍照寺の建立と共に祀ったものといわれ、疫病退散、牛馬安全の祭祀を執行する。

天満神社　旧無格社

高梁市松原町松岡一六二八

主祭神　菅原道真公
例　祭　十一月二十四日
境内地　九〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　九七戸　**崇敬者数**　五八六人
宮　司　小川　豊
責任役員　深本　保　横店和保　東　忠雄　東仁朗
市杵島姫命　武襲槌命　猿田彦命
例　祭　十月十七日　**境内地**　一、〇〇〇坪
主要建物　本殿　祝詞殿　幣殿　随身門　社務所　神輿庫　庫舎　鳥居
摂末社　稲荷神社　金刀比羅神社　鷲神社　若宮神社　大年神社
氏子数　二七〇戸
宮　司　小野通孝　**禰　宜**　小野泰道
責任役員　森野順一　小林豊三
宝　物　棟札　御神輿
由緒沿革　人皇第五拾八代光孝天皇の仁和二年八月二十四日の創建である。一千七十余年を経過している古社で、松山城鎮守五社の一つであり、代々の領主の崇敬が篤かった。元治元年十月三日領主板倉勝静は長州征伐の際、武運長久のため社参献金を行っている。大正四年十二月十四日村内無格社六社を合祀した。昭和三年十一月九日、神饌幣帛料供進神社に指定された。

八幡神社　旧村社

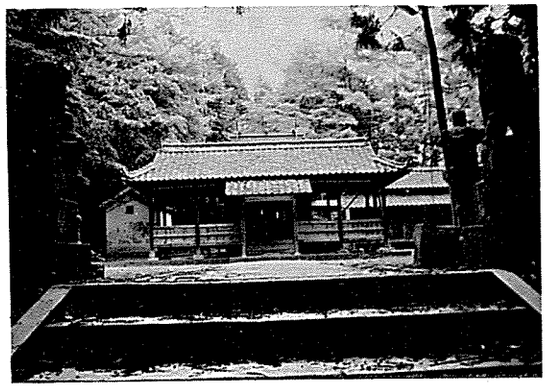
高梁市宇治町宇治一四九〇
主祭神　神功皇后　応神天皇
例　祭　十一月三日　**境内地**　三四五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫
氏子数　五〇戸
宮　司　渡辺泰宏
由緒沿革　当社は古く、天満天神宮と称し、村民の崇敬が厚い。一条天皇の御宇、正暦四年京都の北野天満宮から勧請し奉斎した。

八幡神社　旧県社

高梁市松山和田町四〇二三の一
主祭神　天照皇大神　品陀和気命　帯中日子命　息長帯比賣命　仁徳天皇　玉依比賣命　天児屋根命
例　祭　十月十三日　**境内地**　九八一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神輿庫　神饌所
摂末社　松山神社　護王神社
氏子数　一、三五〇戸
宮　司　本倉　毅
責任役員　中田弘堂　西　健次　井上政男
由緒沿革　創建清和天皇の貞観元年八月二十三日、山城国石清水八幡宮から御分霊を勧請した。貞応年間相州三浦の一族秋庭三郎重信が、承久の戦功により、備中に封ぜられ、松山城を築城し当神社をもって御城鎮守大氏正八幡宮と尊称し、社殿、境内共に宏壮に構造した。以降代々の領主が一国一城の鎮守と定め、藩費により修理を加えた。貞享三年四月十一日類焼で社殿は悉く鳥有に帰したが、時の領主水谷左京亮勝宗公が再建の工を起して翌年八月二日竣工した。これが現在の本殿である。安政五年八月板倉周防守勝静公が幣殿拝殿を造営し今日に至っている。

八幡神社　旧村社

高梁市津川町大字今津一一八九
主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后　素盞嗚尊
例　祭　十月十二日　十三日
境内地　三四八・九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　荒神社
氏子数　六〇戸　**崇敬者数**　二五〇人
宮　司　丸山利雄
責任役員　柳井康弘　小林健一　川口六三郎
由緒沿革　延暦三年山城国男山八幡宮から勧請。上房五社八幡の本宮と伝える。天正十九年、領主が初穂を奉献し、毛利家の代官天野刑部左衛門尉が材木を寄進した。延宝五年松山城主水谷左京亮勝宗が修築したとの記録がある。製作年代不詳であるが、本宮大氏八幡八幡宮と彫刻のある鳥居額面を保有している。正徳二年火災で焼失、同年十一月再建。昭和十年改築し、現在に至っている。



由緒沿革　清和天皇の御宇、貞観年中奉遷鎮守。
責任役員　西平弥三郎　信原隆夫　小坂正幸　入江作一

八幡神社　旧村社

高梁市宇治町大字穴田七一九
主祭神　神功皇后　仲哀天皇　外十二柱
例　祭　十一月十七日　**境内地**　一一二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　釣殿
氏子数　三六戸
宮　司　高田芳積
責任役員　林　嘉市　西林次郎　赤木　保
由緒沿革　元亀元年創建と伝えるが、勧請の由緒は不詳である。天文二十一年壬子三月に三村修理亮家親が造営して再興している。塩田村の大氏として尊崇されている。

八幡神社　旧村社

高梁市松原町松岡二一〇一
主祭神　応神天皇
例　祭　十一月二十三日
境内地　三九九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　御神庫
摂末社　多賀神社　鷲神社　龍王社　天王社
氏子数　九七戸　**崇敬者数**　五八六人
宮　司　小川　豊
責任役員　深本　保　横店和保　東　忠雄　東　仁朗
宝　物　成羽城主三村親宣侯寄進長刀
特殊神事　土用祈禱祭
由緒沿革　当社は西野々村割出村の氏神で、天平勝宝年間に鎮座したと伝えられている。昔から荒巻八幡宮と称し、両部習合の神社であったが、寛延三年八月以来唯一神道の御社として祭儀を行っている。なお、応

永元年、松山城主秋葉備中守元重侯から大磐若経三百巻の寄進があった。また、応延三年成羽城主三村親宣公が社殿を建立している。宝永元年再建立、明治二十年再三建立。

八幡神社 旧村社

高梁市松原町神原一三五八

主祭神 応神天皇　猿田彦神　海津見神
例祭 十一月三日　**境内地** 三一五坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　随身門　社務所　神庫
摂末社 靖国神社　金毘羅神社
氏子数 八五戸　**崇敬者数** 五一〇人
宮司 兼森国廣
責任役員 大森新一　森定正雄　佐棟久雄
宝物 鏡三面
由緒沿革 当八幡神社の創建は建久元年であり、承應四乙未九月、当国松山城主水谷勝隆公が信心のため、再三参拝し寄進せられた。

八幡神社 旧村社

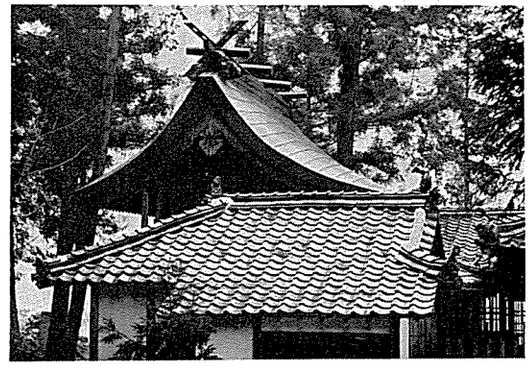
高梁市落合町近似二二六

主祭神 仲哀天皇　神功皇后　応神天皇
例祭 十月十五日　**境内地** 五一三坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　随身門　〆柱
摂末社 広嶺神社　天神社　龍王神社　加茂神社
氏子数 六八戸　**崇敬者数** 二八〇人
宮司 内田英男
責任役員 本田聡裕　西井　剛　三村一志
宝物 社記一巻　棟札三枚
由緒沿革 寛弘元年中、花山上皇が諸国を御巡覧の時、備中国川上郡阿部村に駐御せられた際、山城国男山八幡宮を奉遷せられた。本村外十ヵ村の大氏神として、大本八幡宮と称せられる。その後、備中松山城鎮護の神として歴代の城主の尊崇が厚く、社殿を寄進せられた。明治四十二年十月二日、神饌幣帛料供進神社に指定された。

八幡神社 旧村社

高梁市落合町福地一五六四

主祭神 天照皇大神　応神天皇　天児屋根命
例祭 四月二十日　十月二十五日
境内地 五四六坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　神饌殿　社務所　随身門
摂末社 諏訪神社
氏子数 七三戸　**崇敬者数** 三〇〇人
宮司 内田英男
責任役員 堀　忠明　石田春一　西丈夫



由緒沿革 創建年月日は不詳。貞享三年三月、備中松山城主水谷左京亮勝宗が再建した。

主祭神 仲哀天皇　応神天皇　神功皇后

境内地 二〇六九坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社 荒神社　田中神社　天満神社　賀茂神社
八幡神社　天津神社(三社)　護国神社
氏子数 一五八戸　**崇敬者数** 四〇人
宮司 西林春雄
責任役員 信原邦一　内田森一郎



由緒沿革 備中国成羽藩内の総氏神。川上郡成羽町大字成羽八幡神社に於て郷祭していたが、藩命により各村に分祀祭典執行方が命ぜられ、寛永三年九月二十五日現在地に勧請し、福地村総氏神として祭祀を行い、現在に至っている。

八幡神社 旧村社

高梁市玉川町増原九七一

主祭神 応神天皇　仲哀天皇　神功皇后　天御中主神　稚産霊神　奥津比古神　奥津比咩神
例祭 十月二十七日　**境内地** 一六三坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　随身門　神庫　社務所
摂末社 水分神社　日少宮　下坂神社　荒神社
氏子数 五〇戸　**崇敬者数** 三〇〇人
宮司 中村信男
責任役員 栗本　實　西林雅由　竹波　斉
由緒沿革 口碑によれば土御門天皇の時、源氏の落武者が武運を祈ったものとも伝えているが、仁孝天皇文政四年現今の社殿を再建し、弓矢八幡神を八幡神社と称するようになった。武人が出陣する時、本社の神明に祈願すれば凱戦は必定であるといい伝えられている。氏子も弓矢八幡宮と称えている。現在の社殿は宝永二年四月の再建という。

八幡神社 旧郷社

上房郡賀陽町大字上竹三二六八



主祭神 応神天皇　天児屋根命　経津主命　大国主命　素盞嗚尊　外十二神
例祭 十月十日　**境内地** 三、〇〇〇坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　社務所　神饌所　神輿庫　随身門

摂末社　若宮神社　武内神社　淡島神社
氏子数　二〇〇戸　**崇敬者数**　一、五〇〇人
宮　司　石井紀之
責任役員　菅野　忠　冨山栄蔵　菅野　正　森　保男
宝　物　神像三体　阿弥陀如来　多門天　増長天
狛犬一対
特殊神事　ハツケあげ神事
由緒沿革　平城天皇の御宇、大同元年八月十五日に岡住山に奉祀し、神領地として正面田畑九町歩、山林二町四反歩を賜わった。世々各領主の崇敬厚く、神饌の奉納があった。神領地は天正二年織田信長に取上げられ、その後は各領主が大八幡神田引きと唱え、貢米中から神供米を下げられ、維新まで下賜された。当神社は安産、交通安全、職業繁栄の神として信仰がある。

八幡神社　旧村社

上房郡賀陽町大字黒土七八三

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后　外四柱
例　祭　十月十日　**境内地**　三、九三六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神門　長床　社務所
神輿庫
摂末社　若宮社　疫神社
氏子数　粒田千秋
責任役員　三村元臣　伊達義蔵　文谷忠吾
由緒沿革　本神社は天応元年本村中尾に奉祀したもので、長承二年に字前に奉祀し今宮八幡宮と称した。明暦元年松山城主水谷氏の祈願所となった。安永九年石川日向守が本願主となり現在の本殿を改築した。明治四十三年本社の摂社を合祀した。大正六年十一月十二日に神饌幣帛料供進神社に指定された。

八幡神社　旧村社

高梁市巨瀬町七九一八

主祭神　神功皇后　応神天皇　神功皇后　石凝姥女命　市杵島姫命
例　祭　十月十八日　**境内地**　四三〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神輿庫　神務所
摂末社　龍神社　荒神社　稲荷神社
氏子数　九五戸
宮　司　山川則英
責任役員　上森杉松　水野浪太郎
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳だが、郡内五社八幡の一つとして地方民の信仰が特に深く、永徳辛酉年九月二十六日再建立正遷宮。同年十一月五日、火難で焼失。永徳二年壬戌十一月十五日再建立。同三年癸亥十一月二日拝殿を建立。その後、造営の手が加わっているが、年月は不詳である。

八幡神社　旧村社

高梁市巨瀬町四八七五

主祭神　仲哀天皇　気長足姫命　誉田別尊　天照大

八幡神社　旧郷社

高梁市川面町二六五〇

主祭神　神功皇后　応神天皇　湍津姫命　田心姫命　市杵島姫命
例　祭　十月十七日　**境内地**　八二三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神庫
摂末社　稲荷神社　荒神社　十石神
氏子数　四〇〇戸
宮　司　山川則英
責任役員　藤井　豪　小林一郎
宝　物　神像二　棟札　神鏡
由緒沿革　文武天皇の慶雲年中、宗像大神三女神を筑前国宗像から勧請した。清和天皇の貞観年中、息長帯姫品陀和気命を山城国男山から勧請した。明治五年村社同十五年十月五日郷社に列格。大正年中、村内小社四十二社を合祀した。昔は巨瀬の庄の大元八幡宮と呼ばれて松山城主が世々保護を加えたので大いに栄え、城主を始め一般の崇敬が厚かった。

日霎貴尊　玉依姫命　瓢速日命
例　祭　十月十八日　**境内地**　四二六坪
主要建物　本殿　祝詞殿　幣殿　拝殿　随身門　社務所　神輿庫
摂末社　稲荷神社　荒神社
氏子数　一八五戸
宮　司　大内与吉
責任役員　村田金二　大森善一　松森正一
由緒沿革　本神社の創建年月日は清和天皇の御宇、貞観六年甲申八月二十八日、山城国男山から勧請したと伝える。

八幡神社　旧村社

上房郡北房町大字下呰部一〇七一

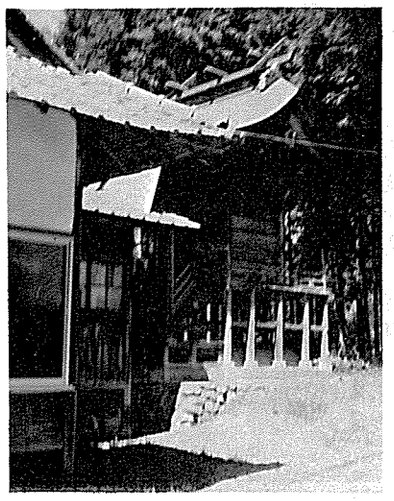
主祭神　譽田別尊
例　祭　十月八日　**境内地**　三一〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神輿庫　社務所　鐘楼
摂末社　武内神社　善覚神社　海神社　招魂社
氏子数　四〇〇戸
宮　司　田本景範　**禰　宜**　田本景道
責任役員　岩城義雄　隻知　肇　阿比倉　清
特殊神事　立会祭
由緒沿革　承応二年、山城の国男山石清水八幡宮の誉田別尊を勧請奉祀している。大正三年七月、本殿向拝修築、幣殿、拝殿改築。大正九年一月、本殿屋根葺替。昭和七年六月鐘楼改築。昭和十二年二月、社務所改築。昭和二十四年十月、本殿屋根葺替等を行った。



八幡神社　旧村社

高梁市中井町津々三五二〇

主祭神　譽田別尊
例　祭　十一月二十二日
境内地　一四七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫
摂末社　荒神社　美保神社　八天宮
氏子数　二三戸
宮　司　高岡　浩
責任役員　藤森　貢　宮田　熟
宝　物　棟札



由緒沿革　永正十五年佐井田城主植木秀長が守護神として当地高宮に勧請したと伝えられ、高宮八幡宮ともいう。寛政十二年二月、横内の住人の力士伊賀守兵院が大願主となって現在地に奉遷奉斎した。

八幡神社　旧村社

上房郡北房町大字五名一八七六

主祭神　譽田別尊　大己貴命　大山祇命　猿田彦命
大物主命　外五柱
例　祭　十月十日
境内地　一、〇三九・二二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　社務所　神輿庫　鐘楼
摂末社　武内神社　若宮　若桜神社
氏子数　一〇五戸　**崇敬者数**　五〇〇人
宮　司　豊田正發
責任役員　大平久男　奥田　清　高下貞夫　蜂谷鉄夫
中島一男
由緒沿革　本神社は延長四年六月十五日、旧大庄屋太田冠者甚秀の創建と伝えている。天正五年再建され、水田郷四社の一社として五名を氏子とし、疫病消除・寿命長久・安産の御神徳が顕著である。大正十一年、大己貴命外七柱を合祀し、五穀成就の守護神として崇敬されている。往時の神幸祭には子供が弓鉄砲を持って供奉した。

東豊野神社　旧村社

上房郡賀陽町大字豊野四一〇一

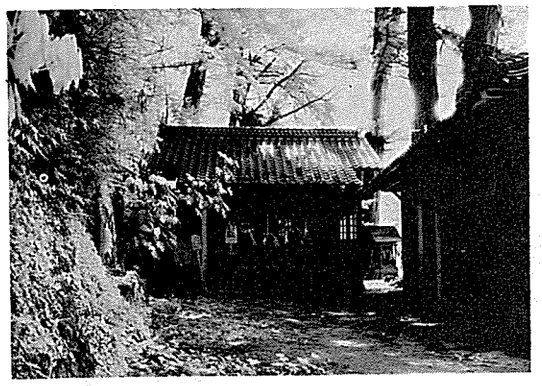


主祭神　吉備武彦命　伊邪那岐命　伊邪那美命
仲哀天皇　神功皇后　豊玉彦命　外九柱
例　祭　十月十七日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫
摂末社　荒神社　稲荷神社　淡島神社
氏子数　一四〇戸
宮　司　中山　剛　**禰　宜**　中山正敏
責任役員　東　人美　葛野定一　蛭田禎男
社務所
摂末社　金刀比羅宮　善覚社
氏子数　一五〇戸
宮　司　田村瑞神
責任役員　日田武雄　藤井常五郎　吉田久一　藤井明雄　藤井重雄　山中　通
宝　物　神体八　神肥十八　棟札二
特殊神事　竹荘十五社集合祭
由緒沿革　太古吉備津彦命を勧請し、また天慶年中備中国吉備津神社の御分霊を勧請した。これが村社御前神社中山神社の起源となり、村社天満神社、高龍神社は何れも寛弘年中に勧請奉祀された。大正三年七月四日、四社外無格社二十四社を現在地に合祀移転し、社号を東豊野神社と改称した。大正六年神幣帛料供進神社に指定され、また、社殿は賀陽町重要文化財指定となった。

広峰神社　旧無格社

上房郡有漢町大字有漢二一八七

主祭神　素盞嗚男神
例　祭　十一月十五日　**境内地**　四三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫
摂末社　荒神社　稲荷神社　淡島神社
氏子数　一四〇戸
宮　司　中山　剛　**禰　宜**　中山正敏
責任役員　東　人美　葛野定一　蛭田禎男



主祭神　岩裂神　根裂神　磐筒之男命　経津主神
外三柱

由緒沿革　享和二年一月、播磨国飾磨郡広峰山広峰神社の御分霊を勧請した。

御鋒神社　旧無格社

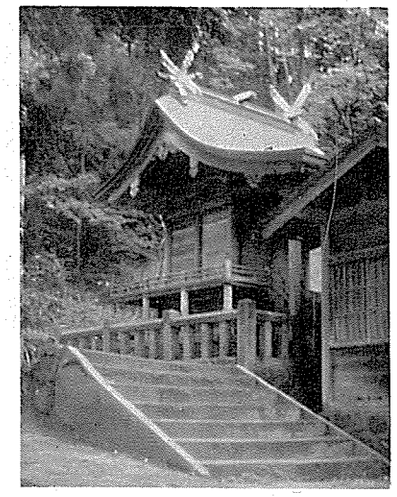
高梁市高倉町飯部三四九三

例　祭　十一月十九日　**境内地**　二四二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神庫
摂末社　荒神社
氏子数　一〇〇戸
宮　司　渡辺泰宏
責任役員　藤井　寿　下村幸一　三村　操
天然記念物　大杉一本(市天然記念物)
特殊神事　二月春祭　餅まき行事
由緒沿革　弘仁元年九月二十六日の勧請であり、貞享元年甲子卯月吉祥日、松山城主水谷左京亮勝宗公が本殿を造営寄進せられた神社である。御祭神は岩裂神、根裂神、磐筒之男神、経津主神である。明治四十三年十月四日、本社と大字飯部字土橋の天神社の御祭神、天御中主神、高皇産霊神、神皇産霊神を合祀することの許可をうけ、同四十四年九月十日合祀遷座を行った。

御嶽神社　旧村社

高梁市中井町津々一四九六

主祭神　日本武尊
例　祭　十月十日　**境内地**　三二四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌舎　神輿庫
摂末社　地神社
氏子数　四二戸
宮　司　高岡　浩
責任役員　中川喜吉　中村久夫
宝　物　棟札二枚



由緒沿革　文化八年五月十二日、備中松山藩主板倉周防守源勝職から津々村の鎮守の神として御神体を下賜せられ、時の里庄、庄卯三郎真興が願主となって津々村の五穀豊饒を祈って奉斎した。藩守から御普料三石五斗を下附された。天保十二年八月、現在地に奉遷した。昭和十七年三月村社に列格、神饌幣帛料供進神社に指定された。

御嶽神社　旧村社

高梁市中井町西方五〇二一

主祭神　日本武尊
例　祭　十月十二日　**境内地**　五三七坪

主要建物 本殿　幣殿　拝殿
氏子数 一二〇戸
宮　司 高岡　浩
責任役員 山根高志　遠藤杢次
宝　物 棟札　山田方谷書奉納額
由緒沿革 文政十三年十一月二日、備中松山藩主板倉阿波守が国土安穏・五穀豊饒祈願のため、里庄藤井団七に御神体を下賜せられ西方村の鎮守としてこの地に奉斎させた。御普料として三石五斗を下附せられた。天保十三年に本殿、拝殿を再築。昭和十六年八月八日村社に列格、同十七年四月一日神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

八重籬神社　旧県社

高梁市内山下一二〇

主祭神 板倉伊賀守勝重　同周防守重宗
例　祭 四月二十八日　二十九日
境内地 五一一・六坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　随身門　神輿庫　宝庫　社務所
摂末社 熊田神社　稲荷神社　大国主神社
氏子数 一、五〇〇戸　**崇敬者数** 五、三〇〇人
宮　司 丸山利雄
責任役員 柳井二三雄　原田好章　平見軍次
宝　物 旧松山城宝剣　藤の胴太鼓
由緒沿革 寛政五年、松山城主板倉周防守勝政の創建。板倉氏の始祖伊賀守勝重を祀る。神祇道管領長吉田良倶朝臣が「宗源の神宣」を以って八重籬霊社とし、特に大権現の尊号を奉った。由来、備中松山五万石藩領全域を崇敬区とし、その維持は専ら藩財政でまかなわれた。明治十八年二代公重宗を合祀すると共に郷社に、大正六年県社に昇格した。因に祭神勝重、重宗は父子相継ぎ京都所司代に任ぜられ、在任五十有余年の長きに亘り、清廉高潔で、衆望篤く治績顕著であった。

矢倉神社　旧村社

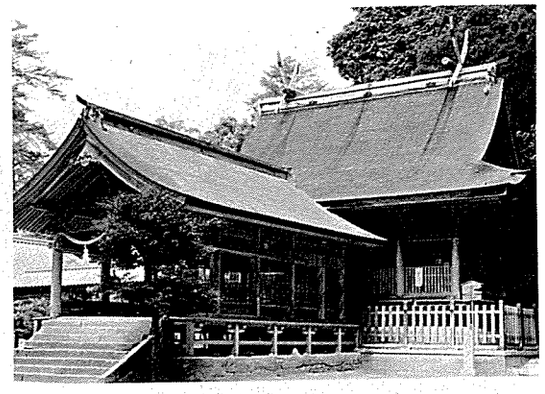
上房郡賀陽町大字納地二〇四三

主祭神 大山咋命　経津主命　少彦名命　王依姫命
例　祭 十月二十三日
境内地 四九八・七五坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所
摂末社 若宮　島神社
氏子数 五〇戸
宮　司 石井一充
責任役員 石井彦一　宮原　斉　大神政吉
宝　物 棟札三枚　古書三通
由緒沿革 元久二年、矢倉畦城主竹井正廣が播州室津の室野明神を同年九月十七日に、矢倉城内に勧請した。建永元年四月、矢倉畦に社地をトして社殿を築き遷宮した。元禄十五年と文化七年に再造営したが、明治三十年火災に罹ったので四十二年一月造営遷宮した。明治四十五年五月神饌幣帛供進神社に指定せられた。大正三年十二月九日、石砂神社、島之神社、玉依姫神社を合祀した。

大和神社　旧村社

上房郡賀陽町大字宮地四四五

主祭神 応神天皇　神功皇后　多岐理比売命　多岐津比賣命　市杵島比売命　他十二柱
例　祭 十月二十八日
境内地 七七七坪(二、〇〇〇坪)
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫　随身門
摂末社 祖霊社
氏子数 五五〇戸　**崇敬者数** 三、五〇〇人
宮　司 石井紀之　**禰　宜** 横田　豊
責任役員 植本嘉一　木村覚一　梅野　剛　溝原　勇　河原一忠　小倉秀雄　秋山正一　小西光二
由緒沿革 建久年間(一一九〇年―一一九八年)の創建と伝える。明治四十三年四月十四日大和村大字宮地字宮谷鎮座八幡神社に同村大字宮地字東ヶ市鎮座御前神社、同村大字西字湯原鎮座、同村大字岨谷字岩山、岩山神社と同村内無格社三十一社を合祀して大和神社と改称し、一村一社とした。



吉川八幡宮　旧県社

上房郡賀陽町吉川三九三一

主祭神 仲哀天皇　神功皇后　応神天皇
例　祭 十月二十六日　**境内地** 一、五〇〇坪
主要建物 本殿(国宝)　幣殿　拝殿　神饌所　神輿庫　社務所(書院造り)
摂末社 稲荷神社　祖霊社
氏子数 三五〇戸　**崇敬者数** 三、五〇〇人
宮　司 石井紀之　**禰　宜** 横田　豊
責任役員 井上行正　新池人士　山本富男　森田三千年　難波盛雄　難波祐三郎
宝　物 神輿　その他　**特殊神事** 当番祭
由緒沿革 約一千年前嵯峨天皇の弘仁年間に社殿が創建せられた。醍醐天皇の延喜年間に至って八幡宮と唱えた。その後山城国石清水八幡宮の神領地となり、続いて別宮に進んだ。堀河天皇の時に京都の名楽手元正が当地に下向して楽を奏している。応永二年八月、社殿を再造営した。足利将軍や豊太閤の尊崇が厚かった。慶長年間は備前虎倉城に属し、寛永年間には木下淡路守の所領となった。享和元年には将軍家の直轄地として倉敷代官の支配地となり、文政十年には一橋家の所領となっている。近郷にその比類のない神社である。

龍神社　旧無格社

高梁市松山五九四五

主祭神 豊玉彦命
例　祭 九月二十九日　**境内地** 九五・一二坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿
氏子数 一七戸
宮　司 丸山利雄
由緒沿革 本神社の創建は元禄十年十二月、領主が材木を寄進して建立した。天明六年に拝殿を建立、降って弘化三年に板倉周防守が金子百疋寄進して修築した。

龍神社　旧無格社

高梁市高倉町大瀬八長二七一二

主祭神 海津見神
例　祭 七月十七日　十月十七日
境内地 一四一坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　〆柱
氏子数 二一戸　**崇敬者数** 九五人
宮　司 内田英男
責任役員 行藤　茂　大森潤一　上田　満
由緒沿革 勧請年月日は不詳。備中国松山城主水谷出羽守が延宝八年に社殿を寄進した。昭和十二年、社殿腐朽のため改築した。

若松神社　旧村社

高梁市宇治町宇治一八一二

主祭神 素盞嗚尊　稲田姫命
例　祭 十一月十六日　**境内地** 三八八・五八坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　随身門　社務所

海神社（わたつみ）　旧村社

高梁市高倉町田井三四八

由緒沿革　創建年月日は天慶元年六月十三日。明治十四年九月二四日村社に列格。元龍王宮と称し、高倉村大字田井杉戸八幡神社の摂社であった。

氏子数　四〇戸　　**崇敬者数**　一〇〇人

宮　司　渡辺泰宏

責任役員　小川豊次郎　小坂包夫　川崎　甫　仲田俊郎



由緒沿革　第五十六代清和天皇の貞観十二年六月十四日、山城国愛宕郡から御鎮守のため、穴田若松に奉遷した。

主祭神　豊玉姫神

例　祭　十一月二十二日

境内地　二六一・二坪

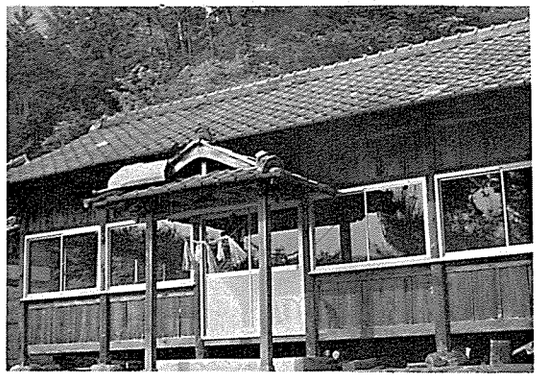
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神輿庫

氏子数　二五戸　　**崇敬者数**　一三〇人

宮　司　渡辺伴緒

責任役員　藤田勝平　新山　寿　小野重雄　磯村正蔵

由緒沿革



尊・命

神や上代の天皇・皇族などに対する尊称である。神葬祭では死者の名にも添える。日本書紀の註によると、特に貴い方には「尊」を用い、その他は「命」を使っている。古事記では「命」を用い、「尊」は使用していない。しかし神に対しては両書ともにミコトのほか「神」という尊称も併用している。國学者鈴木重胤は「尊」と「命」の区別について、言葉や行為で自分自身をあらわにする神が「尊」であり、皇祖・天神の命令を奉じて行動する神が「命」であるとしている。

初穂（はつほ）

収穫に先立ち稲の穂の熟したのを抜いて神に献じ感謝すること。早穂・最華・先穂とも書き、上分ともいう。稲穂を茎のついたまま奉り、神垣に懸けるのを懸税（かけぢから）という。公には悠紀・主基両田の抜穂使の儀式から、民間での穂掛け行事にいたるまで広くおこなわれている。稲に限らず、雑穀・野菜などから海の物にいたるすべての収穫物・獲物におよんでいる。いわゆる初物を総称することもある。

古神道

記紀、祝詞、万葉集などの古典に現われた儒教・仏教の渡来以前又は習合以前の古代人の信仰をさす。近世の国学において、特に本居宣長がこれを「古道」と称え、国学の基本原理とし、平田篤胤がこれを継承発展させ、所謂復古神道を完成した。古神道では、善悪美醜を問わず何らかの威力あるものを神として畏敬し、あらゆる事象を顕事・幽事という相即する世界観で解釈し、人間の死も顕界より幽界への霊魂の移行と考える。特に万物を生成する産霊神および皇祖神に対する信仰が強調され、清明心をもって現人神としての天皇に随順することを理想とする。明治維新の「神武復古」「祭政一致」の指導精神には、「古神道」の再生がみられるが、のち西欧化の風潮の収まった明治末期から筧克彦、紀平正美らによって体系化され、大正、昭和初期に各種の日本精神論に受け継がれた。筧克彦によると、古神道とは「神代諸神が事実によって示され、天照大神によって確定せられ、神武天皇を透して此の世に実現せられた生活規範の普遍的理想で、神と人と、人と人との相互の合一、或は合一の形式をその内容として、普遍的実行・信仰とはなれないものをいう」と説いている。

贖物（あがもの）

罪けがれを祓い清める時に、その代償として差し出して罪を贖う物品をいう。法制の確立する以前は、罪もけがれも祓によって消滅すると考えていた。祓の時、けがれは祓によって、罪は刑によって解消すると考えられるようになった。祓の時に、けがれの代償として出すものが「神祇式」に御贖としてあげてある。人間の罪けがれを移して捨てる人形は、この贖物と深い関係がある。

雨神（あめのかみ）

雨を司り給う神。普通は淤加美神を指し、高龗神、闇龗神とがある。神代紀に「伊弉諾尊剣を抜いて軻遇突智を斬って三段とした。その一段は雷神となり、一段は大山祇神となり、一段は高龗となる。」同一書に「復剣の頭より垂る血が、激り越えて神となる。号闇龗。」高オカミは山の上の竜神、闇は鞍(凹んだ所)クラオカミは谷の竜神で、旧官弊大社丹生川上神社、旧官幣中社貴布祢神社の祭神として奉斎されている。分霊は祈雨神として全国に祀られている。罔象女神（みつはのめのかみ）・山口神・水分（みくまり）神も雨神と称せられている。

縁日（えんにち）

神社の創設された日、祭神の降臨、示現などに関係ある日のこと。この日に参詣すれば、特別な功徳があると考えられている。特に神社に限らず仏寺でも盛んである。中国には早くから三十仏を一ヵ月三十日に配して、毎日その仏を念ずると結縁がえられるという信仰があらわれている。日本では特定の日に固定化したのは観音信仰における十八日が早く、後に阿弥陀・薬師・地蔵などの日が固定化したといわれる。一年に一回から数回と一定しないが、この日社寺で祭典や法会を催して参詣人を集め、御師、先達の活躍、商人の市などが出来、門前町の発達をうながしてくる。縁日はどちらかというと、仏教的・都会的な要素をもつが、それを特定の日に固定し、重複しないようにしたのには、民衆の側の生産活動のリズムと、社寺の積極的な調整の働きかけとがあった。今日でも、東京には毎日どこかで縁日が開かれている。

川上支部（五七社）

旭神社	川上郡川上町大字高山三六七七……	三五九
愛宕神社	〃 成羽町大字下原三四三……	三五九
穴門山神社	〃 川上町大字高山市一〇三五……	三五九
天津神社	〃 備中町大字長屋四三九の五……	三六〇
天津神社	〃 成羽町大字羽山七四一……	三六〇
天津神社	〃 成羽町大字下原四〇二 ……	三六〇
天磐窟神社	〃 川上町大字七地三三五〇……	三六〇
伊弉諾神社	〃 成羽町大字成羽三八八三……	三六一
稲荷神社	〃 成羽町大字成羽三〇七八……	三六一
磐戸山神社	〃 成羽町大字羽根八五六……	三六一
宇佐八幡神社	〃 川上町大字七地一七六七……	三六一
艮御前神社	〃 備中町大字布賀三八四六……	三六一
大倉神社	〃 成羽町大字下日名二四九〇……	三六二
大蔵神社	〃 備中町大字西山二九二五……	三六二
大谷八幡神社	〃 川上町大字仁賀三一八四……	三六二
大己貴神社	〃 備中町大字西山一三二九……	三六三
御前神社	〃 成羽町大字下日名九二〇……	三六三
御前神社	〃 成羽町大字成羽九九四……	三六三
川中神社	〃 備中町大字志藤用瀬一〇〇八…	三六三
木野山神社	〃 成羽町大字上日名二六九三……	三六四
木野山神社	〃 川上町大字仁賀二三二八……	三六四
清寅八幡神社	〃 川上町大字下大竹一六八……	三六四
國司神社	川上郡備中町大字長屋三九一……	三六四
小坂神社	〃 成羽町大字相坂二二四……	三六四
山神社	〃 成羽町大字吹屋六八一……	三六五
鋤崎八幡神社	〃 備中町大字平川六四六三……	三六五
素盞嗚神社	〃 備中町大字志藤用瀬九〇八……	三六五
諏訪神社	〃 成羽町大字長地六七二……	三六五
諏訪神社	〃 川上町大字高山四〇五八……	三六五
惣社八幡神社	〃 川上町大字領家二〇三九……	三六六
大神社	〃 川上町大字仁賀八三七六……	三六六
高龗神社	〃 備中町大字平川一七二九……	三六六
辰口八幡神社	〃 成羽町大字坂本一六三〇……	三六六
天満神社	〃 備中町大字西油野八七八……	三六七
天満神社	〃 成羽町大字小泉二八八……	三六七
中野神社	〃 成羽町大字中野一九八一……	三六七
虹八幡神社	〃 川上町大字高山九九五……	三六七
八幡神社	〃 備中町大字布賀一五八七……	三六八
八幡神社	〃 川上町大字上大竹九六七……	三六八
八幡神社	〃 川上町七地七七六……	三六八
八幡神社	〃 川上町大字地頭一五二五……	三六八
八幡神社	〃 川上町大字三沢一六四八……	三六九
八幡神社	〃 川上町大字高山二九七八……	三六九
八幡神社	〃 成羽町大字成羽三三九四……	三六九
八幡神社	〃 備中町大字西油野九八……	三七〇
八幡神社	〃 備中町大字東油野二二四四……	三七〇

八幡神社　川上郡成羽町大字吹屋一四……　三七〇
八幡神社　〃　成羽町大字吹屋一九〇三……　三七〇
八幡神社　〃　備中町大字布瀬二〇……　三七一
八幡神社　〃　備中町大字布賀五六三二……　三七一
日吉神社　〃　川上町臘数六九四……　三七一
布寄神社　〃　成羽町大字布寄一四二〇……　三七一
森神社　川上郡成羽町大字成羽一四七〇……　三七二
八千戈神社　〃　成羽町大字佐々木一一四……　三七二
八坂神社　〃　備中町大字西油野一六六二……　三七二
疫神社　〃　成羽町大字成羽三五三六……　三七二
山田神社　〃　成羽町大字下原八四〇……　三七二

荒神

民間で信仰される火の神、土地の神などをいう。三宝荒神とも呼ばれ、信仰内容は多様である。一般に、屋内に祀られる場合は火の神、竈の神とされるが、農耕神的な信仰もある。屋外に祀られる荒神は、屋敷の守護神、地域の守護神、一族の氏神といった信仰があり、農耕の神としても信仰されている。いずれも祟りやすい神とされている。日本古代の荒ぶる神の思想を背景にして、陰陽師が説いた民間信仰の神の一である。屋外荒神の信仰は日本の西南部に広く分布している。

穀霊信仰

穀物に宿る神、穀物を支配する神の信仰である。とくに稲霊の信仰は古代にあっては宇迦之御霊神（倉稲魂命や屋船豊宇気命）であり、延喜式の大殿祭祝詞には、この女神を稲霊としている。民間の信仰には、明確な稲霊の信仰を認める資料は乏しいが、農神を女神とし、稲そのものを御神体として祭る風習に、その名残りが認められる。

木霊

樹木に宿る霊のこと。「古事記伝」には、木霊とは俗にいう天狗のことで、古くは山彦ともいったとある。木の精霊とする観念は民間に広く、特定の樹木を神聖視して木霊様と呼ぶ地方があり、その木は古木で、伐ることを禁じ、犯すと不幸が起ると伝えている。古典に古木を伐って建てたときには、祟りがあったとの記事がのっている。これは木に霊が宿っているとの信仰があったからであろう。

警蹕（けいひつ）

降神、昇神、遷座、開閉扉等のとき、人を警め謹ましめるために呼びかける声のことをいう。敬蹕役が平伏又は跽折（正笏して腰を折る）して、「お」の音を、初めは低く、中頃に高く、終りにまた低く発する。これは開閉はもとより、すべての場合にわたって同じである。警蹕は一声又は三声唱えるのが普通である。

旭神社（あさひ）　旧村社

川上郡川上町大字高山三六七七

主祭神　天水分神　國水分神　（配祀）大己貴神　菅原神
例祭　十一月十九日　**境内地**　四一五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　井越荒神社外三社
氏子数　三八戸
宮司　渡辺龍馬
責任役員　三村寒一　三村侯男　中村順平　平松律一
由緒沿革　本神社の創立は元和二壬戌年九月二十六日である。境外所管神社は勧請年月不詳の神祠であって、明治十一年五月六日、存置が許可された。

愛宕（あたご）神社　旧無格社

川上郡成羽町大字下原三四三

主祭神　軻遇突智命
例祭　七月三十日　**境内地**　三一三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
崇敬者数　一、五〇〇人
宮司　藤井多聞
責任役員　平松己年三　伊藤政男　西平憲二
宝物　棟札
由緒沿革　詳細は不明だが、右老の言伝えによると宝暦初年の建立と言う。山崎侯の信仰篤く、夏の祭の前夜花火を打上げ、一時戦時中は中止されたが終戦後復活し、今日では成羽の愛宕大花火として近郷に知れている。

穴門山（あなとやま）神社　旧県社

川上郡川上町大字高山市一〇三五

主祭神　天照大神　倉稲魂神（配祀）足仲彦命　穴門武姫命
例祭　十一月十六日
境内地　一、三八六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌殿　斎館　社務所
随身門
摂末社　八幡神社　他十一社
氏子数　六五戸
崇敬者数　三、五〇〇人
宮司　千田尾　毅
禰宜　迫本昌利
権禰宜　迫本昌徳
責任役員　川上範雄　江草　実　安田善次郎　那須正則　寺川康男
宝物　神刀二振　鏡一　狗犬一対　扁額二
特殊神事　正月二日、厄除弓射始めの神事あり
由緒沿革　社伝によると、人皇第十代崇神天皇五十四年豊鋤入媛命、神勅により、天照大神の御神鏡を奉持し、御神の鎮ります宮地をもとめ給い、紀伊国奈久佐濱宮から当名方濱宮にご遷幸になり、四年間この宮地に奉斎されたのを創めとする。備中国十八社中延喜式内社備中二の宮と称した。寛文九年焼失したが、仝年水谷左京亮が本殿を再建し領主の祈願社とし金幣神鏡その他を奉納した。明治四十年一月、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。



天津神社　旧村社

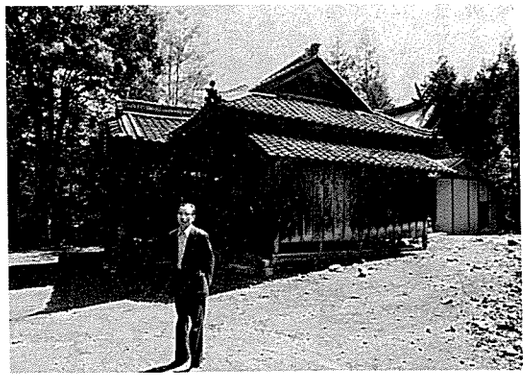
川上郡備中町大字長屋四三九の五

主祭神　天御中主神　高皇産霊神　神皇産霊神
例　祭　十一月十九日　**境内地**　五七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　四五戸
宮　司　平田一胤
責任役員　赤木四平　原田角太郎
由緒沿革　創立年月等不詳。洞穴に祀り、妙見宮と呼称した。明治二十九年移転改築と同時に天津神社と改称した。明治六年一月十日村社に列格した。

天津神社　旧村社

川上郡成羽町大字羽山七四一

主祭神　天御中主神　高皇産霊神　神皇産霊神
例　祭　十一月二十三・二十四日
境内地　一五一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　大宮荒神社
氏子数　二四戸



天津神社（俗称　妙見宮）　旧村社

川上郡成羽町大字下原四〇二

宮　司　本倉　毅
責任役員　本倉重徳　本倉昌平　黒川　寛　川上　巍
宝　物　棟札四　大般若経本百巻　神鏡
由緒沿革　創建年月不詳。昭和十五年十一月一千年祭を行った。棟札等により、文禄二己丁年、本殿、拝殿を造営したものと思われる。

天磐窟神社　旧無格社

川上郡川上町大字七地三三五〇

主祭神　伊弉諾尊　伊弉冉尊　相殿面足尊　蛭児尊
例　祭　十一月二十一（四）日
境内地　一〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
崇敬者数　九〇人
宮　司　山本芳男
責任役員　松川守男　平松　進　渡辺寛治　高岡賢二　実森繁男
由緒沿革　勧請年月は不詳であるが、記録によれば、領主水谷勝州が篤く崇敬し、享保六年甲辰八月鳥居を建立、本殿の造営を行っている。附近一帯は文部省天然記念名勝地に指定され、御神体分霊は洞窟内にも祭祀した。その洞窟の長さは約四百米位で多量の清流があり、各地から観光客がある。

主祭神　天之御中主神　高皇産霊神　神皇産霊神
例　祭　十月二十三日　**境内地**　二六一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
氏子数　二〇〇戸
宮　司　藤井多聞
責任役員　平松巳年三　渡辺慎介　丸浜　稔　川上庄一
由緒沿革　弘化二乙年本殿及び拝殿を再建した旨の棟札あるが、創建年代由緒等は不詳である。

伊弉諾神社　旧無格社

川上郡成羽町大字成羽三八八三

主祭神　伊弉諾尊　伊弉冉尊
例　祭　十二月五日　**境内地**　五二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
崇敬者数　一六〇人
宮　司　千田尾　毅
責任役員　渡辺　競　中村　稔　清水　隆
由緒沿革　創祀年は不詳であるが、天保九年疫病が大流行し全部落民がほとんど罹病したが、本神社氏子だけはその病難を免れた。それで大庄屋千田尾嘉右衛門永賜が大願主となり、社殿を再建し盛大な奉賽大祭を執行した。以来十二社大権現と奉称し、近郷近在から参拝者が多数ある。

稲荷神社　旧無格社

川上郡成羽町大字成羽三〇七八

主祭神　倉稲魂命
例　祭　十一月二十三日　**境内地**　二五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿

磐戸山神社　旧村社

川上郡成羽町大字羽根八五六

氏子数　二三戸
宮　司　千田尾　毅
責任役員　中村　稔　西平初男
由緒沿革　創建不詳。本神社は明治初年に焼失した際、記録を焼失し、詳細は不明であるが、文政十一年四月に再建が行われている。古くから土井稲荷大明神と称し地方民の崇敬が篤い。

艮御前神社　旧無格社

川上郡備中町大字布賀三八四六

主祭神　大山咋命　素盞嗚尊
例　祭　十一月二十五日
境内地　一五一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫
摂末社　天王神社
氏子数　二八戸
宮　司　高田義隆
責任役員　東呂木悦治　横見瀬武士　麻田侃介
由緒沿革　近江の国から勧請とあるが、年代その他は不詳である。

宇佐八幡神社　旧村社

川上郡川上町大字七地一七六七

主祭神　応神天皇　相殿　天照大神　春日大明神
例　祭　十一月三日　**境内地**　三九九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫
摂末社　（龍王社）
氏子数　九〇戸
宮　司　山本芳男
責任役員　丹治　薫　赤木　精　川上芳雄　三宅　弘　岡川辰一
由緒沿革　永正元年四月、領主三村右京亮親の発願により創建したものと伝える。正徳三年の記録によれば、本願主は川上九兵衛の先祖とある。延宝五年十月境内地を除地とされた。明治六年一月村社に列格した。昭和十八年九月、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

主祭神　天照皇大神　応神天皇　春日大神
例　祭　十一月二十一・二十三日
境内地　一二八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫
摂末社　三宝荒神社　山根荒神社　金刀比羅神社　祇園神社　愛宕神社　瑜伽神社　重大夫神社　山神社
氏子数　三一戸
宮　司　石賀　寛

責任役員　村上敏男　村上啓三　古米武夫

由緒沿革　建武年中に山根城主米山大内蔵が鎮守神として勧請した。天文年中は山根宮と称し、慶長五年山根十太夫則長、物部彦五郎信房が社殿を改築した。長谷の鎮守神として崇敬した。天和三癸亥年艮御前宮と改称した。延享二年社殿を三たび建立した。昭和十五年十二月、神庫を改築し翌年六月、石段を改修した。

大倉神社　旧無格社

川上郡成羽町大字下日名二四九〇

主祭神　大倉主神
例祭　十一月二十日　**境内地**　一一四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
崇敬者数　三〇人
宮司　藤井多聞
責任役員　佐野武一郎　佐野寿　原田貞夫
宝物　棟札
由緒沿革　明治年間に本殿、幣殿、拝殿が焼失したため、創立年代や由緒は不明である。明治二十二年五月に再建し現在に至っている。

大蔵神社　旧村社

川上郡備中町大字西山二九二五



主祭神　大山咋命　配祀神直日命　大直日命
例祭　十一月三日　**境内地**　一、五二〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　左神社　右神社
氏子数　一〇〇戸
宮司　石川章　**禰宜**　石川紘子
責任役員　小田勲　井上正信　植田良一　村上幸三郎
由緒沿革　天文三年甲午三月赤木弾正泰忠の創建と伝えられる。天正九年再度の棟札は町の有形文化財に指定された。寛文七年享保九年の棟札もある。現在の社殿は安政六年の再建で、右記録によれば宮建敷地壱畝廿歩、境内壱町七段六畝廿歩を有していたが、上地処分境内内編入等により、現在境内地一、五二〇歩、社有林壱町弐反壱歩となった。古来山王宮と称し、明治初年大倉神社と呼び、ついで大蔵神社と改称した。

大谷八幡神社　旧村社

川上郡川上町大字仁賀三一八四

主祭神　応神天皇
例祭　十一月十五日　**境内地**　四〇三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神楽殿　社務所　神輿庫　随身門
摂末社（龍王社）
氏子数　一九三戸
宮司　山本芳男
責任役員　岡崎清人　妹尾勤　亀石馨
由緒沿革　創建年代は不詳であるが、八幡屋敷は文明十二年庚子の歳の古水帖並に毛利氏家臣三輪加賀検地の際に除地になり、延宝五丁巳年水谷右京亮検地の時にも除地となった。創立はかなりの古社と思われる。昭和十四年十月十九日本殿、幣殿、拝殿の改築を行った。昭和十七年四月神饌幣帛料供進神社に指定された。

責任役員　村上敏男　村上啓三　古米武夫

由緒沿革　建武年中に山根城主米山大内蔵が鎮守神として勧請した。天文年中は山根宮と称し、慶長五年山根十太夫則長、物部彦五郎信房が社殿を改築した。長谷の鎮守神として崇敬した。天和三癸亥年艮御前宮と改称した。延享二年社殿を三たび建立した。昭和十五年十二月、神庫を改築し翌年六月、石段を改修した。

大倉神社　旧無格社

川上郡成羽町大字下日名二四九〇

主祭神　大倉主神
例祭　十一月二十日　**境内地**　一一四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
崇敬者数　三〇人
宮司　藤井多聞
責任役員　佐野武一郎　佐野寿　原田貞夫
宝物　棟札
由緒沿革　明治年間に本殿、幣殿、拝殿が焼失したため、創立年代や由緒は不明である。明治二十二年五月に再建し現在に至っている。

大蔵神社　旧村社

川上郡備中町大字西山二九二五

主祭神　大己貴命　事代主命　少彦名命　倉稲魂命　保食神　猿田彦命
例祭　十月十日（十一月三日）
境内地　一六五坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿　神輿庫
崇敬者数　一〇〇人
宮司　石川章　**禰宜**　石川紘子
責任役員　小田勲　井上正信　植田良一　村上幸三郎
由緒沿革　古来六社権現宮と称していたが、明治初年大己貴神社と改称された。西山の古城戸構城跡にある。旧社格は無格社であるが、権現様として崇敬者が多い。大蔵神社について二の宮として崇敬されている。赤木弾正の創建と伝えられている。

御前神社　旧村社

川上郡成羽町大字下日名九二〇

主祭神　伊邪那岐命
例祭　十一月十九日　**境内地**　四三五坪



主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫
氏子数　一八八戸
宮司　藤井智明　**禰宜**　藤原武夫
責任役員　杉本貞市　平松嘉納　藤原武夫
宝物　棟札五
特殊神事　三十三年毎に式年祭を行い、御神体の神衣取替を行う神事あり。
由緒沿革　本神社は約一千年の昔、人皇第六十一代朱雀天皇の天慶年間の勧請という。又一説に人皇第九十六代後醍醐天皇の御代建武二乙亥年吉備津神社から御分霊を勧請奉斎したともいうが、詳細は不明である。慶安三庚寅年、寛文元年、文政四年、慶応元年の四度御再建のことは棟札で判明している。

御前神社　旧無格社

川上郡成羽町大字成羽九九四

主祭神　猿田彦命
例祭　十一月二十九日
境内地　八九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
崇敬者数　一五〇人
宮司　渡辺宣也
責任役員　日名廉太郎　石原嗣雄　森尊男
由緒沿革　創建年代由緒不詳。

川中神社　旧村社

川上郡備中町大字志藤用瀬一〇〇八

主祭神　速秋津彦神　速秋津姫神
例祭　十一月十五日　**境内地**　一八六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
氏子数　八戸
宮司　平田一胤
責任役員　芳賀郁夫　芳賀緑郎　芳賀俊雄
由緒沿革　創立年月等不詳。中洲に鎮座せられる祓戸

の大神である。明治十二年九月二十二日に村社に列格した。

木野山神社（きのやま）　旧村社

川上郡成羽町大字上日名二六九三

主祭神　大己貴神
例祭　十一月二十日　**境内地**　一五五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
崇敬者数　三〇人
宮司　藤井多聞
責任役員　川上　定　福西静男　丸金武夫
由緒沿革　天保十四年十月十六日、高梁市今津鎮座の木野山神社の御分霊を奉斎し今日に至っている。明治四年五月村社となった。

木野山神社（きのやま）　旧無格社

川上郡川上町大字仁賀二三二八

主祭神　大山祇神　大己貴命　少彦名命　神直日神　大直日神　倉稲魂命
例祭　十月十六日　**境内地**　四九坪
由緒沿革　創立年月等不詳。明治六年一月一日村社に列格。

山神社（さん）　旧無格社

川上郡成羽町大字吹屋六八一

主祭神　金山比古神　大山津見神　木花咲耶媛神
例祭　七月二十三日（十月十五日）
境内地　一七〇坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　若宮
崇敬者数　五〇〇人
宮司　千田尾　毅
責任役員　長尾　隆　小川謹一　田村教之
由緒沿革　大同二年当地に鉱山が開発されると共に、守護神として創祀された。天明年間、鉱山が一時休山するに当り銀座支配役から本神社奉斎を地内部民に依頼した。明治初年三菱が本鉱山を再開するに当り、本神社の維持経営にも当ったが昭和三十年閉山するに至り再度地区民に委ねたものである。

鋤崎八幡神社（すきざきはちまん）　旧村社

川上郡備中町大字平川六四六三

主祭神　豊鋤入姫命　玉依姫命　譽田別尊　気長足姫尊
例祭　十一月三日　**境内地**　六七九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫
摂末社　重大夫神社　神宮司荒神社　本宮荒神社　若宮社　稲荷神社　八坂神社　大社　宇根山八幡神社　若一八幡神社　大明神社　稲荷神社
氏子数　三一五戸
宮司　石賀　寛
責任役員　笠谷健治　江草露利　江草柾太郎　片山生二
由緒沿革　崇神天皇の五十四年、豊鋤入姫命が詔をうけ、天照大神の鎮りまさむ宮地をもとめ給い、しばらく当郷にお出でになったといわれ、そこを鋤之宮と呼んで崇め奉っていたが、後、建武三年に平川高親なる者が近江、国平川郷から当地に遷居した際、氏神八幡宮を勧請し鋤之宮に相殿とした。御神体は全体で近江国から衛護し奉り、今に至るまで相伝えて尊信している。

素盞嗚神社（すさのお）　旧無格社

川上郡備中町大字志藤用瀬九〇八

主祭神　素盞嗚尊
例祭　十一月十四日　**境内地**　六六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿

諏訪神社（すわ）　旧無格社

川上郡川上町大字高山四〇五八

主祭神　建御名方神
例祭　十一月十七日　**境内地**　五六坪
主要建物　本殿　幣殿　社務所
崇敬者数　七六二人
宮司　山室宣也
責任役員　藤森清市　三宅貞男　山室正男　金尾富治
由緒沿革　創立年月等不詳であるが、文久三年四月十八日本殿を改築している。明治十九年四月十九日拝殿を建築した。昭和二十年四月二十六日本殿を改築し、幣殿を附設した。村民は勿論隣村の人々の崇敬が篤く信者の寄進により維持されている。

清寶八幡神社（きよざねはちまん）　旧村社

川上郡川上町大字下大竹一六八

主祭神　応神天皇
例祭　十一月三日　**境内地**　一四六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　水分神社　山神社
氏子数　八三戸
宮司　三宅全平
責任役員　三宅忠雄　吉田泰夫　堀江隆治
由緒沿革　霊元天皇の御宇、延宝八年八月十六日、領主山崎勘解由豊治の命によって、松室六右衛門常康が大願主となり、庄屋および村民と相謀り、上大竹鎮座の榊山八幡宮の御分霊を奉斎して社殿を造営し今日に及んでいる。この間、明和、安永、天保の年に本殿、幣殿、拝殿等を再建した棟札が現存している。

國司神社（くにし）　旧無格社

川上郡備中町大字長屋三九一

主祭神　大國主命
例祭　十一月十九日　**境内地**　五二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　一二戸
宮司　高田芳積
責任役員　赤木生一　赤木忠一　赤木一三
由緒沿革　勧請年月等の詳細は不明であるが、古老の言い伝えによると、承久二年頃に創建し、附近数ヶ村の守護神として崇敬せられ今日に及んだという。

小坂神社（こさか）　旧村社

川上郡成羽町大字相坂二二四

主祭神　大山祇神
例祭　十一月十八日　**境内地**　一〇一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所
氏子数　一七戸
宮司　平田高久
責任役員　那須克巳　渡辺義雄

氏子数　八戸
宮司　渡辺宣也
責任役員　井上秀寿　宮本昌士　芳賀　勉
由緒沿革　創建年代等不詳。

諏訪神社（すわ）　旧村社

川上郡成羽町大字長地六七二

主祭神　御穂須々美命　八坂刀賣命
例祭　十一月十八日　**境内地**　九〇七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
氏子数　六七戸
宮司　高田芳積
責任役員　大福　年　渡辺磯夫　赤松亀一
由緒沿革　長地村氏神として崇敬しているが、創建年月由緒等不詳である。

主要建物　本殿　幣殿　拝殿
崇敬者数　七一人
宮　司　山室宣也
責任役員　小島康昌　小島石太郎　前原喜策
由緒沿革　享禄二年猪原豊後守小島盛信が、信州猪原城から備中国折居城に移った際、諏訪明神を勧請し、守護神として崇敬した。

惣社八幡神社　旧村社

川上郡川上町大字領家二〇三九

主祭神　応神天皇
例　祭　十一月二十三日　**境内地**　五四五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　随身門
摂末社　沼名前神社　稲荷神社　龍王社　塞座神社
氏子数　一四三戸
宮　司　山本芳男　**禰宜**　山本光徳
責任役員　大月文雄　佐野多之一　川上角衛
由緒沿革　永享九年勧請したという。当時手荘郷六ヶ村の総氏神として崇敬した。天正年中各村に御分霊し、領家村の鎮守神とした。延宝と元禄とに社殿の造営を行った。慶長七年代官加次屋助兵衛検地の節、御供田として田一反歩除地になった。元禄年中代官遠藤新兵衛の時、田一反歩除地になった。明治六年四月村社に列格した。昭和十八年四月、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

大神社　旧村社

川上郡川上町大字仁賀八三七六

主祭神　大己貴命　大山祇命
例　祭　十一月十五日　**境内地**　五七〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社
氏子数　四〇戸
宮　司　山室宣也
責任役員　三宅　彊　中道　茂　原田　正　地衆正己
由緒沿革　本神社の創立は不詳であるが、旧記による と屋敷十六歩、境内地弐反歩は古来から除地となっている。古来、大神宮、大神大明神等の記録があるが、神道裁許状には大神大明神とある。明治初年神仏分離の際大神社と改称した。昭和十六年七月二十五日に幣殿を建築した。同十九年十一月に村社に列格した。

高竈神社　旧無格社

川上郡備中町大字平川一七二九

主祭神　高竈大神　閼竈大神
例　祭　十一月二十四日
境内地　一八〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
崇敬者数　一〇〇人
宮　司　長原伊勢正
責任役員　荻野　正　村上正喜　鈴江一登　竹並数雄
藤井淳一
由緒沿革　詳細不詳。

天満神社　旧村社

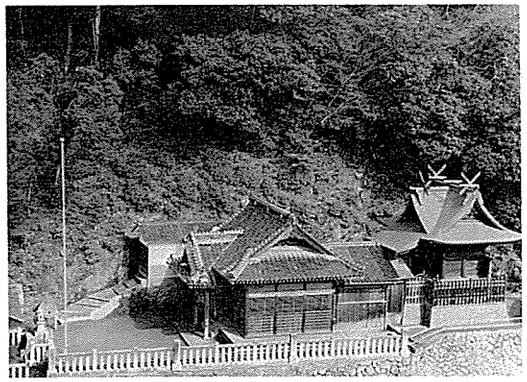
川上郡成羽町大字小泉二八八

主祭神　菅原道真　相殿・大己貴神　少彦名神
例　祭　十一月二十二日　**境内地**　四四二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫
氏子数　七五戸　菅原道真
宮　司　平田一胤
責任役員　土谷真一　川上武一　森　俊夫
由緒沿革　延文年間に疫病が流行し、里人が悉くその惨害に斃れようとした時、筑紫の大宰府天満宮から勧請したところ、不思議の御神徳により、病勢は鎮圧し、悲惨の境を免れることを得たと伝えている。寛文八年に社殿が炎上し縁起書・宝物等を焼失した。寛文十年十一月に再建した。大正六年八月、国司神社を合祀した。同年十一月、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

辰口八幡神社　旧村社

川上郡成羽町大字坂本一六三〇

主祭神　応神天皇　神功皇后　仲哀天皇　菅原神
大山祇神　水分神
例　祭　十一月三日　**境内地**　二五〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　絵馬殿　神輿庫　手洗舎　随身門　倉庫
摂末社　若宮社
氏子数　一四五戸
宮　司　三上義治
責任役員　谷本公二郎　大原利貞　西江寛格
禰　宜　二島勇美　権祢宜　佐藤　扶
由緒沿革　本神社は今を去ること七百年前、弘安二年六月、豊後国の宇佐八幡宮の御玉串を斎き帰り、龍口山に鎮祀したものである。延慶元年八月宇宮のハナに遷し、更に應永五年辰の口山に遷した。天保十一年七月焼失し、弘化三年再興したと伝えられている。幣殿及び拝殿は、昭和十七年に改築した。大正四月五月、新に地区内神社を合祀し、摂社末社を含め二十四社を合祀した。昭和三十五年九月十四日、神社名を辰口八幡神社と改称した。



天満神社　旧無格社

川上郡備中町大字西油野八七八

主祭神　菅原道真
例　祭　四月二十五日（五月十日）
境内地　二七坪
主要建物　本殿　拝殿
崇敬者数　一〇〇人
宮　司　長原伊勢正
責任役員　荻野　正　村上正喜　鈴江一登　竹並数雄
藤井淳一
由緒沿革　詳細不詳。

中野神社　旧無格社

川上郡成羽町大字中野一九八一

主祭神　猿田彦命外十七柱（神功皇后　大己貴命　宇気母智命　高皇産霊神　武甕槌命　水分神　神皇産霊神　御穂須々美命　狭霧神　天御中主神　八坂賣命　久比奢母智神　大山祇命　軻遇突智神　狭依田比賣命）
例　祭　十一月二十五日　**境内地**　七五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　一〇〇戸
宮　司　藤本正昭
責任役員　水野晴次　坂田　守　松田英夫
由緒沿革　高梁市鎮座の清実八幡神社の摂社として、中野部落内に往古から奉祀せられる。昭和十六年八月七日付御許可により十一社を合祀した。

虹八幡神社　旧無格社

川上郡川上町大字高山九九五

主祭神　応神天皇　相殿　奥津彦命　奥津姫命　火産霊命　倉稲魂命
例　祭　十一月二十三日

境内地　六五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　一四戸
宮　司　三宅全平
責任役員　杉　亀市　平松正夫　三村義弘
由緒沿革　創立年月等は不詳であるが、安政二年三月十五日現在の社殿を再建した。旧社名は神山神社と称し、村内の守護神として奉祀し今日に至っているものである。

八幡神社　旧村社
（通称・亀石八幡神社）

川上郡備中町大字布賀一五八七

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十一月十七日　**境内地**　三二〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神門
摂末社　水分神社　天満神社　樫神社　大山神社
氏子数　一五八戸
宮　司　西江隆則　**禰　宜**　西江愈雄
責任役員　新倉敬一郎　平川　篤　松岡良一　原田工一
宝　物　刀一振　永正棟札
由緒沿革　嘉永年中近江国観音城主佐々木（左衛門尉）定綱が軍功により高倉院から、巨勢金岡筆の八幡の画幅を賜わり、守神として代々奉斎した。孫が建武三年、穴門郷を領するに至って長門守経貞が菖蒲城出城民衆の氏神とし、永正十一年現在地に御社を建立した。後慶長十三年現御神体に改め、元禄十一年に亀石八幡宮と改称した。明和元年御本殿を改築。明治四十二年鎮護神社他十九社合祀した。昭和十一年、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

八幡神社　旧村社
（榊山八幡）

川上郡川上町大字上大竹九六七

主祭神　天照皇大神　応神天皇　神功皇后　水分神　高龗神　闇龗神
例　祭　十一月十五日　**境内地**　五九一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　由賀神社
氏子数　一四五戸
宮　司　千田尾　毅　**崇敬者数**　五二〇人
責任役員　金高周順　赤木　強　片山高雄　三宅健寿
由緒沿革　創祀年不詳。明徳元庚午年十二月社殿を改造し、社号を八幡宮と称した。天正十二年十二月小早川隆景が、備中手の庄の国吉城主三村左京太夫を攻めたとき、当社を陣屋とした。戦勝を神助の賜ものと、神社に修築費として金千疋を奉納している。領主山城甲斐守の崇敬が篤く、代々領地巡視の砌、当社に宿泊し、幣帛を供進したものである。明治三十三年七月、拝殿の葦替え、同四十四年十一月水分神社外二神社を合祀した。大正六年、土月幣殿及び廊下を建築した。大正九年九月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。昭和十三年十一月本殿葦替、幣・拝殿を修理した。

八幡神社　旧村社
（亀石八幡）

川上郡川上町七地七七六

主祭神　応神天皇
例　祭　十一月二十日　**境内地**　四〇六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫
摂末社　高龗神社　天満神社　木野山神社　亀山神社　日ノ御崎神社
氏子数　四八戸
宮　司　大山保志
責任役員　川上五一　大塚明治　金子謙逸　亀川　巍
由緒沿革　本神社は永正元年、有志が相謀って創建した。その鎮座地は亀山山林中とし、神名は八幡宮と尊称した。旧暦六月三十日と九月十五日を例祭としている。時の願主は庄屋策次郎、神主は蔵雲庵仝進之助、大工は又兵衛であった。その後、慶長四年毛利輝元の家来三輪賀なる者が検地した。延宝五年、代官彦崎孫三郎が再検地している。

八幡神社　旧村社

川上郡川上町大字地頭一五二五

主祭神　応神天皇

例　祭　十一月十五日　**境内地**　五五〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫　随身門
摂末社　稲荷神社　嚴島神社　龍神社
氏子数　二二五戸
宮　司　大山保志
責任役員　山本幸一　武田達衛　加藤　勲　横山　保
由緒沿革　天正五年六月三日大江朝臣毛利領主、国吉城主口羽中務大輔春吉により再建せられたと伝えられる。往古は本部手庄七ヶ村の氏神であった。勧請の当時、高島の神武天皇の行宮の尊跡を奉仰し、高の一字を神号の冠頭にのせ、高田八幡宮と尊称したという。昭和十二年随身門・石鳥居・唐獅子・玉垣・社務所等を建造した。

八幡神社　旧村社
（槇山八幡）

川上郡川上町大字三沢一六四八

主祭神　応神天皇
例　祭　十一月二十五日
境内地　三二五坪
主要建物　本殿　祝詞殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫
摂末社　廣嶺神社　荒神社
氏子数　一二三戸
宮　司　大山保志
責任役員　山室　繁　渡辺佐助　中西博衛　中畑重男
由緒沿革　本神社は創立不詳であるが、正保年間に三沢村宮迫という所から現在の位置に移転したものである。天保元年火災のため建物全部が灰燼となり、本殿・拝殿のみを再建した。昭和三年三月三日、本殿を銅板に葺替え、その後、拝殿が腐朽したので、昭和十八年二月二十三日祝詞殿・幣殿・拝殿・神輿庫・社務所を造築した。

八幡神社　旧村社
（通称・宮山八幡神社）

川上郡川上町大字高山二九七八

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后
例　祭　十一月二十（二十三）日
境内地　九五四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫
摂末社　八幡神社　木野山神社　大山祇神社他八社
氏子数　一〇二戸
宮　司　渡辺龍馬
責任役員　武田正信　小田上信夫　金子太郎　大石　勉
由緒沿革　勧請は正徳四年午九月二十五日。天保十年亥十月再建。明治二年己八月再建。昭和十五年十二月境内模様替え。本殿、幣殿、拝殿再建。境内外所管神社は、勧請年月日不詳の神祠であって、明治十一年五月六日に摂社存置で許可された。昭和五十一年、幣殿・拝殿の瓦屋根を葺き替えた。



八幡神社　旧郷社

川上郡成羽町大字成羽三三九四

主祭神　品陀和気命　倉稲魂命　火雷神　高龗神　大山祇命
例　祭　十月十五日
境内地　九三八・九八坪

主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神庫
摂末社　荒神社　経津主神社　恵美須神社
氏子数　七五〇戸
宮　司　渡辺宣也
責任役員　平松源一　渡辺　競　瀬尾祐治　赤木弥五郎　秋岡　博
宝　物　旧藩主寄進佛像　神鏡　絵馬七点
由緒沿革　天文の頃、三村修理太夫家親がその生国信濃国挟江から勧請した。以来歴代成羽城主の崇敬が篤く、萬時元年山崎氏が讃州から入城以来、明治維新に至るまで、成羽藩の鎮守として、社殿の造営、その他維持経営に当った。大正二年境外摂社稲荷神社および高龍神社を合祀した昭和三年郷社に列格した。

八幡神社　旧村社
（通称・小旗山八幡神社）

川上郡備中町大字西油野九八

主祭神　譽田別尊
例　祭　十一月十五日
境内地　三七七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　一五〇戸
宮　司　長原伊勢正　**禰　宜**　長原昭夫
責任役員　荻野　正　村上正喜　鈴江一登　竹並数雄　藤井淳一
由緒沿革　創祀年月日不詳であるが、古老は第九十五代花園天皇正和年間の創祀と伝えている。文久二年九月に再建している。

八幡神社　旧村社
（通称・平田山八幡神社）

川上郡備中町大字東油野二二四四

主祭神　応神天皇外十柱　神功皇后　仲哀天皇　大山祇命　木花咲耶媛命　大己貴命　事代主命　軻遇突智命　倉稲魂命　菅原神
例　祭　十月十五日（十一月三日）
境内地　一、一九一坪
主要建物　本殿　釣殿　幣殿　拝殿　神輿庫
摂末社　荒神社
氏子数　一五〇戸
宮　司　長原　環
責任役員　平松為三郎　長谷川傳四郎　中迫正已
由緒沿革　創祀の年は不詳であるが、口碑によれば人皇第七十七代後白河天皇の御宇に現東油野袈裟尾山城主鷲尾庄司武久の祈願神社として奉斎したものという。その後毛利輝元の家臣三輪加賀守の検地の際、八幡屋敷は除地となり今日に至っている。安政二年九月社殿全焼、同四年十月再建した。昭和十九年十一月に神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

八幡神社　旧村社
（通称・高草八幡神社）

川上郡成羽町大字吹屋一四

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后　大山祇命　金山比古命　木花咲耶媛命　大己貴命　事代主命　軻過突智命　倉稲魂命　菅原神
例　祭　十月十五日（十一月三日）
境内地　三三八・一六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　水分神社
氏子数　三四戸
宮　司　小川紀夫　**禰　宜**　松本幸市
責任役員　長尾　隆　田村教之　小川謹一
由緒沿革　宝亀二年高草山に勧請したという。延宝二年六月十二日の夜、奉仕の僧侶が争い、各地に転社の論争があったとき、御霊璽が吹屋村の百姓吉三郎所有（現在の社地）に飛行したという。以来、今の地に鎮座し給うたと伝えている。

八幡神社　旧村社

川上郡成羽町大字吹屋一九〇三

主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后　軻遇突智

神　大年神　事代主神　大山祇神　金山彦神　木花咲夜姫神
例　祭　十一月十二日
境内地　一一七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　大歳神社　山神社　愛宕神社　明神社　荒神社
氏子数　三〇戸
宮　司　渡辺泰宏　**禰　宜**　大河真澄
責任役員　加藤　保　倉田暢之助　堀宏太郎　谷　寛
由緒沿革　本社は和銅年中癸丑の年に奉遷。北方並に宇治村笹尾の氏神として崇敬され、現在北方部落の守護神として崇敬している。大正二年境内外の摂末社を合祀した。

八幡神社　旧村社

川上郡備中町大字布瀬二〇

主祭神　帯中日子命　品陀和気命　息長帯比咩命
例　祭　十一月十五日
境内地　八九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫
摂末社　水分神社　天神社　杵築神社
氏子数　七五戸
宮　司　高田芳積
責任役員　高見俊一　古米時夫　高見栄一
由緒沿革　慶長十七年壬子九月十五日勧請と古帳にあるだけでその他は不詳である。

八幡神社　旧村社
（通称・亀山八幡神社）

川上郡備中町大字布賀五六三一

主祭神　天之御中主命　応神天皇
例　祭　十一月三日
境内地　七〇四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫
氏子数　一七戸
宮　司　渡辺龍馬
責任役員　川上新一　三村　進　前原吉夫
由緒沿革　本神社の創建は応永元年九月九日である。享保十六年に本殿を再建した。また、明治八年にも本殿を改築した。大地部落の高祖の近江国亀山の大鎮殿が当地へ転住の時に、金幣を奉持して御奉供し亀谷の岩上に安置して奉斎したという。早天が続き草木が枯死しようとするときには、「フリュー」一名「花踊り」という祭儀があって、これも行って祈願すると甘雨が禾田を潤すという顕著な霊験があり、現在でも特殊神事として伝えられている。

日吉神社　旧村社

川上郡川上町臘数六九四

主祭神　大山咋命

布寄神社　旧村社

川上郡成羽町大字布寄一四二〇

主祭神　天照大御神　大山祇神　応神天皇　神功皇后　仲哀天皇　素盞嗚神　奇稲田姫神　大年神　少彦名神
例　祭　十一月二十五日
境内地　二二六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　荒神社
氏子数　九八戸
宮　司　平田一胤
責任役員　川上雅裕　杉田　栄　川上　強
由緒沿革　人皇十一代垂仁天皇の丁丑の年、倭姫命が

天照大御神の鎮座所を求めて諸国を巡られた時、当社の地にお出でになったという。それで当社に天照大御神を奉斎している。承久三年領主赤木太郎忠長が八幡宮を合祀し杉崎神宮と号した。明治十年三神社と改めた。大正十三年三月釜釆神社を合祀し、釜釆に移転した。大正十三年十一月、布寄神社と改称した。

森神社　旧無格社

川上郡成羽町大字成羽一四七〇

主祭神　天忍穂耳命
例　祭　十一月二十九日
境内地　八八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　八戸　**崇敬者数**　二五〇人
宮　司　千田尾　毅
責任役員　岩本璃市　山根芳樹　赤木広司
由緒沿革　勧請年月由緒等不詳。古老の伝えによれば、千数百年以前の勧請で、地方では最も古く、御神徳は特別に験著である。殊に婦人の病。

八坂神社　旧無格社

川上郡備中町大字西油野字牛頭に鎮座

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十一月十六日　**境内地**　二一坪
主要建物　本殿　拝殿
崇敬者数　二三五人
宮　司　長原伊勢正
責任役員　荻野　正　村上正喜　鈴江一登　竹並数雄　藤井淳一
由緒沿革　詳細不明。湯野村大字西油野字牛頭に鎮座しているので牛頭天王宮の称があるという。

八千戈神社　旧村社

川上郡成羽町大字佐々木一一四

主祭神　大國主命　奥津彦命　奥津姫命　稚産霊命

疫神社　旧村社

川上郡成羽町大字成羽三五三六

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十二月一日　**境内地**　一九九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　六八戸　**崇敬者数**　三五〇人
宮　司　千田尾　毅　**禰　宜**　千田尾　悟
責任役員　渡辺　競　中村　稔　西平初男　渡辺金一郎　中曽清一
特殊神事　例祭時の神饌は部内氏子全員で早朝より伝供する風習あり。
由緒沿革　本神社の創建年は不詳であるが、口碑によると、約一千年余以前にさかのぼるという。古文書に、文明元己丑年五月領主三村紀伊守社殿再建奉納すとある。また天正元年の六月、国中に疫病が大流行した際、三村紀伊守の発願により、六月十三日から七日間、疫病退散の大祈禱が行われ疫病は忽に止んだという。以来疫病平癒の御神徳を奉謝し、近郷の者はもちろん遠く他郡からの参拝者も多数ある。

山田神社　旧無格社

川上郡成羽町大字下原八四〇

主祭神　天照大神　豊受大神
例　祭　十一月三日　**境内地**　四二三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社
崇敬者数　二〇〇人
宮　司　渡辺宣也
責任役員　岡本武夫　三宅虎雄　小西三郎　黒川亀志
由緒沿革　創建年代由緒不詳。

阿新支部　（一二八社）

蓬山神社　新見市千屋井原五四一……三七六
青木八幡神社　阿哲郡哲多町蚊家二三〇一……三七六
明石神社　新見市千屋一八二〇……三七六
秋葉神社　阿哲郡大佐町永富四〇五……三七六
愛宕神社　〃　大佐町大井野一九一四……三七六
足立神社　新見市足立三七六六……三七七
天津神社　阿哲郡哲多町大字老栄一六九一……三七七
天津神社　〃　神郷町大字高瀬三五二三……三七七
天津神社　〃　哲多町荻尾一五八一―四……三七七
荒戸神社　〃　哲多町田淵九一七……三七七
粟森神社　新見市千屋実一六七〇……三七八
石上神社　阿哲郡神郷町大字釜村二〇九七……三七八
市杵島神社　〃　大佐町小阪部六〇七……三七八
稲荷神社　〃　大佐町小阪部一三三六……三七八
厳島神社　〃　神郷町大字釜村一〇九……三七八
厳島神社　〃　神郷町下神代四三五八……三七九
岩山神社　新見市唐松三二八六……三七九
岩山神社　〃　草間七三八九……三七九
岩山神社　〃　豊永字山六二五……三七九
岩山神社　〃　上熊谷三九二八……三七九
艮神社　阿哲郡哲西町大字大竹一一八八……三八〇
江原八幡神社　新見市西方一五〇四……三八〇
疫清神社　阿哲郡哲西町大字八鳥五九三……三八〇
疫清神社　〃　神郷町大字釜村四一九一……三八一
大池神社　〃　大佐町小阪部三五七三……三八一
大碓神社　〃　神郷町大字油野三三一三……三八一
大蔵神社　大佐町布瀬二七五六……三八一
皇子神社　〃　哲多町老栄三一七……三八一
大佐神社　〃　大佐町小阪部二〇八五……三八一
大佐神社　〃　大佐町小阪部三五七四……三八二
大佐神社　〃　大佐町小阪部九九……三八二
大滝神社　〃　大佐町小阪部二三九八……三八二
大槻神社　新見市千屋二三一……三八二
太歳神社　阿哲郡大佐町小阪部三〇六一……三八二
大己貴神社　新見市石蟹一八〇……三八三
大本八幡神社　阿哲郡大佐町大字上刑部一一五四……三八三
大山祇神社　〃　神郷町大字油野一一一五……三八三
奥田神社　〃　大佐町布瀬四〇三……三八三
御前神社　〃　哲西町大野部三六八四……三八三
春日神社　〃　神郷町大字高瀬二四三九……三八四
亀尾神社　新見市正田八一九番地の一……三八四
柏森神社　阿哲郡神郷町大字高瀬二〇五……三八四
木谷神社　〃　大佐町大字田治部二〇〇三……三八四
國司神社　新見市正田一六九四……三八五
國司神社　〃　千屋井原一一二五……三八五
國司神社　〃　高尾一七六三……三八五

國司神社　阿哲郡神郷町下神代一七五八……三八五
國司神社　〃　大佐町小阪部一七二一……三八六
國主神社　新見市上市七四四……三八六
國主神社　阿哲郡大佐町大井野三三六九……三八六
熊野神社　〃　神郷町下神代三三七八……三八六
熊野神社　〃　大佐町永富八七七……三八六
熊野神社　〃　大佐町小阪部三二五二……三八七
熊野神社　〃　大佐町山奥一四六三……三八七
熊野神社　〃　大佐町大井野三二一五……三八七
倉嶋神社　新見市千屋九九五……三八七
後醍醐神社　阿哲郡大佐町大井野一五九八……三八七
湖見神社　新見市坂本一一六一……三八八
荒神社　阿哲郡神郷町大字油野六一五……三八八
荒神社　〃　神郷町下神代四〇六七……三八八
荒神社　〃　大佐町布瀬一八一二……三八八
荒神社　〃　大佐町永富四七二……三八八
荒神社　〃　大佐町小南三二七……三八八
荒神社　〃　大佐町小阪部二六七八……三八九
荒神社　〃　大佐町大井野二五二五……三八九
皇大神社　〃　哲西町大字畑木一〇二五……三八九
金刀比羅神社　〃　大佐町小南四九四……三八九
許母利神社　〃　大佐町小阪部三八九……三八九
笹尾神社　〃　神郷町油野九四五……三八九
笹子山神社　新見市千屋実一五二四……三九〇
山神社　阿哲郡神郷町大字油野四〇〇八……三九〇
山神社　〃　神郷町大字油野五三一……三九〇
山神社　〃　哲多町大野七二八……三九〇
山神社　〃　大佐町小阪部六五二……三九〇
三社女躰神社　新見市菅生四九五五……三九〇
新宮神社　阿哲郡大佐町山奥一三三九……三九一
杉戸神社　〃　神郷町大字油野二〇六一……三九一
高靇神社　〃　大佐町山奥二一三一……三九一
武内神社　〃　哲西町大字矢田二四〇九……三九一
立脇神社　〃　大佐町永富一一〇……三九二
千屋神社　新見市千屋実二二五九……三九二
天神社　〃　大佐町永富七二五……三九二
天神社　〃　大佐町山奥一六一九……三九二
天王八幡神社　〃　哲多町蚊家一七〇八……三九二
天満神社　〃　哲多町大字老栄一一八八……三九三
天満神社　新見市上市町金谷七六七……三九三
戸部神社　阿哲郡大佐町小阪部七二五……三九三
豊岡八幡神社　〃　哲多町大字宮河内二八八四―二……三九三
中野山八幡神社　〃　哲多町大野一六九八……三九三
直日神社　〃　大佐町大井野二五二五……三九三
楢ノ木山八幡神社　〃　哲西町大字畑木一〇二五……三九四
畑村神社　〃　大佐町小南四九四……三九四
八幡神社　〃　哲多町大野一九六七……三九四
八幡神社　〃　大佐町布瀬三四七五……三九四
八幡神社　〃　哲西町大字上神代四〇〇六……三九四
八幡神社　〃　哲西町大字矢田二三六八……三九五
八幡神社　新見市足見二六四五……三九五
八幡神社　阿哲郡哲多町大字成松一三八一……三九五
八幡神社　新見市下熊谷五七二……三九六
八幡神社　阿哲郡哲多町大字矢戸一〇〇九……三九六
八幡神社　〃　哲多町大字荻尾三二七……三九六
八幡神社　新見市新見一七八一……三九六
八幡神社　阿哲郡神郷町大字高瀬五八〇……三九七
八幡神社　新見市法曽二七八四……三九七
八幡神社　阿哲郡哲西町大野部一八〇〇……三九七
八幡神社　〃　大佐町永富三九四……三九七
八幡神社　〃　大佐町大井野一一七四……三九八
日吉神社　新見市千屋花見八五一……三九八
日吉神社　阿哲郡神郷町高瀬二一八三……三九八
日咩坂鐘乳穴神社　新見市豊永赤馬六三五二……三九八
日少神社　阿哲郡大佐町小阪部二五四四……三九八
永室神社　〃　神郷町大字油野四一五六……三九九
永室神社　〃　神郷町大字高瀬一二四三……三九九
藤木神社　新見市長屋七九七の二……三九九
二柱神社　阿哲郡神郷町大字釜村三二七一……三九九
法高神社　新見市法曽一二五九……三九九
星神社　阿哲郡大佐町山奥二五六三……四〇〇
本宮神社　〃　大佐町山奥四四……四〇〇
三倉神社　新見市井倉九五……四〇〇
三穂津姫神社　阿哲郡大佐町小阪部二四五六……四〇〇
三穂津姫神社　〃　大佐町山奥一九九五……四〇〇
命山惣三神社　〃　哲多町蚊家三九四二―三……四〇〇
森瀬神社　〃　大佐町布瀬二四二九……四〇一
八門神社　新見市土橋一八〇三……四〇一
八代神社　〃　大佐町永富八七六……四〇一
築草神社　〃　大佐町布瀬三五六一……四〇一
湯児神社　〃　大佐町永富二三九七……四〇二
湯舟神社　〃　神郷町下神代四七〇〇……四〇二
和忠神社　〃　神郷町大字釜村一二〇〇……四〇二
綿津見神社　〃　哲多町大野一三二七……四〇二

蓬山神社　旧無格社

新見市千屋井原五四一

主祭神　大山祇命
例　祭　十月二十六日　**境内地**　一〇二坪
主要建物　本殿・通殿・拝殿
氏子数　一七戸
宮　司　佐々木　寛
責任役員　内田　清　角瀬　智
特殊神事　頭屋渡し神事
由緒沿革　本神社の創建、年代、由緒は不詳であるが、古くから奉斎していると認められる。鎮座地を山神谷と呼び、山林を営む者、砂鉄採取を営む者の崇敬が篤い。元禄八年四月、本多中務大輔が当地を検地の際、社地を除地と認めたことが見えている。

青木八幡神社　旧無格社

阿哲郡哲多町蚊家二三〇一

主祭神　譽田別尊　大山祇命
例　祭　十一月十五日　**境内地**　一二九坪
主要建物　本殿・幣殿・拝殿

明石神社　旧村社

新見市千屋一八二〇

主祭神　火産霊命
例　祭　四月十九日　**境内地**　六二坪
主要建物　本殿・拝殿
宮　司　多田春雄
由緒沿革　本神社は遠州秋葉宮から勧請した。旧称を秋葉宮と奉称した。創建年月日は不詳である。

秋葉神社　旧無格社

阿哲郡大佐町永富四〇五

主祭神　伊邪那岐命　伊邪那美命
例　祭　十一月十一（五）日
境内地　二五二・五八坪
主要建物　本殿・幣殿・拝殿・随身門
氏子数　三二戸
宮　司　西井進美
責任役員　大枝公夫　大枝福治　大枝満男　村沢貫治
宝　物　神代備中神楽面一揃
特殊神事　宮座の行事
由緒沿革　往時吉備津彦命が皇威の未だ辺域の地に潤わないため、皇子明石彦命を派遣せられたとき「なぎなみ」の二神を今の地に鎮座せられたとの伝説がある。明治維新神仏混淆が廃せされ、明石彦命の御名をとって明石神社とした。

愛宕神社　旧無格社

阿哲郡大佐町大井野一九一四

主祭神　軻遇突智命
例　祭　十月二十四日
境内地　七九・七五坪
主要建物　本殿・拝殿
宮　司　多田春雄
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳であるが、往古は当地に「タタラ鍛治」師がおって砂鉄採取に従事していたために、火の神を勧請した。

足立神社　旧無格社

新見市足立三七六

主祭神　大國主命　素盞嗚尊　大山祇神
例　祭　十月九日　**境内地**　一一五坪
主要建物　本殿・拝殿
氏子数　一三〇戸
宮　司　石田憲治
責任役員　原　美智造　峯森　栄　花田佳郎
由緒沿革　創建年代由緒不詳。応永年中。

天津神社　旧無格社

阿哲郡哲多町大字老栄一六九一

主祭神　天之御中主命
例　祭　十一月十八日
境内地　二五五・二五坪
主要建物　本殿・拝殿
氏子数　一四戸　**崇敬者数**　七〇人
宮　司　長江二美
責任役員　二鳴　茂　立川次男　鈴江　廉
由緒沿革　勧請年月由緒等不詳。老栄村田ノ上屋敷に妙見宮と称し、吉清の氏神として奉斎する。元禄年間は哲多郡成松村の諏訪山八幡神社を本神社とした。明治初年社号を天津神社と改称し、矢戸八幡神社の摂社となり、無格社として神社明細帳に登録せられている。

天津神社　旧無格社

阿哲郡神郷町大字高瀬三五二三

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十一月二十五日　**境内地**　一二六坪
主要建物　社殿・拝殿
氏子数　十八戸
宮　司　藤家弘巳
責任役員　福田智明　大原幸夫　田辺琢美
由緒沿革　勧請年月日は不詳であるが、野谷山の地名とともに野谷山妙見として奉斎し、樹木並に厄災退除の神として部落民の最も崇敬する神社である。もとは全山を神社神域として祭事も特殊な行事をしていた。明治初年に天津神社と改称した。昭和二十六年十月に御社殿全部を焼失した。

天津神社　旧村社

阿哲郡哲多町荻尾一五八一―四

主祭神　豊玉姫命
例　祭　十月十八日　**境内地**　四八〇坪
主要建物　本殿・幣殿・拝殿・社務所
氏子数　三二戸
宮　司　小川紀夫
由緒沿革　天録二年の創建という。

荒戸神社　旧村社

阿哲郡哲多町田淵九一七

主祭神　大綿積命　天照大神外十六柱
例　祭　十一月三日　**境内地**　四〇七坪
主要建物　本殿・祝詞殿・幣殿・拝殿・随身門・社務所・神輿庫
摂末社　山田神社　御崎神社　若宮　武経津神社
氏子数　一四〇戸
宮　司　渡辺　巌
由緒沿革　本神社は正中元年一月に荒戸山上に勧請した。嘉吉二年三月、火災のため焼失したので現在地に奉遷した。京都の吉田家から荒戸山正三位修正大明神の尊号をうけた。荒戸山に居城を構えた高橋宗康は神威を畏み馬酔木城に遷て荒戸山を御神林とした。元禄八年に龍野城主服部中務太夫は荒戸山二町歩を除地とした。明治四十一年十月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。同四十三年に田渕内の無格社を合祀した。

粟森神社　旧無格社

新見市千屋実一六七〇

主祭神　少彦名命
例祭　十月九日（十月十八日）
境内地　六七坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　一一戸
宮司　西井進美
責任役員　大枝理吉　大枝真澄　山田道広
由緒沿革　正徳年間の創建。その他不詳。

石上神社　旧無格社

阿哲郡神郷町大字釜村二〇九七

主祭神　倉稲魂命
例祭　十一月二十一日
境内地　四二坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　九戸
宮司　藤家弘巳
責任役員　大田正博　面田吉照　上田富昭

市杵島神社　旧無格社

阿哲郡大佐町小坂部六〇七

主祭神　市杵嶋姫命
例祭　三月十七日
境内地　一二九・九坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　四十戸
宮司　多田春雄
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳である。

稲荷神社　旧無格社

阿哲郡大佐町小阪部一三三六

主祭神　倉稲魂命
例祭　三月三日
境内地　三三・一五坪
主要建物　本殿
摂末社　荒神社　熊野神社　笑為神社
崇敬者数　二五〇人
宮司　多田春雄
由緒沿革　本神社は貞享年中に相州星下妙傳寺から勧請し奉った。旧称を稲荷大明神という。大白稲荷大明神は寛文六年に満勢下三輪から勧請し、正一位稲荷大明神は天保十四年四月に勧請した。

嚴島神社　旧無格社

阿哲郡神郷町大字釜村一〇九

主祭神　市杵島比賣命　多紀理比賣命　多岐津比賣命
例祭　十一月二十二日
境内地　一二七坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿
氏子数　十六戸
宮司　藤家弘巳
責任役員　名越虎雄
由緒沿革　勧請年月日は不詳であるが、享和二年以前に庄屋土岐国紗の祖先が安藝国宮島嚴島神社から勧請して釜村八か村の総鎮守とした。享和二年八月八日に御本殿の屋根を修理したとの棟札がある。明治初年に無格社となった。

由緒沿革　享保九年四月吉日に釜村奥谷の人等が不作、牛馬の災難のため相計って勧請し、安穏を祈願して当村大前良左衛門が本願主世話人となって、仝所道の上に石上神社と奉称して御社殿を創建した。明治初年無格社に列せられた。

嚴島神社　旧無格社

阿哲郡神郷町下神代四三五八

主祭神　田紀理比賣命　市杵島比賣命　多岐都比賣命
例祭　九月二十六日
境内地　四六・二二坪
氏子数　一六戸
宮司　奈須皐市
由緒沿革　本神社の創建は元禄五年四月という。

岩山神社　旧村社

新見市唐松三二八六

主祭神　天照大神　素盞嗚尊
例祭　十月二十日　**境内地**　六一五・五二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神輿庫　社務所
摂末社　祖霊社（護国神社）　八幡神社（大将軍神社）（稲荷神社）（龍王社）（御崎神社）
氏子数　三〇〇戸
宮司　渡邊幸彦

責任役員　熊瀬喜助　藤沢　力　藤井義夫　土屋政一　串馬　環
特殊神事　皆籠祭
由緒沿革　本神社は寛平元年九月伊勢大神宮および出雲大社から勧請し黒岩山に創建した。天明二年に松山藩主水谷公が黒岩山から現地に遷座し、藩主板倉公の崇敬の篤い祈願神社である。元は三十八社岩山大明神と称し、皆籠祭りは県下の奇祭として有名である。元弘年間に後醍醐天皇が隠岐へ御遷幸の時、位田の地に駐まりました時に里人が守衛のため一昼夜籠った。後、里人が御座の跡に帝の御魂と大国主命とを鎮祭して崇敬した。

岩山神社　旧村社

新見市草間七三八九

主祭神　大己貴命　事代主命　伊弉冉尊
例祭　十月十日　**境内地**　八一一坪
主要建物　本殿　拝殿　幣殿　神庫　社務所　随身門
摂末社　祖霊社他三社
氏子数　三八〇戸　**崇敬者数**　五〇〇人
宮司　神原正祥
責任役員　才田勲雄　梶上　操　杉　栄　田本隣治
長岡　幸
特殊神事　牛馬の祭
由緒沿革　天文年間に雲州冨田城主、尼子春久の臣杉布思入道が当村城崎城の城主となり、社殿を建立し、勧請したと伝える。大己貴命を祭神として岩山宮と称し奉る。

岩山神社　旧村社

新見市豊永字山六二五

主祭神　石凝姥命外十一柱神
例祭　十月二十五日（十一月二日）
境内地　五五五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫　社務所
摂末社　龍王神社
氏子数　六五戸　**崇敬者数**　三〇人
宮司　田本景範　**禰宜**　田本景忠
責任役員　西本玉三郎　常清長一郎　家本都治
由緒沿革　創建年代由緒不詳。

岩山神社　旧村社

新見市上熊谷三九二八

主祭神　石凝姥命（相殿）天兒屋根命　天太玉命　天玉屋命　天鈿女命
例祭　十一月五日　**境内地**　六〇〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神門

摂末社　稲荷神社　高龍神社　荒神社
氏子数　三〇〇戸
宮　司　池上正雄　**禰　宜**　小倉定子
由緒沿革　源義家の家人大宅光任の鎮守神であった光任の子光房が駿河国から京都に移住して当国に移封の時まで神牀を奉護した。正和二年に現在の岩山に斎祀して社殿を造営した。神威赫々として古来から霊験が著しい。永禄の頃から境内、及び山は除地となっていた。明治五年五月に村社に列格せられた。

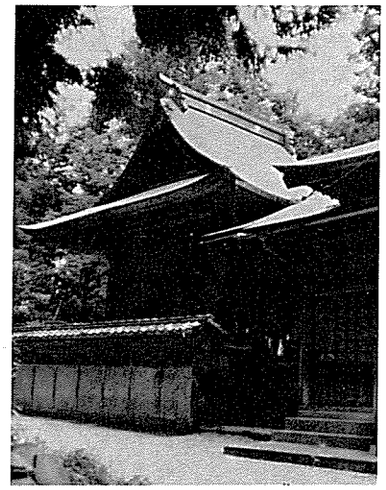
艮神社　旧村社

阿哲郡哲西町大字大竹一一八八

主祭神　伊弉諾尊　蛭子命　奥津彦命　奥津姫命
倉稲魂命
例　祭　十月九日　**境内地**　三一六・二五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随神門
摂末社　綿津見神社　坊峯神社　鷲神社　若宮神社
氏子数　五五戸
宮　司　金丸英夫
責任役員　浅井良一　渡辺長市　勢田　努　名越郷詞
岩本政太郎　瀬尾満男
宝　物　神鏡
由緒沿革　應保元年勧請。昭和十年村社に列せられた。

江原八幡神社　旧村社

新見市西方一五〇四



主祭神　譽田別尊外七柱
例　祭　十月十七日
境内地　四、三〇八・五九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　社務所
摂末社　海神社　稲荷神社
氏子数　四〇〇戸　**崇敬者数**　五〇人
宮　司　横内熊夫　**禰　宜**　横内久明
責任役員　柴田富治　辻原才吉　谷　節夫
由緒沿革　天安二年八月、豊前国宇佐神宮を勧請し、江原の平地に御社殿を建立し奉斎した。元久三年三月に社殿を建立し現在の地に遷座した。天正年中に楪城主今田上野守が社殿を造営した。寛文年中に松山城主水谷左京進が社殿を修覆した。貞享四年七月夜炎上。元禄元年九月に水谷勝明が社殿を再建した。本神社は楪城主、松山藩、新見藩守歴代の領主・藩主が崇敬した。

疫清神社　旧村社

阿哲郡哲西町大字八島五九三

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十一月九日
境内地　三二六・二六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　七二戸　**崇敬者数**　二五九人
宮　司　沖津和昭
責任役員　沖田　積　西川秀通　名越軍治
由緒沿革　本神社の創建は文安元年と伝える。承安の頃に牛頭天王を祀っていた。明治四十二年に村社に列せられた。大正三年に倒木によって御社殿が破損したので御本殿ほかを再建した。

疫清神社　旧村社

阿哲郡神郷町大字釜村四一九一

主祭神　須佐之男命
例　祭　十一月十七日　**境内地**　一五二坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿
氏子数　七戸
宮　司　藤家弘已
責任役員　神崎　敏　宮崎節夫　坂本吉美
由緒沿革　寛文十一年に釜村の神主飯田忠清同作大夫の両人が願主となって、釜村田井谷に疫清神宮と称えて須佐之男命を御祭神として一宇を建立し奉斎した。村中の安全の守護を祈った。以後三十年毎に御社殿の屋根の修理を行い、明治初年に村社に列格せられた。

大池神社　旧無格社

阿哲郡大佐町小阪部三五七三

主祭神　禰都波能賣神
例　祭　五月十五日　**境内地**　九〇坪
主要建物　本殿
氏子数　五〇戸
宮　司　多田春雄

大碓神社　旧無格社

阿哲郡神郷町大字油野三三一三

由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳であるが、海抜一千米の大佐山の八合目の池中に鎮座している。往古から雨乞祭、雨上げ祭を行う農業神である。

主祭神　大碓命
例　祭　九月二十九日　**境内地**　二〇六・七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
宮　司　藤家弘已
由緒沿革　本神社の創建年代は不詳。美濃国から当油野村上油野皇子山に勧請し崇敬したが年月は不詳である。当空の田山復に奉遷し皇太子神社と称え、安永三年三月念日に領主板倉隠岐守が御社殿を造営し、神田引として毎年米一斗五升を奉納した。

大蔵神社　旧無格社

阿哲郡大佐町布瀬二七五六

主祭神　倉稲魂命
例　祭　十月二十日　**境内地**　二七坪

皇子神社　旧無格社

阿哲郡哲多町老栄三一七

主祭神　天忍穂耳命
例　祭　十一月十一日　**境内地**　九二四坪
主要建物　本殿　幣殿
氏子数　二一戸
宮　司　長江二美
責任役員　中川壽男　安達貞一　立石朗郎
由緒沿革　創立年月由緒不詳。

大佐神社　旧村社

阿哲郡大佐町小阪部二〇八五

主祭神　阿蘇津彦命　阿蘇津姫命

主祭神　禰都波能賣神
例　祭　五月十五日　**境内地**　九〇坪
主要建物　本殿
氏子数　五〇戸
宮　司　多田春雄

例　祭　十月九日
境内地　三、〇四五・七五坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿　随身門
摂末社　大土神社　水分神社　大御前神社　塞神社
氏子数　九〇戸
宮　司　多田春雄　禰宜　戸部静江
由緒沿革　本神社の創建は桓武天皇の延暦三年八月に肥後国から小坂部大佐山に勧請建立した。旧称を大阿蘇大明神と号した。くだって元文元年九月に再建した。大正十四年九月三十日に神饌幣帛料供進神社に指定された。

大佐神社

阿哲郡大佐町小阪部三五七四

主祭神　狭依毘賣命　多紀理毘賣命　多岐都毘賣命
例　祭　四月二十四日
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　二七戸
宮　司　多田春雄
由緒沿革　本神社の創建は不詳であるが、由緒写によると、大佐大権現は伯州大山知明大権現を勧請し、大佐山八合目に建立したという。近辺からの参詣人が多い。

大滝神社

阿哲郡大佐町小阪部九九

主祭神　素盞嗚命
例　祭　二月二十一日　**境内地**　四九坪
主要建物　本殿
宮　司　多田春雄
由緒沿革　本神社の創建年月日不詳。

大槻神社

阿哲郡大佐町小阪部二三九八

主祭神　大己貴命　少彦名命
例　祭　十一月九日　**境内地**　二二坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　七戸
宮　司　多田春雄
由緒沿革　本神社は正徳四年八月に創建。旧称を大明神ととなえた。

太歳神社

新見市千屋二三一

主祭神　太歳神
例　祭　十一月十五日　**境内地**　一〇八坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　二三戸
宮　司　西井進美
責任役員　間平文一郎　平田作一　谷本邦定
由緒沿革　正徳年間の創立と伝える。その他不詳。

大己貴神社

阿哲郡大佐町小阪部三〇六一

主祭神　大己貴命
例　祭　四月四日　**境内地**　五〇・二五坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　一七戸
宮　司　多田春雄
由緒沿革　本神社は寛永七年春、大佐山南平八合目に創建した。旧社号を日吉山王権現と称した。

主祭神　誉田別尊　（配祀）足仲彦尊　気長足姫尊
例　祭　十月二十二日（十一月十二日）
境内地　五七九坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　随身門　神輿庫
社務所
摂末社　御崎神社（杉谷荒神社　厳島神社　村下荒神社　七社明神神社　国司神社　守市神社　駅前荒神社　地神）
氏子数　二三〇戸
宮　司　渡邊幸彦
責任役員　小川　厚　森本秋男　小川清志
特殊神事　御調神楽
由緒沿革　本神社は大同元年六月九州筥崎八幡宮から勧請した古社で、元十五ヶ村の氏神である。領主石蟹山城主三村元宣公藩主水谷左京亮勝宗公、板倉美濃守勝武公、板倉周防守勝政公の崇敬の篤い神社で、例祭には備中七十二郷の国土安穏、五穀豊饒を祈願し、御調神楽を奏した例がある。明治四年に村社に列し、大正十年に神饌幣帛料供進すべき神社に指定せられた。昭和二十年一月十日に郷社に認定せられた。

大本八幡神社　旧郷社

新見市石蟹一八〇

主祭神　大山祇命
例　祭　十月二十九日　**境内地**　二五・九〇坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　一四戸
宮　司　多田春雄
由緒沿革　本神社の創建年月は不詳である。

大山祇神社　旧無格社

阿哲郡大佐町大字上刑部一一五四

主祭神　前玉之命（合祀神）伊弉諾尊外十一柱神
例　祭　十月九日　**境内地**　三〇二・四二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神庫
摂末社　稲荷神社　龍神社（他一社）
氏子数　九〇戸
宮　司　神原正祥
責任役員　木曽田鈴三　磯田秀夫　木曽田
特殊神事　御月祭
由緒沿革　天應元年十一月一日勧請と伝える。無格社を合祀して村社となる。前玉之命は埼玉県埼玉郡埼玉村前玉神社の御分霊を勧請したと思われる。大正十年十一月に宮山神社を合祀する。昭和六年十月に神饌幣帛料を供進すべき神社に指定せられた。

御前神社　旧村社

阿哲郡大佐町布瀬四〇三

主祭神　大己貴命　須勢理姫命
例　祭　十月二十八日　**境内地**　八・八坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　十戸
宮　司　藤家弘巳
責任役員　吉永正志　小鉄　勉　上村泰三
由緒沿革　創建年月不詳。もと山王権現と称え笹尾田井屋に牛馬の守護神として奉斎した。

奥田神社　旧無格社

阿哲郡神郷町大字油野一一一五

主祭神　天児屋根命
例　祭　十月八日・第一月曜日

春日神社　旧村社

阿哲郡哲西町大野部三六八四

境内地　二八六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　海津見神社
氏子数　六五戸　**崇敬者数**　約一三〇人
宮　司　小篠　功
責任役員　遠藤哲生　佐伯一三　奥津安登
由緒沿革　元応元年斉藤尾張守景宗は備中国内四郷五邑を領し、下大野部に居城を構えた。翌二年春日峯に祖神天児屋根命を奉斎した。貞治五年九月十五日、現地春日に奉遷し氏子の共営とした。明治四十二年村社に列し、大正四年九月十六日に合祀した。

亀尾神社　旧無格社

阿哲郡神郷町大字高瀬二四三九

主祭神　伊弉諾命
例　祭　十一月二十四日　**境内地**　一七三坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　五十戸
宮　司　藤家弘巳
責任役員　松浦展男　井田武男　大原芳雄
由緒沿革　勧請年月日は不詳であるが、口碑によると天正年間に高瀬村に悪疫が流行して毛利氏の家臣の勝か城主安藤彦右衛門がこれを憂えて、宇亀尾の地に御社殿を建立し、伊弉諾尊を主祭神として十二神を勧請奉斎した。旧社号も亀尾十二社権現とも奉称した。弘化三年十一月に仝村角助が発願して村中の安全五穀豊饒の大祈願を行った。

柏森神社　旧村社

新見市正田八一九の一

主祭神　天児屋根命（配祀）天照大神　月夜見命
例　祭　十月十九日　**境内地**　五〇七・八二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神庫　社務所
摂末社　荒神社　稲荷神社　御崎神社　若宮社　八神殿
氏子数　二七〇戸
宮　司　柴田元美
責任役員　福田千里　福本昇一　河原克人
由緒沿革　仁和二年大和國春日神社から美賀郡正田村上瀬戸の下に大岩があったが、その上に七十二社大明神として勧請した。正保四年に庄屋林住左衛門が一宇を再建した。明暦三年九月十九日祭礼の事を定め、栢森大明神と改称した。明治四十三年五月八日村社一社無格社三社を合祀した。大正六年一月十一日に神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

木谷神社　旧無格社

阿哲郡神郷町大字高瀬二〇五

主祭神　須佐之男命　奇稲田姫命
例　祭　十一月十二日　**境内地**　一二六坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿　随身門
氏子数　二十戸
宮　司　藤家弘巳
責任役員　長谷川清吾　高橋福一　西田　保
由緒沿革　寛文年間に仝村住人の西名平六が出雲国須佐神社から勧請して、疫神社と称した。厄除の守護神として奉斎した。明治四十年旧正月三日に御社殿その他一切の旧記を火災で消失した。大正十一年八月に御社殿を建立した。明治四十三年に旧社号疫神社を木谷神社と改称した。

國司神社　旧村社

阿哲郡大佐町大字田治部二〇〇三

主祭神　大國主大神　事代主大神　少彦名大神　大己貴命
例　祭　十一月九日　**境内地**　一、五八六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　社務所
摂末社　境内社　稲荷神社他六社　境外社　八幡神社他十社
氏子数　一八五戸　**崇敬者数**　三、五〇〇人
宮　司　西井太久美
責任役員　古田猛太郎　安立頼夫　吉本啓作
宝　物　太刀二振
特殊神事　太鼓撥封じ、八幡神社祭（強飯祭）
大山神社祭（大飯喰祭）

由緒沿革　往古、この地を山勝、沢勝の夫婦が開拓した。後、綾麿が塩滝の麓で田をあらす悪虫除去、降雨を祈願して大己貴神を奉祀した。後、出雲大社から御神璽をいただき山中に奉遷して建久二年社殿を造営したと伝える。明治五年、村社に列した。新見藩から三十二石の社領をうけていた。

國司神社　旧無格社

新見市正田一六九四

主祭神　大國主大神（命）
例　祭　十月十八日　**境内地**　四八〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫
摂末社　若宮社
氏子数　四五戸
宮　司　渡邊幸彦
責任役員　村上熊雄　山本宗一　吉村　實　吉見喜作　森口正男
由緒沿革　本神社は延長元年の創建。時の豪族が国土開発万民和楽の神徳を尊び、守護神として大国主命を祭祀し一族の氏神とした。その後、この地が発展し、今日の楽土郷になった。

國司神社　旧村社

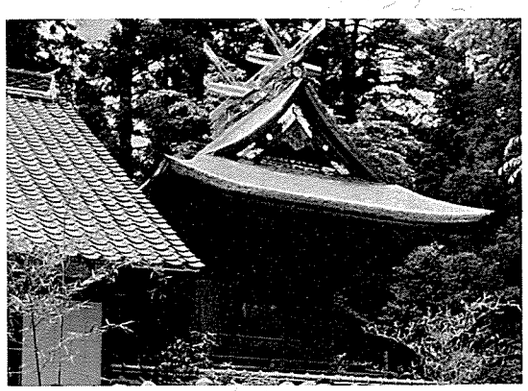
新見市千屋井原一一二五

主祭神　大己貴命　大年神　相殿埴山姫命　事代主命
例　祭　十月二十九日　**境内地**　一、〇二七坪
主要建物　本殿　通殿　拝殿　随身門　神輿庫
摂末社　荒神社　稲荷神社　荒神社
氏子数　五〇戸
宮　司　佐々木　寛
責任役員　平田政治　肥田武雄　阿部瀧男
宝　物　神輿
特殊神事　年度替頭屋神事
由緒沿革　創建年代不詳。古来、国主神社、大國主神社と奉称していた。慶長の初め祀官の佐々木氏の名がある。元禄八年四月に本多中務大輔が検地の際は、本殿・拝殿・釣殿の建造物が完備していた。

国司神社　旧村社

新見市高尾一七六三

主祭神　大己貴命（配祀）田心姫命　瑞々杵命　大龍彦命　市杵島姫命外十二柱
例　祭　十月十一日　**境内地**　七四七・七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　随身門
摂末社　稲荷神社　御崎神社
氏子数　六〇〇戸　**崇敬者数**　五〇人
宮　司　中島元幸
責任役員　中西鶴松　玉木時雄　杉山　寿
由緒沿革　創建年月日は不詳であるが、古文書によると天正年間以前である。寛文年間には領主水谷松山城主が本殿を再建。新見藩主関公が御社殿を造営し、神田引等があった。明治六年村社となり、同四十二年に八幡神社外二十社を合祀し、大正十年九月に神饌幣帛料供進神社に指定せられた。



國司神社　旧村社

阿哲郡神郷町下神代一七五八

主祭神　大己貴命　大綿津見神　大山祇神

例　祭　十月九日　**境内地**　三〇九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　綿津見神社　下山神社
氏子数　二五〇戸
宮　司　奈須皞市
由緒沿革　本神社の創建は寛永三年三月二十五日である。

國司神社　旧村社

阿哲郡大佐町小阪部一七二一

主祭神　大國主命（相殿）息長帯姫命　宗像三女神
譽田別尊
例　祭　十月九日　**境内地**　六〇九・七五坪
主要建物　本殿　拝殿　釣殿　随身門
摂末社　神明神社　二柱神社　稲荷神社　火ノ御前神社　鷲神社　荒神社
氏子数　五〇戸　**宮　司**　多田春雄
由緒沿革　本神社は寛永二年山城国雄徳山から、小阪部郷國司の地に勧請奉斎した。旧称を正八幡宮と号した。寛文四年十月、領主水谷新右衛門勝能から米一斗五升を永代のため寄進された。本神社の旧称を正八幡宮と称した。

主祭神　大國主命
例　祭　十一月十一日　**境内地**　二〇九坪

阿哲郡大佐町大井野三三六九

主祭神　熊野大神
例　祭　五月五日　**境内地**　三三〇坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　稲荷神社

熊野神社　旧無格社

阿哲郡大佐町永富八七七

主祭神　事解之男命
例　祭　十月十七日　**境内地**　三十四坪
主要建物　本殿　拝殿
宮　司　奈須皞市
由緒沿革　本神社の創建は不詳。

國主神社　旧村社

新見市上市七四四

主祭神　大國主命　須勢理姫命　少彦名命
例　祭　十月十三日　**境内地**　三四〇・一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神庫
摂末社　御崎神社　高栗神社　諏訪神社　天満宮
氏子数　二五〇戸
崇敬者数　六〇、〇〇〇人
宮　司　石田　薫
禰　宜　石田憲治　権禰宜・石田斎義
責任役員　武田一男　石垣堅固　宮永孝雄　林　壽治　則本政邦
由緒沿革　創建年月日等不詳であるが、口碑によると人皇第七十代後冷泉天皇の永承年間出雲國出雲大社から勧請したもので、出雲大社北島國造が三度参拝した記録がある。

國主神社　旧無格社

阿哲郡大佐町永富八七七

主祭神　熊野大神
例　祭　五月五日　**境内地**　三三〇坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　稲荷神社

熊野神社　旧村社

阿哲郡神郷町下神代三三七八

主要建物　本殿　拝殿
氏子数　一九戸
宮　司　多田春雄
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳である。

氏子数　四五戸
宮　司　西井　愷　小堀清次　金田忠平　沼本寅治
責任役員
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳であるが、応永年間に当地の地頭水谷家が紀州の熊野神社から勧請した。当時は熊野十二社権現社、神元神社と奉称し、地頭家の祈願所として造営した。祭典等の費用は水谷家が半分、永富八か村が残りの半分を負担した。明治九年四月二十日に村社に列格せられた。

熊野神社　旧無格社

阿哲郡大佐町小阪部三二五二

主祭神　熊野大神
例　祭　十一月十四日　**境内地**　一〇四坪
主要建物　本殿
摂末社　山神社
氏子数　十七戸
宮　司　多田春雄
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳である。

熊野神社　旧無格社

阿哲郡大佐町山奥一四六三

主祭神　熊野大神

例　祭　十月二十六日　**境内地**　一八〇坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　五戸
宮　司　多田春雄
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳である。

熊野神社　旧無格社

阿哲郡大佐町大井野三一一五

主祭神　熊野大神
例　祭　十一月十日　**境内地**　一五三坪
主要建物　本殿　拝殿
宮　司　多田春雄
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳である。本神社は旧社名を十二社権現という。元弘二年三月十五日に後醍醐天皇が玉居野村君山に駕をお駐めになった際、当社に一夜をお明かしになった縁起がある。

倉嶋神社　旧無格社

新見市千屋九九五

主祭神　倉稲魂命

例　祭　旧十月十九日　**境内地**　一六八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　一七戸
宮　司　西井進美
責任役員　常松多吉　金盛静雄　山本権次
特殊神事　宮座の儀式を行う。
由緒沿革　元禄五年九月の勧請。その他不詳。

後醍醐神社　旧村社

阿哲郡大佐町大井野一五九八

主祭神　後醍醐天皇
例　祭　九月二十一日　**境内地**　六三七・五〇坪
主要建物　本殿　拝殿　神饌所
摂末社　狼神社　御前神社　菅天神社　國主神社　荒神社
宮　司　多田春雄
由緒沿革　後醍醐天皇が元弘の変で隠岐国へ御遷幸の時に、山陽路を経て美作国真嶋郡宇南寺に入り、車駕を備中玉居野（大井野）に駐められ、元弘二年三月、この地に社殿を造営せられた。明治五年六月に村社に列格せられた。昭和十八年六月五日に神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

氏子数　七戸
宮　司　藤家弘巳
責任役員　大塚孝克　須田　薫　大本顕人
由緒沿革　創建年月は不詳であるが、この地の五穀牛馬の守護神として奉斎し、文化四年十月二十日に御社殿を再建した。

湖見神社　旧村社

新見市坂本一一六一

主祭神　彦火々出見命外八柱神
例　祭　十月十日　境内地　三八二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神輿庫
摂末社　今宮社他五社
氏子数　七五戸
宮　司　渡辺吉秀
責任役員　田中敏夫　岡　嘉太郎　吉田　誠
宝　物　陣刀一口、十文字長槍一振
特殊神事　おはけ祭
由緒沿革　明徳三年五月十八日に江州湖見丘から勧請した。大正六年十二月二十六日無格社武内神社外七社を合祀した。大正十五年六月二十二日神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

荒神社　旧無格社

阿哲郡神郷町大字油野六一五

主祭神　大年神　奥津比古命　奥津比賣命
例　祭　十月六日　境内地　二一・六五坪
主要建物　本殿　拝殿

荒神社　旧無格社

阿哲郡大佐町布瀬一八一二

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月十八日　境内地　七七・七坪
主要建物　本殿

荒神社　旧無格社

阿哲郡大佐町小南三二七

主祭神　猿田彦命
例　祭　六月二十四日
境内地　一四四・二二坪
主要建物　本殿
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳である。

荒神社　旧無格社

阿哲郡大佐町永富四七二

主祭神　佐田彦大神
例　祭　二月二十八日　境内地　三四・二五坪
主要建物　本殿
宮　司　多田春雄
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳である。

荒神社　旧無格社

阿哲郡神郷町下神代四〇六七

主祭神　猿田彦命
例　祭　十月二十八日
氏子数　四〇戸
宮　司　奈須皷市
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳である。

荒神社　旧無格社

阿哲郡大佐町小阪部二六七八

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月二十九日　境内地　六七・七五坪
主要建物　本殿　拝殿
宮　司　多田春雄
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳である。

荒神社　旧無格社

阿哲郡大佐町大井野二五二五

主祭神　佐田彦命
例　祭　十月二十五日　境内地　九〇・五〇坪
主要建物　本殿　拝殿
宮　司　多田春雄
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳である。

皇大神社　旧村社

阿哲郡哲西町大字畑木一〇二五

主祭神　天照大神（配祀）月夜見命　仲哀天皇　神功皇后　應神天皇
例　祭　十月十五日（十月第三日曜日）
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫　倉庫
摂末社　木野山神社　疫隅神社　大山神社
氏子数　九〇戸
宮　司　難波宗朋
責任役員　西岡弥太郎　横田平馬　名越　翁　栃木武志　藤原　勇　西川英市　藤村二郎　藤村侃市
由緒沿革　長治元年二月、難波忠太が伊勢の皇大神宮から御分霊を勧請したと伝える。古くは神明社、伊勢宮と称していた。往古当地が伊勢の御厨であったためと考えられる。後、皇大神社と改めた。大正元年十二月八幡神社を合祀した。

金刀比羅神社　旧無格社

阿哲郡大佐町小南四九四

主祭神　金山彦神　大物主神
例　祭　三月十日　境内地　一八坪
主要建物　本殿　拝殿
宮　司　多田春雄
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳。

許母利神社　旧無格社

阿哲郡大佐町小阪部三八九

主祭神　三穂津姫命（相殿）火産霊神　大山祇神
例　祭　十月十四日
主要建物　本殿　拝殿
宮　司　多田春雄
由緒沿革　本神社の創建は不詳である。

笹尾神社　旧無格社

阿哲郡神郷町油野九四五

主祭神　譽田別尊　大國主命
例　祭　十月四日　境内地　五一・六三坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　八戸
宮　司　藤家弘巳
責任役員　矢吹篤義　植原泰二　須田　勝
由緒沿革　創建年月は不詳であるが、笹尾皇子畝山腹に勧請して氏神として奉斎した。享保元年九月吉日に備中松山城主石川主殿が安泰を祈って御社殿を再建した。

笹子山神社　旧無格社

新見市千屋実一五二四

主祭神　市杵島姫命　大己貴命
例祭　十月二十日
主要建物　本殿　拝殿　神楽所
氏子数　三〇戸
宮司　西井進美
責任役員　田枝　正　道繁正友
由緒沿革　正徳年間の勧請。その他不詳。

山神社　旧無格社

阿哲郡神郷町大字油野四〇〇八

主祭神　大山祇命
例祭　十月二日　**境内地**　六三・八坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　十三戸
宮司　藤家弘巳
由緒沿革　油野村三室字宮谷は往古に鉄を産出する処で、全所に住む鍛冶屋某氏が大山祇命を勧請して信仰して居たが、明和二年八月に領主板倉美濃守が御社殿を再建し、文久元年九月晦日には領主板倉周防守が御社殿を再建し造営し、神田引として毎年一斗ずつを奉納した。

山神社　旧無格社

阿哲郡神郷町大字油野五三一

主祭神　大山祇命（合祀祭神）豊玉姫命　素盞嗚尊
波濱武鵜草葺不命
例祭　十一月十日　**境内地**　八一・七四坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　十四戸
宮司　藤家弘巳
責任役員　山口恒郎　福田森夫　戸田　満
由緒沿革　元禄十三年十月吉日に篠尾山畝に御祭神大山祇命を山の守護神として勧請奉斎し、氏子となった。延享二年十二月吉祥日に当国松山城主石川殿茂之守時代に願主郷清式部大夫が御社殿を再建した。

山神社　旧無格社

阿哲郡哲多町大野七二八

主祭神　大山祇命
例祭　十月九日　**境内地**　三五坪
主要建物　本殿　拝殿
宮司　渡辺　巌
由緒沿革　本神社の創建年月日、由緒等不詳。

山神社　旧無格社

阿哲郡大佐町小阪部六五二

主祭神　大山祇命
例祭　二月二十八日　**境内地**　二七坪
主要建物　本殿
摂末社　荒神社
宮司　多田春雄
由緒沿革　本神社の創建年月日、由緒等不詳。

三社女躰神社　旧村社

新見市菅生四九五五

主祭神　狭依毘賣命　多紀理比賣命　多岐都比賣命
例祭　十月十一日　**境内地**　九七六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神輿庫　社務所

主祭神　大山祇命

摂末社　稲荷神社　八幡神社　武太神社　二柱神社
國司神社　外一二社
氏子数　二六〇戸
宮司　西井進美
責任役員　分部道太郎　谷岡忠雄　谷村治美
由緒沿革　神武天皇御東遷の砌皇軍は高梁川を北進して、この地に来て宗像三神を豊穂会田の岩上に奉斎した。後、東方大明神山に奉遷し、同山上に三宇の社殿を造営して三社大明神として尊崇した。後、社地を現在地に移し、元徳二年八月の神輿奉遷に当っては、故事を尊び豊穂会田の元の岩上に奉斎し、月余に亘り鎮座し、九月二十一日に新宮に遷座した。應永元年八月に社殿を造営し、文安三年に社殿が炎上し、同四年に復旧した。享和元年七月に社殿を造営した。明治五年九月に村社に列した。大正十五年に神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

新宮神社　旧村社

阿哲郡大佐町山奥一三三九

主祭神　速玉男命
例祭　九月二十九日　**境内地**　一二六坪
主要建物　本殿　拝殿　神饌所
摂末社　山神社　荒神社
宮司　多田春雄
由緒沿革　本神社は紀州熊野から勧請しているが、創建年月日は不詳である。現在の社殿は元治四月の再建である。明治五年に村社に列格せられた。

杉戸神社　旧村社

阿哲郡神郷町大字油野二〇六一

主祭神　天手力男命　天児屋根命　天太玉命　天鈿女命
例祭　十一月五日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　天満宮　荒神社
氏子数　五十戸
宮司　藤家弘巳
責任役員　福田義男　池田保男　長谷川　広
由緒沿革　油野村中の総社で元油野村下油野字宮がけに氏神として勧請したが、四域が皆通路で交通する人が馬に乗って往来すれば神の祟りがあって厄災が多かったので、氏子が相議かり高地に奉遷した。後にこの地を杉戸山と称した。明徳元年九月に蔡野城主平重春が御社殿を再建した。後、備中松山藩主が本殿その他の御社殿を造営し、神田引として毎年二斗五升を奉納した。明治六年に村社に列格。大正十二年十二月に神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

高龗神社　旧無格社

阿哲郡大佐町山奥二一三二

主祭神　高龗神
例祭　十月二十三日　**境内地**　二八坪
主要建物　本殿　拝殿
宮司　多田春雄
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳である。

武内神社　旧新設社

阿哲郡哲西町大字矢田二四〇九

主祭神　武内宿禰　市杵嶋姫神　田心姫神　湍津姫神
例祭　十一月十五日　**境内地**　九〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
宮司　難波宗朋
責任役員　大久保節男　伊達繁男　小川恒雄　麻月甚三郎　毛利平四郎　難波誠一　羽田弥吉
由緒沿革　矢田八幡神社が建暦元年創建せられたとき、八幡神の守護神として、武内宿禰を隣接地に鎮祭したのにはじまると伝えるが、詳細は不明である。昭和二十二年六月二十日新設せられた。

立脇神社（たてわき）　旧無格社

阿哲郡大佐町永富一一〇

主祭神　手力男命
例　祭　四月十八日　**境内地**　一一五・五〇坪
主要建物　本殿
摂末社　白鳥神社
宮　司　多田春雄
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳である。

千屋神社（ちや）　旧村社

新見市千屋実二二五九

主祭神　天児屋根命　比賣神　武甕槌命　伊波比主命　大山祇命
例　祭　十一月一日　**境内地**　一、四六一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神輿庫　社務所
摂末社　稲荷神社　荒太神社
氏子数　五三戸
宮　司　西井進美
責任役員　児玉正治　渡辺隆雄　大枝　武

特殊神事　例年には神馬を御神幸にくわえる。例祭の御餅の神鏡餅は古式により伝わる行事あり
由緒沿革　文安年間に創建したと伝える。往古春日三笠山からこの地に奉祀したものである。永禄三年以降の古文書によると、千屋代大明神、四社大明神、春日大明神と称え、明治維新の際に千屋神社と改称した。千屋里の総代神で、宝暦十一年の旧記では神主以下八名の新家で奉仕したという。

天神（てん）　旧無格社

阿哲郡大佐町永富七二五

主祭神　菅原神
例　祭　六月二十五日　**境内地**　二七三・一二坪
主要建物　本殿　拝殿
宮　司　多田春雄
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳である。

天王八幡神社（てんのうはちまん）　旧村社

阿哲郡哲多町蚊家一七〇八

主祭神　素盞嗚尊　稲田姫命　譽田別尊　大山咋命　大山祇命　建御名方命　宗像三女神　伊弉諾尊　大年神　綿津見命
例　祭　十一月十四日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　随身門　休憩所
宮　司　渡辺　巌
由緒沿革　本神社の創建は承應二年という。天文八年八月に大山咋命を、同十八年八月に譽田別尊を勧請した。素盞嗚命、稲田姫命は承応二年六月に勧請している。明治四十三年十二月に山王八幡神社と無格社とを合祀した。神社名疫隅神社を大正六年九月に天王八幡神社と改称した。大正十年十月に神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

例　祭　二月二十五日　**境内地**　一一・二五坪
主要建物　本殿　拝殿
宮　司　多田春雄
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳である。

天王八幡神社（てんのうはちまん）　旧村社

阿哲郡哲多町蚊家一七〇八

主祭神　素盞嗚尊　稲田姫命　譽田別尊　大山咋命　大山祇命　建御名方命　宗像三女神　伊弉諾尊　大年神　綿津見命
例　祭　十一月十四日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　随身門　休憩所
宮　司　渡辺　巌
由緒沿革　本神社の創建は承應二年という。天文八年八月に大山咋命を、同十八年八月に譽田別尊を勧請した。素盞嗚命、稲田姫命は承応二年六月に勧請している。明治四十三年十二月に山王八幡神社と無格社とを合祀した。神社名疫隅神社を大正六年九月に天王八幡神社と改称した。大正十年十月に神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

天満（てんま）神社　旧村社

阿哲郡哲多町大字老栄一一八八

主祭神　菅原神
例　祭　十一月二十五日　**境内地**　二五五・六二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫
氏子数　二七戸　**崇敬者数**　一五〇人
宮　司　長江二美
責任役員　新上美佐男　久保木政雄　佐藤　生　小原健一
由緒沿革　創建年代由緒不詳。

天満神社（てんま）　旧村社

新見市上市町金谷七六七

主祭神　菅原道真公
例　祭　十月十二日　**境内地**　二五七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神輿庫
摂末社　後醍醐神社　稲荷神社
氏子数　一三〇戸
宮　司　渡辺吉秀　**禰　宜**　渡辺昭臣
責任役員　香西慎二郎　田中　猛　塩田　茂

宝　物　木座像（万治三年十一月吉日吁院作）
由緒沿革　文禄元年三月朝鮮の役に本村住人山根庄之助が召されて出征し慶長三年十月凱旋の帰途、太宰府天満宮に詣で報賽のため御分霊を奉じて帰村して奉斎し、金山天神と称し奉った。天明九年六月社地に御社殿を増改築。大正十二年三月村社岩谷神社を合祀し村社となった。昭和九年九月に神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

戸部神社（とべ）　旧無格社

阿哲郡大佐町小阪部七二五

例　祭　十一月二十一日　**境内地**　二四六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神輿庫　社務所
氏子数　九八戸
宮　司　三上義治
責任役員　林　章良　野尻順平　中田　茂
由緒沿革　元仁元年相模国小松の郷から千種左衛門尉常安が御神霊を奉斎して、今年九月備中国哲多郡宮河内村新屋垣庄大本山に勧請して崇敬した。貞永元年四月社殿を建立し大氏神として九月二十八日を祭日とした。永仁六年に後伏見天皇践祚の時、大嘗会献穀主基の地として、卜定された。明治初年村社になり、明治四十三年成松元郷社八幡神社に合祀した。昭和二十五年豊岡八幡神社として設立した。

主祭神　天児屋根命
例　祭　十一月十六日
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　稲荷神社
宮　司　多田春雄
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳である。

豊岡八幡神社（とよおかはちまん）　旧村社

阿哲郡哲多町大字宮河内二八八四―二

主祭神　譽田別尊　大山祇命
例　祭　九月十日　**境内地**　一一七坪
主要建物　本殿　拝殿
宮　司　渡辺　巌
由緒沿革　創建年月日は不詳。慶長年間に当地の住人土屋権守が朝鮮征伐よりの帰途、九州八幡の八幡神社から朴の木一枝を持帰り、今の境内に差植えて、この木がついたので、中野山に社殿を築いて八幡神を勧請して崇敬した。現在、本殿横裏にある朴の古木は直径

中野山八幡神社（なかのやまはちまん）　旧無格社

阿哲郡哲多町大野一六九八

主祭神　譽田別尊　大山祇命
例　祭　九月十日　**境内地**　一一七坪
主要建物　本殿　拝殿
宮　司　渡辺　巌
由緒沿革　創建年月日は不詳。慶長年間に当地の住人土屋権守が朝鮮征伐よりの帰途、九州八幡の八幡神社から朴の木一枝を持帰り、今の境内に差植えて、この木がついたので、中野山に社殿を築いて八幡神を勧請して崇敬した。現在、本殿横裏にある朴の古木は直径

三尺以上もある。

直日神社　旧無格社

阿哲郡大佐町山奥五六〇

主祭神　大直日神
例　祭　十月二十八日
境内地　八八・〇〇坪
主要建物　本殿
宮　司　多田春雄
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳である。

楢ノ木山八幡神社　旧無格社

阿哲郡哲多町大野一九六七

主祭神　譽田別尊　大山祇命
例　祭　十月十日　**境内地**　四九坪
主要建物　本殿　拝殿
宮　司　渡辺　巌
由緒沿革　本神社の創建は慶長年間という。

畑村神社　旧無格社

阿哲郡大佐町布瀬三四七五

主祭神　埴安比賣命
例　祭　十月二十一日　**境内地**　五七・八〇坪
宮　司　竹田　勇
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳である。

八幡神社　旧村社

阿哲郡哲西町大字上神代四〇〇六

主祭神　湍津姫命（配祀）譽田別尊　神功皇后　玉依姫命
例　祭　十月一日
主要建物　本殿　釣殿　拝殿　神輿庫　随身門　宝庫　社務所
摂末社　靖国神社　若宮社　荒神社　山之神神社
氏子数　二七五戸　**崇敬者数**　一五〇人
宮　司　荒木一二三
責任役員　水上宮人　安田　保　羽場三郎　宮田正春　三輪勘市
宝　物　宝刀　鎧　獅子頭　書画
特殊神事　観櫻祭　靖国祭



由緒沿革　一条天皇の御宇長保年間、中国に凶徒が蜂起した際、名越常陸守が討伐の命を受け、男山八幡宮に祈誓し大勝したので、その報恩のため大砂山に奉斎した。後醍醐天皇の御宇、上神代日尾山に遷座した。永禄三年毛利輝元が検地の際に社殿を再興し、慶長十年境内地山林一町二段歩を寄進した。同年松山城主池田備中守が社殿を造営した。天和年間に国主水谷左京が舞殿、鳥居を建立した。明治三年、社殿が炎上し仮殿を建てた。同十一年、本殿を改築し神輿庫を新築した。

八幡神社　旧村社

阿哲郡哲西町大字矢田二三六八

主祭神　譽田別尊　神功皇后　玉依姫命
例　祭　十月五日（十月第一日曜日）
境内地　七九四・五三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神輿庫
摂末社　萩森神社　他五社
氏子数　二七〇戸
宮　司　難波宗朋　**禰　宜**　難波宗隆
責任役員　井上数義　細川達海　後藤　武　小山一政　福田碩夫
宝　物　神鏡四面
特殊神事　例祭前後の宮神楽
由緒沿革　正治元年二月八日に難波市左衛門宗成と、岩井甚左衛門盛次が、伊勢国朝熊滝八幡宮から御分霊をいただき、矢田福生庄に一時勧請したが、同地が狭隘なので、建暦元年八月二日に現在地に社殿を造営し奉遷したと伝える。古くは矢田村、田渕村、南北村、仲間村の氏神であったと言う。現在は哲西町大字矢田の氏神である。

八幡神社　旧村社

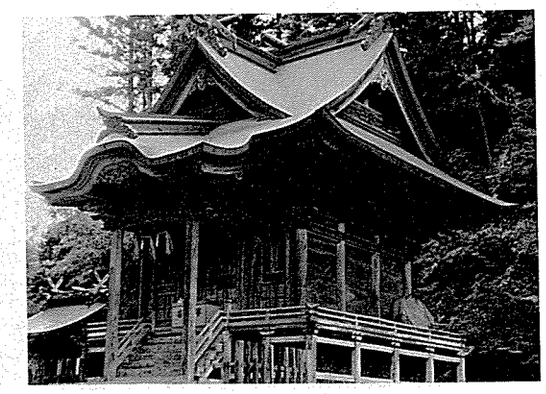
新見市足見二六四五

主祭神　譽田別尊　他七柱
例　祭　十月十日（十五日）
境内地　一、二六一・五五坪
主要建物　本殿　幣殿　随身門　神輿庫　社務所
摂末社　疫清神社
氏子数　一二〇戸
宮　司　小川紀夫
責任役員　赤木閑夫　藤野正明　村田一郎
由緒沿革　明暦二年八月に山城国男山八幡宮から足見字空フロ山に勧請し、後、万治元年八月現在地に遷座し、八幡社と称した。寛文九年八月、宝暦十年十一月、文政三年十二月、安政四年五月にそれぐ〳〵改築した。明治五年四月に改築して村社に列格した。

八幡神社　旧郷社

阿哲郡哲多町大字成松一三八一

主祭神　譽田別尊　少彦名命　大山祇神　経津主神
綿津見神　伊弉諾尊　伊弉冉尊等十八柱
例　祭　十一月十九日　**境内地**　九二四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神輿庫　社務所
摂末社　諏訪神社（御前社）（若宮社）（忠霊社）
氏子数　三三〇戸
宮　司　三上義治　**禰　宜**　三上忠男
責任役員　西村政夫　小谷　勲　細峠安雄
由緒沿革　元和六年に備中哲多郡石蟹村の杉谷八幡宮から守家諏訪山に勧請した。成松・則安村等七か村の大氏神として崇敬した。貞享二年五月に建立。享保十三年、安永七年、文化九年、天保十三年に葺替。明治五年十一月に郷社に列格。明治十九年に暴風のため本殿・拝殿は倒壊、同二十六年に再改築。明治四十三年に十七社を合祀した。同四十四年十二月に神饌幣帛料供進神社に指定せられた。昭和二十六年十一月に銅板で御本殿を葺替えた。



八幡神社　旧村社

新見市下熊谷五七二

主祭神　譽田別尊　仲哀天皇　気長足姫尊外十柱
例祭　十月五日　**境内地**　一八八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神輿庫　社務所
摂末社　厳島神社　稲荷神社　龍神社
氏子数　一〇八戸　**崇敬者数**　六〇〇人
宮司　柴田元美　**禰宜**　柴田元紀
責任役員　岡本　隆　立永源吾　安原　忠
由緒沿革　長暦二年に豊前国宇佐から勧請。寛文四年に社殿を現在の座所に奉遷した。明治二十六年に現在の社殿を新築。創設以来寛文に至る数百年の沿革は詳かでないが、創建当時、既に当村の主神社であり、明治五年に村社に列せられた。明治四十年十月に神饌幣帛料供進神社に指定せられた。明治四十三年に境外無格社十社を合祀した。

八幡神社　旧村社

阿哲郡哲多町大字矢戸一〇〇九

主祭神　譽田別尊
例祭　十一月九日
境内地　三七五・九五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社
氏子数　一八〇戸
宮司　長江二美
責任役員　逸見高一　佐田作市　岩田正夫
由緒沿革　勧請年月不詳。天正年間に時の庄屋逸見清長が石蟹八幡宮から勧請した。元文、明和、安永、元治と葺替修復を行っている。昭和二年十月二十四日大字矢戸区域内の無格社七社を合祀した。昭和十年十一月に神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

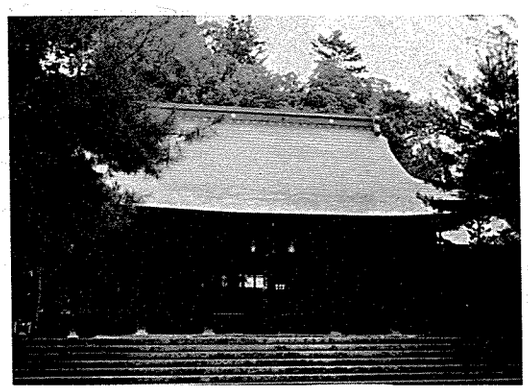
八幡神社　旧村社

阿哲郡哲多町大字荻尾三二七

主祭神　譽田別尊
例祭　十一月十五日　**境内地**　一九七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　一七戸
宮司　長江俊忠
責任役員　逸見信太郎　三村喜久　小郷芳男　小堀磐
由緒沿革　享保十九寅年正月城主石川主殿頭治世、石蟹大元八幡明神から御分霊を井原西山のふもとに遷宮した。文政十二年九月本殿を再建。明治五年、氏神書上の際、一村一社の制規により、当神社は天津神社の摂社となった。明治十四年二月十九日村社に列格した。

八幡神社　旧県社（俗称・船川八幡宮）

新見市新見一七八一



主祭神　品陀和気命（相殿）足仲彦命　息長帯比賣命　倉稲魂命　建御名方神
例祭　十月十五日　**境内地**　二、五五五坪
主要建物　本殿　祝詞殿　拝殿　その他十九棟
摂末社　天満神社他八社
氏子数　一、三〇〇戸　**崇敬者数**　五五〇人
宮司　柴田元美
責任役員　川上俊政　三上忠一　末尾一郎　山口県吾
宝物　下知状　古文書　神鏡　武器　出陣大幟
特殊神事　式年二五年毎遷座大祭ありて、前夜祭、湯立行事、神幸には大名行列、濁酒献供
由緒沿革　天永年間山城国男山八幡宮から新見庄今市に勧請した。永禄年間蔦ケ巣城主の徳光兵庫が崇敬し船川八幡宮と称した。その他地方城主も社領又は神田引を奉っている。元禄十一年、鎮座地を現在の明月山に移し、社殿その他を建立した。藩主領主から郷中米一石一斗、糯米一斗五升ずつを奉っている。明治四十年一月に神饌幣帛料供進神社に指定せられた。同四十二年に二十七神社を合祀した。昭和十三年四月に社殿一切が炎上、同二十二年四月に再建した。昭和二十一年一月十日付で神祇院によって由緒上県社と認められた。

八幡神社　旧無格社

阿哲郡神郷町大字高瀬五八〇

主祭神　譽田別尊
例祭　十一月十五日　**境内地**　三七坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿
氏子数　十二戸
宮司　藤家弘巳
責任役員　柴原為三郎　福田正一　柴原隆寛
由緒沿革　創建年月日は不詳。もと、高瀬村大原の鎮守の神として長谷部氏の祖先が奉斎していた。明治以前は氷室神社の摂社であったが、明治十二年十二月に本殿を再建して無格社となった。

八幡神社　旧村社

新見市法曽二七八四

主祭神　譽田別尊
例祭　十一月十三日
境内地　一、一六九・九七坪
主要建物　本殿　拝殿　幣殿　随身門
摂末社　熊野神社
宮司　小川紀夫
由緒沿革　元禄七年の創建という。哲多郡石蟹郷法曽の八渡山に白鳥が飛来してこの地に止った。それで同地に社殿を造って尊崇したという。

八幡神社　旧村社

阿哲郡哲西町大野部一八〇〇

主祭神　譽田別尊　仲哀天皇　気長足姫尊外十柱
例祭　十月十五日　**境内地**　一、五五五坪
主要建物　本殿　祝詞殿　拝殿　その他十九棟
摂末社　天満神社他八社
氏子数　一、三〇〇戸　**崇敬者数**　五五〇人
宮司　柴田元美
責任役員　川上俊政　三上忠一　末尾一郎　山口県吾
宝物　下知状　古文書　神鏡　武器　出陣大幟
特殊神事　式年二五年毎遷座大祭ありて、前夜祭、湯立行事、神幸には大名行列、濁酒献供
由緒沿革　天永年間山城国男山八幡宮から新見庄今市に勧請した。永禄年間蔦ケ巣城主の徳光兵庫が崇敬し船川八幡宮と称した。その他地方城主も社領又は神田引を奉っている。元禄十一年、鎮座地を現在の明月山に移し、社殿その他を建立した。藩主領主から郷中米一石一斗、糯米一斗五升ずつを奉っている。明治四十年一月に神饌幣帛料供進神社に指定せられた。同四十二年に二十七神社を合祀した。昭和十三年四月に社殿一切が炎上、同二十二年四月に再建した。昭和二十一年一月十日付で神祇院によって由緒上県社と認められた。

八幡神社　旧無格社

阿哲郡神郷町大字高瀬五八〇

主祭神　譽田別尊
例祭　十一月十五日　**境内地**　三七坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿
氏子数　十二戸
宮司　藤家弘巳
責任役員　柴原為三郎　福田正一　柴原隆寛
由緒沿革　創建年月日は不詳。もと、高瀬村大原の鎮守の神として長谷部氏の祖先が奉斎していた。明治以前は氷室神社の摂社であったが、明治十二年十二月に本殿を再建して無格社となった。

八幡神社　旧村社

新見市法曽二七八四

主祭神　譽田別尊
例祭　十一月十三日
境内地　一、一六九・九七坪
主要建物　本殿　拝殿　幣殿　随身門
摂末社　熊野神社
宮司　小川紀夫
由緒沿革　元禄七年の創建という。哲多郡石蟹郷法曽の八渡山に白鳥が飛来してこの地に止った。それで同地に社殿を造って尊崇したという。

八幡神社　旧村社

阿哲郡哲西町大野部一八〇〇

主祭神　譽田別尊　足仲津彦尊　足仲津姫尊
例祭　十一月七日（十月最終日曜日）
主要建物　本殿　釣殿　拝殿　幣殿　随身門
摂末社　大歳神社　綿津見神社　大仙神社
氏子数　一一三戸　**崇敬者数**　一二五〇人
宮司　小篠　功
責任役員　大島哲夫　尾上熊男　赤木晃久
由緒沿革　本神社は一條天皇の御宇正暦二年、山城国石清水から勧請。御鎮座以後分郷して五箇邑となったため、今に五箇の本宮と称して郷民が尊崇している。往昔の社領は七十五石であった。西山城主市川行房公以下の崇敬が厚かった。その後備後国の領主久代弾正利吉の七世の孫上総守高盛が管領し、引続き興盛、景盛、知盛、尚公まで代々御寄進が続いた。

八幡神社　旧村社

阿哲郡大佐町永富三九四

主祭神　譽田別尊（相殿）宗像三女神　息長帯比賣命
例祭　九月九日　**境内地**　三一〇・二五坪
主要建物　本殿　拝殿　釣殿　随身門
摂末社　神明神社　鷲神社　笑為神社
宮司　多田春雄
由緒沿革　本神社は仁和二年に九州宇佐から勧請した。明治三十二年冬に炎上し、同三十五年に再建した。

八幡神社　旧村社

阿哲郡大佐町大井野一一七四

主祭神　譽田別尊
例　祭　九月十五日　**境内地**　一八〇・五〇坪
主要建物　本殿　拝殿　神庫
摂末社　荒神社　大山祇神社　荒神社
宮　司　多田春雄
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳である。現社殿は安政四年九月の再建である。

日吉神社　旧村社

新見市千屋花見八五一

主祭神　大山咋命（相殿）日本武尊　龍神
例　祭　十月二十五日　**境内地**　二三一坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿　随身門　神庫　社務所
摂末社　荒神社
氏子数　六五戸
宮　司　西井進美
責任役員　柴田常省　石田武芳　石田圭三郎　石川義敦　世垣義一
由緒沿革　永享六年九月九日に真加部近江守が花見村赤坂城の裏山に、江州の日吉神社の御分霊を勧請し、住民の産土神として崇敬した。大正六年十一月十二日に神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

日吉神社　旧無格社

阿哲郡神郷町高瀬二一八三

主祭神　大山咋命
例　祭　十一月二十二日　**境内地**　七二坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿
氏子数　八戸
宮　司　藤家弘巳
責任役員　島上賢規、森下般展　塔田兼一
由緒沿革　勧請年月日は不詳であるが、釜村佐角部落の鎮守として古くから奉斎し、明治十二年十一月十五日に小社殿を再建して山の守護神として奉斎した。

日咩坂鐘乳穴神社　旧県社

新見市豊永赤馬六三五二

主祭神　大己貴命他一一柱
例　祭　十一月十一日
境内地　二、一八三・二五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神楽殿　神庫　神饌所　社務所
摂末社　明日名門神社（他四社）
氏子数　三〇〇戸　**崇敬者数**　一、〇〇〇人
宮　司　神原正祥　**禰　宜**　千香廣徳
責任役員　太田博通　清原　清　福田隆福
宝　物　神鏡一面　刀一振　長刀一振
特殊神事　御田植祭　水取神事
由緒沿革　社伝によると、大国主命が国土経営の折この地に足をとどめられ、地方の長者は命から当地を譲られ、住民とともに鐘乳穴を命として鎮められた。社宮の建立は、奈良朝行基菩薩が当地巡錫の時天平勝宝二年のことと伝えられる。大同二年弘法大師が来て東方の平地に社殿を築いた。当時渦内に石の乳という薬石を産し、清和天皇がこれを自らとられたので朝廷崇敬の社となった。延喜式内社。昭和五年県社。

日少神社　旧無格社

阿哲郡大佐町小阪部二五四四

主祭神　伊弉諾尊
例　祭　十二月八日　**境内地**　四二坪
主要建物　本殿　拝殿
宮　司　多田春雄
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳である。

永室神社　旧無格社

阿哲郡神郷町大字油野四一五六

主祭神　闘鶏稲置大山主神　久久紀若室葛根命　秋比女命　冬年命
例　祭　十月一日　**境内地**　一二八・六六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　二十戸
宮　司　藤家弘巳
責任役員　岡崎晋一　岡田東海　大川清人
由緒沿革　正安三年十月朔日に平城都左京春日御蓋に鎮座の氷室神社を奉斎した。元弘三年四月に後醍醐天皇が境内に仮の御玉殿を建造せられたと伝える。貞享四年に炎上、社殿の宝物を焼失した。正徳三年十月に羽場権七外七人で御社殿を再建した。寛政十一年十二月に備中松山城主板倉周防守が御社殿を造営し境内地を整理した。安政五年四月に藩主が御社殿を造営した。

氷室神社　旧村社

阿哲郡神郷町大字高瀬一二四三

主祭神　久久紀若室葛根命
例　祭　十一月十九日　**境内地**　一九九坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　天皇
氏子数　四十戸
宮　司　藤家弘巳
責任役員　石垣國市　信谷修三　大原堅治
由緒沿革　慶長五年十月十日に備後国庄屋伊田助左衛門が油野村三室の氷室神社の久久紀若室葛根命の御分霊を勧請したという。明治初年に村社に列格、同二十年十一月に本社殿を修覆した。

藤木神社　旧村社

新見市長屋七九七の二

主祭神　天児屋根命（配祀）高皇産霊大神　天之御中主大神　神皇産霊大神
例　祭　十月十四日　**境内地**　二一〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　武内神社　稲荷神社　佐伎神社　寿福神社　摩理支天神社
氏子数　百戸
責任役員　冨谷　正　西村軍記　林長太郎
由緒沿革　正中元年に奈良の春日宮から字庚申山山上に勧請し、元禄六年十一月に滝の根に奉遷した。大正六年十一月に字中山に御遷座した。大正五年九月に摂社天津神社を合祀した。大正十三年九月十六日に神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

二柱神社　旧無格社

阿哲郡神郷町大字釜村三二七一

主祭神　伊邪奈岐命　伊邪奈美命
例　祭　十一月十六日　**境内地**　八二坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿
氏子数　五十戸
宮　司　藤家弘巳
責任役員　山本利一　仲前　豊　常森奎治
由緒沿革　勧請年月日不詳。釜村大忠の鎮守の神として奉斎し、大正十一年に御本殿を建設した。

法高神社

新見市法曽一二五九

主祭神　大山祇命
例　祭　十一月二十日　**境内地**　八四五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　井高神社　諏訪神社
氏子数　三〇戸
宮　司　小川紀夫
由緒沿革　元禄七年の創建である。

星神社　旧無格社

阿哲郡大佐町山奥二五六三

主祭神　天香香脊男命
例祭　十月十四日　**境内地**　六五坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　愛宕神社　山神社　荒神社
宮司　多田春雄
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳である。

本宮神社　旧無格社

阿哲郡大佐町山奥四四

主祭神　熊野大神
例祭　十月二十九日　**境内地**　一〇八坪
主要建物　本殿　拝殿
宮司　多田春雄
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳である。

三倉神社　旧村社

新見市井倉九五

主祭神　大己貴命　少彦名命　倉稲魂命
例祭　十月二十日　**境内地**　三六二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　一〇〇戸
宮司　小川紀夫
責任役員　沖田徳太郎　宮田角平　小西種蔵
由緒沿革　勧請年月不詳。元禄八年の御検地帳に三倉大明神の除地がある。よって元禄以前の創建と思われる。古くは古三倉神社と称え権現社の通称があった。

三穂津姫神社　旧無格社

阿哲郡大佐町小阪部二四五六

主祭神　三穂津姫命
例祭　十一月九日
境内地　一二二・〇〇坪
主要建物　本殿
宮司　多田春雄
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳である。

命山惣三神社

阿哲郡哲多町蚊家三九四二―三

主祭神　天之御中主神　高皇産霊神　神皇産霊神
天照皇大神　惣三大神
例祭　十月十二日（九月第　日曜日）
境内地　一二二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　荒神社
氏子数　八〇戸　**崇敬者数**　一五〇人
宮司　宮司代務者・小山秀男
由緒沿革　本神社は明正天皇の御宇に創建し、天御中主神外三神を勧請した。宝永二年に湯野郷西山の鶴が滝の岩屋で一命を失った惣三郎の霊を、神主渡辺河内守が本神社に合祀して、命山惣三神社と称した。

森瀬神社　旧無格社

阿哲郡大佐町布瀬二四二九

主祭神　瀬織津姫命
例祭　九月二十一日
境内地　一五四・七五坪
主要建物　本殿　拝殿
宮司　竹田　勇
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳である。

八門神社　旧村社

新見市土橋一八〇三

主祭神　譽田別尊（配祀）素盞嗚尊　天目一命　気長足姫尊
例祭　十一月三日　**境内地**　三八六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随神門　社務所　神輿庫
摂末社　護国神社　若宮社
氏子数　一一〇戸
宮司　渡邊幸彦　**禰宜**　渡辺猛彦
責任役員　大場政夫　藤井恒三郎　小林貫一
由緒沿革　本神社は延長元年庄司藤井与三ヱ門秀高、石清水八幡宮から勧請し、加庄原に小祀を建立した。元禄十二年に三上助九郎が氏名名戸の浄地に社殿を造営した。明治三十一年に大石右一郎が本殿を再建した。大正三年に門神社以下十数社を合祀し、八門神社と改称した。大正十年に神饌幣帛料供進神社に指定せられた。昭和十二年に境内地を拡張して社殿を改築した。

八代神社　旧無格社

阿哲郡大佐町永富八七六

主祭神　素盞嗚尊　大己貴命　稲田姫命
例祭　五月五日　**境内地**　一二〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所
摂末社　稲荷神社　御崎神社
崇敬者数　一、〇〇〇人
宮司　西井　憧　**禰宜**　西井　璋
責任役員　杉井藤太郎　金田忠平　岡田忠平　岡田丸治　西井利正　植田周志
由緒沿革　本神社は創建年代は不詳であるが、応永年間に現在地に鎮祭した。現社殿は文政年間に地頭水谷家の命をうけて庄屋金田安右衛門が世話係となって改築した。



簗草神社　旧無格社

阿哲郡大佐町布瀬三五六一

主祭神　伊弉諾尊　素盞嗚尊　速玉男命　上筒男之命　中筒男之命　底筒男之命
例祭　九月十九日　**境内地**　六四・九九坪
主要建物　本殿　拝殿

宮　司　竹田　勇
由緒沿革　創建年月日は不詳。

湯児神社　旧村社

阿哲郡大佐町永富二三九七

主祭神　天児屋根命（相殿）興台産霊神　許登能麻遅媛命
例　祭　十月九日　**境内地**　二六五・四五坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿　随身門
摂末社　乳母神社　大歳神社
宮　司　多田春雄
由緒沿革　本神社の創建は光仁天皇の元應元年春、游児大明神が下永富村ひのき畝に天降られたのを鎮斎したという。大正十五年十一月二日に神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

湯舟神社　旧無格社

阿哲郡神郷町下神代四七〇〇

主祭神　多岐都比賣命
例　祭　九月八日　**境内地**　三〇九坪

綿津見神社　旧村社

阿哲郡哲多町大野一三二七

主祭神　綿津見命
主要建物　本殿　拝殿
宮　司　奈須皐市
由緒沿革　本神社の創建年月日は延享二年という。

和忠神社　旧無格社

阿哲郡神郷町大字釜村一二〇〇

主祭神　市杵島比賣命　多紀理比賣命　多岐都比賣命　味鉏高彦根命
例　祭　十一月二十五日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　三八戸
宮　司　藤家弘巳
責任役員　長谷川巳熊　難波登喜男　白根時男
由緒沿革　安永六年九月六日に釜本村厳島神社の御分霊を願主世話人下和忠浅右衛門外五名で勧請した。領主関備前守長誠が御本殿の建立費を寄進した。旧号を三柱妙見宮と称し、明治初年に修理した。昭和二十七年六月に彦野神社を合祀して和忠神社と改称した。

例　祭　十一月八日　**境内地**　二六一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
宮　司　渡辺　巌
由緒沿革　本神社の創建年月日不詳。

真庭支部　（九九社）

朝日神社	真庭郡久世町大字久世一九四八……	四〇六
天津神社	〃　落合町大字高屋三八七……	四〇六
有宗神社	〃　勝山町大字後谷畝一六五八……	四〇六
井原神社	〃　勝山町大字岩井谷三五九……	四〇六
壱粟神社	〃　湯原町大字社六五四……	四〇七
一宮神社	〃　勝山町横部一一七……	四〇七
稲荷神社	〃　久世町多田四七七……	四〇八
後谷神社	〃　勝山町後谷一三八一……	四〇八
太田神社	〃　落合町大字田原山上四六四二…	四〇八
大滝神社	〃　落合町田原山上三七三七……	四〇八
大津神社	〃　久世町大字余野七二八……	四〇八
大歳神社	〃　新庄村一三九〇……	四〇九
大野神社	〃　勝山町大字野二二〇……	四〇九
大宮神社	〃　落合町大字関一九八一……	四一〇
大宮神社	〃　久世町大字台金屋字宮脇一七三	四一〇
落合神社	〃　落合町大字垂水五五五……	四一〇
橿原神社	〃　落合町大字法界寺九七八　……	四一〇
春日神社	〃　勝山町大字月田三〇一九……	四一一
形部神社	〃　湯原町大字社一二七二……	四一一
佐波良神社	〃　勝山町大字高田山上八八六……	四一二
金倉神社	〃　落合町大字佐引一五一……	四一二
上諏訪神社	〃　真庭郡勝山町大字神代二三六三……	四一二
神矢神社	〃　八束村大字下見一二五五……	四一二
加茂神社	〃　川上村大字西茅部一五〇一……	四一二
茅部神社	〃　落合町大字田原山上一八二三…	四一三
北野神社	〃　落合町大字木山一一四五……	四一三
木山神社	〃　久世町久世一四三三・一四三四―一…	四一四
久世神社	〃　湯原町大字社六五四……	四一四
久刀神社	〃　落合町大字野原七六七……	四一四
國司神社	〃　落合町大字旦土二七六……	四一四
国玉神社	〃　湯原町大字粟谷二九八……	四一五
熊野神社	〃　落合町大字舞高三三〇……	四一五
熊野神社	〃　落合町上河内三四五一……	四一五
熊野神社	〃　落合町栗原一〇三二……	四一六
栗原神社	〃　落合町鹿田二一〇九……	四一六
山神社	〃　落合町下見一九七……	四一六
下見神社	〃　落合町下河内八五一……	四一七
下河内神社	〃　落合町大字別所二七六四……	四一七
下諏訪神社	〃　新庄村二〇八三……	四一七
新庄神社	〃　勝山町大字本郷一七五四……	四一七
鈴神社	〃　勝山町清谷三五三……	四一八
清谷神社	〃　落合町中八九五……	四一八
総社	〃　湯原町大字種一七八三……	四一八
田根神社	〃　勝山町大字江川九二九……	四一九
高応神社	〃　勝山町勝山七七五……	四一九
高田神社		

建部神社　真庭郡湯原町藤森一〇一……四一九
垂水神社　〃　落合町大字垂水五五二……四二〇
大宰神社　〃　落合町大字下市瀬一五七……四二〇
中和神社　〃　中和村大字下和一九四六……四二〇
月田神社　〃　勝山町大字月田本一八三七……四二一
菟上神社　〃　湯原町大字社六五四……四二一
徳山神社　〃　川上村大字上徳山八〇七……四二一
富尾神社　〃　久世町大字富尾一〇九……四二二
中尾神社　〃　勝山町大字古呂々尾中一二七二……四二二
長田神社　〃　八束村大字下長田一〇九七……四二二
長田神社　〃　湯原町大字社六五四……四二三
延風神社　〃　美甘村大字延風一……四二三
八幡神社　〃　勝山町若代二八七八……四二三
八幡神社　〃　久世町大字鍋屋一七四……四二三
八幡神社　〃　久世町大字惣六〇六……四二四
八幡神社　〃　勝山町大字山久世一八八二……四二四
八幡神社　〃　美甘村大字鉄山三八三……四二四
八幡神社　〃　湯原町大字見明戸三四三……四二四
八幡神社　〃　勝山町大字荒田五三四……四二五
八幡神社　〃　湯原町大字禾津三三二……四二五
八幡神社　〃　湯原町大字本庄一三六五……四二五
八幡神社　〃　落合町大字吉三七九六……四二五
八幡神社　〃　落合町大字上山一一三七……四二六
八幡神社　〃　美甘村大字黒田一四四……四二六
八幡神社　真庭郡湯原町藤森一〇一……四一九
八幡神社　〃　落合町大字一色九六八……四二六
八幡神社　〃　落合町大字鹿田一五三七……四二七
八幡神社　〃　落合町大字下方七三……四二七
八幡神社　〃　落合町大字日野上三〇四四……四二七
八幡神社　〃　久世町草加部一八九六……四二八
八幡神社　〃　落合町大字田原四九二……四二八
八幡神社　〃　久世町大字中原三〇二……四二九
八幡神社　〃　落合町大字古見字八幡山一三九七……四二九
八幡神社　〃　落合町大庭字大日一四三……四三〇
八幡神社　〃　落合町赤野七九……四三〇
箸立天満宮　〃　落合町大字垂水九六八……四三〇
久見神社　〃　湯原町大字久見四二……四三一
平松神社　〃　落合町大字平松一五六……四三一
福田神社　〃　八束村大字中福田三九二……四三一
福谷神社　〃　勝山町大字福谷三六一……四三二
太玉神社　〃　落合町大字田原山上六一一の一……四三二
満賀利神社　〃　勝山町大字曲り七〇……四三二
御鴨神社　〃　新庄村五三八六……四三三
美甘神社　〃　美甘村大字美甘三九〇二……四三三
三栄神社　〃　久世町三坂四一五……四三三
三田神社　〃　勝山町大字三田一二〇……四三四
三柱神社　〃　落合町下市瀬八七七……四三四
三輪講神社　〃　勝山町若代畝八五八―一……四三四
米来神社　真庭郡久世町大字目木五八九……四三四
守吉神社　〃　久世町大字樫東一三六一……四三五
湯本神社　〃　湯原町大字湯本三四五の一……四三五
余河内神社　真庭郡落合町栗原字柏森一八六五……四三五
横見神社　〃　湯原町大字社七五八……四三六
若畝神社　〃　勝山町大字若代畝一三〇……四三六

立柱祭

古くは柱竪（はたてだて）と記してある。地鎮祭・釿始祭（ちょうなはじめ）に次いで行われる祭儀である。屋舎の形状を造る第一の意義がある祭である。社殿や家屋を造営するとき、その柱を立てる儀式をいう。神籬を設けて家屋工作の神である屋船久久能遅命、屋船豊受姫命・手置帆負命・彦狭知命の四柱を祭り、柱を立てる由を神明に奉告し、将来の無事を祈る神事である。古来柱を立てることは最も重要であって、古祝詞の中にも「宮柱太敷立高天原ゟ千木高知」とある。

荒振神

神威がありあまって、結果として災害を起す邪神とみなされる神を云う。神代紀に螢火なすと見える邪神、日本武尊が征服された気吹山神等もその類である。その他古事記によると、天孫降臨の際に「此葦原中国者、（中略）道速振荒振國神等云々」とあり、「肥前国風土記」に「昔者此川之西有荒神、行政之人多被殺人云々」とある。[二]

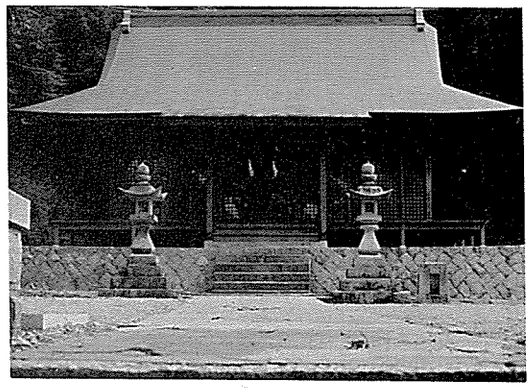
阿波岐原（檍原）

「筑紫の日向の小戸橘之檍原」（紀）、「竺紫日向の橘小門の阿波岐原」（記）、橘之檍原については諸説があり、橘の木の生い茂った原、橘は地名で檍原は檍の茂っている原等の意があるといっている。檍についても、青葉木の義で柏の古名、或は青木、または梓の一種、また萩、ミソハギであるいう等の説があるが、確証はない。

朝日神社　旧郷社

真庭郡久世町大字久世一九四八

主祭神　素盞嗚尊　他二十柱
例　祭　十月二十五日　**境内地**　三、七三九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫
摂末社　稲荷神社　祭神倉稲魂神　大山祇神
氏子数　二〇〇戸
宮　司　田中二葉　**禰　宜**　田中照二
責任役員　片岡利一　滝本林一　高田貞穂　太田貞一
池田　儁　野村治郎　横山密雄　中野正夫
宝　物　神輿　獅子頭
由緒沿革　宝亀二年三月十三日の創建である。美作古社百十二社の内、久世郷の総氏神であって、特に攘疫除災の信仰があった。又神位が高貴で社頭の乗馬通行の咎めがあったとも縁起に見えている。本殿は元禄六年三月に造営せられ、以来二十五年毎に屋根を葺替えて、現在に至っている。例祭には本神社の飛地境内地御供殿で五社立合の神祭があったが、現在は神社地の若王神で行われている。



天津神社　旧郷社

真庭郡落合町大字高屋三八七

主祭神　天児屋根命他十五柱
例　祭　十月十六日　**境内地**　一、四〇七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神輿庫　社務所
摂末社　斎神社
氏子数　三一四戸
宮　司　築沢　慧
責任役員　神戸定一　片岡和吉　市　太一　菱川芳男
宝　物　獅子頭　天正二十年九月十六日市虎熊丸寄進（岡山県指定重要文化財）鼻高面　天正二十年九月吉日市五郎兵衛寄進（岡山県指定重要文化財）
由緒沿革　和銅三年の創立と伝えられ、作陽誌に「古来称正一位天津大明神真島郷十一村の氏神也。相伝源頼朝建立神林寺同時営此社、極盡壮麗、初有社領七十石。」と見える。江戸時代には、国主森伯耆守長武、松平越後守宣富の造営があり、文化十二年より領主三浦氏歴代の崇敬があった。大正十一年六月二日、郷社に列格した。

有宗神社　旧村社

真庭郡勝山町大字後谷畝一六五八

主祭神　伊弉諾尊
例　祭　十月八日　**境内地**　四八六坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿
摂末社　福玉神社　白楽神社　大蔵神社　三柱神社
氏子数　四四戸
宮　司　沖田孝重
責任役員　岸本義明　新幸　栄　山本忠篤
由緒沿革　作陽誌に熊野神社在後谷畝村棟札奉再興権現広社一宇福寿増長国土泰平当村富貴五穀成就本願地頭平朝臣正信干時暦応五未四月十九日上田注連太夫書之祭祀九月八日封境東西八間南北二十五間と見えている。明治三年社号を有宗神社と改称し、明治六年村社に列した。

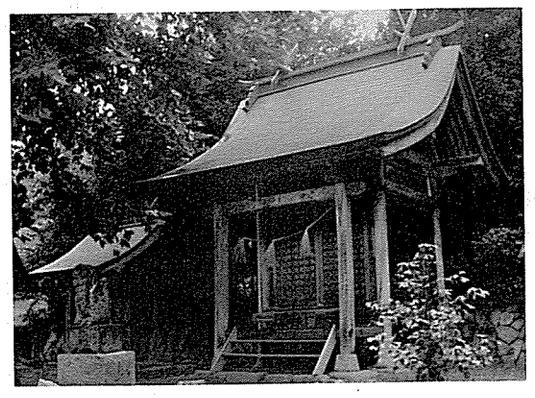
井原神社　旧村社

真庭郡勝山町大字岩井谷三五九

主祭神　伊弉諾尊　伊弉再尊　下照比売命　天水分

命　須佐之男命　武夷鳥命　襲速日命
例　祭　春祭　三月二十八日　秋祭　十月十六日
夏祭　六月十九・二十日　冬祭　十二月十三日
境内地　二七四・五五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　神庫　社務所
摂末社　稲荷神社
氏子数　一四四戸
宮　司　沖田孝重
由緒沿革　創建は文亀元年九月二十六日との伝えがあるが、実はそれ以前の神社である。勝山藩主の崇敬が厚く、明治維新までは王子十二所権現と称した。明治三年井原神社と改称し、明治六年村社、大正二年一月八日近郷の神社、岩井谷、村上、清水、武夷鳥、速日、三柱の各神社を合祀した。昭和十二年十月十五日郷社となった。





壱粟神社　旧村社

真庭郡湯原町大字社六五四

主要建物　本殿　拝殿　（菟上、久刀、長田各神社共用）
摂末社　御先神社　荒魂神社　公文神社
氏子数　九二戸　**崇敬者数**　四八〇人
宮　司　藤田　昌
責任役員　樋口平三　美甘　彰　牧田　敬
宝　物　中臣祓写本一巻（貞享二年三月森長俊）古琵琶
由緒沿革　式内社で神名帳考証に、壱粟神社二座、貞観六年五月美作国壱粟神・大佐々神に、従五位上を授くとある。三代実録にも記載せられている。大日本史に久世郷今社村にあり、壱粟、大佐々二神を祀るとある。なお神祇志料に壱粟神社二座。六十六社記に壱粟神社大庭郡社村とある。美作国十一座のうち大庭郡八座の二座である。往時は国司直祭であったらしい。

一宮神社　旧郷社

真庭郡勝山町横部一一七

主祭神　素盞嗚尊　稲田姫命　大国主命　大山祇命
例　祭　十月十九日　**境内地**　六〇九坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿　神庫　社務所
摂末社　斎神社
氏子数　二〇〇戸　**崇敬者数**　一〇〇人
宮　司　池田武夫
責任役員　青木嘉太郎　岡田克己　高橋稲造
由緒沿革　本神社は白鳳八己卯年出雲大社から勧請し、

主祭神　神大市比賣命　大佐々神
例　祭　十月九日　**境内地**　三八三・〇三坪
（菟上・久刀・長田各神社共有）

一宮大明神と号し、高田郷の一の宮と称し奉り、社領百石の地方の旧社である。それゆえ、代々の藩主の崇敬が厚かったが、時勢の変遷によって一部の氏神となった。明治六年社号を横部神社と称し村社に、明治四十四年旧一宮村の全神社を合祀した。大正九年、一宮神社と改称した。大正十五年郷社に昇格した。

主祭神　天種子命
例祭　十月十八日　**境内地**　七二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫　社務所
氏子数　四九戸
宮司　上田昌信
責任役員　浅田静夫　岡田亀夫　森脇一郎　船津貞光　紙谷栄
崇敬者数　一五七人
由緒沿革　創建は宝亀十一庚辰八月十八日であって、井原四所大明神の一つであり、維新前迄は歳司大明神と称したが、明治三年後谷神社と改称し、明治六年村社に列せられた。

稲荷神社　旧村社

真庭郡久世町多田四七七

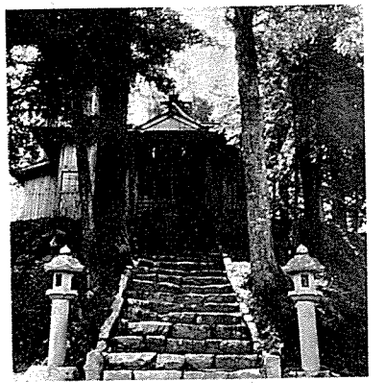
主祭神　倉稲魂命　素盞嗚尊　大国魂神　磐裂命
例祭　十月二十五日　**境内地**　一七一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社
氏子数　一三〇戸
宮司　須田誠
責任役員　浅雄守之　藤木恒一　長尾力
由緒沿革　創建年代及び由緒は不詳である。欽明天皇の御宇に、白猪屯倉を大庭郡に置き、農民の守護神とした。明治六年二月村社に列した。

後谷神社　旧村社

真庭郡勝山町後谷一三八一



境内地　四、六八一・〇六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　参籠殿　記念館　御神蔵
摂末社　祖霊社　靖国神社遙拝所
氏子数　一一〇戸
崇敬者数　約一、〇〇〇、〇〇〇人
宮司　笹井和男
責任役員　岡本正利　入江光臣　中山篤　水澤柳太郎
宝物　狛犬　　**特殊神事**　霜月祭
由緒沿革　正平四年霜月八日に信州戸隠神社から御分霊を奉祀したと伝えられているが、氏の神としての奉祀ではなく、何等かの信仰霊験によって勧請されたものであろう。古来から大津大明神と称し、開運、農業、商工業、諸芸能上達、結婚、病気、一家和合等諸方面に霊験あらたかであり、福運に向わしめ給う神として、全国に崇敬者をもっている。



大歳神社　旧村社

真庭郡新庄村一三九〇

主祭神　大歳神　若歳神
例祭　十月八日
境内地　四四二・七四坪
主要建物　本殿　拝殿　神饌所　神門　社務所　参籠殿
摂末社　荒魂神社　諏訪神社
氏子数　二八戸　　**崇敬者数**　一〇人
宮司　内田信醇　　**禰宜**　内田央信
責任役員　大塚親章　大垣孝好　石藤智昭
宝物　神鏡　金幣　祝詞幣
特殊神事　神衣祭
由緒沿革　本神社は出雲街道新庄に鎮座している。作陽誌に、寛永十五年雲州北島の国造が上京の時、暴風雨をさけようとして、投宿した。時に神祠の祠門を固く閉じ逡巡していた際、たちまち声があり戸扉が開いた。国造は大いに感じて投宿し、自ら奠賽し御扉を書して白く「火をえらび水を清むる三つ支もの風にまかせて桟なへてぞおく」と。還郷の後、使人をして金を斎らして奉賽させた。

大野神社　旧村社

真庭郡勝山町大字野二二〇

主祭神　木之花佐久夜毘賣命
例祭　十月十一日　**境内地**　二九六坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　一〇戸
宮司　沖田孝重

太田神社　旧村社

真庭郡落合町大字田原山上四六四二

主祭神　埴安比賣命
例祭　十月十六日　**境内地**　八五坪
主要建物　本殿　拝殿　神輿倉
氏子数　五〇戸
宮司　杉田武義
責任役員　難波固一郎　岡田興一
由緒沿革　昔旱魃が数十日に及び、田畑はことごとく亀裂を生じ、郷人は大変心配して、雨乞いをした。一周日に満ちた日、白昼黒雲が俄に天に湧き、盆を覆す大雨があり、田圃は十分に潤うた。その夜丑三の刻、光球が落ち光輝を八方に放った。郷人は太田神の神勅であると思って、社殿を造営し、百姓の神として奉祀した。

大滝神社　旧村社

真庭郡落合町大字田原山上三七三七

主祭神　湍津姫命
例祭　十月十六日　**境内地**　一九六坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿
拝末社　稲荷神社
氏子数　四六戸　　**崇敬者数**　三〇人
宮司　杉原隆
責任役員　藤原令市　石原孝男　小林基次
由緒沿革　創建年月不詳。当神社は元同所字青滝に鎮座し、青滝明神と称していたが、天授元年洪水のため流れ、現在の地に奉遷し、地名をとって大滝神社と改称した。

大津神社　旧村社

真庭郡久世町大字余野七二八

主祭神　天手力男命
例祭　五月十五日　十一月二・三・四日

責任役員　生内邦隆　生内赤男　岡　政之

由緒沿革　創建年月日等不詳であるが、維新前迄は藤井権現宮と称えていたが、明治三年二月九日大野神社と改称した。天保三年四月社殿を再建した。その後昭和二十三年に社殿を改築したが、参拝に不便であるため、現鎮座地に遷座した。明治六年村社に列格した。

大宮神社　旧村社

真庭郡落合町大字関一九八一

主祭神　大宮姫命

例祭　十月十三日　**境内地**　三七七坪

主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所

氏子数　一九〇戸　**崇敬者数**　六五〇人

宮司　近藤正隆

責任役員　伊賀秀夫　大塚正浩　土屋輝夫

由緒沿革　嘉吉二年、関の郷城主初伏山城主綱島左近の将監の老臣飯の山城主初摩典惣兵衛尉が初めて宮迫山に祀って関の郷の鎮守となった。初摩氏は武蔵国大宮の人で、その郷里から遷し祀った。宝永四年亥年、大庄屋兼公文役・鈴木九右衛及び名座が発起となり、社地を今の畝の段に遷し祀った。明治十三年村社に列格した。大正三年本村関八幡神社外二十九社を合祀した。大正十一年九月神饌幣帛料供進神社に指定された。

大宮神社　旧村社

真庭郡久世町大字台金屋字宮脇一七三

主祭神　神日本磐余彦命　大山咋命　五十鈴姫命　素盞嗚尊

例祭　十月十三日　**境内地**　六四四坪

主要建物　本殿　幣殿　拝殿

氏子数　四二戸　**崇敬者数**　一八〇人

宮司　黒田　収

責任役員　中島隆義　日並数雄　岡野　高　杉山文治　森岡国平　森岡　務　大森利男　森岡　稔



由緒沿革　人皇第五十六代清和天皇の御宇貞観年中、大和国桓原神宮より勧請し創立したことは口碑口伝によって明らかである。以来当社を橿原神社と称え奉る。武門武将の崇敬が厚く、特に旧高田の城主三浦氏の崇敬が厚く、神刀一振、大幕一張を寄進せられた。明治四十二年一月摂社日吉神社外六社を合祀した。大正十五年村社に列格した。

春日神社　旧郷社

真庭郡勝山町大字月田三〇一九

主祭神　天児屋根命　武甕槌命　経津主命　斎主命

例祭　十月十三日　**境内地**　三、一二三坪

主要建物　本殿　長床拝殿　神庫　社務所　神饌所

摂末社　稲荷神社　大津神社　水分神社

氏子数　四〇〇戸

宮司　沖田孝重

責任役員　松尾　幸　角田昌平　堀　正親

由緒沿革　往昔字神退という処に御鎮座していたが、文明十九年に現在の社地に移転鎮座したもので、文明以前の創立の古社である。慶長以後元禄の頃までは、美作の国主森公の代々崇敬の社で、現在の本殿は延宝七年に国主森伯耆守の造営したものである。森公国除の後は領主三浦氏が代々崇敬した。大祭には御供焚と称し、その任に預る者は、国主森公から下付せられた。着脊剝、島帽子を着用して、本殿に献供する例が今行なわれている。月田郷の大産土神と斎き奉る古社である。

形部神社　佐波良神社　旧県社

真庭郡湯原町大字社一二七二

主祭神　形部神社祭神　神阿多都姫命　佐波良神社祭神　佐波良命

例祭　十月九日　**境内地**　八〇五・四二坪

主要建物　本殿（相殿造）幣殿　拝殿　宝庫

摂末社　剣上神社　荒神社　愛宕神社

氏子数　九二戸　**崇敬者数**　四八〇人

宮司　藤田道宗

責任役員　樋口平三　美甘　彰　牧田　敬

宝物　永禄九年九月大庭郡社村之社帳　中臣祓写本　貞享二年森長俊寄進

特殊神事　佐波良神社　神馬渡御



由緒沿革　祭神佐波良命は和気清麻呂公の四代の祖で両社相殿で、大社と称した。延喜式内美作十一座の内である。貞観六年従五位上を授くと三代実録に見え、

主祭神　大己貴命　木花咲耶姫命　武内宿禰　大物主命　外五柱の神

例祭　十月二十五日

境内地　二一〇三二坪

主要建物　本殿　釣殿　拝殿　社務所　御輿庫

摂末社　三社

氏子数　二〇〇戸

崇敬者数　五〇〇戸・二、〇〇〇人

宮司　松尾　巧

責任役員　矢谷利通　村松　悦　高岡謙介　馬場　剛

宝物　木額　大宅大明神彫刻

由緒沿革　創建、勧請年月は不詳である。古来大宮大明神を奉祀し、大庭郷一円と美和郷の間、台金屋村文世郷多田村、大庭郡大庭郷の旧三ヶ町に跨る大産土神で、尊崇が篤い古社であった。古例には大宮神社、御段若宮、三崎児守神社、中原八幡神社、大庭八幡神社の五輿が立会う大祭があった。現在も久世町台金屋、同御段、三崎、同町中原、同町多田、落合町大字大庭、向町大字平松等に氏子、崇敬者がある神社である。

落合神社

真庭郡落合町大字垂水五五五

主祭神　天照大神　神武天皇　明治天皇　国家、公共のために殉難殉職又は貢献した神霊九〇二柱

例祭　四月十七日　十月十七日

境内地　一六八坪

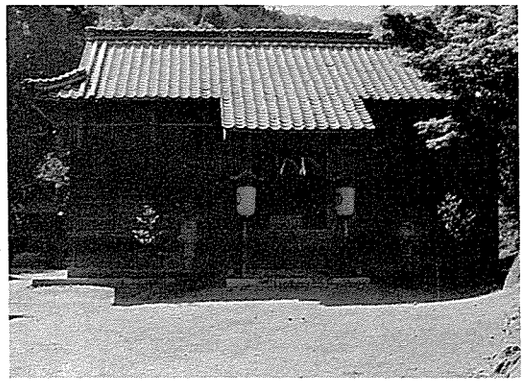
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所

崇敬者数　四、四一二戸　一七、一八五人

宮司　築沢　慧

責任役員　柴田静真　神戸定一　白木又一　若田寿一

由緒沿革　昭和二十一年五月十七日落合町出身並びに縁故英霊を祭祀してその偉業をしのび、その慰霊顕彰のため、落合町民の総意によって創建した。初め社号を落合神社と称したが、講和条約の発効により、昭和二十八年五月十七日、落合護国神社と改称した。



橿原神社　旧村社

真庭郡落合町大字法界寺九七八

中世以降に造営し、神田、神宝の奉納など、武門、武将の崇敬が篤く、森、松平、三浦家累代の尊崇をうける。明治十四年県社に列した。神田は六町歩であった。境内に県指定、樹齢千年の大杉が現存している。

金倉神社（かなくら）　旧村社

真庭郡勝山町大字高田山上八八六

主祭神　金山彦命
例祭　十月十四日　**境内地**　三六九坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿
氏子数　四〇戸
宮司　沖田孝重
責任役員　山崎秀男　式見能完　山崎善二郎
由緒沿革　創建年月日は不詳。明治四年村社に列格。

上諏訪神社（かみすわ）　旧村社

真庭郡落合町大字佐引一五一

主祭神　建御名方主命
例祭　十月二十一日　**境内地**　三五六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所
摂末社　稲荷神社　吉水神社　城山神社
氏子数　三六戸　**崇敬者数**　二〇〇人

神矢神社（かみや）　旧村社

真庭郡勝山町大字神代二三六三

主祭神　誉田別尊　外六柱
例祭　十月十五日
境内地　一、〇七〇・九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　若宮神社
氏子数　一〇〇戸　**崇敬者数**　五〇〇人
宮司　沖田孝重　**禰宜**　神田真古人
責任役員　赤岩政夫　神谷健一　影山道夫　角田　進
由緒沿革　景行天皇の御代、神代地内各所に白羽の矢が降下し、近よる者にたたりがあるといって、その矢を現在地に安置して玉石を置いて祭ったのが神矢神社のはじまりと伝えられる。中途、八幡宮と称して祭ったこともある。

茅部神社（かやべ）　旧郷社

真庭郡川上村大字西茅部一五〇一

主祭神　天照大神　御年神　外二十一柱
例祭　十月十八日　**境内地**　三、八八六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神楽殿　神輿庫
宮司　近藤正隆　**禰宜**　近藤幹晴
責任役員　杉本荘輔　春木彦三郎　名和又八郎
宝物　宝刀一流　**特殊神事**　悪鬼退散祭
由緒沿革　天長八年三月信州上諏訪の社から勧請した。古来月田荘、別所荘、佐引荘の十ヵ村の総氏神として斎き祀った。以来代々の領主から廃藩に至るまで、佐引荘、山田外二ヶ所高五石下賜せられていた。維新の際、月田荘が一社を創建したので氏子は自ら分離し、二荘の氏神となった。明治三年村社となり、大正四年字天神外四社を合祀し現在に及んでいる。

加茂神社　旧村社

真庭郡八束村大字下見一二五五

主祭神　別雷命　外十九柱
例祭　十月十三日　**境内地**　七八〇・九二坪
主要建物　本殿　拝殿　社務所
摂末社　荒魂神社　若王神社　道明神社　山祇神社
氏子数　五〇戸　**崇敬者数**　五〇〇人
宮司　神田泰二
責任役員　前田利高　志賀　寛　小谷　明
由緒沿革　創建年月日は不詳であるが、白鳳年間上加茂神社の御分霊を勧請したと伝える。領主三浦志摩守崇敬の社で、弘化二年宝鏡を寄進している。明治四十二年九月、八幡神社外十四社を合祀した。

社務所
摂末社　足王神社　荒魂神社　千座神社
氏子数　二二〇戸　**境内地**　二、〇〇〇人
宮司　神田泰二　**崇敬者数**
責任役員　真田茂夫　長尾文男　若山　実
宝物　古鏡一面
由緒沿革　創建年代は不詳であるが、近世に入り十二社権現、岩倉宮、岩倉十二社権現と称した。文久元年旧社大社の旨を以って、神宣を下附せられ、天磐座大神宮と奉称した。明治の末期に氏子各神社を合祀し、茅部神社と称し今日に至っている。末社足王神社の旧暦四月九月の二十九日の例祭には、近郷よりの参詣が多く、藁又は板等の足手型を奉納して、無病息災を祈念する風習が続いている。

北野神社（きたの）　旧村社

真庭郡落合町大字田原山上一八二三

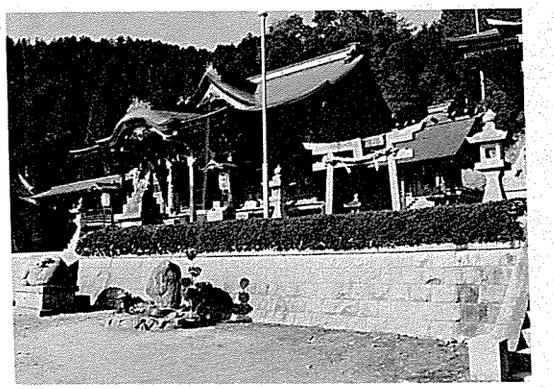
主祭神　菅原道真公
例祭　十月十七日　**境内地**　一四五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　二〇戸　**崇敬者数**　一、六一八人
宮司　築沢　慧
責任役員　西田　勇　村上義孝　難波　昇
由緒沿革　天正三年、北野から勧請したと伝える。

木山神社（きやま）　旧県社

真庭郡落合町大字木山一一四五



主祭神　須佐之男命
例祭　十月二十日
境内地　一三一・七四九坪
主要建物　奥宮　本殿　釣殿　拝殿　神饌所　社務所　絵馬殿　神輿庫　太鼓殿
摂末社　善覚稲荷神社　天満宮
氏子数　二、二〇〇戸　**崇敬者数**　二〇万人
宮司　甲斐蓬太郎　**禰宜**　甲斐太郎
責任役員　前田　栄　伊賀　勇　鈴木朝次　井上三郎
宝物　伊藤博文公の書　神鏡一面　金狐一対　神楽面及び衣裳一式　山田方谷四歳の時の書　唐獅子一対　藩主の三宝
特殊神事　七月十四日　厄除祭
由緒沿革　本神社は弘仁七年の創建と伝えられ、南三郷の総社である。作陽誌に「木山神社在木山村所祭素盞嗚尊号木山牛頭天王社例多準祇園社華表之額社役記古来皆書曰感神院当社者南三郷及別所、佐引、関、一色、久米郡北分内奥山手之惣氏神也。祭例六月十四日、晦九月二十日、十一月二十五日大小有差又毎月七日云々又除日より狗日三日之間昼夜神祭之神事あり」と記してある。明治五年郷社に列格し、昭和九年県社に列格した。奥宮は県重要文化財である。



久世神社　旧郷社

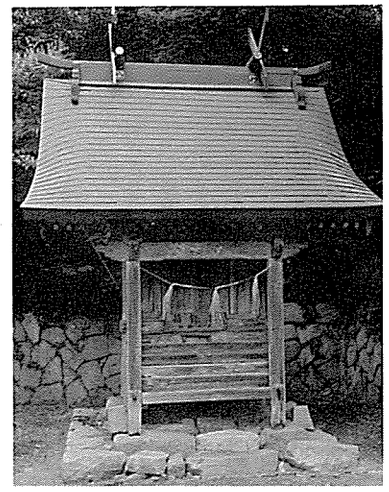
真庭郡久世町久世一四三三　一四三四の一

主祭神　神阿陀都姫神　素盞嗚尊　大已貴命
倭媛命
例祭　十月二十五日
境内地　五、五三四・一四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所
摂末社　白猪臣神社　稲荷神社
氏子数　五〇〇人　**崇敬者数**　三、〇〇〇人
宮司　須田　誠
責任役員　石尾森一　吉永正夫　福井一郎　長尾谷三
由緒沿革　本神社は永禄十二年火災により、書類を焼失したので、創建年月、由緒は不詳であるが、口碑によると、往古は形部神社と唱え、後に生建大明神と改称した。貞観六年八月従五位上被叙社田を賜わった。享保十七年六月正五位に叙せられた。明治六年二月久世神社と改称した。明治十二年五月十日、郷社に列格。

久刀神社　旧村社

真庭郡湯原町大字社六五四

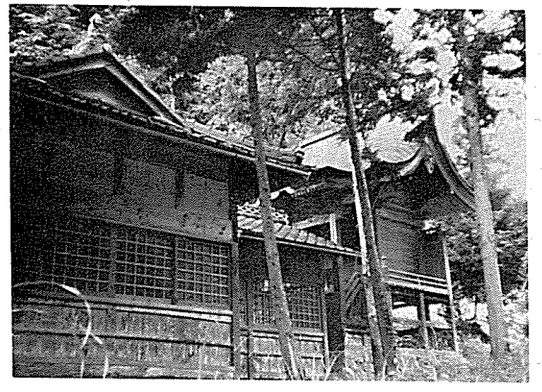
主祭神　久那止神
例祭　十月九日
境内地　三八三・〇三坪（壱粟・莵上・長田各神社共有地）
主要建物　本殿　拝殿（壱粟、莵上・長田各神社共用）
氏子数　九二戸　**崇敬者数**　四八〇人
宮司　藤田　昌
責任役員　樋口平三　美甘　彰　牧田　敬
宝物　中臣祓写本一巻（貞享二年三月森長俊）
由緒沿革　式内社で三代実録に貞観六年八月美作国従五位下久止神に従五位上を授くとある。神祇志料に久刀神社今社村壱粟社の東にあり、八宮という。



國司神社　旧村社

真庭郡落合町大字野原七六七

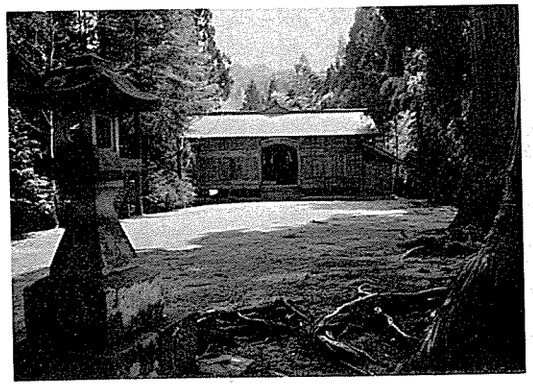
主祭神　大已貴命
例祭　十二月九日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　若宮神社
氏子数　二〇戸　**崇敬者数**　一五〇人
宮司　黒田　収
責任役員　毛利公平　毛利忠雄　藤原仁志　畑本光雄
由緒沿革　創建年代、由緒等は不詳である。



國玉神社　旧村社

真庭郡落合町大字旦土二七六

主祭神　大国玉神
例祭　十月二十三日　**境内地**　八四二坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿　社務所　倉庫
氏子数　六〇戸　**崇敬者数**　三〇人



主祭神　伊邪那美神

真庭郡湯原町大字粟谷二九八

熊野神社　旧村社

宮司　杉原　隆
責任役員　今石　豊　河岡音一　森谷昭郎
由緒沿革　創建年月日等は不詳。明治十四年九月二十四日村社に列格した。

真庭郡落合町大字舞高三三〇

熊野神社　旧村社

例祭　十月二十八日　**境内地**　一、一三二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　粟島社　荒神社　蘆穂神社
氏子数　八〇戸
宮司　東郷留吉
責任役員　片山　勉　明村　勇　佐藤好明
由緒沿革　創建年代は不詳。紀州熊野の神を勧請し、熊野十二社大権現と称していたが、明治に至り熊野神社と改称した。

主祭神　熊野神　伊邪那岐神
例祭　十二月七日　**境内地**　三二三坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿
氏子数　十六戸　**崇敬者数**　二〇人
宮司　杉原　隆
責任役員　村上杢逸　硯　宣二
由緒沿革　創建年代、由緒等は不詳。明治十四年九月二十四日村社に列格した。

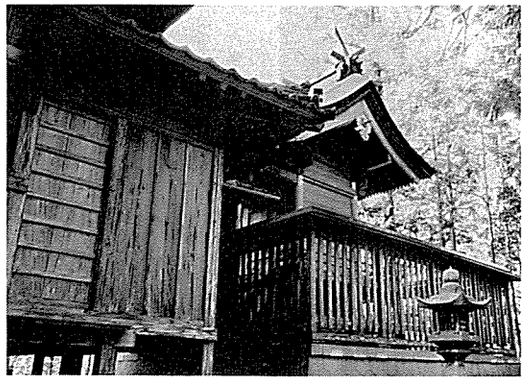
真庭郡落合町上河内三四五一

熊野神社　旧郷社

主祭神　伊邪那岐神　伊邪那美神　素盞嗚尊　市杵島姫命　加具土神　外十七柱神
例祭　十月十五日
境内地　七、九三八坪
主要建物　本殿　拝殿　神饌所　社務所　神輿庫　絵馬殿
摂末社　荒神社　斎神社　龍神社　那智神社
氏子数　五〇〇人
崇敬者数　二、五〇〇人
宮司　須田福徳　**禰宜**　須田　誠
責任役員　白石　強　梶清哲郎　稲岡　昇
由緒沿革　円融天皇永観年中、国司が勅命により、紀州熊野三社を美作国河内庄に勧請し、神田二〇〇石を寄進し、神官社僧各十二人を置き祭祀を厳修させた作州の熊野別宮であった。河合郷の総鎮守とした。旧境内地は、作陽誌に東西四百八十三間、南北四百九十五間との記載があり、堂々とした規模である。明治維新に神仏分離の際、境内の大半が寺有となった。明治六年二十九日、郷社に列した。明治四十四年上河内の大歳神社外十六社を合祀し、大正元年中河内八幡神社外三十四社を合祀した。

栗原神社　旧村社

真庭郡落合町栗原一〇三一



主祭神　譽田別尊
例　祭　十月九日　**境内地**　二五三・一五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　社務所
氏子数　二四五戸　**崇敬者数**　一、二四五人
宮　司　甲斐蓬太郎　**禰　宜**　永田真太郎
責任役員　大塚益夫　森本亀雄　杉本岩一
由緒沿革　本神社の勧請年月日は不詳であるが、古くは八幡宮として栗原村の総氏神である。明治十五年四月二十二日、村社に列格した。大正四年九月大字内の立石神社、国司神社、王子神社を合祀して社号を栗原神社と改称した。昭和十三年十月九日神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

山神社　旧村社

真庭郡落合町鹿田二一〇九

主祭神　大山祇神
例　祭　一月九日　**境内地**　九九坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　七十三戸　**崇敬者数**　三五〇人
宮　司　築沢　慧
由緒沿革　不詳

下見神社　旧村社

真庭郡落合町大字下見一九七

主祭神　天之御中主命　大山祇命　素盞嗚尊　大国主命
例　祭　十二月亥己日　**境内地**　五四四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　斎神社
氏子数　二〇戸　**崇敬者数**　一二〇人
宮　司　黒田　収
責任役員　毛呂米一　高崎新言　池田喜伴　小倉亮蔵
特殊神事　火神舞



由緒沿革　人皇第四十五代聖武天皇の御宇の勧請である。天文十五年九月二日、社殿がことごとく焼失したことが古書に記してある。津山城主森中将忠政公の崇敬が特に篤く、慶長十一年普請奉行桜井弥左衛門に、大工井上治郎右衛門を差遣して当社を再び建立させた

ことは古書に明らかである。大正二年村社に列格した。

下河内神社　旧村社

真庭郡落合町下河内八五一

主祭神　速玉男命　大山祇命　久那斗命　事代主命　武甕槌命　伊弉冉尊ほか八柱神
例　祭　十月十五日　**境内地**　六三二坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿　神輿庫　社務所
摂末社　斎神社
氏子数　一四〇戸　**崇敬者数**　二、〇〇〇人
宮　司　須田　誠
責任役員　宮本　昇　初岡　昇　小林儀平
由緒沿革　円融天皇永観年中に、美作の国司が勅を奉じて紀州熊野三社を河内庄に勧請した。斎祭は作陽誌にも記載してあり、古来より森厳に執行せられた。明治六年二月九日村社に列した。大正三年下河内鎮座の素盞嗚神社外二十四社を合祀した。

下諏訪神社　旧村社

真庭郡落合町大字別所二七六四

主祭神　積羽八重言代主命　八坂刀賣命
例　祭　十月二十二日　**境内地**　二二九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所
氏子数　五六戸　**崇敬者数**　二五〇人
宮　司　近藤正隆
責任役員　春木佐一　春木　昇　清友睦男
由緒沿革　元和三年三月信州下諏訪の社から勧請して祀った。古来宮木、大谷部落の氏神であったが、その後、別所庄の氏神となった。明治三年村社に列格した。大正七年五月十一日粟村境外摂社八幡神社外十三柱を合祀した。昭和七年五月二十八日、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

新庄神社　旧村社

真庭郡新庄村二〇八三

主祭神　味耜高彦根命　天手力男命　伊弉諾尊　伊弉冉尊　大国主命　外十柱神
例　祭　十月九日　**境内地**　二六九・九二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　恵比須神社
氏子数　九〇〇人
宮　司　石田太刀男
責任役員　卜倉敏男　酒井源三郎　岩田義夫
由緒沿革　本神社は難波長柄の豊崎宮孝徳天皇大化二年美甘郷を建て、総社を創建し、神領八町を賜わった。大正二年十月、無格社隼鷹神社・八幡神社、門守神社、愛宕神社、荒神社、山神社、諏訪神社を合祀し、同時に新庄神社と改称した。

鈴神社　旧村社

真庭郡勝山町大字本郷一七五四

主祭神　猿田彦命　天鈿女命
例　祭　十月十九日　**境内地**　二、〇一一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫
摂末社　笠神社　荒神社　大山祇神社　稲荷神社　荒神社　立石神社　山祇神社
氏子数　二〇〇戸
宮　司　池田武夫
責任役員　藤井芳延　福本鶴之助　神谷竹治
由緒沿革　本神社は白鳳八年、伊勢国渡会の道別の神を勧請したもの。もと、本郷村字陣山幸神が旦に鎮座せられていた。今でも社跡の幸神が旦という字名が残っている。この地は天文から天正に至る戦国時代に、毛利方の陣地となり、社地を穢し奉ったので、天正十一年現在の高岡山に移し奉った。これより以前の古記録は戦国の為鳥有に帰している。棟札はその後両部時代神仏職権の争いのため紛失した。

清谷神社　旧村社

真庭郡勝山町清谷三五三

主祭神　譽田別尊　猿田彦命　宇迦御魂神　金山彦命　大山祇神　久那斗神　外十柱神
例祭　十月十日　**境内地**　五二三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫
氏子数　一五七人　**崇敬者数**　二〇〇人
宮司　西井　愷
責任役員　植田寿一　森　正男　戸田四郎
由緒沿革　創建年月日は不詳であるが、元庄屋戸田家の蔵書によると、元三河国戸田義春が羽柴氏に属して武功があり、その子兵庫大阪落城の時戦死した。偶々懐妊の妻が従者に扶けられて、鎮守八幡大神の神霊を奉戴し、美作国井原庄清谷に落ち、居を構え東方山上に社を造り、八幡大神を奉斎した。以来清谷庄の総氏神として祭祀した。明治六年村社に列し、大正九年四月氏子内城山神社外五社を合祀し、社名を清谷神社と改め、昭和七年十月本殿、拝殿を改築し、昭和十九年五月二十九日、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

総社　旧村社

真庭郡落合町中八九五



主祭神　大己貴命　天種子神　天鈿女命
例祭　十月十六日　**境内地**　一五一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　祝詞舎　神輿庫　神庫
事務所
摂末社　八幡神社　斎神社　善覚神社　稲荷神社
氏子数　一〇〇戸
宮司　牧　宣男
責任役員　杉明　一　住田理市　初岡宇三郎　藤井甚六　初岡治雲平　大島　功　金田信義　庄司　強
由緒沿革　本神社は和銅年間に、出雲大神を宇総社に勧請した。延喜年間に洪水で、宇田中に遷座したが、文禄年間に洪水で、宇宮の上、即ち現在の地に御社殿を建立した。慶長年間に火災に遇い、四度御社殿を建立した。明治元年村社に列格した。元真島郡の総社であったが、明治十二年奈加神社と改称し、昭和十五年総社を復称した。

田根神社　旧村社

真庭郡湯原町大字種一七八三

主祭神　宇気母智神
例祭　十月二十一日　**境内地**　一、五九六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　稲荷神社　荒神社
氏子数　一〇〇戸
宮司　東郷留吉　**禰宜**　東郷和泉
責任役員　渋谷静馬　宍戸寛治　吉岡昭信
宝物　兜　一　鎗　二　太鼓（桐胴鼓張）
特殊神事　神幸祭行列
由緒沿革　真島郡建部郷の古社である。往古大名持神が稲種を伝え給うたので、種村といったと伝えられて

いる。爾来、穀物の祖神を祭っている。後醍醐帝が隠岐から伯耆へ渡海せられた折の供の人が、この地に止まり海神を奉斎、波上大明神と称した。明治に至り田根神社と改称した。また、山王社、権現社を合祀している。昭和二十八年湯原ダム水没地の白山神社と銅山神社とを合祀している。



高應神社　旧郷社

真庭郡勝山町大字江川九二九

主祭神　少彦名命　大己貴命　外五柱
例祭　十月十九日　**境内地**　三六二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　惣社大明神　鈴大明神　八幡宮　土主大明神　正八幡宮　国司大明神　斉神社　金倉大明神
崇敬者数　五三〇人
宮司　沖田孝重
責任役員　坂元武吉　福井正治　川上正雄　岩元知之　宇山太郎
由緒沿革　白鳳八年の鎮座で、旧江川、神代寺、河内延風、山上、本郷、荒田等各村の氏神である。元禄二年の頃、正一位高応大明神と号し、社領百石を有していた。

高田神社　旧県社

真庭郡勝山町勝山七七五

主祭神　伊邪那岐命　伊邪那美命　速玉男神
例祭　十月十九日
境内地　四、六〇六・五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　神庫　社務所
摂末社　金刀比羅神社　八幡神社　稲荷神社　速日神社　天神社　荒神社
氏子数　四〇〇戸　**崇敬者数**　二〇〇人
宮司　池田武夫　**禰宜**　池田一信
責任役員　河本壮一郎　大塚章保　岡田哲雄
特殊神事　例祭の神集祭
由緒沿革　本神社は久寿二年熊野から勧請し、熊野大権現と称した。往古は社領三百石であった。明徳応永の間、前城主の三浦下野守が高田に居城し、十三世二百年間の祈願所となった。落城後、毛利輝元が領し、猶崎弾正忠元兼をつかわし、天正十一年造営を加えた。慶長年中は森忠政公が本州を領し、長臣の大塚主膳が修繕を加えた。近くは三浦藩主が明和年中入国以来、産土神として尊敬し、その祈願所であった。明治六年四十四ヶ村の郷社であった。昭和五年十月県社に列格した。

建部神社　旧郷社

真庭郡湯原町藤森一〇一

主祭神　日本武尊　素盞嗚尊　速秋津彦命　外四柱神
例祭　十月二十日　**境内地**　一、五八〇坪
主要建物　本殿　拝殿　幣殿　神饌所　社務所

摂末社　天満神社　伊勢神社　粟島神社
氏子数　六二一人　**崇敬者数**　三〇〇人
宮　司　佐伯　節
責任役員　岡品　太　永井孝治　神田助方
由緒沿革　創建は元和四年三月八日で、建部郷の一宮で、大宮大明神と奉称した。往古は倭建命の御名代として、建部を置いたので、倭建命を奉斎したという。美作国百十二社記に、建部郷一宮藤森にあり、大宮大明神といったと記している。昭和十二年九月二十日郷社に列せられた。

垂水神社　旧郷社

真庭郡落合町大字垂水五五二

主祭神　大己貴神　応神天皇（配祀）結神　菅原道真朝臣
例　祭　十月二十一日
境内地　七一〇坪
主要建物　本殿　幣殿　祝詞殿　拝殿　神庫　社務所
摂末社　宝龍神社　御山稲荷神社
氏子数　八一三戸
崇敬者数　一二、一七二人
宮　司　築沢　慧
責任役員　細井整一　川岸鹿蔵　若田　隲　舛山智二
宝　物　「箸立天神いぶきひば」（岡山県指定天然記念物）



由緒沿革　天安元年の創建で、もと注連山上にあったものを現在の山麓に遷したと伝える。古来南三郷の一宮と称し、かつては五十石を有した。鎌倉時代には梶原景時、戦国時代には尼子晴久が造営した。江戸時代の慶長十二年に垂水寿伯が八幡宮を、元和三年に牛尾久盛が国司宮を夫々中興した。後、明和五年に三浦明次が祈願所に定めてから明治四年に至るまで歴代藩主の崇敬があった。明治四年一月十日、郷社に列格した。

大宰神社　旧村社

真庭郡落合町大字下市瀬一五七

主祭神　大歳神　大山祇命
例　祭　十月十三日　**境内地**　二九二坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿
摂末社　山神社　御崎神社
氏子数　一四戸　**崇敬者数**　五六人
宮　司　宮司代務者　近藤正隆
責任役員　小瀬正二　大田新次郎　大田秀与志
由緒沿革　勧請年月日等は不詳。元郷社木山神社の境外摂社であったが、明治十四年、村社に列格した。

中和神社　旧村社

真庭郡中和村大字下和一九四六

主祭神　久那止神　他二十九柱
例　祭　十月九日　**境内地**　一、九三七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　八幡神社　稲荷神社　熊野神社　車戸神社

氏子数　一六七戸　**崇敬者数**　一〇〇人
宮　司　武内禎治
責任役員　池田順三郎　進　寅一　葛尾　武
特殊神事　七月十五日午祭
由緒沿革　古くは久刀神社、車戸神社、あるいは久留那止大明神と称したが、明治四十四年十二月村内各神社を合祀した際、村名をもって社号とし、中和神社と改称した。三代実録に貞観六年八月十五日美作国従五位下久刀神社授従五位上とある。又神祇志料には美作国八ノ宮とある。古くから牛馬の守護神として、近隣の崇敬が篤く、現在に至っても尚山陰方面より講参りが行われている。

月田神社　旧村社

真庭郡勝山町大字月田本一八三七

主祭神　大国主命　建速須佐之男命　岩土神　滝津姫命
例　祭　十月九日　**境内地**　二七四坪
主要建物　本殿　長床　拝殿　社務所　神輿庫
摂末社　稲荷神社
氏子数　八〇戸
宮　司　沖田孝重
責任役員　吉岡重男　押目耕治　近藤　幸
由緒沿革　本神社の創建は神護二年九月十八日であり、井原郷四所大明神の一つで、維新前までは国司大明神と称したが、明治三年月田神社と改称し、明治六年村社に列格した。大正四年白滝神社、岩浜神社を合祀した。

菟上神社　旧村社

真庭郡湯原町大字社六五四

氏子数　九二戸　**崇敬者数**　四八〇人
宮　司　藤田　昌
責任役員　樋口平三　美甘　彰　牧田　敬
宝　物　中臣祓写本一巻（貞享二年三月　森　長俊）
コマイヌ一対
特殊神事　二月　十一月　十一忌祭
由緒沿革　式内社で神名帳考証、三代実録に、貞観六年八月美作国従五位下菟上神社に従五位上を授けるとある。本神社の忌祭のことが作陽誌にある。御祭神の弟彦王命は和気清麻呂公の十一代の祖である。

徳山神社　旧村社

真庭郡川上村大字上徳山八〇七

主祭神　素盞嗚尊　少彦名命　大己貴命　事代主命
例　祭　十月二十六日
境内地　一、三一二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門
摂末社　御先神社二社　荒魂神社
氏子数　一六五戸
崇敬者数　五一〇人
宮　司　藤田道宗
責任役員　御船　貞　植木勘一　長尾　直
宝　物　古棟牓（三枚）古文書（文明年間のもの）
由緒沿革　往時、牛頭天王と称し、旧社地の真嶋郡別所佐波良谷に鎮座し、佐波良神社と称した口碑がある。文明、万治、延宝の棟札によって、代々領主が造営し

主祭神　弟彦王命　岐神
例　祭　十月九日
境内地　三八三・〇三坪（壱粟、久刀、長田三神社共有）
主要建物　本殿　拝殿（壱粟、久刀、長田各神社共用）
摂末社　渡唐天神　祖霊神社



たことが明らかである。祭祀は文明の古書によって、正税であったことがわかる。明治四年徳山神社と改称し、同四十二年五摂社を合祀した。昭和五年幣拝殿を新改築し、同十一年境内を拡張し、参籠所を改造移転した。同五十年本殿、幣拝殿を銅葺にした。

富尾神社 旧村社

真庭郡久世町大字富尾一〇九

主祭神 大歳神

例祭 十月二十五日 **境内地** 九四・六坪
主要建物 本殿 釣殿 拝殿 社務所 神輿庫
摂末社 金刀比羅神社 荒神社
氏子数 六〇戸
宮司 田中二葉
責任役員 森田保正 辻 光夫
宝物 神輿
由緒沿革 御冷泉天皇の天喜年間大洪水があり、旭川の流域はことごとく河原と化し、荒廃の極みに至った時、蕪地の中央に、大歳神を奉祀し、御加護を蒙って復興せしめたと伝えられる。往古は高田郷六社の一として、神輿立会祭に参加したが、時勢の変遷に依りその事は止んだ。例祭には単独で神輿渡御が行われている。昭和三十五年十月、本殿（鉄筋コンクリート）瑞垣、拝殿、社務室を新築した。

中尾神社

真庭郡勝山町大字古呂々尾中一二七二

主祭神 伊弉諾尊 大国主命 久那斗神
例祭 十月十三日 **境内地** 二、二一七坪
主要建物 本殿 幣殿 拝殿 神輿庫
摂末社 菅原神社 王子神社 大歳神社 高井田神社 久那斗神社
氏子数 二三二人 **崇敬者数** 一二〇人
宮司 西井 愷
由緒沿革 本神社は作陽誌に、真嶋郡井原郷の王子権現社在古呂々尾中祭祀冬夏二時境内東西百間南北八十間又有天神主部神社云々と見えている神社で、往古は王子権現と称えた。明暦四戌年二月二十四日社寺奉行代大庄屋山谷安兵衛が、社殿を再建したと棟札にある。享保二十年四月に代官が、社殿を再建したとの棟札がある。明治三年九月中尾神社と改称し、明治六年三月村社に列格した。昭和十七年十月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。昭和二十一年五月菅原神社外八社を、所管神社として、神社本庁の承認を得た。

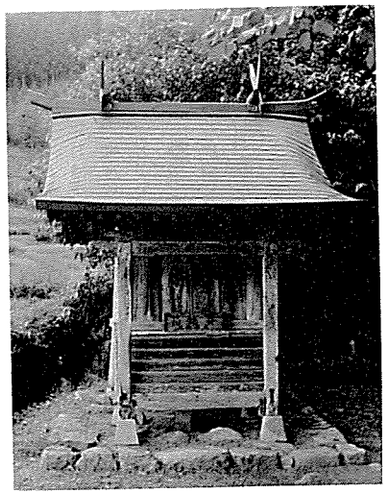
長田神社 旧郷社

真庭郡八束村大字下長田一〇九七

主祭神 事代主神
例祭 十月二十六日 **境内地** 七六九坪
主要建物 本殿 幣殿 神門 社務所
摂末社 真名井神社 姫宮神社 若宮社 御崎神社
氏子数 二五〇戸
宮司 武内禎治
責任役員 林 富夫 本島政男 小谷美男 立田 隆 高見 右
特殊神事 御田植祭
由緒沿革 延喜式神明帳に小十座の一、美作国長田神社とある。又三代実録に貞観六年八月十五日美作国従五位下長田神社授従五位上とあり、布施郷一宮美作国九宮とある。中古には牛頭天王とも称している。天文年中尼子晴久が、社殿を建築し寄進した。慶安二年美作国主森内記が神鏡一面を寄進した。明治四十二年上長田、下長田所在の九社を合祀した。大正十一年郷社に列格した。

長田神社 旧村社

真庭郡湯原町大字社六五四



主祭神 事代主神
例祭 十月九日
境内地 三八三・〇三坪（壱粟、菟上、久刀各神社共有地）
主要建物 本殿 拝殿（壱粟、菟上、久刀各神社共用）
氏子数 九二戸 **崇敬者数** 四八〇人
宮司 藤田 昌

責任役員 樋口平三 美甘 彰 牧田 敬
宝物 中臣祓写本一巻（当国大主従立位下源朝臣森 長俊）
由緒沿革 式内社で神名帳考証に貞観六年八月美作国従五位下長田神に従五位上を授くとある。三代実録、神社志料に長田神社同社村は菟上社の西にあり、九宮という。作陽誌に五社（菟上、壱粟、大佐、佐久刀、長田）相並び、神行次第に、横見、久刀、長田、壱粟形部、佐波良、菟上とある。

延風神社 旧村社

真庭郡美甘村大字延風一

主祭神 大己貴命
例祭 十月十二日
境内地 二三六・九二坪
主要建物 本殿 幣殿 拝殿 社務所
摂末社 八幡神社
氏子数 三〇戸 **崇敬者数** 一〇〇人
宮司 黒田 弘
責任役員 神谷忠司 池田太久万 植田 茂
由緒沿革 創建年月日由緒等は不詳である。往昔、大洪水のため、新庄村客人神社の御神体が流れついたのを、里人が斎い奉ったと伝えられている。

八幡神社 旧村社

真庭郡勝山町若代二八七八

主祭神 譽田別尊 稚日女命
例祭 十月十五日 **境内地** 三七一坪
主要建物 本殿 幣殿 拝殿 神庫 社務所
摂末社 三柱神社 斎神社
氏子数 一七八戸 **崇敬者数** 五三四人
宮司 上田昌信
責任役員 福島播治 鈴木益見 米山高一
責緒沿革 本神社の由緒沿革は詳かでない。維新前までは八幡宮、神谷大明神と並称したが、明治三年八幡神社と改称した。この地の住民には源家が多く、その祖神を祀ったものだと伝えられている。神谷、若代、神谷川などの由縁ある地名が今に存している。明治六村社に列せられた。

八幡神社 旧村社

真庭郡久世町大字鍋屋一七四

主祭神 譽田別尊 息長帯比賣命 比売大神

例　祭　十月二十五日
境内地　一、四九六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫
摂末社　夫婦岩神社　愛宕神社　荒神社　大空神社
氏子数　三〇〇戸
宮　司　田中二葉
責任役員　長尾弥一郎　長尾良一　長尾護良
宝　物　神輿
由緒沿革　保安元年正月十五日山城国石清水から勧請した。当時の社地は現在地より南八丁の古八幡跡地であったが、年月は不詳であるが現在の地に移祀せられた。万治二年、延宝五年、明和元年、天明二年、享和元年、文政二年、天保十一年の本殿造営の棟札がある。昭和五年十月、本殿、幣殿、拝殿、社務所が腐朽したので造営した。例祭には町内五社が神輿立会祭に参加して神幸式が行われた。

八幡神社　旧村社

真庭郡久世町大字惣六〇六

主祭神　応神天皇
例　祭　十月二十五日
境内地　一、一五三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫
摂末社　護国神社
氏子数　一五〇戸
宮　司　田中二葉
責任役員　前田三郎　岡田暎夫　川崎常夫
宝　物　神輿
由緒沿革　古老の口碑によると、後鳥羽天皇の文治年間男山八幡宮から勧請したという。旧真島郡惣村外十二ヶ村の大氏神である。往古は天津神社、中神社、富尾神社、太宰神社、八幡神社（市瀬）大市神社六社の神輿が天津神社の境内に立会神祭があったが、時勢の変遷によりその事は止んだ。明治の終わり頃から旧久世地区の五神社神輿が立会祭に参加して、神幸式が例祭に行われている。

八幡神社　旧村社

真庭郡勝山町大字山久世一八八二

主祭神　応神天皇　神功皇后　玉依姫命　合祀国司ノ神　外諸神
例　祭　十月十九日
境内地　一七四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫
摂末社　稲荷神社　外二神社
氏子数　八二戸
宮　司　田中二葉
責任役員　福島浅夫　牧野友夫　岩田　章
宝　物　神輿
由緒沿革　桓武天皇の延暦二十一年宇佐八幡宮から勧請した古社である。往古は久世郷の二の宮と唱え、秋大祭には久世神社に神輿渡御の式典があった。神席は上位を占め給い三坂犬丸からも献供のあった故事は旧記に見えているが、時勢の変遷で廃絶した。現在の本殿は明治三十年の造営である。

八幡神社　旧村社

真庭郡美甘村大字鉄山三八三

主祭神　譽田別尊　息長帯比賣命　武内宿禰命
例　祭　十月十日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫
摂末社　大山祇神社　矢倉神社　荒神社　斎神社
氏子数　七五戸
宮　司　佐伯正禮
責任役員　樋口　清　半田富夫　打田正人
由緒沿革　創建年代は不詳であるが、和銅年間、採鉱のため鉄山を開拓した際、山の神を祭祀したのに創る。この地は、建部郷で、建部大伴部、佐伯部等の御名代の民どもが安芸の佐伯部と呼応して、平氏を支持したため、平氏滅亡後に源氏の支配下におかれ、源氏の氏神の八幡社の信仰を強要せられ、本来の山神およびその斎社は末社に追いやられ、八幡神社となった。

八幡神社　旧郷社

真庭郡湯原町大字見明戸三四三

主祭神　息長帯比賣命　譽田別尊　武内宿禰　金山彦命
例　祭　十月二十二日
境内地　六〇九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　湯原護国神社　佐伯神社　荒神社　御崎神社
氏子数　八五戸
宮　司　佐伯正禮
責任役員　西原喜雄　宗信　実　和田正守
特殊神事　鷹巻誉祭　神幸式警護行事（無形文化財）
由緒沿革　建部郷御名代の地で、大伴部、佐伯部、建部等の部民が、祖神の祭祀を奉仕した磐境神籬が現存している。現在の神社の創立は不詳であるが、磐境祭祀の後、佐伯神社が創建せられた。安芸の佐伯景弘が源氏に滅ぼされ、厳島神社の神主を追放せられたと同年代に、源氏の手で八幡社が創建せられるに至った。文明三年四月十九日八幡創建、延文二年三浦下野守勅願社等の棟札が現存している。昭和六年十一月、郷社に列格。

八幡神社　旧村社

真庭郡勝山町大字荒田五三四

主祭神　譽田別尊　息長帯比賣命　足仲彦命
例　祭　十月十五日
境内地　一、〇八九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　籠殿　社務所
摂末社　稲荷神社　斎神社　山祇神社　菅原神社
氏子数　四七戸
崇敬者数　五〇人
宮　司　池田武夫
責任役員　友定速男　山本政雄　小野文治郎
由緒沿革　本神社は延元三年九州宇佐八幡宮の御分霊を勧請したと伝えられる。古昔、この地に累年疫病が起り、里民はこれを愁えた。ある日威猛き翁が太刀を佩き、弓箭を携えて現われて、我は宇佐の神なり、広く邪病を退治し、助けつかわさんと云い、弓を張り白羽の矢を放ち給うて、そのまま翁は消え失せ給うた。これよりこの地に来だかつて疫病が流行したことがないと伝えている。今でも弓矢の行事は毎年行われている。

八幡神社　旧郷社

真庭郡湯原町大字禾津三三二

主祭神　譽田別尊　息長帯比賣命　武内宿禰
例　祭　十月二十九日
境内地　一、〇五〇・九四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　宗像神社　疫神社　天満宮　尾崎神社　山祇神社　境内祖霊社
氏子数　一〇〇戸
宮　司　中田三樹夫
崇敬者数　二〇〇人
責任役員　横木嘉久太　谷口正和　植木盛行
由緒沿革　創建年代は不詳。往古は禾津字古宮屋敷にあった。庚正二年野谷池が大雨で崩壊し、後、現境内地に移転した。元禄十一年再建、附近十四ヶ村の総氏神であった。明治四年八幡神社と改称した。明治六年郷社に列した。

八幡神社　旧郷社

真庭郡湯原町大字本庄一三六五

主祭神　息長帯比賣命　譽田別尊　武内宿禰
例　祭　十月二十九日
境内地　一、七六四・九四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　大山祇神社　宇気母智神社
氏子数　五〇戸
崇敬者数　八〇人
宮　司　中田三樹夫
責任役員　矢吹和治　三船憲介　柿本高美
由緒沿革　往古から正八幡宮と称し、土居村他十四ヶ村の氏神であったが、明治維新の際上岸、玉田、安井、石内、小谷、大月の六ヶ村を分割して一村とし、その氏神と定めた。現在に至っても郷社八幡神社と立会祭典が行われ、神輿は禾津村に御神幸せられる。明治四年八幡神社と改称した。昭和七年六月六日、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

八幡神社　旧村社

真庭郡落合町大字吉三七九六

主祭神　譽田別尊

例　祭　十月九日　**境内地**　三、七九六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　倉庫
氏子数　九三戸　**崇敬者数**　一五〇人
宮　司　杉原　隆
責任役員　綱島久志　大釜宏輝　杉原徳市
由緒沿革　縁起書に、天暦元年九月九日創建とあり、その他は不詳である。

八幡神社　旧村社

真庭郡落合町大字上山一一三七

主祭神　譽田別尊　神功皇后
例　祭　十月十七日　**境内地**　六、〇六〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　素盞嗚神社
氏子数　五〇戸　**崇敬者数**　五〇人
宮　司　杉原　隆
責任役員　大杉三十六　小出　寿　岡本豊田　鈴木正
由緒沿革　創建年月、由緒等は不詳。明治十四年九月二十四日村社に列格した。

八幡神社　旧村社

真庭郡落合町大字西河内九四三の一

主祭神　譽田別尊　息長帯比賣命　武内宿禰
例　祭　十月十四日
境内地　一、〇〇〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　斎神社
氏子数　六五戸
宮　司　入夏光男　**禰宜**　坂本豊之　檀　重利　植田治男
責任役員　池田修二　小野田肇　植田晃正
由緒沿革　本神社は文治四年美甘荘黒田村逸の奥大林山麓に勧請した。美甘村麗城主三浦家の社神となって祭札は森厳を極めた。承応三年八月十三日再建立の棟札が現存している。元文四己未年祠堂が鳥有に帰した。当時の御神体は半身残焼のまま現存する。朴の御神体であるから村人は今に朴の下駄を用いない。元文五年庚申、現在の鎮座地の原に社殿を再建立し奉った。

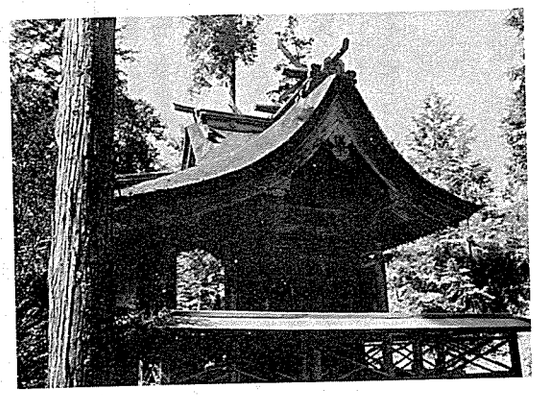
主祭神　譽田別尊　後鳥羽天皇　若王子命
例　祭　十月十五日　**境内地**　五三五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所
摂末社　斎神社
氏子数　九三戸　**崇敬者数**　三六〇人
宮　司　近藤正隆
責任役員　浅田健一　伊賀　勇　森下　稔
由緒沿革　文禄二年二月十五日の勧請で、後鳥羽院の皇子がこの地で薨去せられたので、その霊を祀ったものと伝えている。現にこの地を王子墳ともいう。以来

主祭神　譽田別尊
例　祭　十月十九日　**境内地**　四五〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所
摂末社　天満神社
氏子数　一〇五戸　**崇敬者数**　四二〇人
宮　司　近藤正隆
責任役員　井手俊二　岡田弐二　矢吹五郎助
由緒沿革　慶長十九年三月、薬師寺與左衛門尉が願主となって創建。合祀する内足神社は慶長十九年三月、願主長尾頭大夫藤原義正の創立。玉造神社は慶安五年五月八日、願主貞国七兵衛の創立。藤木神社は明和年間、硯槌三郎の創立。西河内村八幡神社は地、東西、百五間、南北、百間とある。

霊験高く、津山城主森忠政公は祭祀料として米数石を奉納した。その後勝山藩主三浦家に至って、本殿改築の際、祭祀料を奉献せられた。明治三年村社に列格した。大正四年四月十日、本村地内の熊野神社外十社を合祀した。

八幡神社　旧村社

真庭郡落合町大字鹿田一五三七



主祭神　譽田別尊

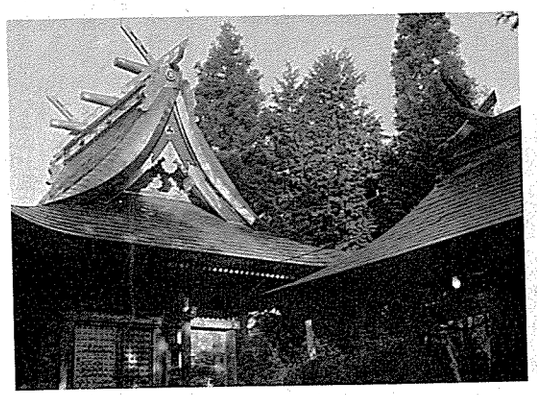
例　祭　十月十九日　**境内地**　六九二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所
摂末社　海神社　龍王神社　恵美須神社
氏子数　二〇四戸　**崇敬者数**　一、三九二人
宮　司　築沢　慧
責任役員　福島久治郎　織田丈夫　才木又一郎
由緒沿革　天文五年の創建と伝えられ、明治十四年村社に列格した。大正二年十二月十八日、白滝神社、片山神社、大正三年十月二十七日、稲荷神社、竹谷神社、同年十一月十五日、愛宕神社、菅原神社を合祀した。



八幡神社　旧村社

真庭郡落合町大字下方七三

主祭神　譽田別尊
例　祭　十月二十一日　**境内地**　五一九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫
氏子数　二一二戸　**崇敬者数**　一、四四九人
宮　司　築沢　慧
責任役員　宮林　護　池田毅一　難波　浩
由緒沿革　慶長年間の創建と伝えられる。明治十四年村社に列格した。



八幡神社　旧村社

真庭郡落合町大字日野上三〇四四

主祭神　譽田別尊
例　祭　十月十五日　**境内地**　四四〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　神輿庫　社務所
摂末社　八郎神社
氏子数　九八戸　**崇敬者数**　一、九二〇人
宮　司　築沢　慧
責任役員　加藤　粲　宮次賀久治　中島正一　本元義郎
由緒沿革　応永三年、男山石清水八幡宮から勧請したと伝えられる。寛永三年宇喜多秀家の臣鈴木孫右衛門、辻新次郎が造営したのが現在の本殿である。明治十四年村社に列格した。大正四年七月二十八日、加茂神社森神社を合祀した。

八幡神社　旧郷社

真庭郡久世町草加部一八九六

主祭神　譽田別尊　足仲彦命　息長帯比賣命
例　祭　十月二十五日　**境内地**　一、七二〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　神輿庫　社務所
摂末社　大上神社
氏子数　一七〇戸　**崇敬者数**　八〇〇人
宮　司　福島　正
責任役員　清友　香　桑木　博　高橋義一
宝　物　鰐口　甲冑　その他



由緒沿革　永徳二年、高田城主三浦下野守貞宗が郷里駿河の国から武門の守護神として高田村字常平に勧請した。明徳元年大洪水のために流失した。享禄二年九月、三浦の家臣金田氏が主家の衰亡を嘆いて再興し、益々武門の守護神として崇敬して、御神徳を高められ、近世の領主、村民の崇敬を受けて今日に至っている。



八幡神社　旧村社

真庭郡落合町大字田原四九二

主祭神　譽田別尊　神功皇后　玉依姫命　保食神
例　祭　十月十三日　**境内地**　一、七八二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所
摂末社　斎神社

氏子数　七三戸　**崇敬者数**　三五〇人
宮　司　黒田　収　**禰　宜**　黒田長宏
責任役員　高田　毅　井元　薫　宮谷岩夫　瀬島克仁　山田　忠　松下清一
由緒沿革　人皇第四十代天武天皇の白鳳年間、山城国男山八幡宮を勧請したものであることは、古老の口碑によって明らかである。当田原郷は元津山藩主森松平両藩主の領地であり、当神社を武運守護の神として、崇敬篤く、しばしば家臣を差遣して祈願せられたという。大正二年四月田原神社、国常立神社、今宮神社、若宮神社、桜谷神社、荒神社三社を合祀した。大正十一年村社に列格。

八幡神社　旧村社

真庭郡久世町大字中原三〇二

主祭神　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后　武内宿禰外四神
例　祭　十一月二日　**境内地**　四三〇坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿　神輿庫　社務所
氏子数　二四戸
宮　司　矢木登志夫
責任役員　三村要米　青木　勇　三村唯夫
由緒沿革　本神社は寛永年間に再建立の棟札があるが、建立の年月は不詳である。往古は五所神社と号し、八幡、荒神、若宮、今宮、水神の五社を奉斎し、中古は五社八幡神社と改称して、若宮を字御殿に、水神を字三崎に分社し、本神社の摂社として尊信した。明治三年村社に列せられた。明治十一年一月八幡神社と改称し、明治四十一年十二月字広高下に遷座した。



八幡神社　旧村社

真庭郡落合町大字古見字八幡山一三九七

主祭神　譽田別尊　大山祇命　素盞嗚尊　倭姫命　大国主命　武内宿禰　大己貴命　菅原神　少彦名命
例　祭　十月十三日　**境内地**　五四二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　社務所　宝物倉
摂末社　新八幡宮　稲荷神社
氏子数　一二一戸　**崇敬者数**　一、〇〇〇人
宮　司　牧　宣男
責任役員　妹尾信行　牧　清茂　安井竹一　瀬島俊佐久　瀬島平男　戸田　隆
宝　物　神輿
由緒沿革　本神社は元大庭郡古見村山方、原方両村の氏神で、八幡宮と称した。醍醐天皇延喜五年八月山城国男山八幡宮から勧請したと伝えている。往時屢々兵火にかかり、由緒は不詳である。作陽誌には、神器頗る備わり、門神があったと記してある。当時の権門、武将等の崇敬が篤かったことで、由緒の正しい神社である　ことが判明する。大正元年九月、古見地内各部落に御鎮座の摂社、無格社を合祀した。摂社田中神社は中途から田中大明神と称したが、作陽誌に大宮神社で御祭神は武内宿禰で、高良玉垂命である。元佐原庄は転訛して田原庄の総氏神で、美作式内十一社の内である佐波良神社で美作百十二社記に記載してある。合祀した神社は前出の田中神社をはじめ、住吉神社、一対神社、山玉神社、天満神社、森神社、湯天神社、上野神社、行手神社と田ノ口、小林、河本矢ヶ市、上野戸坂、金崎、堂ノ段、行手大京等の荒神社である。昭和十四年一月六日夜御本殿が炎上し、安永三年甲午年十一月建立の御社殿神器等ことごとく烏有に帰した。昭和十四年十月十二日上棟式並びに御遷座祭を執行し、壮麗で整備している御社殿を再建した。

八幡神社　旧村社

真庭郡落合町大庭字大日一四三

主祭神　譽田別尊　事代主命　軻遇突智神　素盞嗚尊
例　祭　十月十五日　二十三日
主要建物　本殿　釣殿　拝殿　神輿庫
摂末社　斎神社　広峰神社　萱野神社　平和神社　蚤　影山神社　足王神社
氏子数　五五戸　**崇敬者数**　一、八〇〇人
宮　司　松尾　巧
責任役員　山根富男　金平　正　山根幹夫　谷口一夫
宝　物　甲冑　木彫唐獅子一対
由緒沿革　本神社の創建、勧請年月、由緒等は不詳である。古来大庭八幡宮と称し、誉田別尊を奉祀し、のち八幡神社と改称した。古来大庭郡大庭郷一円、美和郷の内台金屋村、同御崎河原、邑久世郷の内多田邑、現在落合町大字大庭全体、同平松久世町大字台金屋、同大字三崎、同中原、同多田に崇敬者がある神社である。古くは大宮神社、三崎児守神社、中原八幡神社、五段若宮神社と本神社の五体の御神輿が十月二十三日に、鳥居前（新見城主関長政奉献）に神楽殿があり、舞を奉納した。後五体の神輿打揃って大宮神社境内で、祭典を行い賑やかな大祭であったが、現在では各社の大祭日も異なり、ついに廃止となった。

八幡神社　旧村社

真庭郡落合町赤野七九

主祭神　譽田別尊　神功皇后　玉依姫命　他十柱神
例　祭　十月十三日
主要建物　本殿　拝殿　杜務所
摂末社　高良神社　斎神社
氏子数　二〇〇戸
宮　司　須田　誠
責任役員　南条清樹　杉本利男　森本嘉夫
由緒沿革　天武天皇白鳳四年大中臣清麿公が、宇佐神宮から勧請したと伝えられている。美作国大庭郡赤野郷の氏神である。明治六年二月九日村社に列した。明治四十二年二月二十日赤野西原鎮座の神社を合祀した。

箸立天満宮

真庭郡落合町大字垂水九六八

主祭神　菅原道真公
例　祭　四月二十五日
主要建物　本殿　拝殿



由緒沿革　天安二年菅原道真公が十四歳の御時、久米郡長岡庄を経て真島郡高田庄への途次、この地で御食事をとられた際、ご使用の御箸をここにお立てになったところが、後、根を下し成木したと伝えられている。古来「天神の木」または「箸の木」と称せられて、この神木に祈願すれば霊験顕著なので、箸立天満宮と崇め祀って広く信仰された。明治四十二年九月、垂水神社に合祀された。御神木は伊吹ひばで樹齢は千年以上

宮　司　築沢　慧
責任役員　綱島時雄　兼田実雄
特殊神事　梅花祭（四月二十五日）秋思祭（十月十日）千灯祭（七月二十五日）

といわれ、昭和十六年三月、岡山県指定の天然記念物である。

久見神社　旧村社

真庭郡湯原町大字久見四二



主祭神　須佐之男命　大国主命　菅原神　少童神
例　祭　十月二十六日　**境内地**　四九七・八二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　宝庫
摂末社　稲荷神社二社　上代神社　荒魂神社

氏子数　一五二戸　**崇敬者数**　七五六人
宮　司　藤田道宗　**禰　宜**　藤田　昌
責任役員　後藤　進　長須玄一　福島太郎
宝　物　天文二十一年古記棟札・旧神体・慶長六年棟札
特殊神事　蓮華祭（併社合祀記念祭）
由緒沿革　加佐見神社であるといい伝える。三代実録に、貞観六年従五位上を授けるとある式外社で、鎮座地を加佐見山という。白鳳以前の鎮座で、同八年高木の地に再建し、高木桂住神を素盞嗚尊と称し、寛平三年牛頭天王と号した。七ヶ村の摂社を明治四十四年に合祀し、同年幣饌の指定をうけた。昭和十五年紀元二六〇〇年記念事業として、幣拝殿を新改築し、昭和五十四年本殿を大修復し、玉垣等を建設し境内を整備した。

平松神社　旧村社

真庭郡落合町大字平松一五六

主祭神　国常立命
例　祭　十月十五日　**境内地**　一〇七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　籠殿
摂末社　荒神社　斎神社
氏子数　二五戸
宮　司　黒田　収
責任役員　樋口定夫　押柄善真　福島　巧
由緒沿革　本神社の創立は詳かではないが、作陽誌には明見社とある。明治維新後平松神社と改称した。創立以来造営は度々であろうが、現存の棟札によると、元文三年三月、享和元年十一月の造営である。嘉永五年八月二十二日大洪水で社地が欠落したので、現在の地に仮殿を設けて、一時御神体を奉斎し、翌六年十一月社殿を移転して、遷座式を挙行し今日に至っている。昭和十三年村社となった。



福田神社　旧郷社

真庭郡八束村大字中福田三九二

主祭神　大己貴命　素盞嗚尊　稲田姫命

例　祭　十一月三日
境内地　一八〇七・八五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　宝庫　神輿庫　神楽殿　御供殿
摂末社　御先神社　海原神社　菅原神社　祖霊社
氏子数　三九三戸　**崇敬者数**　一、六五二人
宮　司　藤田道宗
責任役員　隅田剛二　二若作好　池田　弘　山本五郎
宝　物　県重要文化財指定舞楽面皇仁庭一面　古文書（仁治三年、文永三年）銅鉾（天文年間）兜三頭
特殊神事　神幸祭　渡御　警護行列（大名行列）
例祭七五膳の儀　大宮踊（県無形文化財）



由緒沿革　仁治三年の古書に布勢郷の大宮、文永の古書に、郷の宮、作陽誌に大森神社と見えている。維新まで、大森大明神と称した。この地方の神社の神事は、本神社で正税によって行なわれた。天文以降武将領主が、社殿を再建した。明治四年福田神社と改称し、同年四十二年、摂社十社を合祀した。大正四年社殿、境内を整備した。同十二年郷社に列格した。昭和三十六年社務所を新改築し、同五十年、本殿以下社殿を銅葺とした。

福谷神社（ふくたに）　旧村社

真庭郡勝山町大字福谷三六一

主祭神　大国主神　少彦名命
例　祭　十月二十日　**境内地**　三〇三坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿
摂末社　合祀社（八社）
氏子数　三五戸
宮　司　沖田孝重
責任役員　須田　武　須田敏雄　獅田馬太　浅田正夫
由緒沿革　創建白鳳二年。高応神社の総社で詳細不明である。

太玉神社（ふとだま）　旧村社

真庭郡落合町大字田原山上六一一の一

主祭神　太玉神

満賀利（まがり）神社　旧村社

真庭郡勝山町大字曲り七〇

主祭神　須佐之男命　須勢理毘賣命　大国主命　誉田別尊　外六柱
例　祭　十一月五日　**境内地**　二〇〇坪
主要建物　本殿　長床　拝殿　社務所　神輿庫
氏子数　三十五戸
宮　司　沖田孝重
責任役員　林一郎　林　岩男　稲田　毅
由緒沿革　本神社は第二十九代欽明天皇の御代に、宮柱を建て給うた。当時、悪魔狩場の鹿の角を帝に奉ったが、神秘によって悪魔を狩り給うたと伝える。大宮大明神と称え、九ヶ村の大氏神である。後に改めて曲り村と称し、明治三年、大宮大明神を改めて、満賀利神社と改称した。

例　祭　十月十六日　**境内地**　八八四坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　一六戸　**崇敬者数**　八〇人
宮　司　杉原　隆
責任役員　綱島安次郎　清水　勝　桐山増市　西平一正
由緒沿革　創建年月日、由緒は不詳。

御鴨（みかも）神社　旧県社

真庭郡新庄村五三八六



主祭神　味耜高彦根命　天御梶日女命　大己貴命　多紀理毘売命　外四柱
例　祭　十月九日
境内地　一、一一二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　斉館　神門　社務所　参籠殿
摂末社　御嶺神社　荒魂神社　稲荷神社
氏子数　一〇八戸　**崇敬者数**　一一〇人
宮　司　内田央信
責任役員　津田亀吉　西田　勲　西田央夫　酒井　智
宝　物　神鏡　神楽面　甲冑　金幣
特殊神事　神衣祭
由緒沿革　本神社は美作郷の総鎮守の神であって、往古は美作国真嶋郡美甘郷美甘川の川上の、宮座山の山中に鎮座していた。神代よりの大宮処である。称光天皇の応永二十六年の頃、宮座山の麓の神集の上の宮に遷し奉り、霊元天皇の延宝七年裏手の路の上の宮に遷し、さらに中御門天皇の宝永七年今の虫の身の宮に遷し奉った。三代実録に、清和天皇貞観十七年乙未授美作国従五位下御鴨神社従五位上と見えている。大正十一年七月三十一日県社となった。

美甘（みかも）神社　旧村社

真庭郡美甘村大字美甘三九〇二

主祭神　味耜高彦根神
例　祭　十月十五日　**境内地**　三五〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫(二)
摂末社　疫神社　斎神社　御崎神社　稲荷神社　荒魂神社
氏子数　三二〇戸　**崇敬者数**　一、〇〇〇人
宮　司　黒田　弘　**禰　宜**　黒田幸衛
責任役員　谷口　勲　広岡清美　田中朝晴
宝　物　鉄製古鈴一箇　刀剣三振　古棟札一　古備前瓶子一対　縁起書
由緒沿革　勧請年月は不詳だが、御祭神の別名を御鴨神と申上げたことから、郷名も孝徳天皇大化二年御鴨と定められた。元明天皇の和銅六年好字の詔により美甘となったことからも、古社であることが証明せられる。最初、美甘荘の中央宮座山の山頂に御鎮座していたが、火災にかかり三条天皇の長和五年本荘宮原の里宮峪に遷し、更に天正三年守護森家の時、現在の地に奉斎した。

三栄（みさかえ）神社　旧村社

真庭郡久世町三坂四一五

主祭神　瓊々杵命　軻遇突智命　少彦名命　猿田彦命　素盞嗚尊　大国主命
例　祭　十月二十五日　**境内地**　三五〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所
摂末社　稲荷神社
氏子数　六〇戸
宮　司　須田　誠
責任役員　森本忠一　長尾孝二　池田　愛
由緒沿革　創建年代は不詳である。明治六年二月、村社に列した。

三田神社　旧村社

真庭郡勝山町大字三田一二〇

主祭神　大国御魂神　奥津比古神　奥津比賣神
例　祭　十月十九日　**境内地**　三九五坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　社務所
氏子数　八〇戸
宮　司　池田武夫
責任役員　河本政挙　高井　一　山川登志夫
由緒沿革　創建年代、由緒は不詳。

三柱神社　旧村社

真庭郡落合町下市瀬八七七

主祭神　底津少童命　中津少童命　表津少童命
例　祭　十月二十一日
境内地　三、九六四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所
摂末社　荒神社
氏子数　九五戸　**崇敬者数**　五、四八七人
宮　司　築沢　慧
責任役員　屋敷計一　福岡秀男　妹尾善市



由緒沿革　平安時代の創建と伝えられ、中世から近世に、この地が旭川利用の起点になって交易が盛んであったので、川舟航行の守護神として、広く信仰をあつめた。

三輪講神社　旧無格社

真庭郡勝山町若代畝八五八ノ一

主祭神　大己貴命　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后外七神
例　祭　十一月二日
主要建物　本殿　釣殿　拝殿　神輿庫　社務所
摂末社　天神社　祖霊社
氏子数　一五〇戸
宮　司　矢木登志夫
責任役員　綱島照夫　柴田利夫　中尾和喜　木浦　尚
宝　物　高麗犬
由緒沿革　創建年月日は不詳である。本神社は大庭郡美和郷の総社として朔幣に預った大社で、美作古社百二十一社の一つである。天文二十二年二月、尼子晴久が本社を崇敬して家臣多賀対島守久幸を奉行として社殿を再建させた。文禄年中、大庭郷篠向城主江原兵庫助親次の将福島則盛が朝鮮の役の分捕品高麗犬一対を奉献した。天保八年九月、国主松原慶倫が神鏡及び金子を寄進した。明治二年六月、鶴田藩主松平武聡が、金子を寄進した。明治四十五年六月二十二日、郷社に列格した。

米来神社　旧郷社

真庭郡久世町大字目木五八九

主祭神　大国主命
例　祭　九月九日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　若魂大神
氏子数　九二戸
宮　司　沖田孝重
責任役員　岡田章衛　山下静二郎　篠崎岩蔵
由緒沿革　創建は天応二年二月九日である。井原郷四所大明神として、勝山城主三浦公が篤く尊崇した。

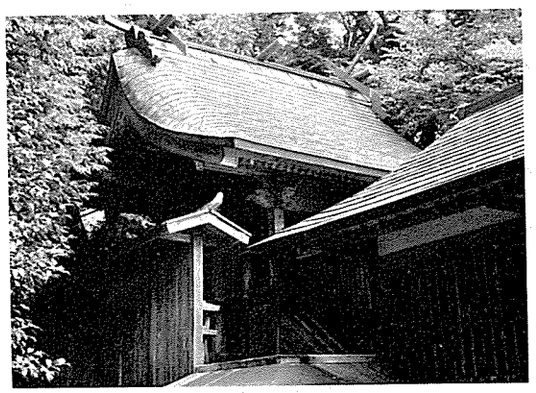
守吉神社　旧村社

真庭郡久世町大字樫東一三六一

主祭神　日本武尊外二十一柱
例　祭　十一月二日　**境内地**　五二二坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿　神輿庫　社務所
摂末社　稲荷神社　祖霊社
氏子数　一八〇戸　**崇敬者数**　一、〇二〇人
宮　司　笹井千秋
宝　物　刀剣四振　槍四本　弓　甲鎧二垂
特殊神事　蓮華（夏祭）冬祭（神田当株）
由緒沿革　創建年月等不詳であるが、宝永七年再建の時、両社を合併し、一社に造立したという。一社は守宗大明神、一社は王子権現と称していた。権現社は、明治元年八月日吉神社と改称し、同二年五月両社を合祀して社号を守吉神社と改めた。同六年村社に列せられ、大正十一年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

湯本神社

真庭郡湯原町大字湯本三四五の一



主祭神　大名持命　少彦名命　須佐之男命
例　祭　十月二十五日　**境内地**　一九〇坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　菅原神社　荒魂神社
氏子数　九〇戸　**崇敬者数**　七五〇人
宮　司　藤田道宗
責任役員　田中　京　今石三四二　瀬良利雄
由緒沿革　創建年代は不詳であるが、この地に湯が湧出してから、湯原温泉の守護神として霊験があったという。久見神社摂社菅原神社の境外神社で、湯本宮地に御鎮座せられていたのを、昭和二十年六月一日に現地に御社殿を再建した。菅原神社は明治四十四年に、久見神社に合祀した。

余河内神社

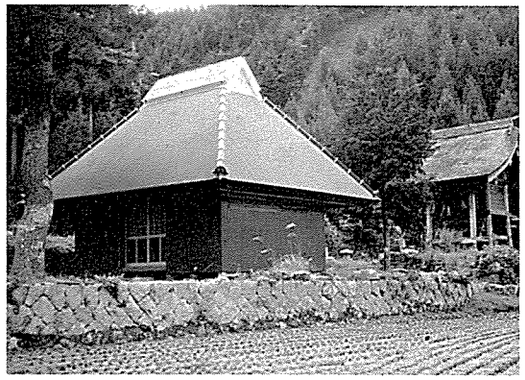
真庭郡落合町栗原字柏森一八六五

主祭神　御崎の神（猿田彦神）
例　祭　十一月二十八日
境内地　二四二坪
主要建物　本殿　拝殿　本殿を中心に左右四座
摂末社　明体荒神　三宝荒神　天王山疫天王社　猪之子山上天王社　山之神社　美保神社　夜鳴荒神　稲荷社
氏子数　七二戸　**崇敬者数**　約二五〇人
宮　司　甲斐蓬太郎
責任役員　中川正七　中島久夫　湯浅　実　酒井　忠
宝　物　猿田彦命　明体荒神　三宝荒神　木像　神鏡　鉄鉾
特殊神事　例祭日に神楽奉納
由緒沿革　美作三郷の栗原郷余河内柏森付近は、古墳

遺跡の散在している地で、神域として知られ、古くから明体荒神を祭祀していた。大正十三年部落内の天王山疫天王社、緒之子山上山天王社、山乃神社、美保神社を当地に合祀した。昭和三十八年四月御前神社、三宝荒神社、夜鳴荒神社、稲荷社も遷座し、昭和四十八年五月二十九日御崎の神（猿田彦神）を主神として、余河内神社を創建した。

横見神社　旧村社

真庭郡湯原町大字社七五八



主祭神　大山津見命
例　祭　十月九日
境内地　三九二・〇四坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　九二戸　**崇敬者数**
宮　司　藤田　昌
責任役員　樋口　溢　三牧国太郎　美甘見一
宝　物　中臣祓写本一巻（貞享二年三月森長俊）阿弥陀経四十八巻（明暦乙未年鎌倉志一山尼光誉法心）
由緒沿革　式内社で神名帳考証に、横見神社は今社村の西にあり、とあり、三代実録に貞観六年八月美作国従五位下横見神に従五位上を授ける、とある。大日本史に「横見神社神社記云在大庭郡富西谷村今在社村日十宮」とある。神社志料に横見神社は今社村形部神社の西南にあり、拾社と云う。六十六社神に横見神社は大庭郡社村とある。二月十一月の十三日に小忌祭があった。小忌・端午・星・神局・陰五祭等が往時には斎行していた。昭和五十四年に本殿を銅葺に改修した。

若畝神社　旧村社

真庭郡勝山町大字若代畝一三〇

主祭神　大山祇命
例　祭　十月十七日　**境内地**　一八六坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　八二戸　**崇敬者数**　六五人
宮　司　沖田孝重

責任役員　柴田　弘　柴田和一　竹脇新一
由緒沿革　創建年月、由緒は不詳である。明治四年村社に列格した。

節　分
（せつぶん又はせちぶん）

一、節分の意義

節分とは暦の上で「冬が全く終って、明日から春になるという季節の分れ目にあたる日」との意味で大抵二月の三・四日頃になります。この日は各家庭で豆まきやその他いろいろの厄払の儀式を多く行いますが、これはもともと「すべての病気や災難は種々の邪気、悪霊のしわざである」と云う考えから、その邪気や悪霊を追払って、幸福と健康に満ちた生活を営むため古くから行われた行事である。このような厄払いの行事は、ただ節分にだけでなく、年や季節の替り目には、世界の各地で広く行われているが、特に罪けがれを嫌う我が国の人たちの気持にピッタリと合うので、皇室や神社を始め、普通の家庭でも、ほんとうの意味での一年の終りに当るこの日を大切にして、お清めと厄除けの儀式が今も尚厳かに行われている。

二、古くから行われた行事と、そのわけ

①　皇室では千二百年前奈良時代の頃から十二月大晦日の夜「追儺」と云って桃の木の弓と葦の矢で、種々の災厄を招く鬼を追い払い、清々しい気持で新年を迎える儀式が行われました。

②　民間でも、約壱千百年近く前の藤原時代の頃から、同じく大晦日（節分の日になったのは約五百七十年前、室町時代の頃から）の夜、柊の小枝に鰯の頭をさして門口に之を立て、豆を煎って神前に供えた後「福は内鬼は外」と大声で呼びながらこの豆を家の内ぢゅうに播き、残りの豆を家族各人が年令の数だけ食べて厄払いする豆打ちの儀式を行うようになった。

③　柊は、寒中にも雪を消す勢のある強い木として喜ばれ、鰯は、もとの名を「なよし」と云うところから「名吉」即ち出世魚として喜ばれたので、この意味から、どちらも邪気を払い、立身出世を祈る縁起をこめて用いられました。豆を播くのは『まめ（健康）のつぶてで、鬼（病気、邪気、悪気）を払うと』という意味ですが、ここにも亦、すべての罪けがれを祓い清める日本人らしい気持がはっきりと現われている。

三、神社の行事

神社の中には、この日の午後又は夜、特別に賑やかな鬼追いや厄落しの式をする所が多くあるが、普通の神社でも、氏子や崇敬者の皆さん方の為健康祈願祭を行い、福豆や厄除けの弓矢をお授けする行事が厳かに行われている。

人間は神と共にあり

人間は神様の子である

私どもは目に見えぬ神様の世界から、神様のミタマをついだ何千代の先祖様を経て、父母にいたり、その尊いミタマをこの身に宿して、目に見える此の世に生れてきた。そして今日ただ今生きていることは、神様なり先祖様のおめぐみで生かされているのである。人間の尊とさは、神様の子であることをわきまえて、神様の大親として有難く至誠心で奉仕する心にある、これが信仰の根本である。

人間は神様と共に生きる

私は神様の子であることを日夜心にきざみこんで生活することが、本当の正しい人間生活である。生れてから死ぬるまで、私達は神様のお守りを受けている。

死後は、先祖様のミタマと共に、神様の世界でおめぐみを受けて永遠に生きる。

人間一生のお祭　（お祭は有難い心でま心を神様にささげること）

○安産を祈る祭　○安産のお礼と、報告の祭

○初宮詣で（はつみやもうで―生後三十日たって（男子は卅一日女子は卅二日目に）吉日としておまいりする）

○七五三祝い（三才の髪置、五才の袴着、七才の帯直等昔からの習慣により、十一月十五日にお参りして子供の成育を感謝し、さらに正しく成長することを祈る）

○誕生祝　○入学　○卒業　○就職を報告する祭

○結婚式　○銀婚式（結婚して二十五年）　○金婚式（結婚して五十年）

○厄年祓の祭（地方によってちがうが一般には三十三才、四十二才の時に行う。統計から見てこの年頃は心身の変調期に当るので特に神様にお祈りして此の年のさいなんを祓ってもらい、自分の日常生活もつつしむ）

○還暦の祭（六十一才）　○古稀の祭（七十才）

○喜寿の祭（七十七才）　○米寿の祭（八十八才）

長生を感謝し、さらに長命を祈る。

○死後の葬祭　○霊祭は申すまでもない。

○さらに病気にかかった時、病気が全快した時等、神様にお願い申し上げ、御礼申し上げるお祭は、数えきれぬ程ある。これが大親の神様と、神の子の私達との関係である。

神をうやまい、祖先をとうとぶことは日本民族の美しい徳

心のふるさとである氏神様を信仰し、みたまのふるさとである先祖様を大切にし「私は神の子である」ことの有難さ、尊とさをよくわきまえて、おたがいに仲よくし、大昔から長い間つちかわれた、美しくも奥ゆかしい伝統と歴史とを受けついで、愛国心を振りおこし、祖国日本を一そうかがやかしい国として、次代の子孫に引きつぐのが今生きている私達のつとめではないでしょうか。

勝田支部　（五六社）

阿津田神社	英田郡美作町北坂字大宮一八六……	四四一
青野神社	〃　英田町青野二〇四……	四四一
朝吉神社	勝田郡勝北町上村宮前一六三……	四四一
天穂日神社	〃　勝北町西中天満一〇三三……	四四二
伊勢神社	〃　奈義町荒内西（宮の元）五八四…	四四二
大崎神社	〃　勝間田町東吉田八七九・八八〇	四四二
王子神社	久米郡柵原町王子三二一……	四四三
岡神社	勝田郡勝央町岡四六一……	四四三
梶並神社	〃　勝田町梶並一二三……	四四三
風神社	〃　奈義町豊沢三〇八……	四四四
勝田神社	〃　勝間田町勝間田二七八……	四四四
上賀茂神社	〃　勝北町原三〇一……	四四四
鷺神社	英田郡美作町位田七四二……	四四五
杉神社	〃　美作町安蕪六八六……	四四五
杉神社	勝田郡奈義町西原一一六四……	四四六
杉神社	〃　勝央町小矢田二九五……	四四六
杉神社	〃　奈義町広岡六四七……	四四六
諏訪神社	〃　勝央町河原字宮ノ谷一二〇一…	四四七
滝神社	〃　奈義町滝本字岩屋山一九七三	四四七
武神社	〃　勝田町余野五六……	四四八
武内神社	〃　勝北町上野田八六……	四四八
月村神社	〃　勝央町曾井神室山四六六……	四四八
天満神社	勝田郡勝北町西下字宮畝五五七……	四四八
豊岡神社	〃　勝北町坂上六八……	四四九
豊国神社	英田郡美作町北山字大宮山六二一……	四四九
諸神社	勝田郡奈義町成松九五……	四四九
西賀茂神社	〃　勝北町杉ノ宮字上ノ山四〇六…	四五〇
西宮神社	〃　勝央町田井字西宝二二八……	四五〇
畑屋神社	〃　勝間田町畑屋七一九……	四五〇
八幡神社	〃　勝央町植月東四七二……	四五〇
八幡神社	英田郡美作町明見宮山二〇六……	四五一
八幡神社	勝田郡勝田町大町宮尾一四九三……	四五一
八幡神社	〃　勝北町山形二二三五……	四五一
八幡神社	〃　勝田町真加部西ノ宮一三九七…	四五二
八幡神社	〃　奈義町柿九四四……	四五二
八幡神社	〃　勝央町平八三六……	四五三
八幡神社	〃　勝央町黒土二七五……	四五三
八幡神社	英田郡美作町入田三七……	四五三
八幡神社	勝田郡奈義町西原九七七……	四五四
八幡神社	〃　勝北町下野田四一五……	四五四
八幡神社	〃　勝央町久田三三九……	四五四
八幡神社	〃　勝田町矢田一〇三四……	四五四
八幡神社	〃　勝央町黒坂二ノ一……	四五五
東賀茂神社	〃　勝北町安井字宇根七七八……	四五五
広戸神社	〃　勝北町大吉一〇二七……	四五五
日吉神社	〃　勝央町植月地宮代二九六二……	四五五

二松神社　勝田郡勝北町新野東二五八……四五六
馬桑荒神社　〃　奈義町馬桑三四六……四五六
十寸鏡神社　津山市楢字宮山四五六―四五七……四五六
町川神社　勝田郡奈義町上町川御所野一五八七…四五七
松神神社　〃　奈義町中島東字武内六〇七……四五七
美野神社　勝田郡勝央町美野二〇一六……四五七
三穂神社　〃　奈義町関本一〇五九……四五八
宮内神社　〃　奈義町宮内不老山六三九……四五八
湯神社　英田郡美作町湯郷六六四……四五八
吉野神社　勝田郡奈義町中島西吉野山一〇一五…四五九

磐境（いわさか）

祭場の一つである。神霊を招き降し祭りを行うさい、適当な石を選んで築きめぐらした所をいう。磐境の実体は分明ではないが、日本書紀に「高見産霊尊因りて勅して曰く、吾は則ち天津神籬及天津磐境を起樹てて、當に吾孫の為に斎ひ奉らむ。」とあるのが磐境の名の初見である。これは古代に、岩石を周囲にめぐらし、神の降臨の場所とする磐境祭祀があったことを証明している。古墳時代以後の祭祀遺跡からも、石塊を環状に敷きつめたものも発見されて一種の磐境とされている。

尾張大國霊神社、長野県の生島神社、石川県気多神社には、大石を環状にならべた遺跡があり、磐境祭祀の名残といわれている。福岡県の高良大社の神籠石も磐境であったと推察されている。

縁起

因縁生起の略で、本来仏教用語である。これが神社や仏寺の創建・由来及び霊験伝説を云うようになった。更に文章或は絵画をも交えて表現したのを絵縁起・縁起絵巻と云う。京都北野天満宮の「北野天神縁起」は代表的なものである。また吉凶の前兆を縁起といい、縁起祝い、縁起直しの風習が起り、東京の西市の熊手、芝神明宮の千木箱などは、神社で縁起を祝う、縁起物として配布するようになった。縁起絵巻は平安時代の中期以降、鎌倉時代に隆盛を極めた。

阿津田（あつた）神社　旧村社

英田郡美作町北坂字大宮一八六

大正十二年三月六日、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

主祭神　素盞嗚尊　大国主命　誉田別尊　五柱神
例祭　十月十八日
境内地　一、四五四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所
摂末社　祖霊社　若宮社　稲荷社　荒神社
氏子数　一八〇戸　**崇敬者数**　一、三〇〇人
宮司　大澤清見　**禰宜**　中村　登
責任役員　大田仙太郎　細尾傳市　山本正根
下山宗一
宝物　古鏡一面
特殊神事　オヒタキ祭（夏土用の入）
由緒沿革　本神社は文徳天皇の仁寿元年九月十五日の御鎮座である。和気清麿が父仲世の遺志をつぎ、宇佐八幡宮の御分霊御勧請の事を、時の國造伴善男に依頼したところ、伴氏はこれを許し美作介藤原貞道に命じて祭らせた。大永七年三月三星城主後藤基兼が熱田神宮の御分霊を勧請合祀して、阿津田大明神と称した。天文十三年五月十七日火災に逢い、御社殿が焼失した。同年九月後藤攝津守の下知により再建した。両社を合せて阿津田正一位長社と称した。慶長十五年森家寺社奉行下役川越玄蔵から阿津田八幡宮と改称するよう達せられた。明治六年二月村社に列し、阿津田神社と改称した。明治四十五年三月、境外末社七社を合祀した。

青野（あおの）神社　旧村社

英田郡英田町青野二〇四



主祭神　天穂日命
例祭　十月十七日　**境内地**　二六二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　祇園社
氏子数　四三戸
責任役員　田中健治　室井　勉　青山茂男　粟井佐一
由緒沿革　元正年中の勧請であるが、天正年中に鴪山城主星賀藤内が社殿を改築し、元禄十五年九月七日万代又四郎孫兵衛九衛門が再建し、以後数度再建して今日に至っている。

朝吉（あさよし）神社　旧村社

勝田郡勝北町上村宮ノ前一六三

主祭神　下照姫命
例祭　十一月一日　**境内地**　一六二坪
主要建物　本殿　拝殿　幣殿　神楽殿
摂末社　荒神社
氏子数　一二〇戸　**崇敬者数**　一三五人
宮司　青山博也
責任役員　赤堀盛行　平井　清　流郷二三夫
由緒沿革　本神社は文暦元年六月、国土安寧を祈るため勧請したという。若王子権現と号していたが、明治三年朝吉神社と改称した。明治六年北條県時代、西賀茂神社と改めたが、明治九年、また朝吉神社と旧名に復した。明治十二年村社に列せられた。本神社はもと北町中村鳥居野にあったと伝えられる。

天穂日神社（あめのほひ）　旧村社

勝田郡勝北町西中天満一〇三三



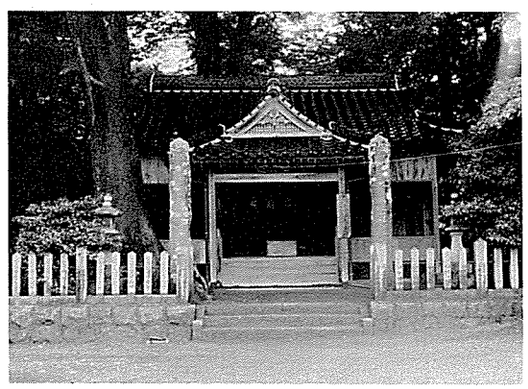
主祭神　天穂日命
例祭　十一月三日　**境内地**　二五九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社　山神社　稲荷神社　塞坐神社
氏子数　一二〇戸
宮司　豊田元留
責任役員　田中　廣　内田藤助　宮野善平　森元辰雄
由緒沿革　本神社は圓融天皇の貞元二年字天満山に社殿を創建し、天満宮と称した。元禄二年正月公儀の崇敬があって本殿を再建した。（美作国主松平長矩公であろう）明治六年村社に列し、西奈加神社と改称した。明治十年更に社号を天穂日神社と改称した。

伊勢神社（いせ）　旧無格社

勝田郡奈義町荒内西宮の元五八四

主祭神　天照大神外壱柱
例祭　九月十七日　**境内地**　二四三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　国司神社　奈義神社外三社
崇敬者数　五〇〇人
責任役員　黒田　東　花谷静男　頼家正太郎
由緒沿革　本神社は勧請、創建は不詳であるが、村人は古来より伊勢皇大神宮の御分霊社伊勢神社と尊崇していた。境内に樹齢五〇〇年の欅の巨木があった。承応二年郡奉行がこの地に宮を建て、溜池を作り、村人のため水難除去、安産祈願の宮とした。玉垣内側の石に彫むその旨の御歌がある。安政六年再建した。昭和十九年改築、昭和五十二年屋根その他の大修理を施行した。

大崎神社（おおさき）　旧村社



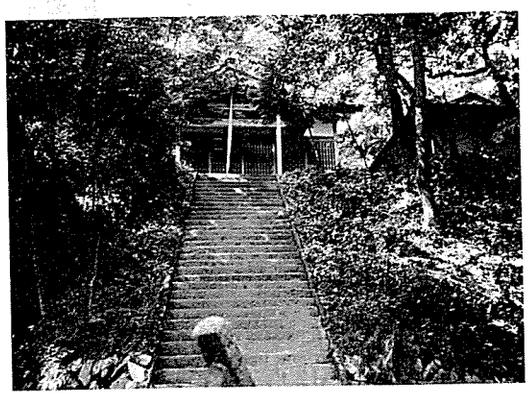
勝田郡勝間田町東吉田八七九・八八〇

主祭神　素盞嗚尊
例祭　十月十九日　**境内地**　七一五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　天満神社
氏子数　二三〇人
宮司　水島　文
由緒沿革　創建年代は不詳。継体天皇の御代九年に、

国土鎮護のため、川西山の尾崎に勧請し、古来瀧筋村の惣鎮守として崇敬の篤い神社である。天文十年三月、元禄十五年九月再建。天明七年、寛文年間、寛政八年、文化八年、嘉永三年、元治元年九月、明治十一年六月にそれぞれ大修築をし、現在に至っている。大崎宮と称したが明治三年、大崎神社と改称し、村社に列した。昭和十七年四月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

王子（おうじ）神社　旧村社

久米郡棚原町王子三一一



主祭神　伊弉諾尊
例祭　四月十九日　十月十九日
境内地　三、七八二坪
主要建物　本殿　拝殿　社務所
摂末社　八幡宮　天神社
氏子数　一〇〇戸
責任役員　井上　泰　青井　勉　下山叙士　中村　守
宝物　鏡剣
特殊神事　夏祭　七月二十三日～二十五日（三日間）
由緒沿革　青井家十一代青井軍太忠雄（大庄屋）が、時の領主土岐丹後守（三万五千石）の命を受けて惣社王子権現を奉祀した。

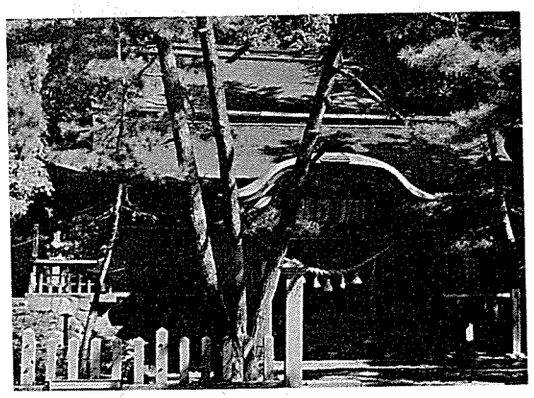
岡神社　旧村社

勝田郡勝央町岡四六一

主祭神　泉津事解命　伊弉冉尊　速玉男命
例祭　十月十六日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
氏子数　八〇戸
責任役員　小坂真一　田村武男　赤畠芳夫
由緒沿革　元和三年、洪水のため流失したので、現在地に奉遷した。寛文八年美作国主森内記長継が本殿を再建寄進している。現在の社殿である。国守武将等から寄進せられた鳥居、灯籠等数多くあったが、磨滅倒壊して判明しがたい。古来、崇敬の篤い神社である。

梶並神社　旧郷社

勝田郡勝田町梶並一二三



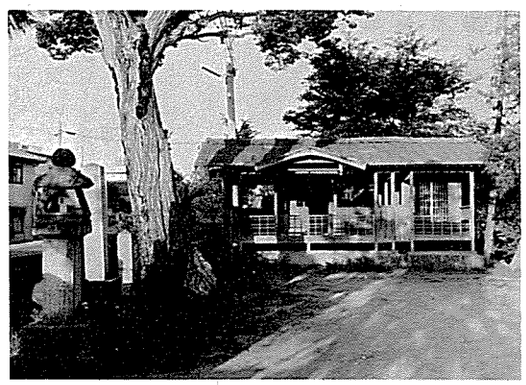
主祭神　高龗神　譽田別尊　玉依姫命　経津主命　建御雷之男命
例祭　十月一日　**境内地**　四、六〇三坪
主要建物　本殿　拝殿　幣殿　社務所　参籠殿

摂末社　磯神社　高良神社　稲荷神社
氏子数　六五〇戸
崇敬者数　約一〇、〇〇〇人
宮　司　横山ひろ子　**禰　宜**　横山茂樹
宝　物　駅路鈴　左文字短刀
特殊神事　当人祭
由緒沿革　創建年代は不詳であるが、推古天皇の十五年丁卯春二月に、周祀山川幽通乾坤云々群臣竭心宜祠神祇と詔があった時に、この地が水源の霊地であるため、高龗神を祭り、郷土の鎮護としたという。この地方は上古吉備國天野里と称して、和銅分国の後、元正天皇の御代に香美郷となり、平安時代の仁明天皇の御代に梶並庄と改称した。

風神社　旧無格社

勝田郡奈義町豊沢三〇八

主祭神　天御柱命　国御柱命
例　祭　九月一日　**境内地**　一五〇坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　八〇戸　**崇敬者数**　一〇人
宮　司　山上福秋
責任役員　森藤金光
由緒沿革　もと八坂神社は素盞嗚命を奉祀し、往時は牛頭天王又は祇園様と唱えられ、京都八坂神社の御分霊を奉斎した。龍田神社も大和の龍田神社の御分霊を勧請したものであった。現在は二社を合祀して風神社と呼んでいる。明治二十五年三月時の庄屋鈴木左惣次発起人となり、北部十数ヶ字の寄進によって勧請したものである。



勝田神社　旧村社

勝田郡勝間田町勝間田二七八

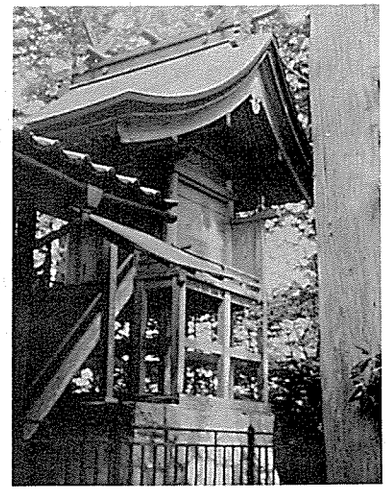
主祭神　天照大神他五柱の神
例　祭　十月十九日
境内地　五四二・五四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　八幡神社　天満神社　稲荷神社　荒神社
恵比須神社　弁天神社　注連神社
氏子数　二、〇〇〇人
宮　司　水島　文
由緒沿革　創建年代は不詳。応仁元年の応仁の乱の際、戸倉城主塩見貞満が帰国の節、伊勢大神宮に参詣し、この地に勧請し、皇子宮と称した。慶長十九年西皇子大権現と称した。正徳元年領主の甲府中納言綱豊が社地一反六畝十六歩を寄進。寛永五年、代官が石燈篭を寄進・安永元年領主が御輿を奉納し、慶長十六年以降廃止となった御幸祭礼を再興した。明治四年勝田神社と改称し、明治六年村社に列した。神饌幣帛供進神社に指定せられた。

上賀茂神社　旧村社

勝田郡勝北町原三〇一

主祭神　火産霊神
例　祭　十一月三日　**境内地**　一五六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　天満宮
氏子数　五二戸
宮　司　青山博也

責任役員　安藤成三　竹内　寿



由緒沿革　和銅元年九月の御鎮座。大永五年に御社殿を再建したと旧記社伝に見えている。正保七年から氏子の発祀料献進が盛大となったという。以来数次に亘り御社殿の修築が行われ、現社殿となった。明治十一年、上賀茂神社と改称し、村社に列格した。古くは、加茂明神社と尊称していた。

鷺神社　旧郷社

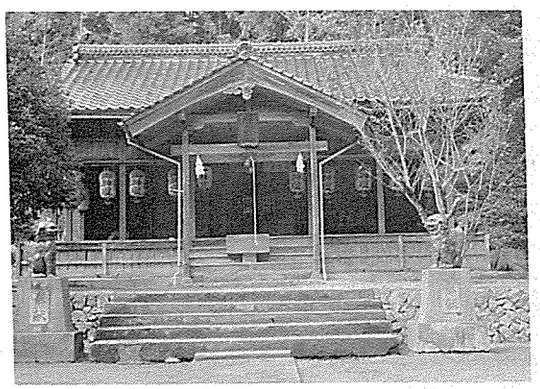
英田郡美作町位田七四二

主祭神　大己貴神　少彦名神
例　祭　十月十日　**境内地**　五三七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　荒振神社　天神社　英霊社
氏子数　二二〇戸
禰　宜　前田好光
責任役員　西村幸一　浜田勇一　西村　勇
由緒沿革　往古、足を病んだ白鷺が、昼は沢田にたたずみ、夜は本神社の杜を宿にした。いくばくもなく足が癒えてどこかに去った。里人はこれによって温泉の湧き出るのを発見した。これ即ち御祭神少彦名命の霊験と考えられ、本神社の尊崇がたかまった。これが聖武帝の上聞に達し、天平十二年三月、封戸十二戸位田六丁歩を賜わった。大永年間には後藤基次が、三星城鎮護神とし、尊崇したが落城の時、本神社も焼失し、神宝・旧記を失った。

杉神社　旧村社

英田郡美作町宏岳六八六

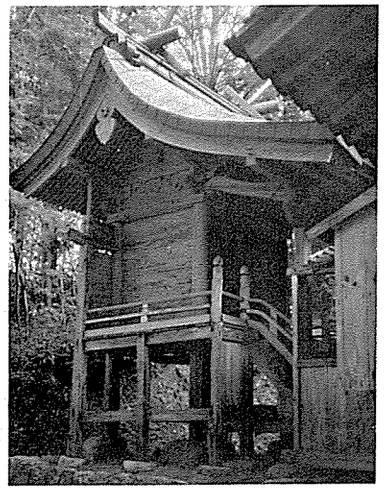
主祭神　大己貴神　少彦名神（相殿）天鈿女命　天手力男命
例　祭　十月十日　**境内地**　三九〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　釣殿
摂末社　稲荷神社　八重山神社
氏子数　一五〇戸　**崇敬者数**　四五〇人
宮　司　井上　静
責任役員　清水　泉　福島忠助　下山　豊　角南　篤
宝　物　神鏡　石鳥居　陰陽石
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　荒振神社　天神社　英霊社
氏子数　二二〇戸
禰　宜　前田好光
責任役員　西村幸一　浜田勇一　西村　勇
由緒沿革　往古、足を病んだ白鷺が、昼は沢田にたたずみ、夜は本神社の杜を宿にした。いくばくもなく足が癒えてどこかに去った。里人はこれによって温泉の湧き出るのを発見した。これ即ち御祭神少彦名命の霊験と考えられ、本神社の尊崇がたかまった。これが聖武帝の上聞に達し、天平十二年三月、封戸十二戸位田六丁歩を賜わった。大永年間には後藤基次が、三星城鎮護神とし、尊崇したが落城の時、本神社も焼失し、神宝・旧記を失った。



由緒沿革　仁明天皇の嘉祥二年の頃、肥後国官幣社阿蘇神社から御分霊の陰陽石を阿蘇津彦命・阿蘇津姫命として勧請したものという。往古は九門の庄総社で、祭神を杉大明神・姫大明神・明頭大明神と唱えて来た。明治四年村社に列せられ、杉神社と改称した。大正二年十月三日勅令により、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

杉神社　旧村社

勝田郡奈義町西原一一六四



主祭神　大己貴命
例祭　十月十五日
境内地　七四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　国司神社　荒神社　山神社　塞神社　水分神社　須賀神社
氏子数　七〇戸
宮司　豊田元留
責任役員　野々上往信　野々上岩夫　野々上茂美夫　織田龍一　富坂石男
宝物　木像　棟札
由緒沿革　往古荒関、中古荒関天王宮、荒関大明神、維新後杉神社と称した。勧請年月は不詳。慶長十五年美作国主森右近忠政は国内の神社を調査し、朝令社、武信社、民仰社と三別し、本神社は上地とされ、他は除地とせられた。本神社は継体天皇元年神祇伯を以て、国土鎮護の素盞嗚命を祭られた。大治四年、加賀国加賀左馬之介がこの地に留まり、保延二年三月荒関牛頭天王の南に加賀尾城を構えて住んだ。昭和初年、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

杉神社　旧村社

勝田郡勝央町小矢田二九五

主祭神　大己貴命
例祭　十月十九日
境内地　九二一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　天神社
氏子数　八〇戸
責任役員　山本運次　池崎　香　権田　睦
由緒沿革　創建年代は不詳であるが、社伝によると、康安元年七月、山名時氏が大軍を以て小矢田城に攻めよせたが、城主は撃退した。これは全く神威の賜と考え、社号を杉大明神と称し、社殿を改築し、小矢田城の鎮護の神として尊崇したと伝えている。

杉神社　旧村社

勝田郡奈義町広岡六四七



主祭神　大穴牟遅命
例祭　十月十五日
境内地　六七三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　荒神社　若宮神社　八幡神社

氏子数　一五〇戸
宮司　山上福秋
責任役員　森藤嘉夫
宝物　神鏡一面　鈴一個　甲冑一領
由緒沿革　後嵯峨院の寛元元年、出雲大社の御分霊を勧請し、広岡郷総社椙大明神と称し、広岡豊沢の氏神として尊崇した。延元、応仁の戦禍で社殿が衰頽したが、豊田庄の郷士森安某が文明十四年本殿を再建した。領主森対島守が病気平癒を祈願し、霊験があった。元禄五年社殿の修理・田地四畝六歩の寄進があった。享保五年本殿の屋根の葺替、明治初年杉神社と改称した。昭和初年鷲田小平沼が拝殿を新築寄進した。その後環境を整備し、現在に至っている。

諏訪神社　旧郷社

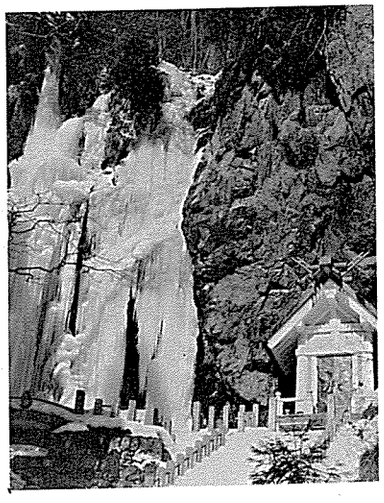
勝田郡勝央町河原宇宮ノ谷一二〇一

主祭神　建御名方命　大国主命　素盞嗚尊　大己貴命　速秋津姫命　倭建命　譽田別尊　事代主命
例祭　十月二十日
境内地　二、八八五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　天神社　国司神社　荒神社
氏子数　三〇七戸
宮司　大澤清見
由緒沿革　本神社は長久三年九月、清和天皇の皇子貞純親王九代の孫、実賀次郎盛扶の三男諏訪清扶が、信州諏訪大明神の御分霊を、小吉野庄鏡山に奉祀した。安元二年大宮司諏訪豊前守安森が、現在地の宮の谷に遷座し、諏訪大明神と改称した。小吉野庄惣社諏訪大明神と尊称した。明治六年二月諏訪神社と改称し、郷社に列格した。



滝神社　旧郷社

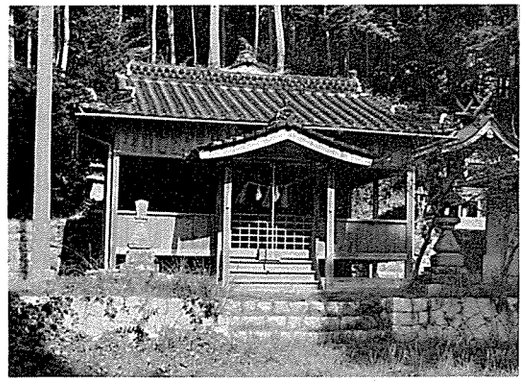
勝田郡奈義町滝本字岩屋山一九七三



主祭神　伊邪那美命　滝大領権現（熊野権現）
例祭　十月十五日
境内地　五〇町歩
主要建物　本殿　拝殿　社務所　神輿庫
摂末社　十一社
氏子数　二〇〇戸
宮司　山上福秋
責任役員　久永博士
由緒沿革　創建年月は不詳であるが、古くから北野村東西、近藤村の霊験あらたかな産土神として崇敬が篤い。白鳳十四年当時の北野村うえん野に垂跡降臨せられた熊野三所権現をも合祀し、慶雲元年岩屋山に遷座せられた。近世は武将領主を始め良民の崇敬をあつめ、例祭日には、さながら蟻の熊野詣を彷彿させる程の賑わいぶりであったという。

武神社　旧村社

勝田郡勝田町余野五六



主祭神　武甕槌神
例　祭　十月二十日　**境内地**　一七七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　国司神社　塞神社　大山祇神社　水神社
氏子数　八〇戸　**崇敬者数**　四〇〇人
宮　司　横山ひろ子
責任役員　佐々木寛　鷹取寿資　小坂　茂
由緒沿革　本神社は孝徳天皇の大化元年の創建であると古老の口碑に伝えている。元文五年、社殿改築遷座式を行ったという。所蔵の棟札に国主森伯耆守長義の名がある。現在まで境外に鉾免燈明田・油免等の字名が残っている。本神社は香々美郷の二の宮と伝えている。明治六年二月に村社に列格した。

武内神社　旧村社

勝田郡勝北町上野田八六

主祭神　武内宿禰（相殿）・譽田別尊
例　祭　十一月三日　**境内地**　五四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　天満神社　嚴島神社　荒神社　稲荷神社
氏子数　五〇戸
宮　司　青山博也
由緒沿革　旧社家に伝えられるところでは、文明元年宇佐宮の御分霊を勧請したという。明治維新の頃は上野田神社と称していたが、後に改めて武内神社と呼称するに至った。

月村神社　旧村社

勝田郡勝央町曾井神室山四六六

主祭神　月夜見命
例　祭　十月二十日　**境内地**　三七五坪
主要建物　本殿　拝殿　幣殿　神輿庫
氏子数　六〇戸　**崇敬者数**　一五〇人
責任役員　浜田　太　浜田　孟　光石一成
由緒沿革　本神社は創建年代が不詳である。伯耆国会見郡福井村に鎮座の月村神社の御祭神月夜見命神速須佐之男尊をこの神社に移し祭ったというのが、古老の口碑である。明治六年二月、村社に列格した。

天満神社　旧村社

勝田郡勝北町西下宇宮畝五五七

主祭神　菅原道實
例　祭　十一月三日　**境内地**　二九六坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　高畑神社　愛宕神社
氏子数　八九戸　**崇敬者数**　二〇〇人

宮　司　易　淳臣　**禰　宜**　丸尾悟美
責任役員　内田治士　丸尾泰雄　平井満弘　水島一男　湯浅健三
由緒沿革　創建年代、由緒は不詳である。

豊岡神社　旧無格社

勝田郡勝北町坂上六八

主祭神　豊受大神
例　祭　十一月三日　**境内地**　一八〇坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　一社
氏子数　五一戸
宮　司　易　淳臣　**禰　宜**　丸尾悟美
責任役員　土井　茂　神田　洋　内藤浩臣
由緒沿革　創建年代、由緒は不詳である。

豊国神社（山王様）　旧郷社

英田郡美作町北山字大宮山六二一

主祭神　高游加美神　闇游加美神　水分神　大山咋神
例　祭　十月十日
境内地　一、七二三坪
主要建物　本殿　拝殿　幣殿　神楽殿　神饌殿　神輿庫
摂末社　渡里神社　稲荷神社　八幡神社　中尾神社　天神社　國司神社　八幡神社　八幡神社　五座神社　間山神社　福原神社　稲荷神社　荒神社　八幡神社
氏子数　四五〇戸
崇敬者数　二、〇〇〇人
宮　司　西山允晞　**禰　宜**　西山文子
責任役員　水島明男　野亀睦二　安東俊二　田中義男　西山覚平　小林　進　野口元之　則本彰産
宝　物　遷幸触状　遷前諸建築覚書　寄進状（貞平）天紀二年願書等



由緒沿革　本神社のもと鎮斎の地は、現在の豊国原の字宮の元にあって、豊国御中の総社で豊国濱の宮と称した。花園天皇の正和三年甲寅五月霖雨で社殿が流失したので、同年九月夜北の山に奉遷した。以来総社山王宮と奉称したが、慶応四年豊國総社と改称した。明治六年郷社に列格し、豊国神社と尊称した。

諾神社　旧県社

勝田郡奈義町成松九五



主祭神　伊弉諾神
例　祭　一月一・二・三日　六月十四日　十月十五日

境内地　一、一四〇坪
主要建物　本殿　中殿　拝殿　幣殿　神饌所　神庫　社務所
摂末社　四社
氏子数　二〇〇戸　**崇敬者数**　一、五〇〇人
宮　司　井上清嗣
責任役員　七人
由緒沿革　清和天皇貞観五年五月従五位上を授與せられている。那岐山頂に鎮座していたが、風雨が強いので、山麓不老の森に遷座した。またその地が陸軍演習場になったため、大正八年、現在地に遷座した。もと郷社であったが、昭和二年十月県社に列格した。

西賀茂神社（にしかも）　旧村社

勝田郡勝北町杉ノ宮字上ノ山四〇六

主祭神　味耜高彦根命　大国主命
例　祭　十一月三日
境内地　一、二七六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　参籠殿
摂末社　龍神社　塞神社　三島社　八幡社
氏子数　一〇五戸　**崇敬者数**　二四五戸
宮　司　青山博也
責任役員　坂手楢一　高山円平　松枝　守
宝　物　木像御神体
由緒沿革　往古は鴨大明神。孝徳天皇の御代大化元年に、物部芳子の創建で、賀茂郷の総社である。老杉が神域を覆い、杉大明神と称えた。明治三年鴨神社と復称した。明治六年西賀茂神社と改称。赤松氏、浮田氏、森氏等の祈願社。万治二年森家により社殿を修築。正徳二年御神像を奉安。美作国一一二社の一社。下村、中村、東安井村、大西、原、坂上、西上の郷の一宮である。明治六年村社に列格した。

西宮（にしのみや）神社　旧村社

勝田郡勝央町田井字西宝二二八

主祭神　少彦名命　譽田別尊　武雷神　天之御中主神　素盞嗚尊　経津主神　伊弉冉神
例　祭　十月二十日　**境内地**　八一六坪
主要建物　本殿　拝殿
氏子数　五四戸　**崇敬者数**　二〇〇人
責任役員　寺坂鉄男　河本　求
宝　物　御神鏡
由緒沿革　本神社は貞観二年八月、摂津国西宮神社相殿に奉祀している、少彦名命の御分霊を現在地に勧請し、西宮神社と称した。明治六年二月九日村社に列格。

畑屋（はたや）神社　旧村社

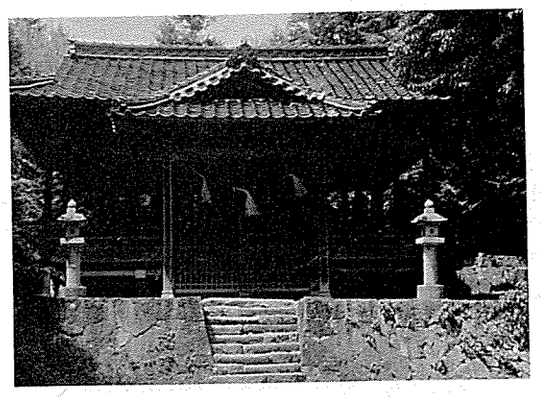
勝田郡勝間田町畑屋七一九

主祭神　譽田別尊
例　祭　旧三月十五日　**境内地**　九一坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　三方荒神社外四社
崇敬者数　一五〇戸
責任役員　竹久建治　有国　毅　笠尾芳弘　竹久孝夫　東　士郎
由緒沿革　本神社は勧請年月が不詳であるが、石清水八幡宮の御分霊を勧請したものと伝えられる。

八幡（はちまん）神社　旧無格社

勝田郡勝央町植月東四七二

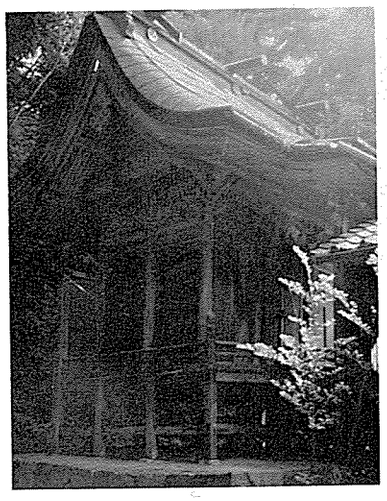
主祭神　大己貴尊　少彦名命
例　祭　十月十九日　**境内地**　三七七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　天満神社　荒神社　車戸神社　総宮
氏子数　四八五人
宮　司　水島　文
由緒沿革　創建年代は不詳。旧記諸文書を火災により焼失したが、古老の口碑によると、応永年間に郷士が武運長久、土地繁栄祈願のため一社を建立し、殿中御内陣に御幡をかけ、御前合せ目に上より下に弓の矢で縫いとめ、安置したという。毎年十月亥の日に、酒造祭を執行い神前に供える儀式が厳修せられている。明治六年村社に列格し、明治四十年四月、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。



八幡（はちまん）神社　旧村社

英田郡美作町明見宮山二〇六

主祭神　譽田別尊
主要建物　本殿
氏子数　一〇〇戸　**崇敬者数**　五〇〇人
責任役員　柳澤好一　外十名
由緒沿革　本神社は三星山に後藤氏の居城当時、その守護として奉斎し祈願所としたもので、天正七年後藤左衛門勝基の時、備前和気天神山の城将浮田直家の手によって落城し、兵火にかかったという。その後、社殿を再建し、更にこの土地の氏神として尊崇した。文化二年社殿を改築し、現在に至っている。



八幡（はちまん）神社　旧郷社

勝田郡勝北町山形二二三五

主祭神　譽田別尊　息長足比賣命　素盞嗚尊　猿田彦命　五男三女命　武内宿禰　大国主命　久那斗神　大山積神
例　祭　十月十日
境内地　一、三六一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神庫　籠殿
摂末社　天神社　稲荷神社
氏子数　一二〇戸
宮　司　豊田元留
責任役員　木村作一　近藤政之　岡本庄市　小林俊平　里見　要　水島昭次
由緒沿革　創建年月日、由緒等は不詳。口碑に大化元年二月の創建、冷泉天皇の安和年間山城国男山八幡宮の御分霊を勧請し、総頭山八幡宮と称し奉った。後に火災に罹り亀山天皇の弘長元年三月再建。元文二年九月土岐山城守の崇敬により、屋根葺替。往昔郷中の大神等の集り給うた大宮所、各社神輿御座所五ヶを存している。万延元年神祇道管領長徒卜部朝臣大宮八幡宮宗源宣旨額面が下賜せられた。美作国主森長政、田地を寄進。明治六年村社に大正三年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

主祭神　品陀和気命　天之御中主命　大雀命
例　祭　十一月三日
境内地　一、〇一八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌殿　社務所　神庫
摂末社　下照神社　国司神社　秋葉神社　車戸神社

須佐之男神社　山神社　道社神社　稲荷神社
滝神社　木山神社　愛宕神社
氏子数　一五〇戸　**崇敬者数**　一〇〇人
宮　司　豊田元留
責任役員　長船　通　内田　勝　内田孝一　竹花　勲
上高虎夫　中井忠仁　上高　博



ため、米六斗六升を寄進している。明治六年郷社に列し、八幡神社と改称した。

八幡神社　旧村社

勝田郡勝田町真加部西ノ宮一三九七

由緒沿革　創建年月は不詳であるが、口碑に孝徳天皇の大化元年九月の創建で、祭神大物主神を祀って、社号を神奈備宮と称し奉ったという。醍醐天皇の延長六年の頃は、郷内の二宮であったという。承平元年二月山城国男山八幡宮を勧請し、弓矢八幡宮と改称した。弘長二年二月原田日向守忠門が本殿を再建し、田三反を奉納した。天正元年二月安東信濃守が神鏡一面を奉献した。天和元年三月、西宮に遷座した。明治六年二月村社に大正二年十月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

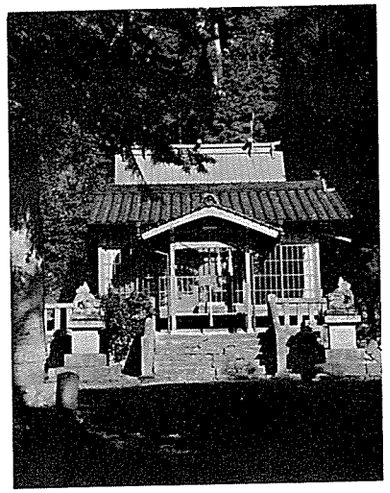


主祭神　譽田別尊　素盞嗚尊
例　祭　十月二十日　**境内地**　九九八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌殿　神庫
摂末社　天神社　山神社　森神社　稲荷神社
氏子数　二〇〇戸
宮　司　豊田元留
責任役員　小林亀太郎　下山寿一　宮元鶴夫

八幡神社　旧村社

勝田郡奈義町柿九四四

由緒沿革　承元元年三月山城国から御分霊を遷し奉った。往古は現在の社地から百米ばかり奥の牛岩に小社があって、勧請当時から氏神として崇敬していたが、承元元年社殿を創建し現在地に遷座し、この地を牛岩の牛と男山を伴せ牛男山と号した。毎年正月二日には氏子が牛馬をひいて参拝する。明治六年村社に、昭和四年四月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。



主祭神　譽田別尊　足仲彦命　息長帯比賣命
例　祭　十月十九日　**境内地**　二五二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　天神社　荒神社　厳島神社　愛宕神社
氏子数　八戸　**崇敬者数**　二三五人
責任役員　植月　甫　植月泰之　岸本敬介

八幡神社　旧村社

勝田郡勝央町平八三六

由緒沿革　承平年中の創建で、天正年間に後藤元政が本殿を改築したという。文政十三年九月社殿を改築し、今日に至っている。

主祭神　譽田別尊　菅原道真公
例　祭　十月十九日　**境内地**　五一〇坪
主要建物　本殿　拝殿　幣殿
摂末社　稲荷神社
氏子数　六八戸
責任役員　高山英夫　龍門富男　福島宮夫
由緒沿革　本神社は元文五年二月、領主丹羽和泉守の修繕、御初穂等の寄進のあった神社である。御初穂米一石二斗、神主に一人扶持給わる神祠であった。年移って大正十三年三月十七日、天満宮祭神菅原道真公を合祀した。よって毎年三月十七日を合祀記念祭として特別例祭を行い、併せて就学児童の祈願を行う事としている。

八幡神社　旧村社

英田郡美作町入田三七

主祭神　譽田別尊
例　祭　十月二十五日
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　稲荷社
氏子数　七〇戸　**崇敬者数**　三五〇人
宮　司　田村千秋
責任役員　長尾二郎　笠原　操　木村竹治　青山千歳
村上　武　村上正治
由緒沿革　本神社は大永年間後藤氏が三星山に築城し、鎮護の神として石清水八幡宮の御分霊を城内に勧請した。天正十三年三星城落城により山麓の現在地に移転し、三星八幡宮と称した。村民が氏神として奉斎している。明治二十五年、三百年祭を奉修し今日に至っている。

八幡神社　旧村社

勝田郡奈義町西原九七七

主祭神　譽田別尊
例　祭　十月十五日　**境内地**　三一三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　参篭所
氏子数　五五戸　**崇敬者数**　六〇〇人
宮　司　横山ひろ子
責任役員　野々上一男　国富真寿美
由緒沿革　創建年代は詳かでないが、社伝に山城国石清水八幡宮の御分霊であるという。天喜元年再建の文書、應永九年の金幣の文字によって推察できる。南北朝時代に、この地方の豪族が、奈義の山城菩提寺城によって、匪賊を集めて朝命を奉じないため、正平十六年山名時氏が討伐にあたったが、頑抗したので時氏は廣岡郷西原村に陣を設けて討伐しようとして、産土神は、山城国石清水八幡宮の御分霊である事を聞いて、勝利を祈願し地名を横男山と改め、賊徒を平定した。この故事によって村民はますます崇敬し、現在に至っている。明治五年、仝村御鎮座の杉神社を合祀して、村社に列し西原神社と称した。明治十年十月、社号を八幡神社と改称した。

八幡神社　旧村社

勝田郡勝北町下野田四一五

主祭神　譽田別尊　素盞嗚尊　足仲彦尊　他二柱尊
例　祭　十月二十日
境内地　一四〇・〇五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　国司社　荒神社　住吉社　道祖神社
氏子数　二一八人
宮　司　青山博也
由緒沿革　創建年月は不詳。平賀元義視聴録所載によると、美作国一一二社の一社で、廣野郷の惣社という。口碑に、弘仁十二年の創建であると伝えている。

八幡神社　旧村社

勝田郡勝田町矢田一〇三四

主祭神　譽田別尊
例　祭　十月二十日
境内地　一、四四七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神楽殿　神庫　社務所
摂末社　荒神社　国司神社　八坂神社
氏子数　三〇六人
宮　司　豊田元留
由緒沿革　創建年代は不詳。承平三年宇佐八幡宮の御分霊を奉斎。享和元年、龍野藩主中務大輔が、義光の作刀一振を奉納。慶応元年九月、生野代官が金子五十疋と鎖とを寄進。明治六年村社に列格。明治二十八年十一月社殿を改築。大正十五年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

摂末社　荒神社　木山神社　住吉神社
氏子数　一、二一〇人
由緒沿革　創建年代は不詳。明治六年村社に列し、八幡神社と称した。大正二年二月六日、杉宮の杉神社御祭神大己貴命・光高寺の日吉神社御祭神大山咋命・上香山字中尾の八幡神社御祭神譽田別尊を合祀した。大正十五年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

八幡神社　旧郷社

勝田郡勝央町黒坂二ノ一

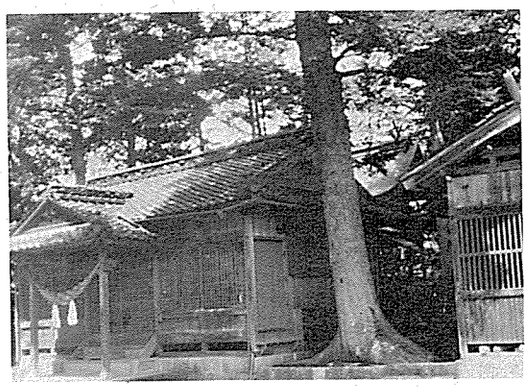
主祭神　譽田別尊　足仲彦尊　息長帯姫尊
例　祭　十月十七日　**境内地**　九一七坪
主要建物　本殿　拝殿　幣殿　神饌所　社務所
摂末社　奥御前神社　稲荷神社　惣社神社　注連神社　赤池宮　美保神社　憩宮　下山神社
氏子数　一〇二〇人
宮　司　水島　文　**禰　宜**　水島幸彦
由緒沿革　創建年代は不詳。明治六年二月、郷社に列した。

東賀茂神社　旧村社

勝田郡勝北町安井字宇根七七八

主祭神　大山咋命
例　祭　十一月三日　**境内地**　三九九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神楽殿
摂末社　六社
氏子数　一一二戸

崇敬者数　天保時代より神道家多数
宮　司　青山博也
責任役員　安井久則　安井正圭　森内政治　高橋道輔　濃野嘉之



由緒沿革　日吉山王宮と称して、建長四年五月鎮座。賀茂兵部という郡司の祭るところであった。江州日吉神社の御分霊を勧請し、もとは勝加茂西中字山王山に鎮座あったが、明治二年に現在地に遷座した。往昔の祭祀田として神田が多数あったが、浮田中納言のために全部没収せられた。現在も日吉田と称する地名が旧社地の東部に残っている。明治五年、日吉神社と改称し、明治六年村社に列し、東賀茂神社と称した。

廣戸神社　旧村社

勝田郡勝北町大吉一〇二七

主祭神　品陀和気命　大山祇命　武内宿禰　須勢理比賣命　息長帯比賣命　志那津比古神　志那津比賣神
例　祭　十一月三日
境内地　一、二二五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神楽殿　神輿庫
摂末社　兜神社　外五社
氏子数　三〇〇戸
宮　司　大澤清見　**禰　宜**　大澤美月
特殊神事　古来風神宮祭　九月初旬
由緒沿革　本神社の勧請は光仁天皇の宝亀元年にかかり、山城國男山廟からお迎えして奉斎したと伝える。文治五年三月、字宮の奈留に御社殿を遷座し、更に天文三年現在地に奉遷したと伝えている。

日吉神社　旧郷社

勝田郡勝央町植月地宮代二九六二

主祭神　大山咋命　大己貴命　豊受大神　味耜高彦根

命　少彦名命　猿田彦神

例　祭　十月二十七日　**境内地**　九六三坪

主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神楽殿

摂末社　稲荷神社（合祀社）巌島神社

宮　司　大澤清見

由緒沿革　創建年代は不詳。社伝並びに古老の口碑によれば、天平九年十一月従五位下美作守阿部帯麿の創建を受継いだ美作守大伴兄麿が、翌十年四月、近江国阪本日吉神社を奉祀し、十一年三月七日御遷座の勅許を得て、荒田七反歩を寄せ植月郷惣鎮守としたのが起源であるという。

二松神社　旧村社

勝田郡勝北町新野東二五八

主祭神　木花咲耶姫命

例　祭　十一月三日　**境内地**　七四三坪

主要建物　本殿　幣殿　拝殿

摂末社　十二社

氏子数　一二〇戸

宮　司　大澤清見

由緒沿革　本神社は後鳥羽天皇の文治二年五月、守護職梶原景時が、駿河国大宮浅間神社の御分霊を勧請し、木花咲耶姫命を祭り、社号を二松花（華）栗大明神と称した。降って、国主森長継公の崇敬により、寛文十一年九月に社殿の再建があったという。明治初年、社号を二松神社と改めた。

馬桑荒神社　旧無格社

勝田郡奈義町馬桑三四六

主祭神　素盞嗚尊　宇迦之魂命　大山祇命

例　祭　九月二十八日

境内地　五二五・五坪

主要建物　本殿　参集殿　拝殿

摂末社　山神社　稲荷神社

氏子数　三八戸

宮　司　山上福秋

責任役員　延原芳太郎　延原熊男

由緒沿革　創建年月は不詳である。馬桑地区の氏神である。

十寸鏡神社　旧村社

津山市楢字宮山四五六―四五七

主祭神　天照大神

例　祭　十月二十一日　**境内地**　八五七坪

主要建物　本殿　幣殿　拝殿

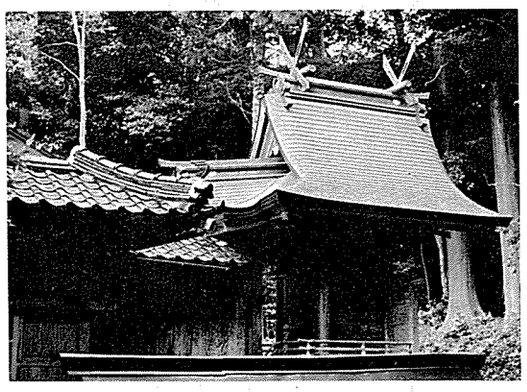
氏子数　六〇戸　**崇敬者数**　二〇〇人

宮　司　青山博也

責任役員　東　正夫　岸本辰士　多胡育次郎



由緒沿革　天照大神を奉祀する。村上天皇の應和三年の鎮座で、昭和三十七年一千年祭を執行の碑を建立した。現社殿は天文十二年毛利氏の信仰社として再建せられたものである。更に永禄二年修理、建立した。明治の始め、村社に列格した。



主祭神　大己貴命

例　祭　十一月三日　**境内地**　七二五坪

主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所

摂末社　少童神社　生日八幡神社　稲荷神社　国司神社　荒神社　龍神社　素盞嗚神社　住吉神社　山神社　道祖神社

氏子数　七〇戸

宮　司　高山　聖

責任役員　植月　賛　岸本治一

町川神社　旧村社

勝田郡奈義町上町川御所野一五八七

由緒沿革　嘉吉四年江州日吉神社の御分霊を勧請し、上町川村一村の氏神として創建した。社地は後醍醐天皇の皇子の御所が造営せられたゆかりの地であるので、往古は御所宮の尊号を賜わっていた。明治六年町川神社と奉称せられた時にも、御所宮日吉山王宮の名で尊崇せられていた。寛文元年以来の棟札が残っている。現在の本殿は明治六年の再建である。

松神神社　旧村社

勝田郡奈義町中島東字武内六〇七

主祭神　伊邪那岐命　武内宿禰

例　祭　旧八月十五日　**境内地**　三六六坪

主要建物　本殿　拝殿　幣殿　神饌所　社務所

摂末社　若宮神社　荒神社　塞神社

氏子数　七〇戸

宮　司　高山　聖

責任役員　小童谷賢志

由緒沿革　明治四十一年五月、中島東熊野神社御祭神伊邪那岐神を合祀した。本神社は武運守護・疫病鎮護の守神として崇敬者が多い。天保十一年正月、龍野城主脇坂安薫が神鏡を奉納し、同十三年十月、生野代官川島半三郎が、年貢米の運送安全を祈願して、金子五十疋を、明治二年八月、鶴田藩士伊藤祐命が弓三張を、明治四年、角田五蔵が甲冑一具金疋を寄進している。明治初年、村社に列した。

美野神社　旧村社

勝田郡勝央町美野二〇一六

主祭神　菅原神　他三柱の神

例　祭　十月二十日

境内地　一、五一三坪

主要建物　本殿　幣殿　拝殿

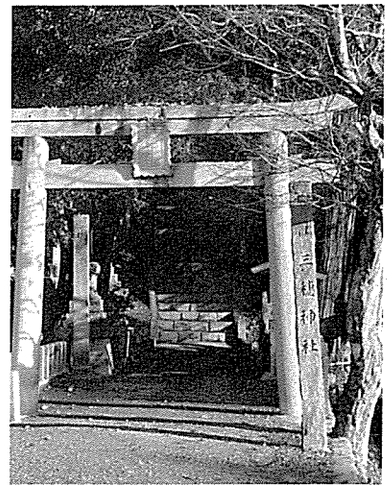
摂末社　稲荷神社　巌島神社

氏子数　六七八人

由緒沿革　創建年代は不詳。保安三年十一月、太宰府天満宮の御分霊を現地に奉斎し、天神と奉称した。応永元年、山城国五城天神の御分霊を相殿に勧請した。慶長八年社殿を再建した。明治六年九月、村社に列した。明治四十四年九月、大国主命・伊弉諾尊・素盞嗚尊を合祀した。神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

三穂神社　旧村社

勝田郡奈義町関本一〇五九



主祭神　事代主命　菅原満佐
例祭　九月十五日　**境内地**　九、〇〇〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫
摂末社　三社
氏子数　一一〇戸　**崇敬者数**　五、〇〇〇人
宮司　井上清嗣
責任役員　為季　勝　桑田　保
宝物　御神体　鏡　刀一振
特殊神事　霜月祭

由緒沿革　往時は三穂大明神と称し、豊田庄の氏神として、また五穀豊穣の守護神として篤く崇敬せられ、藤原時代末期に作北辺境の地にあって超人的偉人と伝えられた、三穂太郎こと菅原満佐大人を合祀した。以来霊験顕著な神祠として、作州一円、遠く山陰の伯耆・因幡地方からの参詣者が多い。最近は進学の祈願をする学徒の参拝がある。

宮内神社　旧村社

勝田郡奈義町宮内不老山六三九

主祭神　伊邪那美命
例祭　十月十五日　**境内地**　三七二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　杉御前神社
氏子数　四〇戸
宮司　豊田元留
責任役員　粟井　敬　高取吉之助　内藤　太
由緒沿革　奈義山頂に諸冊の二尊が御鎮座ましまして居る。三代実録に、清和天皇貞観五年夏五月に、美作国従五位下奈義神授従五位上と記載してある。本国十三社の一社である。古老の口碑に奈義山の頂では道路が嶮岨である上に、高山のことで中春頃までは、寒風が強烈で、降雪も消えず、参拝が不便なので、和銅三年に御分霊を奉遷し、諸尊を成松に、冊尊を不老の森に御鎮座した。不思議にも神山成松には女木、宮内には男木が生じない。明治五年、宮内神社と改称した。



湯神社　旧村社

英田郡美作町湯郷六六四

主祭神　譽田別尊　大己貴命　少彦名命　大山祇命
例祭　十月十八日　**境内地**　三三九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷社

氏子数　四〇〇戸　**崇敬者数**　三〇〇人
宮司　田村千秋
責任役員　尾高喜平治　田村伍市　丸山留義
小林謹一
由緒沿革　本神社の勧請創建の由緒は不詳であるが、もと御湯神と称していたが、元正天皇の霊亀年間に国郡郷荘の制が定まって、郷土・温泉と共に御社名も塩湯社と称し、郷土の氏神・温泉の守護神として奉斎した。霊元天皇元和三年、大洪水のため、地勢が変じたため、社地を移転した。上古は御湯神・塩湯社といい中世は湯大明神と称し、明治六年湯神社と称し、明治四十一年六月村社八幡神社と共に、日吉神社地に遷座合祀し、村社湯神社と改称した。

吉野神社　旧村社

勝田郡奈義町中島西吉野山一〇一五

主祭神　大穴牟遅神　沼河比賣神
例祭　十月十五日
境内地　一町四反九畝十五歩
主要建物　本殿　釣殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　金刀比羅神　大田神社　霧山神社　新田神社　朝日神社　沓石神社　荒神社
氏子数　二二五戸
宮司　高山　聖
責任役員　井戸敏一　鷹取尚之　絹田　功　福田　林　幸村育雄　花房孝男

宝物　古代神鏡二面　杯二個　神矢三本　鉄鐙一
筋　弓三張　甲冑二領　鎗　薙刀



由緒沿革　勝田郡吉野郷小吉野庄の一宮である。元明天皇の和銅六癸丑、美作国発祥歳九月、吉野山に出雲国神を勧請し斎祀し、河西宮と尊号した。延喜式制国内、百十二社のうちの一社である。杉本大明神と奉唱し、国司、武将の崇敬は篤かった。貞和三年三月、守護職赤松則村朝臣が社殿を再建。
延宝八年八月、国主森伯耆守が社殿の再造営を行なう。棟札は今も現存している。明治六年二月、村社に別格された。同八年九月、社殿を再造営し、同十年三月、現在の吉野神社と改称した。大正三年、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

言　霊（ことだま）

祭祀の神秘的、霊異的な要素の一つとして言葉がある。言葉は意志の媒体としての機能をもつだけでなく、一層深い神秘的なもので、神々の世界につながっていると言うのが、古代日本民族の言葉に対する感覚であった。このように神秘性をもつ言葉を言霊といっていた。万葉集に「倭の国は皇神の、いつくしき国、言霊のさきはふ国」、「敷島の倭の国は言霊の佐（たすく）る国ぞ」とあるように、古代人は、神々との「神威」と「言霊」の力とによって守護されると信じていた。

言霊のはたらきには、その言葉の相によって変って来るもので、よい言葉、美しい言葉、正しい言葉には、よい、美しい、正しいものを生み出す働らきがあり、悪い、醜い、よこしまな言葉には、悪事や災害を引き出す働らきがあると信じていた。

この信仰によって、正しく、うるわしく、よい言葉を、神の言葉に、人の言葉に用いて、言葉を媒介として祭祀が行われ、神人合一、神人の感応が実現すると信じていた。

神人の間の言葉は、二つの系列になる。一つは神の言葉であって、神勅、託宣、神教等であり、他の一つは人の言葉であって、祝詞、寿詞、願文、起請文、歌謡、物語等である。

神職の身分

神職は任命を受けると左記の身分を与えられる。

特級・一級・二級上・二級・三級・四級等があり、それぞれ服制・叙位規準の要綱がある。

夷信仰

農漁村や商家などで生業を守護し、福徳をもたらす神として、全国に流布している信仰である。漁村では大漁をもたらす神と崇敬している。この信仰が、しだいに伝播して、農業神となり、さらに商業神になった。この神は狩衣に指貫・風折烏帽子をつけ、右手に釣り竿、左わきに鯛をかかえている。近世以降に七福神の一つとして、また大黒様と併祀して、一般から尊崇されている。事代主命・蛭子命が、この神であるとする両説がある。事代主命を奉斎する、大阪の今宮戎神社は、正月十日に十日戎と云って盛大な祭典があり、商家が商賣繁昌を祈念するために、多数参詣するので有名である。

夷を祀った神社を中心に組織された講社のうちで、島根県美保神社、兵庫県広田神社、大阪の今宮戎神社等は有名である。

英田支部（四三社）

旭　神社　英田郡作東町鮹三三〇―五……四六二
天曳神社　〃　作東町宮原一〇四四……四六二
天石門別神社　〃　英田町滝宮八九……四六二
伊垣神社　〃　作東町小の谷六六〇……四六三
稲荷神社　〃　美作町平福四九九……四六三
磐渕神社　〃　英田町中川二一二……四六三
上山神社　〃　英田町上山一四八三……四六三
江見神社　〃　作東町江見一〇四一……四六三
大栄神社　〃　英田町福本一七……四六四
大滝神社　〃　作東町蓮花寺二六四……四六四
大彌満神社　〃　作東町大聖寺一五四……四六四
王子神社　〃　作東町豆田三〇一……四六四
奥　神社　〃　英田町奥三五七……四六五
尾谷神社　〃　英田町屋谷二二六八……四六五
海田神社　〃　美作町海田七二九……四六五
春日神社　〃　作東町粟井二七三……四六五
國貞神社　〃　作東町國貞一三五四……四六六
荒　神社　〃　英田町中川三〇二……四六六
荒　神社　〃　英田町上山三四八一……四六六
下倉敷神社　〃　美作町下倉敷八五九……四六七
角南神社　〃　作東町角南二二三……四六七
田殿神社　英田郡美作町田殿七〇六……四六七
高龍神社　〃　英田町尾谷一一八……四六八
瀧　神社　〃　英田町尾谷一八七三……四六八
竹田神社　〃　作東町竹田一八二六……四六八
天　神社　〃　作東町万善七三一……四六八
土居神社　〃　作東町土居五八一……四六九
楢澤神社　〃　美作町楢原下三八三……四六九
白山神社　〃　美作町山外野九一二……四六九
八幡神社　〃　作東町田渕六〇七……四七〇
八幡神社　〃　英田町上山三三七三……四七〇
威釼神社
八幡神社　〃　作東町柿ヶ原一四四四……四七〇
八幡神社　〃　作東町白水二六一一……四七〇
八幡神社　〃　美作町楢原上一二八八……四七一
八幡神社　〃　美作町田殿一五六一……四七一
林野神社　〃　美作町朽木五二……四七一
福本神社　〃　英田町福本九五一……四七一
三保神社　〃　英田町三保原四一〇……四七一
宮谷神社　〃　美作町海田三六七六……四七二
宮山神社　〃　作東町鈴家七二五……四七二
八坂神社　〃　美作町田殿二四七七……四七二
山口神社　〃　美作町山口三〇二……四七二
横尾神社　〃　英田町横尾一三九八……四七三

旭神社（あさひ）　旧村社

英田郡作東町鮎三三〇―五

主祭神　譽田別尊　大山咋命　大國主命　天照大神　高淤加美命
例祭　十月十八日　**境内地**　六九〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　参籠所
摂末社　稲荷神社　上山神社
氏子数　二〇〇戸　**崇敬者数**　八〇〇人
宮司
責任役員　長家　基　石川　環　大前嘉明
由緒沿革　明治四十五年二月旧江見村、現在作東町岩辺鎮座の岩辺神社を始め、大内谷の各神社、豊野の八幡神社・瀬戸の木船神社、鮫の奈満津神社、芦河内の河内神社、吉田の八幡神社を、仝村鮫、溝口鎮座の奈満津神社境外摂社村社八幡神社に合祀と同時に、遷座並に社号改称の許可を得、仝年四月二十二日に合祀し、現在地に遷座し、旭神社と尊称した。

天曳神社（あまびき）　旧村社

英田郡作東町宮原一〇四四

主祭神　猿田彦命

伊垣神社（いかき）　旧村社

英田郡作東町小の谷六六〇

主祭神　稲田姫命
例祭　十月十五日　**境内地**　五三二坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　天満神社　金刀比羅神社　愛宕神社　荒神社
氏子数　三二戸
責任役員　鈴木伝治郎　江見康男　後藤廣之
由緒沿革　天明三年八月九日に字城山に創建。東作誌に「籬大明神」と、棟札に「籬神社」とあり、伊垣明神とも称した。明治十二年六月一日に城山から遷座し、従前の氏神の長谷岡神社を合祀し伊垣神社と称した。

稲荷（いなり）神社　旧村社

英田郡美作町平福四九九

主祭神　宇迦之御魂神　相殿・猿田彦神　大宮能賣神
例祭　十月十日　**境内地**　一、六九〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所

摂末社　荒神社
氏子数　一一〇戸
責任役員　加藤隆夫　竹内　昇　安藤昭夫
崇敬者数　三三〇人
由緒沿革　貞和五年三月再建の棟札が現存する。美作古社百十二社中の一社であって、古から県多郡別府の総鎮守稲荷大明神と称した。慶応四年別府神社と改称した。平野村下福原村二ヶ村の氏神である。明治六年三月村社に列格、社号を稲荷神社と改める。昭和三年十一月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

磐渕（いわぶち）神社　旧無格社

英田郡英田町中川二一二

主祭神　磐渕之神
例祭　十月十日　**境内地**　四一三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　一四戸
責任役員　小林人志　橋本良市　各務　進
由緒沿革　創建年代不詳。御祭神はこの地方を開拓せられた祖神と伝えられる。

上山（うえやま）神社　旧村社

英田郡英田町上山一四八三

主祭神　大足彦命　譽田別尊　息長帯比賣命　伊邪那美神　菅原神
例祭　十月二十日　**境内地**　一、二四一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神楽殿　神輿庫
摂末社　稲荷神社　三笠神社　荒神社　宇豆女神社
氏子数　七五戸
宮司　赤木美作守　**禰宜**　赤木　庚
責任役員　小林　斉　藤原貞一　丸山五男
宝物　石棒石斧　重藤の弓
特殊神事　獅子神楽
由緒沿革　大足彦命が素盞嗚尊と共に地方の大蛇族を平げ、ここで結婚し土着して、大足池を築いて開拓を進められた。その功績を称えて奉斎したと伝える。社地から石斧、石棒が発堀せられて現存している。津山城主森家や領主土岐家の崇敬が篤く、献上田、正月田、宮田、十月田等の地名が残っている。戦国時代八幡宮を配祀した。大正二年には新熊野神社、天満宮を合祀した。同八年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。安産厄除の神として崇敬者が多い。

江見（えみ）神社　旧村社

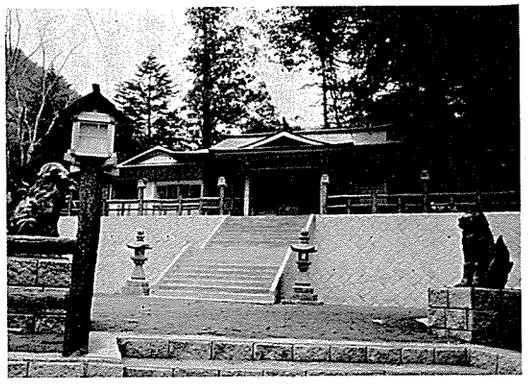
英田郡作東町江見一〇四一

主祭神　宇迦之御魂神　譽田別尊外十五柱
例祭　十月八日、　**境内地**　一、六九〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫
摂末社　稲荷神社　荒神社
氏子数　七〇〇戸　**崇敬者数**　二、八〇〇人
例祭　十月十五日　**境内地**　一、三三七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　神庫　社務所
摂末社　熊野神社　八幡神社　高山神社　稲荷神社　荒神社
氏子数　一七〇戸
宮司　沖田年雄
責任役員　木南好美　小林英一　江見　孝　小林千年
由緒沿革　本神社の創建年代不詳。大聖寺縁起に「開山のときに牛飼原にあった社祠を移し、黄金の不動明王を安置し奥院と称した。」とあり、聖武天皇の天平十年の創建と伝える。美作百十二社記に「雨夫伎神社」、東作誌に「天曳大明神」とある。

天石門別（あまのいわとわけ）神社　旧県社

英田郡英田町滝宮八九

主祭神　天手力男神
例祭　十月二十日　**境内地**　二〇、六六八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　手水舎　社務所　神輿庫　絵馬殿
摂末社　八幡神社　総神社　稲荷神社　早滝神社　宇受賣神社　大歳神社
氏子数　一四四戸　**崇敬者数**　一〇、五二二人
宮司　中川克巳
責任役員　戸田英男　鳥越　澄　長尾　巌　永幡　隆
宝物　社鎗(古)一、古木像四、甲冑一組、寄進状(平国綱)一、再建棟札(古)一、刀五(首相桂太郎他寄進)
その他
特殊神事　田賣祭、毎年八月三十日夜



由緒沿革　第十代崇神天皇の御宇、四道将軍大吉備津彦命が、吉備地方平定報賽のため、御自ら鎮斎し給うた処と伝えている。延喜式内小社、清和天皇の貞観五年、神階従五位下から従五位上に昇叙せられている。嘉元三年地頭平重継が御社殿を再建した。明応八年地頭平国綱が神田武具を寄進。元禄十年津山城主森長俊が御社殿を再建。享保十五年から領主の代参が例年のようにあった。明治六年郷社となり、明治十三年に県社に昇格した。

宮　司　沖田年雄
責任役員　片山壽一　加藤政一　田島武夫　山下　博　黒石　巖
由緒沿革　本神社はもと八幡神社と称し、江見村大字川崎の氏神であって、明治四十四年に本村内大字川北村社八幡神社、大字原村社原神社、字今在家村社豊稲須神社、大字藤生村社八幡神社、大字上福原村社福原神社、大字田原村社田原神社、大字日指無格社荒神社、字黒藪無格社荒神社、大字南海無格社荒神社、字江見無格社恵美須神社を合祀し、江見神社と改称し、江見南九ヶ村の氏神となった。大正二年十二月二十日神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

大栄神社（おおさかえ）　旧無格社

英田郡英田町福本一七

主祭神　天之御中主神
例　祭　十月十九日　**境内地**　一、〇一五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所
摂末社　稲荷神社外六社
氏子数　四五戸
宮　司　中川克巳
責任役員　伊東峯一　遠藤幸哉　角南善之
由緒沿革　本神社はもと大栄山の中腹に鎮座されていたが、応永六年に現地に遷座と伝えられる。明治初年頃までは福本神社の摂社として奉斎していたのを、大正三年十月独立して邑中の氏神社として尊崇した。その他の記録は散佚して何等徴すべきものがない。

大瀧神社（おおたき）　旧村社

英田郡作東町蓮花寺二六四

主祭神　瀬織津姫命
例　祭　十月二十日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　幄舎　本殿上仮屋
摂末社　早滝神社
氏子数　三〇戸
宮　司　沖田年雄
崇敬者数　五〇人
責任役員　春名重正　八木紋太　大谷岩男　田渕忠雄
宝　物　御神像一　御神鏡三　木桙一　棟礼三
由緒沿革　創建は天正年間と伝えられ、「大滝大明神天正十一年九月十六日」と記した木桙が残っている。また赤松盛衰記には享保十年とし、古老は邑の中央にあったのを現在地に遷座したといっている。これ等によって推測すると、鎌倉期の初―中期の創建かと思われる。御社殿の再建棟札は元禄十六年を最古とし、文化三年を最近とする。滝もない山上に当神社を奉斎した昔の人の水を希ふことの切なる心情は憶いやるに余りあるものである。

大彌満神社（おおやま）　旧村社

英田郡作東町大聖寺一五四

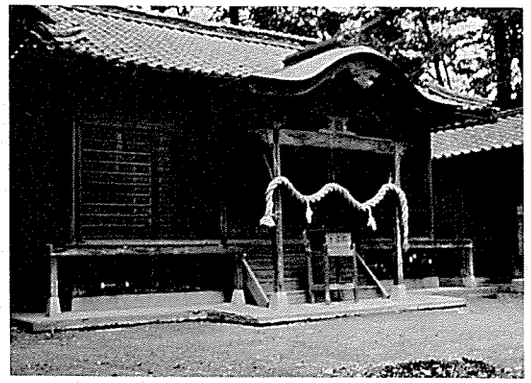
主祭神　大山祇命
例　祭　十月十五日　**境内地**　一、四三三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社　天神社　高山神社
氏子数　二三戸
責任役員　大内　豊　大内計二　大内稲夫
由緒沿革　創建年代は不詳であるが、大聖寺縁起に「聖武天皇天平十年行基菩薩の開基で播美の界にあり、鎮守五社大明神鎮座の山である」とある。東作誌に五社大明神とあり、明治九年神社明細帳書上に大彌満神社と称した。御本殿は天保三年九月に再建。拝殿は明治三十二年八月に再建、木鳥居は昭和二十三年五月に再建した。

王子神社（おうじ）　旧村社

英田郡作東町豆田三〇一

主祭神　伊弉諾尊　合祀・伊弉冉尊　稲田姫命
例　祭　十月十五日　**境内地**　四五五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　籠殿
摂末社　高田神社　荒神社　天神社
氏子数　五七戸
責任役員　井口幸雄　江国富夫　川端太朗　下山　弘
由緒沿革　創建年代由緒は不詳である。東作誌に「王子権現」とあり吉野庄五社の一で、通称一宮というとある。明治六年社号を豆田神社と称したが、社号の復旧を請願して王子神社と改称した。

主祭神　天穂日命
例　祭　十月十九日　**境内地**　七八三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　社務所
摂末社　稲荷神社　豊受神社　荒神社　國司神社　皇大神宮



奥神社（おく）　旧村社

英田郡英田町奥三五七

氏子数　一二二戸
宮　司　瀧本正大
責任役員　中島重男　畑中峯夫　赤堀美好　赤堀圭作　奥田　清
由緒沿革　本神社は和銅二年和気氏が国造であった時、磐梨県塩田郷の鎮守として奉斎し、天満宮と称して、天神の古宮の地に鎮座された。慶長年間森忠政が美作国主に封ぜられた時、森村を奥村と改称し、当神社に対して金殺を寄進した。寛文十二年八月西方の高地伊勢山の頂に遷座し、社殿を造営した。城主土岐山城守から銀五百匁の寄進があった。古くからこの地は前方後円の大古墳がある。明治六年社号を奥神社と改称した。

尾谷神社（おたに）　旧村社

英田郡英田町尾谷二二六八

主祭神　高淤加美神
例　祭　十月十七日　**境内地**　一、二二三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　三柱神
宮　司　赤木美作守
責任役員　唐内美弥太　奥西米一　臼井保太郎
由緒沿革　創建年代不詳。美作国古社百十二社の一社である。旧巨勢郷内の二宮と伝えられる。津山城主森家の崇敬していた神社である。

海田神社（かいた）　旧村社

英田郡美作町海田七二九

主祭神　伊邪那美命
例　祭　十月十七日　**境内地**　一、〇八二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社　國司神社
氏子数　一三〇戸
宮　司　大澤清見
責任役員　横山弥平　福田秀太郎
由緒沿革　勧請年代不詳。土地開闢の祖神として斎き祀っていて、巨勢郷一の宮と称した。往古は郷司から幣帛料燈油料等を奉納していた。天正年間火災に罹り宝物等盡く烏有に帰し、唯燼余の棟札一枚（元亀元年九月二十八日付）が残存している。昔は王子権現と尊称していたのを、明治六年に海田神社と改称した。

春日神社（かすが）　旧郷社

英田郡作東町粟井二七三

主祭神　天児屋根命　武甕槌命　経津主命　天鈿女神　外十九柱



例　祭　十月十七日　**境内地**　六八九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　釣殿　神饌所　社務所　神輿庫　神庫　神楽殿
摂末社　荒神社　稲荷神社　國司神社
氏子数　四〇〇戸　**崇敬者数**　二五〇人
宮　司　粟井直雄　**禰　宜**　粟井睦夫
責任役員　安東憲治　西森　茂　山本当次郎　安東實　有友由人　神田徳通　粟井不二夫　長畑光男　笠木繁松
宝　物　鏡　武術奉納額　棟札
特殊神事　伝統の春日神楽
由緒沿革　本神社は三條天皇の長和二年三月に備前美作国造和気氏が大和国官幣大社春日神社の御分霊を淡相の郷に奉斎した古社である。文明十八年九月十七日将軍足利義尚の臣、英田郡司粟井和泉守菅原景盛が御社殿を再建した。弘治二年美作百十二社記に吉野郡粟井郷総社とある。正徳五年美作六十六社に数えられている。明治四十四年粟井粟廣両村の神社を合祀した。

國貞（くにさだ）神社　旧村社

英田郡作東町國貞一三五四

主祭神　菅原神
例　祭　十月十六日　**境内地**　四九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　稲荷神社
氏子数　六〇戸
責任役員　福本卓二　神後静男　桜井稔
由緒沿革　天慶年間に山城国北野天満宮の御分霊を奉斎し、国貞村の氏神として尊崇し、字を北野と称したと伝えている。嘉暦二年再建の由を記した棟札を宝物として秘蔵している。口碑によると鎮座の当時は気候不順で、各地に落雷降雹があり庶人は頗る難渋をしたが、当神社の氏子区域だけは被害がなかったという。それにちなんで四月三日に雹害祭（とちまつり）を厳修している。

荒（こう）神社　旧無格社

英田郡英田町上山三四八一

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月二十八日　**境内地**　四九坪
主要建物　本殿　拝殿
崇敬者数　二十人
宮　司　赤木美作守
責任役員　小林志一　丸尾盛正　坂田京一
由緒沿革　創建由緒不詳。河会村大字上山字渕尾の氏神である。

荒神社　旧無格社

英田郡英田町中川三〇二

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月二十五日　**境内地**　九〇坪
主要建物　本殿　拝殿
崇敬者数　十四人
責任役員　小林人志　橋本良市　各務　進
由緒沿革　創建年代その他不詳。

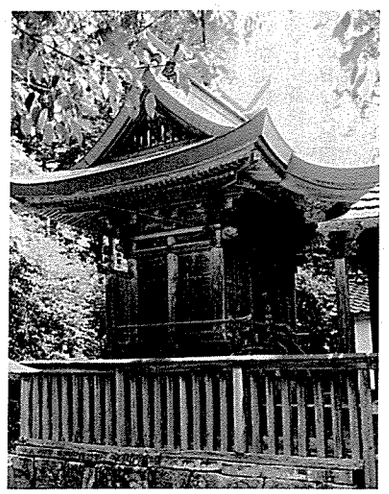
下倉敷（しもくらしき）神社

英田郡美作町下倉敷八五九

主祭神　伊邪那美神　軻遇突智命　大己貴命　天鈿女命　外六柱
例　祭　十月十七日　**境内地**　一、三四二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　四〇戸
責任役員　中西堅志　松本道夫　土居　博　井上　正
由緒沿革　本神社は美作古社百十二社の一社であって、当地は大化年中に巨勢の里と呼ばれたが、本神社はこの巨勢郷の総社であって、御名を総頭大明神と尊称した。幣帛料燈油料等の供進に充られた地所は総頭・田鍵畑・燈免・九日田・巫子免など字名として現存している。当神社を距る五六町下方に天の原という所がある。これは樫床大明神（今の荒神社）と会合し、大祭を執行した地である。今に残る門口、宝殿などの地名は神門口、宝物を貯蔵した神庫の跡地であることを示している。元亀天正年間、海田鷹巣城主江見越中守が氏神として篤く信仰し、武器を寄進している。元亀元年に江見城主の御社殿再建の棟札が現存している。なお御神像座台には財田彦丸との記入がある。財田氏は英田郡の豪族で財田彦丸はその後裔であろう。明治六年社号を下倉敷神社と改称した。

角南（すなみ）神社　旧村社

英田郡作東町角南一二三



主祭神　大己貴命　配祀・譽田別尊　武内宿禰
例　祭　十月十五日　**境内地**　二、四三九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　幄舎　神庫
摂末社　稲荷神社　金刀比羅神社　中山神社
氏子数　五〇戸　**崇敬者数**　一五〇人
宮　司　沖田年雄
責任役員　滝谷才雄　春名　勲　松田哲治
宝　物　古鏡二　御木像四　梵鐘一　獅子の幡（永享元暦）
特殊神事　春季大祭に当り作物豊饒祈念のためこれを行う。
由緒沿革　創建年代不詳。古来丸山八幡宮と称し、邑中の離山に鎮座し、閤武郷の一の宮であった。全山約六千坪その南麓に流鏑馬神事の跡がある。応仁元年赤松政則が御社殿を造営し、拾八石を宛行い、別當寺善福寺を寺谷に建立した。それ以後の御社殿の改築も棟札によって明白である。明治四十二年に旧来の御旅所、竹ノ下に鎮座の国司神社、寺谷寺敷および滝谷口の荒神社・影天王山の廣嶺神社・滝谷の滝神社を合祀した。

田殿（たどの）神社　旧村社

英田郡美作町田殿七〇六

主祭神　瀬織津姫神　譽田別神　武甕槌神　素盞嗚尊　倉稲魂神　天鈿女命　天児屋根神　経津主神
例　祭　十月十五日　**境内地**　一、四八五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所
摂末社　國司神社　高野神社　荒神社　中山神社　稲荷神社　淡島神社
氏子数　三五戸
責任役員　大畑　重　久山　晃　丸尾恒美　福田満州男　采女幸男
由緒沿革　本神社は美作風土記神名抄に、英多郡広井郷清滝社と見えている古社である。古は朝廷から国の正税を充てられ八位以上の神主祝部が奉仕していた。正平十六年山名時氏が田殿村鞍掛城主を降伏させた時、鳥居額面を奉納している。慶応二年には生野の代官横

田新之が年貢米、河船安全祈禱料五十疋を奉納している。明治四十一年合祀の事があった。大正十年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

高龗神社　旧無格社

英田郡英田町尾谷一一八

主祭神　高淤迦美神
例祭　十月十七日　**境内地**　三〇五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　國司神社　荒神社
氏子数　二二戸
責任役員　小林修平
由緒沿革　天武天皇白鳳十四年当地の高見山に奉斎して、妙見宮と称した。天文年間に下山井城主下山筑後守清氏が御社殿の造営に当り、金子米穀武器等の寄進をしている。元和三年に大洪水のため吉野川が出水し、上流に鎮座の荒木田五社大明神の社殿が流れて当神社社地の下石河内に懸ったので奉斎した。下尾原の氏神として、明治六年に社号を高龗神社と改称した。

瀧神社　旧村社

英田郡英田町尾谷一八七三

主祭神　瀬織津比賣神
例祭　十月十七日　**境内地**　四八六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社
氏子数　一九戸
責任役員　中谷　誠　渡辺富太郎　渡辺　毅　中谷久夫　景山晃夫
由緒沿革　創建は和銅五年九月で、領主土岐伊豫守の崇敬の篤かった神社である。武運長久の効験著しかった報賽として、領主の真畫一幅を寄進したのが現存している。慶長年間に国主森氏が社前に鳥居を寄進したという。天和二年七月社殿が炎上し書画を焼失した。御社殿は山の中腹にあり瀧があったのを、昭和四年九月改築して現在地に奉遷した。明治十二年村社に列格した。

竹田神社　旧村社

英田郡作東町万善七三一

主祭神　誉田別尊（合祀）瀬織津姫命　香々背男神
例祭　十月十六日　**境内地**　一、六一六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　手水舎
摂末社　素盞嗚神社　天満神社
氏子数　七八戸
宮司　沖田年雄
禰宜　兼務・中川克己　**権禰宜**　沖田正秀
責任役員　岩崎　豊
宝物　古神像三　神輿鳳凰（木製四）懸仏鏡五　棟札一（奉建立大川小川中斉　山城四箇郷大社神）
由緒沿革　創建は大同二年。美作国英多郡閤武郷の総社で、総社八幡宮と称する。弘治二年の美作国百十二社記には「閤武郷惣社竹田村二十三村」と載せ、正徳五年の美作古社六十六社神名帳にも記載がある。往古九月九日の例祭には管内四箇郷二十三村から、各氏神を奉じて当神社に集まり、郷司が盛大な祭典を執行した。御本殿建替にあたり、村々から建立銀を献納したことも棟札に記録せられている。

天神社　旧村社

英田郡作東町万善七三一

主祭神　天穂日命　外配祀八柱
例祭　十月十六日　**境内地**　一、八四七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　宋閑神社　稲荷神社
氏子数　四八戸
宮司　沖田年雄
責任役員　上野　勉　野竹義男　平井欣哉　青山早夫　野竹勝美
由緒沿革　創建年代不詳。社伝や古老の口碑に、第六十一代朱雀天皇の御宇、山城国北野天神の御分霊を、合祀した由を伝えている。古来氏子区域内に落雷の被害がないといわれ遠近の崇敬を集めている。寛文六年領主土岐氏の寄進を仰いで再建した。明治二十九年十

一月本殿を改築し現在に至っている。

土居神社　旧村社

英田郡作東町土居五八一



主祭神　譽田別尊　息長帯比賣命　比賣大神
例祭　十月十日　**境内地**　二、六四〇坪
主要建物　本殿　釣殿　幣殿　拝殿　神饌所　神庫　休息所　社務所
摂末社　八坂神社　稲荷神社　荒神社　多賀神社
土居天満宮　安産岩宮
氏子数　二五八戸　**崇敬者数**　一二、五〇〇人
宮司　沖田年雄
禰宜　兼務・中川克巳　**権禰宜・沖田正秀**
責任役員　岩崎　茂　内田栄夫　白川文治郎　鍬先幸太郎　吉政寅夫　山本武司
宝物　金色神像一　古神像四　伎楽面一　奉幣三啓状及祝詞各一　古棟札一　寄進木札一　懸仏鏡八
特殊神事　大福祭、毎年一月一日午前零時執行、福撒を行う、花輪くぐり、安産大祈願のため毎年春祭に行う。開帳大祭、十年毎、五年毎に中開帳。
由緒沿革　仁和三年創建と伝え、現存の木像伎楽面等は平安初期以前の古品であると伝えられている。元禄の頃には在勤の代官達は、特に当神社を信仰し、御社殿、玉垣を修理したり、大石鳥居を献進したりしている。享保七年には神祇道管領から、正一位を奉進せられている。神田も壱反余を寄進している。享保九歳には東武の住人権田政太郎が神田、石手水鉢、祭器等多数を献じ、寛延元年御本殿建替の節には、大阪城御城番から御簾三垂を奉納している。当神社は古来安産の神として名高く、日々参詣者が後を絶たない。

楢澤神社　旧村社

英田郡美作町楢原下三八三

主祭神　伊邪那美神
例祭　十月十七日　**境内地**　二、一九二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　社務所
摂末社　稲荷神社　荒神社
氏子数　六〇戸　**崇敬者数**　一八〇人
責任役員　衣畑輝夫　下山吉男　下山栄太郎
由緒沿革　本神社は往昔加賀国白山権現を勧請したものと口碑に伝える。天正七年大畠城主角南隼人正の崇敬により、鰐口一個及び薙刀一振が奉納せられている。大畠城は山外野村と山口村の村界に城跡が今もある。元禄二年九月国主森長成の崇敬により、御社殿が造営

例祭　十月十七日　**境内地**　一、八九五・八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神楽所
氏子数　八〇戸
宮司　小坂田武男
責任役員　豊久　堅　安井薫雄　水嶋和三
由緒沿革　創建年代不詳。欽明天皇の御代に紀伊国熊野本宮を勧請し、十二社宮、十二社権現と称した。美作風土記に「楢原郷総社」東作誌に「十二社権現」とある。明治四十二年六月二十四日塩野尾神社外四社を合祀した。

白山神社　旧村社

英田郡美作町山外野九一二

主祭神　菊理媛命　倉稲魂命　猿田彦命　伊邪那美命外五柱
例祭　十月十七日　**境内地**　二、一九二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　社務所
摂末社　稲荷神社　荒神社
氏子数　六〇戸　**崇敬者数**　一八〇人
責任役員　衣畑輝夫　下山吉男　下山栄太郎
由緒沿革　本神社は往昔加賀国白山権現を勧請したものと口碑に伝える。天正七年大畠城主角南隼人正の崇敬により、鰐口一個及び薙刀一振が奉納せられている。大畠城は山外野村と山口村の村界に城跡が今もある。元禄二年九月国主森長成の崇敬により、御社殿が造営

せられた。元禄戊辰年八月十日森長成が勝田郡湯郷村鷺温泉に浴し、滞在中附近の神社へ参詣し、又は代参を遣して病気平癒武運長久を祈願したと伝えている。

八幡神社　旧村社

英田郡作東町田渕六〇七

主祭神　譽田別尊
例祭　十月十五日　**境内地**　一、四九三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　二四戸
宮司　沖田年雄
責任役員　竺原熊男　竺原衛　祐延忠夫　祐延守
由緒沿革　創建は延暦二十三年で、その旨が御神体として奉斎する古木鏡に書いてある。社伝は詳かでないが、仝年宇佐八幡宮の御分霊を奉祀したという。貞享四年九月二十三日に御社殿を再建し現在に至っている。

八幡神社　威釼神社　旧無格社（二所一社）

英田郡英田町上山三三七三

主祭神　譽田別尊　仲哀天皇　神功皇后　素盞嗚尊

例祭　十月二十三日　**境内地**　二、二四三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　若宮社
氏子数　三七戸
宮司　中川克巳
責任役員　小林秀樹　青山東一　坂田　摑
由緒沿革　数次に亙る社家の交替によって、資料が散佚し徴すべきものもなく、由緒不詳である。ただ僅かに正徳六年御本社再建の棟札一枚がある。大正十三年十月拝殿を改築した。昭和五十一年九月御本殿屋根替、幣・拝殿内外の大修理を完成した。

八幡神社　旧村社

英田郡作東町白水二六一一

主祭神　譽田別尊
例祭　十月十七日　**境内地**　一、〇五一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　社務所
摂末社　祖霊社
氏子数　七五戸　**崇敬者数**　一五〇人
宮司　沖田年雄
責任役員　井口幸男　番能新逸　春名文一　野谷忠一
宝物　御神鏡五　金幣四　随神像二　龍彫刻一　蟆股二　古棟札二
特殊神事　年柴神事（豊作祈念のため春祭に行う）
由緒沿革　創建年代不詳。明治末期に合祀の境外摂社天忍穂根神社の御本殿蟆股には、元禄十四年と彫られている。最近まで境内にあった杉の根株は直径二米余あり神社の古きを物語っている。当神社は明治四十二年に境外末社七社を、次で白水別所字宮山の前記摂社、外仝社境外末社三社を合祀した。御本殿は万延元年の改築であったが、昭和二十九年九月台風第十五号のため全壊した。しかし、仝三十年十月には、復興改築を完了した。

八幡神社　旧村社

英田郡美作町楢原上一二八八

主祭神　譽田別尊
例祭　十月十七日
境内地　一、九五四・八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　久保神社
氏子数　二〇〇戸
責任役員　高田恵人　伊東　隆　難波銃一
由緒沿革　本神社の創建年代は不詳であるが、美作古社百十二社に八幡宮の名が載っている。明治四十二年五月二十九日に日吉神社外四社を合祀した。

八幡神社　旧村社

英田郡美作町田殿一五六一

主祭神　譽田別尊　國常立命　天照大神
例祭　十月十日　**境内地**　二〇九坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　社務所　神輿庫
摂末社　荒神社　高良神社　稲荷神社　天満神社
伯岐星神社　八坂神社

氏子数　四〇戸
責任役員　赤堀高二　流王栄一
由緒沿革　本神社の創建は不詳。延宝年間に再建の神社である。大正九年十月六日字権現堂森神社を合祀した。大正十年七月二十日村社に列し、十月四日神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

林野神社　旧郷社

英田郡美作町朽木五二

主祭神　天照大御神　相殿・天児屋根神　天穂日神
例祭　十月十二日　**境内地**　一、四七〇坪
主要建物　本殿　幣殿　神饌所　社務所　神輿庫
摂末社　大已貴神社　荒魂神社
氏子数　一、二七五戸
崇敬者数　三、七三一人
責任役員　江見五男　国重　武　中川三武市　清水克己
由緒沿革　應神天皇の御宇、伊勢荒木田氏の所領に天照大御神を奉斎し、荒木田大明神と称した。寛治年間中納言大江匡房卿下向の際、四座相殿を配祀奉斎し、荒木田五社大明神と改称した。以後数度にわたる兵火水害などのため、古文書は散佚した。現御社殿は貞享四年国守森氏の寄進である。森家執政森所左衛門寄進の石灯篭一対が現存している。明治十四年郷社に列格。明治四十四年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

福本神社　旧村社

英田郡英田町福本九五一

主祭神　天石門別雷神　素盞嗚神　大已貴神　天穂日命
例祭　十月十九日　**境内地**　九〇一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　稲荷神社　八坂神社
氏子数　一四八戸　**崇敬者数**　二〇〇人
宮司　中川克巳
責任役員　遠藤義郎　國司香苗　小山完一
由緒沿革　創建年月不詳。美作古社百十二社中の一社である。河合郷の総社と称せられた。享和元年八月本殿再建のとき領主土岐氏から銀四百匁を寄進している。例年秋季大祭のみぎり、一の宮天石門別神社から神輿の行幸があって、陰暦九月九日より十九日までの十日間の大祭を奉仕した由の記録がある。元禄十三年から郷中の氏神社加茂大明神と称したが、明治六年福本神社と改称し、大正十二年一月、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

三保神社　旧村社

英田郡英田町三保原四一〇

主祭神　大已貴命　少彦名命

例　祭　十月十九日　**境内地**　一、七一一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫
摂末社　稲荷神社外十社
氏子数　八〇戸
責任役員　高坂忠臣　宮内邦夫　豊福周平
由緒沿革　本神社の創建は大和朝時代で、元和七年再建せられ、往古宮原神社と称し御諸山東面に鎮座せられた。乱世の際に馬上で鳥居の前を通過すると、必ず落馬したという。故に同山の西北面に御社殿を遷座した。中古は醫王天大明神と称したが、維新の後三保神社と改称した。

巣城主から武器楽器等の寄進を受けている。昔から諸国に悪疫流行し、五穀稔らず、盗賊蜂起する時には武勇猛き当神社の神威にすがり、悪疫退散国土安全鎮護を祈願している。文永二年社殿造営、寛永十二年修理の際には領主土岐伊豫守が金幣を寄進している。明治六年に社号を宮谷神社と改称し、海田神社の摂社であったのが明治十二年九月二十二日村社に昇格した。

宮谷神社　旧村社

英田郡作東町鈴家七二五

主祭神　素盞嗚尊　高淤迦美神
境内地　七一九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　鳴神社
氏子数　一四戸
責任役員　江見治郎　江見清一　江見堅一
由緒沿革　創建は大和時代で、美作古社百十二社の一社である。美作風土記神名抄に、「正六位上宮谷社は高淤迦美神を奉斎し、巨勢郷に鎮座す」と見える。垣田村尻焼の宮谷にあり、この地の総鎮守であって牛頭天王と称した。社伝によると大吉備津彦命が四道将軍として鎮撫の際、本神社を創建したという。天正七年鷹

宮山神社　旧村社

英田郡美作町海田三六七六

主祭神　菊理姫命（配祀）・大國主命　伊弉冉尊
例　祭　十月十七日
境内地　一、一〇四・七五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神門
摂末社　荒神社　稲荷神社
氏子数　七二戸
宮　司　中川克巳
責任役員　佐々木親正　香山幸次郎　丸吉　茂
由緒沿革　創建年代不詳。　社伝によると第四十二代文武天皇の御宇加賀白山神社ならびに出雲大社の御分霊を奉祀したという。明治初年までは白山権現、国司権現と称していた。延宝四年九月の本殿再建の棟札が鈴家神社と改称。明治四十二年四月仝村内田渕神社を合祀。同時に宮山神社と改称した。大正十三年四月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

八坂神社　旧無格社

英田郡美作町田殿二四七七

主祭神　素盞嗚尊　大己貴命
例　祭　四月八日　**境内地**　四二・六五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　御拝殿
摂末社　荒神社　清地神社　國司神社
氏子数　二五戸
責任役員　安東一雄　浅野　尚
由緒沿革　本神社は播州姫路廣嶺牛頭天王の御分霊を西嶺に勧請している。嘉永六年に殿宇を再建した。昭和十四年山上から国司に遷座し、八坂神社と改称した。昭和四十三年拝殿を再建した。神饌幣帛料供進神社に指定せられた。昭和五十一年三月六日国司から石生谷に御社殿を移築遷座した。

山口神社　旧郷社

英田郡美作町山口三〇二

主祭神　天手力男命外三柱
例　祭　十月五日　**境内地**　三、三五一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　幣帛供進使控所
摂末社　稲荷神社
氏子数　六〇戸
崇敬者数　二〇〇人

崇敬者数　一、一〇〇人
責任役員　溝口義信　山本敏明　山本昭二
由緒沿革　本神社は、古くは天手力雄大明神と称したが後に総社天手力雄神社と改称した。明治六年二月、北条県の所管の頃、郷社に列格し、山口神社と改称した。美作国古社百十二社中の一社である。神額には県多郡総社とする。郷中の神社が参集して祭事を執行った所で、今も神集山の地名がある。例祭の九月十九日には山外野村の白山権現（今の白山神社）、川北村今在家の牛頭天王（豊福須佐神社）原村の天神宮筒男大明神（原神社）の神輿行幸の古例がある。

横尾神社　旧村社

英田郡英田町横尾一三九八

主祭神　天津神　國津神
例　祭　十月二十日　**境内地**　一二〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　参籠殿
摂末社　稲荷神社　山神社
氏子数　九戸
宮　司　赤木美作守
責任役員　田中角治　岡田熊市　有本猛男
由緒沿革　創建年代不詳。氏子全戸が菅原氏の末裔であるから、御祭神は菅原神との伝説もある。

参籠

神明奉仕のために、神職が一定の期日の間、一定の場所に籠って心身を清浄にする目的で営む別生活のことである。斎籠ともいう。参籠のための建物を参籠所又は斎館といい、沐浴潔斎の設備がある。俗的な生活から隔離して、家人又は一般人と火を別にし、食事を異にして、多くの禁忌事項を守ることになっている。民間でいう「オコモリ」（お籠り）がこれに相等する。

社家

神社に世襲的に奉仕する神職の家をいう。氏族制度時代には、氏上が氏人をひきいて氏神の祭祀に奉仕し、専門の神職はなかったが、のちにその社に専従的に奉仕する人が出来、職業的に世襲するようになり、社家が発生した。明治四年になり神職の世襲を廃したが、旧社家で存續するものがあった。終戦後は神社が國家管理をはなれたために、世襲化の復活が多くなった。

言挙（ことあげ）

自分の意志を言葉にだして言い立てること。古事記では言挙、日本書紀では興言・高言・揚言・稳・万葉集では言上・言挙・辞挙・事上・事挙などの字を使っている。神々が言挙げされた例は神話には少くないが、倭建命の言挙げが誤っていたために、命が苦しみに逢われると云う例が古事記にある。「葦原の水穂の国は、神ながら、ことあげせぬ国、然れども、ことあげぞ吾がする」と万葉集に歌われているように、古代には、神意を畏れ貴ぶために、言挙げはつつしむべきが立て前とされていた。万葉集に「千万の軍なりともことあげせず取りて来」るのが男であるとある。しかし、言挙げせぬという場合と、あえて言挙げするという場合と、そのいずれにしても、それは言霊の信仰と深い関係があったと考えられる。

年祝（としいわい）

広義には一生のうちに迎える晴の機会であり、狭義には一定の年齢に達したことを祝う行事がある。一年間に晴の日としての年中行事があるように、人間の一生にも特定の晴の歳がある。それは単に個人的な日ではなく、個人のぞくする社会全体とのかかわりにおいてなされる神祭である。出産の祝・名つけ祝・初宮詣・百日目の食い初め祝・初誕生祝・初正月・初節供・三歳・五歳・七歳の祝・成年祝・結婚祝・男子二十五歳・四十二歳・女子十九歳・三十三歳の厄年・還暦の祝・古稀の祝・喜寿の祝・米寿の祝等の年祝がある。これらの祝の多くは、祖霊の祭である正月、盆、氏神祭におこなわれ、家族的にも社会的にも一定の年齢に達したことの感謝と、地位についたことの社会的認知の機会であった。近年はその社会性が失われ個人的な祝として多様化の傾向がある。

英北支部（一四社）

青野神社　英田郡東粟倉村大字青野三八五……四七六
粟倉神社　〃　西粟倉村大字長尾一〇八〇……四七六
入江神社　〃　西粟倉村大字大茅一五〇二……四七七
後山神社　〃　〃　東粟倉村大字後山一六九二……四七七
大野神社　〃　〃　大原町川上二九二九……四七七
大原神社　〃　〃　大原町古町一六八七……四七八
大吉神社　英田郡大原町赤田三三八……四七九
影石神社　〃　西粟倉村大字影石一三四三……四七九
小坂神社　〃　〃　大原町今岡一六八……四七九
金刀比羅神社　〃　〃　西粟倉村大字坂根四三五……四八〇
讃甘神社　〃　〃　大原町宮本一三二……四八〇
大社神社　〃　〃　西粟倉村大字影石三五九……四八一
天満神社　〃　〃　西粟倉村大字長尾二二四六……四八一
吉田神社　〃　〃　東粟倉村大字吉田四六九……四八一

恩頼（みたまのふゆ）

日本書紀と古語拾遺に出ている古語で、神の神秘なはたらきや恵みをいう。同じ書物で神霊・霊・皇霊之威・神祇の恩等と書いて、ミタマノフユと読ませる例がある。ミタマとは霊魂または生命力で、フユとは振う（威力の発動）こと、増殖増大することと考えられる。神の加護や神に源を発する生命力の信仰から、勤労の成果があり物事が進展成就する事が、自分だけの力によるものでないことを意識している言葉であって、ムスビの信仰と関係が深い。

霊験

神霊の不可思議な感応・効能・効験をいう。平家物語には「日本第一大霊験熊野三所権現」といい、義経記には「貴船の明神として霊験殊勝にわたらせ給ひければ」とあって、特定の神社を挙げ、その祭神の霊験をたたえている。自分について何らかの縁故ある神に、随意の霊験を祈願するのが一般的であるが、特殊の神に特定の霊験ありと考え願立てする場合もある。例えば、八幡神には武徳を、住吉・宗像・金刀比羅の神には海上安全を、天満神には学問文芸をというようで、願懸重法紀には江戸の各社について、その利験を明記してある。

青野神社　旧村社

英田郡東粟倉村大字青野三八五



主祭神　大己貴命　天之御中主命　瓊々杵尊
例　祭　十月十日　**境内地**　四七四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　荒神社　愛宕神社　高尾神社　天一神社　稲荷神社　山神社
氏子数　九〇戸
宮　司　三星　貢
責任役員　福田忠志　向原武雄　小松直正
宝　物　太刀　金燈籠
特殊神事　大祓祭　青年学生奉納相撲　初午祭　荒神祭　春祭　秋祭
由緒沿革　本神社の創建年代は不詳であるが、崇神天皇の御代に大己貴命、天之御中主命、瓊々杵尊三柱の神を奉斎し、二宮大明神と称した。社伝では、貞観四年に吉野郡東西粟倉之庄の人達が美作一宮の中山神社から金幣を分祀奉斎したという。東西粟倉八社の一社であり、青野神社と称した。安政六年領主、明石城主松平斎宣が、御神体七体を奉納した。文政八年代官布施孫三郎が太刀及び金燈籠一対を奉納した。昭和十六年九月、神饌幣帛供進指定神社に指定せられた。昭和二十一年十月、御本殿幣殿拝殿の屋根瓦葺替えが落成した。昭和四十八年十月、社務所の修理、コンクリート鳥居、参道鋪装、玉石垣などが落成した。

粟倉神社　旧村社

英田郡西粟倉村大字長尾一〇八〇

主祭神　大己貴命　素盞嗚大神　豊受大神
例　祭　十月九日
境内地　一、五三四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　御拝所　随身門　神庫　御輿庫　社務所　上仮屋
摂末社　稲荷社　荒神社　三社神社
氏子数　二〇〇戸
宮　司　青木三平　**禰　宜**　萩原隆廣
責任役員　国里宇喜太郎　青木惣一　江見公一　白岩賢　小椋芳美　関　巌男　平田光男　神原真太郎
特殊神事　御神幸　獅子舞
由緒沿革　本神社の創祀年代は不詳であるが、天安元年と伝えられている。明治以前は祠頭大明神と称し、東西粟倉の庄の総鎮守であり、勧請の本社は美作一宮中山神社である。貞観四年以前は、東西粟倉の庄の氏子が祭事を奉仕したが、争論がよく起ったので、東西粟倉に分社することに定め、中山神社に参拝して、その区域の指示を仰ぎ八社に奉斎した。このことは中山神社旧記及び中山神社明細帳に明記せられている。寛永十三年八月、社殿の再建に際し、美作国主従四位森長継公はこの費用の一部を寄進した。その遺臣安東常直が享保十九年九月、石燈籠一対を寄進した。宝暦九年九月、京都仁和寺宮の侍臣鳴瀧兵部が大提灯を寄進した。文化六年津山藩主松平侯の家老が寄進した大石燈籠一対が現存している。粟倉神社と改称したが、粟倉庄十二ヵ村(八社)の総鎮守社を意味している。昭和三十二年四月二十二日、石玉垣造営報告祭を執行った。昭和四十八年十月伊勢神宮遷宮第六十回記念事業として、幣殿・拝殿・社務所の屋根をメタルブーフに葺替を行なう。又、石鳥居を造営するとともに、参道及び石段の鋪装をした。昭和四十九年五月、随身門の屋根瓦の葺替をし完成した。

入江神社　旧村社

英田郡西粟倉村大字大茅一五〇二

主祭神　大己貴大神
例　祭　十月十三日　**境内地**　二一九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　御拝所　社務所　上仮屋
摂末社　稲荷神社　塞神社　上土居　下土居荒神　新田　地主荒神　鷲神社　大将軍神社　山神社
氏子数　一〇〇戸　**崇敬者数**　四〇〇人
宮　司　青木三平　**禰　宜**　萩原隆廣
責任役員　金田　豊　萩原保郎　宮崎　深　井上英子　萩原　寿
由緒沿革　本神社は粟倉八社の一であり、清和天皇の御宇貞観四年八月、当地に鎮座した。寛保元年五月、朔日、美作国一宮神主の旧記、および安永三年正月、中山神社の神主から准国主松平侯に呈出した中山神社明細帳に見えている古社である。本神社はもと大字大茅坂根二部落の氏子戸数百五十余戸であったが、昭和三十年十一月、二部落の氏子談合の上、坂根部落の氏子は、本神社御祭神、大己貴大神の御分霊神鏡一面を捧持して、本神社の氏子を分離した。

後山神社　旧村社

英田郡東粟倉村大字後山一六九二



主祭神　大己貴命　譽田別尊
例　祭　十月十二日　**境内地**　一、一四七坪
主要建物　本殿　祝詞殿　幣殿　拝殿　社務所　随身門　神饌所　手水舎
摂末社　稲荷神社　妙見神社　荒神社　山神社　中尾神社
氏子数　一八〇戸　**崇敬者数**　一、二〇〇人
宮　司　三星　貢
禰　宜　三星義暉　権禰宜・井上四男
責任役員　井上良太郎　西峪鶴三郎　明石恒太郎　春名　明
宝　物　神矢　鎗　短刀　鰐口　社殿造営証明書
特殊神事　春祭　秋祭　御神幸祭(獅子舞・屋台)　大祓祭　厄除祭　初午祭　七五三詣
由緒沿革　本神社の創建年代は不詳であるが、大己貴命、譽田別命を現在地に奉斎した。社伝によると、貞観四年に英田郡元吉野郡東西粟倉之庄の人達が謀り、津山一宮である中山神社から、金幣を分祀奉斎したという。粟倉八社の一社であり、奥津大明神と称したが、後に後山神社と改称した。明應六年から享保十七年の間に領主、国守等より神宝の奉納、社殿の造営、境内施設の造築等の寄進があり、現存している。明治四十四年十二月、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。昭和十八年十月より昭和四十五年の間に社殿の造改築、境内の整備を完成し、面目を一新している。

大野神社　旧村社

英田郡大原町川上二九二九

主祭神　須佐之男命　外十一柱

例　祭　十月十五日　**境内地**　七七七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神楽殿　随身門　社務所　参籠殿
摂末社　稲荷神社　荒神社　粟島神社
氏子数　二八五戸　**崇敬者数**　五二人
宮　司　小坂田武男　**禰　宜**　小坂田住保
責任役員　有元善美　小坂田暉夫
宝　物　太刀（仙台国包作）



保の総宮であり、牛馬農業の神として尊敬を集めている。現在、八部落の氏神として鎮座ましましている。

大原（おおはら）神社

英田郡大原町古町一六八七

主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神門　神楽殿　神輿庫　神務所　参集殿　社務所
摂末社　天神社　金刀比羅神社　八坂神社他十八社
氏子数　四〇〇戸
崇敬者数　一〇、〇〇〇人
宮　司　三星大和守
禰　宜　三星典行　権禰宜・三星公正
責任役員　原田貞市　小松正雄　松本　豊　有元一陽　田渕　護
宝　物　井桁の額　大太鼓　高張御親筆　写神代文字軸物　銅器　棟札　矢及び矢箱　神社誌
特殊神事　神輿渡御　大原獅子　星祭山の星祭　湯立行事　大神楽



由緒沿革　本神社は聖武帝の神亀元年の創建。大野東人が勅を奉じて藤原広嗣を討ち当地を賜わり、本神社を崇敬し社殿を造営したと伝えられている。文治年間に、流鏑馬を奉納したとある。明和五年に現在の御本殿を造営した。美作古社百十二社の格式がある。大野

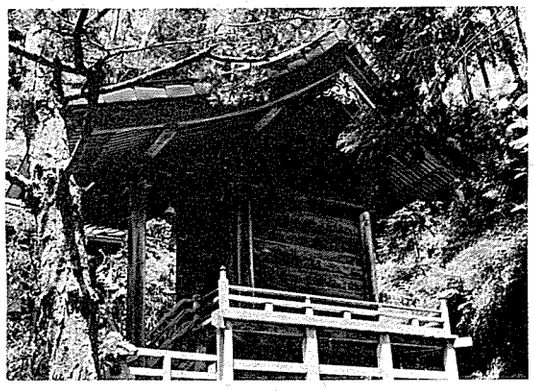
主祭神　大己貴神
例　祭　十月十五日　**境内地**　一、四〇五坪

名代として参拝させ、大太鼓・土屋家定紋のある高張一対を奉納した。明治六年二月、旭霧山郷社大原神社と改称。明治四十二年三月、氏子内小社を境内末社として合祀した。同四十四年十二月、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。明治四十四年より大正四年にわたり、石灯籠・石駒犬の奉献があった。また境内地の石段・敷石の奉献があり、境内地は整備された。昭和二十七年二月、岩滝神社・王子神社・荒神社を合祀した。昭和三十六年に本殿屋根葺替、幣拝殿増築を行った。昭和五十一年、神社振興対策モデル神社に指定された。

大吉（おおよし）神社　旧村社

英田郡大原町赤田二三八

主祭神　冬衣神　大己貴神　事代主神
例　祭　十月十五日　**境内地**　一、二三〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　荒神社　天神社　稲荷神社
氏子数　二三〇戸　**崇敬者数**　三〇人
宮　司　横山茂樹　**禰　宜**　横山稚樹
責任役員　渡辺又文　芳野種夫
特殊神事　神幸渡御　獅子舞
由緒沿革　本神社は赤田の伊垣神社、田井の伊垣神社、粟野の伊垣神社、澤田の澤田神社、川戸の杉神社および、地区内の無格社七社を合祀し、一村一社とした。明治四十四年十二年六日、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。明治四十二年十月一日、字赤田の伊垣神社



に合祀と共に、村社大吉神社と改称した。大正元年八月から社地を移転し、社殿新築工事を起し、翌年五月十五日、遷座祭を行い現在に至っている。

影石（かげいし）神社　旧村社

英田郡西粟倉村大字影石一三四三

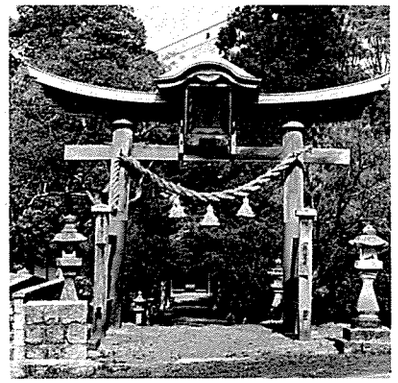
主祭神　大己貴命　須勢理姫大神
例　祭　十月十日　**境内地**　五二二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　上仮屋
摂末社　稲荷神社　川裾神社　猪之部神社　中島荒神　合祀総社
氏子数　一二〇戸　**崇敬者数**　五〇〇人
宮　司　青木三平　**禰　宜**　萩原隆廣
責任役員　中島　壽　矢代高治　矢代伊津夫　山根操　国里和男　新田泰造　政久治三郎
由緒沿革　本神社は粟倉八社の二の宮で、往古二宮大明神と称し、清和天皇の御代、貞観四年八月、祠頭大明神から当地に分祀した。往時、美作国一ノ宮中山神社から御幣壱本を申し請け当社に奉斎した。これは寛保元年五月朔日の一宮神主中島杢頭温頼の旧記に見えているばかりでなく、中山神社明細帳にも明記せられている御本殿は寛延二年三月の建立であり、御社前の籠殿は神楽殿と称し、文化六年八月に建立したものである。御本殿の近傍に宮地田があって、寛政元年以前から宮地田供御と称し、秋の大祭には必ずこの田の初穂を供奉する習わしである。明治の初め、村社に列し、影石神社と改称した。昭和五十二年四月二十四日炎上した。昭和五十三年より復興に着手し、境内地の拡張を図って整地し、社殿は旧位置よりやや後方に位し、社殿は宮大工、備前市沖田正夫、上屋及び幣殿、拝殿、御拝所は当地大工棟梁中島智宏外三名にて造営した。御祭神は刻師、出雲市藤井孝三の謹作で、同年九月完成した。同十月二日、浄闇に鎮座祭を斎行し、翌十月五日、工事竣工祭ならびに奉祝祭を執行した。これによって神域の面目を一新して、尊厳さを増すにいたった。

小坂（こさか）神社　旧村社

英田郡大原町今岡一六八

主祭神　天忍穂耳命　大己貴命　外十柱

例　祭　十月十五日　**境内地**　三六〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神供殿　随身門
氏子数　二四〇戸　**崇敬者数**　九八四人
宮　司　池田秀雄
責任役員　井並経雄　本丸公平　本位田隣太



由緒沿革　本神社は和銅年間の勧請で、昔は上の中山に御鎮座の由である。東作誌及び美作百十二社所載の神社である。領主松平相模守、土屋但馬守、脇阪淡路守の崇敬が篤かった。天保十三年に明石城主松平氏の領地となると、年々所定の幣饌を奉献せられ、神主は毎月三回郡代役所に参向して、清祓を奉仕した。郡代は毎年四回御供五人をつれ領主の代参として正式に参拝をし、天下太平、領内繁栄、武運長久を祈念した。領主からの建物及び祭具等の寄進が多く、現存しているものが多い。明治四十二年十二月、氏子五大字内所在の摂末社や境内末社を本社に合祀することとなり、同四十四年八月八日に合祀遷座祭を斎行した。その内下町村から合祀した八幡神社は郡代役所鎮守の神社であり、維新前には領主によって毎年八月十五日に盛大な官祭が執行せられ、領内の住民をも参拝させた。明石藩奉行、また領内から奉納の石燈籠四基は、合祀とともに当神社に移したものである。

金刀比羅神社（ことひら）　旧無格社

英田郡西粟倉村大字坂根四三五

主祭神　大物主命　大己貴命
例　祭　十月十日　**境内地**　四九七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　御拝所　上仮屋
摂末社　稲荷神社　荒神社　山神社
氏子数　五〇戸　**崇敬者数**　二〇〇人
宮　司　青木三平　**禰　宜**　萩原隆廣
責任役員　草苅幸之助　東大三郎　草刈延男
内海歌浩郎

由緒沿革　本神社は元禄年間の創祀と伝え、讃岐国金刀比羅神社の御分霊を勧請奉斎した。当地は徳川幕府時代、因州鳥取城主池田侯の参勤交代の要路であり、宿駅として栄えた。現在は崇敬者が鳥取県地方にも多数存在している。本神社は旧無格社で、坂根部落はもと大茅鎮座の入江神社の氏子であったが、昭和三十年十一月、二部落の氏子による話合の上、入江神社鎮座大己貴大神の御分霊御鏡一面を奉じ、入江神社氏子を別れた。旧金刀比羅神社の社殿を遷し改めて大己貴大神の社殿を造営して大物主大神の社殿と並列鎮座した。昭和三十一年四月二十日、分祀祭並落成祭を斎行し、社名も別名金刀比羅坂根神社と敬称している。昭和二十九年三月一日、宗教法人神社となる。

讃甘（さのも）神社　旧郷社

英田郡大原町宮本一三二

主祭神　大己貴命　須佐之男命　天葺根命　倉稲魂命
例　祭　十月十五日　**境内地**　二八三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神庫
摂末社　猿田彦社　稲荷神社　荒神社　荒神社　天神社
氏子数　二八〇戸
宮　司　白岩直樹　**禰　宜**　池田秀雄
責任役員　福原　敏　浅田福太郎　千原範二
由緒沿革　往昔讃甘郷の総鎮守で、荒巻大明神と尊称した。寛文元年に平尾七郎左衛門、元禄八年に、森長成がそれぞれ御社殿を再建した。嘉永三年に御社殿を改築の際、松平斉宣が米五石金一封を寄進した。明治六年に郷社に列せられ、讃甘神社と改称した。

大社（たいしゃ）神社　旧無格社

英田郡西粟倉村大字影石三五九

主　祭　社　大國主命
例　祭　十一月十五日　**境内地**　九三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　上仮屋　龍殿
摂　末　社　荒神社　山王神社　山神社　愛宕神社
稲荷神社　天満神社
氏　子　数　五〇戸　**崇敬者数**　二〇〇人
宮　司　青木三平　**禰　宜**　萩原隆広
責任役員　福島軍治　萩原昌次郎　萩原才智
萩原真寿美

由緒沿革　本神社は古くは杵築社と称し、出雲大社の御分霊を勧請したものである。明治維新後、大社神社と奉称した。明治八年、明治三十年に出雲大社国造正三位男爵千家尊卿が参拝したとの伝えがある。

天満（てんま）神社　旧無格社

英田郡西粟倉村大字長尾二二四六

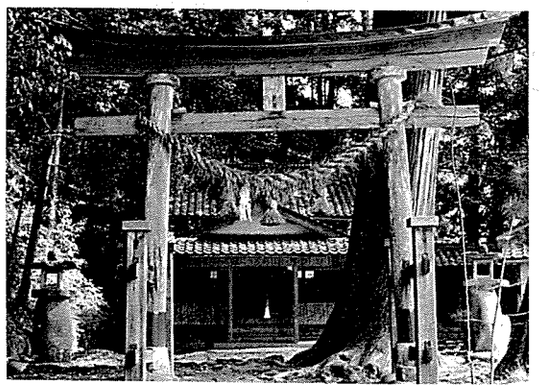
主祭神　菅原道真神
例　祭　十月二十五日　**境内地**　二四一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　御拝所　社務所　神庫
摂末社　稲荷　荒神　山神（一社）
氏子数　五〇戸　**崇敬者数**　五〇〇人
宮　司　青木三平　**禰　宜**　萩原隆廣
責任役員　石原三男　小椋作男

由緒沿革　本神社は元禄年間に、京都北野天満宮から御分霊を勧請しこの地に奉斎したとある。由来勧学の神、雨乞の神としての信仰が篤い。安永二年、本社再建の棟札が現存する。明治四十五年十月、大風のため社殿が倒壊した。大正三年に、旧の社殿を再建した。往古から威徳天満宮あるいは天神社と改称した。御祭神はもと吉野郡長尾村に勧請したが、後に同村引谷愛宕山に御遷座し、更に現在地に御遷座した。威徳天満宮と奉称していたが、天満神社と改称した。旧本殿は西粟倉村長尾の柴尾神社の御本殿であったが、栗倉神社に合祀し、後に大原町古町の有元新太郎により、天満神社に寄進した。昭和四十二年十二月十三日に御本殿が炎上し、昭和四十四年十一月三日に御本殿、社務所の再建竣工の奉祝祭を執行した。

吉田（よしだ）神社　旧村社

英田郡東粟倉村大字吉田四六九

主祭神　大己貴命
例　祭　十月九日　**境内地**　一八七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　稲荷神社　荒神社　山神社　愛宕神社
氏子数　五五戸　**崇敬者数**　三五〇人
宮　司　三星　貢　**禰　宜**　三星義暉
責任役員　春名康雄　小嶋暉男　小松令舜
宝　物　社殿造営棟札　神矢



由緒沿革　本神社の創建年代は不詳であるが、往古、大己貴命の御神徳を仰ぎ、現今の地に奉斎したものであり、山頭大明神と称した。社伝には貞観四年、東西粟倉之庄の人達が相謀り、津山一宮の中山神社より、金幣を申し下して分祀奉斎したという。東西粟倉八社の一社である。明治維新に所在地の名を社号とし、吉田神社と改称した。御社殿は延宝二年二月の再建である。昭和十五年九月、神饌幣帛料供進指定神社に指定せられた。昭和二十一年十月、本殿上屋根幣殿、拝殿、屋根瓦葺替え、周囲の修理工事が落成した。昭和四十九年十二月、鳥居の修理工事が落成した。昭和五十年十月、社務所改築工事が落成した。

門神（かどのかみ）

門戸を守護し給う神を云う。その神名については、古事記に「天石戸別神、亦の名は櫛石窓神・豊石窓神ともいう。此の神は御門の神である」とある。しかし古語拾遺には「豊磐間戸命・櫛磐間戸命二神をして、殿門を守衛らしめたまひき。」とあり、豊・櫛二神を別神とし、天石戸別神との関係は記してない。延喜式には、御門巫の祭る神八座として櫛石窓神・豊石窓神を挙げ、また祈年祭・月次祭・御門祭の祝詞の中にこの神の神徳を称えている。後世に至り、俗に閾神（かどのかみ）・門守（かどもり）・門客（かどまろうど）・随身・看督長（かどのおさ）・矢大臣などと云って、神社の随身門の左右に安置してある木像を指しているが、その起源・性格についての定説がない。

神棚

屋内の清浄な一定の場所に神祇の分霊または神札などを奉斎する施設である。古くから日本人の信仰生活の主要な一部となってきたが、特に日本の多くの家庭には神棚と仏壇は欠くことの出来ない存在となっており、神仏思想調和にともなって、自然に表現したものであるから、神道思想発達の歴史的考察からも説明することができ、日本人の家庭祭祀の基本的性格を知ることが出来る。日本人の神観念・祖先観等が探究できる。神棚は大神宮棚と総称されることが多く、各地の神社の神札の類を安置する目的が第一で、次に恵比須・大黒・荒神・歳徳神・祖先神などを斎き安置する神棚である。即ち神札の奉安所、或は、神社に対する遙拝所となっている。

國内神名帳

（こくないじんみょうちょう）

律令時代、諸国の国司が、その管内の崇敬神社を録上した公簿をいう。令制によると、新たに任命された国司が、任国に赴任すると、先ず吉月吉辰をえらんで、管内の主要神社を巡拝し、そのの ち交替の政を行ない、平常の国務をとるのである。恒例、臨時の祭祀、奉幣のことが国内の崇敬神社に対して行なわれた。このように登録された神社の公簿が国内神名帳で、これに国名を冠してよんだ。次の十八ヶ国のものがある。即ち筑後国・大隅国・加賀国・尾張国・対馬国・和泉国・上野国・伊豆国・備前国・若狭国・美濃国・播磨国・三河国・紀伊国・駿河国・越前国・隠岐国・安芸国等である。

久米支部（七四社）

愛宕神社　久米郡久米南町里方十三……四八五
天津神社　〃　久米南町山城五五七……四八五
稲岡神社　〃　久米南町南庄五二……四八五
稲荷神社　〃　久米南町全間九六……四八五
磐柄神社　〃　中央町打穴北一一二四……四八五
磐筒神社　〃　中央町頼元三二五……四八六
上粒神社　〃　久米南町上粒七九九……四八六
大洗神社　〃　栃原町休石二四五……四八六
大宮神社　〃　栃原町百々六七一……四八七
大山貴神社　〃　久米南町峠五九七……四八七
興津神社　〃　中央町上打穴里一八……四八七
加茂神社　〃　久米南町里方六七六……四八八
貴布禰神社　〃　久米町桑上一九〇……四八八
北山神社　〃　久米南町北庄三八七五……四八八
久保神社　〃　久米町宮部下九八四……四八九
国司神社　〃　久米町宮部下一四四九……四八九
熊野神社　〃　久米南町塩之内三〇一……四八九
厨神社　〃　久米南町上弓削二二四……四八九
小原神社　〃　中央町小原八六六……四九〇
小山神社　〃　旭町小山一五四……四九〇
西幸神社　〃　中央町西幸一七三〇……四九〇
境神社　〃　中央町境一三七三……四九〇
榊葉神社　久米郡中央町打穴西六三四……四九一
定宗神社　〃　栃原町定宗一九九……四九一
山王神社　〃　久米南町宮地五八〇……四九一
倭文神社　〃　久米町油木北三三二……四九二
志呂神社　御津郡建部町下神目一八三四……四九二
菅原神社　〃　建部町川口三六七……四九三
少彦名神社　久米郡久米町油木北一六〇八……四九三
住吉神社　〃　栃原町大戸上七六三……四九三
諏訪神社　〃　中央町原田九一八……四九三
素鵞神社　〃　久米南町松七六〇……四九四
高井神社　御津郡建部町川口二七二〇……四九四
高尾神社　久米郡栃原町吉留一五九……四九五
高津神社　〃　久米町里公文一五一四……四九五
高比野神社　〃　栃原町安井二八五……四九五
高山神社　〃　栃原町高城八八九……四九五
龍川神社　〃　久米南町上二ケ三三……四九五
塚角神社　〃　栃原町塚角一四五……四九六
鶴坂神社　〃　久米町坪井下一五七七……四九六
天神社　〃　久米町宮部下一四五二……四九六
峠神社　〃　久米南町峠三二五……四九七
刀八神社　〃　旭町中一五八七……四九七
徳尾神社　〃　旭町西川上八九〇……四九七
錦織神社　〃　中央町錦織中山一四三一……四九七
西山神社　〃　中央町金堀七六八……四九八

白山神社　久米郡中央町打穴上打穴里一七六五…　四九八
波多神社　〃　久米南町羽出木字東山八九六…　四九九
八幡神社　〃　栅原町塩気二二六……　四九九
八幡神社　〃　久米南町中籾一八四……　四九九
八幡神社　〃　久米南町全間一〇五〇……　五〇〇
八幡神社　〃　栅原町藤原一三九……　五〇〇
八幡神社　〃　旭町栃原四〇三……　五〇〇
八幡神社　〃　中央町大塀和西二八三……　五〇一
八幡神社　〃　旭町里一八二七……　五〇一
八幡神社　御津郡建部町福渡一一〇三……　五〇一
八幡神社　久米郡久米町南方中二七〇……　五〇二
八幡神社　〃　栅原町吉ヶ原七八〇……　五〇二
八幡神社　〃　旭町東塀和五〇七―二西塀和一……　五〇三
八幡神社　〃　中央町新城一五三……　五〇三
八幡神社　久米郡中央町打穴上打穴里一七六五…　四九八
八幡神社　〃　久米南町羽出木字東山八九六…　四九九
日高神社　〃　栅原町塩気二二六……　四九九
日吉神社　〃　久米南町中籾一八四……　四九九
藤和田神社　〃　久米南町全間一〇五〇……　五〇〇
二上神社　〃　栅原町藤原一三九……　五〇〇
摩賀多神社　〃　旭町栃原四〇三……　五〇〇
宮代神社　〃　中央町大塀和西二八三……　五〇一
籾山神社　〃　旭町里一八二七……　五〇一
築瀬神社　御津郡建部町福渡一一〇三……　五〇一
山尾神社　久米郡久米町南方中二七〇……　五〇二
飯岡神社　〃　栅原町吉ヶ原七八〇……　五〇二
連石神社　〃　栅原町飯岡四六九……　五〇七
和田神社　〃　栅原町連石一一〇三……　五〇七
八幡神社　御津郡建部町和田南一六四三……　五〇八
八幡神社　久米郡久米町宮尾八七七……　五〇三
八幡神社　〃　栅原町藤田上一〇六七……　五〇四
日高神社　〃　御津郡建部町和田南一六五八……　五〇四
日吉神社　久米郡久米町宮部上三一一……　五〇四
藤和田神社　〃　久米町領家八三四……　五〇四
二上神社　〃　中央町両山寺三八三……　五〇五
摩賀多神社　〃　中央町越尾一三一七……　五〇五
宮代神社　〃　中央町打穴上一一六七……　五〇六
籾山神社　〃　久米南町下籾九二二……　五〇六
築瀬神社　〃　旭町西川上七三〇三……　五〇六
山尾神社　〃　久米南町一色一八五……　五〇七
飯岡神社　〃　栅原町飯岡四六九……　五〇七
連石神社　〃　栅原町連石一一〇三……　五〇七
和田神社　御津郡建部町和田南一六四三……　五〇八

愛宕神社　旧無格社

久米郡久米南町里方一三

主祭神　軻遇突智命
例祭　八月二十四日　**境内地**　二三六・七五坪
主要建物　本殿
氏子数　二四戸　**崇敬者数**　八六人
宮司　塩島寿賢
責任役員　中島一郎　中島多喜夫
由緒沿革　古老の言に、京都愛宕に御鎮座の愛宕神社の御分霊をこの地に勧請したのが本神社の創建である。この故事によってこの地を愛宕山と呼び現在に至っている。同村鎮座の加茂神社の末社で鎮火の神として崇敬されている。

天津神社　旧村社

久米郡久米南町山城五五七

主祭神　天香々背男命　素盞嗚尊　大國主命　倉稲魂命　菅原神
例祭　十月二十二日
境内地　一、一七八・八七坪

主要建物　本殿　釣殿　拝殿
摂末社　龍神社　稲荷神社　高神社
氏子数　三〇戸　**崇敬者数**　一二〇人
宮司　塩島壽賢
責任役員　志茂利己　志茂　東
由緒沿革　古老の口碑によれば、本神社は志茂家の祖である城氏がこの地に住して朝日山に一祠を建立して、明見大明神を奉斎したのが、当神社の創建であるという。明治六年三月村社に列した。

稲岡神社　旧郷社

久米郡久米南町南庄五二

主祭神　神日本磐余彦命　伊弉冉尊　事代主命　大己貴命　稚産霊命外三神
例祭　十月二十一日
境内地　一、八二五・七四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫　随身門　石鳥居
摂末社　稲荷神社　岡本神社　胸像神社　建勲社
氏子数　一五〇戸　**崇敬者数**　五〇人
宮司　磯山裕守　**禰宜**　青北人見
責任役員　太田寿夫　青木哲也　松岡頼平
由緒沿革　創建年代は不詳だが、紀州熊野社から当地に勧請して南王子権現と称した。旧稲岡南荘は熊野三所権現の旧社領でゆかりが深い。（旧記によれば当神社には古くから修理田一町歩があった）宝暦四年、森対島守が宮を寄進、寛政元年土井大炊頭が屋根葺替をした。明治元年稲岡神社と改号。仝六年村社。仝四十一年熊野神社・若宮神社を合祀。大正二年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。昭和六年四月郷社列格。

稲荷神社　旧無格社

久米郡久米南町全間九六

主祭神　倉稲魂命
例祭　十月二十二日　**境内地**　五三〇・八三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　籠殿
氏子数　三五戸　**崇敬者数**　一〇〇人
宮司　本郷　甫
責任役員　平賀弥一　平尾千石
由緒沿革　口碑によると、元和年間、山城国伏見稲荷神社の御分霊を勧請創建した神社である。御鎮座地の字別所・柳・畝南を氏子とし、全間・山手地区を崇敬者としている。明治二十七年八月御本殿を改造。昭和五年四月幣殿・拝殿が竣工して今日に及んでいる。

磐柄神社　旧村社

久米郡中央町打穴北一一二四

主祭神　稚日女尊

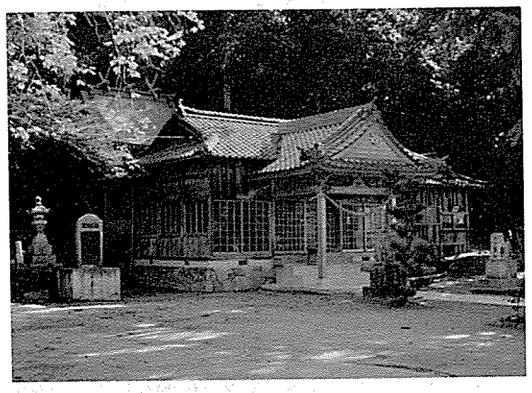
山と改称して御社殿を造築し、この石を奉祀した。これが本神社の創建である。古来郷内一の宮と称した。明治四十三年三月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

例　祭　十月十四日　**境内地**　三一四・一三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
氏子数　二三戸　**崇敬者数**　一〇人
宮　司　国米正之　**禰　宜**　青北人見
責任役員　松崎武夫　武中一夫　青木光男
由緒沿革　本神社は摂津国八部郡御鎮座の生田神社の祭神稚日女尊を祭祀する。本神社は和銅六年苦田の國府の長が百二十社の神として敬った一社である。寛文の頃は磐柄権現と称し、享保二十年頃から磐柄智明権現と称していた。明治六年に磐柄神社と改称し、村社に列格した。昭和五年十月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

磐筒神社（いわづつ）　旧村社

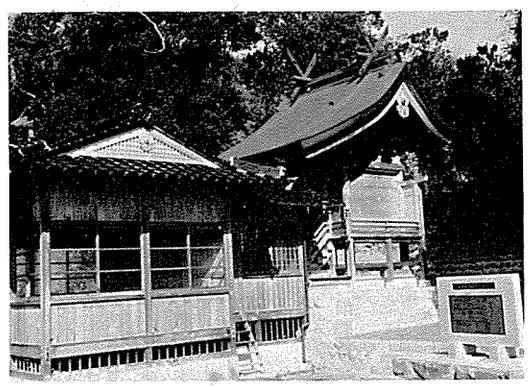
久米郡中央町頼元三二五

主祭神　上筒之男命　底筒之男命　瀬織津姫命
例　祭　十月十八日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所
摂末社　菅原神社　斎神社　水分神社　綿津見神社　愛宕神社外十社
氏子数　三〇戸　**崇敬者数**　一二〇人
宮　司　塩島寿賢
責任役員　磯山盛治　石井　恵
由緒沿革　和銅六年現在の地に御遷座したと伝えている。口碑によると、往昔神萬山の峯頂で笛を吹く音が一七日間もつづき、遂に神形が二、三の石と化し石笛の音を発したので、人々は奇異に思い、山の名を笛吹によると、吉が原部落から休石の地に農家を建設するに際して、吉が原の八幡神社から末社として素盞嗚尊を奉斎して荒神様と称してお祭りした。明治九年十二月、社号を大洗神社と改称した。



大宮（おおみや）神社　旧村社

久米郡栅原町百々六七一



上籾（かみもみ）神社

久米郡久米南町上籾七九九

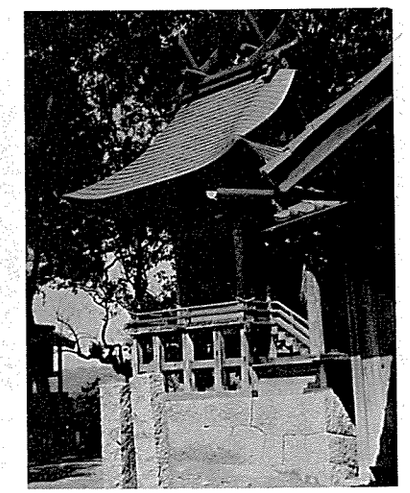
主祭神　天照皇大神（素盞嗚尊　伊邪那美命　豊磐間戸命　櫛磐間戸命）
例　祭　十月十八日　**境内地**　五〇〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　伊勢神社　遠佐津神社　春日神社　角神社　森神社　荒神社　斎神社　奥津神社
氏子数　七四戸　**崇敬者数**　三〇〇人
宮　司　小坂逸司
責任役員　石田農夫　山本　勉　治部俊郎　景山武夫
由緒沿革　昭和三十六年五月二十五日上籾地区の竜王山に御社殿を建立し、天照皇大神の御神霊を勧請して地区内鎮護の総産土神として斎祀した。昭和四十四年八月に今井神社・笹井神社を合祀し、更に同四十八年二月に門神社および幣代神社を合祀した。昭和五十一年十月にはもとの門神社跡に御社殿を改築して竜王山から御遷座し、奉斎している。

大洗（おおあらい）神社　旧無格社

久米郡栅原町休石二四五

主祭神　素盞嗚尊
例　祭　十月十五日　**境内地**　七一四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　龍王神社
氏子数　二十五戸　**崇敬者数**　三〇人
宮　司　瀧本靖夫
責任役員　森廣長三郎　森廣　強
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳であるが、口碑

主祭神　猿田彦命
例　祭　十月十六日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　神輿庫　随身門
摂末社　八坂神社　稲荷神社　祖霊社　少彦名神社
氏子数　一三〇戸　**崇敬者数**　三〇〇人
宮　司　瀧本靖夫
責任役員　矢吹圭司　山本孝雄　光島万一　浦上勘一
宝　物　古絵馬　古文書　制札
由緒沿革　本神社の創建は天平年間と伝えている。往古は御本殿三間四面で、正一位大宮惣道大明神と称え、杵杼神社となり、現在は大宮神社と称える。明和四年五月、領主仙石越前守の祈願所となり白銀二十枚の寄進があった。大祭礼の時には、八王子権現・三宮大明神・猿頭大明神の神輿が大宮に集る例である。境内には大御幸桜といって後醍醐帝が隠岐御遷幸の砌、叡覧せられたと伝えられている桜株がある。



責任役員　河原　実　富田親吾　富田節男
由緒沿革　口碑によれば崇神天皇五十三年六月に当地に疫病が流行して死者が続出した。為に仝五十四年三月に紀伊国名草浜宮から御祭神天照大日霊尊を奉遷した。ついで駿河国浅間神社から御祭神木花開耶姫命の御分霊を奉祀した。津山藩主森家による検地の際、社地は除地とされたと伝えられる。古来大山一王子権現と尊称したが、明治六年大山貴神社と改称した。

大山貴（おおやまたかの）神社

久米郡久米南町峠五九七

主祭神　天照大日霊尊外二柱（磐長姫命　木花開耶姫命）
例　祭　十月十三日　**境内地**　一四三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　籠殿
摂末社　稲荷神社　龍神社　二尊神社　素鷲神社
氏子数　一四戸
宮　司　在里　巍

興津（おきつ）神社　旧無格社

久米郡中央町上打穴里一八

主祭神　奥津彦命　奥津姫命

例　祭　十月二十七日　境内地　二〇八・三七坪
主要建物　本殿　参籠殿
氏子数　一八戸　崇敬者数　一〇人
宮　司　國米正之　禰　宜　青北人見
責任役員　国宗金弥　菅　弘親　津田尚明
由緒沿革　創建年代は詳かでないが、当神社氏子内の國宗・菅・友定氏等の祖先が勧請したという口碑がある。古来より鎮火守護の神として霊験あらたかである。現在の御社殿は國宗氏の祖山崎友三郎という人が、火難消除の立願をし自力で建立した。当人一代に著しい御加護を蒙った事実は今猶古老の語り伝える所である。爾来地方住民が篤く崇敬する御霊神である。

加茂神社（かも）　旧村社

久米郡久米南町里方六七六

主祭神　玉依姫命　大穴牟遅命　加茂建角身命
例　祭　十月十七日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫
摂末社　時切稲荷神社　御先神社　綿津見神社
氏子数　一〇五戸　崇敬者数　四二五人
宮　司　塩島寿賢
責任役員　光元二三男　中島一郎
由緒沿革　創建は天長八年と伝えられているが不詳。当時この郡の押領使神戸大輔漆間元国の子孫が世々本神社を崇敬して鎮守の神とした。元和三年、誕生寺住深誉和尚が本神社を再営した。

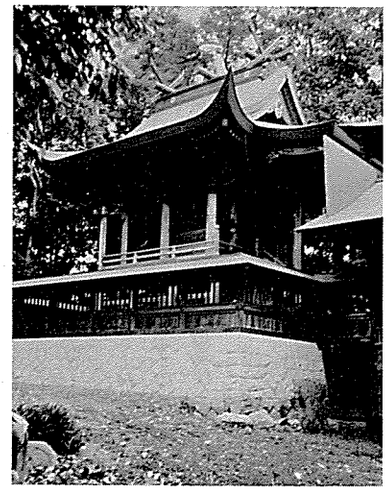
貴布禰神社（きふね）　旧県社

久米郡久米町桑上一九〇

主祭神　高龗神　闇龗神　外八柱
例　祭　十月十三日　境内地　七、六七四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　倉庫　社務所
摂末社　奥御前神社　外三社
氏子数　一六〇戸　崇敬者数　一、二〇〇戸
宮　司　為貞香苗
権禰宜　柳　二郎
責任役員　甲本博信　黒瀬志郎　松田秀夫
宝　物　棟札（四枚）天正、天明、安永年間
由緒沿革　本神社の創建は崇神天皇七年、倭香平治という者がこの地に加茂神社を勧請したものと伝えている。堀河天皇の寛治四年七月、美作国の河内庄倭文庄は賀茂の神領地となり、毎年神税を輸して競馬会に備えた。社号は倭文庄大宮、倭文郷総社といった。寛政年中には大宮貴布禰大明神と称し、後、大宮貴布禰狼犬神宮など称したが、明治六年貴布禰神社と改称。明治六年村社列格。仝十七年十月県社列格。明治二十一年改築。

北山神社（きたやま）　旧郷社

久米郡久米南町北庄三八七五



主祭神　速玉之男命　伊弉冉尊　事解男命　品陀和気命　菅原神　少毘古那神
例　祭　十月十五日　境内地　一、〇八五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿舎　宝物館
摂末社　水分神社　熊野神社　奥津神社　稲荷神社　國司神社　造化神社
氏子数　一二〇戸　崇敬者数　四八四人
宮　司　前　健　禰　宜　前　義朗
責任役員　森崎十七一　角田　寛　有元定之　菅原　始　福井敏之
宝　物　薬師如来像　狻　掛仏
由緒沿革　古来三所権現と称し、創建は口碑、中世の記録によれば文治年間紀伊の熊野本宮から勧請したものである。明治二年北山三社宮と改称し、更に同十年に村社北山神社と改めた。大正十三年一月郷社に列格。和名類聚抄によると、美作古社百十二社の内、賀茂郷の五の宮の一社である。本殿は元禄五年・昭和四十三年に、拝殿は大正十一年にそれぞれ再建した。

主祭神　保食神
例　祭　十月十五日　境内地　二三五坪
主要建物　本殿　拝殿　神輿庫
氏子数　六〇戸
宮　司　矢木登志夫
責任役員　岡田　昇　田辺　透
由緒沿革　創建年月は不詳であるが、古書によると、久保明見社と称し、明治四年七月四日の太政官布告に依り久保神社と改称した。明治十一年十一月七日存置願が許可となった。昭和三十四年八月三十日青木神社を本神社に合併した。

久保（くぼ）神社　旧無格社

久米郡久米町宮部下九八四

國司（くにし）神社　旧無格社

久米郡久米町宮部下一四四九

主祭神　大已貴命
例　祭　十月十五日
主要建物　本殿　拝殿　神輿庫
氏子数　四一戸

宮　司　矢木登志夫
責任役員　笹井喬史　藪木英夫
由緒沿革　創建年月日不詳。古書類によると、元、國主神社と称したが、明治四年七月四日の太政官布告により國司神社と改称した。明治十一年十一月七日存置願が許可となった。

熊野（くまの）神社　旧村社

久米郡久米南町塩之内三〇一

主祭神　伊弉冉尊
例　祭　十月二十五日　境内地　九一六・八七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　森神社　若宮　稲荷神社
氏子数　六一戸
宮　司　塩島寿賢
責任役員　片山隆光　片山美吉
由緒沿革　もと、若一王子権現と称し、社記に往昔当地に鬼神が顕れて人民を悩ましていることを庄司池大納言頼盛がこれを聴許され、当神社に祈り祭田を寄附し鬼神祭を執行したので鬼が消滅した。この故事によって現在まで旧正月三日に鬼追祭の神事がある。明治二年三月熊野神社と改称し、同六年二月村社列格、大正十年十二月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

厨（くりや）神社　旧郷社

久米郡久米南町上弓削二二四



主祭神　宇気母智命
例　祭　十月二十五日

境内地　二、九三八・六六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所
摂末社　斎神社　五行神社　柊神社　八坂神社　北野神社　大家神社　高下神社　長峪神社　宮前神社
氏子数　三〇〇戸　**崇敬者数**　九一二人
宮司　本郷甫　**禰宜**　本郷弘之　沼本秀夫　河原義美　森　正
責任役員
由緒沿革　本神社は和銅六年四月に弓削村池尻に御鎮座になり、弓削庄の二宮大明神と崇められ、弓削庄三社の一である。延宝五年九月、領主森長成の命により現在地に遷座した。作陽誌によると往古中山神社の御饌神として十五座三十名の宮座による特殊神事があった。本神社の氏子は旧弓削庄二十七か村であったが、現在では上弓削・下弓削・西山寺の三か村である。明治二年厨谷神社と称し、明治六年村社に列格して厨神社と改称。同十四年郷社に列格。同四十四年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

小原神社　旧村社

久米郡中央町小原八六六

主祭神　伊弉冉尊　伊弉諾尊　大己貴命　外相殿八神
例祭　十月二十一日　**境内地**　一、九三〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿

氏子数　一一〇戸　**崇敬者数**　四四〇人
宮司　塩島寿賢
責任役員
由緒沿革　本神社は、圓融天皇の御代に美作の国司が勅を奉じて紀州熊野三社を勧請したと伝えられている。中古の社は寛政年中の建立であったが、万治二年八月神主別当泰養寺が森長継の補助を得て再建した。明治六年村社に列し小原神社と改称した。現在の本殿は明治二十一年十月に。幣・拝殿は大正九年十月に建立した。大正十年十月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

小山神社　旧村社

久米郡旭町小山一五四

主祭神　倉稲魂命　天之御中主命
例祭　十月十四日　**境内地**　一、二〇五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
宮司　石田実夫
由緒沿革　山城国紀伊郡稲荷山から勧請したと伝える。昔は善覚社と称した。慶安年中に造営し、その後たび改築した。明治二年鶴田藩主松平武聰が崇敬してから幣帛料の献進があった。明治五年に小山神社と改称して村社に列せられた。

西幸神社　旧郷社

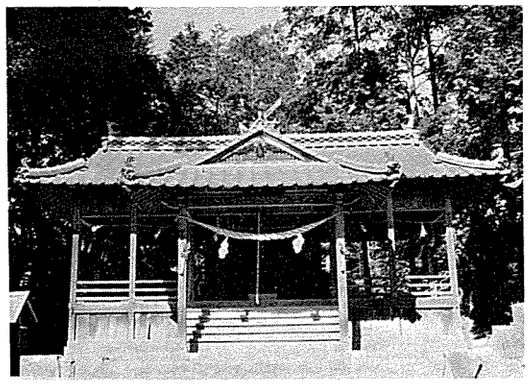
久米郡中央町西幸一七三〇

主祭神　少彦名命　大穴牟遅命　須勢理姫命　大山祇命　奥津彦命　句句廼馳命　八衢彦命　八衢姫命　奥津姫命　久那斗命　軻遇突智命　菅原道真卿
例祭　十月二十四日
境内地　一、九〇五・五〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　籠殿
摂末社　胸像神社　綿津見神社
氏子数　一〇〇戸　**崇敬者数**　四〇〇人
宮司　塩島寿賢　**禰宜**　塩島四郎
責任役員　重松三郎　塩島頼夫
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳。美作百十二社記・作陽誌等に依ると、本社は加美郷の総鎮守、近郷六か村の総社であった。上古の社号は不明であるが、宇喜多氏が祀職に関係してより王子権現と称し明治元年大宮三社といい、明治六年西幸神社と改称した。同年郷社に列格し、明治四十年五月、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

境神社　旧村社

久米郡中央町境一三七三

主祭神　素盞嗚尊外九柱
例祭　十月十日　**境内地**　二、〇一九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　随身門　社務所
摂末社　恵比須神社　倉稲魂神社　四社神社
氏子数　八〇戸　**崇敬者数**　三〇〇人
宮司　小坂逸司
責任役員　高木磐夫　奥村正行　日神山亀一　小林安治
特殊神事　宮ノ座　流鏑馬



由緒沿革　創建年代は不詳だが寛永十五年の再建という。古くから今宮牛頭天王、亀山天王と称したが、明治二年四月今宮神社と改称し更に、同六年二月境神社と改めた。慶長年間津山藩主森忠政公が馬、神田を献じて流鏑馬の神事を奉納した。それは古式に則り、今日に伝えている。昭和四十年二月二十四日、古来から伝承している獅子舞が県無形文化財に指定せられた。

榊葉神社　旧郷社

久米郡中央町打穴西六三四

主祭神　天児屋根命　須佐之男神　大地主神　菅原神外二十一柱
例祭　十月十日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　宇賀神社　乳呼神社　稲荷神社　荒神社　祖霊社
氏子数　二六七戸
宮司　磯山裕守　**禰宜**　井上功太
責任役員　石原美芳　定行敏雄　石原　進
由緒沿革　景行天皇の御代の創建といわれる。もと下打穴数村の大産土神である。天正年間、原田貞佐が造営した。安政三年卜部良熙から榊葉八頭大明神の下し文を受けた。明治六年七月郷社に列格。明治四十二年から四十三年にわたり荒神社九社・境外末社九社・無格社三十六社を合祀した。全四十四年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。拝殿は昭和五年改築。昭和五十二年に社務所を改築した。

定宗神社　旧村社

久米郡棚原町定宗一九九

主祭神　素盞嗚尊　奥津彦命　大山津見命　火産霊神
例祭　十月十五日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所
氏子数　二四戸　**崇敬者数**　八六人
宮司　塩島寿賢
責任役員　直原多作　上原　一
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳であるが、仝村本山寺（天台宗）の鎮守神で、国主森長継の崇敬が篤かった。明治四年現在の地に御遷座した。明治六年二月村社に列格。大正五年四月、無格社奥津神社を字堂の元から合祀した。

山王神社　旧村社

久米郡久米南町宮地五八〇

主祭神　山末之大主神　大己貴命　木花咲耶姫命外五柱
例祭　十月二十日　**境内地**　八五八・八〇坪

主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神門　社務所
摂末社　松尾神社　天満宮　伊都岐神社　荒神社
龍王神社　森神社　祇園神社　稲荷神社
氏子数　一〇五戸　**崇敬者数**　一〇〇人
宮　司　小坂　勇
責任役員　片山　保　近行　隆　田渕　勇
由緒沿革　むかしは山王大権現と呼んだ。宮地村粒木山の山頂に鎮座しておられた頃、旭川福渡八幡の瀬で舟筏の覆没することが多かったので人民は大変心配して占者に占わせたところが「従是里餘の北方山嶺に神あり、神位高く正にこの川に臨み神威霊顕犯すべからず、宜しく勝地を卜して速かに御遷座し奉るべし。」と言ったので当地にお遷しすることになった。ここには既に松尾大明神の一座があったので、山王両社と称え奉った。明治元年日枝神社と改称。更に同六年宮地神社と改め、松尾神社は境内神社とした。大正四年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。昭和十五年一月山王神社と復称した。

倭文神社　旧村社

久米郡久米町油木北三三二

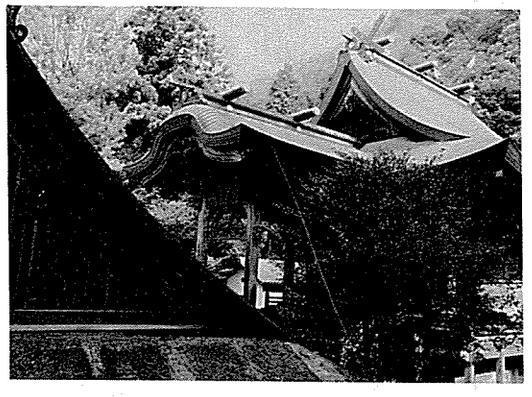
主祭神　天羽槌雄神　外八柱
例　祭　十月十三日　**境内地**　一、五一四坪
主要建物　本殿　釣殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所
摂末社　斎神社　外二社
氏子数　一四〇戸

主祭神　言代主命　外六柱
例　祭　十月二十日　**境内地**　四、五三八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　門客人社　神輿庫　社務所　神札授與所　宮司宅　警官屯所
摂末社　菅原神社　伊都岐神社　総神社　炊神社　建勲社　祖霊社
氏子数　四〇〇戸　**崇敬者数**　一、〇〇〇人
宮　司　日野宏哉
責任役員　高田　治　重近寛男　光延澄香　南　嘉男　田端元美　延江寿雄　大西新一　正分久夫
特殊神事　志呂神社御供―県指定重要民俗文化財　獅子舞・棒使―町指定無形文化財　頭文祭

志呂神社　旧県社

御津郡建部町下神目一八三四

宮　司　為貞香苗
責任役員　青草　凉　岸田　勇　鈴木種市　近藤　強　山田信種
宝　物　棟札四枚
由緒沿革　本神社の創建は不詳であるが、口碑によれば仁徳天皇の御代に祀られたという。倭文郷地主の神である。郷内二宮であり、倭文連等が養蚕および織絹を教える時の守護神であった。この地は山城国賀茂神社の神領地となっていた。嘉吉年中、山名教清が本神社を崇敬した。寛政年間領主の奏請によって神位は正一位に進んだ。天保十一年冬火災にあっている。



由緒沿革　口碑によると、和銅六年、苫田郡田辺郷の弓削建物部乙麿が居住地を美作中山神社に寄進し、長良嶽に祭られていた志呂神社を常山に創建したといわれる。後、貞治年中三樹山山頂に移し、嘉吉年中現地に移された。往古は志呂大明神と称し、俗に志呂宮と呼ばれた。本神社には「志呂神社御供」といわれる特殊な御供等がある。御本殿・末社天満宮は町指定文化財である。明治六年に郷社に列格。同十二年十二月に県社に列格した。境内山林を中心に十三町歩が県指定自然保護地域となったている。

菅原神社　旧村社

御津郡建部町川口三六七

主祭神　菅原大神
例　祭　十月十八日　**境内地**　八九四坪
主要建物　本殿　拝殿
摂末社　奥津神社　森神社
氏子数　六〇戸　**崇敬者数**　五〇人
宮　司　日野宏哉
責任役員　正分久夫　木村　始　河本亮一　菅　一雄
由緒沿革　嘉吉年中、西国主、赤松権太夫の守護神として創建せられたと伝えられている。赤松氏の滅亡後、天正八年赤松の家臣河本光利の子の光信が社殿を造営して再興した。もと大森天神と称したが、明治元年菅原神社と改称した。明治八年火災によって社殿・宝庫等を焼失し、同十二月に改築したのが現在の社殿である。本神社は延享二年迄は妙福寺、明治二年迄は妙泉寺が夫々別当職として奉仕した。

少彦名神社　旧村社

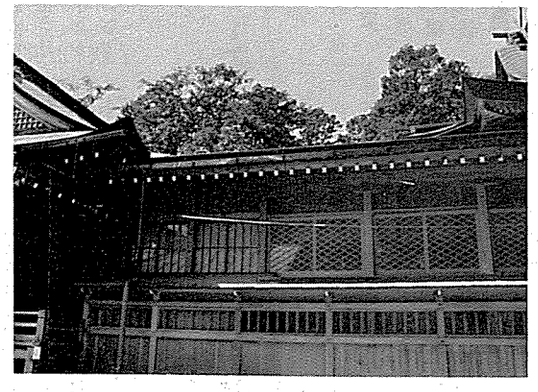
久米郡久米町油木北一六〇八

主祭神　少彦名神　外十五柱
例　祭　十月十三日　**境内地**　一、三三三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所　籠殿
氏子数　一七〇戸
宮　司　為貞香苗
責任役員　村上留治　須藤喜久　松岡正道　菅原　茂
宝　物　棟札四枚
由緒沿革　本神社の創建は不詳。寛治四年七月倭文荘の地が山城国賀茂神社の神領となり、毎年神税を輸して競馬会に備えた。当神社は倭文荘五社の一社であり、領主等の崇敬が篤かった。社号は赤子宮、赤子大明神児宮と称した。明治六年に油木神社と改称した。明治十年少彦名神社と改称。明治四十一年十二月氏子内無格社を合祀した。大正六年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

住吉神社　旧村社

久米郡栃原町大戸上七六三

主祭神　中筒之男命　外二柱
例　祭　十月十五日　**境内地**　九五八・〇四坪
主要建物　本殿　拝殿　幣殿　神輿庫　随身門　社務所
摂末社　国司神社
氏子数　五八戸
宮　司　家本昭三
責任役員　直原　達　湯浅隣夫
由緒沿革　創立年月日は不詳。ある書に和気宿奈が備前・美作の国造であった頃、藤原に八幡宮を祀り、大戸に住吉宮を祀ったと伝えている。口碑によれば、元徳の頃大戸轟の城主入江弾正が当神社を氏神として尊敬し社領地若干を寄附している。今の本殿は萬治二年の建立である。明治六年住吉神社と改称。大正十年十二月、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。



諏訪神社　旧村社

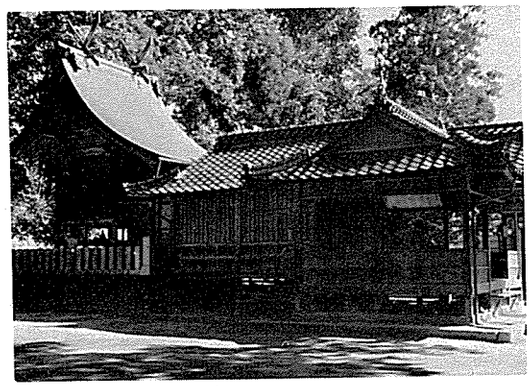
久米郡中央町原田九一八

主祭神 建御名方命他十五社（伊邪那岐命　天照大神　宇迦之御魂命　猿田彦命　天羽槌雄命　天宇受賣命　奥津彦命　天児屋根命　天太玉命　誉田別尊　泉津事解之男命　速玉命　表津少童命　中津少童命　底津少童命）
例祭 十月二十五日
境内地 一、二七六・四二五坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　神饌所　楽舎　神輿庫　参籠殿　社務所
摂末社 御先神社　建勲神社　車戸神社　鈴神社　七五三神社　雨水神社　若宮（祖霊社　金刀比羅宮）
氏子数 三〇〇戸
宮司 磯山裕守
責任役員 荒田幸雄　本松　稔　杉山多喜夫　江原金治郎
宝物 旧記　棟札
由緒沿革 本神社の創建年代は不詳。和気氏の祖先が当国の国造となった際、当地の日南山を撰んで八幡宮を祀って尊信した。降って、城主原田三河守貞佐の祖先が甲斐国磯山城に居住の時に信仰した。信州の諏訪明神の分霊を奉祀して諏訪八幡宮と称して崇敬した。後年、森、松平藩主を始めとして地方民の尊崇した神社である。明治六年に村社に列した。明治四十二年に原田神社外四神社を合祀して諏訪神社と改称した。

素鷲神社（そが）　旧村社

久米郡久米南町松七六〇

主祭神 建速須佐之男神　大穴牟遅神　少名毘古那神
例祭 十月二十四日
境内地 一、一五九・五七坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所
摂末社 御先神社　伊勢神社　塩竈神社　多賀神社　熊野神社　外七社
氏子数 五三戸
宮司 小坂逸司
責任役員 葛原清一　中島　清　高島　栄　清水一月
崇敬者数 三〇〇人



由緒沿革 本神社は播磨国広峰神社の分霊を勧請し、その創建は長保年間とも寛仁二年とも伝えられるが、明暦三年六月の雷火により、旧記を焼失したため不詳。旧社号は祇園牛頭天王と称したが、明治二年素鷲神社と改称した。万治三年社殿葺替、享保、明和、天保、嘉永年間に造営があった。明治六年村社列格。大正十一年三月、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。昭和七年から十年に亘り模様替等を行い、今日に至っている。

高井神社（たかい）　旧村社

御津郡建部町川口二七二〇

主祭神 伊弉冉尊
例祭 十月十八日
境内地 九三四坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　参籠殿
摂末社 奥津神社
氏子数 四五戸
宮司 日野宏哉
崇敬者数 五〇人
責任役員 河本　由　古元誠一郎　河本　護　古元佶
由緒沿革 寛弘年中、豪族菊名四郎定勝の創建と伝えられている。もと、高位谷権現、十二社権現と称し、明治元年、高井神社と改称した。明治六年村社に列せられた。当町豊楽寺にある正平七年の文書に本神社の各田が記載されている。明治四十二年境内の経塚から七種の埋蔵物が出土し、東京国立博物館に収蔵されている。

主祭神 素盞嗚尊
例祭 十月十五日
境内地 八八七坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿
摂末社 荒神社
氏子数 三〇戸
崇敬者数 三〇人
宮司 瀧本正大
責任役員 赤堀桂助　水島信雄
由緒沿革 社伝によると、天正年間、備前国延原弾正の家臣の山本権内が当神社に仕えてから、当神社の鍵を取り来ったという。山本権内は曽根畑に葬り、その塚は現存している。当神社は従来、湯郷村の鷺神社の摂社であったが、明治十四年二月、村社に列格せられた。

高尾神社（たかお）　旧村社

久米郡栃原町吉留一五九

主祭神 素盞嗚尊
例祭 十月十五日
境内地 八八七坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿
摂末社 荒神社
氏子数 三〇戸
崇敬者数 三〇人
宮司 瀧本正大
責任役員 赤堀桂助　水島信雄
由緒沿革 社伝によると、天正年間、備前国延原弾正の家臣の山本権内が当神社に仕えてから、当神社の鍵を取り来ったという。山本権内は曽根畑に葬り、その塚は現存している。当神社は従来、湯郷村の鷺神社の摂社であったが、明治十四年二月、村社に列格せられた。

高津神社　旧郷社

久米郡久米町里公文一五二四

主祭神 大日霎貴尊外十四柱
例祭 十月十七日
境内地 四、五二八坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所　絵馬殿　随身門
摂末社 稲荷社
氏子数 二四五戸
宮司 為貞香苗
責任役員 甲本　勲　今井逸信　榎本　稔　飯田敏夫　福島定良
宝物 棟札五枚
由緒沿革 創建不詳。伝説によると、仁徳天皇の元年正月十七日、大日霎貴尊を祀り、社号を高津、鎮座地を南葉山十善岡とよんだのは当時の帝都の名に因んだのだと。また、堀河院の御代に山城国賀茂大神宮の神領地となった時に、賀茂大神を勧請したとも伝える。国主領主の崇敬が篤く、天正二年毛利輝元が本神社を再建している。文化二年に社号を高津大神宮と称した。明治維新後、高津神社と改称。明治六年二月郷社列格。仝四十年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

高比野神社（たかひの）　旧郷社

久米郡栃原町安井二八五

主祭神 高龗神　相殿・素盞嗚尊　木花咲耶姫命　伊邪那美命　速玉男命
例祭 十月十六日
境内地 三、二七九坪
主要建物 本殿　幣殿　拝殿　神饌所　社務所
摂末社 奥津神社　荒神社　稲荷神社
由緒沿革 継體天皇の元年春、高篠山に奉鎮した。後柏原天皇の大永二年四月移転奉安し、前社地を古高篠、現社地を高篠といった。社号は高篠天皇宮、高篠天王と称した。明治五年郷社に列し、高比野神社と改称した。明治四十一年十二所神社外三社を合祀し境内神社奥津神社に五社を合祀した。明治四十四年十月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

高山神社　旧村社

久米郡栃原町高城八八九

主祭神 素盞嗚尊
例祭 十月十五日
境内地 六一四坪
主要建物 本殿　拝殿　幣殿　社務所
摂末社 天戸神社
氏子数 九〇戸
宮司 門野幸得
由緒沿革 本神社の創建は不詳。備前赤磐郡山方村の宗形神社の摂社であった。宗形神社が是里村の氏神であったので、当社は美作山之上村の氏神とした。もと、奥宮と称し、中古高山宮と号した。慶長八年森忠政が崇敬して社領若干を寄進した。明治初年に高山神社と改称し、仝六年に村社に列格した。

龍川神社（たつかわ）　旧村社

久米郡久米南町上二ヶ三二二

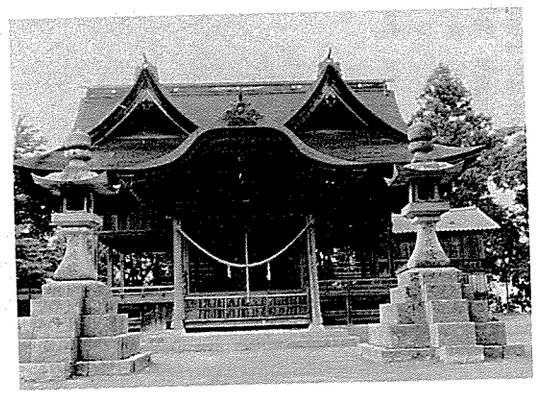
主祭神 大日霎貴神

例　祭　十月十九日　境内地　二九四・三三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　忠春神社　伊都岐神社　天満宮　志女神社
氏子数　一六〇戸　崇敬者数　三五〇人
宮　司　本郷　甫
責任役員　清水　潔　長谷川時夫　直原正一　梶谷英幸
由緒沿革　創建年代は不詳だが、口碑によれば建仁年間の建立と伝えている。明治四十三年若宮神社外三十九社を合祀した。翌年龍山村中叡から現社地に奉遷した。大正五年社地御社殿を改造築した。昭和十七年九月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。当神社は倉尾神社と奉称していたが、昭和四十二年龍川神社と改称した。昭和五十一年幣・拝殿を改築した。

塚角神社　旧郷社

久米郡栅原町塚角一四五

主祭神　素盞嗚尊　外五柱
例　祭　十月十五日
境内地　二、四〇三・八四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　祈禱殿　随身門　社務所　参籠所　神輿蔵　釣殿　神供所
氏子数　二七〇戸　崇敬者数　二〇〇戸
宮　司　横林重美
責任役員　浅村　尚　礒山末男　中原誠志　表田文治　小田一郎　牛房栄治　治徳　覚



宝　物　勅額・上山牛頭天王（延宝四年持明院宰相藤原基時卿真筆）
特殊神事　亥の子祭（旧歴十月亥の日）
由緒沿革　本神社は上山牛頭天王、上山堀江神社、上山神社等と称した。天文九年以前は記録のないため不詳である。国主森大内記長継公が大祈願のため本殿等を改築寄進して御神徳を発揚せられ、代々の城主も崇敬せられた。本神社は特に農作・疫神除けの神として農民の崇敬をうけ、広く美作一円から亥の子まつり（旧暦十月亥の日）に参拝する風習は現在でも尚残っている。

鶴坂神社　旧郷社

久米郡久米町坪井下一五七七

主祭神　大日霎貴尊　譽田別尊　外十七柱
例　祭　十月十六日　境内地　一、七三六坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫
氏子数　三二〇戸
宮　司　矢木登志夫
責任役員　北　正三　川西　智　太田実夫　西尾清治　実成久夫　福島増夫　牧原都志男
由緒沿革　本神社は往古から久米郡北部の産土神として尊崇篤く、美作國百二社の一社である。始め、大井庄中北下三高山に鎮祀し、永享七年髻山に奉遷した。寛永元年、社殿宝物等が火災によって悉く炎上したので、元弘四年後醍醐帝が隠岐へ御遷幸の砌、鶴坂山の頂上に休息せられた跡に寛永二年九月勧請したのが現在の本殿である。もと吉村神社と称したものを鶴坂神社と改称した。

主祭神　天忍日命

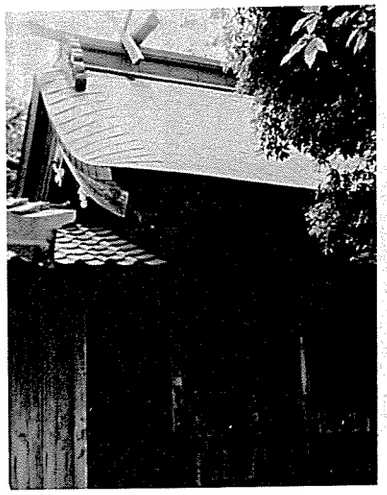
天神社

久米郡久米町宮部下一四五二

例　祭　十月十五日　境内地　四九坪
主要建物　本殿
宮　司　矢木登志夫
由緒沿革　創建年月日由緒等不詳である。

峠神社　旧村社

久米郡久米南町峠三二五



主祭神　阿波良和命　外一柱
例　祭　十月十三日　境内地　六〇一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　素鵞神社　興津神社
宮　司　在里　巍

責任役員　重松秋太　正分信義　畝木元平
由緒沿革　和銅六年分国の際、峠の土地を二分し、美作に属した土地に若一王子権現と称して創立したと伝えられている。森家が当地の領主の時、当神社に課税しようと七回も調査したが、調書は悉く白紙に変じたので、神山であるといって除地としたという。明治二年六月、手向大神宮と更め、更に明治六年二月峠神社と改称した。

刀八神社　旧村社

久米郡旭町中一五八七

主祭神　経津主神　武甕槌神
例　祭　十月十六日　境内地　二四〇坪
主要建物　本殿　拝殿　神輿庫　社務所
氏子数　八十五戸
宮　司　矢木登志夫　杉次男　岩永信夫　及平
責任役員　矢木友平
由緒沿革　本神社は創建年月日は不詳であるが、山手地内の古社で山手一の宮と尊称し、往古都鉢宮と称した。応永年間に赤松家の臣江原氏が氏神として尊崇し、その子孫江原兵庫助親次が天正十四年十一月に現在地に本社を修造した。社号は天明年間から十鉢大明神と称え、寛文年中から刀八大明神と改称した。元治元年炎上し、明治九年再建した。明治四十年五月神饌幣帛供進神社に指定せられた。

徳尾神社　旧村社

久米郡旭町西川上八九〇

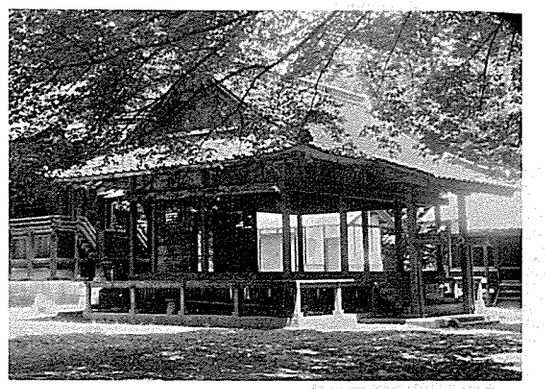
主祭神　彦火火出見尊
例　祭　十月十二日　境内地　六〇三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　輿庫
摂末社　杉尾神社
氏子数　一一五戸　崇敬者数　五〇〇人
宮　司　矢木　久
責任役員　片山善一　神田英雄　二枝　明　高倉賢壽　大崎古市　河本哲夫　高平徳男
由緒沿革　本神社の創建は不詳。宝永元年領主徳川綱豊の崇敬によって御本殿一宇を再建した。造営奉行代官近山清兵衛の棟札が現存する。享保十七年、代官萬年長十郎が御本殿屋根を修理した。昔から正一位徳尾大明神と称した。維新以後徳尾神社といい、明治六年村社に列格して奥山神社と改称し、さらに徳尾神社と改めた。明治四十二年簗瀬神社外二社を合祀。大正四年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

錦織神社　旧郷社

久米郡中央町錦織中山一四三一

主祭神　素盞嗚尊　外十二社

例　祭　十月十日　**境内地**　三、〇二七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　社務所
摂末社　御先神社　栲幡千千姫神社　稲荷神社　荒神社
氏子数　一一〇戸　**崇敬者数**　四〇人
宮　司　国米八洲男
責任役員　友広公市　湛増　泰　内藤亮二
宝　物　津山藩主森公拝領の硯箱・硯　御輿・豊長公一千年祭記念の巻物



由緒沿革　本神社の勧請年月日不詳。元禄四年の国主森長成の作陽誌には秦氏の祠としている。秦氏は世々この邑に住み錦を織って貢いだ。もと、字古宮の地にあったが、寛文七年森長継の臣喜代須源右衛門が主命によって今の中山へ奉遷した。明治元年錦織神社に復した。明治六年村社。同十一年二十一社を合祀。明治四十年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

西山神社　旧村社

久米郡中央町金堀七六八



主祭神　素盞嗚尊　大山祇命
例　祭　十月二十七日　**境内地**　四七七坪
主要建物　本殿（春日造）　釣殿　拝殿　神輿庫並参籠所
摂末社　稲荷神社
氏子数　二十八戸
宮　司　礒山裕守
責任役員　山本岩太郎　中道　尚　赤木　保　岡本久伍　横部　栄　山本高男　赤木久夫
由緒沿革　本神社は享徳元年の創建で、往古は高神または荒神社と奉称した。元文年中の雑書綴の中等には美作国稲岡北御庄北方大谷西山荒神とあり、寛延三年の神道裁許状、宝暦十三年の寺社境内建物帳に西山荒神とある。明治六年三月に西山神社と改称し、村社に列格した。明治四十二年九月五日に東山神社を合祀した。

白山神社　旧村社

久米郡中央町打穴上打穴里一七六五

主祭神　伊邪那美命
例　祭　十月十五日
境内地　一、三一〇・七五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　稲荷神社　天香々背男神社　大山祇神社
氏子数　三二戸　**崇敬者数**　二〇人
宮　司　國米正之　**禰　宜**　青北人見
責任役員　福井　淳　岡本　猛　葛原　栄

由緒沿革　本神社は一条天皇の御代に打穴太郎重長という者が加賀国白山権現から御分霊をこの地に奉祀したものであると伝える。王子白山権現宮と称した。文安年間火災に罹り建物全部焼失した。御神体のみ難をまぬがれた。後、御社殿を現在の処に遷し再建した。社殿は宝暦年間の再建である。明治六年村社に列格した。昭和五年十月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

波多神社　旧郷社

久米郡久米南町羽出木字東山八九六

主祭神　速玉之男命　外二柱
例　祭　十月二十五日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神供所　籠殿　神輿庫　社務所　随身門
摂末社　八幡神社　大日霊神社　稲荷神社　素盞嗚神社　祖霊社
氏子数　三三戸　**崇敬者数**　一、〇〇〇人
宮　司　家本昭三
責任役員　横部茂夫　家本　基
由緒沿革　本神社は斉明天皇の御宇の鎮座と伝えられ、畑三社権現と称した。延宝二年九月建立したのが今の社殿である。宝永二年・文政十年・天保四年・嘉永二年・明治十一年・明治三十八年・昭和四年に本殿の屋根を葺替えた。本神社は一般及び武門の崇敬が篤く、旧藩主等の寄進奉納の例が多い。明治六年波多神社と改称、村社に列し、大正八年四月神饌幣帛料供進神社に指定せられ、大正十三年六月郷社に列格した。

八幡神社　旧村社

久米郡栅原町塩気二二六

主祭神　譽田別尊　大己貴命　少彦名命
例　祭　十月十七日　**境内地**　二四八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　荒神社
氏子数　四〇戸　**崇敬者数**　三〇人
宮　司　瀧本正大
責任役員　岡田稲夫　立石恒夫
由緒沿革　創建年月日不詳。明治六年に村社列格した。

八幡神社　旧村社

久米郡久米南町中籾一八四

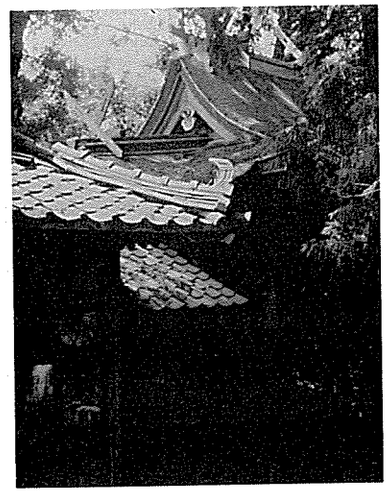
主祭神　譽田別尊　大己貴命　少彦名命　素盞嗚尊
例　祭　十月十九日
境内地　一、〇一五・一五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　随身門　社務所
摂末社　赤神社　斎神社　若宮神社　金比羅神社　龍神社　森神社　平和神社
氏子数　五〇戸　**崇敬者数**　三〇〇人
宮　司　小坂逸司
責任役員　赤木三郎　今井忠美　杉山　潔　藤田　繁



由緒沿革　神護景雲二年譽田別尊の御神霊を勧請して産土神として奉祀したと伝えている。大永年中、幷和郷高城山城主幷和為長が当神社を崇敬し御本殿を造営山林を寄附している。また慶長八年には森家が本神社を崇敬し、舞鶴家紋附提灯壱対と幕一張とを奉納している。明治十九年九月二十一日八幡神社と改称した。昭和九年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

八幡神社　旧村社

久米郡久米南町全間一〇五〇



主祭神　譽田別尊　天児屋根命　外十柱
例　祭　十月二十二日　**境内地**　三六七・七七坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　籠殿　神輿庫
摂末社　天満神社　興津神社　素鷲神社　中山神社
木山神社　斎神社
氏子数　四六戸
宮　司　在里　巍　**禰　宜**　在里幸宗
責任役員　在里　覺　森脇藤雄　岩本正司
由緒沿革　本神社の創建年代は不詳であるが、口碑によれば全間村開拓の当時の和銅年間に、宇佐八幡宮から御分霊を勧請したと伝えられている。往昔から田中八幡宮と称え、全間村の氏神であった。明治四十五年六月、春日神社を合祀した。

八幡神社　旧郷社

久米郡栃原町藤原一三九



主祭神　譽田別尊　外二柱
例　祭　十月十六日
境内地　二、一九〇・七二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神饌所　社務所　廻廊
摂末社　宮脇神社
氏子数　三〇〇戸　**崇敬者数**　五〇戸
宮　司　横林重美
責任役員　藤原勲平　鈴鹿正二　鈴鹿　等　石戸宇一
由緒沿革　創建年代は詳かでないが、御鎮座地藤原は吉井川の右岸に沿い、備前・美作国の境界に接しており、むかし備前、美作分国以前は東備の中央に位置していた名邑である。往時津山から参勤交代する要地であった。永禄六年荒神山城主の藤原伊賀守行重が御社殿を再建した。慶長八年森忠怨が神饌を奉献。元禄四年森長成が神饌を奉献。天明元年大久保加賀守が社殿を葺替された。

八幡神社　旧村社

久米郡旭町栃原四〇三

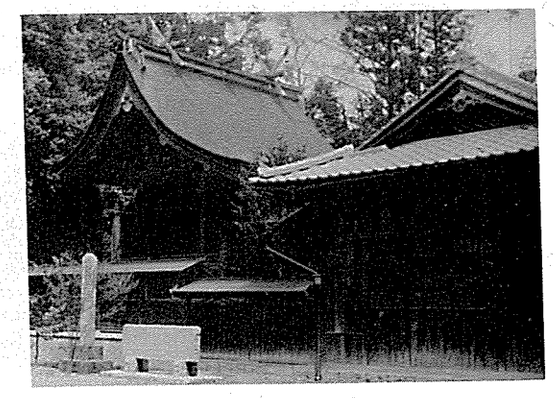
主祭神　足仲彦命　譽田別尊　気長足姫尊　大己貴命　外十柱
例　祭　十月十日
境内地　二、九八六・七〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿蔵　社務所
摂末社　諏訪神社　伊都岐神社　愛宕神社
氏子数　一三二戸
宮　司　森原照次

責任役員　井上義光　氏平芳方　氏平　親　朝島　基
由緒沿革　本神社の旧記等は焼失し創建の次第は不詳であるが、口碑によると貞観年間、山城国男山八幡宮を栃原に勧請し八幡宮と称し、谷村・畝村・上口村の氏神としたという。正和年中栃原亀山に御遷座し奉った。慶長年間に再建。寛永十七年に営繕。元禄十年再建。明治六年八幡神社と改称した。明治十三年現在の本殿を再建。明治四十二年六所神社外八社を合祀した。

八幡神社　旧郷社

久米郡中央町大垪和西二八三

主祭神　譽田別尊　足仲彦命　息長帯比賣命　武内宿禰命
例　祭　十月十五日　**境内地**　二、二六一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫　神楽殿
摂末社　倉稲魂神社
氏子数　一三七戸　**崇敬者数**　五〇〇人
宮　司　宗藤千尋
責任役員　宗藤延太　阿井覚男　大王丸治郎　宮尾隼人
宝　物　県指定重要文化財・獅子頭　棟札　神鉾
神鏡
由緒沿革　作陽誌によると、むかしこの地の豪民等が八幡大神の御神託を蒙り、祠宇を建設しようとして、適地を探したが見つからなかった。ある日、大垪和山で衣冠の翁が鍬柄に跼っているのに遇った。その老翁は「この山清霊宜しく社地となすべし」と言い終って、こつ然と姿を消すということがあった。そこでその地に社殿を築いたという。また、口碑によれば、應神天皇の後裔の芳賀彦命がこの地に来て、人民を撫育し御社殿を築き、譽田別尊を奉祀し、大山神社と名付けられた。明暦年間社殿を造営した。明治四十年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。同四十二年伊勢神社外五十一社を合祀した。



八幡神社　旧村社

久米郡旭町里一八二七

主祭神　譽田別尊
例　祭　十月十五日　**境内地**　一、二四七坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿　社務所　神輿庫
摂末社　若宮神社　綿津美神社　美保神社　劔霊神社
氏子数　六十戸　**崇敬者数**　四五〇人
宮　司　矢木　久
責任役員　前原官一　森本　実　大倉　博　杉　五郎
松本郁治
由緒沿革　本神社の創建は天文年間に豊前国宇佐八幡宮の御分霊を勧請した。村内中山手・里山手・公文南の氏神として崇敬している。中山手城主の江原兵庫祐親が御神体・厨子を奉納した。慶長年間豊臣秀吉が朝鮮征伐の際、剣一腰を奉納した。明治三十三年湯田国有林一町歩の払下げをうけ境外地とした。明治四十年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。全四十二年氏子内九社を合祀。昭和八年に社務所を新築した。

八幡神社　旧村社

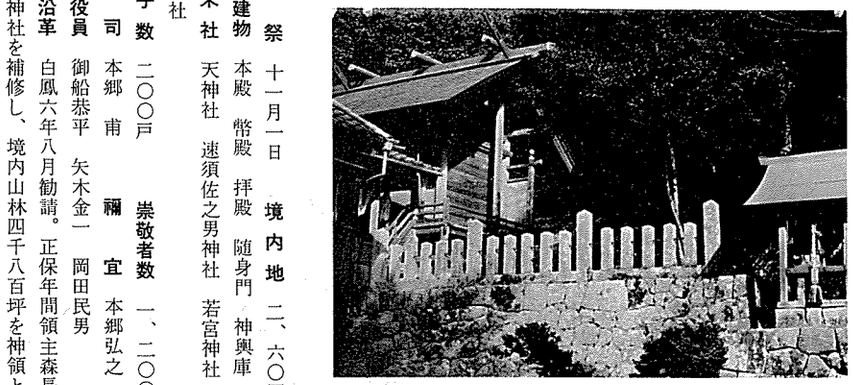
御津郡建部町福渡一一〇三

主祭神　譽田別尊

二月、村社に列格した。

八幡神社　旧村社

久米郡久米町南方中二七〇



例　祭　十一月一日　**境内地**　二、六〇四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　随身門　神輿庫
摂末社　天神社　速須佐之男神社　若宮神社　恵美須神社
氏子数　二〇〇戸　**崇敬者数**　一、二〇〇人
宮　司　本郷　甫　**禰　宜**　本郷弘之
責任役員　御船恭平　矢木金一　岡田民男
由緒沿革　白凰六年八月勧請。正保年間領主森長継公は本神社を補修し、境内山林四千八百坪を神領と定め免税とした。その後、伏見宮・村雲宮両御所の御祈願所に定められ、菊花紋章付桃灯一対を寄進せられた。明和年中から菊花紋章の使用を允許せられ、瑞垣門築造の際、箱塀に築造することを聴許された。明治六年

八幡神社　旧村社

久米郡久米町南方中二七〇



主祭神　譽田別尊　保食命　素盞嗚尊
例　祭　十月十五日　**境内地**　九三〇坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫
摂末社　伊都岐神社　天満神社　荒神社
氏子数　二一〇戸　**崇敬者数**　一、〇〇〇人
宮　司　宮尾　旭
責任役員　西谷明正　林原宇一　山本　登　池田　弘
藤本文治郎　池田　恵
宝　物　刀剣一振
由緒沿革　本神社の御創建年代は詳かでないが、もと、折居八幡宮と呼んだ。郡内屈指の古社である。寛平四年再建立したという。慶安四年十一月の火災で神器旧記は悉く焼失した。寛文元年に仮宮を再建し、元禄二年九月および正徳三年八月、元文二年五月、建立修繕して今日に至っている。明治十二年九月村社に列格した。大正四年十月、村内の八坂神社・稲荷神社を合祀した。

八幡神社　旧村社

久米郡栅原町吉ヶ原七八〇

主祭神　譽田別尊　天児屋根命　息長帯比売命　武内宿禰命
例　祭　十月十五日　**境内地**　六四二坪
主要建物　本殿　釣殿　拝殿
摂末社　天神社
氏子数　二八〇戸　**崇敬者数**　三〇〇人
宮　司　瀧本靖夫
責任役員　岡上吉宏　波賀光男
由緒沿革　勧請年月日は不詳。口碑によると、初めは

五社の窪と称した処に勧請したが、永禄二年二月社殿が火災のため焼失した。御神体は八町余り離れた杉の大木の下にあるのを発見し、そこに御社殿を建立したという。これが現在の地である。天正元年八月、拝殿を、慶長十六年本殿・拝殿を、元禄七年十一月社殿を、昭和十三年九月社殿を建立した。



八幡神社　旧村社

東畔和五〇七―二
久米郡旭町
西畔和一

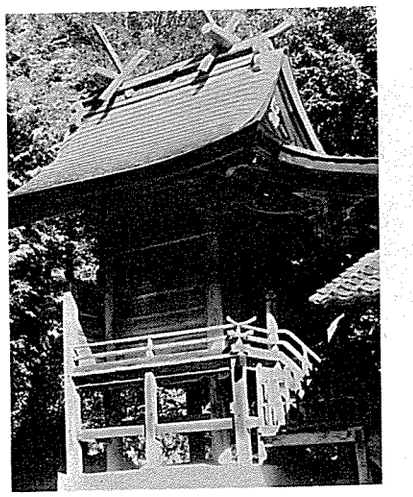
主祭神　品陀和気命

例　祭　十月十日　**境内地**　一、七二九坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　籠殿
摂末社　宮比神社　伊都岐神社　英霊社
氏子数　二〇〇戸　**崇敬者数**　一、〇〇〇人
宮　司　久　**禰　宜**　矢木康敬
責任役員　大原秀一　黒瀬周治　草地　豊　村上麿貴雄　土山　守　重藤久一　遠藤実雄　福本義正
宝　物　太刀二振　鏡一面
由緒沿革　本神社の創建は寛治四年山城国男山八幡宮の御分霊を奉斎したのに始まるという。西塀和・東塀和・通谷の氏神である。天正十四年再建。延宝四年修繕。現在の御炎上した。天正十四年再建。延宝四年修繕。現在の御社殿は天保十四年再建のものである。明治六年村社列格。明治四十二年御前神社外十一社を合祀した。大正四年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。大正五年拝殿を改築し、昭和四十九年社務所を改築した。

八幡神社　旧村社

久米郡中央町新城一五三

主祭神　譽田別尊　奥津彦命　句句廼馳命　大山祇命
例　祭　十月十七日　**境内地**　一、〇一八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　参籠殿
摂末社　斎神社　八阪神社　塞神社　須女神社　稲荷神社
氏子数　五十三戸



宮　司　塩島寿賢
責任役員　池上義一　池上　巌　池上良一
由緒沿革　本神社の創建は火災のために建物・書類等焼失したので不詳であるが、現存する木札に「御当社勧請古天安二己寅九月十八日鎮座奉…」とある。本神社は維新前正八幡宮と称し、新城・金堀の産土神である。明治四年八幡神社と改称。明治四十二年経王神社外四社を合祀した。昭和八月、九年拝殿を改築、幣殿を新築した。同九月、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

崇敬者数　二一五人

八幡神社　旧郷社

久米郡久米町宮尾八七七

主祭神　応神天皇　仲哀天皇　神功皇后

例　祭　十月十五日　**境内地**　三、二五四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　神輿庫　籠殿
摂末社　御先神社　総領神社　高良神社　塞坐神社
氏子数　二〇〇戸　**崇敬者数**　一〇〇人
宮　司　近藤強志
責任役員　定平　康　原野孝男　池田　衛
由緒沿革　本神社の創建は仁寿元年九月十五日と伝える。豊前国宇佐八幡宮から御神霊を勧請した。当時五カ村の氏子で四月十五日に御田植祭、九月十五日に大祭を執行して五体の神輿で御神幸を行い、流鏑馬を奉納し、霜月十五日には御柱祭を行った。往時兵火にかかって社殿が悉く焼失したが、森侯が再建されたと伝える。

八幡神社　旧村社

久米郡櫛原町藤田上一〇六七

主祭神　譽田別尊　足仲彦命　息長帯比賣命　少彦名命　素盞嗚尊　天照大神　久須毘命　天児屋根命　猿田彦命
例　祭　十月十五日
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　稲荷神社　粟島神社　祖霊神社
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳である。明治六年村社に列格し、昭和二年神饌幣帛料供進神社に指定せられた。昭和二十五年五月、神社、神社境内地譲興となる。

日高神社　旧村社

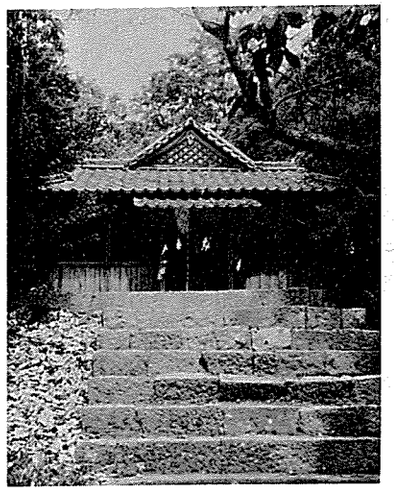
御津郡建部町和田南一六五八

主祭神　産火出見尊　火明命　火須勢理命　外二神
例　祭　十月九日　**境内地**　一、六七四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　釣殿　随身門　社務所
摂末社　奥宮　岸田神社　外三社
氏子数　十二戸
宮　司　森原照次
責任役員　藤井和芳　大倉章江　岸田英治
由緒沿革　本神社は白鳳二年紀州由良上人が明見大神大国主命・事代主命を勧請し不老山明見宮と称した。長久三年但馬国式内社粟鹿神社から彦火火出見命・火明命・火須勢理命を勧請した。明治三年不老神社と改称した。同十二年九月村社。明治四十三年氏子中の大戸神社を合祀した。大正十三年十一月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

日吉神社　旧無格社

久米郡久米町宮部上三一一

主祭神　大山祇神　外二柱
例　祭　十月十五日
境内地　一〇五・〇六五坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿
摂末社　荒神社　三保神社
宮　司　河原太津彦
由緒沿革　本神社の創建年月日は不詳である。土地の伝説によれば、この地にあった岩屋城の一城塞の守護神を城趾に奉祀したのに始まり、後に山麓に移してこの下地下部落の守護神として現在に及んでいる。古例として秋祭には神輿を奉じて山上に御幸することになっている。



藤和田神社　旧村社

久米郡久米町領家八三四

主祭神　伊弉諾尊　伊弉冉尊　菅原神
例　祭　十月十五日　**境内地**　四七〇・七五坪
主要建物　本殿　幣殿　釣殿　拝殿　倉庫
摂末社　車戸神社　御先神社
氏子数　七八戸　**崇敬者数**　三五〇人
宮　司　礒山裕守
責任役員　小山丈夫　真名子寛　太田春夫　井上範雄　矢木輝雄　大寺　巌
由緒沿革　本神社は正暦四年八月の創建で、近江国多賀神社の御分霊を奉斎し、藤和田王子大権現と称した。その後七回の火災に罹り棟札・書類等を焼失した。明治十五年九月村社に列格。明治二十八年六月、本殿・釣殿・拝殿を改築した。明治四十年五月、神饌幣帛料供進神社に指定せられた。大正二年一月摂社天神社を合祀、二月に車戸神社を境内に御遷座した。岩屋城主中村氏の崇敬が篤かった。

二上神社　旧村社

久米郡中央町両山寺三八三

主祭神　伊弉諾尊　伊弉冉尊　倉稲魂命　大物主命　奥津彦命　奥津姫命
例　祭　十月十八日　**境内地**　九五八坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　稲荷神社　倉稲神社
氏子数　三七戸　**崇敬者数**　二〇〇人
宮　司　宗藤千尋
責任役員　岡　重男　鶴田　守　福田　右
特殊神事　例祭当日獅子神楽



由緒沿革　口碑によると昔役の小角が和州金峯山から二上山に来て勤修したとき、伊弉諾・伊弉冉二神の神夢に依り、祠を作り、この峯の鎮守の神として崇敬したという。本神社は錦織郷の一宮二上の社と称した。永禄年中兵火にかかり、社殿旧記等を焼亡した。元亀元年再建し、二上八頭大明神と称した。明治六年二上神社と改称し村社に列した。明治四十二年十社を合祀した。

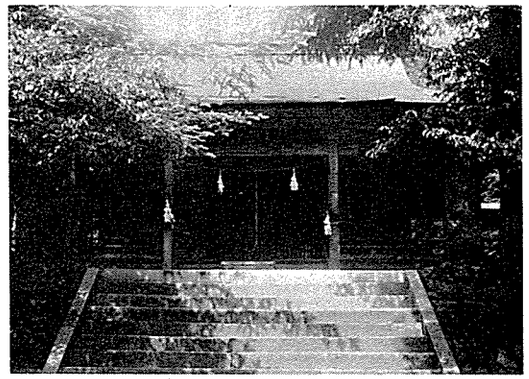
摩賀多神社　旧村社

久米郡中央町越尾一三一七

主祭神　鵜草葺不合尊
例　祭　十月二十七日　**境内地**　八七四・五一坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿庫、
摂末社　齋神社　八阪神社　荒神社　五社神社（飛地境内神社）熊野神社
氏子数　一七〇戸　**崇敬者数**　六八〇人
宮　司　塩島寿賢
責任役員　山本高一　勢木　基　越尾馬一
由緒沿革　本神社の創建は不詳であるが、宝物の古木像に「造奉立文珠大明神（中略）応安三年庚戌十二月」云々とある。また棟札に「奉再建摩竭陀大明神云云」寛永十五年戊寅正月云云」とある。本神社も社僧が支配していたので文珠大明神と称え、文珠菩薩を御神体として併置していた。明治維新のときに御祭神のみを安置し、本像は宝物として保存した。明治四年摩賀神社と改称。明治六年村社列格。大正十年十二月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。昭和十年、社務所を新築、参籠殿を改築した。

宮代神社　旧村社

久米郡中央町打穴上一一六七



主祭神　素盞嗚尊　大己貴命　天目一箇命　譽田別尊　事代主命　大山祇神
例祭　十月十六日　**境内地**　一、二六四坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　参籠殿　神輿庫　社務所　手水舎
摂末社　瓶神社　宇賀神社　海神社　茅野神社
氏子数　一五五戸　**崇敬者数**　九二〇人
宮司　石坂四郎　**禰宜**　岸本一二雄
責任役員　吉川信男　山田猛　本田吉萬　左居晴一　津田俊郎　池田力男
宝物　藤原時代・男神躰、札・天正元年、延宝八年、正徳三年、天明七年、鎌倉時代・男神躰、桃山末期・女神躰
由緒沿革　崇神天皇の御代の勧請の社という。旧時の祭典の模様は今残っている。神子免田・祝詞田・笛吹田・神楽田等の地名から偲ばれている。また北條氏田がある。これは鎌倉執権北條氏の領地であった時の寄附であろう。明治六年村社となる。美作国百拾弐社記に錦織郷の総社に坐す一宮とし、八頭宮代大明神と称している。作陽誌に、八頭宮代神社は上打穴上村にありとある。

籾山神社　旧村社

久米郡久米南町下籾九二二

主祭神　大穴牟遅命
例祭　十月十九日　**境内地**　一、一九二坪
主要建物　本殿　拝殿　神輿庫　参籠殿
摂末社　八坂神社　森神社　斎神社　若宮　沖津神社
氏子数　六九戸　**崇敬者数**　五〇人
宮司　日野宏哉
責任役員　近藤寿　采本保之　細川正一　播元茂　宮本強　佐藤昭三
特殊神事　獅子舞　棒使
由緒沿革　和銅五年、肩野物部（弓削建物部）乙麿の創建と伝えている。もと、王子宮または王子権現と称していた。龍王山城主岸備前守氏秀の祈願所として、志呂神社とともに弓削庄内の信仰をあつめていた。明治六年、下籾神社、同八年十月籾山神社と改称した。明治十年、村社に列格した。

簗瀬神社　旧村社

久米郡旭町西川上七三〇三

主祭神　瀬織津比咩命
例祭　十月十一日　**境内地**　一、一九二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
氏子数　四五戸　**崇敬者数**　三〇〇人
宮司　矢木久
責任役員　森岡竹四郎　伊藤建次郎・杉山甚四郎
由緒沿革　本神社の創建は神亀三年に御祭神が簗瀬に天降り給い、苫葺仮殿を建て鎮座せられた。貞観年間に御社殿御造立の宣命により簗瀬神社と称した。明治十二年村社に列格。同四十二年村内徳尾神社に合祀した。昭和三十一年もとの社地に簗瀬神社を再建した。その後氏子が一致して祭祀と経営とに尽して山林の寄進もあり、造林して神社維持の方法をたてている。

山尾神社　旧村社

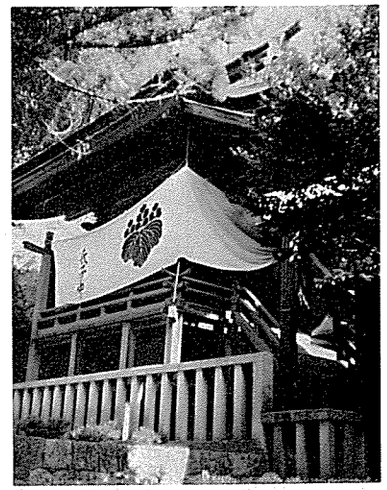
久米郡久米南町一色一八五

主祭神　大山祇命
例祭　十月十七日
境内地　一、二四七・四三坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所
摂末社　八幡神社　高村神社
宮司　宮尾旭
由緒沿革　本神社は元慶五年正月十五日の創建である。寛文九年火災で焼失した。寛政十年、文政十一年に屋根葺替の折、領主内藤山城守が米二石を寄進した。もと、山王大明神と称したが、山王を山尾とし、明治維新の際山尾神社と改称した。明治六年に村社に列格し大正二年十一月に神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

飯岡神社　旧村社

久米郡栃原町飯岡四六九

主祭神　素盞嗚尊　天児屋根命　譽田別尊　外二柱
例祭　十月十三日　**境内地**　四〇二坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿

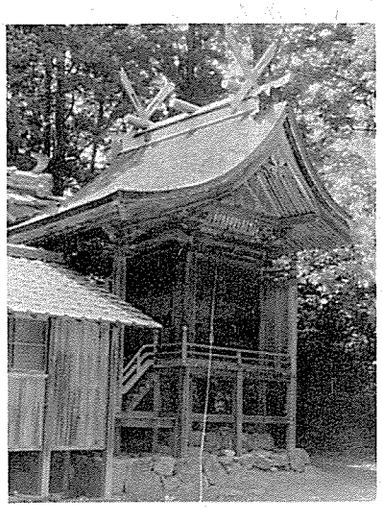


氏子数　二三〇戸　**崇敬者数**　五〇戸
宮司　横林重美
責任役員　角南弘三　谷本美作
由緒沿革　延暦年間の創立であって、宝暦二年一千年祭を行った。その旨の旧記棟札等がある。本神社は倉見山の頂上に鎮座している。往昔は御祭神が三柱であったが、天正年間、鷲山城主星賀藤内光繁が譽田別尊・天満天神の二柱を合祀して、鷲山城鎮護の神社として崇敬した。往古から釜上神社と称していたが、大正十年九月八幡神社・天神社を合祀して天神山に御遷座し飯岡神社と改称した。

連石神社　旧村社

久米郡栃原町連石一一〇三

主祭神　正哉吾勝々速日天忍穂耳尊



例祭　十月十五日　**境内地**　一、〇六五坪
主要建物　本殿　幣殿　拝殿
摂末社　今宮神社
氏子数　八〇戸　**崇敬者数**　五〇人
宮司　瀧本靖夫
責任役員　中西鎮雄　村瀬清三　小玉輝弥　福田晴夫
由緒沿革　創建年代不詳。和気郷の旧社で連石・下谷等の氏神である。中古は八王子権現と称した。往古当神社の神領六拾五石が連石・栗尾二村の中にあったが、文禄元年朝鮮の役の募兵のとき、祠官が募兵を固辞し、豊公のため社領を没収せられた。永禄五年の春、野火のため炎上した。時に福田政秀が再建の資を献じ、なお百方勧誘して同八月再建した。明治二年連石神社と改称した。

和田神社　旧村社

御津郡建部町和田南一六四三



氏子数　三〇〇戸　**崇敬者数**　七〇〇人

宮　司　宗藤千壽

責任役員　村岡　弘　尾上　勇　尾上三治　柏本輝男

宝　物　鍬　下馬札　棟札　神鏡

由緒沿革　堀河天皇の御宇、山城の男山八幡宮を堺和郷大山に勧請して大山八幡宮と称した。美作古社一百十二社記に、地頭榎本重成が文永四年森峪山に鎮座していた大山八幡宮の御神霊を背負い奉ってこの地に勧請したという。文永四年芳賀八郎為永が和田南鶴田山に築城した時、本神社を尊崇し武男神社と称した。為永の子孫が引続き崇敬し、慶長十四年には御社殿を再建した。現在の神社はそれである。明治四十年五月神饌幣帛料供進神社に指定せられた。

主祭神　品陀和気命　足仲彦命　息長帯比賣命
倉稲　魂命　外十一柱

例　祭　十月十七日　**境内地**　四、五九〇坪

主要建物　本殿　幣殿　拝殿　社務所　神輿蔵

摂末社　伊都岐神社　龍神社

石神

シャクジンともいう。石に神霊が降臨して、こもるという信仰である。石を神霊の依代として祀る習俗が各地にある。産神、塞の神、エビス神、地主神などは石を依代としたもので、石を神体とするものがある。神霊の降臨を願う地に石を築いて、石で場所を示したと考えられる。石神は古くはイワガミとよばれていたが、シャクジンとよぶ所もある。石神は疣(いぼ)をとる、耳だれをなおす、百日咳を癒すとかと信じられ、穴のあいた石、特殊な模様のある石、色に特色のある石が祀られ、超自然的な霊能が内在すると考えられ、子生石といって石が割れて子石を生む、小石が急に大きくなると信じられている。

付　録

将軍・執権

9	足利義尚	1473(文明 5),12—1489(延徳 1), 3	常徳院
10	足利義稙	1490(延徳 2), 7—1497(明応 2), 6	恵林院
11	足利義澄	1494(明応 3),12—1508(永正 5), 4	法住院
	足利義稙	1508(永正 5), 7—1521(大永 1),12	
12	足利義晴	1521(大永 1),12—1546(天文15),12	万松院
13	足利義輝	1546(天文15),12—1565(永禄 8), 5	光源院
14	足利義栄	1568(永禄11), 2—1568(永禄11), 9	光徳院
15	足利義昭	1568(永禄11),10—1573(天正 1), 7	霊陽院

〔江戸幕府〕

1	徳川家康	1603(慶長 8), 2—1605(慶長10), 4	安国院
2	徳川秀忠	1605(慶長10), 4—1623(元和 9), 7	台徳院
3	徳川家光	1623(元和 9), 7—1651(慶安 4), 5	大猶院
4	徳川家綱	1651(慶安 4), 8—1680(延宝 8), 5	厳有院
5	徳川綱吉	1680(延宝 8), 8—1709(宝永 6), 1	常憲院
6	徳川家宣	1709(宝永 6), 5—1712(正徳 2),10	文昭院
7	徳川家継	1713(正徳 3), 4—1716(享保 1), 4	有章院
8	徳川吉宗	1716(享保 1), 8—1745(延享 2), 9	有徳院
9	徳川家重	1745(延享 2),11—1760(宝暦10), 5	惇信院
10	徳川家治	1760(宝暦10), 9—1786(天明 6), 9	浚明院
11	徳川家斉	1787(天明 7), 4—1837(天保 8), 4	文恭院
12	徳川家慶	1837(天保 8), 9—1853(嘉永 6), 6	慎徳院
13	徳川家定	1853(嘉永 6),10—1858(安政 5), 7	温恭院
14	徳川家茂	1858(安政 5),10—1866(慶応 2), 7	昭徳院
15	徳川慶喜	1866(慶応 2),12—1867(慶応 3),12	

鎌倉幕府執権

北条時政		1203(建仁 3), 9—1205(元久 2),㋆
北条義時		1205(元久 2),㋆—1224(元仁 1), 6
北条泰時		1224(元仁 1), 6—1242(仁治 3), 6
北条経時		1242(仁治 3), 6—1246(寛元 4), 3
北条時頼		1246(寛元 4), 3—1256(康元 1),11
北条長時		1256(康元 1),11—1264(文永 1), 7
北条政村		1264(文永 1), 8—1268(文永 5), 3
北条時宗		1268(文永 5), 3—1284(弘安 7), 4
北条貞時		1284(弘安 7), 7—1301(正安 3), 8
北条師時		1301(正安 3), 8—1311(応長 1), 9
北条宗宣		1311(応長 1),10—1312(正和 1), 5
北条熙時		1312(正和 1), 6—1315(正和 4), 7
北条基時		1315(正和 4), 7—1315(正和 4),11
北条高時		1316(正和 5), 7—1326(嘉暦 1), 3
北条貞顕		1326(嘉暦 1), 3—1326(嘉暦 1), 4
北条守時		1326(嘉暦 1), 4—1333(元弘 3), 5

国県対照表

地方	国名	県名
東北地方	陸奥	青森
	陸中	岩手
	陸前	宮城
	磐城	福島
	岩代	福島
	羽後	秋田(陸中の飛地を含む)
	羽前	山形
関東地方	安房	千葉
	上総	千葉
	下総	千葉
	常陸	茨城
	下野	栃木
	上野	群馬
	武蔵	埼玉
	武蔵	東京
	相模	神奈川
中部地方	伊豆	静岡
	駿河	静岡
	遠江	静岡
	三河	愛知
	尾張	愛知
	美濃	岐阜
	飛騨	岐阜
近畿地方	信濃	長野
	甲斐	山梨
	越後	新潟
	佐渡	新潟
	越中	富山
	能登	石川
	加賀	石川
	越前	福井
	若狭	福井
	近江	滋賀
	山城	京都
	丹後	京都
	丹波	兵庫
	但馬	兵庫
	播磨	兵庫
	淡路	兵庫
	摂津	大阪
	和泉	大阪
	河内	大阪
	大和	奈良
	紀伊	和歌山
	伊勢	三重
	伊賀	三重
	志摩	三重
四国地方	阿波	徳島
	土佐	高知
	伊予	愛媛
	讃岐	香川
中国地方	備前	岡山
	美作	岡山
	備中	岡山
	備後	広島
	安芸	広島
	周防	山口
	長門	山口
	石見	島根
	出雲	島根
	隠岐	島根
	伯耆	鳥取
	因幡	鳥取
九州地方	筑前	福岡
	筑後	福岡
	豊前	福岡
	豊後	大分
	日向	宮崎
	大隅	鹿児島
	薩摩	鹿児島
	肥後	熊本
	肥前	佐賀
	壱岐	長崎
	対馬	長崎

院政

諡号	在位
白河	1086(応徳 3),11—1129(大治 4), 7
鳥羽	1129(大治 4), 7—1156(保元 1), 7
後白河	1158(保元 3), 8—1179(治承 3),11
高倉	1180(治承 4), 2—1180(治承 4),12
後白河	1181(治承 4),12—1192(建久 3), 3
後鳥羽	1198(建久 9), 1—1221(承久 3), 7
後高倉	1221(承久 3), 7—1223(貞応 2), 5
後堀河	1232(貞永 1),10—1234(文暦 1), 8
後嵯峨	1246(寛元 4), 1—1272(文永 9), 2
後亀山	1274(文永11), 1—1287(弘安10),10
後深草	1287(弘安10),10—1290(正応 3), 2
後伏見	1298(永仁 6), 7—1301(正安 3), 1
後宇多	1301(正安 3), 1—1308(延慶 1), 8
後伏見	1308(延慶 1), 8—1313(正和 2),10
後宇多	1313(正和 2),10—1318(文保 2), 2
後伏見	1318(文保 2), 2—1321(元享 1),12
後醍醐	1331(元弘 1), 9—1333(元弘 3), 5

摂政・関白

氏名	職名	在職年代
藤原良房	摂政	858(天安 2),11— 863(貞観 5),
藤原良房	摂政	866(貞観 8), 8— 872(貞観14), 9
藤原基経	摂政	872(貞観14),11— 880(元慶 4),11
藤原基経	関白	880(元慶 4),11— 890(寛平 2),12
藤原忠平	摂政	930(延長 8), 9— 941(天慶 4),11
藤原忠平	関白	941(天慶 4),11— 949(天暦 3), 8
藤原実頼	関白	967(康保 4), 6— 969(安和 2) 8
藤原実頼	摂政	969(安和 2), 8— 970(天禄 1), 5
藤原伊尹	摂政	970(天禄 1), 5— 972(天禄 3),10
藤原兼通	関白	972(天禄 3),11— 977(貞元 2),10
藤原頼忠	関白	977(貞元 2),10— 986(寛和 2), 6
藤原兼家	摂政	986(寛和 2), 6— 990(正暦 1), 5
藤原兼家	関白	990(正暦 1), 5— 990(正暦 1), 5
藤原道隆	関白	990(正暦 1), 5— 990(正暦 1), 5
藤原道隆	摂政	990(正暦 1), 5— 993(正暦 4), 4
藤原道隆	関白	993(正暦 4), 4— 995(長徳 1), 4
藤原道兼	関白	995(長徳 1), 4— 995(長徳 1), 5
藤原道長	准摂政	1015(長和 4),10—1016(長和 5), 1
藤原道長	摂政	1016(長和 5), 1—1017(寛仁 1), 3
藤原頼道	摂政	1017(寛仁 1), 3—1019(寛仁 3),12
藤原頼道	関白	1019(寛仁 3),12—1068(治暦 4), 4
藤原教通	関白	1068(治暦 4), 4—1075(承保 2), 9
藤原師実	関白	1075(承保 2),10—1086(応徳 3),11
藤原師実	摂政	1086(応徳 3),11—1090(寛治 4),12
藤原師実	関白	1090(寛治 4),12—1094(嘉保 1), 3
藤原師通	関白	1094(嘉保 1), 3—1099(康和 1), 6
藤原忠実	関白	1105(長治 2),12—1107(嘉承 2), 7

藤原忠実	摂政	1107(嘉承 2), 7—1113(永久 1),12
藤原忠実	関白	1113(永久 1),12—1121(保安 2), 1
藤原忠通	関白	1121(保安 2), 3—1123(保安 4), 1
藤原忠通	摂政	1123(保安 4), 1—1129(大治 4), 7
藤原忠通	関白	1129(大治 4), 7—1141(永治 1),12
藤原忠通	摂政	1141(永治 1),12—1150(久安 6),12
藤原忠通	関白	1150(久安 6),12—1158(保元 3), 8
藤原基実	関白	1158(保元 3), 8—1165(永万 1), 6
藤原基実	摂政	1165(永万 1), 6—1166(仁安 1), 7
藤原基房	摂政	1166(仁安 1), 7—1172(承安 2),12
藤原基房	関白	1172(承安 2),12—1179(治承 3),11
藤原基通	関白	1179(治承 3),11—1180(治承 4), 2
藤原基通	摂政	1180(治承 4), 2—1183(寿永 2),11
藤原師家	摂政	1183(寿永 2),11—1184(元暦 1), 1
藤原基通	摂政	1184(元暦 1), 1—1186(文治 2), 3
藤原兼実	摂政	1186(文治 2), 3—1191(建久 2),12
藤原基通	関白	1191(建久 2),12—1196(建久 7),11
藤原良経	摂政	1196(建久 7),11—1198(建久 9), 1
九条家実	摂政	1198(建久 9), 1—1202(建仁 2),12
近衛家実	摂政	1202(建仁 2),12—1206(建永 1), 3
近衛家実	関白	1206(建永 1), 3—1206(建永 1),12
九条道家	摂政	1206(建永 1),12—1221(承久 3), 4
近衛家実	摂政	1221(承久 3), 4—1221(承久 3), 7
近衛家実	関白	1221(承久 3), 7—1223(貞応 2),12

将軍

〔鎌倉幕府〕

(代)	氏名	在職年代
1	源頼朝	1192(建久 3), 7—1199(正治 1), 1
2	源頼家	1202(建仁 2), 7—1203(建仁 3), 9
3	源実朝	1203(建仁 3), 9—1219(承久 1),12
4	藤原頼経	1226(嘉禄 2), 1—1244(寛元 2), 4
5	藤原頼嗣	1244(寛元 2), 4—1252(建長 4), 4
6	宗尊親王	1252(建長 4), 4—1266(文永 3), 7
7	惟康親王	1266(文永 3), 7—1289(正応 2),10
8	久明親王	1289(正応 2),10—1308(延慶 1), 8
9	守邦親王	1308(延慶 1), 8—1333(元弘 3), 5

〔室町幕府〕

1	足利尊氏	1338(暦応 1), 8—1358(延文 3), 4	等持院
2	足利義詮	1358(延文 3),12—1367(貞治 6),12	宝篋院
3	足利義満	1368(応安 1),12—1394(応永 1),12	鹿苑院
4	足利義持	1394(応永 1),12—1423(応永30), 3	勝定院
5	足利義量	1423(応永30), 3—1425(応永32), 2	長得院
6	足利義教	1429(永享 1), 3—1441(嘉吉 1), 6	普広院
7	足利義勝	1442(嘉吉 2),11—1443(嘉吉 3), 7	慶雲院
8	足利義政	1449(宝徳 1), 4—1473(文明 5),12	慈照院

歴代天皇

（神武～推古は日本書紀による。
○印は女帝　北は北朝）

代	天皇名	尊　称（諱）	在　位
1	神武	神日本磐余彦尊	前660-585
2	綏靖	神渟名川耳尊	〃581-549
3	安寧	磯城津彦玉手看尊	〃549-511
4	懿徳	大日本彦耜友尊	〃510-477
5	孝昭	観松彦香殖稲尊	〃475-393
6	孝安	日本足彦国押人尊	〃392-291
7	孝霊	大日本根子彦太瓊尊	〃290-215
8	孝元	大日本根子彦国牽尊	〃214-158
9	開化	稚日本根子彦大日日尊	〃158- 98
10	崇神	御間城入彦五十瓊殖尊	〃97- 30
11	垂仁	活目入彦五十狭茅尊	〃29-後70
12	景行	大足彦忍代別尊	71- 130
13	成務	稚足彦尊	131- 190
14	仲哀	足仲彦尊	192- 200
15	応神	誉田別尊	270- 310
16	仁徳	大鷦鷯尊	313- 399
17	履中	大兄去来穂別尊	400- 405
18	反正	多遅比瑞歯別尊	406- 410
19	允恭	雄朝津間稚子宿弥尊	412- 453
20	安康	穴穂尊	453- 456
21	雄略	大泊瀬幼武尊	456- 479
22	清寧	白髪武広国押稚日本根子尊	480- 484
23	顕宗	弘計尊	485- 487
24	仁賢	億計尊	488- 498
25	武烈	小泊瀬稚鷦鷯尊	498- 506
26	継体	男大迹尊	507- 531
27	安閑	勾大兄尊	531- 535
28	宣化	檜隈高田尊	535- 539
29	欽明	天国排開広庭尊	539- 571
30	敏達	渟中倉太珠敷尊	572- 585
31	用明	橘豊日尊	585- 587
32	崇峻	長谷部若雀尊	587- 592
33	○推古	豊御食炊屋姫	592- 628
34	舒明	田村	629- 641
35	○皇極	宝	642- 645
36	孝徳	軽	645- 654
37	○斉明	（皇極重祚）	655- 661
38	天智	中大兄	661- 671
39	弘文	大友	671- 672
40	天武	大海人	673- 686
41	○持統	讃良	686- 697
42	文武	珂瑠	698- 707
43	○元明	安閑	707- 715
44	○元正	氷高	715- 724
45	聖武	首	724- 749
46	○孝謙	阿倍	749- 758
47	淳仁	大炊	758- 764
48	○称徳	（孝謙重祚）	764- 770
49	光仁	白壁	770- 781
50	桓武	山部	781- 806
51	平城	安殿	806- 809
52	嵯峨	神野	809- 823
53	淳和	大伴	823- 833
54	仁明	正良	833- 850
55	文徳	道康	850- 858
56	清和	惟仁	858- 876
57	陽成	貞明	876- 884
58	光孝	時康	884- 887
59	宇多	定省	887- 897
60	醍醐	敦仁	897- 930
61	朱雀	寛明	930- 946
62	村上	成明	946- 967
63	冷泉	憲平	967- 969
64	円融	守、平	969- 984
65	花山	師貞	984- 986

歴代天皇

（神武～推古は日本書紀による。
○印は女帝　北は北朝）

代	天皇名	諱	在　位
66	一条	懐仁	986-1011
67	三条	居貞	1011-1016
68	後一条	敦成	1016-1036
69	後朱雀	敦良	1036-1045
70	後冷泉	親仁	1045-1068
71	後三条	尊仁	1068-1072
72	白河	貞仁	1072-1086
73	堀河	善仁	1086-1107
74	鳥羽	宗仁	1107-1123
75	崇徳	顕仁	1123-1141
76	近衛	体仁	1141-1155
77	後白河	雅仁	1155-1158
78	二条	守仁	1158-1165
79	六条	順仁	1165-1168
80	高倉	憲仁	1168-1180
81	安徳	言仁	1180-1185
82	後鳥羽	尊成	1183-1198
83	土御門	為仁	1198-1210
84	順徳	守成	1210-1221
85	仲恭	懐成	1221
86	後堀河	茂仁	1221-1232
87	四条	秀仁	1232-1242
88	後嵯峨	邦仁	1242-1246
89	後深草	久仁	1246-1259
90	亀山	恆仁	1259-1274
91	後宇多	世仁	1274-1287
92	伏見	熙仁	1287-1298
93	後伏見	胤仁	1298-1301
94	後二条	邦治	1308-1308
95	花園	富仁	1308-1318
96	後醍醐	尊治	1318-1339
北	光厳	量仁	1331-1333
北	光明	豊仁	1336-1348
97	後村上	義良	1339-1368
北	崇光	興仁	1348-1351
北	後光厳	弥仁	1352-1371
98	長慶	寛成	1368-1383
北	後円融	緒仁	1371-1382
99	後亀山	熙仁	1383-1392
100	後小松	幹仁	1392-1412（82）
101	称光	実仁	1412-1428
102	後花園	彦仁	1428-1464
103	後土御門	成仁	1464-1500
104	後柏原	勝仁	1500-1526
105	後奈良	知仁	1526-1557
106	正親町	方仁	1557-1586
107	後陽成	和仁	1586-1611
108	後水尾	政仁	1611-1629
109	○明正	興子	1629-1643
110	後光明	紹仁	1643-1654
111	後西	良仁	1654-1663
112	霊元	識仁	1663-1687
113	東山	朝仁	1687-1709
114	中御門	慶仁	1709-1735
115	桜町	昭仁	1735-1747
116	桃園	遐仁	1747-1762
117	○後桜町	智子	1762-1770
118	後桃園	英仁	1770-1779
119	光格	兼仁	1779-1817
120	仁孝	恵仁	1817-1846
121	孝明	統仁	1846-1866
122	明治	睦仁	1867-1912
123	大正	嘉仁	1912-1926
124	今上	裕仁	1926-

五十音順年号一覧

（・印は北朝）

正　慶・1332-1333	治　暦 1065-1069	天　徳　957- 961	文　中 1372-1375
正　元 1259-1260	長　久 1040-1044	天　仁 1108-1110	文　保 1317-1319
正　治 1199-1201	長　享 1487-1489	天　平　729- 749	文　明 1469-1487
正　中 1324-1326	長　寛 1163-1165	天平感宝 749	文　暦 1234-1235
正　長 1428-1429	長　元 1028-1037	天平勝宝 749- 757	文　禄 1592-1596
正　徳 1711-1716	長　承 1132-1135	天平宝字 757- 765	文　和・1352-1356
正　平 1346-1370	長　治 1104-1106	天平神護 765- 767	平　治 1159-1160
正　保 1644-1648	長　徳　995- 999	天　福 1233-1234	保　安 1120-1124
正　暦　990- 995	長　保 999-1004	天　保 1830-1844	保　延 1135-1141
正　和 1312-1317	長　暦 1037-1040	天　明 1781-1789	保　元 1156-1159
昌　泰　898- 901	長　禄 1457-1460	天　文 1532-1555	宝　永 1704-1711
承　安 1171-1175	長　和 1012-1017	天　養 1144-1145	宝　亀　770- 781
承　応 1652-1655	貞　永 1232-1233	天　暦　947- 957	宝　治 1247-1249
承　久 1219-1222	貞　観　859- 877	天　禄　970- 973	宝　徳 1449-1452
承　元 1207-1211	貞　応 1222-1224	天　和 1681-1684	宝　暦 1751-1764
承　徳 1097-1099	貞　享 1684-1688	徳　治 1306-1308	万　延 1860-1861
承　平　931-9938	貞　元　976- 978	仁　安 1166-1169	万　寿 1024-1028
承　保 1074-1077	貞　治・1362-1368	仁　寿　851- 854	万　治 1658-1661
承　暦 1077-1081	貞　和・1345-1350	仁　治 1240-1243	明　応 1492-1501
承　和　834- 848	天　安　857- 859	仁　和　885- 889	明　治 1868-1912
昭　和 1926-	天　永 1110-1113	仁　平 1151-1154	明　徳・1390-1394
神　亀　724- 729	天　延　973- 976	白　雉　650- 654	明　暦 1655-1658
神護景雲 767- 770	天　応　781- 782	文　安 1444-1449	明　和 1764-1772
大　永 1521-1528	天　喜 1053-1058	文　永 1264-1275	養　老　717- 724
大　化　645-650	天　慶　938- 947	文　応 1260-1261	養　和 1181-1182
大　正 1912-1926	天　元　978- 983	文　亀 1501-1504	暦　応・1338-1342
大　治 1126-1131	天　授 1375-1381	文　久 1861-1864	暦　仁 1238-1239
大　同　806- 810	天　正 1573-1592	文　化 1804-1818	霊　亀　715- 717
大　宝　701- 704	天　承 1131-1132	文　正 1466-1467	和　銅　708- 715
治　安 1021-1024	天　治 1124-1126	文　政 1818-1830	
治　承 1177-1181	天　長　824- 834	文　治 1185-1190	

五十音順年号一覧

（・印は北朝）

安　永 1772-1781	延　暦　782- 806	寛　保 1741-1744	元　中 1384-1392
安　元 1175-1177	応　安・1368-1375	寛　和　985- 987	元　徳 1329-1331
安　政 1854-1860	応　永 1394-1428	観　応・1350-1351	元　仁 1224-1225
安　貞 1227-1229	応　長 1311-1312	久　安 1145-1151	元　文 1736-1741
安　和　968- 970	応　徳 1084-1087	久　寿 1154-1156	元　暦 1184-1185
永　延　987- 989	応　仁 1467-1469	享　徳 1452-1455	元　禄 1668-1704
永　観　983- 985	応　保 1161-1163	享　保 1716-1736	元　和 1615-1624
永　久 1113-1118	応　和　961- 964	享　禄 1528-1532	康　安・1361-1362
永　享 1429-1441	嘉　永 1848-1854	享　和 1801-1804	康　永・1342-1345
永　正 1504-1521	嘉　応 1169-1171	慶　安 1648-1652	康　応・1389-1390
永　承 1046-1053	嘉　吉 1441-1444	慶　雲　704- 708	康　元 1256-1257
永　祚　989- 990	嘉　慶・1387-1389	慶　応 1865-1868	康　正 1455-1457
永　治 1141-1142	嘉　元 1303-1306	慶　長 1596-1615	康　治 1142-1144
永　長 1096-1097	嘉　承 1106-1108	建　永 1206-1207	康　平 1058-1065
永　徳 1381-1384	嘉　祥　848- 851	建　久 1190-1199	康　保　964- 968
永　仁 1293-1299	嘉　禎 1235-1238	建　治 1275-1278	康　暦・1379-1381
永　保 1081-1084	嘉　保 1094-1096	建　長 1249-1256	康　和 1099-1104
永　万 1165-1166	嘉　暦 1326-1329	建　徳 1370-1372	興　国 1340-1346
永　暦 1160-1161	嘉　禄 1225-1227	建　仁 1201-1204	弘　安 1278-1288
永　禄 1558-1570	寛　永 1624-1644	建　保 1213-1219	弘　化 1844-1848
永　和・1375-1379	寛　延 1748-1751	建　武 1334-1336	弘　治 1555-1558
延　応 1239-1240	寛　喜 1229-1232	建　暦 1211-1213	弘　長 1261-1264
延　喜　901- 923	寛　元 1243-1247	乾　元 1302-1303	弘　仁　810- 824
延　久 1069-1074	寛　弘 1004-1012	元　永 1118-1120	弘　和 1381-1384
延　享 1744-1748	寛　正 1460-1466	元　応 1319-1321	斉　衡　854 - 857
延　慶 1308-1311	寛　政 1789-1801	元　亀 1570-1573	至　徳・1384-1387
延　元 1336-1340	寛　治 1087-1094	元　久 1204-1206	朱　鳥　686-
延　長　923- 931	寛　徳 1044-1046	元　慶　877- 885	寿　永 1182-1185
延　徳 1489-1492	寛　仁 1017-1021	元　亨 1321-1324	正　安 1299-1302
延　文・1356-1361	寛　文 1661-1673	元　弘 1331-1334	正　応 1288-1293
延　宝 1673-1681	寛　平　889- 898	元　治 1864-1865	正　嘉 1257-1259

時代順年号一覧

嘉禎	1235-1238
暦仁	1238-1239
延応	1239-1240
仁治	1240-1243
寛元	1243-1247
宝治	1247-1249
建長	1249-1256
康元	1256-1257
正嘉	1257-1259
正元	1259-1260
文応	1260-1261
弘長	1261-1264
文永	1264-1275
建治	1275-1278
弘安	1278-1288
正応	1288-1293
永仁	1293-1299
正安	1299-1302
乾元	1302-1303
嘉元	1303-1306
徳治	1306-1308
延慶	1308-1311
応長	1311-1312
正和	1312-1317
文保	1317-1319
元応	1319-1321
元亨	1321-1324
正中	1324-1326
嘉暦	1326-1329
元徳	1329-1331
元弘	1331-1334 (32)
正慶	1332-1333)
建武	1334-1336 (38)
延元	1336-1340
興国	1340-1346
正平	1346-1370
建徳	1370-1372
文中	1372-1375
天授	1375-1381
弘和	1381-1384
元中	1384-1392
(北朝)	
暦王	1338-1342
康永	1342-1345
貞和	1345-1350
観応	1350-1352
文和	1352-1356
延文	1356-1361
康安	1361-1362
貞治	1362-1368
応安	1368-1375
永和	1375-1379
康暦	1379-1381
永徳	1381-1384
至徳	1384-1387
嘉慶	1387-1389
康応	1389-1390
明徳	1390-1394
(1392 合一)	
応永	1394-1428
正長	1428-1429
永享	1429-1441
嘉吉	1441-1444
文安	1444-1449
宝徳	1449-1452
享徳	1452-1455
康正	1455-1457
長禄	1457-1460
寛正	1460-1466
文正	1466-1467
応仁	1467-1469
文明	1469-1487
長享	1487-1489
延徳	1489-1492
明応	1492-1501
文亀	1501-1504
永正	1504-1521
大永	1521-1528
享禄	1528-1532
天文	1532-1555
弘治	1555-1558
永禄	1558-1570
元亀	1570-1573
天正	1573-1592
文禄	1592-1596
慶長	1596-1615
元和	1615-1624
寛永	1624-1644
正保	1644-1648
慶安	1648-1652
承応	1652-1655
明暦	1655-1658
万治	1658-1661
寛文	1661-1673
延宝	1673-1681
天和	1681-1684
貞享	1684-1688
元禄	1688-1704
宝永	1704-1711
正徳	1711-1716
享保	1716-1736
元文	1736-1741
寛保	1741-1744
延享	1744-1748
寛延	1748-1751
宝暦	1751-1764
明和	1764-1772
安永	1772-1781
天明	1781-1789
寛政	1789-1801
享和	1801-1804
文化	1804-1818
文政	1818-1830
天保	1830-1844
弘化	1844-1848
嘉永	1848-1854
安政	1854-1860
万延	1860-1861
文久	1861-1864
元治	1864-1865
慶応	1865-1868
明治	1868-1912
大正	1912-1926
昭和	1926-

時代順年号一覧(末年は改元の年を含む。)

大化	645-650
白雉(白鳳)	650-654
朱鳥(朱雀)	686
大宝	701-704
慶雲	704-708
和銅	708-715
霊亀	715-717
養老	717-724
神亀	724-729
天平	729-749
天平感宝	749
天平勝宝	749-757
天平宝字	757-765
天平神護	765-767
神護景雲	767-770
宝亀	770-781
天応	781-782
延暦	782-806
大同	806-810
弘仁	810-824
天長	824-834
承和	834-848
嘉祥	848-851
仁寿	851-854
斉衡	854-857
天安	857-859
貞観	859-877
元慶	877-885
仁和	885-889
寛平	889-898
昌泰	898-901
延喜	901-923
延長	923-931
承平	931-938
天慶	938-947
天暦	947-957
天徳	957-961
応和	961-964
康保	964-968
安和	968-970
天禄	970-973
天延	973-976
貞元	976-978
天元	978-983
永観	983-985
寛和	985-987
永延	987-989
永祚	989-990
正暦	990-995
長徳	995-999
長保	999-1004
寛弘	1004-1012
長和	1012-1017
寛仁	1017-1021
治安	1021-1024
万寿	1024-1028
長元	1028-1037
長暦	1037-1040
長久	1040-1044
寛徳	1044-1046
永承	1046-1053
天喜	1053-1058
康平	1058-1065
治暦	1065-1069
延久	1069-1074
承保	1074-1077
承暦	1077-1081
永保	1081-1084
応徳	1084-1087
寛治	1087-1094
嘉保	1094-1096
永長	1096-1097
承徳	1097-1099
康和	1099-1104
長治	1104-1106
嘉承	1106-1108
天仁	1108-1110
天永	1110-1113
永久	1113-1118
永延	1118-1120
永安	1120-1124
治安	1124-1126
治暦	1126-1131
大治	1131-1132
天承	1132-1135
長承	1135-1141
保延	1141-1142
永治	1142-1144
康治	1144-1145
天養	1145-1151
久安	1151-1154
仁平	1154-1156
久寿	1156-1159
保元	1159-1160
平治	1159-1160
永暦	1160-1161
応保	1161-1163
長寛	1163-1165
永万	1165-1166
仁安	1166-1169
嘉応	1169-1171
承安	1171-1175
安元	1175-1177
治承	1177-1181 (83)
養和	1181-1182
寿永	1182-1185
(元暦	1184-1185)
文治	1185-1190
建久	1190-1199
正治	1199-1201
建仁	1201-1204
元久	1204-1206
建永	1206-1207
承元	1207-1211
建暦	1211-1213
建保	1213-1219
承久	1219-1222
貞応	1222-1224
元仁	1224-1225
嘉禄	1225-1227
貞永	1227-1229
天福	1229-1232
文暦	1232-1233

年号索引

○年号の読み方は文献によって一定しないものが多いが，ここでは1874年文部省制定のものにより，特に別の読み方が慣例として行われているものは，その次に記した。
○第１字が同じ漢字のものを五十音順に配列した。
○数字はその年号の継続した西暦年代を示す。
○右端の時代区分については凡例の4.時代区分・称呼についてを参照。
○太字は記憶すべき年号を示す。

【あ】

安永　あんえい　1772～ 81　江戸後
安元　あんげん　1175～ 77　平安後
安政　あんせい　1854～ 60　幕　末
安貞　あんてい　1227～ 29　鎌倉中
安和　あんわ　968～ 970　平安中

【え】

永延　えいえん　987～ 989　平安中
永観　えいかん　983～985　平安中
永久　えいきゅう　1113～ 18　平安後
永享　えいきょう　1429～ 41　室町中
永治　えいじ　1141～ 42　平安後
永正　えいしょう　1504～ 21　室町後
永承　えいじょう　1046～ 53　平安中
永祚　えいそ　989～ 990　平安中
永長　えいちょう　1096～ 97　平安後
永徳　えいとく　1381～ 84　南北朝
仁保　えいにん　1293～ 99　鎌倉後
永万　えいまん　1081～ 84　平安中
永暦　えいりゃく　1160～ 61　平安後
永禄　えいろく　1558～ 70　室町後
永和　えいわ　1375～ 79　南北朝
応喜　えんおう　1239～ 40　鎌倉中
延久　えんきゅう　901～ 923　平安中
延享　えんきょう　1069～ 74　平安中
延慶　えんぎょう・えんけい　1744～ 48　江戸中
延元　えんげん　1308～ 11　鎌倉後
延徳　えんとく　1336～ 40　南北朝
延文　えんぶん・えんもん　923～ 931　平安中
延宝　えんぽう　1489～ 92　室町後
延暦　えんりゃく　1356～ 61　南北朝
　　1673～ 81　江戸前
　　782～ 806　奈・平

【お】

応安　おうあん　1368～ 75　南北朝
応永　おうえい　1394～1428　室町中
応長　おうちょう　1311～ 12　鎌倉後
応徳　おうとく　1084～ 87　平安中
応仁　おうにん　1467～ 69　室町中
応保　おうほう　1161～/ 63　平安後
応和　おうわ　961～ 964　平安中

【か】

嘉永　かえい　1848～ 54　江戸後
嘉応　かおう　1169～ 71　平安後
嘉吉　かきつ　1441～ 44　室町中
嘉慶　かきょう・かけい　1387～ 89　南北朝
嘉元　かげん　1303～ 06　鎌倉後
嘉祥　かしょう　848～ 851　平安前
嘉承　かじょう　1106～ 08　平安後
嘉禎　かてい　1235～ 38　鎌倉中
嘉保　かほう　1094～ 96　平安後
嘉暦　かりゃく　1326～ 29　鎌倉後
嘉禄　かろく　1225～ 27　鎌倉中
寛永　かんえい　1624～ 44　江戸前
寛延　かんえん　1748～ 51　江戸中
寛喜　かんぎ　1229～ 32　鎌倉中
寛元　かんげん　1243～ 47　鎌倉中
寛弘　かんこう　1004～ 12　平安中
寛治　かんじ　1087～ 94　平安後
寛正　かんしょう　1460～ 66　室町中
寛政　かんせい　1789～1801　江戸後
寛徳　かんとく　1044～ 46　平安中
寛仁　かんにん　1017～ 21　平安中
寛平　かんぺい・かんぴょう　889～ 898　平安前
寛文　かんぶん　1661～ 73　江戸前
寛保　かんぽう　1741～ 44　江戸中
寛和　かんわ　985～ 987　平安中
観応　かんおう　1350～ 52　南北朝
元慶　がんぎょう　877～ 885　平安前

【き】

久安　きゅうあん　1145～ 51　平安後
久寿　きゅうじゅ　1154～ 56　平安後
享徳　きょうとく　1452～ 55　室町中
享保　きょうほう　1716～ 36　江戸中
享禄　きょうろく　1528～ 32　室町後
享和　きょうわ　1801～ 04　江戸後
慶雲　きょううん・けいうん　704～ 708　飛　鳥
慶長　きょうちょう・けいちょう　1596～1615　安・桃

【け】

慶安　けいあん　1648～ 52　江戸前
慶雲　けいうん→きょううん
慶応　けいおう　1865～ 68　幕　末
慶長　けいちょう→きょうちょう
建永　けんえい　1206～ 07　鎌倉前
建久　けんきゅう　1190～ 99　鎌倉前
建治　けんじ　1275～ 78　鎌倉中
建長　けんちょう　1249～ 56　鎌倉中
建徳　けんとく　1370～ 72　南北朝
建仁　けんにん　1201～ 04　鎌倉前
建保　けんぽう　1213～ 19　鎌倉前
建武　けんむ　1334～ 38　南北朝
建暦　けんりゃく　1211～ 13　鎌倉前
乾元　けんげん　1302～ 03　鎌倉後
元永　げんえい　1118～ 20　平安後
元応　げんおう　1319～ 21　鎌倉後
元亀　げんき　1570～ 73　室町後
元久　げんきゅう　1204～ 06　鎌倉前
慶安　→がんぎょう
享弘　げんこう　1321～ 24　鎌倉後
元治　げんじ　1331～ 34　鎌倉後
元中　げんちゅう　1864～ 65　幕　末
元徳　げんとく　1384～ 92　南北朝
元仁　げんにん　1329～ 31　鎌倉後
元文　げんぶん　1224～ 25　鎌倉中
元暦　げんりゃく　1736～ 41　江戸中
元禄　げんろく　1184～ 85　平安後
元和　げんな　1688～1704　江戸中
　　1615～ 24　江戸前

【こ】

弘安　こうあん　1278～ 88　鎌倉中
弘化　こうか　1844～ 48　江戸後
弘治　こうじ　1555～ 58　室町後
弘長　こうちょう　1261～ 64　鎌倉中
弘仁　こうにん　810～ 824　平安前
弘和　こうわ　1381～ 84　南北朝
康安　こうあん　1361～ 62　南北朝
康永　こうえい　1342～ 45　南北朝
康応　こうおう　1389～ 90　南北朝
康元　こうげん　1256～ 57　鎌倉中
康治　こうじ　1142～ 44　平安後
康正　こうしょう　1455～ 57　室町中
康平　こうへい　1058～ 65　平安中
康保　こうほう　964～ 968　平安中
康暦　こうりゃく　1379～ 81　南北朝
康和　こうわ　1099～1104　平安後
国　こうこく　1340～ 46　南北朝

【さ】

斉衡　さいこう　854～ 857　平安前

【し】

至徳　しとく　1384～ 87　南北朝
治安　じあん　1021～ 24　平安中
治承　じじょう・じしょう　1177～ 81　平安後
治暦　じりゃく　1065～ 69　平安中
朱鳥　→すちょう
寿永　じゅえい　1182～ 85　平安後
正安　しょうあん　1299～1302　鎌倉後
正応　しょうおう　1288～ 93　鎌倉後
正嘉　しょうか　1257～ 59　鎌倉中
正慶　しょうけい　1332～ 33　鎌倉後
正元　しょうげん　1259～ 60　鎌倉中
正治　しょうじ　1199～1201　鎌倉前
正中　しょうちゅう　1324～ 26　鎌倉後
正長　しょうちょう　1428～ 29　室町中
正徳　しょうとく　1711～ 16　江戸中
正平　しょうへい　1346～ 70　南北朝
正保　しょうほう　1644～ 48　江戸前
正暦　しょうりゃく　990～ 995　平安中

年号索引

正和　しょうわ　1312～ 17　鎌倉後
昌泰　しょうたい　898～ 901　平安中
昭和　しょうわ　1926～　近　代
承安　じょうあん　1171～ 75　平安後
承応　じょうおう　1652～ 55　江戸前
承久　じょうきゅう　1219～ 22　鎌倉前
承元　じょうげん　1207～ 11　鎌倉前
承徳　じょうとく　1097～ 99　平安後
承平　じょうへい　931～ 938　平安中
承保　じょうほう　1074～ 77　平安中
承暦　じょうりゃく　1077～ 81　平安中
承和　じょうわ　834～ 848　平安前
貞永　じょうえい　1232～ 33　鎌倉中
貞応　じょうおう　1222～ 24　鎌倉中
貞観　じょうがん　859～ 877　平安前
貞享　じょうきょう　1684～ 88　江戸前
貞元　じょうげん　976～ 978　平安中
貞治　じょうじ　1362～ 68　南北朝
貞和　じょうわ　1345～ 50　南北朝
神亀　じんき　724～ 729　奈　良
神護景雲　じんごけいうん　767～ 770　奈　良

【す】

朱　鳥　しゅちょう　686　飛　鳥

【た】

大永　だいえい　1521～ 28　室町後
大化　たいか　645～ 650　飛　鳥
大正　たいしょう　1912～ 26　近　代
大治　だいじ　1126～ 31　平安後
大同　だいどう　806～ 810　平安前
大宝　だいほう　701～ 704　飛　鳥

【ち】

治安　→じあん
治承　→じじょう
治暦　→じりゃく
長寛　ちょうかん　1163～ 65　平安後
長久　ちょうきゅう　1040～ 44　平安中
長享　ちょうきょう　1487～ 89　室町後
長元　ちょうげん　1028～ 37　平安中
長治　ちょうじ　1104～ 06　平安後
長承　ちょうじょう・ちょうしょう　1132～ 35　平安後
長徳　ちょうとく　995～ 999　平安中
長保　ちょうほう　999～1004　平安中
長暦　ちょうりゃく　1037～ 40　平安中
長禄　ちょうろく　1457～ 60　室町中
長和　ちょうわ　1012～ 17　平安中

【て】

貞永　→じょうえい
天安　てんあん　857～ 859　平安前
天永　てんえい　1110～ 13　平安後
天延　てんえん　973～ 976　平安中
天応　てんおう　781～ 782　奈　良
天喜　てんぎ　1053～ 58　平安中
天慶　てんぎょう　938～ 947　平安中
天元　てんげん　978～ 983　平安中
天治　てんじ　1124～ 26　平安後
天授　てんじゅ・てんじゅう　1375～ 81　南北朝
天正　てんしょう　1573～ 92　安・桃
天承　てんじょう・てんしょう　1131～ 32　平安後
天長　てんちょう　824～ 834　平安前
天徳　てんとく　957～ 961　平安中
天仁　てんにん　1108～ 10　平安後
天平　てんぴょう・てんぴょう　729～ 749　奈　良
天平感宝　てんぴょうかんぽう・てんぴょうかんぽう　749　奈　良
天平勝宝　てんぴょうしょうほう・てんぴょうしょうほう　749～ 757　奈　良
天平神護　てんぴょうじんご・てんぴょうじんご　765～ 767　奈　良
天平宝字　てんぴょうほうじ・てんぴょうほうじ　757～ 765　奈　良
天福　てんぷく　1233～ 34　鎌倉中
天文　てんもん・てんぶん　1532～ 55　室町後
天保　てんぽう　1830～ 44　江戸後
天明　てんめい　1781～ 89　江戸後
天養　てんよう　1144～ 45　平安後
天暦　てんりゃく　947～ 957　平安中
天禄　てんろく　970～ 973　平安中
天和　てんわ　1681～ 84　江戸前

【と】

徳　治　とくじ　1306～ 08　鎌倉後

【に】

仁安　にんあん　1166～ 69　平安後
仁治　にんじ　1240～ 43　鎌倉中
仁寿　にんじゅ　851～ 854　平安前
仁平　にんぴょう・にんぺい　1151～ 54　平安後
仁和　にんわ　885～ 889　平安前

【は】

白　雉　はくち　650～ 654　飛　鳥

【ひ】

白　雉　びゃくち→はくち

【ふ】

文安　ぶんあん　1444～ 49　室町中
文永　ぶんえい　1264～ 75　鎌倉中
文応　ぶんおう　1260～ 61　鎌倉中
文化　ぶんか　1804～ 18　江戸後
文亀　ぶんき　1501～ 04　室町後
文久　ぶんきゅう　1861～ 64　幕　末
文治　ぶんじ　1185～ 90　平安後
文正　ぶんしょう　1466～ 67　室町中
文政　ぶんせい　1818～ 30　江戸後
文中　ぶんちゅう　1372～ 75　南北朝
文保　ぶんぽう　1317～ 19　鎌倉後
文明　ぶんめい　1469～ 87　室町後
文暦　ぶんりゃく　1234～ 35　鎌倉中
文禄　ぶんろく　1592～ 96　安・桃
文和　ぶんわ　1352～ 56　南北朝

【へ】

平　治　へいじ　1159～ 60　平安後

【ほ】

保安　ほうあん　1120～ 24　平安後
保延　ほうえん　1135～ 41　平安後
保元　ほうげん　1156～ 59　平安後
宝永　ほうえい　1704～ 11　江戸中
宝亀　ほうき　770～ 780　奈　良
宝治　ほうじ　1247～ 49　鎌倉中
宝徳　ほうとく　1449～ 52　室町中
宝暦　ほうれき・ほうりゃく　1751～ 64　江戸中

【ま】

万延　まんえん　1860～ 61　幕　末
万治　まんじ　1658～ 61　江戸前
万寿　まんじゅ　1024～ 28　平安中

【め】

明応　めいおう　1492～1501　室町後
明治　めいじ　1868～1912　近　代
明徳　めいとく　1390～ 94　室町前
明暦　めいれき　1655～ 58　江戸前
明和　めいわ　1764～ 72　江戸中

【よ】

養老　ようろう　717～ 724　奈　良
養和　ようわ　1181～ 82　平安後

【り】

暦応　りゃくおう　1338～ 42　南北朝
暦仁　りゃくにん　1238～ 39　鎌倉中

【れ】

霊亀　れいき　715～ 717　奈　良
暦応　→りゃくおう

【わ】

和銅　わどう　708～ 715　飛・奈

都道府県の神社数

現在、神社の97%が神社本庁に所属している。
神社本庁では、旧官国幣社及び若干の有力神社を庁規の別表にかかげ、一般神社と区別して、別表神社としている。

都道府県名	神社数	旧神社明細帳登録神社数	旧官国幣社数	別表神社数
東京	1,437	1,755	4	10
神奈川	1,115	1,257	4	8
埼玉	1,945	2,304	3	6
群馬	1,204	1,289	1	1
千葉	3,161	4,731	4	4
茨城	2,456	2,741	4	8
栃木	1,911	3,307	4	4
山梨	1,268	1,599	1	3
北海道	565	511	2	4
宮城	926	1,295	2	4
福島	3,044	4,142	4	4
岩手	860	991	1	3
青森	705	795	1	2
山形	1,735	2,279	5	11
秋田	1,101	1,299	1	4
三重	813	714	4	8
愛知	3,307	3,521	6	7
静岡	2,804	3,291	9	12
岐阜	3,210	4,542	3	4
長野	2,440	4,542	4	8
新潟	4,857	5,366	2	3
福井	1,720	1,669	6	7
石川	1,903	1,906	4	5
富山	2,065	2,624	3	5
京都	1,568	2,701	20	18
大阪	556	672	8	12
兵庫	3,860	4,798	8	15
奈良	1,285	1,519	10	14
滋賀	1,441	1,916	5	8
和歌山	418	473	8	6
鳥取	824	850	4	4
島根	1,161	1,192	8	12
岡山	1,626	4,998	4	5
広島	2,299	5,299	4	7
山口	749	860	6	9
徳島	1,305	2,714	2	3
香川	770	2,489	2	2
愛媛	1,244	1,334	2	6
高知	2,216	4,620	2	2
長崎	1,308	1,415	3	4
福岡	3,355	4,646	9	22
大分	2,130	2,121	3	6
佐賀	1,094	1,839	3	5
熊本	1,388	4,235	4	8
宮崎	649	737	3	4
鹿児島	1,119	1,518	5	6
計	78,915	110,238	208	314

岡山県神社庁支部別神社数及び神職数

55.5.15現在

支部名		神社数	旧官国幣社	旧県社	旧郷社	旧村社以下	神職数
1	岡山	89		6	4	79	36
2	倉敷	56		2	2	52	18
3	津山	102	1	5	15	81	30
4	玉野	28			2	26	10
5	玉島	24			2	22	11
6	児島	36		2	4	30	13
7	御津南	41	1		3	37	10
8	御津北	29			6	23	16
9	御津東	33			2	31	4
10	赤磐	113		1	4	108	13
11	和気、備前	59		2	7	50	27
12	邑久、西大寺	75	1	1	3	70	20
13	上道、西大寺	27			4	23	12
14	都窪	37			1	36	9
15	浅口	88			3	85	17
16	笠岡	60				60	15
17	小田	45			2	43	16
18	井原、後月	60			1	59	19
19	吉備	71	1	2	3	65	20
20	高梁、上房	82		3	7	72	41
21	川上	57		1	1	55	30
22	阿新	128		2	2	124	35
23	真庭	99		4	16	79	39
24	勝田	56		1	8	47	14
25	英田	43		1	3	39	7
26	英北	14			2	12	13
27	久米	74		2	14	58	28
	計	1,626	4	35	121	1,466	523

日本史神道関係略年表

1.紀元年は西紀年とした。
1.天皇御尊名の下の数字は次代を示した。
1.年次は天皇御即位後の年次及び年号の年次である。

紀元	天皇	年次	主要事項
前660	神武1	1	大和橿原宮に即位
		4	天皇靈時を鳥見山に造り皇祖天神を親祭
前92	崇神10	6	豊鍬入姫命に神鏡・神剣を倭国笠縫邑に奉遷せしめらる
前90		7	天社・国社、神地・神戸を定められる
前3	垂仁11		倭姫命に天照大神を伊勢国に鎮座せしめらる
110		36	日本武尊伊勢神宮を拝し神剣を奉持して討夷に出発される
201	仲哀14	9	神功皇后三韓征伐 征韓擁護の神として天照大神・事代主神・住吉神・宗像神を祀る
478	雄略21	22	豊受大神を丹波国より伊勢国山田原外宮に奉遷
571	欽明29	32	宇佐八幡大神御出現という
		32	物部尾輿・中臣鎌足天地社稷180 神を祀ることを奏上
583	敏達30	12	蘇我馬子仏殿を作る
587	用明31		天皇仏法に帰依せられる
604	推古33	12	聖徳太子憲法17条を制定
607		15	敬神の詔勅を発せられる
645	考徳36	大化 1	大化の改新はじまる 仏教興隆の詔 国・郡・里を制定 祭政の権分離
671	天智38	10	天皇皇祖の御魂を祭祀
675	天武40	3	伊勢神宮、式年遷宮の制なる神階神位の制定
690	持統41	朱鳥 4	この頃より神祇の仏法擁護の思想の兆ありという
		5	大宝令により神祇の制定まる
701	文武42	大宝 1	大宝律令完成
708	元明43	和銅 1	和同開珎の鋳造
710		3	平城遷都 諸社に奉幣祈雨
712		5	太安麻呂古事記撰上
713		6	風土記撰上
720	元正44	養老 4	舎人親王日本書紀撰上
728	聖武45	神亀 5	この頃官社帳完成
729	聖武45	天平 1	諸国の天神地祇を各長官に致祭させた
741		13	国毎に国分寺・国分尼寺を創建
768	称徳48	神護景雲 2	春日神社創建
769		3	和気清麻呂宇佐八幡の神託を奏上し大隅に流される
775	光仁49	宝亀 6	初めて天長節を行う
793	桓武50	延暦 12	伊勢神宮、加茂神社に遷都の奉告
		13	平安京と称す 諸国の名神に万国安泰を祈念
859	清和56	貞観 1	石清水八幡宮創建
901	醍醐60	延喜 1	菅原道真太宰府に左遷
923		延長 1	勅令により山城国如意峰に斎場を設け31座の神像を作り社号を定め日本国内に祀らせたという
927	醍醐60	延長 5	延喜式50巻・延喜格12巻成る
934	朱雀61	承平 4	山陽南海など10ヶ国18社に奉幣し海賊平定を祈願
935		5	山陽南海の諸名神に奉幣し海賊追捕を祈願
940		天慶 3	海賊平定祈願のため諸国の名神13社に神階1階を進め、伊曽乃神、野間神に正2位を授けらる
947	村上62	天暦 1	菅原道真を北野に奉祀する
1002	一條66	長保 4	諸国に命じて神社、国分寺の修造をせしめらる
1047	後冷泉70	永承 2	源義家石清水八幡宮を源氏の氏神とする
1054	後冷泉70	天喜 2	源義家鶴岡八幡宮を創建
1080	白河72	承暦 4	天皇の安穏を祈るため村山神、大山積神、野間神に勅使を派遣
1156	後白河77	保元 1	この頃よりもの詣でが流行しはじめたという
1180	安徳81	治承 4	天皇即位を諸国の神に報告
1192	後鳥羽82	建久 3	源頼朝鎌倉幕府を創設
1194		5	源頼朝寺社奉行を定める
1205	土御門83	元久 2	北條義時執権となる
1232	後堀河86	貞永 1	貞永式目51ヶ条を制定
1241	四條87	仁治 2	庶人が神職と称し、特権をふるうを禁じ宮司・神人の定員を定める
1271	亀山90	文永 8	天皇石清水八幡宮に行幸異国降伏を祈願、勅使を伊勢に派遣
1275	後宇多91	建治 1	16社に奉幣使を遣し、異国降伏を祈願、石清水八幡宮に御参拝

紀元	天皇	年次	主要事項
1281		弘安 4	伊勢神宮に異国降伏を祈願
1291	伏見92	正応 4	幕府諸国の社寺に異国降伏を祈願せしめる
1312	花園95	応長 2	将軍宗尊親王、諸国の一宮・惣社に幣馬を奉納
1331	(光厳)	元弘 1	元弘の乱起る
1333		3	北條氏亡ぶ
1334	後醍醐96	建武 1	建武の新政
1336	(光明)	3	南北朝分立
1392	後小松100	明徳 9	南北朝合一
1402	後小松100	応永 9	この頃四国靈場88所定まる
1467	後土御門103	応仁 1	応仁の乱起る
1512	後柏原104	永正 9	幕府神事法会の訴訟条規を定む
1543	後奈良105	天文 12	鉄砲伝来
1549		18	キリスト教伝来
1573		天正 1	室町幕府滅亡
1576	正親町106	4	信長・安土入城、内大臣となる
1587	後陽成107	15	秀吉、キリスト教禁止
1600		慶長 5	関ヶ原の戦
1603	後陽成109	8	江戸幕府創立
1635	明正109	寛永 12	寺社奉行を置く
1639		16	鎖国の完成
1645	後光明110	正保 2	熊澤蕃山、池田光政に仕える
1665	霊元112	寛文 5	幕府諸社祢宜神主法度を発布
1702	東山113	元禄 15	赤穂義士の仇討
1720	中御門114	享保 5	吉宗の享保の改革
1758	桃園116	宝暦 8	幕府寺社奉行に諸社の格式由緒明細を調査せしめる
1787	光格119	天明 7	松平定信の寛政改革始まる
1790		寛政 2	寛政異学の禁
1798		10	本居宣長、古事記伝完成
1841	仁孝120	天保 12	水野忠邦の天保の改革
1867	明治122	慶応 3	大政奉還、王政復古
1868		明治 1	東京遷都、5ヶ条の御誓文、神仏分離、神祇官制度を定める
1869		2	天皇神祇局に臨み、国是一定を天神地祇及び列祖の霊に御報告
1870		3	神祇官に天神地祇、八神、皇霊を鎮祭し、大教を宣布せられる
1871		4	神職の世襲制廃止、社格制度、神社規則の制定、神祇官を神祇省とする
1872		明治 5	神祇省を教部省とする。三条の教訓の頒布。 社寺設置は許可制とする。教部省を文部省と合併 神武天皇即位の年を紀元とし2月11日を祝日とする
1873		6	神官神職奉務規則を頒布
1877		10	内務省に神社局を設置。神宮及び官國幣社の職制を定める
1879		12	神社明細帳の1部を提出せしめる
1882		15	皇典講究所創立 神宮皇学館創立 神道各派独立
1887		20	官国幣社の職制を宮司・祢宜・主典とする
1889		22	帝国憲法発布
1890		23	国学院創立 教育勅語下附
1894		27	府県社に社司社掌、村社に社掌を設置
1898		31	全国神職会設立
1907		40	内務省、神社祭式行事作法を告示
1914	大正123	大正 3	明治神宮創建
1920		9	国学院大学に昇格
1923		12	神社調査会官制公布
1938	今上124	昭和 13	神社局に祭祀調査会設置
1939		14	招魂社を護国神社と改称
1940		15	神宮皇学館大学に昇格 神祇院官制公布
1945		20	終戦の詔勅、天皇終戦ご報告のため神宮御親拝 GHQ神道指令を日本政府に手交する
1946		21	神祇院廃止。神社の国家管理制度廃止。 神社本庁設置。各都道府県に神社庁設置。 婦人神職制度制定
1951		26	宗教法人法公布
1952		27	宗教法人神社本庁庁規を制定
1955		30	神宮皇学館の復活
1956		31	神社本庁敬神生活の綱領発布
1962	今上124	37	皇学館大学の設立復活
1966		昭和 41	特命宮司の制度施行
1980		55	神社本庁憲章の発布

神社関係用語索引 (アイウエオ順)

神職(神社本庁)……223
神職の身分……460
人生儀礼……129
出産
命名
初宮詣
初誕生
……129
七五三
成人式
結婚式
結婚記念日
……130
神道……140
神符守札……118
神名…… 85
神木…… 46
神門……118
【ス】
随身門……118
鈴……117
【セ】
節句……204
節分……437
【ソ】
総社…… 93
【タ】
玉串……131
【チ】
千木……170
地鎮祭……203
鎮守の森…… 46
【テ】
天神信仰……265
【ト】
年祝(としいわい) ……474
年祝いの意味……143
鳥居……118
【ナ】
直会…… 46
夏越祓…… 30
夏祭……168
【ニ】
人間は神と共にあり438
【ハ】
拝……186
八幡信仰……205
初午行事……266
初穂(はつほ) ……355
祓……250
春祭…… 93
【フ】
婦人神職……284
【ミ】
御稜威(みいつ) ……286
尊・命……355
霊代(神体)…… 76
恩頼(みたまのふゆ) ……475
【メ】
明治以後の社格と現在‥ 93
【ヤ】
厄ばらい……130
八百萬神……326
山宮(やまみや)……224
【ヨ】
寿詞(よごと) ……306
依代(よりしろ)……250
【リ】
立柱祭……405
【レ】
霊験……475
【ワ】
海神(わだつみのかみ)……308

神社関係用語索引 (アイウエオ順)

【ア】
相殿(あいどの)……170
贖物(あがもの)……356
秋祭……143
阿波岐原(憶原)……405
天津罪(あまつつみ) ……184
天社(あまつやしろ) ……223
雨神(あめのかみ) ……356
荒振神……405
【イ】
家建て……203
一宮…… 94
稲荷信仰……212
磐座(いわくら)……284
磐境(いわさか)……440
【ウ】
氏神…… 49
氏神の祭祀…… 28
氏子区域……118
氏子と崇敬者…… 94
【エ】
夷信仰……460
縁起……440
縁日(えんにち)……356
【オ】
拝……186
【カ】
拍手……184
堅魚木……170
家庭のまつり…… 28
門神(かどのかみ) ……482
門松……168
神棚……482
【キ】
祇園祭……286
【ク】
熊野信仰……266
【ケ】
警蹕(けいひつ)……358
県の神社数…… 76
【コ】
荒神……358
国史現在社……284
国内神名帳……482
穀霊信仰……358
古神道……355
木霊……358
言挙(ことあげ)……474
言霊(ことだま)……460
狛犬…… 46
権現信仰……284
【サ】
祭祀…… 77
祭神…… 45
里宮(さとみや)……224
参籠……473
【シ】
注連飾(しめかざり) ……168
注連縄(しめなわ)……224
笏…… 94
石神……508
社家……473
社名…… 76
正月……168
正月行事……168
神号・社格・神位・神階 85
神札……308
神社…… 45
神社建造物…… 49
神社参拝…… 30
神社神道…… 94
神社の起源…… 94
神社の境内…… 46
神社の建築美……248
神社の祭神…… 93

付　　録

付　録　目　次

神社関係用語索引……付 2 (527)
日本史神道関係略年表……付 4 (525)
都道府県の神社数……付 6 (523)
岡山県神社庁支部別神社数及び神職数……付 7 (522)
年号索引……付 8 (521)
時代順年号一覧……付10(519)
五十音順年号一覧……付12(517)
歴代天皇……付14(515)
院政・摂政・関白・将軍・執権……付16(513)
国県対照表……付19(510)

編集後記

本書は岡山県神社庁設立30周年記念として刊行することになりました。県下の全神社を網羅するため、膨大なものになりますので、各神社に資料の提出をお願いするにつきまして、字数を制限いたしました。このことは実に無理であり、不都合である点は重々存じていますが、頁数の関係がありますので、敢えてお願い致しました。

神職各位特に支部長の方には多大のご援助、ご協力をいただきまして、厚くお礼申し上げます。

編集にあたり元岡山県高等学校国語研究会会長の金平茂先生を顧問にお願いし、ご指導をいただきましたことを感謝するとともに、ご報告いたします。

編集子は浅学菲才のため、努力しましたが、大変延引致し、誠に申し訳なく何卒お許しをお願いします。

尚本書は神社名鑑としてご使用いただくだけでなく、より広くご利用していただくために、神道関係用語と神社参考事項とを附加致しました。

昭和56年４月29日

岡山県神社名鑑編集委員

大守　麟児

中島　達夫

磯山　裕守

岡山県神社誌【非売品】

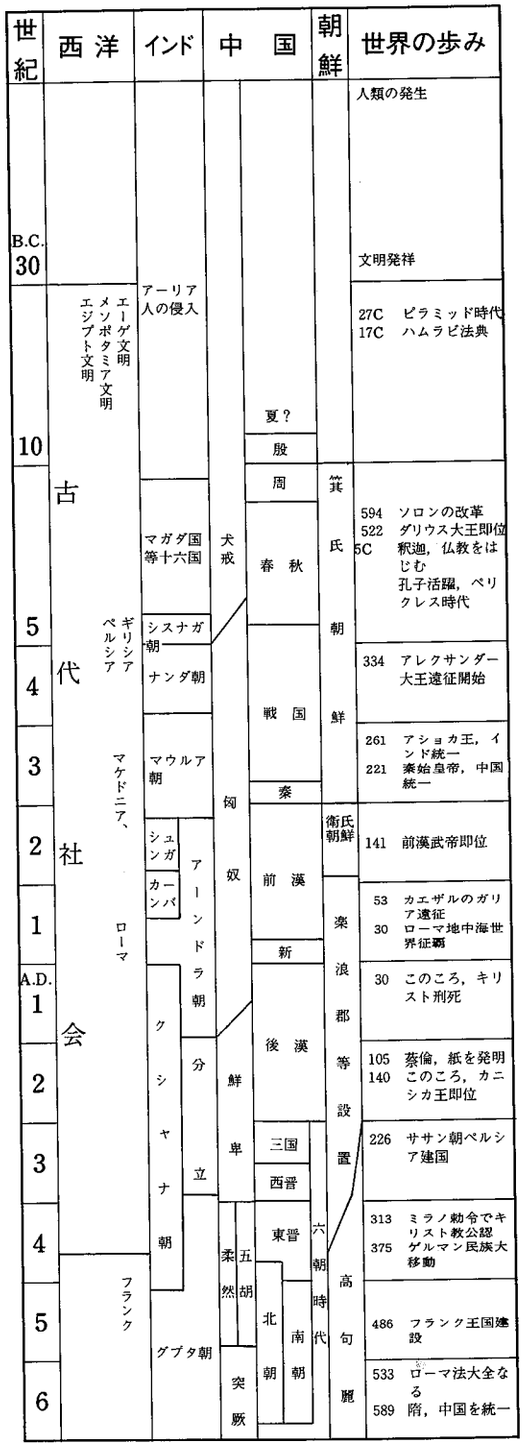
発行　昭和五十六年四月二十九日

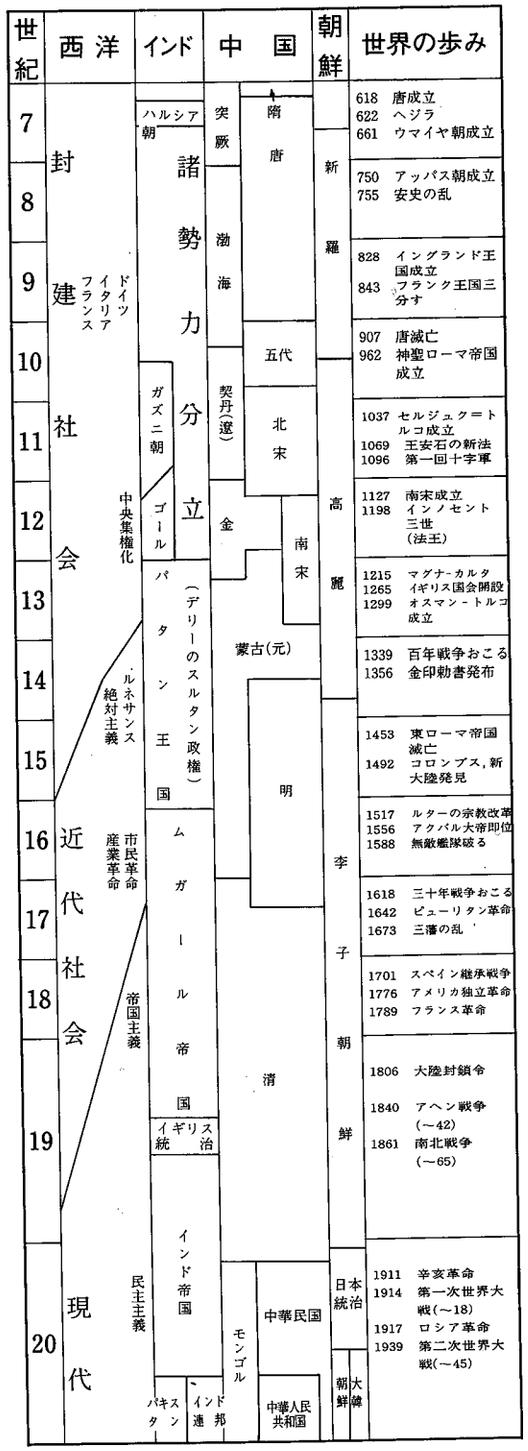
編集
発行　岡山県神社庁
庁長　河本　貞郁
岡山市南方一丁目六番十五号
電話　岡山(〇八六二)三一四八二六番

印刷　公用印刷株式会社
代表取締役　柴田左武郎
岡山市新屋敷町二丁目一〇一五
電話　岡山(〇八六二)四一一〇七〇番

新

世界史略年表





日本史略年表

